

世界を先導する総合的地域研究拠点の形成

フィールド・ステーションを活用した臨地教育・研究体制の推進

(拠点番号 E-10)

21 世紀 COE プログラム研究成果報告書

(平成 14 年度～平成 18 年度研究拠点形成費補助金)



平成 19 年 3 月

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科
京都大学東南アジア研究所

はしがき

本報告は、平成 14 年度から 18 年度にわたって実施された 21 世紀 COE プログラム「世界を先導する総合的地域研究拠点の形成」(副題：フィールド・ステーションを活用した臨地教育研究体制の推進)の最終報告書である。プログラムの目的と活動内容、成果についての概要が紹介され、巻末の「添付資料」には、教員・若手研究者・大学院生の研究業績や研究会活動の記録、そしてプログラムの中核である海外のフィールド・ステーションにおける活動記録等がまとめられている。

京都大学では平成 5 年から 8 年にかけて重点領域研究「総合的地域研究の手法確立」が実施されたが、この計画は「総合的地域研究の概念と方法論」に関する議論を刺激し、地域研究の「学」としての形成にとって大きな貢献があった。また、平成 10～14 年度には、特別推進研究(旧 COE)「アジア・アフリカにおける地域編成—原型・受容・転成」が実施され、主に地域研究関係の情報資料基盤の整備とネットワーク形成が行われた。今回の 21 世紀 COE プログラムは、これらの先行プログラムを通して蓄積された研究資源をより発展させるとともに、それを先導的な地域研究者育成のための教育資源として活用することを企図したものである。

周知のように 21 世紀 COE プログラムは、「我が国の大学に世界最高水準の研究教育拠点を学問分野毎に形成し、研究水準の向上と世界をリードする創造的な人材育成を図るため、重点的な支援を行い、もって、国際競争力のある個性輝く大学づくり推進すること」を目的としたものである。プログラムは公募によって広く募られ、審査のための「学問分野」として 10 の分野が決められた。初年度の 14 年度には、このうちの 5 分野、すなわち生命科学、化学・材料科学、情報・電気・電子、人文科学、そして学際・複合・新領域の各分野について公募・審査がおこなわれた。各分野はさらに細分野に分かれており、私たちのプログラムは、「学際・複合・新領域」分野の細分野である「地域研究」において他の 4 拠点とともに採択された。

私たちのプログラムでは計画調書にあるように、「フィールド・ステーションを活用した臨地教育・研究の展開」、「地域研究統合情報化センターの設立」、「統一研究テーマ『地球・地域・人間の共生』にそった研究活動の推進」、という 3 つの柱を設定し、これらの柱にそってプログラムを推進してきた。本報告もおおむねこれらの 3 つの柱にそってまとめられている。

私たちの拠点における教育・研究活動とその成果については、ニュースレター等の印刷媒体を用いず、もっぱらウェブサイトや月刊のメールマガジン「アジア・アフリカ地域研究情報マガジン」等の電子媒体を通して情報の発信に努めてきた。したがってこの報告書が、プログラムの全貌を伝える最初の印刷媒体による出版物である。一方、これまで 4 年半にわたって発信してきた情報は質・量ともに相当な蓄積に達しており、それらのすべてを一冊の報告書に盛り込むことはとうてい不可能である。またこれらの情報自体が、情報の統合化・ネットワーク化をすすめてきたプログラムの成果として位置づけられるものである。このような考えから、プログラムを終えるにあたってこれまでにウェブサイトに掲載された主要な情報資源を DVD にまとめることになった。本報告書とあわせてご覧いただければ幸いである。

平成 19 年 3 月

21 世紀 COE プログラム「世界を先導する総合的地域研究拠点の形成」拠点リーダー

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科教授

市川光雄

目 次

はしがき	1
目 次	2
I. プログラムの概要	3
拠点プログラムの名称	3
拠点形成推進機関	3
補助金交付額	3
拠点形成の目的	3
研究拠点形成実施計画	5
年度別研究拠点形成実施計画	7
教育実施計画	9
プログラム構成員	10
プログラム実施組織図	13
プログラムにおける役割分担	14
II. 中間評価の結果とそれに対する対処	15
III. プログラムの特徴と活動の概要	17
プログラムの特徴	17
総合的地域研究について	17
フィールドワークを通じた教育と研究の統合的推進	19
地域研究統合情報化センター構想について	19
IV. プログラムの成果の概要	24
フィールド・ステーション部門：フィールドワークを通じた臨地教育・研究の融合	24
統合情報化部門：地域研究資料の統合化と情報化	34
統一研究テーマ「地球・地域・人間の共生」にそった教育・研究の推進	52
V. 総括と展望	58
VI. 外部評価の結果	61
添付資料	63
1. フィールド・ステーションの活動状況	65
2. シンポジウム、ワークショップ、セミナーの開催記録	129
3. 学位取得者とその進路	157
4. 教員・若手研究者・大学院生の業績	162
5. 外部評価報告書	234

I. プログラムの概要

1. 拠点プログラムの名称

世界を先導する総合的地域研究拠点の形成

—フィールド・ステーションを活用した臨地教育・研究体制の推進—

Aiming for COE of Integrated Area Studies:

Establishing Field Stations in Asia and Africa to combine Research Activities and
On-Site-Education

キーワード：

- ・「統一研究テーマ『地球・地域・人間の共生』」
- ・「フィールド・ステーション」
- ・「地域研究統合情報（化）センター」
- ・「地域研究グローバルネットワーク」
- ・「臨地教育・臨地研究の融合」
- ・「文理融合的アプローチ」
- ・「基礎研究と応用研究の有機的統合」
- ・「グローバルな視点と地域間比較研究」

2. 拠点形成推進機関

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科（ASAFAS）

京都大学東南アジア研究所（CSEAS）

3. 補助金交付額（配分額）

	直接経費	間接経費	合 計
平成 14 年度	108,000		108,000
平成 15 年度	120,000		120,000
平成 16 年度	107,000		107,000
平成 17 年度	98,000	9,800	107,800
平成 18 年度	90,680	9,068	99,748
総 額	523,680	18,868	542,548

表 I-1

4. 拠点形成の目的

京都大学の伝統・理念と本拠点プログラムの位置づけ

京都大学の伝統のひとつは、学問における実証性の重視であり、とくに今西錦司の業績ならびにカラコルム・ヒンズークシュ調査などに代表されるように、現場主義に基づく、非ヨーロッパ世界を研究の場とする新たなパラダイムの探究である。また、京都大学は基本理念を「地球社会の調和ある共存」においている。統一研究テーマ「地球・地域・人間の共生」のもとで、フィールドワークに立脚

した総合的地域研究の推進を標榜する本拠点プログラムは、こうした京都大学の伝統・理念をよく体現・実践するものである。

地域研究の必要性和本拠点計画の目的

21世紀を迎えた現在、言語文化領域や民族、国民国家とともに、それらと関連しつつも位相を異にする〈地域〉についての深い理解が必要とされている。それは、生態、社会、歴史の交差する場である地域にかかわる〈知〉の蓄積が、真に持続可能な地球社会の発展の方向性を打ち出し、アジア・アフリカを含む諸地域の自立と世界の共存、さらには自然と人間の共生を可能にする新たな秩序のあり方を構想するうえで、きわめて重要な役割を果たすと考えられるからであり、ここに学際的、文理融合的な総合的地域研究の重要性・必要性がある。

本計画の拠点形成推進機関である京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科（ASAFAS）と京都大学東南アジア研究所（CSEAS）の2部局は、重点領域研究「総合的地域研究」（平成5～8年度）、および特別推進研究（旧COE）「アジア・アフリカにおける地域編成：原型・変容・転成」（平成10～14年度）によって、地域研究における拠点を形成してきた。本計画は、これらの基盤の上に新たな先端的地域研究を推進し、そこに大学院教育を有効的に組み込むための研究教育体制の整備を行って、研究・教育・社会的還元の有機的統合と高度化を進め、アジアにあって世界を先導する地域研究拠点を確立しようとする。そのために本計画では、「地球・地域・人間の共生」という統一研究テーマを設定し、これに関係する諸問題群について、教育と研究の融合を図りつつ、フィールドワークによる実証的な研究をとおして探求しようとするものである。この活動を支援するために、①フィールド・ステーションの設置、②「地域研究統合情報化センター」の充実化、という二つの研究教育体制の整備を行い、これらを有機的に結びつけることで、研究・教育・社会的還元を効率的に推進する。

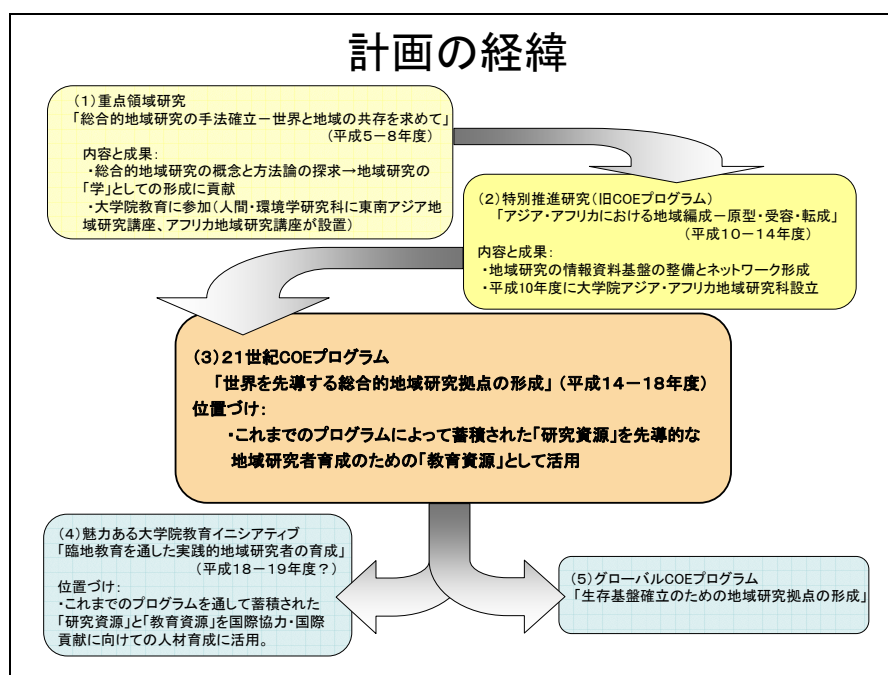


図 I-1

地域研究の現状

戦後の地域研究における中心的拠点であったアメリカ合衆国は、国家戦略の変化にともない、地域研究の廃止ないし縮小化を行っている。そのため、アジアにおける地域研究の拠点形成と研究・教育のネットワーク化は、これからのアジア、アフリカを考える上できわめて重要である。また国内外における多くの地域研究機関は、人文社会科学分野が中心であり、地域の全体性を把握するための文理融合的な地域研究の必要性はいまだ十分には充たされていない。この意味で、本計画の成果としては、多様な問題群に総合的な観点から柔軟に対応しうるアジア・アフリカ地域の専門家・実務家の養成や、地域研究の知見の社会的還元に加えて、地域研究における研究・教育の高度化・文理融合の促進が期待される。

期待される研究成果、社会的意義、波及効果

- ①専門分野が異なる複数の研究者・大学院生が、フィールド・ステーションにおいてともに研究することで、これまでの個人単位でおこなわれてきたことに比し、格段にフィールドワークの質の向上と、研究・教育の効率化・高度化・文理融合が促進できる。また、地域を総合的に理解し、多様な問題群にも柔軟に対応しうる能力をもった、現場体験の豊かなアジア・アフリカ地域の研究者・実務者を養成できる。
- ②現代世界を取り巻く諸問題の多くは、社会と自然（生態）が絡み合った領域横断的な現象である。このような問題群を、社会科学と自然科学に分けて対処しようとしてきたところに、現代社会における根底的な陥穽がある。本計画では「地球・地域・人間の共生」にかかわる問題群を文理融合的に研究教育することで、諸問題の本質を明らかにし、現実的な対応への道を構想することが可能となる。
- ③「地域研究統合情報化センター」の充実化によって、本計画終了後も地域研究教育の発展を図ることができる。さらに、世界との双方向的・非覇権的な情報発信・交換によって、地域研究における研究・教育の深化と、その成果の社会的還元が可能となる。

5. 研究拠点形成実施計画

本計画は、既述のように、フィールド・ステーションの設置、「地域研究統合情報化センター」の充実化という二つの研究教育体制を整備し、さらに統一テーマ「地球・地域・人間の共生」を設定することによって、総合的地域研究拠点の形成を推進しようとするものである。以下が、その実施計画である。

統一研究テーマ「地球・地域・人間の共生」の設定

統一テーマにかかわる問題群を、人間生態問題群、政治経済問題群、社会文化問題群と、これらに関連しつつ文理融合に向けた方法論を考える地域研究論問題群の4つに分け、研究活動を組織化する。さらにこれらの問題群の研究に大学院生を組み込む。ここでの問題群と具体的テーマの例は以下のとおりである。

- ・ 人間生態問題群：環境保全、在来生業・技術の再評価、公衆衛生など
- ・ 政治経済問題群：経済発展、農村開発、地方分権、民主化など
- ・ 社会文化問題群：移動と民族間関係、宗教紛争、高齢化、都市化など
- ・ 地域研究論問題群：地域研究方法論、文理融合論など

フィールド・ステーションの設置

- ・本計画の中核を成すものとして、東南アジア研究所のバンコク、ジャカルタ連絡事務所や、2 部局がこれまでに推進してきたさまざまなプロジェクトの調査拠点、MOU（国際学術交流協定）などを活用しつつ、フィールド・ステーションを設置し、当該地域におけるフィールドワークの円滑な実施環境を整備して、研究教育の拠点を確保する。
- ・地域言語による図書や政府刊行物などの資料の発掘と収集。
- ・相手国の研究教育機関との共同研究、共同調査、ワークショップの開催。なお、複数のフィールド・ステーションを横断する研究教育活動の可能性も検討する。

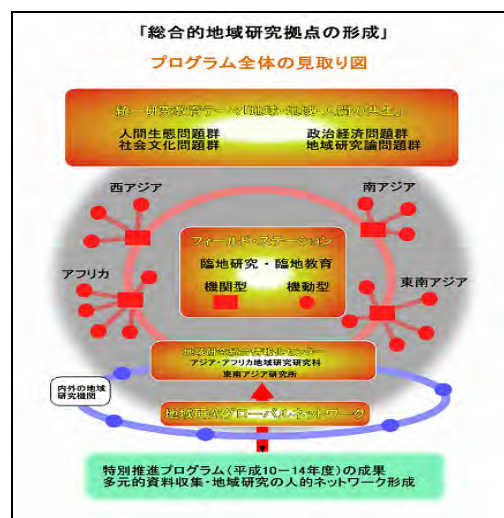


図 I - 2

- ・フィールド・ステーションに派遣する研究者は、事業推進分担者に加えて、公募による若手の研究者を事業推進協力者として採用し、長期の派遣（1～2 年間程度）を行う。
- ・フィールド・ステーションには、二つの形態を考えており、研究規模、設置場所、協力関係などから、次のように、機関型と機動型に分けて設置する。

機関型：当該地域の研究教育機関から設備等の供与を受けるが、適当な設備のない場合は借り上げ等で対処する。ここでは、セミナー、ワークショップを必要に応じて開催しうる設備を確保する。

機動型：調査地の近くに、現地家屋などの借り上げにより、フィールド・ステーションを設置し、共同調査を行う。調査の都合により、迅速な移動が可能ないように場所を設定する。

- ・設置場所は、機関型と機動型をあわせて、東南アジア 5～6 カ所、南アジア 1 カ所、西アジア 1 カ所、アフリカ 5 カ所程度を予定している。なお、既存の東南アジア研究所連絡事務所（バンコク、ジャカルタ）も、東南アジアのフィールド・ステーションの核として積極的に利用する。
- ・本計画の終了後は、新たな大型プロジェクトや競争的資金の導入等によって、臨地教育・臨地研究の一層の発展を図る。また、現地機関との共同研究の実績をとおして、当該カウンターパートとの持続的で双方向的な連繋を確保し、それにもとづいて一部のステーションの漸次的な地元への移管を考える。

「地域研究統合情報化センター」の充実化

- ・臨地教育・臨地研究を支援・補完するために、アジア・アフリカ地域に関する多元的な情報を統合的に蓄積、加工、発信するとともに、アジア・アフリカ地域研究にかかわる研究者・機関との情報ネットワークの国際的な結節点としての機能を充実する。
- ・フィールド・ステーションとの密接なコミュニケーションによって研究・教育・社会的還元を支援するための地域情報処理関係および情報ネットワーク開発関係の機能充実をはかる。
- ・「地域研究統合情報化センター」を核として、大学共同利用機関（国立民族学博物館、同博物館地域研究企画交流センター、その他の大学・研究機関）、海外の地域研究機関、フィールド・ステーションなどを電子的に結び、双方向的なネットワーク型の情報発信機構（「地域研究グローバルネットワーク」）を形成する。それをとおして、地域研究にかかわる国内外の多様で多元的な研究情報を統合・集約し、国内外の研究者・機関に提供する「ポータル機能」を担う。
- ・データベースの利用者自身が情報の更新にかかわる参加型データベース・システムを構築し、地域研究の研究者・機関間に新形態のコミュニケーション・ネットワークを確立する。この分野の先駆的試みは、ASAFAS のアフリカ民族植物学データベース「AFlora」（URL: <http://130.54.103.36/aflora.nsf>）である。
- ・これらの実績をもとに、本計画終了後も地域研究教育の一層の発展と、その成果の社会的還元を図る。



図 I - 4

6. 年度別研究拠点形成実施計画

平成 14 年度

- ・統一テーマ「地球・地域・人間の共生」にかかわる問題群ごとの研究開始
- ・フィールド・ステーション設置準備（東南アジア：ラオス、西アジア：エジプト、アフリカ：エチオピア、タンザニア、ザンビア、カメルーンなど）
- ・アジア・アフリカ地域の多元的資料の収集と整理：フィールド・ステーションを活用し、アジア・

アフリカ地域に関する図書、マイクロフィルム、地図、映像音響資料、標本などの多元的情報を体系的かつ網羅的に収集・蓄積・整理し、国内外の研究者・機関の利用に供する。

- ・情報機器を整備する。

平成 15 年度

- ・昨年度に開設した FS に加え、新たにミャンマー、インドネシア、ベトナム等に機関型もしくは機動型の FS を設置し、教員・若手研究者・大学院生、及び現地研究者等による臨地研究・教育を推進する。また、エチオピアの FS において「自然と人為の相互作用」に関する地域間比較の国際ワークショップを開催する。
- ・公募によって採用した若手研究員 1 名をミャンマーに 1 年間派遣して、「人の資源利用と社会システムの相互作用」についての研究を推進する。
- ・フィールドワークや現地セミナー等の活動を支援するため、ネットワーク機能をもつ「地域研究統合情報化センター」の設置に向けて資料整理や機器類の整備を行う。とくに、FS と京都大学その他の研究機関等を結ぶ情報ネットワークの整備や、アジア・アフリカ地域に関する多元的資料の収集・整理とそれらの資料情報のデジタル化、民族植物学等に関する参加型データベース・システムの構築を進める。
- ・FS における教育研究活動のドキュメンテーションと臨地教育を活用したカリキュラムの検討に着手する。

平成 16 年度

- ・統一テーマ「地球・地域・人間の共生」にかかわる問題群ごとの研究継続、年度末に報告会開催
- ・担当研究者、大学院生、現地研究者、外国人研究者の参加によるワークショップの開催
- ・大学院生・教員・公募若手研究者および現地研究者による臨地教育・研究の継続
- ・フィールド・ステーションにおける教育研究活動の評価とフィールド・ステーションの選別・重点化、必要に応じて新しいフィールド・ステーションの設置
- ・月刊のメールマガジン『アジア・アフリカ地域研究情報マガジン』の発刊による 21 世紀 COE プログラム活動記録と、科研費の成果等を含めたこれまでの教育研究成果のオンライン化および社会的還元
- ・フィールド・ステーションと「地域研究統合情報化センター」をつなぐリアルタイムの双方向型遠隔地教育研究システムの開発とそれを用いた新たなカリキュラムの試行
- ・多言語環境のもとで地域研究情報を蓄積・加工・発信することのできるシステムの開発に着手
- ・参加型地域研究情報データベース・システムの運用開始
- ・アジア・アフリカ地域に関する多元的資料の収集・整理

平成 17 年度

- ・統一テーマにかかわる問題群ごとの研究継続、年度末報告会（国内）
- ・大学院生と教員、公募若手研究者を派遣し臨地教育・研究の継続
- ・異なるフィールド・ステーションを結ぶ現地国際シンポジウムの開催など、地域間の比較研究・教育の推進

- ・『アジア・アフリカ地域研究』のオンライン・ジャーナル版の発刊による新たな表現可能性を追求
- ・多言語環境のもとで地域研究情報を蓄積・加工・発信することのできるシステム開発の継続
- ・アジア・アフリカ地域に関する多元的資料の収集と整理

平成 18 年度

- ・統一テーマと各問題群にかかわる国際研究集会の開催、および研究取りまとめ、公表準備
- ・大学院生と教員、公募若手研究者による臨地教育・研究の実施
- ・今後のフィールド・ステーションの運営に関する現地研究機関との協議、および移管体制の整備
- ・ポータル・サイト、掲示板型メーリングリスト、オンライン・マガジン、オンライン・ジャーナル、参加型地域研究情報データベース・システム、多言語情報システム等のモジュールから成る「地域研究グローバルネットワーク」を完成させ、地域研究のさらなる発展につなげる。
- ・「地域研究グローバルネットワーク」と「地域研究統合情報化センター」を活用した地域研究の可能性について討議をおこなう研究集会の開催
- ・アジア・アフリカ地域に関する多元的資料の収集と整理

7. 教育実施計画

アジア・アフリカ地域研究研究科は、21 世紀が招来する新たな社会的、学術的な要請にこたえるため、5 年一貫制博士課程のもとでの長期にわたるフィールドワークを教育・指導理念の根幹に据えている。そのため、博士予備論文（修士論文相当）提出後は、一次資料の収集・解読に加えて、主体的にフィールドワークに取り組むことを推奨している。「現場」での生活をとおして自らの問題を発見し、生態・社会・歴史が複合する地域の実体と固有性に関する研究を進めていくことになる。しかし、これまで、地域研究における大学院教育において、フィールドワークを直接指導し、支援するシステムはほとんど整備されてこなかった。そこで本計画では、以下の 5 つの柱をたてて大学院教育を本計画に組み込み、地域研究拠点にふさわしい先端的な教育実施体制を確立する。

統一テーマ「地球・地域・人間の共生」にかかわる問題群への大学院生の組み込み

大学院生による主体的な研究関心の選択にもとづき、先に挙げた 4 つの問題群にかかわる研究組織に大学院生を参加させ、国内およびフィールド・ステーションにおける活動に組み込む。これらの活動への参加をとおして、認識知としてだけでなく、実践知としての地域研究のあり方に触れ、啓発されることが可能となる。

フィールド・ステーションを活用した大学院生へのフィールドワーク支援

各地の機動型フィールド・ステーションにおいては、調査地やその周辺で、指導教員や相手国の研究者などから直接に指導を受けることで、高度で生きた地域研究法を体得することが可能になる。つまり、地域研究における臨地教育（オンサイト・エデュケーション）を実現させる。機関型フィールド・ステーションにおいては、臨地教育だけでなく、指導教員、相手国の研究者や大学院生とともに、セミナーやワークショップを開催したり、参加することが可能となる。

また、本計画では、公平な選考をとおして、大学院生のフィールドワークを財政的に支援し、大学院生のフィールドワークへの積極的参加を促す。なお、公募によって選拔され、事業協力推進者として派遣される若手研究者は、フィールド・ステーションでの臨地教育において、指導教員の重要なパ

ートナーとして位置づけられる。

「地域研究統合情報化センター」によるフィールドワークの支援と補完

各地のフィールド・ステーションにおいて、「地域研究統合情報化センター」にアクセスして、さまざまな情報を交信することで、随時、日本国内の指導教員との交信や、調査に必要な文献・資料類を検索・利用することが可能となる。また、「地域研究統合情報化センター」を核とした世界の地域研究・教育関連機関を電子的に結ぶ「地域研究グローバルネットワーク」を通じて、地域研究に関する情報の発信・受信が可能となり、学内外・国内外の研究者、大学院生との双方向的な情報交換が容易となる。

フィールドワーク教育の開発

上記のようなフィールドワークを中心とする大学院教育、すなわち問題群別の研究組織への院生の組み込み、文理融合的研究事例の蓄積、フィールド・ステーションの活用、「地域研究統合情報化センター」と「地域研究グローバルネットワーク」による大学院生支援などを実施することで、計画終了時までに、新しい形の「フィールドワーク教育」の開発を目指す。さらに、フィールド・ステーションを核とするフィールドワークのドキュメンテーションを行う。

フィールド・ステーションを窓口とする国際学術交流の促進

フィールド・ステーションにおける国際ワークショップの開催や、フィールド・ステーション設置地域/国の大学院生・研究者の日本への招聘をととして、短期・中期の国際学術交流を促進する。また、国際的な単位互換制度などの可能性も検討する。

8. プログラム構成員

事業推進担当者（含：異動・退職者）

- ・加藤 剛 アジア・アフリカ地域研究研究科（以下 AA 地域研究研究科）東南アジア地域研究専攻（現 龍谷大学）教授：2002～2004 年度拠点リーダー
- ・市川光雄 AA 地域研究研究科アフリカ地域研究専攻教授：2005～2006 年度拠点リーダー／2002～2004 年度事務局長／FS 部門アフリカ部会
- ・杉島敬志 AA 地域研究研究科東南アジア地域研究専攻教授：2005～2006 年度事務局長／2002～2004 年度統合情報化部門長／FS 部門アジア部会
- ・山田 勇 東南アジア研究所：2002～2005 年度
- ・平松幸三 AA 地域研究研究科東南アジア地域研究専攻教授：2005～2006 年度統合情報化部門長／FS 部門アジア部会
- ・田中耕司 東南アジア研究所（現地域研究統合情報センター）教授：FS 部門アジア部会
- ・柴山 守 東南アジア研究所教授：副事務局長／統合情報化部門ネットワーク部会
- ・島田周平 AA 地域研究研究科アフリカ地域研究専攻教授：事務局研究成果等推進部会／FS 部門アフリカ部会
- ・阿部茂行 東南アジア研究所教授（現 同志社大学）：2002～2003 年度統合情報化部門ネットワーク部会
- ・白石 隆 東南アジア研究所：2002～2004 年度（現 国際政策大学院大学）教授

- ・荒木 茂 AA 地域研究研究科アフリカ地域研究専攻教授：FS 部門アフリカ部会／統合情報化部門ネットワーク部会
- ・足立 明 AA 地域研究研究科東南アジア地域研究専攻教授：事務局研究成果等推進部会／FS 部門アジア部会／統合情報化部門図書部会
- ・小杉 泰 AA 地域研究研究科東南アジア地域研究専攻教授：副事務局長／事務局研究成果等推進部会長／FS 部門アジア部会／統合情報化部門ネットワーク部会
- ・太田 至 AA 地域研究研究科アフリカ地域研究専攻教授：FS 部門アフリカ部会長
- ・水野広祐 東南アジア研究所教授：FS 部門アジア部会
- ・西渕光昭 東南アジア研究所教授：事務局成果等推進部会
- ・安藤和雄 東南アジア研究所助教授：FS 部門長／FS 部門アジア部会
- ・林 行夫 東南アジア研究所（現 地域研究統合情報センター）教授：前統合情報化部門図書部会長
- ・池野 旬 AA 地域研究研究科アフリカ地域研究専攻助教授：事務局／FS 部門アフリカ部会
- ・重田眞義 AA 地域研究研究科アフリカ地域研究専攻助教授：FS 部門アフリカ部会／前統合情報化部門ネットワーク部会長
- ・河野泰之 東南アジア研究所教授：FS 部門アジア部会
- ・水野一晴 AA 地域研究研究科アフリカ地域研究専攻助教授：FS 部門アフリカ部会／統合情報化部門広報部会長
- ・藤田幸一 東南アジア研究所教授：FS 部門アジア部会
- ・東長 靖 AA 地域研究研究科東南アジア地域研究専攻助教授：FS 部門アジア部会
- ・竹田晋也 AA 地域研究研究科東南アジア地域研究専攻助教授：事務局／事務局研究成果等推進部会／FS 部門アジア部門／統合情報化部門ネットワーク部会
- ・伊谷樹一 AA 地域研究研究科アフリカ地域研究専攻助教授：FS 部門アフリカ部会
- ・田辺明生 AA 地域研究研究科東南アジア地域研究専攻（現 人文科学研究所）助教授：事務局成果等推進部会
- ・木谷公哉 東南アジア研究所助手：統合情報化部門ネットワーク部会

研究協力者（役職順）

- ・掛谷 誠 AA 地域研究研究科アフリカ地域研究専攻教授：FS 部門アフリカ部会
- ・小林繁男 AA 地域研究研究科東南アジア地域研究専攻教授：FS 部門アジア部会
- ・梶 茂樹 AA 地域研究研究科アフリカ地域研究専攻教授：FS 部門アフリカ部会
- ・松林公蔵 東南アジア研究所教授：事務局研究成果等推進部会
- ・速水洋子 東南アジア研究所教授：統合情報化部門広報部会
- ・玉田芳史 AA 地域研究研究科東南アジア地域研究専攻教授：統合情報化部門ネットワーク部会／統合情報化部門図書部会
- ・五十嵐忠孝 東南アジア研究所助教授：FS 部門アジア部会／統合情報化部門ネットワーク部会
- ・岩田明久 AA 地域研究研究科東南アジア地域研究専攻助教授：FS 部門アジア部会長
- ・ABINALES, Patricio Nunez 東南アジア研究所 助教授：FS 部門アジア部会
- ・小泉順子 東南アジア研究所助教授：統合情報化部門図書部会
- ・木村大治 AA 地域研究研究科アフリカ地域研究専攻助教授：FS 部門アフリカ部会／統合情報化

部門ネットワーク部会長

- ・石川 登 東南アジア研究所 助教授：FS 部門アジア部会
- ・伊藤正子 AA 地域研究研究科東南アジア地域研究専攻助教授：事務局／統合情報化部門広報部会
- ・山越 言 AA 地域研究研究科アフリカ地域研究専攻助教授：FS 部門アフリカ部会／統合情報化部門図書部会長
- ・藤倉達郎 AA 地域研究研究科東南アジア地域研究専攻助教授：FS 部門アジア部会
- ・HAU, Caroline Sy 東南アジア研究所助教授：事務局研究成果等推進部会
- ・柳澤雅之 東南アジア研究所助手（現 地域研究統合情報センター助教授）：事務局研究成果等推進部会
- ・岡本正明 東南アジア研究所助教授：FS 部門アジア部会
- ・米澤眞理子 東南アジア研究所助手：事務局研究成果等推進部会
- ・梅川通久 AA 地域研究研究科（現 地域研究統合情報センター）助手：統合情報化部門ネットワーク部会／統合情報化部門広報部会
- ・鈴木玲治 AA 地域研究研究科東南アジア地域研究専攻助手：事務局／FS 部門アジア部会／統合情報化部門広報部会
- ・高田 明 AA 地域研究研究科アフリカ地域研究専攻助手：事務局／FS 部門アフリカ部会／統合情報化部門広報部会
- ・王 柳蘭 AA 地域研究研究科東南アジア地域研究専攻助手：事務局／統合情報化部門広報部会
- ・北村由美 東南アジア研究所助手：統合情報化部門図書部会
- ・丸山淳子 AA 地域研究研究科アフリカ地域研究専攻助手：事務局
- ・増原善之 AA 地域研究研究科 COE 研究員：FS 部門アジア部会

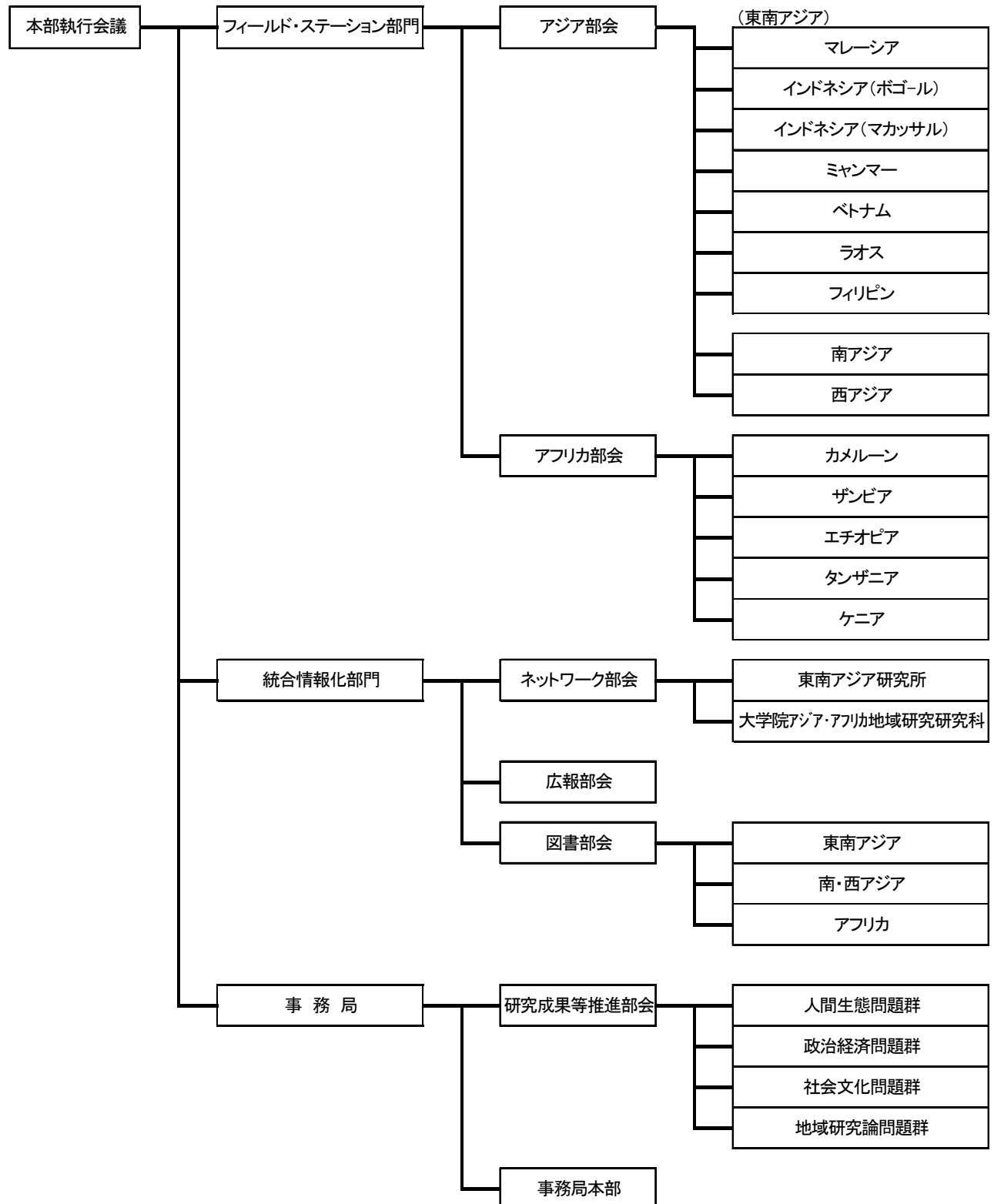
COE 研究員

- ・荒木美奈子 AA 地域研究研究科 COE 研究員：FS 部門アフリカ部会
- ・金子守恵 AA 地域研究研究科 COE 研究員：FS 部門アフリカ部会
- ・増原善之 AA 地域研究研究科 COE 研究員：FS 部門アジア部会
- ・西 真如 AA 地域研究研究科 COE 研究員：FS 部門アフリカ部会
- ・大西信弘 AA 地域研究研究科 COE 研究員：FS 部門アジア部会
- ・孫 暁剛 AA 地域研究研究科 COE 研究員：FS 部門アフリカ部会
- ・生方史数 AA 地域研究研究科 COE 研究員：FS 部門アジア部会

9. プログラム実施組織図

21COE組織図

(平成16年4月1日現在)



21世紀COE 平成18年度役割分担(2006年7月現在)

※杉島、小杉は、拡大執行会議において、それぞれ東南アジア島嶼部と西アジアのフィールド・ステーション担当も兼任する。

太字は責任者

14

II. 中間評価の結果とそれに対する対処

平成 14 年度に採択された 21 世紀 COE プログラムについて、平成 16 年度に中間評価が実施され、本拠点は以下のような評価を受けた。

総括評価としては、「当初目的を達成するには、下記のコメントに留意し、一層の努力が必要と判断される」というもので、付記されたコメントには次のようにあった。「実績のあるフィールド・ステーション構築をさらに進めており、今後の発展も期待できる。しかし、各地のフィールド・ステーション構築により、いかなる研究を飛躍的に進めようとするのか、言い替えれば、野外調査研究そのものの原理を高めようとするのかは明示的でない。また、『文理融合』の具体的な姿、アジアとアフリカという異なる地域間の接点をどこに見出すのか、などといった問題点も、現在までのところ明白ではない。フィールド・ステーション構築のためにも、これらに対する事前あるいはその過程における方法論の確立が必須であり、このような点について、関係者の一層の努力が必要である。」

コメントにあげられている主要な問題は、(1) フィールド・ステーション構築によりいかなる研究を進めるのか、(2) 文理融合の具体的な姿、(3) アジアとアフリカという異なる地域間の接点、の 3 点である。以下、これらについての本拠点の考え方を説明する。

1. フィールド・ステーション構築によりいかなる研究を進めるのか

これまでの地域研究は、植民地期の旧宗主国や第二次大戦後のアメリカで行われた研究のように、「支配」の確立や政治的意図のもとに行われた研究が多かったが、本拠点で目指すのは、地域に密着し、地域の人々との共生に向けた研究である。具体的には、フィールドワークと現地語による調査を重視した研究を推進することであり、フィールド・ステーションの構築はこうした研究・教育活動を支援・強化するものと位置づけられている。なかでもフィールドワークを重視するのは、二次資料の蓄積が乏しいわが国の若手研究者が短期間で卓越した業績を上げるためには、まずは自らフィールドで収集した一次資料にもとづく研究が効果的との判断によるものである。臨地教育・臨地研究を通して、地域に密着した課題を掘り起こすとともに、そのような課題に関する大学院生・若手研究者の研究能力を向上させるための支援拠点としてフィールド・ステーションの充実化が必要であり、今後もそれに向けて一層の努力をしていきたい。

2. 文理融合の具体的な姿

本拠点で重要な研究テーマに関連するもののうち、「在来性を重視した農業開発」や「乾燥地における生業適応」、「野生動植物資源の保全的利用」などは、いずれも地域の生態環境とそれを利用する技術、地域住民の文化・社会に関する深い理解を必要とするもので、文理融合的なアプローチや理解の方法が前提となっている。これらの研究の詳細については本拠点のホームページに掲載された派遣報告や研究会・ワークショップ等の報告に記載されているとおりであるが、今後さらに、環境問題や開発等の文理融合的アプローチを必要とするテーマに重点を置いて研究を進める予定である。また平成 17 年度には事業推進担当者として、空間情報学と地域研究との境界面に関わる「地域情報学」や地域社会と音響環境の関係を扱う「音響環境学」などの文理融合的なアプローチによる優れた業績をもつ研究者を事業推進担当者に加えることによって、文理融合的な研究の一層の展開を図ることになっている。

さらに地域研究の方法論に関しても、最近では、地域の歴史や景観、社会の動態等に対して RS（リ

モートセンシング)による景観解析やGIS(地理情報システム)などの新しいアプローチが試みられている。これらは、従来は人文・社会科学の分野とされた領域に自然科学的方法を援用したものであるが、このような複合的なアプローチについても今後積極的に取り入れていきたいと考えている。

3. アジアとアフリカという異なる地域間の接点

現在、世界では急速に政治・経済・情報等のグローバル化が進んでおり、そうした状況のなかで、地域に関する問題の把握とその解明・対処法に関しても急速にグローバルなネットワーク化が進んでいる。このような状況においては、世界的視野に立った地域研究が必要であり、本拠点ではこのような観点から地域間比較を実施し、地域の固有性と汎地域的な共通性の両面に着目した研究を進めたいと考えている。具体的には、熱帯雨林の保護と保全的利用や農業開発における在来性の再評価など、世界共通の課題でありながら地域によって異なった取り組みが必要な問題や、RSやGIS手法の地域研究への応用といった新しい方法論の可能性など、いくつかの共通テーマを取り上げて地域間の比較をおこなっていく計画である。この種の試みはこれまでも、本拠点が企画した国際ワークショップや、国内での地域間比較を目的とした研究会などでおこなってきたが、今後は、より積極的にアジアとアフリカの地域間比較を主題とした調査や研究を推進するとともに、フィールド・ステーション間の相互訪問等により、地域性に関する理解を深めていく計画である。

4. 総合的地域研究のさらなる推進

本拠点が推進する「総合的地域研究」に関しては、京都大学における地域研究の経緯を反映して、さまざまな捉え方がされているが、本拠点ではそれを、(1) フィールドワークを通じた教育と研究との一体的推進、(2) 理系的アプローチと文系的アプローチの融合、(3) 基礎的研究と応用的研究の結合、(4) 地域間比較を通じた世界的視野に立つ地域理解、という4つの要素から構成されるものと考えている。このような考えのもとで、今後もフィールド・ステーションのさらなる充実化を図るとともに、文理融合的なアプローチによる地域理解を目指して臨地研究や研究会を実施していきたい。また、平成17年11月23~24日にバンコクで開催される国際シンポジウムとその後のスタディ・ツアーを利用して、地域間比較による地域の特性の理解といった問題にも取り組んでいく。さらに、今後は、単に研究だけでなく、現地でのフィールドワークを通して直面した、地域が抱える切実な問題の解明にもかかわるような実践的な地域研究を基礎研究と並行して進めていきたいと考えている。

Ⅲ. プログラムの特徴と活動の概要

1. プログラムの特徴

本プログラムの実施にあたっては、計画調書に記載されているように、「地域研究統合情報化センターの設立」、「統一研究テーマ『地球・地域・人間の共生』にそった研究活動の推進」、「フィールド・ステーションを活用した臨地教育・研究の展開」という3つの柱を設定した。以下、これらの3つの柱について簡単に説明したい。

まず「地域研究統合情報化センターの設立」であるが、これは、大学院アジア・アフリカ地域研究研究科が東南アジア研究所、アフリカ地域研究資料センターと協力して設立を企画した同センターの活動を、本プログラムの予算によってハード面（機器や資料の購入）、ソフト面（地域研究における情報化の推進と専門家の養成）の両面において支援するとともに、同センターに期待されている活動を先取りして実施するものであった。すなわち、本プログラムにおいてはとくに、アジア・アフリカ地域に関する多元的な情報を統合的に蓄積、加工、発信するとともに、アジア・アフリカの各地で実施される臨地教育・臨地研究を支援・補完し、アジア・アフリカ地域研究にかかわる研究者・機関との情報・ネットワークの国際的な結節点として機能する、という役割が与えられた。このような機能をもつ地域研究の情報・ネットワークのセンターは、東南アジア研究所が主管組織となり、アジア・アフリカ地域研究研究科とともに取り組んだ特別推進研究「アジア・アフリカにおける地域編成一原型・変容・転成」（平成10～14年度）の成果としても期待されていたものであった。「地域研究統合情報化センター」の設立構想の詳細については下記（Ⅲ-4）を参照されたい。

つぎに、研究・教育活動を進めるにあたって、本プログラムでは以下の3点を考慮して、重点的に取り上げる統一研究テーマを設定した。第一は、「総合的地域研究」の推進であり、これについては下に詳述する。第二は、アジア・アフリカ地域研究研究科ならびに東南アジア研究所によるこれまでの研究の特色、すなわち、生態や環境に関する研究に重点をおくこと、そして第三が京都大学の基本理念「地球社会の調和ある共存」との関連性である。これらの配慮から、統一テーマ「地球・地域・人間の共生」が設定され、そして、このテーマに関連して、「人間生態問題群」、「政治経済問題群」、「社会文化問題群」、さらに「文理融合」や「地域間比較」に向けた方法論を考える「地域研究論問題群」という4つの問題群が絞り込まれた。「統一テーマ」で実施される研究の具体的な内容はつぎのことであった。すなわちそれは、「地球」規模の連関のなかで、「地域」に独自な形で現われている諸現象に関して、さまざまな方法を駆使して、そこで生きる「人間」像にまで迫ることができるような全体論的な研究を目指すということである。統一テーマのもとで区分された個々の問題群は、研究の強調点が置かれる側面を示したものであり、それぞれがこのような全体論的アプローチを心がけるものであることはいうまでもない。

2. 総合的地域研究について

私たちの拠点では「総合的地域研究」を看板にしているが、これは京都大学に特有な地域研究の形である。アジア・アフリカ地域研究研究科や東南アジア研究所はそれぞれ、自然科学、人文・社会科学など、多様な専門分野のバックグラウンドをもつ教員を擁しているが、そこにおける研究テーマもこのような事情を反映して、学際的あるいは領域横断的（trans-disciplinary）な性格をもつものが多い。

表 I - 1

「総合的地域研究」についての拠点の考え方	
●文理融合、領域横断的アプローチ	・対象としての「地域」＝自然(生態)と文化、社会、そして歴史が交錯する場 ・具体的なテーマ:「在来性を重視した農業開発」や「乾燥地における生業適応」、「野生動植物資源の保全的利用」 ・方法論的な援用: RS(リモートセンシング)やGIS(地理情報システム)などの新しい自然科学的方法論の積極的活用
●世界的視野に立つ地域研究(地域間比較研究)	・政治・経済・情報等のグローバル化＝世界における地域の位置づけ ・世界共通の課題でありながら地域ごとの特性把握を要する問題＝地域間比較研究 (例: 自然保護とその持続的利用、開発と文化・民主化との関係、人口移動や難民問題など) ・共通の方法論(RSやGIS)にもとづく地域研究の展開と地域間の比較
●基礎研究と応用研究の結合	・地域の特性の理解(基礎研究)に基づく現実的課題の解明と対処法の探求(応用研究)
●フィールドワークを通じた教育と研究の統合	・第一線の研究活動を共につづけながら、教育と研究を一体的に推進。 ・現地研究者・学生との共同研究の推進

これは、「地域」が自然(生態)と文化、社会、そして歴史の交錯する場であることを考えればむしろ当然といえる。実際、私たちのプログラムで取り上げてきたテーマのなかには、「在来性を重視した農業開発」や「乾燥地における生業適応」、「野生動植物資源の保全的利用」などのように、地域の生態環境とそれを利用する技術、地域住民の文化・社会に関する深い理解を必要とし、文理融合的なアプローチや理解の方法が前提となっているものが多い。また最近では、地域の歴史や景観、社会の動態等に対して RS (リモートセンシング) による景観解析や GIS (地理情報システム) などの新しい方法論が試みられているが、これらは、従来は人文・社会科学の分野とされた領域に自然科学的方法を援用したものである。私たちはテーマの上でもまた方法論の面からも、このような文理融合的あるいは複合的なアプローチを総合的地域研究の一環として積極的に取りいれてきた。

現在、世界では急速に政治・経済・情報等のグローバル化が進んでおり、そうした状況のなかで、地域に関する問題の把握とその解明・対処法に関しても急速にグローバルなネットワーク化が進んでいる。総合的地域研究の第二の要素は、世界的視野に立った地域の理解、あるいは地域間の比較を視野に入れた地域研究である。単にアジアやアフリカの特定地域のことを研究するのではなく、特定地域のことをよりよく理解するためには、他地域にも目を向けるとともに、世界の中でのそれらの地域の位置づけを考える必要がある。具体的には、これまでのシンポジウムやワークショップ、セミナーでとりあげられてきたような問題、すなわち自然の保護とその持続的利用や、開発と文化、民主化との関係、そして世界的な広がりを見せる人口移動や難民問題など、世界共通の課題でありながら地域によって異なった様相を呈する問題や、RS や GIS 手法の地域研究への応用といった新しい方法論の可能性など、いくつかの共通テーマを取り上げて地域間の比較をおこなってきた。

私たちはこのようにして地域を全体的視点から理解すること、すなわち地域研究における基礎研究を推進する一方で、地域が抱える現実的な問題である、環境保全や貧困、地域開発にかかわるような、応用的な問題にも取り組んできた。基礎研究とそうした応用研究の結合ということが総合的地域研究

の三番目の意味である。

私たちが考える「総合的地域研究」の第四の要素は「フィールドワークを通した教育と研究の統合」である。これは私たちのプログラムで設定した三本柱のなかで、もっとも重要なものであるので、少し詳しく説明したい。

3. フィールドワークを通した教育と研究の統合的推進

京都大学では、東南アジアやアフリカにおけるフィールドワークに立脚した地域研究に関する長い歴史と豊富な経験があるが、この分野における教育の歴史はあまり長くはない。これまでも、東南アジア研究所の生態系の教員が京都大学大学院農学研究科熱帯農学専攻で教育に従事し、また現在のアフリカ地域研究専攻の教員が理学研究科の人類学系の講座において大学院生の指導にあたってきたが、より広い分野で本格的に大学院教育に取り組み始めたのは、十数年ほど前からのことである。

平成5年度に、京都大学大学院人間・環境学研究科の文化・地域環境学専攻内に東南アジア地域研究講座とアフリカ地域研究講座が設置された。その後、この2つの講座が母体となって、平成10年度に現在のアジア・アフリカ地域研究研究科が立ち上げられた。この間、教員たちが直面した深刻な問題は、フィールドワークを根幹の方法とする地域研究の教育において、費用のかかる学生たちのフィールドワークをどのように促進するのか、そして、海外で実施されるフィールドワークを通しての教育と、それを第一線の研究活動と結合させるにはどうすればよいか、ということであった。

私たちのプログラムの副題にある「フィールド・ステーションを活用した臨地教育・研究体制の推進」は、この問題に正面から取り組もうとの姿勢を表したものである。すなわち、プログラムによって学生のフィールドワークを支援し、MOU（国際学术交流協定）に立脚して設立されたフィールド・ステーション等において教員と学生が「同じ釜の飯」を食い、臨地研究に従事することによって、「現場」での第一線の研究活動を共につづけながら教育と研究を一体的に推進させようという意図をもってすすめられた。

また、私たちのプログラムがフィールドワークを重視したのは単にフィールドワークの伝統の継承を越える理由があった。これまでの地域研究は、植民地期の旧宗主国や第二次大戦後のアメリカで行われた研究のように、「支配」の確立や政治的意図のもとに行われた研究が多かった。しかし私たちの拠点が目指したのは、地域に密着し、地域の人々との共生に向けた研究であった。具体的には、フィールドワークと現地語による調査を重視した研究を推進することであり、フィールド・ステーションの構築はこうした研究・教育活動を支援・強化するものであった。なかでもフィールドワークは、二次資料の蓄積が乏しいわが国の若手研究者が短期間で卓越した業績を上げるためには、独自の着想により、自らフィールドで収集した一次資料にもとづく研究が効果的との判断によるものであった。こうした一次資料にもとづく地域研究を通して、これまでは我が国ではもっぱら碩学すなわち長年の研鑽を積んだ研究者、あるいは海外への留学経験者が果たしてきた国際的発信の役割を、日本発の成果として若手研究者が積極的に担うことができると考えたのである。そして、本プログラムで企画した多くのシンポジウムやワークショップは、大学院生や若手研究者による国際的な成果発信の場と位置づけられてきた。

4. 地域研究統合情報化センター構想について

本プログラムでは、上に述べたように、東南アジア研究所、アフリカ地域研究資料センターと協同し、アジア・アフリカ地域に関する情報・ネットワークの拠点となるべき「地域研究統合情報化センタ

一」を立ち上げることを目的のひとつにしていた。その設置を計画するにいたった経緯は以下のよう
にまとめることができる。

経緯

東南アジア研究センター設立と総合的地域研究の推進：平成 16 年 4 月 1 日に名称変更した東南ア
ジア研究所の前身である東南アジア研究センターは、昭和 38 年の設立以来、東南アジアを中心にフ
ィールドワークをおこなうとともに、膨大な図書、マイクロ資料、地図、衛星画像等を収集してきた。
また、平成 5 年から平成 8 年まで実施された科学研究費補助金重点領域研究「総合的地域研究の手法
確立—世界と地域の共存のパラダイムを求めて」では、地域研究への将来の展望が示され、それが現
在の 21 世紀 COE プロジェクトにつながった。平成 10 年には、地域研究の専門教育機関としてアジ
ア・アフリカ地域研究研究科が設置され、教育現場においても総合的地域研究の推進する体制が整っ
た。

アフリカ地域研究資料センターの設置：アフリカ地域研究資料センターは、昭和 61 年に設立され
たアフリカ地域研究センターが 10 年の時限を迎え、その定員が大学院人間・環境学研究科アフリカ
地域研究専攻に転換されたことにともない、アフリカ地域研究センターが果たしてきた機能を存続さ
せることを目的として、平成 8 年 4 月に京都大学の学内措置として設置された。

京都大学の将来構想との関連：平成 6 年 2 月の「21 世紀における京都大学のあり方について—中間
報告—」では地域研究の分野における教育研究のサポート組織であるとともに、国際共同研究の基盤
ともなるべき地域研究資料センターの設置が提唱された。また、平成 9 年 12 月の「京都大学の将来
構想の現状と課題—『21 世紀における京都大学のあり方について—中間報告—』のレビュー」では統
合的な資料センター機能をいかに構想していくかが、今後に残された課題として取り上げられた。

中核的研究拠点 (COE) プログラムによる資料収集：東南アジア研究センターと大学院アジア・ア
フリカ地域研究研究科は、平成 10 年度から 5 カ年にわたり、科学研究費補助金中核的研究拠点 (COE)
形成基礎研究費をえて「アジア・アフリカにおける地域編成—原型・変容・転成」と題するプログラ
ムを実施し、東南アジアおよびアフリカに関する地域研究資料・情報の一層の充実化を図るとともに、
南・西アジア関連の文献図書資料の大規模な収集および地域研究関係の各種データベースの構築をお
こなった。また、この COE プログラムでは地域研究に関わる情報センターの設立に向けて、共同研
究および国際シンポジウムを遂行することによって世界の地域研究機関との教育研究ネットワークの
形成と拡充に努めた。このプログラムに対する中間評価では、こうした研究資料、データベースを統
合的に管理するとともに、地域研究のネットワーク形成が必要であるとの指摘がなされた。その結果、
最終評価では、評価結果は最高評価である「A (期待どおりに研究が進展した)」を受けた。また、地
域研究関連資料の集積・整理と公開の姿勢が評価され、今後も同様の努力を求められるとともに、「研
究者交流・育成、関連する研究成果の公開を今後も積極的に展開させ、誰もが訪れたいと思う地域研
究の世界的中核的研究拠点を構築していただきたい」という期待が寄せられた。

21COE プログラム：平成 14 年度から始まった 21COE プログラムでは、海外のフィールド・ステ
ーションを活用した臨地教育研究を実施した。このプログラムでは、大学とフィールド・ステーショ
ンおよび学内外、国内外の研究機関とのネットワーク形成にくわえ、情報拠点の形成が課題となり、
これらの 2 つの機能を統合した「地域研究統合情報化センター」の設立がプログラムの柱のひとつと
された。また、21COE プログラムにおいても、東南アジア、アフリカ、南・西アジアに関する地域
研究資料・情報の充実化と地域研究関係の各種データベースの構築を継続しておこなってきた。

学内における研究者の分散状況：京都大学にはアジア・アフリカ地域研究研究科や東南アジア研究所の外にも、アジア、アフリカ、その他の地域に深くかかわる研究者を擁する数多くの部局がある。具体的には文学研究科、理学研究科、法学研究科、農学研究科、人間・環境学研究科、人文科学研究科、霊長類研究所等である。また、臨地調査、臨地教育を設立の基本理念とするフィールド科学教育研究センターのような部局も存在する。だが、これまで上記のような部局や教員が個々に展開する研究やプロジェクトを接続する組織上の工夫はほとんどおこなわれてこなかった。

設置準備室の開設

以上のような経緯から、多様な地域言語で書かれた図書資料のほか、統計資料、地図、衛星画像、映像音響資料、土壌・動植物標本、インターネット情報などの研究資料・情報の収集と整理、各種データベースの構築と発信、学内外、国内外の研究機関とのネットワーク形成等の機能を担う施設が必要と認識されるに至った。また、アフリカ地域研究資料センターが担ってきた機能の存続に対する日本アフリカ学会からの強い要望等もあり、それらを受けて、新たにそれを「地域研究統合情報化センター」として再編成する構想が現実化した。そして、2003年12月3日には、アジア・アフリカ地域研究研究科および東南アジア研究センターの関係教員から成る「地域研究統合情報化センター設置準備室」が開設された。

新センター構想

この設置準備室では、平成16年4月に「地域研究統合情報化センター」を学内措置で設置すべく、業務内容の明確化、組織構成（部門構成、人員配置）、規程（案）の作成等の作業が進められた。

「地域研究統合情報化センター設置準備室」が構想した新センターの機能は以下の通りである。

- ・地域研究は、上記のような多種多様な資料・情報にもとづいておこなわれるが、「地域研究統合情報化センター」は、こうした多元的な資料・情報を統合的に蓄積、加工、発信する。
- ・「京都大学地域研究ネットワーク」を形成する。このネットワークは、「地域研究統合情報化センター」を中心に展開されるプロジェクトおよび運営への参画をとおして、学内の地域研究関連の研究者や部局を連携づけ、京都大学が保有する人的資源や研究資産の効率的な活用を図る。
- ・平成16年1月9日に国立民族学博物館地域研究企画交流センター、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所などの機関と連携して立ち上げた全国レベルの協議体「地域研究コンソーシアム」への積極的貢献を行うとともに、国際的にも地域研究の分野における京都大学のプレゼンスを飛躍的に高める。
- ・地域研究の分野における世界的な情報センターの形成と、このセンターを結節点とする研究情報、研究交流の国際的ネットワークである「地域研究グローバルネットワーク」の構築を目指す。
- ・地域研究に関わる資料・情報への効率的なアクセスを可能にする「エリア・インフォ交流室」を設けて、研究者、学生だけでなく、一般利用者にも解放し、「地域研究統合情報化センター」が所蔵する地域研究資料・情報を広く公開し、研究成果の社会還元をおこなう。

「地域研究統合情報化センター設置準備室」では、新センターの部門の構成と機能に関する議論もおこなわれ、以下の構想が成案とされた。「地域研究統合情報化センター」は、地域研究に携わる研究者、研究機関間の研究交流ネットワークの開発と拡充をおこなう「統合企画交流研究部門」、地域研究情報の先端的な情報処理に関する研究開発をおこなう「高次情報処理研究部門」、地域研究資料・情報の収集、蓄積、公開に関わる「情報資源研究部門」、国内外の専門家との共同研究、共同作業をおこな

うための「地域研究国内客員部門」および「地域研究国外客員部門」の5部門から構成され、各部門が担う機能の細目は以下の通り定められた。

「統合企画交流研究部門」

- ・地域社会で生起する現代的な諸問題と国内外の研究動向の双方を視野にいれ、中長期的な地域研究の課題とプロジェクトを企画、立案する。
- ・研究プロジェクトの遂行を牽引し、地域研究に携わる学内外、国内外の研究者・研究機関間の交流を促す。
- ・研究活動に関わる情報の収集、蓄積、双方向的発信、および広報活動をととして、地域研究全体の振興に寄与する。
- ・「地域研究コンソーシアム」の京都大学における拠点として機能するとともに、京都大学の各部署に散在している地域研究関連の研究者間の連携をはかる「京都大学地域研究ネットワーク」の拠点としての役割を担う。

「高次情報処理研究部門」

- ・東南アジア研究研究所とアジア・アフリカ地域研究研究科の情報処理機能の効率化、充実化のための研究開発をおこなう。
- ・地図画像、人工衛星画像、映像音響資料等のデジタル資料・情報の統合的な蓄積や管理と、それらへの効率的で簡便なアクセスを可能にするメタ・データベース・システムの開発を継続する。
- ・すでに稼働している AFlora のような、データベースの利用者がデータベースの構築をおこなう参加型データベース・システムを拡充、発展させ、より汎用性の高い、参加型地域研究情報データベース・システムの研究開発をおこなう。
- ・フルテキストをふくむ現地語資料を蓄積、検索、分析し、地域社会の知識概念体系の全体像を明らかにする多言語情報解析システムを研究開発する。
- ・フィールド・ステーションと「地域研究統合情報化センター」を結び、学生が随時、指導教員から適切な指導やアドバイスが受けられるリアルタイムの双方向的遠隔教育研究システムを開発する。
- ・前述の「エリア・インフォ交流室」を活用し、空間情報システムと GIS 等に関わる高次情報処理教育を国内外の研究者、学生等を対象におこなう。

「情報資源研究部門」

- ・地域研究資料・情報を網羅的、体系的に収集、整理するとともに、その著作権・知的所有権に配慮しながら、広く社会に公開し、研究成果の社会還元をはかる。
- ・分類システムの異なる、東南アジア研究所、アフリカ地域研究資料センター、アジア・アフリカ地域研究研究科の3者が保有する書籍、逐次刊行物、地図、マイクロ資料、人工衛星画像等の資料を統合的に管理すべく、多言語分散型データベースの横断・統合検索機能と標準化に関わる研究を遂行する。
- ・多言語情報検索・処理環境と多言語 OPAC (Online Public Access Catalog) 機能の研究開発をおこなう。
- ・東南アジア研究所、アフリカ地域研究資料センター、アジア・アフリカ地域研究研究科のそれぞれにある編集作業の統合化と、各種出版物の電子化の推進によって、新たな表現可能性 (三次元表示、映像音響情報の取り込み)、充実した検索機能の整備、印刷・発送の省略による経費節減を実現するとともに、「地域研究統合情報化センター」から発信される研究情報の流通ネットワ

ークを拡大する。

「地域研究国内客員部門」および「地域研究国外客員部門」

- ・「地域研究統合情報化センター」は地域研究に関わる企画交流と情報交換、先端的な情報処理装置・技術の地域研究への適用、現地語資料を中心とする網羅的かつ体系的な研究資料・情報の収集と整理等をとおして、地域研究全体の振興に貢献することを目指す。そのいずれをとっても、外部の専門家との共同研究、共同作業を恒常的に実施する必要がある。こうした外部の専門家との緊密かつ時宜を得た協業を実現するために「地域研究国内客員部門」と「地域研究国外客員部門」を設置する。

また「地域研究統合情報化センター」の人員構成は以下のように構想された。

部 門 名	教授	助教授	助手
統合企画交流研究部門	2	2	1
高次情報処理研究部門	2	2	1
情報資源研究部門	2	2	2
地域研究国内客員部門	1		1
地域研究国外客員部門	1		1

所員には、既存部局から移行する若干名の専任教員及び新たに教授ポスト3名の増員要求による定員のほか、当面、アジア・アフリカ地域研究研究科の専任の教員、東南アジア研究センターの専任の教員を兼任させる。将来的には両部局以外の京都大学の教授または助教授のうちから、センター長の委嘱した若干名の兼任教員の配置もおこなう。なお、「情報資源研究部門」では地域研究資料・情報を網羅的、体系的に収集、整理する作業がおこなわれるが、この作業を効率的に進めるには地域に関わる専門的知識を有する研究者の存在が不可欠である。そのために、「情報資源研究部門」には「東南アジア情報資源室」、「アフリカ情報資源室」、「南・西アジア情報資源室」を設ける。

以上でのべたような構想を受け皿として、国立民族学博物館地域研究企画交流センターの再編成にともない、平成18年4月1日、「京都大学地域研究統合情報センター」が発足した。この発足が地域研究の新たな展開にむけて大きな弾みになることはまちがいない。新センターの機能のいっそうの充実化をはかるために、大学院アジア・アフリカ地域研究研究科、東南アジア研究所、アフリカ地域研究資料センターが、今後ともその運営に参加・協力していくことになっている。

IV. プログラムの成果の概要

1. フィールド・ステーション部門：フィールドワークを通じた臨地教育・研究の融合

1-1 総括

1) フィールド・ステーションの2タイプ

フィールド・ステーション（FS）を設置した目的は、それぞれに設定した共同研究テーマに関連する現地調査と研究を推進するとともに、教員と大学院生が一緒に調査地に出かけて臨地教育（オンサイト・エデュケーション）を実施し、大学院生のフィールドワークを支援することである。設置したフィールド・ステーションは、その主たる活動内容と役割によって、以下のように、機関型、機動型の2つのタイプに分けることができる。

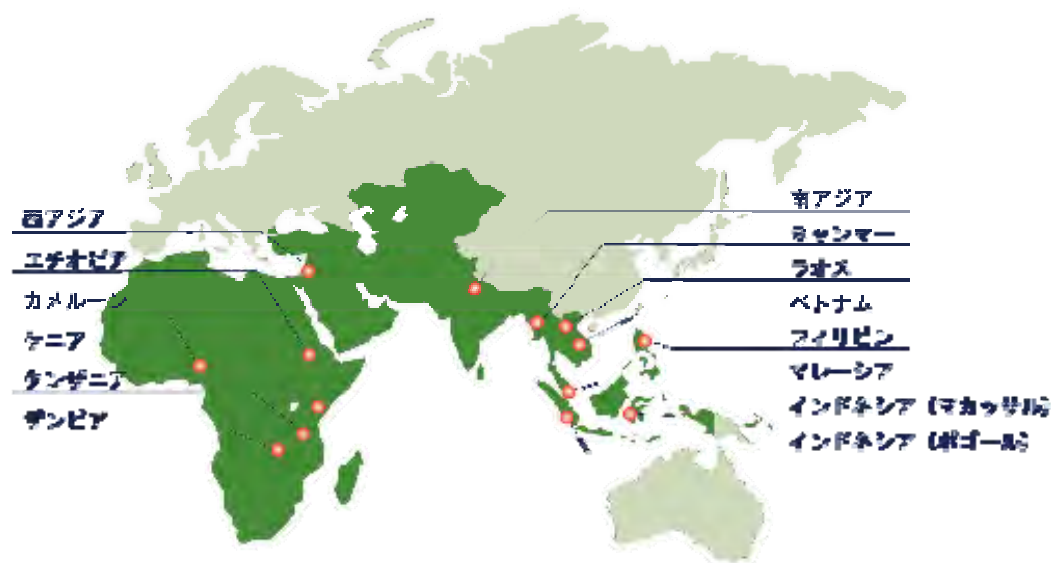
機関型：MOU 締結機関をカウンターパートとして、カウンターパート機関内もしくは都市部に事務所を賃貸して設置したフィールド・ステーションであり、インターネットへの接続、電話、ファックス、コンピュータ機器一式、辞書などの書籍類、作業用の机と椅子、簡易宿泊施設などを整備した。そして、大学院生のオンサイト・エデュケーションおよび現地機関との共同研究、ワークショップやセミナーの共同開催、研究資料の収集・整理と情報の発信、日本の他大学や他研究機関に所属する研究者・大学院生への情報提供や調査研究支援など、総合的な活動を実施した。設置場所は、以下の10地点である。

- ・アジア： ミャンマー（ヤンゴン）、ラオス、マレーシア、インドネシア（マカッサル）
インドネシア（ボゴール）、エジプト（西アジア）
- ・アフリカ： エチオピア（アジスアベバ）、ケニア（ナイロビ）、タンザニア（ダルエスサラーム）、
ザンビア（ルサカ）

機動型：調査地の村などに設置したフィールド・ステーションであり、具体的には現地の材料をつかって現地の人びとと同じ家を建て、衛星電話を利用したインターネット接続や、資料整理・少人数セミナーが実施できる環境をととのえた。そして、大学院生に対するオンサイト・エデュケーションや、フィールドワークの実施のためのさまざまな便宜の提供、収集した資料の整理、現地でのセミナーの実施などの活動をおこなった。設置場所は、アフリカのカメルーン共和国東部州ドンゴ村と、エチオピア連邦共和国南オモ地域メツァ村（エチオピア・サブ・ステーション）の2地点である。また、アジア地域では、フィリピン、ベトナム、南アジアに学生支援を中心的な活動としたこのタイプのフィールド・ステーションを設けた。

2) 活動成果

臨地教育・研究については、まず、アジア・アフリカ地域研究研究科と東南アジア研究所が締結したMOU等を活用し、これまでにインドネシア、ベトナム、ミャンマー、ラオス、フィリピン、エチオピア、カメルーン、ケニア、ザンビア、タンザニアなどに14のフィールド・ステーションを設置・整備し、オンサイト・エデュケーションや、統一テーマにそった研究をすすめてきた（図IV-1、2）。



図IV-1 アジア・アフリカ地域に設けられたフィールド・ステーション

オンサイト・エデュケーションをおこなうために、われわれのプログラムでは博士予備論文の修了者（博士後期課程相当）をアジア・アフリカ各地に設けられたフィールド・ステーションに派遣してきた。派遣学生は、所定の応募様式（申請書）による研究科内からの公募にもとづいて審査され、派遣された。

これまでの4年半の間にのべ150名ほどの大学院生をラオス、ミャンマー、インドネシア、エジプト、タンザニア、エチオピア、カメルーン、ザンビア、ケニアなどに派遣するとともに、彼らに対してオンサイト・エデュケーションをおこなうために70名の教員、12名の若手研究者が派遣され、本計画の遂行にあたってきた（表IV-1）。また、これとは別に科学研究費補助金や委任経理金（奨学寄附金）等による調査の際に、科学研究費の使用目的に合致する範囲において、それとあわせてオンサイト・エデュケーションをおこなう教員も多く、21世紀COEプログラムの経費だけがオンサイト・エデュケーションのための財源になっているわけではない。

また、フィールド・ステーションを活用して、当該地域の教育研究機関と連携をふかめ、共同研究やワークショップを実施したり、現地語の書籍、ジャーナル、政府刊行物などの資料の収集と整理をおこなってきた。

表IV-2 年度別派遣者数

	平成14年度	平成15年度	平成16年度	平成17年度	平成18年度
教員	13	27	20	9	7
若手研究員	2	1	2	6	1
大学院生	17	51	34	24	23

プログラムの終盤には、多くのフィールド・ステーションが独自のHPをもつようになっており、それらを通してフィールドワークのレポートや映像、それに現地の学術情報、地域情報などを発信するようになった。以上のような活動の成果として以下の点が上げられる。

ASAFAS 大学院生の臨地教育とフィールドワーク支援

上述のように総勢 150 名ほどの ASAFAS 大学院生が本プログラムによって派遣され、フィールド・ステーションを活用しながらフィールドワークを実施した。教員が大学院生の調査地に赴いて現場で教育を実施するオンサイト・エデュケーションによって、調査地域の生態的・社会的・歴史的な背景を教員と大学院生が共有し、おなじ課題について現場でともに考え、きめ細かな指導をすることによって大学院生のフィールドワークの質は格段に向上し、教育の効率化と高度化が達成された。同時に本プログラムは、地域研究におけるオンサイト・エデュケーションという方法を確立し、発展させるうえでも重要な貢献を果たした。

また、地域研究にとってはフィールドワークを実施することが非常に重要な位置を占めるが、そのために大学院生は、かなりの経費負担を覚悟せざるをえない。特にアジアと比較するとアフリカの場合には調査地までの距離が遠く、航空運賃などの旅費の負担が大きく、アルバイトなどの個人的な努力によって高額な渡航費等の調査経費をまかなうことは、学業に支障をきたすことにもなる。こうした課題をかかえていた多くの ASAFAS の大学院生のフィールドワークを経済的に支援できたこと自体も、本プログラムの成果として誇れることである。

さらにまた、長期滞在が不可欠なフィールドワークを実施するためには、大学院生が相手国において学生ビザなどを取得する必要があるが、フィールド・ステーションに派遣された若手研究者が、そのための支援をおこなったことも大きな成果のひとつであった。たとえばラオスでは、現地の研究機関とのあいだで MOU を締結している場合でも、学生ビザを取得するためには多くの時間を費やさねばならなかったが、フィールド・ステーションに派遣した若手研究員がこの手続きを仲介することによって、大学院生は容易にビザを取得することができた。

支援は、院生に止まらず、日本から当該地域での共同研究を模索していた日本人研究者、研究組織に対しても行われた。若手研究員の駐在は、共同研究、フィールドワーク支援にとって有意義であることが実証された。

ワークショップやセミナーの共同開催と出版事業

フィールド・ステーションでは、若手研究員や大学院生が主体となって、積極的にワークショップやセミナーを現地で開催してきた。こうした活動をとおして、地域研究が推進されただけではなく、大学院生や若手研究者が、研究会の開催からその成果の出版までの作業に習熟することができたことも大きな成果である。また、ラオス FS の事例のように、ASAFAS 大学院生と現地研究機関の研究者とが共同の調査地を設定して現地調査をおこない、その成果発表の場には、大学院生や研究者だけではなく、現地の政府関係者や村落住民の参加を得て、ラオス語でワークショップを開催した取り組みは、地域研究がめざすべき研究成果の社会還元を現地社会全体に設定した試みとして、高く評価されるべきものである。そしてこうした活動の成果は、現地語や英語で書かれたワークショップ報告書、図書、図鑑、資料集などとして刊行している。このような活動は、従来の科学研究費型の研究では実現しなかったが、本プログラムのように大学院生と若手研究者を主役とした教育研究活動を、FS を中心として展開することによって、はじめて可能になったのである。

カウンターパートである教育研究機関に対する支援

ミャンマー FS では、カウンターパートであるヤンゴン大学の地理学科、動物学科、植物学科の博士

課程に属する大学院生7名の研究活動を、ヤンゴン大学との共同研究の実施をとおして支援した。具体的には、共同研究会の実施や調査地での大学院生の指導に、ASAFAS と CSEAS のフィールド・ステーション担当者が加わるとともに、博士論文の外部審査委員も務めてきた。また、ラオスでは、カウンターパートであるラオス国立大学農学部や林学部には大学院がないため、学部生の卒業論文の出版委員会をつくり、最優秀卒業論文の出版事業を支援している。このように、現地のカウンターパートである教育研究機関に属する学生の研究を積極的に支援することは、FS を設置したからこそ可能になった。今後は、FS の機能をより制度化する努力をすることによって、こうした現地対応型の支援を恒久化してゆきたい。

3) 総括と今後の展開

京都大学に地域研究に関する最先端の研究拠点を形成するにあたり、ASAFAS の若手研究者や大学院生の研究活動を支援することが、本プログラムの基本的な課題のひとつであり、そのために各地に FS を設立し、オンサイト・エデュケーションを実施したことが、フィールド・ステーション部門の活動のもっとも大きな成果である。その結果、大学院生のフィールドワークの質は飛躍的に向上し、論文執筆や口頭発表の件数の大幅な増加が実現した。また、本プロジェクトの成果にもとづいて今後の地域研究における教育と研究の発展を展望した場合、FS の活動は非常に重要な意義をもっている。若手研究員や大学院生にとって FS は、フィールドワークとオンサイト・エデュケーションを可能にしたのみならず、当該国の研究者や大学院生との協力体制のもとに共同研究やワークショップ、セミナーなどを主体的に実現してゆくことを可能にする場を提供した。このような活動こそが、地域研究を志向する日本の大学院や研究所における今後の教育・研究を発展させるために、制度的に取り組んでいくべきプログラムの先取りの姿であったと結論できる。すなわち、アジアやアフリカをフィールドとする日本発の地域研究の教育と研究は、次世代をにう若手の研究者や大学院生が、地球規模での共生と共存を模索する研究活動に主体的に取り組むことによって大きく飛躍することができる。そしてまた、FS を活用した今後の地域研究は、日本人のみを対象とするのではなく、研究対象地域の人びととの国際的な学術協力として実施されなければならない。こうした目的を実現するためには、本プログラムで設置してきた FS を活用した教育研究活動の実施体制と、FS をとおして構築した人的ネットワークの大きな可能性を、より一層充実させてゆく必要がある。このように、FS を活用する地域研究（教育と研究の体制）を制度化してゆくことこそが、今後に求められている展開である。

以上のように、本プログラムによって、フィールド・ステーションを拠点とし、現地の研究・教育機関と協力しながら実施する臨地教育・研究をとおして、現場における第一線の研究と教育を融合させながら推進する体制が、我が国ではじめてスタートすることになった。図IV-2 は、マレーシア国民大学のマレー世界・文明研究所に設置されているフィールド・ステーションを中心とする臨地教育のレポートからの抜粋であるが、こうしたフィールド・ステーションを拠点とする現地調査や共同研究の実施や、現地ワークショップ等による成果の発信などの活動を通して、我が国における地域研究の教育研究体制が強化され、研究水準を飛躍的に高めるためのシステムが整備されたといえる。とくに、アジア・アフリカ地域に関する植民地時代の資料の蓄積が乏しい我が国の研究者が、地域研究の分野で世界の先端に立つには、自ら収集した一次資料や現場体験にもとづく研究が有効と考えるが、そのためにも、フィールド・ステーションを拠点とする臨地教育・研究をさらに推進していく必要があると考える。また、フィールド・ステーションは、本プログラムに関する大学院生や教員だけでなく、当該地域においてフィールドワークを実施している学内外の研究者や学生による利用も盛んにおこな

われており、我が国におけるフィールドワークの拠点としての機能をもそなえているところが少ない。



図IV-2 臨地研究と教育の融合

1-2 フィールド・ステーション部門アジア部会

1) フィールド・ステーションの概要

フィールド・ステーション部門アジア部会では、ラオス、ミャンマー、インドネシアのマカッサルおよびボゴール、マレーシア、ベトナム、南アジア、西アジア、フィリピンの9ヵ所ないし地域にフィールド・ステーション(FS)を設立し、現地でのインテンシブな研究と大学院教育を実施する拠点を形成するとともに、これらの地域に隣接する諸国で調査する教員・大学院生を支援する活動を展開してきた。たとえばミャンマーFSは、中国雲南地域やバングラデッシュで研究する大学院生の研究活動を支援した。さらにいくつかのFSは、FSが設置されている地域とそれ以外の地域のあいだの比較研究を推進する役割も果たした。たとえばベトナムFSは、インドネシアを主たる調査地とする大学院生がベトナムやタイを訪問した際に、その現地調査を支援した。また、ラオスFSやミャンマーFSでは、アジアの他地域で調査している大学院生だけではなく、アフリカを研究対象とする大学院生も参加するスタディ・ツアーを実施し、地域間の比較研究を支援した。

アジア部会のFSには、物理的な施設としてのFSを設置せずにカウンターパートとなる現地の研究機関の協力を得ながら、ASAFASの大学院生フィールドワークを支援したものもある。すなわちFSには、物理的な建造物をもつ研究拠点を設置して、共同研究を実施しつつ、大学院生のフィールドワークを支援するものと、実質的なオフィスは設置せずに大学院生の活動をサポートするものがあり、各地域によって、それぞれ特色の異なる機能を果たした。

各FSには、以下のように共通テーマを設定して研究活動をおこなったが、このテーマには包含さ

れない研究をおこなう教員や学生もまた、現地調査を実施するために物理的な拠点としての FS を利用した。各 FS はまた、現地の教育研究機関とのあいだで締結してきた「研究協力に関する覚え書き (MOU)」にもとづく協力体制のもとに運営された例が多い。各 FS の研究テーマと現地のカウンターパートは表IV - 3 のとおりである。

2) フィールド・ステーションの設置：機関型と機動型

本 21 世紀 COE プログラムでは、首都などの大都市に設置する機関型 FS と、フィールドワークの現場に設営する機動型 FS という、ふたつのタイプのフィールド・ステーションを構想してきた。アジア部会で機関型 FS を設置したのはラオス、ミャンマー、インドネシアのボゴールとマカッサル、マレーシア、西アジアであり、ベトナム、南アジア、フィリピンは基本的に大学院生の派遣に特化した FS であった。

表IV - 3 FS カウンターパート

FS	研究テーマ	現地のカウンターパート
ラオス	ラオスにおける生物資源利用と地域社会	ラオス国立大学
ミャンマー	ミャンマーおよびその周辺地域の多様性とその変容	東南アジア諸国教育省連携機構歴史・文化・伝統地域センター、ヤンゴン大学、農業灌漑計画局、農業大学、林業大学、歴史研究所
インドネシア (マカッサル)	グローバル経済下における東部インドネシア地域の社会変容と資源管理	ハサヌディン大学
インドネシア (ボゴール)	インドネシアにおける開発、資源、地域社会	ボゴール農科大学、Center for International Forestry Research (CIFOR)
マレーシア	マレーシアにおける日常的実践と国家制度	マレーシア国民大学マレー世界・文明研究所(ATMA)
ベトナム	メコンデルタの生態資源利用と社会の変容	物質科学研究所ニャチャン支所
南アジア	変容する南アジア	ジャワーハルラル・ネルー大学、ブータン研究センター、ペラデニヤ大学
西アジア	西アジアにおけるイスラーム法の実践とイスラーム復興の実態	カイロ大学政治経済学部・アジア研究センター、アンカラ大学神学部
フィリピン	地域の文脈における民主化：統治、資源管理、政策	フィリピン大学総合開発研究センター

3) COE 研究員の派遣

アジア部会では、COE 研究員（若手研究員）を公募によって選考し、ラオス FS およびミャンマー FS に派遣した。COE 研究員の仕事は、本プログラムにかかわる教員および大学院生の現地調査と臨地教育の支援、現地の教育・研究機関との共同研究の実施、ワークショップ・研究会等の開催などである。とくにワークショップや研究会の開催のために COE 研究員は、準備段階から開催後の報告書の作成にいたるまでの一連の作業をコーディネートする仕事を担当し、本プログラムにかかわる事業を円滑に進めることに貢献した。COE 研究員はまた、これらの一連の作業を現地のカウンターパートと共同で実施することをおして、カウンターパートである教育・研究機関の若手研究者や大学院生の実務的なスキルアップにも貢献し、また、当該カウンターパートとの共同研究を立案・企画し、現地スタッフと一緒にフィールドワークをおこなうこととおして、日本人研究者・大学院生と現地の研究者・大学院生が、ともに研究の成果をあげることに寄与した。このように COE 研究員は、FS

設置国に対しても教育研究上、きわめて有益な貢献を果たした。

4) フィールド・ステーションを活用した現地調査と臨地教育

FS を活用した臨地教育（オンサイト・エデュケーション）の成果としては、以下のような点があげられる。まず、大学院生と教員が一緒にフィールドワークをおこなうことにより、その現場において、大学院生の研究方法・目的等の不備を直接に指導し、高度な教育を効率的にすすめることができた。大学院生はまた、その経験をもとにして、自分の現地調査における資料整理やデータ解析等の問題点を即座に解決することができた。また、研究テーマの異なる大学院生がひとつの FS を共同で利用し、研究や現地調査に関する情報を交換することにより、現地におけるフィールドワークと日常生活の双方をより充実させることができた。

本プログラムの実施期間にアジア部会で派遣した教員および大学院生は、それぞれのべ約 50 人と約 60 人であった。さらに、上述したように、ラオス FS の支援のもとにアジアの他地域を研究対象とする大学院生 7 人と、アフリカを研究対象とする大学院生 3 人が参加するスタディ・ツアーを実施した。同様にミャンマーFS が実施したスタディ・ツアーには、東南アジアの他地域を研究する大学院生 1 人と、アフリカを研究対象とする大学院生 1 人が参加した。このスタディ・ツアーは、地域間の比較研究を推進する視点を大学院生に教育するために非常に有益であった。

本プログラムでは、FS を設置した相手国の教育・研究機関に貢献するための取り組みもおこなった。たとえばミャンマーFS では、カウンターパート機関に属する大学院生の教育や博士論文の審査に参画した。ラオス FS では、カウンターパート機関の学部生の卒業研究のうち優秀な卒業論文をカウンターパートの教員と共同で選出し、それを出版することをおして当該機関の教育に貢献することによって、本プログラムの成果を現地に還元した。

また、本プログラムによって設立した FS は、ASAFAS や CSEAS の教員や大学院生だけではなく、京都大学の他部局や他大学に属する教員・大学院生にも利用されており、研究のネットワークを構築しつつ研究成果をあげてきたことも重要な貢献である。このような利用者は、のべ約 50 人にのぼる。

5) 共同研究の実施、ワークショップ・研究会等の開催と新施設の設立

上記したように各 FS は、それぞれに研究テーマ設定して、それにもとづいて教育研究活動をおこなった。また、当該の FS を利用する教員が科学研究費などの研究助成金を取得した際には、FS の研究テーマと研究助成金の研究テーマを融合しながら、カウンターパートとの共同研究をおこなうとともに、大学院生の教育にも従事した。このような取り組みをおこなった FS としては、ラオス、ミャンマー、インドネシアのマカッサルおよびボゴール、マレーシア、南アジア、西アジアがあげられる。また、ラオス FS では、京都大学とラオス国立大学の複数の学部の教員が共同研究を立案し、フィールドワークを実施した。同様の共同研究はミャンマーFS でも実施し、現地教員の研究レベルをさらに向上することに貢献した。

アジア部会では、このような現地調査と臨地教育および共同研究の成果を発信するために、ワークショップやシンポジウムを開催した。その回数は以下のとおりである。

- ・ラオス：15 回
- ・ミャンマー：2 回
- ・インドネシア・マカッサル：5 回
- ・インドネシア・ボゴール：3 回

- ・マレーシア：4回
- ・南アジア：1回

こうしたワークショップやシンポジウムの企画・組織・運営には、本プログラムによって派遣したCOE 研究員や大学院生とともに、当該FS のスタッフが中心的な役割を果たした。こうした取り組みは学術的な成果を生むだけでなく、このような企画を開催するために必要なノウハウを、日本人の若手研究者や大学院生、そして当該国のスタッフに伝達する場を提供したという意味において、多大なる成果をあげたものと考えている。これらの活動をとおして、カウンターパートである教育研究期間とのあいだにおいて、さらなる共同研究の推進と協力体制の強化が確約された。

特筆すべき点としてラオス FS は、ラオス国立大学農学部構内に「ラオス農具博物館」を設立し、共同研究の成果を目に見える形として後生に伝えとともに教育研究に資する事業をおこなった。これによって、ラオス国立大学の教育研究活動を発展させるだけではなく、ラオス初の農具博物館が設立されたことは、同国全体に対してに大きな学術的貢献をしたと自負している。

6) 広報活動

ミャンマーFSはウェブサイトを作成し、研究目的、研究組織、研究テーマ、ワークショップ、オフィス紹介を公開した。

FS	ホームページのURL
ミャンマー	http://areainfo.asafas.kyoto-u.ac.jp/ygnfs/

7) 教育・研究業績

アジア部会の各FSの活動をとおして、博士号取得者のほか、博士予備論文や学術論文、編著書などの執筆や、学会等での口頭発表が活発におこなわれ、教育・研究面において多大なる成果をあげることができた。以下にアジア部会のFSにおける教育・研究業績を示す。

- ・ラオス：博士論文3編。博士予備論文5編。編著書3冊。
- ・インドネシア・マカッサル：博士論文1編。博士予備論文3編。編著書1冊。学術論文等42編。口頭発表31回。
- ・インドネシア・ボゴール：博士予備論文 3 編。学術論文等 17 編。口頭発表 9 回。
- ・マレーシア：博士予備論文 2 編。学術論文等 2 編。編著書 6 冊。口頭発表 3 回。
- ・ベトナム：博士論文 3 編。博士予備論文 2 編。編著書 1 冊。
- ・南アジア：学術論文等 5 編。編著書 11 冊。口頭発表 10 回。
- ・西アジア：博士論文 2 編。学術論文等 15 編。編著書 23 冊。口頭発表 31 回。

1-3 フィールド・ステーション部門アフリカ部会

1) フィールド・ステーションの概要

フィールド・ステーション部門アフリカ部会では、現地でのインテンシブな研究と大学院教育を実施する拠点として、エチオピア、ケニア、タンザニア、ザンビア、カメルーンの5カ国にフィールド・ステーション（FS）を設立した。この5カ国を選定したのは、大学院アジア・アフリカ地域研究科（ASAFAS）アフリカ地域研究専攻において、数多くの教員がこれまでに研究を継続しており、すで

に現地の教育研究機関とも緊密な協力体制を構築している諸国を選んだためである。しかしながら、アフリカ部会の活動は、この5カ国に限定されていたわけではない。隣接する諸国で調査する教員・大学院生が、フィールドワークの実施のためにFSを利用したり、あるいは、ひとつのFSを核としていくつかの国々で調査してきた教員・学生が共同研究を実施するといった活動を展開してきた。具体的には、エチオピアFSはエリトリアを、ケニアFSはウガンダを、ザンビアFSはナミビア・ボツワナ・マラウィ・ジンバブエを、そしてカメルーンFSはギニア・セネガルを活動地域として含んでいる。すなわち各FSは、物理的な建造物をもつ研究拠点として設置すると同時に、共同研究グループとしての機能を果たすものとして形成してきた。

各FSには、以下のように共通テーマを設定して研究活動をおこなった。ただし、このテーマには包含されない研究をおこなう教員や学生もまた、現地調査を実施するために物理的な拠点としてのFSを活用している。各FSはまた、現地の教育研究機関とのあいだで締結してきた「研究協力に関する覚え書き(MOU)」にもとづく協力体制のもとに運営してきたが、そうした現地のカウンターパートは具体的には以下のとおりである。

表IV-4

FS	研究テーマ	現地のカウンターパート
エチオピア	東北部アフリカにおける多元共生社会の構築と地域研究の役割	アジスアベバ大学エチオピア研究所 同大学社会科学部
ナイロビ	東アフリカ乾燥地域における生業と社会の変容に関する地域研究	ナイロビ大学アフリカ研究所 マケレレ大学社会科学部
タンザニア	グローバリゼーション下における地域の社会、経済ならびに自然環境の変容とその連関	ソコイネ農業大学地域開発センター ダルエスサラーム大学
ザンビア	南部アフリカにおける社会経済変動と環境・地域住民の変容	ザンビア大学社会経済研究所
カメルーン	アフリカ熱帯林の保護と持続的利用に関する研究	ヤウンデ大学人文社会学部 ダカール大学、ボッソウ環境研究所

2) フィールド・ステーションの設置：機関型と機動型

アフリカ部会では、本プログラムの初期の構想を実現すべく、機関型と機動型のFSを設立してきた。機関型とは、アフリカ諸国の首都などの大都市に設置されるFSであり、それに対して機動型とは、フィールドワークの現場に設営されるものである。

具体的には、エチオピア（アジスアベバ）、ケニア（ナイロビ）、タンザニア（ダルエスサラーム）、ザンビア（ルサカ）では、住居や大学の一室を借用して機関型のFSとし、机や椅子・本棚などの什器、コンピュータ関連機器、そして書籍類を整備して、調査資料の整理・保管、セミナーの開催、インターネットへのアクセスなどが可能な設備を整えた。一方、機動型のFSは、カメルーン（東部州ドンゴ村）およびエチオピア（南オモ地域メツァ村）に設置し、いずれも現地に土壁や藁葺きの家をたてて、資料整理やセミナーが実施できるようにし、さらに発電設備や衛星通信システムを活用して、各国の首都や日本とのあいだで交信可能な環境を整えた。

3) フィールド・ステーションを活用した現地調査と臨地教育の実施

本プログラムの実施中にアフリカに派遣した教員および大学院生は、それぞれ延べ約 50 人と約 100 人にのぼる。FS を活用した臨地教育の第一の利点は、大学院生と教員がフィールドワークの経験をインテンシブに共有することをとおして、大学院生が具体例に即しながら学ぶことができるところにある。第二には、大学院生が FS を利用して中間的な資料整理とセミナーをおこなうことによって問題点を明確にし、その後のフィールドワークの方向を再定位することができる。このように中間段階で自分の調査を見直すことは、長期的な現地調査を実施する大学院生にとっては非常に重要であり、現地には教員が不在であっても、FS に整備されているインターネット環境をとおして、京都にいる教員と交信できることも、大学院生の教育には効果をあげた。第三に、FS を活用しながら現地の研究者・大学院生とのあいだの交流・討論を深めることも、大学院生にとっては、複眼的な視点を養成するうえで重要であった。

4) ワークショップの開催と共同研究の実施を介した教育研究活動

アフリカ部会では、現地に設置したFSを活用しながら以下の5つの国際ワークショップを実施してきた。

- ① 国際ワークショップ「Environment, Livelihood and Local Praxis in Asia and Africa」
2003年10月20～30日、アジスアベバ（エチオピア）
- ② 国際ワークショップ「Joint Seminar on the Sustainable Use of Tropical Rainforest in Southeastern Cameroon」2003年12月10日、ヨカドゥマ（カメルーン）
- ③ 国際ワークショップ「Baka Pygmies and Bakwele Farmers in the Jengi South East Area」2005年2月16日、ヤウンデ（カメルーン）
- ④ 国際ワークショップ「Concepts and Perception on African Way of Rural Development Based on Area Studies」2005年12月13日、ダルエスサラーム（タンザニア）
- ⑤ 国際ワークショップ「Positive Relationships between Culture and Development in East Africa: Analysis of Multi-Ethnic Context」2006年2月4～5日、アジスアベバ・アルバミンチ（エチオピア）

こうしたワークショップの企画・組織・運営には、当プログラムによって派遣した COE 研究員・大学院生が中心的な役割を果たし、当該諸国の研究者だけではなく、その地域で調査に従事している諸外国の研究者とのあいだで研究交流を深めることができた。すなわち国際ワークショップは、研究を進展させるだけではなく、若手研究者に対する教育効果の点においても大きな意義をもっていた。また、こうしたワークショップが、上述した現地のカウンターパートとのあいだの共同研究を推進し、協力体制を強化するために役立ったことは言うまでもない。たとえば、上記①のワークショップは地域間の比較研究をめざして、アジスアベバ大学との共催によって開催したものであり、アジア・アフリカの各地で研究を継続してきた 6 人の ASAFAS 教員と 15 人の ASAFAS 大学院生が参加し、アジスアベバ大学の教員・大学院生とともに熱のこもった議論を展開した。また、②と③のワークショップは、カメルーンで現地調査をおこなっている大学院生の服部志帆と四方かがり、安岡宏和が、おなじ地域で活動している WWF-Cameroon（世界自然保護基金カメルーン支部）のスタッフとの協力のもとに、主体的に実施したものであり、自然保護と現地住民の生活の両立に関する研究成果の発表と意見交換をおこなった。このワークショップは、カメルーンの FM ラジオ放送番組でも取りあげられ、服部志帆がその番組に出演して話題となった。

国内で開催したワークショップ（『「土地」から展望する南部アフリカー自然と向き合う、変化を生き抜く―』2006年2月18日、東京外国語大学本郷サテライト）もまた、大学院生が中心になって企画・実施した。当COEプログラムでザンビアFSを設置したことを端緒として、南部アフリカ諸国（ザンビア、マラウイ、ボツワナ、ジンバブエ、ナミビア、レソト）で現地調査を実施してきた大学院生は、自主的に勉強会をたちあげ、10回以上の研究会を京都で開催した。そして、南部アフリカの研究者が数多くいる東京において、その成果を公表したのが、このワークショップである。これもまた、FSが教育研究に果たしてきた多大な効果のひとつの到達点であった。

こうして積み重ねられた教育研究の成果は、当プログラムの最終成果を世に問うために2006年11月9日13日に京都で開催した国際シンポジウムにおいて、いくつかのサテライト・ワークショップを成功させるというかたちで結実した。

5) 広報活動

アフリカ部会が設置した5つのFSは、いずれも独自のウェブサイトを作成し、教育研究活動の成果を公開すると同時に、「現地事情」「学術情報」「フィールド・エッセイ」「フォトギャラリー」などによって、当該地域に関するさまざまな情報を発信してきた。また、エチオピアFSでは、メールマガジン「エチオピア・フィールド・ステーションだより」を発刊して、教育研究活動の広報につとめた。

FS	ホームページのURL
エチオピア	http://areainfo.asafas.kyoto-u.ac.jp/efs/index.html
ナイロビ	http://areainfo.asafas.kyoto-u.ac.jp/nfs/nfstop.html
タンザニア	http://jambo.africa.kyoto-u.ac.jp/cgi-bin/tanzania/wiki.cgi
ザンビア	http://areainfo.asafas.kyoto-u.ac.jp/zfs/
カメルーン	http://jambo.africa.kyoto-u.ac.jp/cgi-bin/CameroonFS/wiki.cgi?page=Cameroon+Field+Station

2. 統合情報化部門：地域研究資料の統合化と情報化

2-1 統合情報化部門の総括

「地域研究統合情報化センター構想」の項でのべたように、21世紀COEプログラムでは、フィールド・ステーションにおける教育研究活動に対する情報ネットワークをもちいた支援と、国内外の地域研究に関する情報及びネットワークの拠点としての機能をあわせもつ「地域研究統合情報化センター」の設立準備をすすめる、この新センターが担うことになる機能を具体的に提起するとともに、先取り的に実施する作業をおこなった。こうした作業をすすめるための組織上の措置として、われわれの21世紀COEプログラムでは、「統合情報化部門」を設置し、その下に「ネットワーク部会」、「図書部会」、「広報部会」の3部会をもうけた。

統合情報化部門が最初に着手した作業は、さまざまなコミュニケーション・モジュールの核となるサーバの導入や、フィールド・ステーションおよび学内外の研究者、学生との円滑なコミュニケーションをはかる機器等の整備であった。そのうえで、2003年4月21日から21世紀COEプログラム専用のウェブサイトの運用を開始し、プログラムの活動状況や教育研究成果のリアルタイムな発信に努めた。

このウェブサイトは、内容上の新鮮さを保つために、プログラムの終了にいたるまで、頻繁に更新され、そのたびに情報量が増加し、内容が豊かになっていった。また、ウェブサイトに掲載される情報を迅速かつ広範囲に発信するために、月刊のメールマガジン『アジア・アフリカ地域研究情報マガジン』を発行してきた。これらは、プログラムの発足時に策定した、プログラムの活動状況を伝えるのはニュースレター等の印刷物ではなく、可能な限り電子的な媒体によるという当初の方針によるものであると同時に、国内外の地域研究に関する情報及びネットワークの拠点たる「地域研究統合情報化センター」がになうべき機能のいくつかを具体的にしめす意図もあった。それゆえ、われわれの21世紀COEプログラムのウェブサイトには、フィールド・ステーションを中心に展開されてきた臨地教育と研究活動の成果だけでなく、プログラムの関係者や学内外、国内外の研究者にとって地域研究の情報源として役立つさまざまな情報と装置を掲載してきた。

ウェブサイトの管理と更新は広報部会が所轄してきた。また、上記のメールマガジンの発行はネットワーク部会の活動の一部をなすものであり、これらに関する詳細については後出のネットワーク部会および広報部会からの報告を参照されたい。

統合情報化部門の活動のもうひとつの柱となっていたのは、地域研究資料の情報化と統合化であった。これもまた「地域研究統合情報化センター」がになうべき機能の具体化のための作業であった。すなわち、多角的な地域研究資料をデジタル化、データベース化し、インターネットを介して利用できるようにすることで、フィールド・ステーションにおける教育研究活動に対する支援と、国内外の地域研究に関する情報及びネットワークの内実化をはかろうとしたのである。

こうした活動は「ネットワーク構築プロジェクト」と総称され、そのもとで①ASCOM、②東南アジア地形情報データベース、③ウェブアーカイブ、④タイ語三印法典プロジェクト、⑤映像資料デジタル化、⑥Human Ecology Files、⑦AFlora、⑧地域研究画像データベース、⑨ストーリーミング画像配信、⑩メールマガジン配信、⑪アラビア語定期刊行物データベース、という11のプロジェクトがおこなわれた。個々のプロジェクトの説明と成果については後出のネットワーク部会の報告を参照していただきたいが、このうち東南アジア地形情報データベース、タイ語三印法典プロジェクト、AFlora、地域研究画像データベース、ストーリーミング画像配信、メールマガジンについては、21世紀COEプログラムのウェブサイトから、これらのプロジェクトのもとで蓄積されてきたデータや構築されたデータベースを閲覧したり、利用できる体制が確立された。

統合情報化部門で遂行された第3の活動は、地域研究にかかわる図書、マイクロ資料、CD-ROM等を収集することにあつた。しかし、年々、21世紀COEプログラムの予算が削減されたこと等による経費的な制約のために、当初計画したような成果をあげることは困難であった。21世紀COEプログラムのもとでおこなわれた地域研究資料の収集活動の成果については、後出の図書部会からの報告を参照されたい。

以上でのべたような活動を通して、統合情報化部門ではアジア・アフリカ地域に関する多角的な地域研究資料の情報化と統合化をはかるとともに、国内外の研究機関、研究者間のコミュニケーションを促進する、地域研究の分野における情報ネットワークの拠点形成に向けて整備を進めてきた。こうした活動を背景に、国立民族学博物館地域研究企画交流センターの再編成にともない、2006年4月1日、京都大学地域研究統合情報センターが発足することになった。今後とも、21世紀COEプログラムの統合情報化部門のもとでおこなわれた特に「ネットワーク構築プロジェクト」の実績と成果を活用するかたちで、この新センターのいっそうの充実化をはかることに努めていく所存である。

2-2 ネットワーク部会

統合情報化部門の下に設けられたネットワーク部会の目的は、近年急激に発展してきたコンピュータ・ネットワーク技術を、地域研究に応用していく手法を確立することであった。この目的のために、本部会では5年間さまざまな活動をおこなってきたが、それらをおおまかに分類すると、次の3つの項目にまとめることができる。

- ・インターネットを通じた情報集積、情報発信ツールの開発
- ・地理・空間情報学の手法を用いた地域研究の実践
- ・インターネットを利用した遠隔教育、遠隔会議の推進

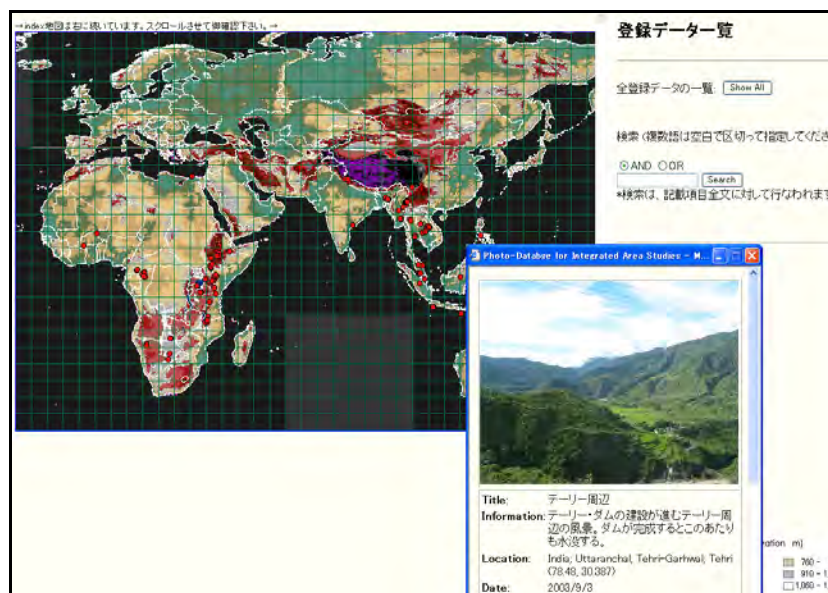
以下にそれぞれの活動の内容を記していく。

1) インターネットを通じた情報集積、情報発信ツールの開発（ネットワーク構築プロジェクト）

本部会では、近年発達してきたインターネット、とくに WWW を通じて、下記のようにさまざまな地域研究情報を集積、分類、発信するさまざまなツールを開発してきた。

地域研究画像データベース <http://areainfo.asafas.kyoto-u.ac.jp/pdb>

21 世紀 COE プログラムにより派遣された教員、学生のフィールド研究の写真およびその解説を収集・公開する Web データベースである。ホームページの世界地図上の点をクリックすることによって、その地点で撮影された写真とその解説を見ることができる。なお、著作権保護のため、画像はコピー&ペーストではコピーできないようにプロテクトされている。



図IV-3

AFlora（アフリカの植物利用データベース） <http://130.54.103.36/aflora.nsf>

アフリカ地域に関してこれまで集められてきた膨大な植物利用のデータをデータベース化し、誰でも・どこからでも検索できるようにした Web データベース・システムである。ベースとなるシステム（Lotus Notes）が古くなってきたので、新しいフリーな環境（Postgre SQL+PHP）上でシステム

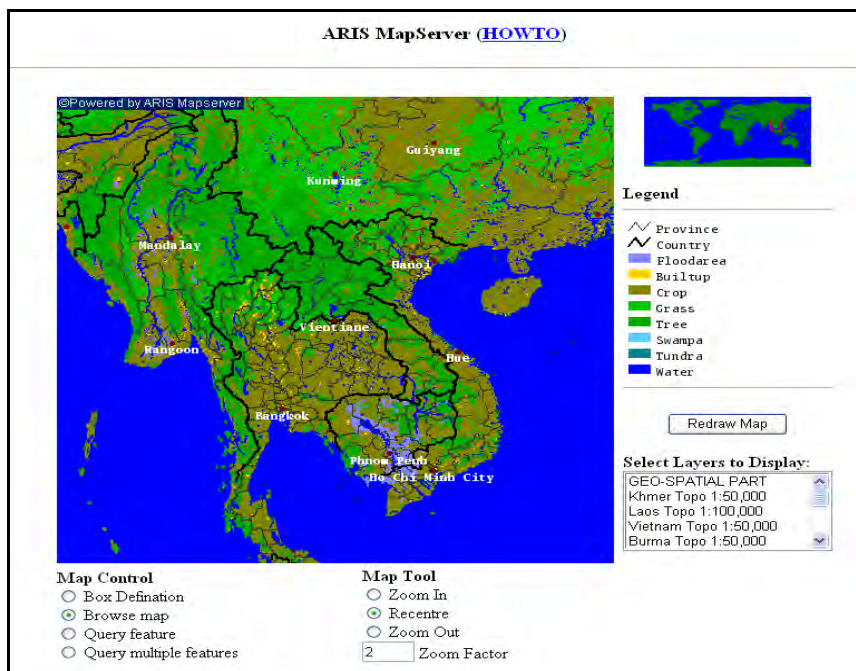
を再構築する作業をおこなっている。



図IV-4

ARIS (東南アジア地形情報データベース) <http://aris.cseas.kyoto-u.ac.jp/mapserver/>

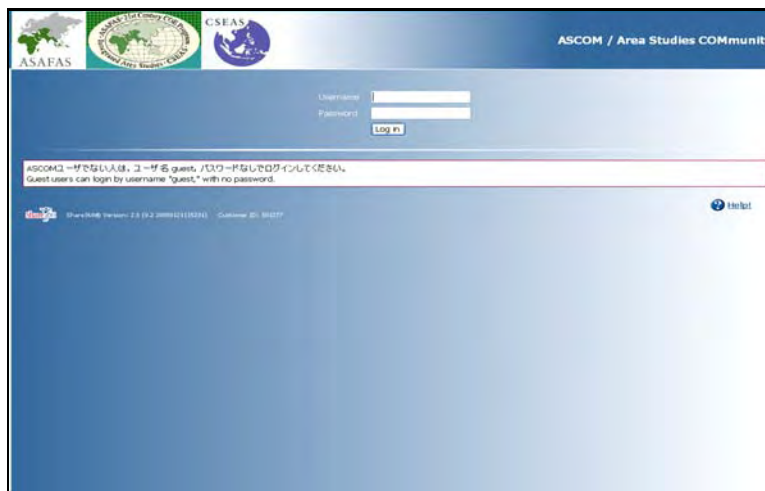
このデータベースには、東南アジア大陸部をカバーする、さまざまな地図のコレクションが集積されている。データベースの構築には、そのデータがどのような性質のものであるかということ（メタデータ）を示す必要があるが、このデータベースでは、Dublin Core と呼ばれるメタデータの標準的な記法が用いられている。またデータベース自体は、PostgreSQL/PostGIS や、Minnesota Mapserver といったオープンソースのソフトによって構築されている。



図IV-5

ASCOM (地域研究コミュニティ・グループウェア) <http://ascom.asafas.kyoto-u.ac.jp/>

地域研究者の情報交流のためのグループウェアを立ち上げている。(グループウェアとは、Web のホームページを通じて、情報の共有をおこなう仕組みのことである。) サーバ ASCOM は、Area Studies COMmunity の略である。ASCOM には、電子掲示板/会議室、ファイル管理、スケジュール管理、施設予約、Web メール、検索機能など、グループウェアとして十分な機能が備えられている。ASCOM は定評のあるグループウェア「サイボウズ」の英語版を使用しているが、英語版を導入した理由は、21 世紀 COE プログラムの研究活動においては、海外での使用、および英語話者の使用が多く、日本語版では英語 OS での表示ができないからである。(ただし日本語での運用も問題なくおこなえる。) システムの導入後、21 世紀 COE 事務連絡、データの集積、さまざまな研究グループ内のファイルの共有等に有効に使われている。



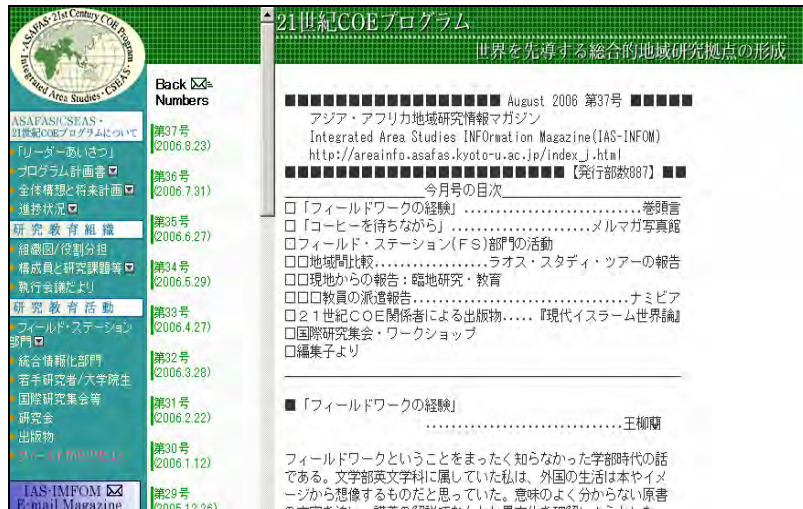
図IV-6 ASCOM

ウェブアーカイブ

2004 年度より、専用の Windows XP マシンを用いて地域研究に関連するウェブページの自動巡回・情報蓄積をおこなっている(データは当面非公開)。巡回はフリーのウェブ巡回ツール"PD192"を用い、データ整理用の簡単なバッチファイルの動作と共に、Windows XP のタスク機能によって週一回定期的におこなわれている。巡回頻度は開始当初から 2004 年 7 月までは毎日だったが、その後各サイトの更新頻度などを鑑みて週一回に変更し、現在に至っている。また 2005 年 4 月時点で蓄積されたデータ量は、蓄積用ハードディスク 230GB (ミラーリングを行い、総容量 460GB の半分である 230GB が実質容量) 中 65.2GB が使用される程度となっている。

アジア・アフリカ地域研究情報マガジン <http://areainfo.asafas.kyoto-u.ac.jp/japan/mailmag/>

21 世紀 COE プログラムの活動内容や、ホームページの更新情報などを、毎月電子メールで配信している。興味のある人は誰でも自由に配信登録をすることができる。これまでに 40 号以上が発行されており、発行部数は 900 を越えている。バックナンバーは、21 世紀 COE のホームページ上で読むことができる。



図IV-7 『アジア・アフリカ地域研究情報マガジン』バックナンバー

ストリーミング画像配信

21世紀COEプログラムでは、地域研究に関して蓄積されたさまざまな情報をデジタル化して発信することに力を注いでいるが、動画に関しては、ストリーミング配信用のソフトを購入し、ビデオカメラで撮影された動画を保存し、インターネットに向けて配信するシステムを構築した。動画は21世紀COEホームページの各所からのリンクで見ることができる。



図IV-8 ストリーミング画像配信

タイ語三印法典プロジェクト <http://thaidtp.cseas.kyoto-u.ac.jp/>

タイ語『三印法典』(Kotmai Tra Sam Duang)データベースの構築作業を進めてきた。本法典は、タイ国における1350-1805年の455年間に制定・公布された法令・布告で、現ラタナコーシン王朝ラーマ一世によって1805年に編纂された、タイ最古の成文法典である。京都大学東南アジア研究所では、この『三印法典』タマサート大学5冊本の計算機総辞用例索引『Computer Concordance of The Law of Three Seals』(5分冊、3850頁、239、576用例、タイ国Amarin Publications)を出版して

いるが、すでに絶版となり入手不可能なことから、本研究では主導的立場にある本研究所にインターネットによる公開が国際的にも強く求められてきた。同様なデータベースは世界に存在しない。本データベースは、全文テキスト及びこれとリンクされた原本（一次資料）画像データベースを構築し、デジタルアーカイブとして保存すると共に、Web ベースで広く国内外に公開することを目的としている。また、本データベースは、タイ語による検索、結果表示を可能にし、解題はタイ語、英語、日本語で記述する本格的な多言語対応となる。

アラビア語定期刊行物データベース

21 世紀 COE プログラム図書部会ともジョイントする形で、アラビア語定期刊行物データベース構築を行なっている。これまでに、以下のものが刊行された。

- ・第 1 巻『アラビア半島諸国定期刊行物カタログ』（2003 年 12 月刊行）
- ・第 2 巻『レバノン定期刊行物カタログ』（2004 年 9 月刊行）
- ・第 3 巻『シリア定期刊行物カタログ』（2005 年刊行）
- ・『イスラーム政治思想の遺産』（アラビア語原典資料集）（2005 年刊行）

これらは現在のところ紙ベースのデータベースであるが、著作権の問題がクリアできればインターネットでも公開することを計画している。



図IV-9

2) 地理・空間情報学の手法を用いた地域研究の実践

ネットワーク部会では、GPS データ、地図情報および現地調査で得られた資料を GIS システムとして統合し、地域研究に役立てる手法を開発し、またそれらに関する教育活動も積極的に推進してきた。

GIS 分析の元になるデータは、上記の Web データベースを用いて地図画像やフィールドの写真を集積するとともに、多くの衛星画像を購入してきている。それらの情報の分析、提示に関しては、GIS 用ソフトおよび分析用コンピュータを購入して分析環境を整えた。これらは本 COE の援助を受けた研究の中でさまざまな形で用いられている。

同時に、GIS に関する講習会、ワークショップを開催している。一例を挙げると、後述するワークショップでは、東大空間情報科学研究センターの有川正俊助教授らを招聘して、空間情報管理・発信ツール PhotoField のデモンストレーションを行った（写真参照）。



図IV-10 PhotoField のデモ

3) インターネットを利用した遠隔教育、遠隔会議の推進

ネットワーク部会では、フィールド・ステーション部門と協力して、電子メールや衛星電話を用いた遠隔教育の推進をおこなってきた。電子メールに関しては、上記のグループウェア ASCOM の Web メール機能を用いて、日本語の利用できないインターネット端末からも通信が可能となるようにし、またインターネットに直接アクセスできない遠隔地においても、衛星電話回線を用いてメールを送受信できる環境を整備した。フィールドワークにおいては、教員が学生とともにフィールドに入って指導をおこなう臨地教育が理想ではあるが、それが不可能な場合でも、これらの手段を用いることによってリアルタイムな「準-臨地教育」とでも言うべきものが可能になる。またこれらの環境は、フィールドにおける学生の急病、事故などへの対応にも威力を発揮する。

本プログラムにおいては、アジア・アフリカの現地研究者との共同研究を積極的に押し進めてきたが、ネットワーク部会ではビデオ会議システムを整備し、研究交流がよりスムーズにおこなえる環境の構築をめざした。実際に 2006 年 9 月におこなわれた本部会の成果発表ワークショップ（下記）においてタイ・バンコクの東南アジア研究所連絡事務所との間でビデオ会議の実験をおこない（写真参照）、引き続いて同年 11 月のシンポジウム「総合的地域研究の新地平」においては、京都大学学術情報メディアセンターの協力を得て、ベトナム国家大学ホーチミン校で開催される「GIS-IDEAS2006 国際会議」とのあいだで、インターネットを通じた双方向のビデオ会議を実施した。



図IV-11 成果発表ワークショップ

以上述べてきたネットワーク部会活動の総まとめとなる、成果発表ワークショップ「ネットワーク

型地域研究の成果と展望」(英文題目 "Inter-networking in area studies: results and foresights") を開催した。当日は 60 人以上の参加者があり、活発な討論がおこなわれた。以下はその概要である。



図IV-12 成果発表ワークショップ

期日：2006 年 9 月 29 日(金)

場所：京都大学工学部 4 号館 4F、ASAFAS 会議室

【プログラム】

10:00-10:10 趣旨説明 木村大治 (ネットワーク部会長、ASAFAS アフリカ地域専攻)

〈セッション 1：21COE で開発されたネットワーク型地域研究ツール〉

10:10-10:40 研究ツールの個別説明

10:40-12:00 ノートパソコンによるデモ、ポスター説明 (別室にて)

12:00-13:15 昼休み

〈セッション 2：地理・空間情報学と地域研究〉

13:15-13:45 「アフリカ熱帯林における空間利用」木村大治 (ASAFAS アフリカ専攻)

13:45-14:15 「GIS を活用した地域研究：バングラデシュ・モドゥプール森林における自然環境保護と地域住民の対立の現状」東城文柄 (ASAFAS 東南アジア専攻)

14:15-15:15 「デジタル写真と地図を用いた、フィールドワークの空間情報管理・発信ツール」有川正俊・藤田秀之 (東大空間情報科学研究センター)

15:15-15:30 コーヒーブレイク

〈東南アジア研究所バンコク連絡事務所と結んでの遠隔ビデオ会議〉

15:30-16:00 「1900 年代の地積図から見たバンコクの都市空間—バンランブー地区における土地及び建築利用状況を中心に」岩城考信 (法政大学大学院、チュラロンコーン大学社会調査研究所 客員研究員)

16:00-16:30 "Multi-Temporal Geo-Spatial Data Management for Area Study" Col. Surat Lertlum, Phd. (Chulachomklao Royal Military Academy, Thailand)

〈セッション 3：パネル討論〉

16:30-17:30 「遠隔教育とオンサイト・エデュケーションの融合をめざして」司会：重田眞義 (ASAFAS アフリカ専攻)

ワークショップのホームページ

http://areainfo.asafas.kyoto-u.ac.jp/japan/fsws/2006_kyoto21net/20060929.html

2-3 図書部会

21 世紀 COE に先行する COE プログラム「アジア・アフリカにおける地域編成—原型・変容・転成」(平成 10～14 年度)においては、現地語文献を中心とする 7 万冊を上回る図書資料の収集・整理作業を行った。これらの購入図書類は、東南アジア研究所図書室および大学院アジア・アフリカ地域研究研究科アフリカ地域研究専攻図書室に納められ、京都大学における地域研究の発展に欠かせない情報基盤となっている。本プログラムの図書部会では、この先行事業の任務および物的・人的資産を引き継ぎ、さらなる充実を目指してきた。

本プログラムによる購入図書は、アジア・アフリカの地域研究に関連するほぼあらゆる研究分野にまたがる。日本語および欧州諸語による基礎的な文献に加え、アラビア語、ウルドゥ語、ベトナム語をはじめとする 11 の諸言語による多様な現地語書籍を購入した。購入総冊数は 5 年間でほぼ 2 万冊におよぶ(下記の表参照)。

表Ⅳ-2 言語・年度別図書購入冊数(最終年度は 12 月末現在)

	2002 年度	2003 年度	2004 年度	2005 年度	2006 年度	計
日本語	236	822	123	58	36	1275
欧語	3871	1129	1006	1925	308	8239
アラビア語	1989	1003	701	778	846	5317
ウルドゥ語	0	893	0	0	0	893
ベトナム語	0	5	158	90	0	253
トルコ語	14	0	0	0	124	138
クメール語	0	126	0	0	0	126
ネパール語	0	0	0	107	0	107
ヒンディ語	0	10	0	0	0	10
クルト語	3	0	0	0	0	3
ペルシャ語	3	0	0	0	0	3
中国語	0	2	0	0	0	2
ミャンマー語	0	0	0	0	0	550
	6116	3990	1988	2958	1314	16916

このほか図書資料以外には、マイクロフィッシュ、VCD・DVD、ポスター・絵ハガキ等の映像資料を購入し、昨今活性化しつつあるこれらの映像資料を多面的に分析するタイプの研究に資してきた。

本プログラム実行期間のあいだに、京都大学では、平成 18 年度に地域研究統合情報センターが発足し、フィールド映像アーカイブ・センターの構想も進行している。本プログラムの主幹部局である大学院アジア・アフリカ地域研究研究科では、それまでアフリカ地域研究専攻図書室および各研究室で個別に行われていた図書室機能を統一・拡充し、平成 19 年度よりアジア・アフリカ地域研究研究科図書室が発足する。21 世紀 COE プログラムによる地域資料収集・整理・利用の体制は徐々に整いつつあるといえる。だが、収納面での基盤整備が大きく遅れており、現在でも COE による 7 万冊および、本 21 世紀 COE プログラムによる 2 万冊の購入図書の大半は、京都大学附属図書館に一時的に別置保管を依頼している状況である。学内外の利用者の利便を考えると、このような大量の地域研究図書資料を一括して収納可能な規模の図書室機能が是非とも必要であろう。

2-4 広報部会

ホームページの概要

広報部会の仕事として最も力をいれて行ったのがホームページの作成である。そこで、2003 年 4

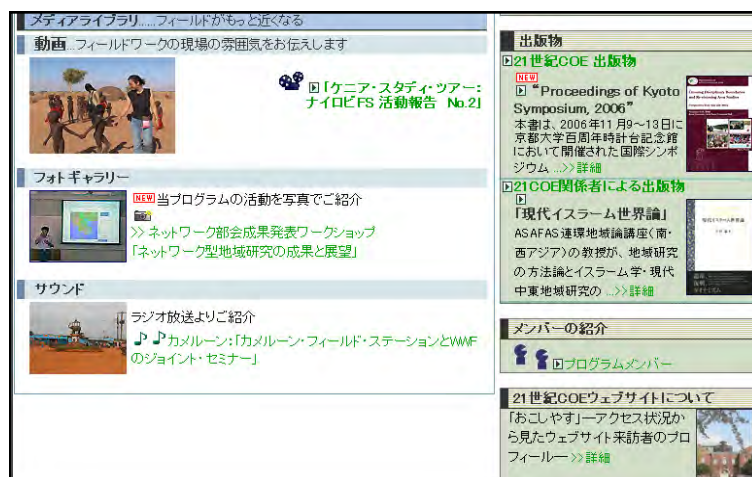
月 21 日に、図IV-13 のようなウェブサイトを開設し、21 世紀 COE プログラムの活動状況や教育研究成果のリアルタイムな発信に努めてきた。このウェブサイトの更新はほとんど毎日のおこなわれており、そのたびに情報量が増加してきた。現在では、このようにフィールドワークの成果報告、ワークショップ・シンポジウム関連の記事（図IV-14、15）、それにフォトギャラリー、ストリーミング画像もたくさん掲載されるようになった。



図IV-13 ホームページ目次



図IV-14 ウェブサイトの情報（1）

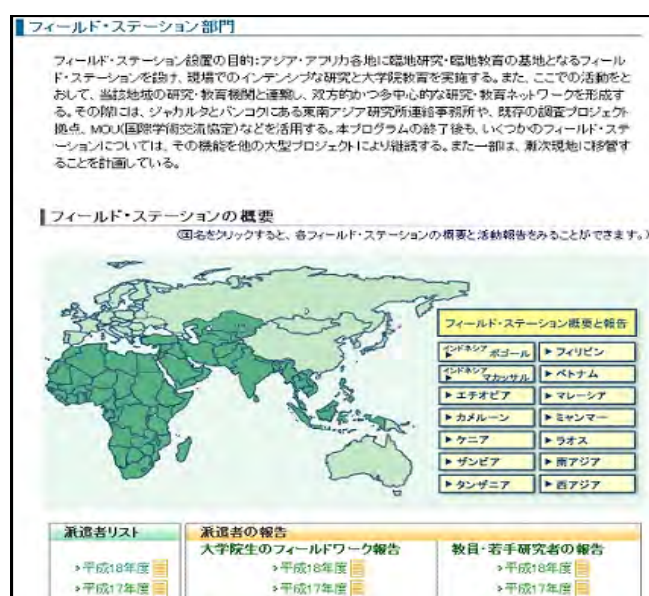


図IV-15 ウェブサイトの情報 (2)

われわれの拠点では、プログラムによる活動状況を伝えるのはニュースレター等の印刷物ではなく、できるだけ電子的な媒体によるという当初の方針にしたがって、HPを用いた情報の発信にはとくに力を注いできた。また、そのようなHPがプログラムの関係者や学内外、国内外の地域研究者にとって情報源としての機能を果たしてきたと思っている。

HP上のフィールドワークのレポートのページ(図IV-16)は、国、派遣者のリスト、年度、派遣者のカテゴリーのどこからでも入れるようになっており、たとえば平成17年度に提出された大学院生のフィールドワーク報告の欄をクリックすると、図IV-16の様な表が出てくるが、そこには、報告者の氏名や報告とその言語(英語、日本語)の区別、博士予備論文(5年一貫制のアジア・アフリカ地域研究研究科における、修士論文相当の論文)の提出年度、そしてフィールドワーク報告の題名が示されている。さらに詳しい情報はHP上の該当箇所を参照されたい。

また、ウェブサイトの国際的な発信機能を充実化させるうえで、もうひとつ努力してきたのは、日本語だけでなく、同じ記事をできるだけ英語でも公開することである。その結果、HPにおけるバイリンガルな状況を少なくとも8割は達成できている。



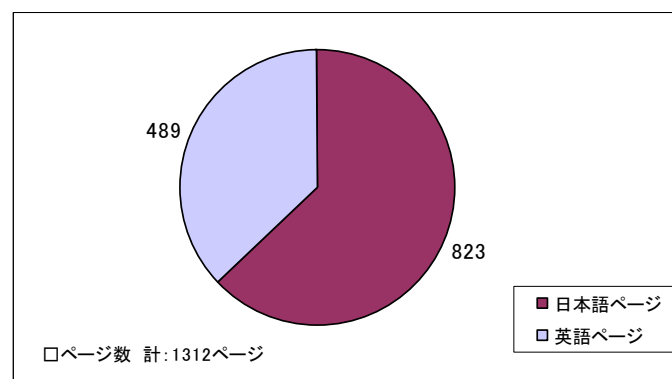
図IV-16 フィールドワークのページ

佐藤靖明 (アフリカ 地域研究専攻) 📅 2006/4 更新 📅 2006/7 更新	平成15年度	東アフリカ大湖地方におけるバナナの 品種多様性に関する人類学的研究	エチオピア、 ウガンダ 
BAHETA, Daniel (アフリカ 地域研究専攻) 📅 2006/2 更新	平成13年度	The Dynamics of Formal Education During Wartime and Its Impact on the Rural People of Eritrea	エリトリア 
服部志帆 (アフリカ 地域研究専攻) 📅 2004/12 更新 📅 2005/3 更新	平成14年度	狩猟採集社会における植物知識の留 得と創造:カメルーン東部州熱帯雨林 バカ・ビグミーの民族植物学	カメルーン 
四方かおり (アフリカ 地域研究専攻) 📅 2005/9 更新 📅 2006/5 更新	平成14年度	カメルーン東南部の熱帯雨林におけ る人間活動と森林生態系との関わり	カメルーン 
安岡宏和 (アフリカ)	平成12年度	アフリカ熱帯雨林の生態史—コンゴ盆 地北西部におけるバカ・ビグミーのヤム (Cassava)の利用—	カメルーン 

図IV-17 フィールドワークの報告

アクセス解析：和文・英文ページの割合とアクセス数

2006 年 11 月末時点でアクセス解析と本サイト内容の分析をおこなった。総ページ数は 2007 年 3 月時点で 1312 ページ、和文 823 ページ・英文 489 ページである。



図IV-18 言語別ページアクセス数の割合

本サイトは前述したとおり英語ページも日本語ページと同じように充実化を図っており、派遣者報告は日本語・英語の両方を掲載するようになっている。なお、現在、日本語ページが約 6 割を占めているが、英文校閲中の報告を掲載することを考えると、本プログラム終了までに英語ページの割合はもう少し増えていくことが予想される。これまでの総ページ数に注目すると 1,000 ページを超えているということからわかるように、本サイトは非常に高い頻度で更新されている。

なかでも特に高い頻度で更新されてきたものは、「派遣者報告」（日本語/英語ページ：249 件）、本部執行会議の報告「執行会議だより」（2003 年 9 月より日本語/英語ページ、会議後掲載）や、開催予定が立つ度に掲載される「研究会情報」（日本語/英語ページ：294 件）、毎月配信の「メールマガジンバックナンバー」である。

本サイトにはその他にも「フィールド・ステーション概要」や「プログラム概要」、「メンバー業績」、

「出版物」、「メディアライブラリ」（ストリーミング動画、音楽、フォトギャラリー）、「コラム」などがある。

HP の変化

広報部会は主に HP 内容を充実するための企画を立案し、また更新作業をおこなってきた。特に 2004 年 11 月には HP 構成の全面的な見直しを行い、2005 年には派遣者のフィールドワークの様子や調査資料の映像を Web 上に配信するため、ストリーミングサーバ環境が整えられた。

アクセス解析比較と分析

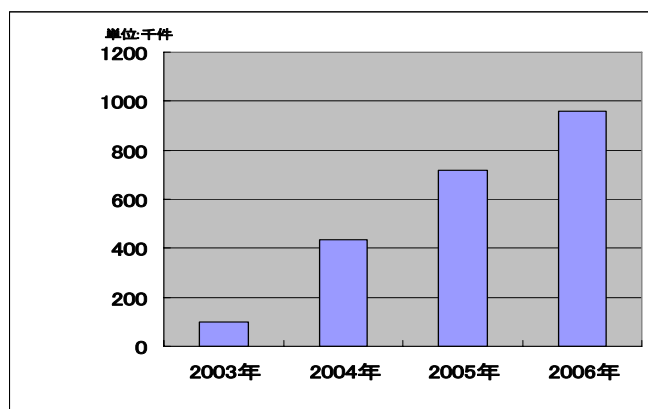
2005 年 4 月に、本プログラム HP 開設から 2 年間分のアクセス解析を行い、HP 上でその内容をまとめた。解析結果については以下を参照。

http://areainfo.asafas.kyoto-u.ac.jp/japan/areainfo/21coeaccess/access_umekawa1.html

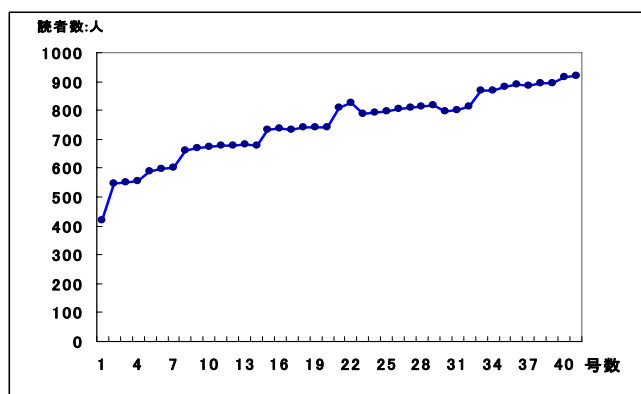
今回、2003 年 4 月から 2006 年 11 月までのアクセス解析を再びおこない、2005 年におこなったアクセス解析の結果と比較した。

閲覧数の推移

本サイトへのアクセス数は、2003 年 4 月では約 100,000 件／年であったものが、2006 年 11 月では約 1,000,000／年件近くなった。これらアクセス数の伸びと同時に、メールマガジンの読者数も号を重ねる度に増加した。



図IV-19 アクセス数による年別レポート



図IV-20 メールマガジン号別読者数の変化

そのほか、メールマガジンの購読者を増やすため、メールマガジン広報活動として、各研究会・学会などにパンフレットを配布し、一定の効果が認められた。

現在 900 人ほどがいるメールマガジン読者は、本サイトへも継続的に興味をもって再訪問をする可能性が高い人々であると考えられる。

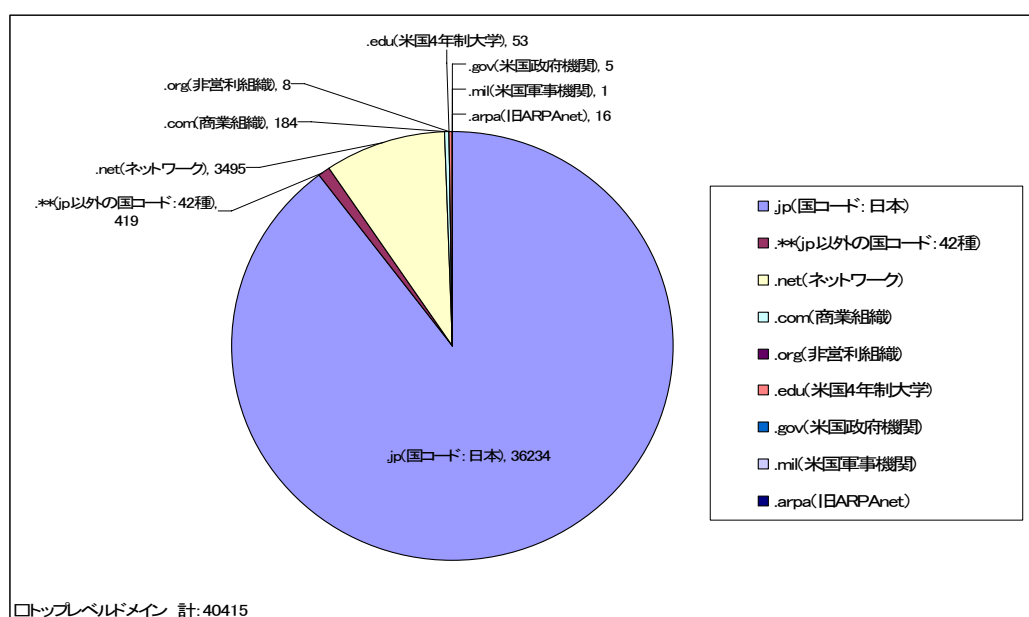


図IV-21 メールマガジン・パンフレット(左：表面 右：裏面)

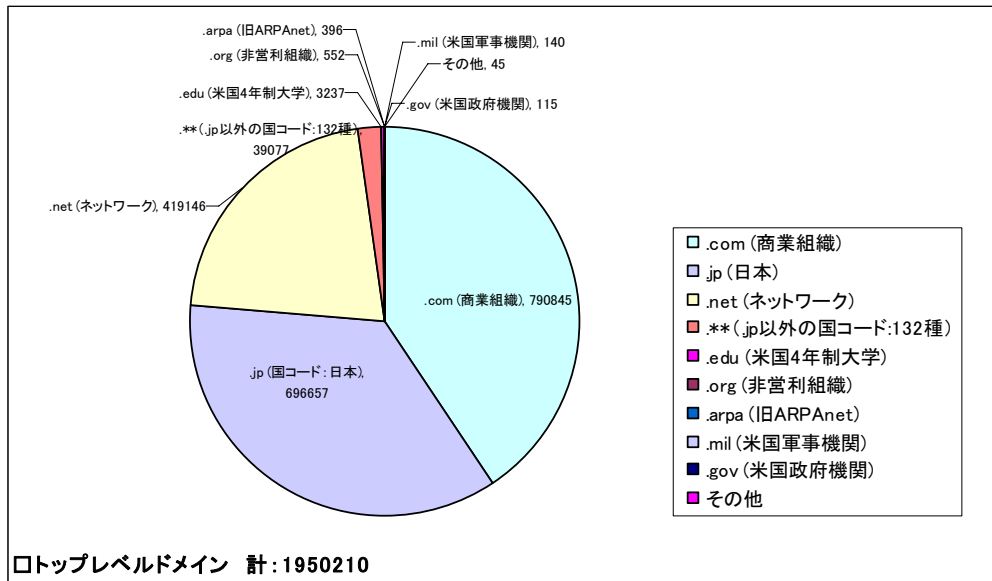
また、アジア・アフリカ地域研究情報マガジン（IAS-INFOM）は、2003年9月の創刊号から毎月ほぼ1号のペースで発行を続けてきた。本メルマガの役割は、本プログラムの教育研究活動の活動、成果とともに、最新の地域研究情報を電子メールによって迅速に広く配信することであり、2007年2月の時点で通算44号を発行し、発行部数（購読申し込み）は923であった。

ドメイン別のアクセス

アクセス数のトップレベルおよび第2レベルドメイン別集計を行い、国や機関・組織などの種類別に示したアクセス数を出し、平成16年度末に行ったものと比較した。



図IV-22 (平成16年度末 トップレベルドメイン解析: 2003年4月～2005年1月末)



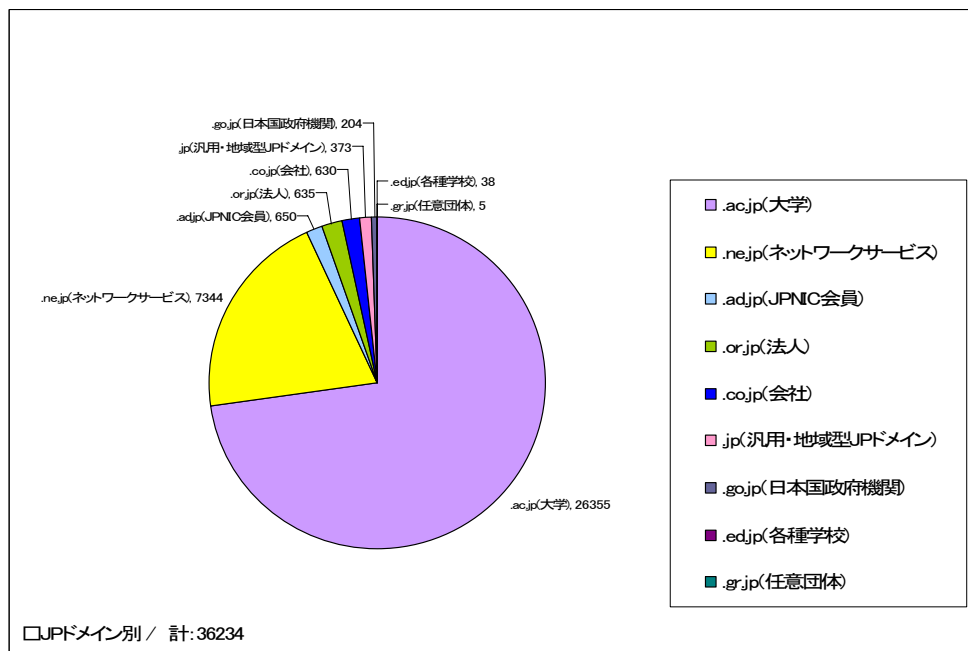
図IV-23 平成18年度 トップレベルドメイン解析: 2003年4月～2006年11月末

トップレベルドメインからの分析

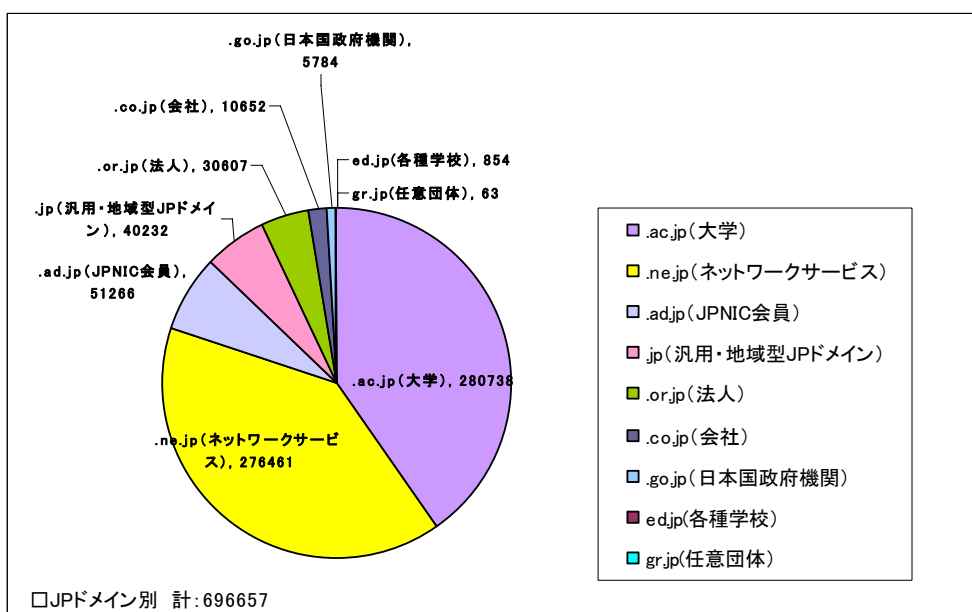
トップレベルドメインから本サイトに訪れた組織・機関を示した。図22と図23を比較すると、.com（商業組織）からのアクセスが増加していることがわかる。これらは、海外からのインターネット検索エンジン（Google, Yahoo!など）からのアクセスが多くを占めており、海外からのアクセス数が大幅に増大したことになる。

第2レベルドメインからの分析～日本国内の組織・機関別にみた分析～

図24と図25は日本国内におけるドメインにおける、サイト訪問者の組織別を示している。



図IV-24 (平成16年度末 第2レベルドメイン解析: 2003年4月～2005年1月末)

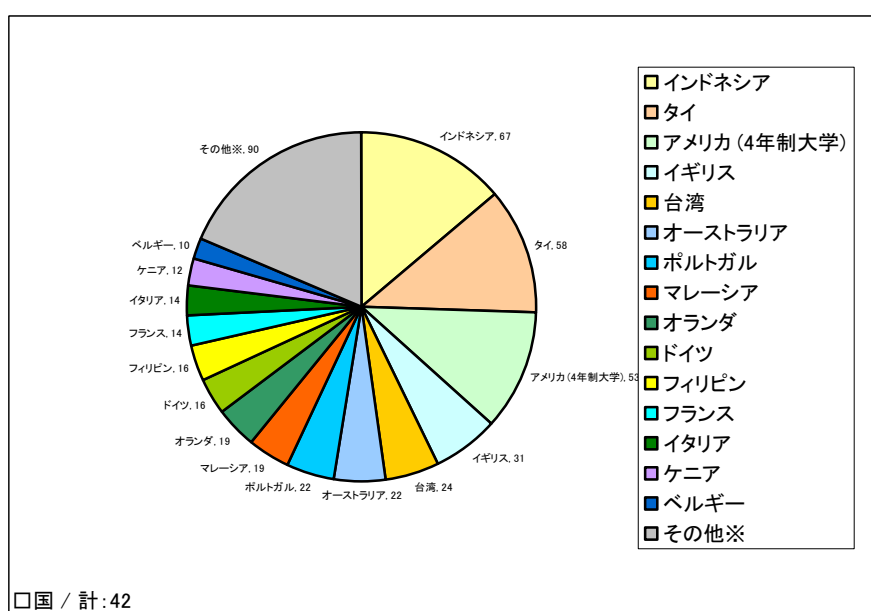


図IV-25 平成16年度末 第2レベルドメイン解析：2003年4月～2006年11月末

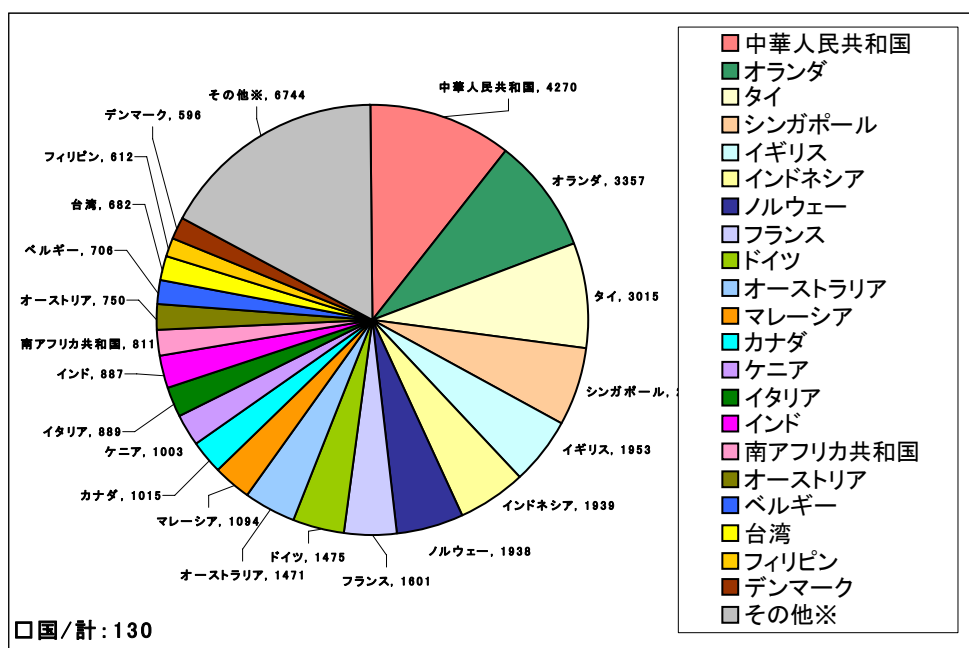
図24・図25ともに、大学などの研究機関（ac.jp）からのアクセスが、多数を占めているが、図6によると、大学機関内で閲覧する以外に、個人的なネットワークサービスを利用して閲覧しているユーザーの割合が上昇していることがわかる。すなわち、大学内で閲覧するユーザーよりも、個人的な環境で閲覧するユーザーが大幅に増加したことが推定される。

国別比較

図26では、国の種類が42カ国であったのが、図27では、130カ国と3倍に増えている。これらは、先にも述べたとおり、国際的に広く関心をもたれている表れだと考えられる。



図IV-26 海外からのアクセス（平成16年度末トップレベルドメイン解析：2003年4月～2005年1月末）



図IV-27 海外からのアクセス(平成16年度末 第2レベルドメイン解析: 2003年4月～2006年11月末)

※その他

ベトナム、ロシア連邦、スウェーデン、スイス、ポーランド、ジンバブウェ、アメリカ合衆国、アラブ首長国連邦、イスラエル、ブラジル、ニュージーランド、カンボジア、トルコ、フィンランド、パキスタン、ハンガリー、スペイン、メキシコ、チェコ、ルーマニア、エストニア、ネパール、ミャンマー、香港、マダガスカル、モロッコ、ギリシャ、アルゼンチン、エジプト、サウジアラビア、ポルトガル、ブータン、ペルー、アイルランド、タンザニア、コロンビア、スロバキア、ボツワナ、ザンビア、ウガンダ、大韓民国、クロアチア、コスタリカ、フィジー、シリア、ツバル、ガーナ、コートジボワール、チリ、スリランカ、リトアニア、ナミビア、エリトリア、トンガ、ブルガリア、ウクライナ、ルクセンブルク、アイスランド、グアテマラ、ドミニカ共和国、旧ソビエト連邦、キプロス、ユーゴスラビア、モーリシャス、ラトビア、レバノン、ニューカレドニア、ボスニア・ヘルツェゴビナ、トリニダード・トバゴ、ウルグアイ、ルワンダ、ニジェール、マルタ、スロベニア、ヨルダン、サントメ・プリンシペ、パプアニューギニア、ソロモン諸島、モザンビーク、ケイマン諸島、コンゴ民主共和国、ニウエ、パラグアイ、ブルネイ、カタール、ベネズエラ、オマーン、ベラルーシ、エクアドル、エチオピア、西サモア、ガイアナ、トルクメニスタン、ブルキナファソ、イラン、キルギスタン、ホンジュラス、ミクロネシア、カザフスタン、アセンション島、ココス、キューバ、モルディブ、ニカラグア、グリーンランド、グルジア、ジブチ、ベナン

キーワード検索

2006年6月より、本サイトへどのようなキーワードで訪れているかといった解析を行った。「フィールドワーク」や「21COE」「ワークショップ」「教員や若手研究者個人名」が多くを占め、また、「出版物名」「フィールド・ステーション名」といったキーワードで訪れる割合が高く示された。これらキーワード検索による解析資料は、今後、サイト構築をする上で重要な資料となるであろう。

その他：外部サイトからの評価～Google ツールバー「Page Rank」評価を見る～

本サイトを Google による「Page Rank」システムで確認した。割合は6/10を示していた。評価基準は、5以上だと高い評価を得ているとされている。すなわち、本サイトは他のサイトからも注目され、リンクがたくさん張られていることがわかる。



図IV-28

※ PageRank™ は、Web の膨大なリンク構造を用いて、その特性を生かす。ページAからページBへのリンクをページA によるページB への支持投票とみなし、Google はこの投票数によりそのページの重要性を判断する。しかし Google は単に票数、つまりリンク数を見るだけではなく、票を投じたページについても分析する。「重要度」の高いページによって投じられた票はより高く評価されて、それを受け取ったページを「重要なもの」にしていく。

3. 統一研究テーマ「地球・地域・人間の共生」にそった教育・研究の推進

本プログラムには、大学院生によるフィールドワークの支援、「現場」における臨地教育・研究の融合、「現場」における臨地教育・研究の一体的推進、多元的研究資料の統合化と情報化といったさまざまな活動が含まれている。しかし、現実には21世紀COEプログラムの予算は限られており、アジア・アフリカ地域研究研究科と東南アジア研究所のスタッフのマンパワーにも限界がある。そこで、重点的に取り上げる統一研究テーマが設定され、それに沿って研究と教育を展開させることになった。

「地球・地域・人間の共生」を統一研究テーマとするにあたっては、3つの点に配慮した。ひとつは、われわれの掲げる「総合的地域研究」の立場である。これは、アジア・アフリカ地域の生態・歴史・社会の動的な相互関係性を「文理融合」をキーワードに統合的、統合的に把握し、現代の地域社会に発生している諸問題に知的かつ実践的にかかわろうとする地域研究である。2つ目は、アジア・アフリカ地域研究研究科ならびに東南アジア研究所によるこれまでの研究の特色であり、そこでは、生態や環境に関する研究が重要な柱になってきた。そして、3つ目が、近年、京都大学が定めた大学の基本理念「地球社会の調和ある共存」である。

これらの3つの事柄に配慮し、最終的に選択された統一研究テーマが、「地球・地域・人間の共生」である。そして、このテーマに関係しながら、より絞り込まれた問題群として、人間生態問題群、政治経済問題群、社会文化問題群、さらに文理融合的なアプローチや方法論について考える地域研究論問題群の4つが設定された。私たちの21世紀COEプログラムによって実施、支援される活動は、こうした統一研究テーマや問題群の枠内のものであり、このなかでの知識の蓄積と情報発信が集中的におこなわれてきた。

4つの問題群とそれらを総合する統一研究テーマにそった研究活動の推進は、総計250回以上の研究会、ワークショップ、シンポジウムなどを通じて行われた。図IV-29は、ウェブサイトの過去の研究会一覧のページであるが、そこには、どのようなセミナーやワークショップがおこなわれたかを示す要旨が、おおくの場合、日本語と英語の両方で記録されている。



図IV-29

これらの研究活動を概観するならば、まず人間生態問題群では、およそ 50 回の研究会が開催され、環境保全、土壌と地質、土地利用、気候変動、在来生業・技術の再評価、在来農業の多様性、文化地理と人間地生態史、小規模生業や自然資源管理、森林の生態・管理・修復、公衆衛生、自立型農村開発、山地の環境と社会などをめぐって研究が進められた。

政治経済問題群では、およそ 70 回の研究会を通じて、経済発展、農村開発、地方分権、民主化、市民社会組織、政治・経済・歴史の地域間比較、国家・社会と精神性、社会政策とグローバル化、地域固有の金融やマイクロファイナンス、紛争と暴力、マスメディアなど、多岐のテーマが研究された。

社会文化問題群では、90 回におよぶ研究会を通じて、移動と民族間関係、宗教紛争、高齢化、都市化、民族分類、地域固有の哲学、言語教育環境、宗教実践、内戦体験、建築と思想、演劇と言説、テクストと伝統、歴史学と人類学の新領域などが、多角的に考究された。

以上を見れば、一見すると「生態環境」「政治経済」「文化社会」という従来からの区分がなされているようでいて、実は、どの問題群でも、文理融合的な、あるいは学際的な形で研究が展開されてきたことが判然とする。さらに、地域研究論問題群では、そのような地域研究の展開について、方法論や文理融合論などを深化させるための営みが、およそ 45 回の研究会を通じて展開された。そこでは、ネットワーク型地域研究、防災教育活動を通じた地域研究活動、ディシプリンの架橋、地域研究アーカイブの構築、公文書解読とフィールド調査、地域情報学の構想と実施、地域研究の視座から見る人間の安全保障、地域間比較の方法、GIS 解析の社会・環境研究への応用など、多様な観点から、新しい地域研究の方法論的な地平を拓くべく、活発な研究活動が展開された。

これらの個別的な実証研究や方法論的な深化を総合して、統一研究テーマ「地球・地域・人間の共生」を展開する場として、国際ワークショップ・シンポジウムがいくつもおこなわれた。とくに、平成 18 年 11 月 9～13 日に開催された国際シンポジウム「総合的地域研究の新地平」では、後述するよ

うにその成果を大きく国際的に発信することに成功した。

プログラムでは、これまでに 18 回のワークショップ・シンポジウムを開催したが、これらの多くはフィールド・ステーションの機能を活用したものである（添付資料参照）。また、これらのセミナーやワークショップ、シンポジウム等に際しては、大学院生を企画段階から、準備、会議の運営に至るまで積極的に参加させる方向で実施してきた。



図IV-30

とくに、平成 15 年 10 月 20～30 日、エチオピア FS のカウンターパートであるアジスアベバ大学社会科学部、同エチオピア研究所との共催でおこなわれたワークショップ「環境と生業をめぐる地域住民のとりくみ」は、その後の企画のモデルになったものとして特筆すべきものである。このワークショップの参加者総数は 80 名、5 つのセッションに分かれて、本研究科の院生 17 名、アジスアベバ大学の院生 6 名の合計 23 名が発表をおこなった。研究報告終了後には、地域間比較を視野に入れたスタディ・ツアーが実際され、それに関するレポートも提出されている。

エチオピアでのワークショップ

研究報告(10月21日～23日)

- ・参加者総数 約 80 名
- ・発表者 23 名:うちアジア・アフリカ地域研究研究科院生 17 名
アジスアベバ大学院 6 名

スタディ・ツアー(10月24日～29日)

- ・南部州南オモ地方:生業と文化
- ・南部州南オモ地方:土器制作と職能者
- ・アムハラ州ゴンダール地方:吟遊詩人の生活と音楽
- ・オロミヤ州アルシ地方:生態環境と生業

図IV-31

エチオピアでのワークショップの後、フィールド・ステーションを活用したワークショップやシンポジウムは、図IV-24 のような国と場所でおこなわれてきたが、エチオピアでのワークショップは、

多くの点で、その後におこなわれたシンポジウムやワークショップの範例になったといえる（図IV-32）。

主要なシンポジウム／ワークショップ		
COUNTRY	PLACE	DATE
ETHIOPIA	University of Addis Ababa	20 OCT. - 30 OCT. 2003
JAPAN	Kyoto University	28 NOV. - 29 NOV. 2003
CAMEROON	Cameroon Field Station	14 DEC. 2003
MYANMAR	SEAMEO-CHAT	16 MAR. - 17 MAR. 2004
INDONESIA	LIPi	23 MAR. 2004
INDONESIA	LIPi	24 MAR. 2004
日 本	京都大学百周年時計台記念館	2004年30 OCT. - 31 OCT. 2004
LAOS	Department of Agriculture and Forestry, Savannakhet Province, Lao PDR	09 FEB. - 10 FEB. 2005
CAMEROON	Cameroon Field Station	16 FEB. 2005
VIETNAM	Synway Hotel, Hanoi	13 NOV. 2005
THAILAND	Swissôtel Nai, lert Park, Bangkok	23 NOV. - 24 NOV. 2005
TANZANIA	Hotel New Africa, Dar es Salaam	12 DEC. - 13 DEC. 2005
日 本	東京外国語大学本郷サテライト	2006年2月18日
ETHIOPIA	Ras Amba Hotel, Addis Ababa	04 FEB. - 05 FEB. 2006
MALAYSIA	Universiti Kebangsaan Malaysia	13 MAR. 2006
日 本	京都大学	2006年9月29日
JAPAN	Kyoto University	09 NOV. - 13 NOV. 2006
日 本	京都大学百周年時計台記念館	2007年2月9日 - 10日

図IV-32

その第一点は、21 世紀 COE プログラムに参加する大学院生たちがワークショップの企画、準備、実施の各段階に積極的に参加したことである。第2に、地域間比較の視点を導入したことである。ワークショップにはアフリカ地域を専攻する院生だけでなく、東南アジア地域を専攻する大学院生の参加をうながした。ともすれば自己のフィールドに埋没しがちな大学院生たちにとって、ワークショップにおける発表や議論だけでなく、自分のフィールドとは異なる地域でおこなわれたスタディ・ツアーは、地域を比較の視点から眺め、自分のフィールドを的確に位置づける上で、またとない機会になったはずである。

21世紀COEプログラムによる研究集会の特徴

- 院生の積極的参加：企画、準備、実施
- 地域間比較の視点を導入：
 - アジアとアフリカの比較を目的としたスタディ・ツアーを実施
- 文理融合的なテーマ設定




図IV-33

第3に、文理融合的なテーマを設定したことがあげられる。「環境と生業をめぐる地域住民のとりくみ」というシンポジウムのテーマ設定そのものが文理融合的であるが、文系理系をとりまぜた発表

内容、セッションの構成、参加者の多様な学問的背景が文理融合的な議論を醸成する仕組みとして効果的に作用していた。同様なことは、その後におこなわれたシンポジウムのタイトルからもうかがい知ることができる（図IV-34）。

シンポジウム、ワークショップにおける 文理融合的なテーマ設定

- Environment, Livelihood and Local Praxis in Asia and Africa
- Interdisciplinary Workshop on the Forest Dynamics of Thailand: Impacts, Ecology, Management and Rehabilitation
- Conservation and Sustainable Utilization of the Rain Forests
- Change of Rural Society and Local Agro-Ecological Knowledge in Myanmar
- The Micrology of Indonesian Local Societies
- Everyday Life and Policing in the Wallacean World
- Local Knowledge and Its Potential Role for Sustainable Agro-Based Development in Lao PDR
- Workshop on the Baka Pygmies and Bakwele Farmers in the Jengi South East Area
- Geo-informatics for Historical Studies in Asia 2005
- Coexistence with Nature in a 'Glocalizing' World-Field Science Perspectives-
- Concepts and Perceptions on African Way of Rural Development Based on Area Studies
- 「土地」から展望する南アフリカ—自然を生き抜く、変化と向き合う
- Positive Relationships between Culture and Development in East Africa
- Indigenous Communities Voices towards Sustainability

図IV-34 シンポジウム、ワークショップにおける文理融合的なテーマ設定

エチオピアでのワークショップがパラダイムとなったことに特徴があるとすれば、2004年10月30～31日に開催された「フィールドワークから紡ぎだす—発見と分析のプロセス」のシンポジウムは、企画立案から実施にいたるまで院生が文字通り、主体となっておこなわれた点に特色があったといえる。このシンポジウムでは京都大学内外の院生や若手研究者17名による発表がおこなわれ、活発な討議がおこなわれたが、2日間でのべ280名の参加者があり、大変盛会であった。参加は圧倒的に大学院生がおおかったが、関西一円の大学だけでなく、北海道から九州まで広範囲の地域から学生が集まった。なかには、旅費を節約するため遠方の都市から夜行バスでやってきた大学院生もおり、フィールドワークを基礎とする学問に対する関心の高さがうかがわれた。

院生ワークショップ

「フィールドワークから紡ぎだす：発見と分析のプロセス」

- 京都大学百周年時計台記念館
- 2004年10月30日～31日
- 発表者：17名
京大内外の院生・若手研究者
- 参加者総数：280名



図IV-35 院生ワークショップ「フィールドワークから紡ぎだす—発見と分析のプロセス」

このシンポジウムが機縁となり、若手研究者と学生が中心になってシンポジウムの成果として編

集・執筆した本が『京大式フィールドワーク入門』として2006年5月に公刊され、なかなかの好評を博している（2006年7月23日、全国大学生協書籍売上集計システム「今週の売れている本」107冊中39位）ことも附言しておきたい（図IV-35）。

プログラムの最終年度である平成18年度には、プログラムの成果公表を進めるためのシンポジウム、ワークショップとして、まず9月の29日（金）「ネットワーク型地域研究の成果と展望」が開催された。これは21世紀COEプログラムのもとでおこなわれてきた研究資料の情報化と統合化に関わる研究成果について、発表と討議をおこなうものであった。そこでは、本プログラムで開発されてきたデータベースやフィールドワークの空間情報管理・発信ツールなどについて成果が報告されると共に、東南アジア研究所バンコク連絡事務所と結んでの遠隔ビデオ会議がおこなわれ、ネットワーク型地域研究についてツールと技術が大きく前進したことが確認された。

さらに、平成18年11月9日～13日に時計台記念館で開催された「総合的地域研究の新地平—アジア・アフリカからディシプリンを架橋する」と題する国際シンポジウムは、4つのパネルと、8つのサテライト・ワークショップ、それに大学院生の研究発表やフィールド・ステーションの活動と成果に関するポスター・セッションから成っており、本プログラムとして、最大規模の研究集会となった。（図IV-36）このシンポジウムには、アジア、アフリカ、ヨーロッパや北米から招かれた著名な研究者や先導的な中堅研究者をはじめ、国内外の若手研究者や大学院生を含む360人が参加した。海外から自費で駆けつけた参加者も少なからずいたことは、きわめて求心性の高い研究集会であったことを示している。プロシーディングには50の論文、56の口頭発表の要旨、上映された11の映像作品の概要が掲載され、各会場では、水準の高い発表と活発な議論が行われた。そこで発表された研究成果の重要性は言うまでもないが、それにも増して、この大型のシンポジウムが大学院生、若手研究者を中心に運営された事実は、本プログラムが次世代研究者を育成する課題に成功したことを雄弁に物語っているであろう。

京都シンポジウム「総合的地域研究の新地平—アジア・アフリカからディシプリンを架橋する」

- プログラムの最終年度のシンポジウム（2006年11月9日～13日、京都大学時計台記念館）
- 構成：4つのメインパネル、8つのサテライト・ワークショップ、ポスターセッション
- 文理融合、地域間比較研究、基礎研究と応用研究の統合、地域情報学にかかわる発表など本プログラムで推進してきたテーマとセッション構成。
- 発表総数117件（約半数が大学院生・若手研究者）
- 参加者総数360名（外国人が17ヶ国、80名以上で、プログラムによる招待者は27名）



図IV-36 国内外から多数の参加者を迎えた京都シンポジウム

V. 総括と展望

1. 大きな教育的成果：博士号取得者の増加

このプログラムでは、フィールド・ステーションの設置とフィールド・ステーションを基盤とする臨地教育・研究を強力に推進してきたが、このことは大学院教育に極めて大きく、良好な効果をもたらしたと思われる。本プログラムが開始されたのは平成14年度（2002年度）であるが、その翌年から博士学位申請論文の提出者が急増し、博士号取得者は9名、11名、15名という具合に増えつづけてきた。プログラムの最終年度にあたる平成18年度から19年度にかけては、これを上回る数の大学院生が学位論文を提出するものと考えている（図V-2）。

総括と展望
成果
・大きな教育的効果：博士号取得者の増加
・国際的な場で活躍できる、先導的な地域研究者の養成
・ウェブサイトからの教育研究成果の迅速な発信と出版による研究成果の公刊
・統合情報センターの設置：グローバルネットワーク
展望
・GP「臨地教育研究による実践的地域研究者の養成」
・ポスト21COEプログラムへの発展的継承

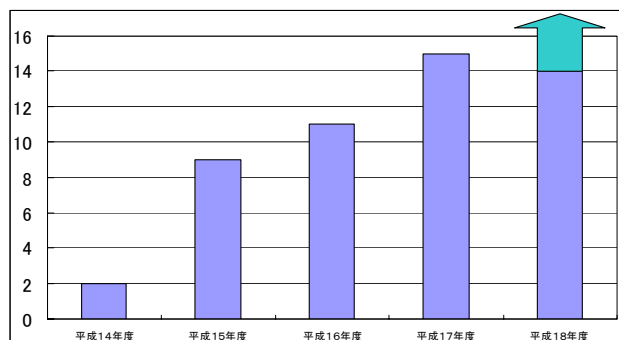
図V-1 総括と展望

2. 国際的な場で活躍する研究者の育成

このプログラムではまた、セミナー、ワークショップ、シンポジウムを数多く開催し、企画段階から大学院生・若手研究者の積極的参加をもとめて、研究成果の発信能力に優れ、国際的な場で活躍できる先導的な地域研究者の養成に努めてきたが、これまでの学位取得者総数51名（平成19年3月現在）のうち、すでに17名（学振の特別研究員などの非常勤研究員を含めると29名）の卒業生が国際機関、国際援助組織、教育研究職等に就職している。また、先に紹介した11月9～13日に開催の「総合的地域研究の新地平」と題する国際シンポジウムは、21世紀COEプログラムの実施期間中に成長してきた若手研究者や院生が中心になって企画、準備、実施する点で、本プログラムを締めくくるにふさわしい企画であったと位置づけている。

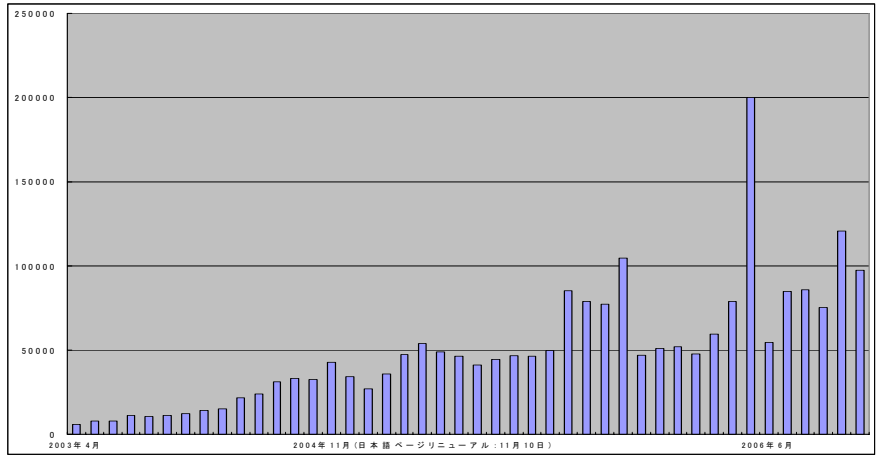
3. 教育研究成果の迅速な発信

本拠点における21世紀COEプログラムでは、ウェブサイトをとおして活動状況や教育研究成果のリアルタイムな発信に努めてきた。そのかいあって、ウェブサイトは内容豊かなものに成長し、現在、



図V-2 博士号取得者の増加

1ヶ月間に約6万回（7月の統計で58,850回）、1日に2,000回ほどアクセスされるようになり、教育研究成果の発信をおもにウェブサイトでおこなってきたことは正解だったと考えている（図V-3）。しかし研究成果の公開は、ウェブサイトだけにとどまるものではなく、図V-4に例示したように、多くの出版活動によっても研究成果の発信に努めてきた。



図V-3 ウェブサイトへのアクセス回数



図V-4 出版物による研究成果の発信

なお、プログラム期間中の教員、若手研究者、大学院生の研究業績については添付資料にあげたとおりである。

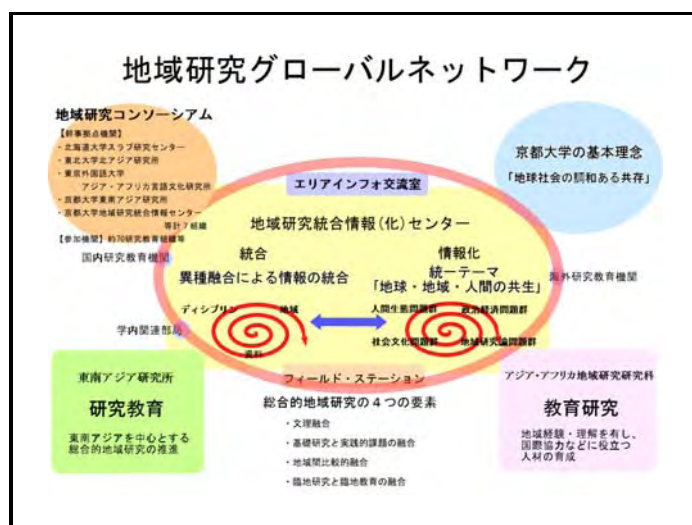
4. 地域研究統合情報センターの設立

組織面での成果としては、設置準備をすすめてきた「地域研究統合情報化センター」の構想が実現し、全国共同利用施設として「京都大学地域研究統合情報センター」が設置されたことは先に記したとおりであるが、このことが地域研究のグローバルなネットワーク化にむけて大きなはずみになることはまちがいないと考える（図V-5）。

5. 計画の展開

本プログラムに関連する企画として、平成18年度の後期から「魅力ある大学院教育イニシアティ

ブ」のプログラムとして採択された「臨地教育研究による実践的地域研究者の養成」がス

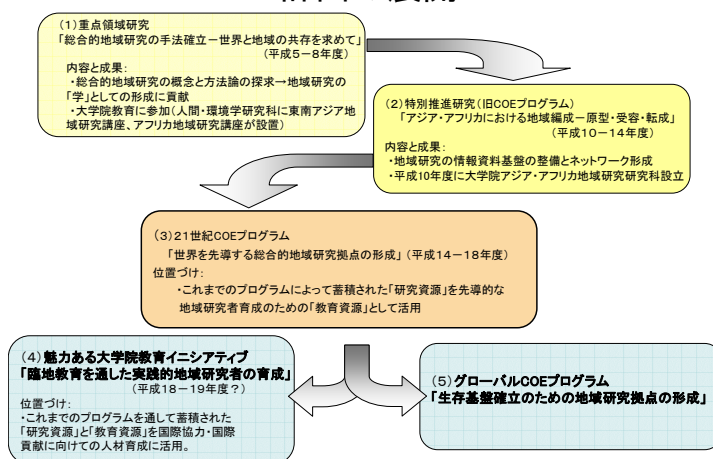


図V-5 地域研究グローバルネットワーク

タートした。このプログラムは、本プログラムで推進した「総合的地域研究」の柱のひとつである「基礎研究と応用研究の結合」をアジア・アフリカのフィールドワークにおいてさらに深く追求するものである。また同時に、これまでの特別推進研究（旧 COE プログラム）や 21 世紀 COE プログラムを通して蓄積してきた「研究資源」および「教育資源」を、実践研究と国際交流・国際貢献の場において活用しようとするものである。さらに現在、東南アジア研究所、大学院アジア・アフリカ地域研究研究科及び生存圏研究所を中心にして、本プログラムをさらに発展させたグローバル COE プログラムの計画を申請中である。

これらの教育研究プログラムにおいても、京都大学の基本理念「地球社会の調和ある共存」の堅持、文理融合的アプローチにもとづく総合的地域研究の推進、国際的な場で活躍できる先導的な地域研究者の養成、地域研究に関わるグローバルネットワークの構築といった、我が国の研究教育政策のなかで強調され、また、このプログラムにおいて推進してきた路線が発展的に継承されるはずである。とくに、本プログラムが推進してきたフィールド・ステーションを活用した教育と研究の一体的展開、地域研究にかかわる情報の統合化とネットワーク化、そして統一テーマ「地球・地域・人間の共生」に向けた総合的地域研究がさらに展開していくことが期待される。

計画の展開



VI. 外部評価の結果

平成 18 年後期にプログラムの外部評価をおこなった。この評価を依頼するに際して、今回まとめた最終報告書の構成にほぼ準じた形で、プログラムの趣旨と目的、計画実施当初から平成 18 年度前期に至るまでのプログラムによる教育・研究活動の内容、それらの活動の教育・研究面での成果、プログラムの展望等からなる「外部評価資料」を作成した。外部評価ではこれらの項目のそれぞれについて、記述式で評価をもとめた。それらの評価結果については、巻末の添付資料を参照されたい。

プログラムの当事者としてこの場での詳しい論評は控えたいが、評価委員からはプログラムの意図、活動及び成果についていずれもおおむね評価していただいたと思っている。とくに、本プログラムで精力的にすすめてきたフィールド・ステーションを活用した臨地教育・研究体制の推進については、現地研究機関との密接な連携のもとですすめられるこうした活動が「ポスト・コロニアル批判に応えるもの」(英国サセックス大学 James Fairhead 教授)、あるいはフィールドワークを通して得られる「臨地的な「知」が人文・社会科学全体の新たな展開に寄与する」(内堀基光放送大学教授)といった、きわめて肯定的な評価を得ており、私たちのプログラムですすめてきた方向がまちがっていなかったことを再認識した。

なお、外部評価委員は下記の方々をお願いした。それぞれにご多忙の折、貴重な時間を割いて評価にあたっていただいたことを感謝したい。

国内委員

秋道智彌 (総合地球環境学研究所教授)

内堀基光 (放送大学教授)

児玉谷史朗 (一橋大学大学院社会学研究科教授)

和崎春日 (名古屋大学大学院文学研究科教授)

海外委員

Dr. Taufik Abudullah, Fomer Director of LIPI, Indonesia

Dr. Cécile Barraud, Directeur de Recherche, CNRS, France

Professor Endashwaw Bekele, Professor, Faculty of Science, University of Addis Ababa

Professor James Fairhead, Professor, Department of Anthropology, University of Sussex

Professor Richard B. Lee, University Professor (Emeritus), University of Toronto

添 付 資 料

1. フィールド・ステーション（FS）の活動状況

【インドネシア（ボゴール）】

- ・代表者：小林繁男
- ・分担者：杉島敏志、五十嵐忠孝、水野広祐
- ・研究テーマ：インドネシアにおける開発、資源、地域社会
- ・研究内容：スハルト政権下の国家政策とそれがもたらした様々な問題を視野にいれ、現在のインドネシア地域社会における開発、援助、資源の分配と管理、地方自治、アイデンティティ・ポリティクス等が交錯する状況について調査研究をおこなう。



- ・キーワード：開発、資源分配、資源管理、地方自治、アイデンティティ・ポリティクス、NGO
- ・カウンターパート：ボゴール農科大学
- ・派遣者数：

	平成 14 年度			平成 15 年度			平成 16 年度			平成 17 年度			平成 18 年度		
	教員	若手	学生	教員	若手	学生	教員	若手	学生	教員	若手	学生	教員	若手	学生
21COE	1			1		4	1		2			3			2
21COE 以外				2			5		2	1			2		5

（下段は 21COE プログラム以外の経費による派遣者数）

【年次報告】

平成 15 年度

（1）フィールド・ステーションの整備

◆ボゴール・フィールド・ステーション（BFS）は、2003 年 3 月にインドネシア国立ボゴール農科大学（IPB）と交渉を始め、2004 年 2 月に契約締結を終わり、事務室、会議室、実験室を伴ったオフィスとして開設された。事務機器や実験機器の整備はまだ十分されていない。2004 年度には、研究対象地域のデジタルマップをコンピュータに組み入れた設備を整備し、ASAFAS、CSEAS の学生、教員ばかりでなく、日本の他大学の学生、教員、インドネシアの研究者も利用できる研究、情報交換の場として、より活用を広めていきたいと考えている。

2003 年 3 月：杉島敏志（ASAFAS 教員）が BFS 開設のために、IPB 農学部長を訪問

2003 年 8 月：小林繁男（ASAFAS 教員）が上記契約内容に確認のために、IPB 農学部長を訪問

2003 年 8 月：小林繁男が Center for International Forestry Research (CIFOR) と MOU（学術交流協定）を交換

2004 年 3 月：小林繁男が、IPB 農学部長と BSF の借室契約

2004 年 3 月：杉島敏志と長津一史(ともに ASAFAS 教員)が、インドネシア科学院（LIPI）においてフィールド・ステーション連携国際ワークショップを開催

（2）研究活動と共同研究の推進

◆2003 年度の院生派遣としては、嶋村鉄也（平成 11 年度入学）が「泥炭湿地林の植生調査」（5/7～6/5）、Wahyu Prasetyawan（平成 13 年度入学）が「ナショナルエリートとローカルエリートの政治経済的調査」（8/5～9/24）、真崎恵子（平成 12 年度転入）が「パリスのガムラン音楽と宗教との関わりについての調査」（6/7～3/6）、小泉都（平成 13 年度入学）が「プジュガンにおけるプナン・ブナルイの民族植物学に関する調査」（1/7～3/30）と、4 名を調査に派遣した。その成果の一部は研究業績に示してある。

◆小林繁男は環境省地球環境研究総合推進費のプロジェクトとして、「荒廃熱帯林のランドスケープレベルでのリハビリテーションに関する研究」ではルイリアンで調査を行い、「東南アジア低湿地における温暖化抑制のための土地資源管理オプションと地域社会エンパワーメントに関する研究」ではリアウ州において、森林総研、愛媛大、

農工大、民博などの研究機関、およびインドネシア科学院、国立ボゴール農科大学との共同研究を進めている。

◆杉島敬志と長津一史は、2004年3月23日にジャカルタのインドネシア科学院において、フィールド・ステーション連携国際ワークショップを開催した。ワークショップはBSFとクアラルンプール・フィールド・ステーションの連携活動であり、ASAFAS、CSEASと、インドネシア科学院、ボゴール農科大学、インドネシア国立調査地図作成調整局(BAKOSURTANAL)との共催でおこなわれた。杉島は午前のセッション“The Micrology of Indonesian Local Societies”を、長津は午後のセッション“Everyday Life and Policing in the Wallacean World”を統括した。二つのセッションにおいて、ASAFAS、CSEASの教員7人とASAFASの大学院生1人を含む、17人が研究成果を発表した。ワークショップの趣意書とプログラムは、以下のページを参照していただきたい。

http://areainfo.asafas.kyoto-u.ac.jp/english/efsws/2004_indonesia/e20040323.html (英語)

http://areainfo.asafas.kyoto-u.ac.jp/japan/fsws/2004_Indonesia/20040323.html (日本語)

◆BSF への協力依頼

連携ワークショップのレセプションの際、ボゴール FS のカウンターパートであるボゴール農科大学の Dr. Supiandi Sabiham 教授と、BSF の運営に関する話合いをおこなった。BSF を拠点として臨地調査をおこなう ASAFAS 院生に対して、実験機材や図書館の利用、資料保管などの面での便宜供与を継続してもらうことを確認すると同時に、2005 年度にボゴール農科大学で開催を予定している 21 世紀 COE プログラムの国際ワークショップへの協力を依頼した。

平成 16 年度

(1) FS の整備

◆2004 年月にボゴール農科大学内に契約・開設されたオフィスは 2004 年 12 月に借室契約の 1 年延長が行われた。スペースや施設は十分にあるのだが、事務機器・実験機器等の整備が遅れている。オフィスは、ASAFAS、CSEAS の学生・教員ばかりでなく、日本の他大学の学生・教員にも利用できる場として確保してある。また、MOU を結んでいる CIFOR (国際林業研究センター) は世界の森林に関する資料・情報が収集されているセンターであり、FS とは近い距離にある。このセンターの利用もできるようになっている。植物に関してはボゴールの中心地に LIPI のハーバリウムがあり、ここの共同研究も行われているので、3 機関の相互利用もフィールド調査には便利である。後はこれら 3 機関との連携をはかりながら研究・情報交換の場として、より活用を広めていきたい。

2004 年 12 月：田中耕司 (CSEAS 教員) が IPB 農学部長と BFS 延長契約

2005 年 1 月：小林繁男 (ASAFAS 教員) が LIPI ハーバリウムのシンボルン博士と共同研究の契約

2005 年 1 月：小林繁男が CIFOR を訪問し、カイモビッツ所長に国際シンポジウム (日本熱帯生態学会主催) 出席を要請

2005 年 3 月：杉島敬志が IPB 農学部長を訪問

(2) 研究活動と共同研究の推進

◆2004 年度の 21COE プログラムによる院生の派遣は 2 名であった。Retno Kusmaningtyas (平成 14 年度入学) は “Management of National Park Integrated with Surrounding Social System; Study in Tesso Nilo, Riau Province, Sumatra, Indonesia.” という研究課題で、2004 年 8 月から 9 月の 2 ヶ月間、Teso Nilo, Riau Province, Sumatra, Indonesia に入り、研究をおこなった。2004 年に設定されたテッソニロ国立公園とその周辺に住む住民との間での自然生態系の保全と社会経済との関係を調査した。伐採会社、人工林、オイルパーム植栽と定住村 (ルブッククバンブンガ村：521 戸、アイールヒタム村：286 戸) との関係では約 60% が木材伐採労働に従事していた。自然生態系の保全との葛藤があると思われた。小泉都 (平成 13 年度入学) は「ボルネオの狩猟採集民族プナンの民族植物学」に関して、2004 年 6 月 15 日～2005 年 1 月 2 日にかけて、インドネシア、東カリマンタン、マリナウ、ロング・ブジュンガン、ロング・ブラカ村において、プナン・ブナルイの植物に関する民俗知識の収集と証拠標本の採集をおこなった。この民俗知識の収集の成果から、プナン・ブナルイの植物分類がこれまで研究されてきた狩猟採集民に比べ詳細であること、また利用植物数も豊富であることを示し、これらの特徴を熱帯雨林で生活する狩猟採集民であるという背景と関連づけて理解する論文を執筆した。

◆片岡美和（平成 15 年度入学）は「鳥類と住民の生業との相互関係：インドネシア、西ジャワの山間地農村における研究」に関して、インドネシア、ジャワ島、西ジャワ州グヌン・ハリムン・サラック国立公園周辺地域の生業活動に特徴を持つ 3 農村で行い、住民の土地利用をもとに農村環境を水田、混栽樹林地、草地・低木林地、畑地、茶農園、森林の 6 つの環境要素に区分した。それぞれの環境要素において 2004 年の 3 月～9 月に鳥類センサスを行い、鳥の種名、個体数および行動を記録した。

◆小林繁男・生方史数（ASAFAS 学振研究員）・嶋村鉄也（京大農学部）・藤本潔（南山大学）は環境省プロジェクト「東南アジア低湿地における温暖化抑制のための土地資源管理オプション」に関して、インドネシア、スマトラ島リアウ州ツルックメランティで、熱帯泥炭林の土地利用転換が泥炭の分解に与える影響を調査した。調査対象地は泥炭湿地林、ゴム園、焼畑、ココナツ林、パイナップル畑とマングローブ林であった。古川久雄（京大名誉教授）・平松幸三（ASAFAS 教員）・竹田晋也（ASAFAS 教員）は環境省プロジェクト「東南アジア低湿地における温暖化抑制のための土地資源管理オプション」で、インドネシア、スマトラ島ジャンビ州に入り、硫酸酸性化した泥炭畑において硫酸洗浄を行うことで中性化する実験をおこなった。

◆杉島敬志・阿部健一（国立民族学博物館教員）は科研費「森林とともに住む人々のヒューマンセキュリティーに関する研究」のため CIFOR を訪問し、資料収集を行うとともに東チモールにおけるコーヒー栽培の現状とその歴史に関する調査をおこなった。

平成 17 年度

（1）研究活動と共同研究の推進

本年度は小泉都（平成 18 年 1/9～2/4）が「ブジュガンにおけるブナン・ブナルイの民族植物学に関する調査」を行い、ヤシ類を中心に植物利用についての確認をおこなった。また、ボゴールでは LIPI のハーバリウムで標本同定を行い、CIFOR では Dr. ドーニアと狩猟採取民の食事状態についての論文執筆の検討をおこなった。片岡美和（平成 17 年 12/14～平成 18 年 4/14）は「インドネシア西ジャワの山間地農村における鳥類と住民の生業との関係」に関する調査で、グヌン・ハリムン・サラック国立公園周辺農村にて鳥類群集の構造、場所の利用形態、住民による鳥類の利用などを観察した。レトノ（平成 17 年 5 月～6 月）はスマトラ島のリアウ州パンカランプスット周辺の農村に滞在して、WWF インドネシアの研究者と森林（生物）保全と生業におけるアダプティブ・コマネージメントについて研究した。また、小林繁男（平成 18 年 1/10～1/19）は環境省地球環境研究総合推進費のプロジェクトとして、「東南アジア低湿地における温暖化抑制のための土地資源管理オプションと地域社会エンパワーメントに関する研究」では、共同研究者の南山大学藤本教授や Dr. Simbolon（LIPI）とともにリアウ州ダエンにある泥炭湿地の中央にある天然林で毎木・泥炭調査をするとともに、ペカンバル、ツンビラハン、レンガット、ツルッククワンタンにかけて泥炭湿地林の概査をおこなった。

平成 18 年度

（1）フィールド・ステーション

◆今年度、FS 運営上昨年度以前との変更は特になかった。MOU を結んでいる CIFOR（国際林業研究センター）は世界の森林に関する資料・情報が収集されているセンターであり、BFS とは近い距離にあるため、このセンターの利用頻度がたかかった。また、植物・動物に関してはボゴールの中心地に LIPI の研究所があり、ここの共同研究も行った。また、ボゴール・グヌンパツーにある林業省の森林研究所も研究上重要である。小林繁男と鈴木玲治は CSEAS のジャカルタ事務所にそれぞれ 1 ヶ月間滞在し、LIPI、CIFOR、IPB と森林研究所との連携を図った。この 21 世紀 COE 終了後にも、IPB、CIFOR、LIPI ならびに森林研究所の 4 機関との連携をはかりながら研究・情報交換の場として、継続的に関係を維持してゆく必要がある。小林繁男は FS の活動に一環として、タイ・バンコクで開催された京大国際シンポジウムで Synthetic approach on the rehabilitation of degraded tropical forest（The 8th Kyoto University International Symposium on Towards Harmonious Coexistence within Human and Ecological Community on this Planet）と題して講演を行った。

(2) 研究活動と共同研究の推進

◆2006年度の院生・研修生の派遣・出張は7名であった。

◆Retno Kusmaningtyas（平成14年度入学）は“Co-management of natural resources in Sumatra, Indonesia.”という研究課題で、2006年10月から12月の1.5ヶ月間、Teso Nilo, Riau Province, Sumatra, Indonesiaに入り、定住村（ルブックパンブンガ村：521戸、アイールヒタム村：286戸）で継続研究をおこなった。また、伐採会社、オイルプランテーション会社、パルプ・チップ生産会社と地域住民との関係を国立公園管理を通して検討した。

◆小泉都（平成13年度入学）は「ボルネオの狩猟採集民族プナンの民族植物学」に関して、2007年1月から2月にかけて、CIFORに研究ベースにおいて、インドネシア、東カリマンタン、マリナウ、ロング・プジュンガン、ロング・ブラカ村において、プナン・プナルイの植物に関する民俗知識の収集と証拠標本の採集を行っている。CIFORでは博士論文の執筆も行っている。

◆片岡美和（平成15年度入学）は「鳥類と住民の生業との相互関係：インドネシア、西ジャワの山間地農村における研究」に関して、インドネシア、ジャワ島、西ジャワ州グヌン・ハリムン・サラック国立公園周辺地域の生業活動に特徴を持つ3農村で行い、住民の土地利用をもとに農村環境を水田、混栽樹林地、草地・低木林地、畑地、茶農園、森林の6つの環境要素に区分し、そこでの継続調査を行った。

◆鈴木遥（平成17年度入学）は「インドネシア・東カリマンタン州における建築材としてのUlin (*Eusideroxylon zwageri*) の利用の特徴」という課題で2006年5月から12月まで東カリマンタンのサマリダ・スブル・ボンタン・サンクランに滞在・調査を行った。その結果、家屋の基礎材と構造材には必ずウリンが用いられ、またさまざまな部分にも利用されていることを明らかにした。

◆シャフィナ（平成18年度研究生）は「The progress of rehabilitation and reconstruction of tsunami destroyed areas in Mangrove Aceh Darussalam Province, Indonesia」という課題でアチェ州に2006年5月から8月までと2007年1月に調査滞在し、津波破壊後の集落の復興と住民の生活回復の実態を調査した。

◆小林繁男・川江心一（平成18年度入学）・岩田剛（平成18年度入学）は環境省プロジェクト「東南アジア低湿地における温暖化抑制のための土地資源管理オプション」に関して、2006年9月にインドネシア、スマトラ島リアウ州ザムルドで、天然泥炭湿地林を調査した。Shorea, Silybum, Calophyllum等が優占していた。小林繁男は続いて、ボゴールで北海道大学・LIPI共催のInternational Symposium on Nature and Land Management of Tropical Peat Land in South East Asiaに出席し、「Ecological functions of peat swamp forest and land resource management for global-warming prevention in Southeast Asian wetlands」と題して基調講演を行った。鈴木玲治は2006年6月に中部ジャワのチーク植林で概査を行った。古川久雄（京大名誉教授）は環境省プロジェクト「東南アジア低湿地における温暖化抑制のための土地資源管理オプション」で、インドネシア、スマトラ島ジャンビ州に入り、硫酸酸性化した荒廃水田の再生を図り、鉄分の肥料が米生産量に強く効果があることを明らかにした。

【インドネシア（マカッサル）】

- ・代表者：岡本正明
- ・担当者：田中耕司
- ・研究テーマ：グローバル経済下における東部インドネシア地域の
会変容と資源管理
- ・研究内容：東部インドネシア地域における地方分権化と、経済の
グローバル化の進行状況を把握し、それにとまう生態
環境、生業、地域社会、自然資源管理システムの変化の
実態を解明する。また、政府、NGO、住民、企業、国際
機関などの動きに関する基礎データを収集する。

- ・キーワード：東部インドネシア、社会変容、資源管理、地域研究、フィールドワーク技術
- ・カウンターパート：ハサヌディン大学



・派遣者数

	平成 14 年度			平成 15 年度			平成 16 年度			平成 17 年度			平成 18 年度		
	教員	若手	学生	教員	若手	学生	教員	若手	学生	教員	若手	学生	教員	若手	学生
21COE			1			1	1		1	1					
21COE 以外				1		2			3			1	2	2	

(下段は 21COE プログラム以外の経費による派遣者数)

【年次報告】

平成 15 年度

(1) 研究活動

◆マカッサル・フィールド・ステーション（以下 MKSFS）は、2003 年 9 月 9 日に、インドネシア国立ハサヌデイン大学（UNHAS）構内に、研究活動の基盤基地となる「MKSFS-UNHAS 共同研究室」を開設した。2004 年 3 月までに、のべ 3 名の ASAFAS 院生が派遣されている。2004（平成 16）年度には 3 名が、博士論文の調査活動のため、MKSFS へ向かった。

2003 年 9 月：田中耕司（CSEAS 教員）、「MKSFS-UNHAS 共同研究室」開設のため、UNHAS 大学院科長を訪問。

2003 年 7-9 月 Andi Amri（ASAFAS）、「ボネ湾汽水帯域生態環境資源利用に関する調査」を実施。

2004 年度への準備：Andi Amri、島上宗子、楠田健太の 3 名（以上、ASAFAS）が、MKSFS での臨地調査実施に向けて、研究計画を準備中（2004 年 3 月現在）。

(2) 「MKSFS-UNHAS 共同研究室」の整備

◆MKSFS では、日本からの大学院生の調査研究活動の拠点となることのほかに、もうひとつ、大きな目的を掲げている。それは日本とインドネシアの研究者が自由に意見を交換し、議論を発展させるための環境を整備し、総合的地域研究の最前線基地となることである。現在の「21 世紀 COE プログラム」の期間が終了してからも、なお、ここで築き上げた国際的な調査研究活動の礎を、さらに発展的かつ持続的な知的空間として共有することを念頭においている。CSEAS や UNHAS の教官たちが磨き上げてきた臨地調査の手法を、調査の現場において大学院生たちに実践的に教育することが、現行の「21 世紀 COE プログラム」において、MKSFS を整備することの意義であると考えている。

◆そのために、2003 年度には臨地調査活動のための基盤整備に加えて、UNHAS と ASAFAS が共同で大学院生の教育活動および共同調査活動おこなうことを支援するための環境を整備した。

◆今年度の研究活動支援の中では、スラウェシ地域研究レファレンス図書（27 点）およびスラウェシ島地形図（834 枚）の整備が特筆される。これらの資料はしばしば、インドネシア国内においても入手困難な文献資料であり、CSEAS 図書室や地図室データベース等にも所蔵されていないものが含まれている。フィールドにおいては調査活動に専念すべきであることは当然としても、小さな疑問を現場で解決できる機会が必要である。日本の大学院生だけでなく、インドネシアの大学院生もが、いつでも自由にこれらの文献資料を利用できる環境を整備することも、MKSFS の役割であると考えている。

◆インドネシアのジャワ島やバリ島では、影絵芝居の伝統文化がある。白い布や壁さえあればどこでも撮影したビデオが再生でき、調査地の人びとの顔を見ながら調査内容のプレゼンテーションができるように、ポータブル・プロジェクターを整備した。臨地調査の手法は、日々、変化を遂げ先導的な地域研究を進める拠点として、地域研究の可能性を開拓することが望ましい。MKSFS は、院生とともに、その可能性を追求しようとしている。

平成 16 年度

(1) 研究活動

◆90 年代後半、インドネシアは大きな変容を迎えた。アジア経済危機の影響を受けてインドネシアの経済は大打撃を受けたからである。そして、32 年間続いた権威主義的なスハルト体制が崩壊してインドネシアは民主化・地

方分権化の時代に入った。外国人による調査も以前と比べれば非常に容易になった。地方においてこの変容の中で何が起きているのか。マカッサル・フィールド・ステーション（以下 MKSFS）は、この問いに答えることを目的の一つとしている。MKSFS は 2003 年 9 月 9 日にインドネシア国立ハサヌディン大学（UNHAS）構内に、「MKSFS-UNHAS 共同研究室」を開設した。2004 年 3 月までに、のべ 3 名の ASAFAS 院生が派遣されている。2004（平成 16）年度には、田中耕司（CSEAS 教員）を研究代表者とする科研プロジェクト「インドネシア地方分権下の自然資源管理と社会経済変容：スラウェシ地域研究に向けて」（基盤研究(A)(2)海外学術調査）が発足し、UNHAS と本格的に共同研究を行う体制が整った。

◆同年 8 月には、ASAFAS 院生 3 名（博士論文用調査 2 名（島上宗子－平成 15 年度第 3 年次編入学、Andi Amri－平成 12 年度入学）、博士予備論文用調査 1 名（高橋聖和－平成 16 年度入学）も加わって、日本側・UNHAS 側合計 19 名で本科研による約 1 週間の予備調査を南スラウェシ州でおこなった。その後、11 月に ASAFAS 院生 1 名（楠田健太－平成 13 年度入学）が博士論文作成のために MKSFS に派遣され、12 月には楠田の指導と UNHAS 側との共同研究の打ち合わせのために CSEAS 教員の田中耕司が MKSFS に派遣された。

◆2005（平成 17）年度には、南スラウェシ州のタナ・トラジャ県とルウ県、そしてスプルモンデ諸島を主な調査対象地区として ASAFAS 院生、UNHAS 側院生を含める形で共同研究を本格的に始める。

（2）「MKSFS-UNHAS 共同研究室」の整備と活動

◆臨地調査活動支援：デスクトップ・パソコン/デジタルハンディカメラ/デジタルカメラ等の整備教育活動および共同調査活動支援：ポータブル・プロジェクター整備／スラウェシ地域研究レファレンス図書室整備/スラウェシ島地形図整備

◆今年度の研究活動支援の中では、スラウェシに関する博士論文その他文献の収集、そしてスラウェシ周辺海域の海図の購入が特筆される。その結果、現在までに 232 冊の図書、386 枚の陸図・海図がそろった。前述したように、これらの資料のなかには、インドネシア国内においても入手困難な文献資料や、CSEAS 図書室や地図室データベース等にも所蔵されていないものが含まれている。

平成 17 年度

（1）研究活動

◆インドネシアでは政治体制が民主化、分権化した結果、人々は自由意見を開陳できるようになり、地方でもこれまでは考えられなかったような動きが政治・経済・社会といった諸側面で起きている。加えて国際的にはグローバル化、自由主義経済の波のなかで、中国が急速に台頭し始め、インドネシアに古くから存在してきた華人ネットワークのさらなる拡大が見られる。こうした変化を東部インドネシアに焦点をあててつぶさに見ていくことをひとつの目的として、東部インドネシアの窓口マカッサルの国立ハサヌディン大学（UNHAS）構内にフィールド・ステーションとして「MKSFS-UNHAS 共同研究室」が開設された。インドネシアのなかでもジャワ島やスマトラ島と比べて経済的に遅れている東部インドネシアは、世界のさまざまな国際機関も支援の手を積極的に伸ばそうとしており、そうした諸機関との連携も現在、考慮に入れている。

◆2004（平成 16）年度に田中耕司（CSEAS 教員当時。現在 CIAS 教員）を研究代表者とする科研プロジェクト「インドネシア地方分権下の自然資源管理と社会経済変容：スラウェシ地域研究に向けて」（基盤研究(A)(2)海外学術調査）が発足し、UNHAS との間で本格的な共同研究が進行している。

◆2006 年度には、ASAFAS 院生 1 名（博士予備論文用調査 1 名（高橋聖和－平成 16 年度入学））が本フィールド・ステーションを利用したほか、12 月には CSEAS 教員の田中耕司がハサヌディン大学側との共同調査打ち合わせのためにマカッサル・フィールド・ステーションに派遣された。

◆南スラウェシ州タナ・トラジャ県とスプルモンデ諸島を中心として、ハサヌディン大学側と共同調査をおこなっているが、その暫定的成果を発表する機会が二度あった。一度目は、8 月 30 日にマカッサル市内のホテルで行い、二度目は主にタナ・トラジャ県調査班による成果報告のために、タナ・トラジャ県のホテルでおこなった。これらの共同調査の成果は、ハサヌディン大学側の学術雑誌 *Ecocolebica* や東南アジア研究所の『東南アジア研究』に掲載される予定である。

(2) MKSFS-UNHAS 共同研究室の整備・発展

◆本共同研究室は ASAFAS 院生のみならず世界の研究者たちも利用できるような東部インドネシア情報空間にすることを大きな目標に掲げている。そのために、東部インドネシア関連の図書、資料、地図の収集に努めている。

◆2006 年 3 月までに 741 冊の図書・資料（洋書、インドネシア語図書、報告書、統計書、条例、雑誌）を集めたほか、425 枚の陸図・海図を収集した。主に南スラウェシに関する資料であるが、これだけの資料が集まっている場所はあまりないといえる。そのため、インドネシア人の研究者、学生も本研究室を利用し始めている。

平成 18 年度

(1) 研究活動

◆1998 年、インドネシアでは 32 年間続いた権威主義体制が崩壊して、民主化、地方分権化が始まった。それから 8 年を経た 2006 年現在、インドネシアはスハルト大統領が辞任したときに人々が抱いた希望どおりの道を歩んでいるといえるだろうか。権威主義体制崩壊前後には吹き荒れた暴動、民族紛争は勢いを弱めたものの、イスラーム過激派によるテロは終焉の気配を見せていない。また、2004 年 12 月にスマトラ北部を襲った津波では 16.8 万人もの死者行方不明者を出し、2006 年 5 月のジャワ地震では 5,000 人以上の死者・負傷者を出し、2007 年 2 月にはジャカルタを大洪水が襲い 34 万人が避難民になるなど、次々と自然災害が次々と起った。そして、そうした自然災害のたびに政府による対応のまずさが指摘されてきた。こうしたことから、インドネシアは「失敗しつつある国家」(failing state)、さらには「失敗国家」(failed state)ではないかという議論さえ出始めている。

◆では、いったい地方レベルでは何が起きているのか。そうした関心をもとに、我々はマカッサルのハサヌディン大学 (UNHAS) 内に設置したフィールド・ステーションを拠点としてスラウェシ島の各地で調査研究を行ってきた。2004 (平成 16) 年度には、田中耕司 (CSEAS 教員) を研究代表者とする科研プロジェクト「インドネシア地方分権下の自然資源管理と社会経済変容—スラウェシ地域研究に向けて」(基盤研究(A)(2)海外学術調査)が発足したことから、UNHAS 教官、院生にも積極的に参画してもらいながら調査をおこなった。とりわけ焦点を当てたのは、スラウェシの山岳地帯にあたるトラジャ地方と海域世界の代表であるスプルモンデ諸島で、その二地域における自然資源管理のあり方がどのように変化しつつあるのか、また、社会経済生活がどのように変化しつつあるのかについて調査を進めてきた。本年度は下記のように幾つかのワークショップを日本とマカッサルでおこなった。また、本年度だけでも論文、口頭発表は下記の (3) に記すように ASAFAS 側からも、そしてまた、UNHAS 側からも次々と出てきた。現在はこうした本年度の成果とそれまでの成果を踏まえ、2007 年現在のスラウェシの姿を浮かび上がらせる作業に入っていく。

◆研究会

1. ワークショップ : Workshop on Sulawesi Area Studies,

日時 : 2006.8.23,

場所 : Losari Metro Hotel, Makassar, Indonesia,

発表者 : ASAFAS・CSEAS からは、Andi Amri、濱元聡子、岡本正明

参加者 : 田中耕司 (京大地域研)、松井和久 (アジア経済研究所)、山田勇 (立命館アジア太平洋大学客員教授)、小野林太郎 (国立民族学博物館) (日本のみ)、インドネシア側も含めると 30 名程度。

2. 「スラウェシ研究会」

日時 : 2006 年 7 月 14 日 (金) 13:30~

場所 : 京都大学東南アジア研究所 東棟 2 階 E207

発表者 : 茂木幹義 (もぎ・もとよし) (元佐賀医科大学教員)

浜元聡子 (京都大学東南アジア研究所)

3. 21 世紀 COE 京都国際シンポジウム「総合的地域研究の新地平」: サテライト・ワークショップ 3 : 「地方分権下の自然資源管理と海域生活世界—インドネシア・スプルモンデ諸島から」

日時 : 2006 年 11 月 9 日

発表者 : 下記のウェブサイト参照

4. 東南アジア研究所内研究会：Agrarian Relations in Upland Sulawesi: The Case of Tana Toraja

日時：2007年1月22日

発表者：Dias Pradadimara（ハサヌディン大学講師）

(2) フィールド・ステーションの整備

◆本共同研究室は ASAFAS 院生のみならず世界の研究者たちも利用できるような東部インドネシア情報空間にすることを大きな目標に掲げている。そのために、東部インドネシア関連の図書、資料、地図の収集に努める。

◆2007年2月までに812冊の図書・資料（英文図書、インドネシア語図書、博士論文、報告書、統計書、条例、雑誌）を集めたほか、425枚の陸図・海図を収集した。主にスラウェシに関する資料が、これだけ集まっている場所はないといえるだろう。

◆立本成文元東南アジア研究所長から濱元聡子氏が譲り受けた、きわめて貴重なロンタラ文字のラ・ガリゴ文書をPDF化することで誰でもアクセスできるように努めている。来年度初めには一部のラ・ガリゴがパソコンでも読めるようになる。

◆FSを活用した共同研究の成果（ハサヌディン大学など）

1.	Pattern of Spatial-temporal of Rainfall Distribution	Muh. Ali Hamzah
2.	Landscape of Sanglla Valley and Its Surroundings	Lantu, Imran Umar, Effendi Umar, D.A. Surimaihardja
3.	Gender dan Konservasi Sumberdaya Alam Di Lembang Turunan, Kecamatan Sangalla, Kabupaten Tana Toraja <i>Gender and Natural Resources Concervation in Turunan Village Sangalla Sub-district, Tana Toraja Regency</i>	Novaty Eny DUNGGA
4.	Peranan Perempuan dalam Pertanian Padi Sawah di Tana Toraja	Selviani Manggasa
5.	Kelembagaan Tradisional dalam Pengelolaan Lingkungan Hidup Orang Toraja	Hamka Naping
6.	Kelembagaan dan Kebijakan Pengelolaan Hutan dalam Otonomi Daerah di Tana Toraja	Hadijah
7.	Tongkonan Home Garden in Tana Toraja	Baharuddin Nurkin
8.	The change in Agricultural Technology and Its Influents Towards Socio Economic Condition: A case Study of Lemvang Turunan, Tana Toraja	Totok Prawitosari
9.	Interconnection between Social and Natural Systems in Farming System: An Ecological Perspective on Paddy System in Lembang Turunan, Tana Toraja	Hazairin Zubair dan P. tandi Balla
10.	Analisis Agroekosistem	Hazairin Zubair
11.	Reaping Wisdom from the Teaching of Aluk Todolo (AT) for Environmental Management	D.A. Suriamihardja
12.	Tradisi Menyimpan Gabah dalam Lumbung: Studi Kasus Lembang Turunan Kecamatan sangalla, Tana Toraja	Aity Nurgani
13.	Pola Pemukiman Tradisional Toraja: Studi Kasus Permukiman Tradisional Kaero	Valentina Syahmusir
14.	Pasar dan Jaringan Perdagangan di Tana Toraja: Perspective Historis dan Geografis	Dias Pradadimara
15.	Kerbau dalam Tradisi Orang Toraja	Stepanus Bo'do'

16.	Property, Inheritance and Authority: A Case Study of Land Resources Management in Sangalla', Tana Toraja	Nurul Ilmi
17.	Desentralisasi & Pengelolaan SD Laut: Implikasi dari Kasus Kepulauan Spermonde	Kazuhisa Matsui
18.	Utilization of Marine Resources in Spermonde Islands	Dewi Yanuarita dan Muh Neil
19.	Kodisi Ekosistem Perairan Kepulauan Spermonde: Keterkaitannya dengan Pemanfaatan Sumberdaya Laut	Jamaluddin Jompa, Willem Mokka dan Dewi Yanuarita
20.	Arahan Pemanfaatan & Pengelolaan Sumberdaya Kelautan dan Perikanan di Kepulauan Spermonde <i>Guideline for Utilization and Management of Marine and Fisheries Resource in Spermonde Archipelago</i>	Andi Amri
21.	Characteristics of Vegetation in Spermonde Islands	Osozawa Katsuya, Wahyudi, Ngakan Putu Oka
22.	Re-promoting Weakening Local Values to Manage Spermonde Marine Resources: An insight from compromise to co-existence	D.A. Surimihardja

【フィリピン】

- ・代表者 : ABINALES, Patricio Nunez
- ・研究テーマ : 地域の文脈における民主化 : 統治、資源管理、政策
- ・研究内容 : フィリピンにおける政府のパフォーマンスおよび市民社会型の大衆政治の広がりが、資源管理、歴史の保存、国内外における人と資源の流れなどに関する社会プログラムに与える影響を明らかにする。
- ・キーワード : 地方政治、国民国家、政府のパフォーマンス、大衆政治、社会プログラム
- ・カウンターパート : フィリピン大学総合開発研究センター
- ・派遣者数



	平成 14 年度			平成 15 年度			平成 16 年度			平成 17 年度			平成 18 年度		
	教員	若手	学生	教員	若手	学生	教員	若手	学生	教員	若手	学生	教員	若手	学生
21COE	1					1						1			
21COE 以外															

(下段は 21COE プログラム以外の経費による派遣者数)

【ベトナム】

- ・代表者 : 岩田明久
- ・研究テーマ : メコンデルタの生態資源利用と社会の変容
- ・研究内容 : 世界的大河川の一つであるメコン河流域には東南アジア 6 カ国、のべ 6500 万人の生活の場である。流程に沿って多様な生態環境と文化・社会を包含する。河口部には巨大なデルタ地帯が広がり、農業や水産業を中心とした第一次産業要衝の地である。この地域における生態資源の利用の変遷をメコン河流域の自然環境とベトナム及び周辺諸国の社会変容という二つの文脈から明らかにし、



臨地教育・研究をととして東南アジア地域研究に寄与する。

- ・キーワード：メコンデルタ、ベトナム、生態資源利用、社会変容、文理融合
- ・カウンターパート：物質科学研究所ニャチャン支所、ニャチャン水産大学、カントー大学、ホーチミン農林大学
- ・派遣者数

	平成 14 年度			平成 15 年度			平成 16 年度			平成 17 年度			平成 18 年度		
	教員	若手	学生	教員	若手	学生	教員	若手	学生	教員	若手	学生	教員	若手	学生
21COE				1					2			1	1		1
21COE 以外						2			2						

(下段は 21COE プログラム以外の経費による派遣者数)

【年次報告】

平成 15 年度

(1) フィールド・ステーションの整備

◆ベトナム南部、ニャチャンにあるベトナム国立物質科学研究所ニャチャン支所では、今回の 21 世紀 COE プログラムが開始される以前から、研究室や作業室を利用することが可能であり、コンピュータや顕微鏡、水中ビデオハウジング等の調査機器も整備されている。また、ハノイ大学マングローブ研究所も日本の研究者が調査を実施する際のカウンターパート機関として機能している。岩田明久（ASAFAS 教員）は、平成 15 年度にはベトナムにおいて新たな FS を開設する可能性をさぐるため、この地域において前者の機関と共同で研究をおこなっている筒井功（ASAFAS 研修員）、後者を窓口調査をおこなっている鈴木伸二（ASAFAS 大学院生、平成 12 年度入学）と綿密な連絡を取り合いながら、その設置場所と規模、その FS に期待される機能等について検討してきた。その結果現在では、各自の調査地域が異なること、各自がすでに異なるカウンターパートと共同研究を開始していることなどの理由により、新たな研究機関に FS を新設するのではなく、現行の状態調査研究を継続することになった。

(2) 学生の現地調査

◆筒井功は、ベトナムの海藻の生態とその利用に関する研究で平成 14 年度に博士号を取得したが、平成 15 年度には、21 世紀 COE プログラム以外の研究助成金を受けて、引き続き同様のテーマでベトナム南部のニャチャンを中心に 10 カ月間の現地調査をおこなった。そして、その結果を平成 15 年度日本藻類学会年会で発表した。また、鈴木伸二も、21 世紀 COE プログラム以外の研究助成金を受けて、ベトナム最南端のカーマウ省において現地住民のエビ養殖と水産物利用およびその変遷をテーマとして、11 カ月間の現地調査を実施した。

(3) 共同研究

◆筒井功は、ベトナム国立物質科学研究所ニャチャン支所と共同で上記の研究を遂行しており、特にその結果の一部を「南ベトナムの海藻類」という図鑑において共同執筆・出版し、えられた知識を現地に還元する予定である。鈴木伸二もまた、ハノイ大学マングローブ研究所と上記の内容で共同研究を実施しており、その結果をまとめて博士号取得を目指すとともに、学術雑誌などに順次、成果を公表してゆく予定である。

平成 16 年度

(1) 研究活動・共同研究の推進

◆平成 15 年度に引き続きベトナム南部、ニャチャンにあるベトナム国立物質科学研究所ニャチャン支所で筒井功（ASAFAS 研修員）がベトナムの海藻・草の生態とその利用に関して、ベトナム中・南部で数ヶ月のフィールドワークを伴う共同研究をおこなった。NGHIEM PHOUNG TUYEN（平成 14 年度第 3 年次編入学）はハノイ国立大学天然資源環境研究所をカウンターパートとして研究をおこなった。高橋麻子（平成 14 年度入学）もハノイ国立大学をカウンターパートとして研究をおこなった。さらに、鈴木伸二（平成 12 年度入学）も昨年度と同様にハノイ大学マングローブ研究所とともに、エビ養殖とマングローブ林とその場所における生態資源、それらの利用・

管理の変容という内容で共同研究を実施している。

平成 17 年度

(1) 研究活動・共同研究の推進

◆HOANG NGUYET THI MINH は National Institute of Science and Technology Strategy and Policy Studies の Nguyen Do Anh Tuan をカウンターパートとし、ハノイ近郊の紅河デルタにあるズオン・リエウ村において研究活動をおこなった。

平成 18 年度

ベトナムの FS は本年度も引き続き施設設置・整備ではなく学生派遣を活動目的の中心とした。

(1) 研究活動・共同研究の推進：

◆今年度は学生の Le Giang Thi Hien さんがベトナム Duong Van Can 県にある Institute for Construction Economics, Ministry of Construction をカウンターパートとし、「ベトナム経済改革における国営企業の労使関係の変化とそれの労働者に対するインパクト—建設産業の事例」という研究テーマで研究活動を遂行した。また、東南アジア研究所の木谷公哉さんが本 COE 最終成果に係るシンポジウム開催にあたり、ベトナム側の関係者と共同で準備を行った。

(2) 学生の派遣：

◆平成 18 年度、学生の Le Giang Thi Hien さんが平成 18 年 8 月から 9 月にかけて、ベトナム Duong Van Can 県にある Institute for Construction Economics, Ministry of Construction をカウンターパートとし、「ベトナム経済改革における国営企業の労使関係の変化とそれの労働者に対するインパクト—建設産業の事例」という研究テーマで、ハノイとその周辺でフィールドワークを行った。

(3) 教員の派遣：

◆平成 18 年度、東南アジア研究所の木谷公哉さんが本 COE 最終成果に係るシンポジウム開催にあたり、平成 18 年 11 月 6 日から 12 日にかけて、ベトナム側の関係者と共同で準備を行うため、ホーチミン市にある Rex ホテルとその関連機関に派遣された。

(4) 成果・業績：

◆上記のように、学生の Le Giang Thi Hien さんがベトナムでフィールドワークを行い、現在博士論文作成に向けて鋭意努力した。また、東南アジア研究所の木谷公哉さんが本 COE 最終成果に係るシンポジウム開催準備のために訪越した。その成果は平成 18 年 11 月 9～13 日にかけて京都大学百周年時計台記念館開催された「Crossing Disciplinary Boundaries and Re-visioning Area Studies」のうち、11 日午後 3 時 30 分から 6 時 30 分にかけて行われたメインパネル 2 「Development of Area Informatics」におけるベトナムホーチミン市 Rex ホテルとのビデオ会議において結実した。詳しくはそれを紹介したホームページを参照されたい。

【マレーシア】

- ・代表者：石川登
- ・研究テーマ：マレーシアにおける日常的実践と国家制度
- ・研究内容：マレーシアにおける国家制度の日常生活の諸領域への関与は、一般にブミプトラ政策（新経済政策）と呼ばれる開発政策にともなって進み、特に 80 年代以降に深化した。日常生活実践とは、人の生死や病の処理、食事や衣服のあり方、言語使用、農業・



水産等の「伝統的」生業、信仰や儀礼のような、従来は個人ないしコミュニティレベルで私的、ルーティン的におこなわれていた行為を指す。こうした日常生活実践は国家制度の介入によりいかに変化したのか、その行為者一民衆は国家制度の介入にどう対処してきたのか。マレーシア FS はこの問いを共通課題として、臨地教育、学術交流ネットワークの構築、電子資料作をおこなう。

なお本 FS はシンガポールも対象地域とする。

- ・キーワード：開発政策、国家の経験、ムラユ、生業形態、イスラーム
- ・カウンターパート：マレーシア国民大学マレー世界・文明研究所（ATMA）
- ・派遣者数

	平成 14 年度			平成 15 年度			平成 16 年度			平成 17 年度			平成 18 年度		
	教員	若手	学生	教員	若手	学生	教員	若手	学生	教員	若手	学生	教員	若手	学生
21COE				2		1	1		1	2					2
21COE 以外				2		2	1		2	1		1	2		

（下段は 21COE プログラム以外の経費による派遣者数）

【年次報告】

平成 15 年度

（1）フィールド・ステーションの整備

◆2003 年 8 月に 21 世紀 COE プログラムによるバンギ・フィールド・ステーション（以下、バンギ FS）をマレーシア国民大学マレー文明・世界研究所（ATMA）の 4 階に設置した。バンギ FS は、マレーシア、シンガポールにおける ASAFAS および CSEAS の学生・教員の臨地調査、臨地教育の拠点として、またマレーシア国民大学と ASAFAS、CSEAS の学術交流の場として使用されている。設備としては、作業机、応接用テーブル、書架、コンピュータ（デスクトップ 1、ノート 1）、プリンタ、スキャナが備えられている。

（2）臨地調査と臨地教育

◆大学院生の調査活動

バンギ FS は ASAFAS 大学院生の調査支援を活動のひとつの柱としており、今年度は 3 名の大学院生がバンギ FS を拠点として臨地調査や文献調査に従事した。うち 1 人は 21 世紀 COE プログラムの助成を受けている。各院生は ATMA や国民大学の他の研究所の教員から、調査許可申請、資料検索および臨地調査に関する指導を受けた。

◆臨地教育

12 月には、長津一史と加藤剛（ともに ASAFAS 教員）がトレンガヌ州とスランゴル州を訪問し、河野元子と加藤優子に対して臨地教育をおこなった。トレンガヌでは河野の調査村や漁業開発公社などにおいて、関係者から小規模漁業と海産物流通に関する説明を受けた。スランゴルでは、複数のマレー農村において公衆医療の現状、出産慣行や助産婦の役割の変化について村人から話を聞いた。これらの観察・聞き取りをふまえて、河野に対しては開発政策や地方行政制度を含むマクロな政治的文脈に位置づけて、調査地の社会経済関係を考察するべきであることを、加藤（優子）に対しては農村部のみならずタマンと呼ばれる新興住宅地に住むマレー人も対象として、比較の視点から出産にかかわる習慣や社会関係の変化を理解するべきであることをアドバイスした。なお木谷公哉（CSEAS 教員）と梅川通久（ASAFAS 教員）は、国民大学コンピュータ・センターのイブラヒム講師から同大学のコンピュータ環境に関する情報提供を受け、バンギ FS のインターネット等の使用環境を整備した。

（3）電子資料の作成

◆バンギ FS では、下記の資料の電子化を進めている。電子資料は、バンギ FS のホームページで徐々に公開し（学内専用）、同時に ATMA のポータルサイト PADAT（Malay World Studies Database）に提供していく。

- ・植民地期北ボルネオ（現サバ州）の政府刊行物 The British North Borneo Herald 1883-1941
- ・スランゴル州における出産医療に関する政府官報 Annual Reports, Department of Health, Selangor
- ・ジャウィ表記のマレー語イスラーム教本 Kitab Perukunan Besar など

これらにくわえ、2004 年度にはマレーシア各州のイスラーム行政法（Administration of Islamic Law Enactment など）も電子化していく予定である。

（4）連携ワークショップ

◆長津は ASAFAS 教員の杉島敬志とともに、ジャカルタのインドネシア科学院（LIPI）においてフィールド・ステーション連携ワークショップを開催した。ワークショップの午後のセッション“Everyday Life and Policing in the Wallacean World”では、長津と河野が研究報告をおこなった。報告のタイトルは以下のとおりである。

- ・ Nagatsu Kazufumi: Dynamics of Cross-border Movements: Interactions between the Sama and Modern States in the West Celebes Sea
- ・ Kawano Motoko: How Did the Inter-ethnic Relations in Ikan Bilis Fishery Change? A Local Socio- economy in an Era of Development in Malaysia

平成 16 年度

（1）概略

◆21 世紀 COE プログラムによるバンギ・フィールド・ステーション（以下、バンギ FS）は、マレーシア国民大学（Universiti Kebangsaan Malaysia: UKM）マレー文明・世界研究（The Institute of the Malay World and Civilization: ATMA）の 4 階に設置されており、マレーシア、シンガポールにおける ASAFAS および CSEAS の学生・教員の臨地調査、臨地教育の拠点として、またマレーシア国民大学と ASAFAS、CSEAS の学术交流の場として使用されている。2004 年度には、コンピュータ、プリンタ、スキャナ等の研究作業用機材にくわえ、研究報告用の機材としてマルチ・メディア・プロジェクタとスクリーンが備えられ、フィールド・ステーションを拠点とする勉強会や研究発表会をおこなうことができるように整備された。

（2）臨地調査と臨地教育

◆大学院生の調査活動

昨年度同様、今年度も 3 人の大学院生がバンギ FS を拠点として臨地調査や文献調査に従事した。うち 1 人は、21 世紀 COE プログラムの助成を受けた。各院生は ATMA や国民大学の他の研究所の教員から調査研究に関する指導を受け、また国民大学の大学院生や若手研究者とそれぞれの研究テーマや臨地調査・資料調査の手法に関する討議をおこなった。他に 1 名の大学院生が 21 世紀 COE プログラムの助成を受け、シンガポールにおいて臨地調査をおこなった。

（3）臨地教育

◆2005 年 1 月には長津がバンギ FS を訪問し、河野元子と加藤（優子）とともに臨地調査のデータ整理に関する勉強会をおこなった。長津はファイル・メーカー、イラストレータなどのソフトウェアを用いた村落社会経済データベースや村落地図の作成方法について説明するとともに、村レベルの開発行政資料の収集法等についてアドバイスした。

◆長津は河野、加藤とともに、加藤の調査地であるスランゴル州ウル・ランガットのミナンカバウ系マレー人の村を訪問し、加藤のホスト・ファミリーから移住の歴史や出産を含む医療実践の変化について話を聞いた。ウル・ランガットでの観察・聞き取りをふまえて、長津、河野、加藤は、村の医療実践の変化と、新経済政策の浸透やイスラーム復興運動の波及、保健医療制度の整備などのマクロな政治経済的文脈との連動性について討議した。3 人はスランゴル州のオランアスリの村も訪問し、医療施設の整備状況について村人から話を聞いた。

◆長津、河野、加藤はまた、ATMA の Shamsul 教授とともに、マレーシアの地方行政制度に関する勉強会をおこなった。勉強会では、Shamsul 教授から地方行政制度の調査法に関する講義を受けた。

◆2 月には、加藤剛がバンギ FS を訪問し、河野と加藤に対して臨地教育をおこなった。河野とはトレンガヌ州における零細漁民の生計維持のあり方について議論し、その変化と持続の歴史過程を村落レベルの相互扶助から、政府機関による漁民への開発補助金制度までの異なるレベルの経済関係をふまえて具体的に迫る必要性を指摘し

た。加藤優子に対しては、調査の初期段階で村および郡レベルの政治有力者の系譜やかれらの経済基盤を把握しておくよう指導した。

(4) 電子資料の作成

◆バンギ FS では、昨年度につづいて下記の資料の電子化を進めた。

- ・植民地期北ボルネオ（現サバ州）の政府刊行物 The British North Borneo Herald 1883-1941
- ・スランゴル州における出産医療に関する政府官報 Annual Reports, Department of Health, Selangor
- ・マレーシア漁業開発公社（全国版）の年次報告書 Annual Reports, Fisheries Development Authority of Malaysia (LKIM)

これらの電子資料は、バンギ FS のホームページ及び ATMA のポータルサイト PADAT (Malay World Studies Database) に提供していく計画である。

(5) 連続ワークショップ

◆バンギ FS では、ASAFAS 大学院生の河野と加藤が中心となって、2005 年の 1 月 20 日、2 月 14 日、3 月 14 日に連続ワークショップ「それぞれのフィールドワーク—マレーシア研究の可能性を再考する」を開催した。このワークショップは、同時期にマレーシアで臨地調査に従事している日本人若手研究者が各自の調査研究の進捗状況を報告するとともに、臨地調査において直面している学問的、技術的な問題点について討議することを目的として行われた。マレーシア国民大学、マラヤ大学、マレーシア国際イスラーム大学等に留学・所属する大学院生や研究者 10～15 人が毎回参加し、マレーシア研究における臨地調査と史資料調査の手法、異なるディシプリン間の共同作業の可能性、マレーシア内の諸地域、あるいはマレーシアと隣接地域との比較研究の展望、従来、他の東南アジア諸地域の研究と比して面白みがないといわれていたマレーシア研究の魅力などについて活発な議論を交わした。ワークショップの趣旨、プログラムについては、下記のサイトを参照されたい。

http://areainfo.asafas.kyoto-u.ac.jp/japan/fsws/2005_malaysia/20050120.html

(6) 2005 年度活動予定

◆今年度で開催した連続ワークショップは、同時期にマレーシアで調査をおこなっている日本人研究者が、ディシプリンの垣根を越えて互いの研究成果を伝え、マレーシア研究の情報を交換する場として有意義のものであった。2005 年度にも同様のワークショップを組織することを検討している。しかし、日本の大学院生や若手研究者の研究成果をマレーシアの研究者に伝え、またかれらの研究に学ぶためには、両者が参加する合同研究会を組織する必要があることはいまでもない。2005 年度には、ATMA や他の研究科の若手教員とともに、そうした研究会ないしワークショップを組織することを予定している。

平成 17 年度

(1) フィールド・ステーションの利用

ASAFAS 大学院生の加藤優子（地域進化論）、内藤大輔（生態環境論）が、研究活動、資料作成のためにフィールド・ステーションを利用した。内藤大輔は 21 世紀 COE プログラムによる派遣である。トレンガヌ州における漁民社の変容について調査をおこなっていた河野元子（地域進化論）は、21 世紀 COE プログラムによる派遣を終了し、2005 年度はじめに帰国した。加藤優子はスランゴル州において、出産慣行と女性の社会的位置づけの変化に関する調査を継続中である。内藤大輔はヌグリ・スンビラン州およびサバ州において政府主導の森林政策の実施と先住民社会の資源利用へのその影響に関する調査をおこなっている。

(2) フィールド・ステーションの整備

2005 年 9 月 3～10 日および 2006 年 3 月 5～6 日に長津がバンギ FS に出張し、バンギ FS のコンピュータ機器や研究発表用の機材の点検整備をおこなった。同時に、マレーシアのセンサス、経済統計の電子資料を収集した。

(3) 臨地教育

◆9月3～10日のあいだ、長津および河野、加藤、内藤は、オランアスリ研究センター(COAC)代表の Colin Nicholas 氏から、マレーシアのオランアスリ社会における開発と宗教の現状について講義を受けた。同時に、パハン州のオランアスリ集落を訪問し、生業の変遷や出産慣行についての聞き取り調査をおこなった。

◆同期間中、長津、河野、加藤、内藤は、内藤の調査地であるスグリ・スンビラン州のオランアスリ集落も訪問し、村落の概況やオランアスリの森林利用について村人から話を聞いた。また長津は、加藤、内藤にたいし村落レベルの社会経済基礎データの収集法に関する指導をおこなった。

◆長津、河野、加藤は、ATMA 所長の Shamsul 教授とともに、マレーシアの宗教法制的展開とその政治的背景について討議をおこなった。

(4) フィールド・ステーション研究会

◆9月7日には、バンギ FS において研究会を開催した。マレーシア留学中の2名の日本人大学院生を話者として招き、マレーシアにおける政党政治の展開と、イスラーム主義運動の展開について報告してもらった。研究会の冒頭では、ATMA 所長の Shamsul 教授から日本人によるマレーシア研究の展開について特別スピーチをしてもらった。マレーシアで短期調査中の日本人研究も多数参加したため、研究会はたいへん盛会であった。

◆3月13日には、マレーシア国民大学の環境・開発研究科 (LESTARI: Institute for Environment and Development) との共催で、国際シンポジウム”Indigenous Communities: Voices towards Sustainability”を実施する。シンポジウムでは、オランアスリ研究の成果報告のほか、オランアスリの詩人による詩の朗読もおこなわれる。京都大学からは、長津がサバの先住民社会におけるイスラームの制度化の社会的意味について、内藤が森林保護制度のマレー半島の先住民オランアスリ社会への影響について報告する。日本からは、他に北海道大学文学研究科の祖田亮次氏が参加し、サラワク先住民の社会変容について報告する。

平成 18 年度

(1) 電子資料作成

◆文書資料 ①植民地北ボルネオの官報の電子資料化を終えた。②1950～1970 年代の北ボルネオ・サバ州の主要新聞 (North Borneo News and Sabah Times) の電子資料化も完成しつつある。③サバ州のイスラーム行政法の電子資料化は整理中である。

◆地図資料 ①マレーシア、フィリピン、インドネシア三カ国それぞれの 2000 年センサスを基に、サマ人の人口分布に関する地図資料を作成した。②現在、この資料を展開させるかたちで、サマ人と他民族集団との隣接居住および植民地期以降のサマ人の人口動態に関する地図資料を作成中である。なお、バンギ FS のホームページの作成は、担当教員の事情により断念した。

(2) フィールド・ステーションの利用

◆ASAFAS 大学院生の加藤優子 (地域進化論)、内藤大輔 (生態環境論) が、研究活動、資料作成のためにフィールド・ステーションを利用した。

◆加藤優子は、2005 年度に続き「マレーシアの新興住宅地に生きる—マレー女性の生活史と開発、ジェンダー」をテーマとして、スランゴール州カジャンのタマン (新興住宅地) におけるマレー人女性の生活史に焦点をおいた臨地調査を実施した。2007 年 1 月に帰国し、現在は同テーマで博士論文を執筆中である。内藤大輔は、昨年の 21 世紀 COE プログラムによる派遣に続き、2007 年 7 月から 12 月まで別資金によりサバ州キナバタガン河上流のオラン・スンガイ集落において「オラン・スンガイの生態知識とその持続的資源利用への適用」に関する臨地調査を実施した。今後は、同テーマについて補足調査を実施したうえで、博士論文を執筆する予定である。なお、河野元子 (地域進化論) は、2004 年度末で 21 世紀 COE プログラムによるトレンガヌ州での調査を終了し、帰国した。現在は、「マレーシアにおける開発政策再考—トレンガヌ周辺社会の視点から」をテーマとして博士論文を執筆中である。

(3) フィールド・ステーションの整備・カウンターパートとの研究打合わせ

◆2006年9月5-11日に研究協力者の長津一史（東洋大学社会学部）がバンギFSを訪問し、ATMA所長のShamsul教授およびマレーシア国民大学人文社会研究科のJunaenah准教授とともに、上記院生によるFSの使用状況を確認するとともに、FSのコンピュータ機器等の点検整備をおこなった。

(4) 臨地教育

◆上記期間中、長津および加藤、内藤は、ATMA所長のShamsul教授とともに、新経済政策期の周縁的ブミプトラ社会を対象とした開発政策とその基盤となる行政・政治システム、および同テーマに関連する公的資料収集の仕方について討議した。

◆また長津と加藤は、ヌグリ・スンビラン州ニライに居住するサバ州出身の都市就労者を対象として、出産慣行の持続と変化に関する聞き取り調査をおこなった。

(5) その他の調査

◆長津は、サバ州を基点とするサマ人の移動・交流圏の歴史的持続と断絶を明らかにすることを目的の一つとし、2006年8月にはインドネシア北スラウェシ州、ゴロンタロ州、東ジャワ州沖合において、12月にはインドネシア南スラウェシ州においてサマ人集落の形成史に関する調査を実施した。また、上記9月5～11日には、ヌグリ・スンビラン州ニライ、スランゴル州カジャン、クラン三地域のサマ人都市就労者を対象として、職業選択のパターンと移動・移住の系譜の相関性に関する予備調査をおこなった。

(6) フィールド・ステーションにおける研究会

◆長津は2007年1月5-6日にもバンギFSを訪問し、加藤優子とともにJunaenah准教授と研究成果交換会の開催に関する打合せをおこなった。この打合せにより、2007年度中にマレーシア国民大学人文社会研究科の若手研究者とASAFAS院生を主な発表者とする研究成果交換会を実施することを決めた。共通テーマは「マレーシア周辺世界における開発の経験と新経済政策の意味」とする予定である。

◆なお、2006年3月にバンギFSとマレーシア国民大学・環境・開発研究所（Institute for Environment and Development）が共催した国際シンポジウム“Indigenous Communities: Voices towards Sustainability”については、加藤優子が簡単な報告書をまとめた（本プログラムのウェブサイト中にあるバンギFSの平成18年度フィールド・ステーション年次報告参照）。

(7) 21世紀COEプログラム国際シンポジウムにおける活動概略の配布

◆21世紀COEプログラム国際シンポジウム「総合的地域研究の新地平：アジア・アフリカからディシプリンを架橋する」（2006年11月9～13日）において、長津と河野はバンギFSに関するポスター報告をおこなった。この際、ポスター掲示にくわえ、バンギFSのこれまでの活動の抽象図を配布した。

【ミャンマー】（FS HP：<http://areainfo.asafas.kyoto-u.ac.jp/ygnfs/>）

- ・代表者：安藤和雄
- ・分担者：藤田幸一、河野泰之、平松幸三、竹田晋也、鈴木玲治
- ・研究テーマ：ミャンマーおよびその周辺地域の多様性と
その変容
- ・研究内容：SEAMEO-CHAT（東南アジア諸国教育省連携機構歴史・文化・伝統地域センター）をコーディネーターに、ヤンゴン大学、歴史研究所、農業灌漑計画局、農業大学、林業大学などの研究者及び大学院生とともに、学際チームをつくり、ヤカイン州、イラワジデ



ルタを主なフィールドにして、生態と環境を基盤にした農村総合基礎調査を共同研究として行う。SMEAMEO-CHAT に共同研究推進の事務所を設置し、若手研究員である COE 研究員が常駐し、総合共同調査の実施、定期的勉強会を開催する。また、本ステーションの研究テーマは、村落社会経済構造、地方行政と村落、地域史、土地利用の変遷、水利用と環境問題、生態資源利用、林業・農業技術の変容などである。英領期の地誌、地方資料、統計などのフィールドワークにおける基本文献を収集・常備し、データ収集と分析を現地でカウンターパートとともに完結していく共同研究の推進を目指す。

- ・キーワード：東南アジア大陸部、農村総合基礎調査、地方資料収集、生態風土、人文社会
- ・カウンターパート：東南アジア諸国教育省連携機構歴史・文化・伝統地域センター、ヤンゴン大学、農業灌漑計画局、農業大学、林業大学、歴史研究所
- ・派遣者数

	平成 14 年度			平成 15 年度			平成 16 年度			平成 17 年度			平成 18 年度		
	教員	若手	学生	教員	若手	学生	教員	若手	学生	教員	若手	学生	教員	若手	学生
21COE	1	1	1	3	1	3	4	1		1	1		2		
21COE 以外				1	1										

(下段は 21COE プログラム以外の経費による派遣者数)

【年次報告】

平成 15 年度

(1) フィールド・ステーションの準備

◆安藤和雄（東南アジア研究所教員）が 2003 年 3 月 2～8 日、大西信弘が 2003 年 2 月 16 日～3 月 13 日にかけてヤンゴンに出張し、SEAMEO-CHAT（東南アジア教育省組織歴史伝統地域センター）の所長、副所長、担当、顧問と 2003 年 4 月から 2004 年 3 月までの FS の整備・運営・活動について、すでに取り交わしている京大東南アジア研究所と SEAMEO-CHAT との MOU（学術交流協定）などを根拠に協議し合意した。

(2) フィールド・ステーションの整備

◆上記合意内容にもとづき、大西信弘が COE 研究員として、4 月 25 日～9 月 25 日の間、FS に駐在し事務所整備をおこなった。SEAMEO-CHAT の 3 階フロアの一角に事務所スペースをもうけ、事務用机、デスクトップ型パソコン、ミーティング用机、来客用ソファなどが設置されている。

◆デスクトップ型パソコンは、SEAMEO-CHAT の LAN を経由してインターネットに接続されている。また、国際電話については SEAMEO-CHAT の内線を経由して問題なく発信がはかれるよう整備されている。

(3) 学生のフィールドワークの支援

◆学振特別研究員である ASAFAS の中西嘉宏が、SEAMEO-CHAT の客員研究員となり、ヤンゴンに設置された FS の機能を常時活用している。大学院生では、21 世紀 COE プログラム資金の支援を受けて鈴木怜治（平成 13 年度 3 年次編入学）が、7 月 20 日～8 月 3 日に、イエジンにある林業大学と ASAFAS が共同で行なっている科学研究費のプロジェクト「ミャンマー北・東部跨境地域における生態資源利用とその変容」（代表：竹田晋也、ASAFAS 教員）と協力して、バゴー山地での焼畑調査に従事している。大西信弘は、この共同研究を支援するために、バゴー山地周辺に林業大学のカウンターパートとともに雨量計・温湿度計を設置した。

◆ヤンゴン FS の大きな特徴の一つとして、FS が成長していくためには、ミャンマー人の研究者・院生が FS を十分に活用し、文理融合型の総合的地域研究に参加できる機会をつくっていくことを目標としている。この考えに基づきヤンゴン大学大学院博士課程の学生支援プログラムを積極的に実施している。共同調査地をイラワジ管区マウービン郡に設置し、現在、ヤンゴン大学地理学科（2 名）、動物学科（3 名）、植物学科（1 名）が文理融合を目指した総合的な学際研究に取り組んでいる。

(4) 共同研究

◆安藤和雄が代表となっている文部科学省科研費「バングラデシュとミャンマーの少数民族における持続的農業と農村開発」と抱きあわせる形で、ヤンゴン大学、大学歴史研究所、SEAMEO-CHAT と共同研究を実施している。このプロジェクトを FS の共同研究の一つとして積極的に位置付け、これまでの活動をおこなってきた。ヤンゴン大学地理学科（1 名）、動物学科（1 名）、植物学科（1 名）、大学歴史研究所（2 名）からなるカウンターパートたちのチームが核となって、FS の共同研究活動「ミャンマー社会の多様性とその変容」を牽引している。

◆上記のほかに、「日用品・農林水産資源のデータベース作成」を共同研究として実施している。この関連で、不定期ではあるが大西信弘が中心となり、FS において研究会を開催している。またミャンマー地域研究の基本資料となるビルマ地誌を、古書店経由で収集している。

◆ヤンゴン FS では、日本人関係者の共同研究支援を大西信弘がおこなっている。2003 年度前半に行われた共同研究の詳細については、この期間に駐在した大西信弘の個別の活動報告を参照していただきたい。

◆大西信弘は 2003 年 11 月 3 日～2004 年 3 月 16 日の間、ヤンゴン FS に駐在した。ラカイン州グア郡、イラワジ管区マウービン郡での共同調査には、カウンターパートやヤンゴン大学博士課程院生とともに中心的な役割を担って参加し、また、2004 年 3 月 16～17 日に開催された 21 世紀 COE プログラム共催のワークショップの準備をおこなったほか、ワークショップにおいても研究発表をした。安藤和雄は 2003 年 12 月 8～24 日に出張し、2004 年 3 月 16～17 日のワークショップのための最終打ち合わせと準備ならびに、ラカイン州での共同調査を行い、マウービン郡にてヤンゴン大学博士課程院生に臨地教育を実施した。安藤和雄はまた、2004 年 3 月 10～18 日の期間に、そして元 ASAFAS 助手で現在愛媛大学農学部助教授である百瀬邦泰は 3 月 15～17 日の期間に、ワークショップの準備と発表のために出張した。ワークショップの内容については、安藤和雄の出張報告を参照していただきたい。このワークショップには、21 世紀 COE プログラム以外の助成を受けて、山口大学農学部助教授の宇佐見晃一、京大東南アジア研究所教授の松林公蔵も発表者として参加している。

◆2004 年 3 月 16～17 日に開催されたワークショップのタイトルは、Change of Rural Society and Local Agro-ecological Knowledge in Myanmar であった。発表者は、ミャンマー人 7 名、日本人 5 名で、参加者は SEMEAO-CHAT スタッフならびにヤンゴン大学教官を中心に、発表者を含んで約 50 名であった。ミャンマーでは「伝統的なもの」を研究対象とする分野は、歴史学、文化人類学などの社会科学が一般的ですが、今回のセミナーでは、農学、生態学などからの文理融合の総合的な地域研究手法が有効であることが参加者の共通認識となった。こうした理解がミャンマー関係者に芽生えたことは意義深く、今後のフィールド・ステーションの活動に弾みをつけてくれると思われる。

◆その他 FS 関連の活動では、竹田晋也が代表となっている文部科学省科研費「ミャンマー北・東部跨境地域における生態資源利用とその変容」のワークショップが、2003 年 3 月 4 日にヤンゴンにて科研費メンバーと林業大学カウンターパートによって共同開催されている。

平成 16 年度

(1) 研究活動

◆イラワジデルタ、マウービン郡の 3 ケ村を共同調査地域にし、ヤンゴン大学の地理学科、動物学科、植物学科の大学院生 7 名（博士課程院生、院生であるが講師などの職にあります）、ヤンゴン大学（上記 3 学科）と大学歴史研究所、SEAMEO-CHAT（東南アジア教育省組織歴史伝統地域センター）からのカウンターパート（5 名）、若手研究員の大西信弘（21COE 研究員）、東南アジア研究所の安藤和雄（ASAFAS 教員）が中心となって参加している共同研究が実施されている。本年度のテーマは、(1) 土地改良とそれに伴う飲料水問題、(2) 水田漁労/魚類生態、(3) 屋敷地林の利用である。また、ラカイン州のベンガル湾沿いに位置するグワ郡の農業や漁業を生業としている 2～3 ケ村落でも農業、漁業、地域発展などに関する調査が大西信弘とカウンターパートによって昨年同様、共同調査が継続している。

(2) 共同研究の推進

◆若手研究員の大西信弘がパイプ役となり、東南アジア研究所との二つの共同研究、京都大学霊長類研究所の一

つの共同研究の準備と実施を支援した。日本の文部科学省留学生への留学生2名の日本での受け入れ先の調整支援をおこなった。また、ヤンゴン大学植物学科の博士学位審査の特別委員（愛媛大学 百瀬助教授）の招聘のための調整と手続きならびに、東京大学人文社会系研究科の桜井教授のゼミが実施しているアジア農村研究会のミャンマーにおけるスタディツアーの準備を支援した。

（3）フィールド・ステーションの整備

◆事務所、通信機器などの整備はすでに完了しているので、2004年度以降についてはとくべつに整備を行っていない。ただし、研究関連で、ヤンゴン大学大学院生がマウンービン郡で環境汚染の度合いを水質検査により定点観測していることから、試薬類の整備をおこなった。

平成 17 年度

（1）研究活動：

◆これまで、21世紀COEプログラムで展開してきた共同研究ネットワークを、今後も継続するため、ミャンマーのエコツーリズムサイトの歴史と運用に関する研究を、科研のサポートを得ながら新たに始めました。ミャンマーのエコツーリズムは現在残されている多くの自然資源の活用方法として、農村開発という視点から見ても大きなポテンシャルを持っています。ミャンマーのエコツーリズムサイトの特徴として、パゴダと生物多様性保全エリアが一体となっているという傾向があります。ナショナルパークの設置基準としては、歴史的なパゴダ、寺院の存在が大きな要素になっていると言われています。神社仏閣の周辺で、殺生をしないというのは、多くの日本人にとっても容易に理解できることではないでしょうか。実際、世界遺産に指定されている下鴨神社・糺ノ森などは、豊かな生物多様性を維持しつつ、宗教施設として機能しており、多くの社叢林研究では、宗教行為のもたらす自然について議論されています。ミャンマーにおける宗教的な区域での殺生については、バガン朝時代にすでに、当時の Royal Order として殺生が禁じられています。こうした生物資源の分布(自然科学的アプローチ)、歴史的背景、宗教的背景(歴史学的アプローチ)を踏まえた上で、エコツーリズムサイトの地元経済への貢献(人文地理学的アプローチ)や、こうした状況から自分の生活場所に対する意識のありかたがどのように変遷しているのかについて、調査を展開する予定です。

◆また、囲い込み的自然保護が世界的に拡散しているのは、欧米文化のグローバリゼーションの一環といえそうですが、ミャンマーでは多少、事情が異なるようです。ミャンマーでは、1985年以降にナショナルパークの見直し、設立が始まりましたが、最近に作られた割には、保護区の中に有名なパゴダがあり、パゴダは大きな宗教施設として今なお機能しつつ、保護活動が行われており、人が自由に出入りできる自然保護区がエコツーリズムサイトとなっています。ミャンマーは、英領植民地であった歴史をもちますが、このようなヨーロッパ文化とのつきあいの歴史が、簡単なグローバリゼーションに陥らない要因として考えられるのではないのか、東南アジアの近隣の国のナショナルパークの現状、設立の経緯などとの比較を進めていきたいと考えています。これに関しても、本21世紀COEプログラムで培ってきた共同研究体制を軸に、ポストCOEを見据えた研究展開を拡げていく所存である。

（2）共同研究の推進：

◆ジュニアカウンターパートを中心に、イワラジ管区での調査を継続。調査自体はすでに軌道に乗っているので、その延長線上で、博士論文のまとめにつながるようなデータ収集を継続し、適宜、シニアカウンターパートを含めて、進捗状況の報告会を開くことで、博士論文の指導を続けている。Cho Cho Twin（ヤンゴン大学地理学科）、Thida Myint（ヤンゴン大学植物学科）らが、来年度に博士号申請予定。

【ジュニアカウンターパートの研究テーマ】

「ミャンマーの農村における女性の社会役割の変遷」

Nau Si Blut (SEAMEO-CHAT)

「マウンービンタウンシップの農村のインフラシステムとコミュニケーションシステムの生活への影響」

Win Myat Aung (SEAMEO-CHAT)

「マウービンタウンシップにおける経済構造の変化に伴う農村生活への影響」

Aye Mon Kyi (UHRC)

「ニャウンドン島の土地改良がもたらした農村の社会経済変化」

Cho Cho Twin (Dept. of Geography, Univ. of Yangon)

「マウービンタウンシップの交通インフラと、農村経済発展に対する影響」

Khin Myint Cho (Dept. of Geography, Univ. of Yangon)

「アランジー村、チョンゾー村における、ガーデニングのもたらす経済効果の比較研究」

Thida Myint (Dept. of Botany, Univ. of Yangon)

「マウービンタウンシップにおける水利用方法の比較研究」

Pyone Aye (Dept. of Zoology, Univ. of Yangon)

「キノボリウオの生活史と繁殖生態」

Thein Soe (Dept. of Zoology, Univ. of Yangon)

「マウービンタウンシップにおける水産資源利用」

Yin Yin Win (Dept. of Zoology, Univ. of Yangon)

(3) 学生の派遣：

◆2005年11月26日～30日にミャンマーFSスタディ・ツアーを実施。ASAFASから、院生のVILAYPHONE Anoulumさん、CHAMCHAN Chalernpolさん、安岡宏和さん、東南アジア研究所教員の安藤らが参加。東南アジアの3大遺跡と呼ばれるバガンの遺跡群と、21世紀COEプログラムで共同研究を展開しているイラワジデルタの村を訪れ、ミャンマーの村落の状況をそれぞれが調査している地域と比較検討をするツアーとなった。スタディ・ツアーで訪れた地域の歴史的背景や、地理的特徴については、カウンターパートメンバーから、詳しいレクチャーを受けた。バガン遺跡群については、歴史研究所のMyint Theinさん、イラワジデルタに関しては、ヤンゴン大学地理学科のSaw Pyone Naingさんに同行してもらうことで、参加した学生は現地で実際の遺跡や地形を見ながら地域間比較の視点を深めていた。

(4) 教員の派遣：

◆若手研究員として、大西（ASAFAS）が5～6月、8～9月、11月～1月、2～3月にミャンマーに滞在し、ミャンマーのエコツーリズムサイト研究の立ち上げ、現地での共同研究の推進、特に、ジュニアカウンターパートの指導にあたった。また、安藤和雄は11月にバンコクでの国際シンポの後、上記の3名の院生に対して、イラワジデルタのマウービン郡とパッティン郡、乾燥地帯のバガン遺跡において臨地教育を行った。また、2月にカウンターパートとともに、マウービン郡の調査村とバガン遺跡周辺にて伝統的農法の調査を行った。

平成18年度

(1) フィールド・ステーションの契約終了

◆今年度、上半期をもってFSの賃貸契約を終了。

◆2005年来、ミャンマーの政治状況ならびに、教育大臣の教育機関への抑圧は強まる一方である。今年度は、赤十字も撤退を表明している他、国費で日本に留学しているミャンマーの教育省管轄の機関に所属する大学院生たちは、一時帰国すら許されない。また、国内でも、ヤンゴン大学の教官が、学生指導のために他の大学に出張に出るための許可を得るのも困難な状況にある。

(2) 学生の状況

◆今年度、ASAFASの中西さんが、博士号を取得見込み。共同研究プロジェクトのジュニアカウンターパートの中から、Cho Cho Twinさん（地理学科）、Thida Myintさん（植物学科）がヤンゴン大学で博士を取得した。Cho Cho Twinさんの学位審査に、安藤和雄さん（CSEAS）が外部審査員として学位論文の審査に当たった。ジュニアカウ

ンターパートの Naw Si Blut さん (SEAMEO-CHAT: 東南アジア教育省機関、ヤンゴン) は、昨年度より東京外国語大学に短期留学のため、来日していたが、9月に帰国。留学中は、日本の占領下の歴史についての研究を進めていた。この他に、Yin Yin Win さん (動物学)、Thein Soe さん (動物学)、Pyone Aye さん (動物学)、Khine Myint Cho さん (地理学) が博士論文を準備中。

(3) 共同研究プログラムの進捗状況

◆21COE で進めてきた、イラワジデルタの農村研究については、下記にあるように、総括のワークショップを開催し、原著論文の出版準備中である。

◆2000年度の科研「バングラデシュとミャンマーの少数民族における持続的農業と農村開発 (1999～2003)」(代表者: 安藤和雄)、「ミャンマー北・東部跨境地域における生物資源利用とその変容 (2001～2004)」(代表者: 竹田晋也)、「ミャンマー少数民族地域における生態資源利用と世帯戦略 (2003～2006)」(代表者: 速水洋子) 以来共同研究を組織してきた。現在の政治的状况の中、多少の困難が伴うが、今回の 21COE プログラムで拡大してきた共同研究チームを発展的に継続させていくため、科研「「ヤンゴンーハノイ」トランセクトにおける生態環境の履歴 (2005～2009)」(代表者: 平松幸三)、科研「ブラマプトラ川流域地域における農業生態系と開発—持続的発展の可能性 (2005～2009)」(代表者: 安藤和雄)、科研「環ヒマラヤ地域と日本における農具収集と住民参加型資料館ネットワーク形成 (2006～2008)」(代表者: 安藤和雄) などのプログラムの下、竹田晋也さん (ASAFAS)、鈴木玲治さん (ASAFAS)、速水洋子さん (CSEAS)、安藤和雄さん (CSEAS)、大西信弘 (京都学園大学) らで、SEAMEO-CHAT、ヤンゴン大学、イエジン大学などとの共同研究を継続している。

(4) ワークショップの開催

◆ヤンゴン FS では、Review Meeting on Study on Rural Life and Local Knowledge in Maubin Township, Ayeyarwady Delta. として、2006. 08. 24-25 に、SEAMEO-CHAT 共同研究プロジェクトの総括のワークショップを開催した。現在、発表者の論文を編集して出版を準備中。

“Program of Review Meeting on Study on Rural Life and Local Knowledge in Maubin Township, Ayeyarwaddy Delta.”

Session I: History and social Economy

1. An Integral Approach to the Local History of Study Area

Myint Thein (UHRC)

2. Impact of Infrastructure and Communication Development on Social Life of People in Ma-u-bin Township

Win Myat Aung (SEAMEO-CHAT)

3. Recent Changes in Socio-Economic Situation of Farmer's Life in Ma-u-bin Township

Aye Mon Kyi (UHRC)

4. Socio-Economic Structure of Kyonsoke and Alangyi Village Tracts

Khine Myint Cho (Dept. of Geography, Univ. of Yangon)

Session II: Agricultural and Environmental Studies

5. Environmental Images of Rural People: The Case of Kyonsoke and Alangyi Villages

Saw Pyone Naing (Dept. of Geography, Univ. of Yangon)

6. Agro-based Socio-Economic Conditions of Kazan, Kundaingkalay and Moemakha Villages

Cho Cho Twin (Dept. of Geography, Univ. of Yangon)

7. Comparative Assessments of Different Water Resources in Ma-u-bin

Pyone Aye (Dept. of Zoology, Dawai Univ.)

8. Land Use and Rice Cropping systems in Alangyi Village, Ma-u-bin Township, Ayeyarwaddy Delta

Ando Kazuo (CSEAS, Kyoto Univ.)

9. A Traditional Farmers' Technology in Blackgram in Ma-u-bin Village

Khin Lay Swe (Dept. of Agriculture, Yezin Univ.)

Session III: Ecological Resource

10. Socio-economic Study of Fishery of Two Villages in Ma-u-bin

Yin Yin Win (Dept. of Zoology, Mandalay Univ.)

11. Ecology of Some Freshwater Species and Seasonal Reproduction of *Anabas testudineus* in Ma-u-bin Township

Thein Soe (Dept. of Zoology, Dawei Univ.)

12. Perspective of the Integrated Area Studies to Understand People's Livelihood

Ohnishi Nobuhiro (Dept. of Bio-env. Sci., Kyoto Gakuen Univ.)

13. Study on Useful Plants of Homestead in Kyonsoke and Alangyi Villages, Ma-u-bin T/S in Ayeyarwaddy Division

Thida Myint (Dept. of Botany, Taungoo Univ.)

14. Social Life of Women in Rural Myanmar: A Case Study on Ma-u-bin Township

Naw Si Blut (SEAMEO-CHAT)

【ラオス】

- ・代表者 : 竹田晋也
- ・分担者 : 平松幸三、岩田明久、安藤和雄、河野泰之、増原善之

- ・研究テーマ：ラオスにおける生物資源利用と地域社会

- ・研究内容：ラオスは、東南アジアの中でも豊かな自然の残された数少ない地域であり、地球レベルの生物多様性保全にとってもきわめて重要な地域である。したがって生物資源保全に対して国際的に強い圧力がかけられ、その利用形態は厳しく規制されつつあり、地域住民の生業や生活を大きく変えようとしている。グローバルな視点に立つ政策とローカルな生活システムの軋転が顕在化しつつある。ラオス・フィールド・ステーションでは、大きな変化に直面している生物資源利用と地域社会の関係をフィールド調査に基づいて研究する。

- ・キーワード：ラオス、東南アジア大陸山地、生物資源、地域社会、臨地教育

- ・カウンターパート：ラオス国立大学

- ・派遣者数



	平成 14 年度			平成 15 年度			平成 16 年度			平成 17 年度			平成 18 年度		
	教員	若手	学生	教員	若手	学生	教員	若手	学生	教員	若手	学生	教員	若手	学生
21COE	2	1	1	4		4	3	1	2		1	3	1	1	2
21COE 以外					1	2			2				2	1	3

(下段は 21COE プログラム以外の経費による派遣者数)

【年次報告】

平成 15 年度

(1) フィールド・ステーションの設置

◆ラオス FS では、21 世紀 COE プログラムの申請段階からカウンターパートとの連絡を密に取り、準備をすすめてきた。2002 年 5 月 30 日には、京都大学とラオス国立大学との大学間協定が締結され、それを受けてラオス国立大学林学部、農学部とのうちあわせをおこなった。2002 年 9 月 27 日には林学部と合意に達し、2002 年 12 月 13 日には、21 世紀 COE プログラムのラオス FS として正式に活動を開始した。2002 年度には生方史数が、COE

研究員（若手研究者）として 2002 年 12 月 13 日から 2003 年 3 月 25 日まで現地へ派遣された。2004 年 4 月からは、増原善之が同じく COE 研究員として現地に派遣されている。

◆ラオス国立大学林学部研究棟の 1 階に部屋を借り受けて、連絡事務所を設置した。ここにはコンピュータ 1 セットと作業机、本棚、標本棚を置き、現地に派遣される教員・学生が活用している。

◆ラオス FS は、アジア・アフリカ地域研究研究科のみならず、人間・環境学研究科、文学研究科、農学研究科、霊長類研究所の教員・院生の研究拠点として全学的に活用されはじめている。

（2）大学院生の派遣とオンサイト・エデュケーションの成果

◆具体的には、フィールドへの同行調査、現地セミナー、連絡事務所での日常的な議論や電子メールによる意見交換などを通じて、研究テーマの設定や、研究計画・研究内容に関する議論を深めて、大学院生の研究支援をおこなっている。また、その様子は、適宜、デジタル写真に記録して、CD に保存している。

（3）現地研究機関との共同研究の状況

◆南部サバナケート県の農地・森林における植生調査（小坂、サイサナ）、同県の魚類相と漁労に関する調査（岩田）、北部ルアンナムター県の非木材林産物交易の調査（アヌロム、竹田ら）が進行中である。現時点では、ラオス国立大学林学部・農学部との共同研究が中心だが、今後は同大学の他学部や、農林省・情報文化省等の研究所などと積極的に連携することを考えている。

（4）セミナー、ワークショップなどの実施状況

◆現地セミナーは、2003 年 2 月 17 日、3 月 3 日、3 月 12 日、8 月 5 日の 4 回開催した。第 1 回は、大学院生 2 人（広田・松浦）の研究計画の発表であり、第 2 回は、カウンターパートと竹田・生方・小坂で、今後の FS のあり方に関するブレインストーミングをおこなった。第 3 回は、加藤真教授（京都大学大学院人間・環境学研究科）によるラオス側への特別講義（生態学）、第 4 回は参加者 11 名（増野、秋道、小林、岩田、松浦、虫明、小坂、生方、広田、アヌロム、竹田）による学生ゼミとして開催した。

◆2004 年 3 月 16 日にはラオス国立大学で、Laos Field Station Workshop “Local Natural Resource Use and its Transformation in Lao PDR” をトヨタ財団の研究助成「ラオス Bang Hiang 川流域住民の生業における生態資源利用に関する研究」と共催した。

◆一方、国内では、2003 年 11 月 28-29 日の 2 日間 京都大学芝蘭会館を会場として Interdisciplinary Workshop on the Forest Dynamics of Thailand: Impacts, ecology, Management and Rehabilitation （タイの森林動態に関する異分野間交流のためのワークショップ：インパクト/生態/管理/修復）を共催し、これには 30 人による報告があった。

◆また 2004 年 1 月 25 日には京都大学を会場として、Laos Field Station Workshop "Forest Management and Conservation in Laos" を文部科学省総合地球環境学研究所による研究プロジェクト「アジア・熱帯モンスーン地域における地域生態史モデルの構築」と共催した。

平成 16 年度

（1）フィールド・ステーションの整備

◆ラオス国立大学林学部研究棟の 1 階に部屋を借り受けて、コンピュータ 1 セットと作業机、本棚、標本棚を置き、現地に派遣される教員・学生が活用している。この連絡事務所には 2004 年度から増原善之さんが COE 研究員（若手研究者）として常駐している。フィールド・ステーションの活動にも欠かせないハーバリウム（植物標本室）の整備支援もはじめた（増原報告参照）。

◆2004 年度のラオス FS に関する教員派遣は、安藤和雄（東南アジア研究所：2004 年 11 月 10 日～12 月 21 日、2005 年 2 月 6 日～3 月 3 日）、岩田明久（ASAFAS：2005 年 2 月 6 日～2 月 13 日）、竹田晋也（ASAFAS：2005 年 2 月 6 日～2 月 13 日）の 3 名である。

（2）現地研究機関との共同研究の状況

◆南部サバナケート県の農地・森林における植生調査（小坂、サイサナ）、同県の魚類相と漁労に関する調査（岩田）、同県の在来農法に関する調査（安藤・スラボン）、北部ルアンナムター県の非木材林産物交易の調査（アスロム、竹田）が進行中である。またランサーン王国行政文書群の調査（増原）も始まった。現時点では、ラオス国立大学林学部・農学部との共同研究が中心だが、今後は同大学の他学部や、農林省・情報文化省等の研究所などと積極的に連携することを考えている。

（3）セミナー、ワークショップなどの実施状況

◆2005年2月9-10日にはサワナケートで、「Workshop on Local Knowledge and Its Potential Role for Sustainable Agro-Based Development in Lao PDR」を開催した。地元密着型（使用言語はラオス語）のワークショップで、二日間とも参加者は60名を超え、予想を上回る盛会となった（増原報告参照）。

◆ワークショップには、アフリカ地域研究専攻大学院生の白石壮一郎（平成10年度入学）と黒岩龍悟（平成12年度入学）も参加し、アフリカとラオスの「地域間比較」も議論した。ワークショップの後には、サワナケート県内でスタディツアーを開催した。

平成17年度

（1）フィールド・ステーションの整備：

◆ラオス国立大学林学部研究棟の1階に部屋を借り受けてコンピュータ1セットと作業机、本棚、標本棚を置き、現地に派遣される教員・学生が活用しています。この連絡事務所には2004年度から増原善之(COE研究員)が常駐。
◆2005年度は当プログラムでの教員派遣はありませんでしたが、ラオス・スタディ・ツアーに岩田明久(ASAFAS)、竹田晋也(ASAFAS)の2名が同行するなど、多くの教員が別途資金により現地を訪れた。
◆LFSは、アジア・アフリカ地域研究研究科・東南アジア研究所のみならず、人間・環境学研究科、文学研究科、農学研究科、霊長類研究所などの教員・院生の研究拠点として全学的に活用されている。

（2）大学院生の派遣とオンサイト・エデュケーションの成果：

◆バンコクで開催された京都大学国際シンポジウム“Coexistence with Nature in a ‘Glocalizing’World : Field Science Perspectives”の終了後、ラオス・スタディ・ツアーを開催し、安達真平（平成12年度入学：東南アジア地域研究専攻）、伊藤義将（平成15年度入学：アフリカ地域研究専攻）、風戸真理（日本学術振興会特別研究員・アフリカ地域研究専攻）、近藤史（平成11年度入学：アフリカ地域研究専攻）、内藤大輔（平成15年度入学：東南アジア地域研究専攻）、八塚春名（平成15年度入学：アフリカ地域研究専攻）、飛奈裕美（平成15年度入学：東南アジア地域研究専攻）の7名が参加。
◆学生派遣：2004年度に当プログラムの資金によってLFSに派遣した学生は、吉田香世子（平成13年度入学）、Anoulom Vilayphone（平成15年度入学）、Suphawat Laohachaiboon（平成15年度入学）の3名。
◆これまでに、LFSを活用し、臨地教育支援をおこなった大学院生および研究テーマは、以下のとおり。

小坂康之（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）「サバナケート県における農業・土地利用システムと二次植生の遷移」

黒田洋輔（同上）「ラオスの野生イネの自生地保全に関する研究」

Thatheva Saphangthong（同上）「Land use systems in the Northern Laos」

Anoulom Vilayphone（同上）「Valuation of non-timber forest products and forest management practices of Kham people」

Souksompong Prixar（同上）「Village forest management after land and forest allocation in Laos」

Soulaphone Inthavong（同上）「Study of Agricultural Technology Dissemination and Impacts on Traditional Farming in Laos」

松浦美樹（同上）「ラオス北部における森林資源の希少化への住民の対応」

山本麻紀子（同上）「メコン河流域開発における調整メカニズムの可能性」

吉田香世子（同上）「ルー族研究」

広田勲（京都大学大学院農学研究科）「ラオス北部における焼畑耕作システム」

中辻享（京都大学大学院文学研究科）「ラオス焼畑村における土地利用」

（3）現地研究機関との共同研究の状況：

◆京都大学（ASAFAS・CSEAS）・ラオス国立大学共同研究プロジェクト「在地の知識—過去、現在、未来」を開始し、予備調査（2005年8月31日～9月4日）、第1回現地調査（2005年10月23～30日）、第2回現地調査（2006年2月22日～3月1日）をおこなった。

それと同時に、ランサーン王国行政文書群の調査（増原）、南部サバナケート県の農地・森林における植生調査（小坂、サイサナ）、同県の魚類相と漁労に関する調査（岩田）、同県の在来農法に関する調査（安藤、スラボン）、北部ルアンナムター県の非木材林産物利用の調査（アヌロム、竹田）が進行中。

（4）セミナー、ワークショップなどの実施状況：

◆ラオス FS はカウンターパートであるラオス国立大学林学部および同大学ラオス・日本人材開発センター（通称「ラオス・日本センター」）との共催により、日本人研究者がラオス国立大学の教員や学生らを対象に自らの研究成果をラオス語で発表するという催しをおこなった。平成17年度には第3回発表会（2005年5月18日）増原善之「ランサーン王国の繁栄は何によって生み出されたか？—16～17世紀のラオス経済史」と第4回発表会（2005年12月14日）吉田香世子「在地の知識—農村における助け合い」を開催した。

◆「ラオス国立大学農学部・林学部最優秀卒業論文集第1巻」を出版し、同大学の全学部・関係部局をはじめ、スパーヌウォン大学、チャンパーサック大学、ラオス農林省の関係部局・研究所および全国の県農林局など40以上の機関に配布。これに関連して開催された卒業論文最優秀賞授与式の模様はラオスの全国紙でも取り上げられた。

平成18年度

（1）フィールド・ステーションの整備：

◆ラオス国立大学林学部研究棟の1階に部屋を借り受けてコンピュータ1セットと作業机、本棚、標本棚を置き、現地に派遣される教員・学生が活用しています。この連絡事務所には2004年度から増原善之 COE 研究員が常駐。

◆2006年度のLFS予算による教員派遣は安藤和雄（CSEAS）の1名のみでしたが、チャムポーン・ワークショップ「在地の知識—過去、現在、未来」（京都大学・ラオス国立大学共同研究プロジェクト成果発表）に平松幸三（ASAFAS）、竹田晋也（ASAFAS）の2名が参加するなど、多くの教員が別途資金により現地を訪れた。

◆ラオス FS は、アジア・アフリカ地域研究研究科・東南アジア研究所のみならず、人間・環境学研究科、文学研究科、農学研究科、霊長類研究所などの教員・院生の研究拠点として全学的に活用されている。

（2）大学院生の派遣とオンサイト・エデュケーションの成果：

◆ラオスでの臨地調査から、これまでに以下の学位論文が提出された。

Yasuyuki Kosaka 2005. Plant Diversity in Paddy Field Landscape in Savannakhet Province, Laos.

Inthavong Soulapone 2005 Development of Rice-based Farming Systems in Savannakhet Province, Laos.

Saphangthong Thatheva 2006 Dynamics and Sustainability of Land Use Systems in Northern Laos.

◆学生派遣：2006年度に当プログラムの資金によってラオス FS に派遣した学生は、吉田香世子、Anoulom Vilayphone の2名。

◆共同研究プロジェクト「在地の知識—過去、現在、未来」に大塚裕之、Phouvin Phousavanh が参加しました。また別途資金で臨地調査を行う大学院生に対しても教育支援を行った。

◆これまでに、ラオス FS を活用し、臨地教育支援をおこなった大学院生および研究テーマは、以下のとおり。

小坂康之（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）「サバナケート県における農業・土地利用シ

ステムと二次植生の遷移」

黒田洋輔（同上）「ラオスの野生イネの自生地保全に関する研究」

Thatheva Saphangthong（同上）「Land use systems in the Northern Laos」

Anoulom Vilayphone（同上）「Valuation of non-timber forest products and forest management practices of Kham people」

Souksompong Prixar（同上）「Village forest management after land and forest allocation in Laos」

Soulaphone Inthavong（同上）「Study of Agricultural Technology Dissemination and Impacts on Traditional Farming in Laos」

松浦美樹（同上）「ラオス北部における森林資源の希少化への住民の対応」

山本麻紀子（同上）「メコン河流域開発における調整メカニズムの可能性」

吉田香世子（同上）「ルー族研究」

平林いずみ（同上）「シェンクワン県の戦争体験と観光開発」

大塚裕之（同上）「メコン河氾濫原の魚類生態」

森一代（同上）「出稼ぎが村落社会に及ぼす影響」

Phouvin Phousavanh（同上）「ラオス北部ウー川の魚類生態」

広田勲（京都大学大学院農学研究科）「ラオス北部における焼畑耕作システム」

中辻享（京都大学大学院文学研究科）「ラオス焼畑村における土地利用」

（3）現地研究機関との共同研究の状況：

◆京都大学（ASAFAS・CSEAS）・ラオス国立大学共同研究プロジェクト「在地の知識—過去、現在、未来」を開始し、予備調査（2005年8月31日～9月4日）、第1回現地調査（2005年10月23～30日）、第2回現地調査（2006年2月22日～3月1日）、第3階現地調査（2006年5月22～29日）を行った。

それと同時に、ランサーン王国行政文書群の調査（増原）、南部サバナケート県の農地・森林における植生調査（小坂、サイサナ）、同県の魚類相と漁労に関する調査（岩田、大塚、プービン）、同県の在来農法に関する調査（安藤・スラポン）、北部ルアンナムター県の非木材林産物利用の調査（アヌロム、竹田）が進行中。

（4）セミナー、ワークショップなどの実施状況：

◆チャムポーン・ワークショップ「在地の知識—過去、現在、未来」（京都大学・ラオス国立大学共同研究プロジェクトの成果発表会）を2006年12月21日にサワナケート県チャムポーン郡会議場において開催。

2005年8月、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科とラオス国立大学林学部はMOUに基づく学術交流活動の一環として、共同研究プロジェクト「在地の知識—過去・現在・未来」を立ち上げた。ラオス人4名および日本人3名からなる共同研究チームが、5回にわたってサワナケート県チャムポーン郡に赴き、各自の研究テーマに従って現地調査を行った。今回のチャムポーン・ワークショップでは、共同研究チームのメンバーを中心とするラオス・日本両国の研究者が各々の研究成果を発表するとともに、農業普及や伝統文化保護の現場で働いている方々やチャムポーン郡民の方々と「在地の知識」の意義と可能性について議論を深めた。また翌日、12月22日には、チャムポーン郡ガダン村（大塚裕之の調査地）を訪問した。

日本側参加者は、平松幸三（ASAFAS）、竹田晋也（ASAFAS）、増原善之（ASAFAS）、大塚裕之（ASAFAS）、森一代（ASAFAS）、虫明悦生（CSEAS）、加賀 道（財団法人トヨタ財団アシスタントプログラムオフィサー）の7名だった。

◆ラオスFSはカウンターパートであるラオス国立大学林学部および同大学ラオス・日本人材開発センター（通称「ラオス・日本センター」）との共催により、日本人研究者がラオス国立大学の教員や学生らを対象に自らの研究成果をラオス語で発表するという催しを行ってきた。第1回発表会（2004年12月7日）虫明悦生「村落調査における大学の役割とラオスの将来」、第2回発表会（2005年2月18日）安井清子「モンに伝わる口承文化と手仕事」、第3回発表会（2005年5月18日）増原善之「ランサーン王国の繁栄は何によって生み出されたか？—16～17世紀のラオス経済史」、第4回発表会（2005年12月14日）吉田香世子（ASAFAS）「在地の知識—農村に

おける助け合い」、第5回発表会（2006年3月15日）藤田弥生「ムアンシンにおける土地利用および地域の人々の生業変化」、第6回発表会（2006年6月14日）広田勲「ラオス北部焼畑休閑地における植生変化」を開催してきた。これら6回の発表会の内容を取りまとめた冊子を2006年10月に発行した。

【西アジア】

- ・代表者：東長靖
- ・分担者：小杉泰
- ・研究テーマ：西アジアにおけるイスラーム法の実践とイスラーム復興の実態

- ・研究内容：イスラーム法の実践と宗教復興の実態を、西アジア諸国の政治・経済・社会との関係の中に有機的に位置づけて調査・研究し、イスラーム学をディシプリンの一つとして加えた総合的地域研究の新しい方法と事例の開拓を行なう。過去2年間のエジプトにおけるフィールド・ステーションの研究・教育活動の蓄積のうえに、対象地域としてトルコ・シリアなどをも含むこととし、より一層の研究の重層化をめざす。具体的な研究対象としては、特に、エジプトおよびシリアにおけるムスリム同胞団およびそれと関連する社会運動の諸団体、世俗主義国家トルコにおける宗教復興の実態、およびタリーカ（イスラーム神秘主義教団）に力点を置いて、調査・研究を進める。



- ・キーワード：ムスリム同胞団、タリーカ、神秘主義教団、イスラーム社会活動、法解釈の革新
- ・カウンターパート：カイロ大学政治経済学部・アジア研究センター、アンカラ大学神学部
- ・派遣者数

	平成14年度			平成15年度			平成16年度			平成17年度			平成18年度		
	教員	若手	学生	教員	若手	学生	教員	若手	学生	教員	若手	学生	教員	若手	学生
21COE	1		1	1		2	1			1		1	1		2
21COE以外	1		2	1		1									

（下段は21COEプログラム以外の経費による派遣者数）

【年次報告】

平成15年度

（1）概要

◆2003年度には、FSの活動基盤を整備して、教員、院生のフィールドワークをおこなうとともに、カウンターパートのカイロ大学政経学部アジア研究センターとの協力関係にもとづいて、共同研究を実施した。また、西アジアへの広域的な展開を視野に入れて、トルコの大学との提携・協力について協議をおこなった。

（2）カイロ・フィールド・ステーション

◆2002年度末の2～3月にはカイロFS代表の小杉泰がカイロに出張して、現地で調査中の大学院生・横田貴之（平成12年度入学）とともに、FSのカイロ基地として2002年1月から借りているフラットの整備をおこなった。家具付きのフラットを借り、衛星テレビの受信装置、デジタル版の日本語の種々の辞事典をインストールしたコンピュータ、アラビア語の基本的な辞事典および基本文献などを設置し、調査活動の基盤整備をした。衛星テレビについては、その映像を適宜録画して、臨地研究のための語学研修を日本で行なう際に用いるようにした。

◆このフィールド基地は、21世紀COEの資金によって派遣された横田貴之と新井一寛（平成13年度入学）、別な資金でフィールド調査に出かけた上木原理英（平成14年度入学）、臨地教育のためにでかけた2名の教員（東長靖、小杉）によって利用されました。2003年度は施設を十分活用し、所期の目的を達成したと言えます。

(3) 今後の計画

◆カイロ FS は、2002～2003 年度において、規模は小粒ながら大きな成果を収めた。2 人の院生の臨地調査の成果も、近々公に発表される予定である。西アジアは広域なので、エジプト 1 カ国だけに集中せず、アラブ世界・トルコ世界・イラン世界を包括する西アジア FS に拡大継承することをめざす。そのため、2004 年度には、同じアラブ圏のシリア、そしてトルコにも FS 活動を展開しようとしている。

◆2003 年度の出張の際には、東長がトルコにおいて、アンカラ大学およびマルマラ大学との研究・教育連携ならびに FS 開設のための話し合いをおこなった。2004 年度は、この拡張計画に沿って新しい展開を考えている。

(4) 国際交流

◆エジプトのカイロ大学との提携・協力関係は、実質的な成果をあげている。MOU の締結についても、2002 年度にすでに合意に達しているが、それなりに広報の効果があがるように調印式をおこないたいとの考えから、実際の協定の締結はこれまで延期されている。2003 年 10 月および 2004 年 2 月には、カイロ大学教授でカウンターパートの責任者であるセリム先生が来日され、小杉が同教授と種々の共同プロジェクトについて協議をおこなった。

◆エジプトでは、カイロ・アメリカ大学とも実際の協力をおこなっている。

◆カイロ・アメリカ大学およびマルマラ大学からは、教員各 1 名を、2004 年 3 月に日本中東学会が主催した国際ワークショップ（東京）に招待した。ワークショップは大きな成功をおさめたが、両大学との協力関係も順調に構築されつつある。

◆トルコにおいては、東長が中心となって、アンカラ大学、マルマラ大学、ウルダー大学、チャナッカレ大学などとの連携を推進している。アンカラ大学、マルマラ大学とは、FS 設置について、協議をおこなっている。

平成 16 年度

(1) 概要

◆今年度の課題は、エジプト・フィールド・ステーションを発展的に受け継いだ西アジア FS の活動を軌道に乗せることであった。昨年度までのエジプト FS の活動によって得られた人的ネットワークと研究手法の蓄積を元に、対象地域をシリアなど他のアラブ諸国やトルコなど西アジア全域に展開することが狙いだが、今年度はこのうち、とくにトルコに重点を置いて活動をおこなった。

(2) 今後の計画

◆今年度軌道に乗ったトルコにおける FS 活動を確立し、さらに充実させることを目指す。また、これまでのノウハウを元に、西アジア全体を視野に入れたより広域的な活動を行えるよう、活動の拡充を図る。

(3) 国際交流

◆エジプトのカイロ大学との研究・協力関係はますます強固なものとなっており、カイロ・アメリカ大学との人的ネットワークも緊密な状態で進展している。

◆トルコ、アンカラ大学との研究協力態勢はほぼ整い、MOU を締結する話し合いが進行中である。マルマラ大学とも緊密な連絡を取り合い、協力関係の強化につとめている。

平成 17 年度

(1) 概要：

◆今年度は、西アジア FS 活動をトルコを中心に展開しました。イスラーム法の実践と宗教復興の実態を、西アジア諸国の政治・経済・社会との関係の中に有機的に位置づけて調査・研究し、イスラーム学をディシプリンの一つとして加えた総合的地域研究の新しい方法と事例の開拓を行うことを目標としました。

(2) 院生派遣：

◆今年度は、飛奈裕美（平成 15 年度入学）を、2005 年 9 月 25 日～2005 年 11 月 13 日の日程で、イスラエルに派遣しました。研究テーマは、「子ども」のポリティクスをめぐる国際関係学：抵抗運動、ナショナリズム、トランスナショナル・ネットワークの関係性」でした。

(3) 教員派遣：

◆東長靖（ASAFAS 教員）は 7 月から 8 月にかけて、マレーシアおよびトルコに出張し、マレーシアにおける主要研究機関を訪問して、現地のイスラーム研究者と意見を交換するとともに、トルコにおいても、アンカラ大学・マルマラ大学のスタッフと議論を行いました。

(4) 今後の計画：

◆トルコにおける FS 活動をさらに充実させるとともに、これまでのノウハウを元に、西アジア全体を俯瞰する活動を行えるよう、充実を図ります。

(5) 国際交流：

◆以前から準備を進めていたトルコ、アンカラ大学との国際交流協定（MOU）を、6 月に締結しました。マルマラ大学とも緊密な連絡を取り合い、協力関係の強化につとめています。エジプトのカイロ大学との研究・協力関係はますます強固なものとなっており、カイロ・アメリカ大学との人的ネットワークも緊密な状態で進展しています。

平成 18 年度

(1) 概要

最終年度にあたる今年度は、西アジア FS 活動を、アラブ・トルコを中心に展開しました。イスラーム法の実践と宗教復興の実態を、西アジア諸国の政治・経済・社会との関係の中に有機的に位置づけて調査・研究し、イスラーム学をディシプリンの一つとして加えた総合的地域研究の新しい方法と事例の開拓を行うことを目標としました。

(2) 院生派遣

今年度は、石坂晋哉（本研究科 5 回生）を 2006/7/7～2006/9/5 の日程でインドへ、飛奈裕美（本研究科 5 回生）を 2006/7/1～2007/3/31 の日程でパレスチナ・イスラエルへ、藤井千晶（本研究科 3 回生）を 2006/8/1～2007/3/1 の日程でタンザニア・ケニアへ、それぞれ派遣しました。

(3) 教員派遣

東長靖は 2006/8/11～2006/9/2 の日程で、アルジェリアおよびトルコに出張し、アルジェリアのイスラーム研究者と意見を交換するとともに臨地調査を実施し、トルコにおいても、アンカラ大学・マルマラ大学のスタッフと議論を行うとともに文献調査を実施しました。

(4) 国際交流

◆以前から準備を進めていたエジプトのカイロ大学との国際交流協定（MOU）を、2007 年 3 月に締結する予定です。

◆すでに国際交流協定を締結したトルコのアンカラ大学、インドネシアの国立イスラーム大学との研究・協力関係はますます強固なものとなっています。

◆また、トルコのマルマラ大学、エジプトのカイロ・アメリカ大学との人的ネットワークも緊密に進展しています。

【南アジア】

- ・代表者：藤倉達郎
- ・研究テーマ：変容する南アジア
- ・研究内容：変容する南アジアを、ダリトをめぐる暴力、蘇るガンディー思想、ブータンにおける国民国家形成、バングラデシュにおける開発とイスラーム復興、アーユルヴェーダ医療の異種混交化といった具体的テーマで研究する。
- ・キーワード：暴力、思想、ネーション形成、イスラーム復興、開発、医療
- ・カウンターパート：ジャワハルラー・ネルー大学、ブータン研究センター、ペラデニヤ大学
- ・派遣者数



	平成 14 年度			平成 15 年度			平成 16 年度			平成 17 年度			平成 18 年度		
	教員	若手	学生	教員	若手	学生	教員	若手	学生	教員	若手	学生	教員	若手	学生
21COE				1		4	1		4			5			3
21COE 以外									4				1		

(下段は 21COE プログラム以外の経費による派遣者数)

【年次報告】

平成 15 年度

(1) 概要：

◆南アジア地域では、現在 FS を開設していません。教員・院生の調査地が広く分散しており、開設のメリットが低いからです。しかし、教員・院生の調査に関する便宜は、ジャワハルラー・ネルー大学の B・モハパトラ博士（元 ASAFAS 客員教授）らが担ってくれており、FS に代わる機能をはたしています。

(2) 教員と大学院生の派遣：

◆ASAFAS 教員の派遣

田辺明生：インドのカルカッタ、ブパネーシュワル、プリーにおいて、ヒンドゥー教における信仰と修行の現代的動態に関する調査（2003 年 8 月 2 日－31 日）

足立明：インドのタミル・ナードゥ州とスリランカにおいて、参加型開発のプロセス・ドキュメンテーションの手法についての調査（2003 年 2 月 16 日－30 日）

◆ASAFAS 大学院生の派遣

宮本万里（平成 12 年度入学）：ブータンにおけるネーション形成に関する調査（2003 年 7 月 21 日－9 月 19 日）。石坂晋哉（平成 14 年度 3 年次編入学）：現代インドのガンディー主義的環境思想に関する調査（2003 年 7 月 29 日－9 月 24 日）

加瀬沢雅人（平成 11 年度入学）：インド・ケーララ州におけるアーユルヴェーダ医療の変容について調査（2003 年 11 月 21 日－2004 年 3 月 25 日）

七五三泰輔（平成 13 年度入学）：バングラデシュにおいて、開発と村落社会に関する調査（2003 年 9 月 3 日－2004 年 3 月 31 日）

平成 16 年度

(1) 研究活動：

◆南アジア地域では、現在 FS を開設していない。教員・院生の調査地が広く分散しており開設のメリットが低いのである。しかし、教員・院生の調査に関する便宜は、ジャワハルラー・ネルー大学の B・モハパトラ博士（元 ASAFAS 客員教授）らが担ってくれており、FS に代わる機能をはたしている。なお、今年度はフィール

ド・ステーション助成金での学生派遣はないが、他の資金により4名の学生が南アジアで調査を行っている。

(2) 教員派遣：

◆田辺明生 (ASAFAS 教員)：インドのウトカル大学 (プバネーシュワル)、ジャワハルラール・ネルー大学 (デリー) において「ヒンドゥー教における信仰と修行の現代的動態」についての研究相談および近郊でのフィールドワークを行った。(2004年7月27日～2004年9月8日)

◆足立明 (ASAFAS 教員)：スリランカにおいて、参加型開発のプロセス・ドキュメンテーション的手法についての調査(2004年3月13日～2004年3月24日)

(3) 学生の派遣：

◆宮本万里 (平成12年度入学)：ブータンの自然保護地域における村落の社会変容と環境保全活動：森をめぐる文化と政治(2004年10月1日～2005年9月31日) 松下国際財団助成

◆石坂晋哉 (平成14年度第3年次編入学)：現代インドのガンディー主義的環境思想に関する調査(2004年7月10日～2005年3月2日) 京都大学教育研究振興財団助成

◆七五三泰輔 (平成13年度入学)：バングラデシュにおいて、開発と村落社会に関する調査(2004年11月17日～11月10日) 私費渡航

◆舟橋健太 (平成14年度第3年次編入学)：インドにおけるダリとの社会運動に関する調査(2004年4月1日～2006年3月31日) 文部科学省アジア諸国等派遣留学生

平成17年度

(1) 研究活動：

◆南アジア地域では、現在、FSを開設していません。教員・院生の調査地が広く分散しており開設のメリットが低いからです。しかし、教員・院生の調査に関する便宜は、ジャワハルラール・ネルー大学のB・モハパトラ博士やデリー大学のA・ダスグプタ博士(いずれも元ASAFAS客員教授)らが担ってくれており、FSに代わる機能をはたしています。

(2) 教員派遣：

◆藤倉達郎 (ASAFAS 教員)：ネパール、カトマンズの Centre for Social Research and Development (CSRD) や西ネパールの住民組織 Backward Society Education (BASE) 等において、開発と民主化の問題、貧困層・非差別層による社会運動についての研究相談および近郊でのフィールドワークをおこないました(2005年8月16日～2005年9月8日、2006年2月4日～2006年3月11日)。

(3) 学生の派遣：

◆田中裕士 (平成15年度入学)：ヒンドゥー教における現世放棄者サドゥーの苦行実践と地域社会との関りについて(2005/8/5～2006/2/10)

◆飛奈裕美 (平成15年度入学)：「子ども」のポリティクスをめぐる国際関係学—抵抗運動、ナショナリズム、トランスナショナル・ネットワークの関係性(2005/9/25～2005/11/13)

平成18年度

(1) 研究活動：

南アジア地域では、現在、FSを開設していません。教員・院生の調査地が広く分散しており開設のメリットが低いからです。しかし、教員・院生の調査に関する便宜は、ジャワハルラール・ネルー大学のB・モハパトラ博士やデリー大学のA・ダスグプタ博士(いずれも元ASAFAS客員教授)らが担ってくれており、FSに代わる機能をはたしています。

(2) 教員派遣：

藤倉達郎（ASAFAS教員）：ネパール、カトマンズのCentre for Social Research and Development (CSRD) や西ネパールの住民組織 Backward Society Education (BASE)、Social Awareness for Education (SAFE) 等において、開発と民主化の問題、貧困層・被差別層による社会運動についての研究相談および近郊でのフィールドワークをおこないました（2006年4月27日～2006年5月8日）。

(3) 学生の派遣：

石坂晋哉（平成14年度3年次編入学）：現代インドの環境問題とガンディー主義—テーラー・ダム問題、カーリー川問題、津波被害者救済をめぐる（2006/7/9～2006/9/30）

【エチオピア】（FS HP：<http://areainfo.asafas.kyoto-u.ac.jp/efs/index.html>）

- ・代表者：重田真義
- ・分担者：太田至、伊谷樹一
- ・研究テーマ：東北部アフリカにおける多元共生社会の構築と地域研究の役割
- ・研究内容：自然・文化・社会の多様性において際だっている東北部アフリカにおいて営まれてきた生業の構造を、地元の研究者や地域住民と共同しておこなう地域研究を通して解き明かす。過去半世紀の間に3つの異なる政体を経験したエチオピアの事例を中心に、社会生態史に注目しながら、在来技術、資源利用と保全、「開発」現象などに関わる人びとの生活実践とその変容を明らかにし、地域研究の成果が何らかの形で21世紀の多元共生社会の構築に寄与することを目指す。
- ・キーワード：社会生態史、生業構造、「開発」、自然資源保護、在来知
- ・カウンターパート：アジスアベバ大学エチオピア研究所、同大学社会科学部、同大学理学部、南部州大学農学部
- ・派遣者数



	平成 14 年度			平成 15 年度			平成 16 年度			平成 17 年度			平成 18 年度		
	教員	若手	学生	教員	若手	学生	教員	若手	学生	教員	若手	学生	教員	若手	学生
21COE	1		3	6*		15*	1		5	1	1	3	2		2
21COE 以外				3*		5*			1		1	1	1	3	6

（下段は21COEプログラム以外の経費による派遣者数、*シンポジウム出席者を含む。）

【活動内容】

エチオピア・フィールド・ステーション（EFS）は、首都アジスアベバに拠点をおき、南部諸民族州の南オモ地域にサブ・ステーションを設けて教育研究活動をおこなってきた。

(1) 研究活動および学生のフィールドワークの支援：

2003年度には、10月にアジスアベバ大学と共催でフィールド・ステーション連携ワークショップ「アジア・アフリカにおける環境と生業をめぐる地域住民のとりくみ」を開催した。これには6人のASAFAS教員と15人のASAFAS大学院生が21COEプログラムによって海外に派遣され、EFSの機能を活用して教育研究活動に従事した。これ以外にも、別資金によって渡航した3名のASAFAS教員と、5名のASAFAS大学院生がEFSを訪れた。また、エチオピアにおいて教育・研究に従事する京都大学の他部局や他大学の教員、大学院生によるステーションの利用もあった。

フィールド・ステーション連携ワークショップの開催内容等についてはEFSホームページ

(<http://areainfo.asafas.kyoto-u.ac.jp/efs/j/workshop.html>) に詳細を掲載した。

2004 年度はアジスアベバと南オモ地域のそれぞれのステーション（またはサブ・ステーション）においてセミナーをおこなった。アジスアベバにおいては、2004 年 11 月 7 日に伊藤義将（平成 15 年度入学）が臨地研究の中間報告をおこない、重田眞義、西真如（平成 15 年度第 3 年次編入学）、山本雄大（平成 13 年度入学）、佐藤靖明（平成 13 年度入学）、金子守恵（平成 10 年度入学）とともに活発な議論をおこなった。南オモ地域のサブ・ステーションにおいては、2004 年 11 月 16 日にベル・アサンテ（平成 14 年度入学）が臨地研究の中間報告をおこない、アジスアベバ大学のゲブレ・インティソ博士（EFS のカウンターパート）とマモ・ヘボ博士をまじえて活発な議論をおこなった。

2004 年 11 月 10 日から 27 日まで、重田眞義、ゲブレ・インティソ博士（EFS のカウンターパート）、マモ・ヘボ博士、伊藤義将（平成 15 年度入学）、ベル・アサンテ（平成 14 年度入学）、山本雄大（平成 13 年度入学）、佐藤靖明（平成 13 年度入学）、金子守恵（平成 10 年度入学）は、南部エチオピアを中心にスタディツアーをおこなった。スタディツアーでは、南部エチオピアの主食作物であるエンセーテの栽培や加工方法、箆・土器・鉄製品などを製作する在来技術、さらにはコーヒーやチャットなどの換金作物の栽培方法や流通過程についての知見を深め、地域間比較の可能性について検討した。

2005 年度はアジスアベバと南オモ地域のサブ・ステーションのそれぞれのステーションにおいてセミナーをおこなった。アジスアベバにおいては、2006 年 2 月 8 日に宮田寛章（平成 17 年度入学）が臨地研究の中間報告をおこない、重田眞義、森元泰行（国際植物遺伝資源研究所・サハラ以南アフリカ地域ナイロビ事務所・民族植物学研究員）、孫曉剛（COE 研究員）、金子守恵（COE 研究員）、佐川徹（平成 12 年度入学）、伊藤義将（平成 15 年度入学）、とともに活発な議論をおこなった。

2006 年 2 月 5 日から 2 月 18 日まで、重田眞義、森元泰行（国際植物遺伝資源研究所・サハラ以南アフリカ地域ナイロビ事務所・民族植物学研究員）、孫曉剛（COE 研究員）、金子守恵（COE 研究員）、佐川徹（平成 12 年度入学）、川瀬慈（平成 13 年度入学）、伊藤義将（平成 15 年度入学）は、南部エチオピアを中心にスタディツアーをおこなった。スタディツアーでは、コンソの集約的な農法について見学し、在来技術と開発のポジティブな側面について検討したほか、南西部のエンセーテを基盤とした生業活動を営む地域において、庭畑の利用や栽培植物と人とのかかわりについて調査をすすめた。

2006 年 2 月 4 日・5 日、アジスアベバとアルバミンチにおいて、「文化と開発のポジティブな関係—東アフリカ多民族共生社会の構築 (Positive Relationships between Culture and Development in East Africa: Analysis of Multi-Ethnic Context)」というテーマで、国際ワークショップをおこなった。

EFS 運営会議の開催：2006 年 12 月 25 日～28 日のあいだに、重田眞義（ASAFAS 教員）、ゲブレ・インティソ博士（アジスアベバ大学 (AAU) 教員）、エンダシャウ・ベケレ博士（AAU 教員・ASAFAS 客員）、西真如（ASAFAS 教員）、金子守恵（日本学術振興会特別研究員）が今後の EFS の方針と運営方法について会議をおこなった。ASAFAS, AAU の大学院生の調査研究動向について報告したあと、これまでの EFS の目的をより発展させながら、今後も共同研究をつづけていくこと、臨地教育体制これまでどおり継続していくこと、日本国内にむけてエチオピア研究の動向を発信するために、メールマガジンを配信し続けることなどについて検討した。また、エンセーテに関するこれまでの研究成果をより実践的に地域に還元していく可能性について議論した。

EFS セミナーの開催：アジスアベバのステーションにおいてセミナーをおこなった。2007 年 1 月 4 日に伊藤義将（平成 15 年度入学）が、エチオピア西南部の熱帯高地森林域における野生コーヒーの利用の実態について中間報告をおこない、重田眞義（ASAFAS 教員）、西真如（ASAFAS 教員）、ゲブレ・インティソ（AAU 教員）、エンダシャウ博士（AAU 教員・ASAFAS 客員）金子守恵（日本学術振興会特別研究員）が参加し活発な議論がおこなわれた。

スタディツアーの実施：2006 年 12 月 30 日～31 日まで、ナザレットにおいて、重田眞義（ASAFAS 教員）、エンダシャウ・ベケレ（AAU 教員・ASAFAS 客員）、伊藤義将（平成 15 年度入学）、ゲブレ・インティソ（AAU 教員）、金子守恵（日本学術振興会特別研究員 PD）が、JICA による Farmers' Research Group プロジェクトについて、スタディツアーを実施した。また、Yitbarek Alemu Starch, Chemical&Adhesive Industry (YASCAI) のドウカム工場（写真奥の建物）において、エンセーテからとれるデンプンの精製方法について説明をうけ工場内を見学し

た。

研究会の開催：2006年9月14日（木）、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科（ASAFAS）において、エチオピア・オロミヤ州教育局や株式会社コーエイ総合研究所の研究者とともに研究会をおこなった。重田眞義（ASAFAS 教員）、西真如（COE 研究員）、伊藤義将（平成15年度入学）マモ・ヘボ（日本学術振興会外国人特別研究員）がこれまでの研究成果を発表したほか、エチオピア・オロミヤ州教育局のデショメ・ランマ氏（計画・調査・建設部長）とタマスグン・アッディス氏（計画・プログラム顧問）および二宮雅信氏（株式会社コーエイ総合研究所）がオロミヤ州における就学率向上のためのプロジェクト（School Mapping and Micro Planning Project）について発表し、EFS の研究成果を具体的な社会開発のプロジェクトに反映させてゆくための方策について活発な議論をかわした。そのほかの参加者は以下のとおり。ベケレ・グテマ（ASAFAS 客員）岸明子（株式会社コーエイ総合研究所）服部啓子（財団法人日本国際協力センター 研修監理部 研修監理員）。

EFS 国際ワークショップの開催：2006年12月29日に、EFS とアジスアベバ大学理学部生物学科との共催で国際ワークショップ「エチオピアにおける生物・文化多様性の研究」を開催した。エンダシャウ博士（AAU 教員）、重田眞義（ASAFAS 教員）、伊藤義将（ASAFAS 院生、平成15年度入学）が報告した。総合討論では、現金経済の浸透による品種の単一化のプロセスや現場での品種多様性保存の可能性について活発な議論がおこなわれた。

（2）フィールド・ステーションの整備

EFS では2003年7月から民間の宿泊施設を借り上げて、教育研究活動の基地としてきた。また、南部諸民族州の南オモ地域メツァ村にサブ・ステーションを設けて、周辺地域で研究活動をおこなう ASAFAS 院生の拠点としてきた。いずれにおいても、随時セミナーや共同研究会を開催した。

EFS では R-BGAN 衛星通信システムを活用して、アジスアベバ FS と南オモ・サブ・ステーション、京都、各派遣院生のフィールドとの間で随時電子メールによる連絡をとれる体制を整えた。また、アジスアベバ FS と南オモ・サブ・ステーション不在時の防犯体制の確立をすすめた。サブ・ステーションにある調査機器の維持・管理をおこなった。

（3）共同研究の推進

アジスアベバ大学エチオピア研究所前所長アブドゥサマド・アフマド氏を中心に南オモ地域の都市生成に関する共同研究をすすめた。同氏は2004年1月より3ヵ月間 ASAFAS の客員教授として来日した。

科研費「アフリカ型生業システムの環境保全機能に関する地域研究」による共同研究をアジスアベバ大学社会科学部人類学社会学科の教員および大学院生とすすめた。

アジスアベバ大学社会科学部人類学社会学科の修士課程大学院生に対してフィールドワーク実施の支援をおこなった。

2004年度はアジスアベバ大学エチオピア研究所前所長バイエ・イマム氏を中心に南オモ地域における言語教育に関する共同研究をすすめた。同氏は2004年7月より3ヵ月間 ASAFAS の客員教授として来日された。

重田眞義は、スタディツアー中（2004年11月10日から27日まで）、ズワイ農業大学に在籍中のミティク・デイジがエチオピア西南部でおこなった臨地研究の中間報告会に参加し、西南部エチオピアにおける在来農業システムの環境保全機能に関して活発な議論をかわした。

重田眞義は、2004年11月28日、アジスアベバ大学社会科学部人類学社会学科の大学院生の講義において、科研費「アフリカ型生業システムの環境保全機能に関する地域研究」についての中間報告をおこない、ゲブレ・インティソ博士（EFS のカウンターパート）やアジスアベバ大学大学院生と活発な議論をおこなった。

2005年度は、アジスアベバ大学社会科学部人類学社会学科ゲブレ・インティソ氏を中心に南オモ地域における地域研究と開発実践のポジティブな関係について共同研究をすすめた。同氏は2005年7月より3ヶ月間 ASAFAS の客員教授として来日した。

川瀬慈（平成13年度入学）は、2006年2月28日、アジスアベバ大学エチオピア研究所において、Visual Anthropology Seminar 参加・発表して、臨地研究の中間報告（"Lalibaloc : Living in the Endless Blessing"）をおこない、エチオピア研究にたずさわるエチオピア内外の研究者や NGO と活発な議論を交わした。

アジスアベバ大学社会科学部哲学科ベケレ・グテマ博士を中心に、アフリカにおける在来知の生成とポジティブな実践に関する共同研究をすすめた。

アジスアベバ大学社会科学部人類学社会学科ゲブレ・インティソ博士を中心に南オモ地域において、エチオピアの在来作物エンセーテを中心とした食料安全保障をめぐる開発実践の可能性について共同研究をすすめた。

アジスアベバ大学理学部生物学科のエンダシャウ博士を中心にエチオピアにおける生物・文化多様性の研究について共同研究をすすめた。

2007年1月9日～17日まで、第6回エチオピア音楽祭がアジスアベバ市内のホテルなどで開催されました。1月15日に、川瀬慈（平成13年度入学）が、臨地研究の中間報告（"Lalibalocc: Living in the Endless Blessing"）をおこない、エチオピアの音楽職能集団の人のびとやエチオピア研究にたずさわるエチオピア人および外国人研究者と映像作品について活発な議論をかわした。

（4）広報活動

2003年9月のFS連携ワークショップの開催にあわせてEFSのホームページを開設した。

EFS ホームページ: <http://areainfo.asafas.kyoto-u.ac.jp/efs/index.html>

2005年4月から10月は、関係者の業績の更新、本体HPへのリンクなどを更新した。10月以降は、COE研究員（金子守恵・任期：10月～3月末）が、新たにページを追加したり更新したりする作業を毎月1回以上おこなってきた。

ホームページと連動したメールマガジン「エチオピア・フィールド・ステーションだより」を創刊、発行した。同メルマガは、COE研究員を中心に立ち上げた編集委員会によって2006年4月以来、現在までに14号が発行されており、2007年2月10日現在の読者数は115人である。

2006年4月から2007年3月のあいだに、関係者の業績の更新、本体HPへのリンクなどを更新した。2006年8月から9月は、西真如（COE研究員）が更新作業などをおこなった。

【年次報告】

平成15年度

（1）研究活動および学生のフィールドワークの支援：

◆エチオピア・フィールド・ステーション（EFS）は、首都アジスアベバに拠点をおき、南部諸民族州の南オモ地域にサブ・ステーションを設けて活動をおこなっている。

◆2003年度には、10月にアジスアベバ大学と共催でフィールド・ステーション連携ワークショップ「アジア・アフリカにおける環境と生業をめぐる地域住民のとりくみ」を開催した。これには6人のASAFAS教員と15人のASAFAS大学院生が21COEプログラムによって海外に派遣され、EFSの機能を活用して教育研究活動に従事した。これ以外にも、別資金によって渡航した3名のASAFAS教員と、5名のASAFAS大学院生がEFSを訪れた。また、エチオピアにおいて教育・研究に従事する京都大学の他部局や他大学の教員、大学院生によるステーションの利用もあった。

◆フィールド・ステーション連携ワークショップの開催内容等についてはEFSホームページ（<http://areainfo.asafas.kyoto-u.ac.jp/efs/j/workshop.html>）を参照していただきたい。

（2）フィールド・ステーションの整備

◆EFSでは2003年7月から民間の宿泊施設を借り上げて、教育研究活動の基地としてきた。また、南部諸民族州の南オモ地域メツァ村にサブ・ステーションを設けて、周辺地域で研究活動をおこなうASAFAS院生の拠点としてきた。いずれにおいても、随時セミナーや共同研究会を開催した。

◆EFSではR-BGAN衛星通信システムを活用して、サブ・ステーション、京都、各派遣院生のフィールドとの間で随時電子メールによる連絡をとれる体制を整えました。

◆FS連携ワークショップの開催にあわせてEFSのホームページを開設しました。

EFS ホームページ:<http://areainfo.asafas.kyoto-u.ac.jp/efs/index.html>

(3) 共同研究

◆アジスアベバ大学エチオピア研究所前所長アブドゥサマド・アフマド氏を中心に南オモ地域の都市生成に関する共同研究をすすめた。同氏は2004年1月より3ヵ月間ASAFASの客員教授として来日された。

◆科研費「アフリカ型生業システムの環境保全機能に関する地域研究」による共同研究をアジスアベバ大学社会科学部人類学社会学科の教員および大学院生とすすめた。

◆アジスアベバ大学社会科学部人類学社会学科の修士課程大学院生に対してフィールドワーク実施の支援をおこなった。

平成 16 年度

(1) 研究活動

◆アジスアベバと南オモ地域のそれぞれのステーション（またはサブ・ステーション）においてセミナーをおこなった。アジスアベバにおいては、2004年11月7日に伊藤義将（平成15年度入学）が臨地研究の中間報告をおこない、重田真義、西真如（平成15年度第3年次編入学）、山本雄大（平成13年度入学）、佐藤靖明（平成13年度入学）、金子守恵（平成10年度入学）とともに活発な議論をおこなった。南オモ地域のサブ・ステーションにおいては、2004年11月16日にベル・アサンテ（平成14年度入学）が臨地研究の中間報告をおこない、アジスアベバ大学のゲブレ・インティソ博士（EFSのカウンターパート）とマモ・ヘボ博士をまじえて活発な議論をおこなった。

◆2004年11月10日から27日まで、重田真義、ゲブレ・インティソ博士（EFSのカウンターパート）、マモ・ヘボ博士、伊藤義将（平成15年度入学）、ベル・アサンテ（平成14年度入学）、山本雄大（平成13年度入学）、佐藤靖明（平成13年度入学）、金子守恵（平成10年度入学）は、南部エチオピアを中心にスタディツアーをおこなった。スタディツアーでは、南部エチオピアの主食作物であるエンセーテの栽培や加工方法、箆・土器・鉄製品などを製作する在来技術、さらにはコーヒーやチャットなどの換金作物の栽培方法や流過程についての知見を深め、地域間比較の可能性について検討した。

(2) 共同研究の推進

◆アジスアベバ大学エチオピア研究所前所長パイエ・イマム氏を中心に南オモ地域における言語教育に関する共同研究をすすめた。同氏は2004年7月より3ヵ月間ASAFASの客員教授として来日された。

◆科研費「アフリカ型生業システムの環境保全機能に関する地域研究」との抱きあわせによる共同研究をアジスアベバ大学社会科学部人類学社会学科の教員および大学院生とすすめた。

◆重田真義は、スタディツアー中（2004年11月10～27日）、ズワイ農業大学に在籍中のミティク・ディジがエチオピア西南部でおこなった臨地研究の中間報告会に参加し、西南部エチオピアにおける在来農業システムの環境保全機能に関して活発な議論をかわした。

◆重田真義は、2004年11月28日、アジスアベバ大学社会科学部人類学社会学科の大学院生の講義において、科研費「アフリカ型生業システムの環境保全機能に関する地域研究」についての中間報告をおこない、ゲブレ・インティソ博士（EFSのカウンターパート）やアジスアベバ大学大学院生と活発な議論をおこなった。

(3) フィールド・ステーションの整備

◆EFSでは、ステーションとフィールド、京都のキャンパスを結んだ通信ネットワークを整備した。

◆アジスアベバFSと南オモ・サブ・ステーションにある調査機器の維持・管理をおこなった。また、アジスアベバFSと南オモ・サブ・ステーション不在時の防犯体制の確立をすすめた。

平成 17 年度

(1) 研究活動

◆アジスアベバと南オモ地域のサブ・ステーションのそれぞれのステーションにおいてセミナーをおこなった。

アジスアベバにおいては、2006年2月8日に宮田寛章（平成17年度入学）が臨地研究の中間報告をおこない、重田眞義、森元泰行（国際植物遺伝資源研究所・サハラ以南アフリカ地域ナイロビ事務所・民族植物学研究員）、孫曉剛（COE 研究員）、金子守恵（COE 研究員）、佐川徹（平成12年度入学）、伊藤義将（平成15年度入学）、とともに活発な議論をおこなった。

◆2006年2月5日から2月18日まで、重田眞義、森元泰行（国際植物遺伝資源研究所・サハラ以南アフリカ地域ナイロビ事務所・民族植物学研究員）、孫曉剛（COE 研究員）、金子守恵（COE 研究員）、佐川徹（平成12年度入学）、川瀬慈（平成13年度入学）、伊藤義将（平成15年度入学）は、南部エチオピアを中心にスタディツアーをおこなった。スタディツアーでは、コンソの集約的な農法について見学し、在来技術と開発のポジティブな側面について検討したほか、南西部のエンセーテを基盤とした生業活動を営む地域において、庭畑の利用や栽培植物と人とのかかわりについて調査をすすめた。

（2）国際ワークショップの開催

2006年2月4日・5日、アジスアベバとアルバミンチにおいて、「文化と開発のポジティブな関係：東アフリカ多民族共生社会の構築（Positive Relationships between Culture and Development in East Africa: Analysis of Multi-Ethnic Context）」というテーマで、国際ワークショップをおこなった。

（3）共同研究の推進

アジスアベバ大学社会科学部人類学社会学科ゲブレ・インティソ氏を中心に南オモ地域における地域研究と開発実践のポジティブな関係について共同研究をすすめた。同氏は2005年7月より3ヶ月間 ASAFAS の客員教授として来日されました。

科研費「アフリカ型生業システムの環境保全機能に関する地域研究」による共同研究をアジスアベバ大学社会科学部人類学社会学科の教員および大学院生とすすめた。

川瀬慈（平成13年度入学）は、2006年2月28日、アジスアベバ大学エチオピア研究所において、Visual Anthropology Seminar 参加・発表して、臨地研究の中間報告（"Lalibalocc: Living in the Endless Blessing"）をおこない、エチオピア研究にたずさわるエチオピア内外の研究者や NGO と活発な議論を交わした。

（4）広報活動

2005年4月から10月は、関係者の業績の更新、本体 HP へのリンクなどを更新した。10月以降は、COE 研究員（金子守恵・任期：10月－3月末）が、新たにページを追加したり更新したりする作業を毎月1回以上おこなってきた。

ホームページと連動したメールマガジン「エチオピア・フィールド・ステーションだより」は、COE 研究員を中心に立ち上げた編集委員会によって11月以来現在までに6号が発行されており、4月3日現在の読者数は68人である。

*登録はこちらから→<http://areainfo.asafas.kyoto-u.ac.jp/efs/j/magazine.html>

【エチオピア・フィールド・ステーション（EFS）・ホームページの主な新規作成ページ】

- ・メルマガ「エチオピア・フィールド・ステーションだより」の登録ページとバックナンバー掲載（日本語）
<http://areainfo.asafas.kyoto-u.ac.jp/efs/j/magazine/001.html>
- ・2006年2月にアジスアベバで開催した国際ワークショップの案内、プログラム、発表要旨（英語）
<http://areainfo.asafas.kyoto-u.ac.jp/efs/j/workshop.html>（日本語）
<http://areainfo.asafas.kyoto-u.ac.jp/efs/e/workshop2006.html>（英語）
- ・同上ワークショップの報告と同時に開催したスタディツアーの様子の報告（日本語）
<http://areainfo.asafas.kyoto-u.ac.jp/efs/j/excursion/studytour.html>
- ・メンバーの移動や業績の追加などの更新

(5) フィールド・ステーションの整備

◆EFS では 2003 年 7 月から民間の宿泊施設を借り上げて、教育研究活動の基地としてきた。また、南部諸民族州の南オモ地域メツァ村にサブ・ステーション（南オモサブ・ステーション）を設けて、周辺地域で研究活動をおこなう ASAFAS 院生の拠点としてきた。いずれにおいても、随時セミナーや共同研究会を開催してきた。

◆EFS では R-BGAN 衛星通信システムを活用して、サブ・ステーション、京都、各派遣院生のフィールドとの間で随時電子メールによる連絡をとれる体制を整備、発展させた。またアジスアベバ FS と南オモ・サブ・ステーションの補修作業、及び既設の備品の維持・管理をおこなった。

平成 18 年度

(1) 研究活動：

◆EFS は、首都アジスアベバに拠点を置き、南部諸民族州の南オモ地域にサブ・ステーションを設けて活動をおこなっている。

◆EFS 運営会議：

2006 年 12 月 25 日～28 日のあいだに、重田眞義（ASAFAS 教員）、ゲブレ・インティソ博士（アジスアベバ大学（AAU）教員）、エンダシャウ・ベケレ博士（AAU 教員・ASAFAS 客員）、西真如（ASAFAS 教員）、金子守恵（日本学術振興会特別研究員）が今後の EFS の方針と運営方法について会議をおこないました。ASAFAS, AAU の大学院生の調査研究動向について報告したあと、これまでの EFS の目的をより発展させながら、今後も共同研究をつづけていくこと、臨地教育体制これまでどおり継続していくこと、日本国内にむけてエチオピア研究の動向を発信するために、メールマガジンを配信し続けることなどについて話あった。また、エンセーテに関するこれまでの研究成果をより実践的に地域に還元していく可能性について議論をおこなった。

◆EFS セミナー：

アジスアベバのステーションにおいてセミナーをおこないました。2007 年 1 月 4 日に伊藤義将（平成 15 年度入学）が、エチオピア西南部の熱帯高地森林域における野生コーヒーの利用の実態について中間報告をおこなった。重田眞義（ASAFAS 教員）、西真如（ASAFAS 教員）、ゲブレ・インティソ（AAU 教員）、エンダシャウ博士（AAU 教員・ASAFAS 客員）金子守恵（日本学術振興会特別研究員）が参加し活発な議論をかわした。

◆スタディ・ツアー：

2006 年 12 月 30 日～31 日まで、ナザレットにおいて、重田眞義（ASAFAS 教員）、エンダシャウ・ベケレ（AAU 教員・ASAFAS 客員）、伊藤義将（平成 15 年度入学）、ゲブレ・インティソ（AAU 教員）、金子守恵（日本学術振興会特別研究員 PD）が、JICA によって実施されている Farmers' Research Group プロジェクトについて、スタディツアーをおこなった。また、Yitbarek Alemu Starch, Chemical&Adhesive Industry (YASCAI) のドウカム工場において、エンセーテからとれるデンプンの精製方法について説明をうけ工場内を見学した。

◆研究会の開催：

2006 年 9 月 14 日（木）、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科（ASAFAS）において、エチオピア・オロミヤ州教育局や株式会社コーエイ総合研究所の研究員とともに研究会をおこなった。重田眞義（ASAFAS 教員）、西真如（COE 研究員）、伊藤義将（平成 15 年度入学）、マモ・ヘボ（日本学術振興会外国人特別研究員）がこれまでの研究成果を発表したほか、エチオピア・オロミヤ州教育局のテショメ・ランマ氏（計画・調査・建設部長）とタマスグン・アッディス氏（計画・プログラム顧問）および二宮雅信氏（株式会社コーエイ総合研究所）がオロミヤ州における就学率向上のためのプロジェクト（School Mapping and Micro Planning Project）について発表し、EFS の研究成果を具体的な社会開発のプロジェクトに反映させてゆくための方策について活発な議論をかわした。そのほかの参加者は以下のとおり。ベケレ・グテマ（ASAFAS 客員）岸明子（株式会社コーエイ総合研究所）服部啓子（財団法人日本国際協力センター 研修監理部 研修監理員）。

◆EFS 国際ワークショップの開催：

2006 年 12 月 29 日に、EFS とアジスアベバ大学理学部生物学科との共催で国際ワークショップ「エチオピアにおける生物・文化多様性の研究」が開催されました。エンダシャウ博士（AAU 教員）、重田眞義（ASAFAS 教員）、伊藤義将（ASAFAS 院生、平成 15 年度入学）が報告した。総合討論では、現金経済の浸透による品種の単一化

のプロセスや現場での品種多様性保存の可能性について活発な議論がおこなわれた。

◆広報活動:

2006 年 4 月から 2007 年 3 月のあいだに、関係者の業績の更新、本体 HP へのリンクなどを更新しました。2006 年 8 月から 9 月は、西真如（COE 研究員）が更新作業などをおこなった。

ホームページと連動したメールマガジン「エチオピア・フィールド・ステーションだより」は、COE 研究員を中心に立ち上げた編集委員会によって 2006 年 4 月以来、現在までに 14 号が発行されており、2007 年 2 月 10 日現在の読者数は 115 人です。

登録はこちらから→<http://areainfo.asafas.kyoto-u.ac.jp/efs/j/magazine.html>

【エチオピア・フィールド・ステーション（EFS）・ホームページの主な新規作成ページ】

メルマガ「エチオピア・フィールド・ステーションだより」の登録ページとバックナンバーなど掲載

<http://areainfo.asafas.kyoto-u.ac.jp/efs/j/magazine/006.html>（日本語）

<http://areainfo.asafas.kyoto-u.ac.jp/efs/j/magazine/007.html>

<http://areainfo.asafas.kyoto-u.ac.jp/efs/j/magazine/008.html>

<http://areainfo.asafas.kyoto-u.ac.jp/efs/j/magazine/009.html>

<http://areainfo.asafas.kyoto-u.ac.jp/efs/j/magazine/010.html>

<http://areainfo.asafas.kyoto-u.ac.jp/efs/j/magazine/011.html>

<http://areainfo.asafas.kyoto-u.ac.jp/efs/j/magazine/012.html>

<http://areainfo.asafas.kyoto-u.ac.jp/efs/j/magazine/013.html>

<http://areainfo.asafas.kyoto-u.ac.jp/efs/j/research/sagawa2.html>

（2）共同研究の推進：

◆アジスアベバ大学社会科学部哲学科ベケレ・グテマ博士を中心に、アフリカにおける在来知の生成とポジティブな実践に関する共同研究をすすめた。

◆アジスアベバ大学社会科学部人類学社会学科ゲブレ・インティソ博士を中心に南オモ地域において、エチオピアの在来作物エンセーテを中心とした食料安全保障をめぐる開発実践の可能性について共同研究をすすめた。

◆アジスアベバ大学理学部生物学科のエンダシヤウ博士を中心にエチオピアにおける生物・文化多様性の研究について共同研究をすすめた。

◆科研費「アフリカ型生業システムの環境保全機能に関する地域研究」による共同研究をアジスアベバ大学社会科学部人類学社会学科の教員および大学院生とすすめた。

◆2007 年 1 月 9 日～17 日まで、第 6 回エチオピア音楽祭がアジスアベバ市内のホテルなどで開催された。1 月 15 日に、川瀬慈（平成 13 年度入学）が、臨地研究の中間報告（"Lalibalocc -Living in the Endless Blessing-"）をおこない、エチオピアの音楽職能集団の人びとやエチオピア研究にたずさわるエチオピア人および外国人研究者と映像作品について活発な議論をかわした。

（3）学生の派遣：氏名（入学年度）・渡航期間・利用した FS・調査経費・研究テーマ：

◆佐川徹（平成 12 年度入学）・06.4/1-06.12/22・エチオピア FS・当プログラム・「エチオピア西南部ダサネッチの暴力制御機構と平和構築の過程に関する研究」

◆宮田寛章（平成 17 年度入学）・06.7/12-06.12/10・エチオピア FS・別資金・「エチオピア西南部におけるエンセーテを基盤とした農耕活動に関する生態人類学的研究」

◆ベル・アサンテ（平成 14 年度入学）・06.7/18-06. 8/17・エチオピア FS・当プログラム・「文化的実践としての筆作りの伝統ーエチオピア、ハラールの事例から」

◆伊藤義将（平成 15 年度入学）・06.10/1-07.3/20・エチオピア FS・別資金・「エチオピア南西部高地森林域における野生植物利用：ジンマ郡ゲラ行政区にすむ人々と「ゲラの森」との関係」

◆川瀬慈（平成 13 年度入学）・06.6/24-06.7/13・エチオピア FS・別資金・「エチオピアの音楽・芸能の継承と変容

に関する映像人類学的研究」

◆川瀬慈（平成 13 年度入学）・07.1/8-07.3/8・エチオピア FS・別資金・「エチオピアの音楽・芸能の継承と変容に関する映像人類学的研究」

〈研究員の派遣〉

◆シモーネ・タルシタニ（日本学術振興会外国人特別研究員）・06.7/24-06.8/14・エチオピア FS・別資金・“Ethiopia. Traditional Music, Dance and Instruments. A systematic survey” (UNESCO)

◆金子守恵（日本学術振興会特別研究員 PD）・06.12/17-07.3/10・エチオピア FS・別資金・「アフリカにおけるものづくりの地域間比較研究」

◆マモ・ヘボ（日本学術振興会外国人特別研究員）・06.12/22-07.1/20・エチオピア FS・別資金・「エチオピアにおける土地争議に関する地域研究」

（4）教員の派遣：

◆重田真義（ASAFAS 教員）は、2006 年 12 月 23 日から 2007 年 1 月 9 日までの間、エチオピアにおいて、伊藤義将（平成 15 年度入学）の臨地教育をおこなった。

◆西真如（ASAFAS 教員）2006 年 12 月 23 日から 2007 年 1 月 15 日までの間、エチオピアにおいて、伊藤義将（平成 15 年度入学）の臨地教育をおこなった。

◆重田真義（ASAFAS 教員）は、2007 年 2 月 4 日から 2007 年 3 月 3 日までの間、エチオピアにおいて、川瀬慈（平成 13 年度入学）、伊藤義将（平成 15 年度入学）、宮田寛章（平成 17 年度入学）の臨地教育をおこなった。

（5）フィールド・ステーションの整備：

◆EFS では 2003 年 7 月から民間の宿泊施設を借り上げて、教育研究活動の基地としてきた。また、南部諸民族州の南オモ地域メツァ村にサブ・ステーション（南オモ・サブ・ステーション）を設けて、周辺地域で研究活動をおこなう ASAFAS 院生の拠点としてきた。いずれにおいても、随時セミナーや共同研究会を開催してきた。

◆EFS では Immarsat-BGAN 衛星通信システムを活用して、サブ・ステーション、京都、各派遣院生のフィールドとの間で随時電子メールによる連絡をとれる体制を整備した。

◆アジスアベバ FS と南オモ・サブ・ステーションにある調査機器の維持・管理をおこなった。

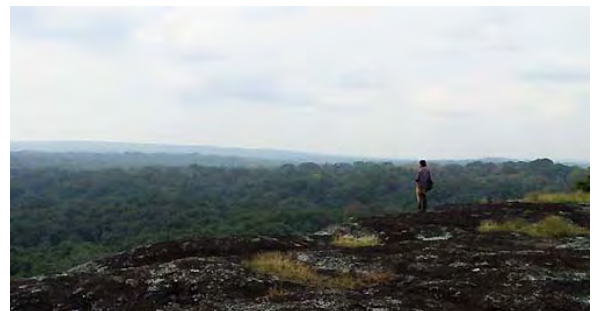
◆南オモ・サブ・ステーションにある発電機など既設の備品の維持・管理をおこなった。

【カメルーン】

（FS HP：<http://jambo.africa.kyoto-u.ac.jp/cgi-bin/CameroonFS/wiki.cgi?page=Cameroon+Field+Station>）

- ・代表者：市川光雄
- ・分担者：木村大治、山越言
- ・研究テーマ：アフリカ熱帯林の保護と持続的利用に関する研究
- ・研究内容：カメルーン東南部を中心に、ギニアおよびセネガルの森林地帯において、自然環境の持続的利用にかかわる教育・研究をおこなう。調査においては、地域の空間的・歴史的 生態環境、多民族間の関係、住民間の交換システム等を把握した後、持続的農耕・狩猟体系のありかた、自然保護と地域住民の権利の関係、多民族共存といった問題に対して積極的な提言をおこなっていくことをめざす。

- ・キーワード：熱帯多雨林、農耕民、狩猟採集民、資源利用、自然と人間の共存



・カウンターパート：ヤウンデ大学人文社会学部、ダカール大学、ボッソウ環境研究所

・派遣者数

	平成 14 年度			平成 15 年度			平成 16 年度			平成 17 年度			平成 18 年度		
	教員	若手	学生	教員	若手	学生	教員	若手	学生	教員	若手	学生	教員	若手	学生
21COE	1		1			2	1		5			1	1		1
21COE 以外	1			2		2	1		2	2		3	2	1	5

(下段は 21COE プログラム以外の経費による派遣者数)

【活動内容】

(1) 概要

カメルーン FS は、カメルーン東部州、ブンバ＝ンゴコ県の熱帯雨林のなかに設けられており、首都のヤウンデから約 900 キロメートル、自動車で 2 日の道のりにある。近くをコンゴ川の支流であるジャー川が流れ、対岸にはコンゴ共和国の森林が広がっている。

この地域における調査は、1993 年からつづけられている。熱帯雨林に強く依存して生活する狩猟採集民バカとバントゥー系、東アダマワ系の農耕民による森林利用と焼畑農業に関する研究が主なテーマであった。FS をベースにして付近に住む狩猟採集民、焼畑農耕民の調査をおこなうとともに、集めた資料・標本を整理したり、情報交換や簡単なセミナー等をおこなうためのスペースとして FS を利用してきた。また、太陽光発電設備、コンピュータ、通信機器等を整備し、フィールドと研究室をつなぐ機能をもつ現地調査拠点として活用している。

FS が設けられている地域に最近、ロベケ (Lobeke)、ブンバ＝ンゴコ及びンキ (Boumba-Ngoko and Nki) という自然保護区 (国立公園) があいついで設立された。FS はこれらの自然保護区に隣接する熱帯雨林の中に設けられ、そこでの調査は、付近の国立公園計画と密接に関連しながらすすめられた。すなわち、自然保護と地域住民の生活のかかわりについて、具体的な資料を提示しつつ検討をおこなってきた。

(2) フィールド・ステーションの整備

平成 14 年度に 21COE プログラムがスタートするとともに、調査基地となるカメルーン FS が設置された。具体的には現地素材に全面的に依存して、木の枠組と泥壁、ラフィアヤシの屋根からなる宿泊及び研究活動の基地となる施設 2 棟の建設・改良をおこなった。また、ンゴコ川流域の漁労活動や過去の村落の移動ルートの調査などのために、大型カヌーを現地調達するとともに、太陽光発電システムや衛星回線を利用したインターネット環境の整備をおこなった。

(3) 学生の派遣と臨地教育

21COE プログラムによる学生派遣は平成 14 年度からおこなわれ、平成 18 年度までの間に合計 9 名の大学院生がカメルーンに派遣された。また、これ以外に科学研究費などの別財源や私費により 12 名がカメルーンを訪れ、FS を利用している。これらの学生の研究テーマは、「狩猟採集民の狩猟採集活動と環境利用」、「熱帯雨林における持続的焼畑農耕」、「自然保護計画が地域住民に与える影響」、「淡水域における漁労活動」、「スポーツ・ハンティングと住民生活」、「焼畑による森林植生の変化」、「野生植物に対する認知の個人差」など、この地域における土地・森林資源の利用と、それらの自然保護計画との関連に関するものが主体である。

これらの大学院生との共同研究及びそれを通しての臨地教育にあたるため、延べ 3 名の教員が 21COE プログラム経費によって派遣された。また、科学研究費などの別財源によって延べ 8 名が現地を訪問し、臨地教育にあってきた。

なお、カメルーン FS は本研究科以外にも、本学理学研究科、浜松医大、山梨大、山口大などの研究者、大学院生が調査のために共同利用しており、この地域の日本人の調査拠点としての役割をも果たしている。

(4) 共同研究

現地研究者との共同研究は、カメルーンの調査が開始されたときからおこなわれているが、21 世紀 COE プロ

グラムが開始された際に、ヤウンデ大学人文社会学部との間に学術交流協定が締結された。また、FSを設置したカメルーン東部州においては、自然保護計画を推進している WWF 等の国際 NGO、カメルーン森林環境省 (MINEF-MINFOF)、及び保護計画を支援しているドイツ政府の援助組織 GTZ 等の専門家、政府役人、研究者、学生、普及員等とも緊密な連絡をとりながら調査を進めてきた。平成 15 年 12 月には、これらの機関・組織と共同で、ブンバ＝ンゴゴ県の県庁所在地であるヨカドゥマにおいて現地セミナーを開催し、現地派遣中の大学院生 2 名がこれまでの調査の成果を発表した。また平成 17 年 2 月 16 日には首都ヤウンデでワークショップが開催され、WWF-Cameroon がすすめている保護活動に関する報告につづいて、日本側から 3 名の大学院生、カメルーン側からもヤウンデ大学の大学院生が研究発表をおこなった。これらの現地セミナー・ワークショップについては、HP に掲載された報告を参照されたい。これらはいずれも、大学院生が主体となって企画し、現地機関・組織との連絡調整や実施場所の確保などにあたったものである。

(5) 成果と今後の展望

カメルーン FS の関係者による調査活動の内容と成果については、これまでにウェブサイトなどで公表されてきたが、大学院生によるものだけでも、Human Ecology (USA) や African Study Monographs などの国際誌や、「アフリカ研究」、「Journal of Tropical Agriculture」等の学会誌、「アジア・アフリカ地域研究」等の査読付き学術誌や、アメリカで出版された論文集などに、合計 20 編ほどの論文が掲載されている。また International Congress of Ethnobiology や Conference on Hunting and Gathering Societies その他、海外で開催された国際会議・シンポジウムでも多くの発表が行われている（巻末の附属資料参照）。また、2003 年には、African Study Monographs の特集第 28 号として「Recent Advances in Central African Hunter-gatherer Research」(eds. M. Ichikawa and D. Kimura, 157 ページ)、2006 年には特集 33 号として、「Ecology and Change in Hunter-gatherer Societies in the Western Congo Basin」(eds. M. Ichikawa and H. Yasuoka, 142 ページ)が出版されている。

カメルーン FS の関係者による調査研究活動は、周辺地区で保護活動や開発計画などに関与している国際組織や政府機関からも注目され、これまでに情報・成果の交換や研究集会の共同開催等を通して協力をしてきた。また FS は、本プログラムの関係者のみならず、学内外の多くの研究者・学生が共同利用する拠点として重要な役割を果たしてきた。21 世紀 COE プログラムの終了後も、他の財源などをみつけてこの体制を維持していきたいと考えている。

【年次報告】

平成 15 年度

(1) 概要

◆カメルーン FS は、カメルーン東部州、ブンバ＝ンゴゴ県の熱帯雨林のなかに設けられている。首都のヤウンデから県庁所在地のヨカドゥマまでは約 600 キロメートル、朝早くでて、うまくいけば夕方にたどり着くことができる距離だが、FS の置かれているドンゴは、ここからさらに伐採道路を 300 キロメートルほど南下したところにあり、ヤウンデからはどんなに急いでも 2 日はかかる。すぐ近くをコンゴ川の支流であるジャー川が流れ、対岸にはコンゴ共和国の森林が広がっている。

◆この地域における調査は、1993 年からつづけられている。熱帯雨林に強く依存して生活する狩猟採集民バカとバントゥー系、東アダマワ系の農耕民による森林利用と焼畑農業に関する研究が主なテーマである。FS をベースにして付近に住む狩猟採集民、焼畑農耕民の調査をおこなうとともに、集めた資料・標本を整理したり、情報交換や簡単なセミナー等をおこなうためのスペースとして FS を利用している。また、発電設備、コンピュータ、通信機器等を整備し、フィールドと研究室をつなぐ機能をもつ現地調査拠点として有効に活用している。

平成 15 年度の主な活動は以下の通りである。

(2) フィールド・ステーションの整備

◆7 月～8 月の期間に市川が別財源（科研費）によりカメルーンに出張し、同時期に派遣されていた安岡宏和、四方かがりの協力を得て、ンゴコ川（コンゴ川支流）に昨年設置した FS の整備をおこなった。すでに建設されて

いる1棟に加え、あらたに現地素材を利用して女性用の宿泊所1棟を建設した。

◆大型カヌーを購入するなど、ンゴコ川流域の漁労活動や、過去の村落の移動ルートの調査などに使えるようにした。また、太陽光発電システムやコンピュータ、電話機等を設置してインターネット環境の整備をおこない、京都及びカメルーンの関係機関との間に通信ネットワークを確立するとともに、FSからの最新情報の送信を開始した。

(3) 学生の派遣と臨地教育

◆平成15年7月より8ヵ月の予定で、四方かがり（平成12年度入学）がカメルーンに派遣され、熱帯雨林における持続的焼畑農耕の確立に関する基礎調査をおこなった。また、11月からは服部志帆（平成12年度入学）が現地に派遣され、FSの北側の森に住むバカ・ピグミーの環境利用と、自然保護計画が彼らの生活に与える影響についての調査をおこなった。さらに別財源により参加した稲井啓之（平成15年度入学）も、FSを利用してこの地域の漁民社会の調査をはじめた。直線距離にして100キロメートルほど北に位置する森では、昨年より派遣されている安岡宏和がバカ・ピグミーの狩猟活動に関する調査を継続し、平成15年10月に無事帰国した。

◆これらの大学院生との共同研究及びそれを通しての臨地教育にあたるため、市川が7-8月に、また12月から翌年の1月にかけては木村が、いずれも別財源（科研費）により現地を訪れている。

◆なお、カメルーンFSは、本研究科以外にも、本学理学研究科、浜松医大、山梨大、山口大などの研究者、大学院生が調査拠点として利用しており、この地域の日本人の調査拠点としての役割をも果たしている。

(4) 共同研究

◆現地研究者との共同研究は、カメルーンの調査が開始された1993年からおこなっているが、カウンターパートであるGodefroy Ngima Mawoung博士が最近、科学省からヤウンデ大学に転出したこと、また、21世紀COEプログラムが開始されたことなどを受けて、ヤウンデ大学との間に学術交流協定の締結が望まれるようになった。平成15年7月、市川がカメルーンを訪問した際に、ヤウンデ第一大学人文社会学部長のAndre-Marie Ntsobe教授と会談し、同学部と大学院アジア・アフリカ地域研究研究科との間に学術交流を促進することが同意された。これを受けて同年9月には、両部局の長の署名による「覚え書き」（MOU）が交換された。今後は、大学院生の教育をも含めた現地での共同研究・教育の実施が課題となる。

◆FSを設置したカメルーン東部州においては、自然保護計画を推進しているWWF-Cameroon、カメルーン森林省（MINEF）、及び保護計画を支援しているドイツの政府援助団体（GTZ）等の専門家、政府役人、研究者、学生、普及員等とも緊密な連絡をとりながら調査を進めている。平成15年12月には、これらの機関・団体と共同で、ブンバ＝ンゴゴ県の県庁所在地であるヨカドゥマにおいて現地セミナーを開催し、現地派遣中の服部、四方がこれまでの調査の成果を発表した。この会議については、現地のラジオ局の取材を受け、その内容が放送された（会議についてはHPを参照）。

平成16年度

(1) フィールド・ステーションの整備

◆平成16年11月-12月に木村大治（ASAFAS教員）が別財源（科研費）によりカメルーンに出張し、同時期に派遣されていた大学院生の稲井啓之（平成15年度入学）の協力を得て、ンゴコ川（ジャー川の下流部）に設置したFSの整備をおこなった。すでに建設されている2棟はいずれも現地素材による建物、すなわち、木の枠組に泥壁を塗り、ラフィアヤシの葉で屋根を葺いたものなので、定期的に屋根の葺き替えや壁の塗り替えをすることが必要である。

◆これらの作業にあたるとともに、昨年、多くの費用を要した衛星電話による通信費のコストを下げるために、あらたな通信方法を導入した。また、別財源により、灯油を燃料とする簡易発電機を購入し、これまで太陽電池のみに限られていた充電システムを整備した。これにより、熱帯雨林環境のもとで不安定な太陽光発電に依存するというこれまでの電源問題が大幅に改善された。

(2) 学生の派遣と臨地教育

◆前年度からカメルーンに滞在して調査していた服部志帆（平成 12 年度入学）が、平成 16 年 5 月より調査期間を 4 ヶ月間延長して、狩猟採集民バカによる森林利用に関する調査を継続した。

◆別財源（私費）によって渡航した安田章人（平成 16 年度入学）がブッシュミートの利用及び自然保護計画と住民生活の関係に関する調査のため、8 月より 17 年 1 月までカメルーンを訪問し、ブッシュミートの利用とその流通に関する広域調査、及び北部州のベヌエ国立公園周辺地区における調査をおこなった。

◆この 2 名に対する臨地教育のために、市川光雄（ASAFAS 教員）が 8 月 4 日より 9 月 2 日までカメルーンに派遣されている。

◆平成 16 年 11 月中旬から 12 月下旬まで、木村大治が別財源（科研費）によりカメルーンを訪問し、FS の維持管理にあたりとともに、ンゴコ川における淡水漁労に関する調査をおこなっている稲井啓之の指導をおこなった。

◆さらに平成 17 年 1 月からは、四方かがり（平成 12 年度入学）が焼畑農耕システムと焼畑による森林環境の変化に関する調査、また安岡宏和（平成 11 年度入学）が狩猟採集民による森林資源の利用、とくに野生ヤムの availability に関する調査のために派遣された。2 名とも来年度の学位取得を目指している。

◆カメルーン FS は、本研究科以外にも、本学理学研究科、浜松医大、山梨大教育学部、東大医学部、山口大教育学部などの研究者、大学院生が調査拠点として利用しており、この地域の日本人の調査拠点としての役割をも果たしている。

(3) 現地研究者との共同研究など

◆カメルーン東部州において、自然保護計画を推進している WWF-Cameroon、カメルーン森林省（MINEF）、及び保護計画を支援しているドイツの政府援助団体（GTZ）等の専門家、政府役人、研究者、学生、普及員等とも緊密な連絡をとりながら調査を進めている。平成 15 年 12 月に、これらの機関・組織と共同で、ブンバ＝ンゴコ県の県庁所在地であるヨカドゥマにおいて第 1 回目の現地セミナーを開催したが、平成 17 年 2 月 16 日に、今度は首都ヤウンデにおいて、第 2 回目のセミナーが開催された。日本側からは、安岡宏和、四方かがり、それに別財源で派遣中の服部志帆の 3 名の ASAFAS 大学院生が発表し、カメルーン側からは、ヤウンデ大学の大学院生 Olivier Njounan 氏が発表した。そのほか、WWF-Cameroon で Jengi Project の Coordinator を務める Leonard Usongo 博士によるプロジェクトの紹介があった。参加者は、WWF、GTZ などカメルーン東部州の保護計画の実施にあたっている関係者のほか、カウンターパートであるヤウンデ大学人文社会学部から Ngima-Mawoung 博士と Nga Ndongo 博士、ドイツ人専門家の Kai Schmidt-Soltau 博士、カメルーン国立植物標本館や WCS (Wildlife Conservation Society) の研究者などで、在カメルーン日本大使館からも金井玉菜医務官が参加した。この現地セミナーについては、別掲の服部による報告を参照されたい。なお、カメルーンの現地セミナーは、これまでいずれも、大学院生が主体となって、現地機関・組織との連絡調整や実施場所の確保などにあたっている。

平成 17 年度

(1) 概要

◆「ミニ・アフリカ」と呼ばれ、北のサバンナ、砂漠から南の熱帯雨林まで多様な自然環境からなるカメルーンであるが、東南部は、コンゴ盆地から続く広大な熱帯雨林に覆われている。そこに設けられているカメルーン・フィールド・ステーション（以下、カメルーン FS）は、首都のヤウンデから約 900 キロメートルの道のりを、乾季にはガタガタの洗濯板のような道、雨季になると水を含んで泥沼と化すような悪路を 4 輪駆動車で 2 日あるいは 3 日かけてようやくたどり着くことができる。他地域の FS が大学や首都などにオフィスを構えているのとは異なり、まさにフィールドの中に位置した野外調査の拠点である。

◆FS が設けられている地域にこのたび、ブンバ＝ンゴコ及びンキ（Boumba-Ngoko and Nki）という自然保護区（国立公園）が設立されました。FS の調査は、この国立公園化の動きと密接に関連しながらおこなわれている。すなわち、自然保護と、地域住民の生活のかかわりについて、具体的な資料を提示しながら考えていこう、ということである。

◆カメルーン東部州における日本人の調査は、1993年に始まった。当初、隣接するコンゴ共和国の熱帯雨林地域において、「熱帯雨林の持続的利用に関する研究」を進めていた京都大学の研究グループは、コンゴにおける政変の勃発とそれに伴う政情・民情の混乱のために、調査地を急遽カメルーンに変えることを余儀なくされた。そして、コンゴと国境を接した東部州の熱帯雨林地域において、焼畑農耕民、狩猟採集民による森林利用に関する研究に着手した。

その翌年には、浜松医科大学の佐藤弘明教授のグループ、さらに1996年には神戸学院大学の寺嶋秀明教授らのグループがあいついでカメルーン東部州の熱帯雨林地域での人類学的調査に加わり、この地域の調査研究がにわかに活況を呈してきた。研究のテーマも、「狩猟採集活動」や「民族植物学」、「焼畑農耕システム」等の当初からのテーマに加えて、「精霊パフォーマンスの行動学的研究」や、「歌と踊りに見られる社会的相互作用」、「乳児期における母子関係と養育行動」、「子どもの遊びと学校教育」、「食生活と栄養」、「狩猟採集民の運動生理学」、「人間居住・農耕活動の歴史と植生変化」、「焼畑による森林の循環的利用」、「自然保護計画が地域住民に及ぼす影響」など、多岐の分野に広がってきている。

(2) 調査研究および教育活動

本年は、21世紀COE予算によるカメルーンFSへの派遣はなかったが、別財源によって、以下の調査がおこなわれた。これらの調査ではFSが拠点として活用されている。

◆稲井啓之（ASAFAS 大学院生）

昨年度に続いて、FS近辺に居住する農耕・漁撈民バクウェレと、カメルーン北部からやってきて漁撈をおこなっている「移動漁民」の生計戦略のについての調査をつづけていた。

◆矢野原佑史（ASAFAS 大学院生）

初めてのアフリカ行で、狩猟採集民バカの儀礼パフォーマンス、日常活動についての観察、および首都ヤウンデにおける音楽活動の調査をおこなった。

◆四方かがり（京大農学研究科 学振特別研究員）

東部州の熱帯雨林に滞在し、焼畑農耕民パンガンドウの焼畑農耕システム及び、カカオ園におけるアグロフォレストリーについて、農業生態学的な側面から調査をおこなった。来年度の学位取得を目指している。

◆市川光雄（ASAFAS 教授）

Campo 国立公園付近、及び Mintom 付近でのブッシュミートの利用に関する広域調査をおこなった。

また、本年、カメルーンのWWFから調査の報告書と情報提供の依頼があったが、今後もWWFを始め、地元の研究機関と密接に連絡を取りつつ調査を進めていく必要がある。

(3) カメルーンFSのホームページの開設

これまでに蓄積されてきた研究活動の情報を一般に公開するため、カメルーン・フィールド・ステーションのホームページを開設した。

<http://jambo.africa.kyoto-u.ac.jp/cgi-bin/CameroonFS/wiki.cgi>

目次を挙げると、Top Page、研究史、研究活動、年次報告、研究者プロフィール、現地情報、学術情報、写真館(動画あり!)、フィールド・エッセイ、森事典、リンク集、掲示板、最近の更新、となっており、盛り沢山の内容である。また、一般の人にもわかりやすい記事を書くことに努めている。このホームページは、Googleで「カメルーン」を検索すると、4~5番目にランクされており、我が国におけるカメルーンに関する重要な情報資源になっていることがわかる。

また、このページはWikiというシステムの上に作られており、特定の管理者がいなくても、カメルーン研究者たちが独自に新しい情報を書き加えていくことができる。将来的にはASAFASだけではなく、日本中の、さらには海外のカメルーン研究者に参加してもらいたいと考えている。

平成18年度

(1) フィールド・ステーションの整備：

◆カメルーン FS の施設は現地素材 100%、すなわち、建物の枠組には森から切り出した細い木をつかい、壁は泥土を塗り、屋根はラフィアヤシの葉で葺いています。FS の閉鎖後には、この地域の大半の住居と同様に土に還るようにとの配慮からですが、さすがに 4,5 年も経つと老朽化が進んで、雨漏りや壁土の落下がひどくなってきた。2006 年 10 月に木村助教授が訪れた際には、建物の内部は湿気でカビだらけになっていた。

◆そのため今年度は、新しいラフィアヤシを使って屋根を全面的に葺きかえるとともに、いちばん傷みやすい屋根の頂部にトタンを張ることにした。また、FS 開設当初にンゴコ川流域の調査のために購入した丸木船も老朽化したので、これも新たに調達する必要がある。21 世紀 COE のプログラムは終了しても、調査拠点の必要がなくなるわけではないので、いまのうちにこれらの手当をしておかねばならない。

◆カメルーン FS は、国内他大学の研究者も頻繁に利用するほか、海外の研究者等の注目もあつめており、何とか財源をみつけて FS としての機能を維持していきたい。

(2) 学生の派遣と臨地教育：

◆本年度は 21COE プログラムによる派遣はありませんでしたが、科研費などの別財源により以下のような調査がおこなわれた。

◆2005 年度末から木村科研によりカメルーンで調査していた稲井啓之（博士課程 4 年）が、2006 年 6 月まで淡水漁労の調査をおこなった。森林地帯では、獣肉に変わるタンパク質供給源として魚類が注目されている。当初は稲井の他に理学研究科の大石孝典らが、FS の近くを流れる Ngoko 川での漁労の調査をしていたが、その漁民の多くがカメルーン北部からの移動漁民であるため、今年から稲井が彼らの出身地である極北州の Logone 川流域での調査に着手した。

◆7 月から 8 月までは市川科研によって服部志帆（博士課程 6 年目）が、新しくこの地域に設立されたブンバ・ベク及びンキの国立公園計画と住民との関係に関する資料を収集してきた。

◆さらに 10 月からは、「魅力ある大学院イニシアティブ」のプログラムによって、大学院 1 年目の戸田美佳子が東部州の熱帯雨林地域において、地域社会における身障者及び発達障害者についての予備調査をおこなっている。

◆東部州以外では、北部州のベヌエ国立公園周辺で安田章人（博士課程 3 年）がスポーツ・ハンティングと住民の関係についての調査、また極北州では前述の稲井啓之が河川漁労と移動漁民の生態調査を、それぞれ別財源（科研費）により実施。さらに、「魅力ある大学院イニシアティブ」のプログラムにより矢野原（博士課程 2 年）が都市の若者のサブ・カルチャー、とくに音楽活動についての調査に着手。

◆これらの学生の指導のために、ASAFAS 教員の木村大治、荒木茂及び市川光雄が科学研究費等により（一部は 21COE 経費による）、短期間カメルーンを訪問。またカメルーン FS は、ASAFAS 以外の研究者・学生にも利用されており、今年度は農学研究科、理学研究科の大学院生が調査に参加。

(3) 現地研究者との共同研究：

◆これまでと同様に、Godefroy Ngima Mawoung 博士及び彼の指導学生など、ヤウンデ大学社会学・人類学科の研究者・学生と共同研究を行いました。Ngima 博士にはとくにカメルーン南部における自然保護計画の影響調査とブッシュミートの利用に関する研究を担当してもらっている。

◆また、チャン（Dchang）大学林学科所属で、民族植物学者である Jean Legarde Betti 博士とも頻繁に連絡を取りあっているほか、地域研究統合情報センターの阿部助教授の厚意により、同博士を日本及びタイで開催された国際民族生物学会に招へいすることができた。さらに、2006 年 11 月に開催された京都シンポジウムには、カメルーンの映像作家 Cyrille Masso 氏を ASAFAS 研修員の分藤大翼氏の尽力により招へいした。

◆FS を設置したカメルーン東部州においては、自然保護計画を推進している WWF-Cameroon、カメルーン森林動物省（MINFOF）、及び保護計画を支援しているドイツの政府援助団体（GTZ）等の専門家、政府役人、研究者、学生、普及員等とも緊密な連絡をとりながら調査を進めている。

【ケニア】(FS HP : <http://areainfo.asafas.kyoto-u.ac.jp/nfs/nfstop.html>)

- ・代表者 : 太田至
- ・分担者 : 梶茂樹、水野一晴
- ・研究テーマ : 東アフリカ乾燥地域における生業と社会の変容に関する地域研究

- ・研究内容 : 東アフリカの乾燥地域には牧畜あるいは半農半牧の生業を営む人びとの社会が分布している。こうした諸社会は、これまでではどちらかといえば「近代」から遠いところに位置してきた。しかし現在、市場経済の浸透、開発援助計画の実施、学校教育やキリスト教の普及、国家行政の浸透などによって、こうした社会は大きく急速な変容をとげようとしている。ナイロビ FS では、人びとの生業活動の成立条件や資源利用の量的な把握・分析と、変容に関する社会的・経済的・政治的な要因の解析を統合することによって、こうした変容の過程を明らかにし、文理融合的な調査研究をととして諸社会の動態を解明することを目指す。



- ・キーワード : 資源利用、牧畜、乾燥地農業、市場経済、「開発」
- ・カウンターパート : ナイロビ大学アフリカ研究所、マケレレ大学社会科学部
- ・派遣者数

	平成 14 年度			平成 15 年度			平成 16 年度			平成 17 年度			平成 18 年度		
	教員	若手	学生	教員	若手	学生	教員	若手	学生	教員	若手	学生	教員	若手	学生
21COE	1		3	2		3	1		4	1	1	2	1		
21COE 以外				1		2	2		1	1		3	2	1	4

(下段は 21COE プログラム以外の経費による派遣者数)

【活動内容】

(1) ステーションの概要

ナイロビ・フィールド・ステーション(ナイロビ FS)は、ナイロビ市内で借用したフラットにオフィスをかまえて教育研究の拠点とし、地域的にはケニアとウガンダの両国をカバーしてきた。オフィスでは、コンピュータや電話機・ターミナルアダプタの設置、電話番号の取得とプロバイダへの加入、ISDN によるインターネットへの接続をおこない、インターネット環境を整備した。また、机・椅子・本棚・ホワイト・ボードを設置して、調査資料の整理やセミナーの開催が実施できる環境を整え、また、ナイロビではしばしばおこる停電にそなえてバッテリーによってコンピュータの電源を確保し、さらにまた、簡単な自炊や宿泊ができる体制も整えた。

この FS は、通常は現地調査に出かけた大学院生や教員が、リレーによって管理・運営をおこなったが、2005 年度には、本プログラムによって雇用された COE 研究員がこの仕事を担当した。

(2) 大学院生の派遣とオンサイト・エデュケーション

◆本プログラムと別資金をあわせると、ナイロビ FS では上記の表のように、延べ 12 人の教員と 22 人の大学院生を現地に派遣し、大学院生のフィールドワークの現場に教員が同行することをおして、オンサイト・エデュケーションを実施した。ナイロビ FS を利用した大学院生の氏名(入学年度)と研究テーマは、以下のとおりである。

◆ 中村香子(平成 10 年度入学)・「東アフリカの牧畜民サンプルの身体装飾と年齢体系の変容に関する人類学的研究」

◆ 孫曉剛(平成 13 年度 3 年次編入学)・「東アフリカの牧畜社会における持続可能な牧畜モデルの構築に関する社会生態学的研究」

- ◆ 内藤直樹（平成 10 年度入学）・「アフリカ牧畜民社会における生業変容と民族間関係の動態に関する人類学的研究」
- ◆ 坂井紀公子（平成 10 年度入学）・「ケニアにおける国家とマーケット商人の関係に関する研究：マチャコス市の事例より」
- ◆ 白石壮一郎（平成 10 年度入学）・「東アフリカ小農社会における農業の商業化にともなう生業構造と社会関係の再編に関する研究」
- ◆ Mutua Charles Musyoki（平成 16 年度第 3 年次編入学）・「ケニアにおける野生動物保護と住民生活の軋轢に関する研究」
- ◆ 佐藤靖明（平成 13 年度入学）「北東および東アフリカにおける『根栽文化』に関する人類学的研究」
- ◆ 波佐間逸博（平成 15 年度入学、ASAFAS 研修員）・「北東部ウガンダ牧畜社会における家畜認識に関する人類学的研究」
- ◆ 庄司航（平成 16 年度入学）・「ケニア北西部のトゥルカナ社会における家畜の採食行動と植生に関する研究」
- ◆ 井上真悠子（平成 17 年度入学）・「東アフリカにおける絵画芸術ティンガティンガと観光化に関する人類学的研究」
- ◆ 大門碧（平成 18 年度入学）・「ウガンダ都市部における演劇活動に関する人類学的研究」
- ◆ 関根悠里（平成 18 年度入学）・「ケニア東部のオルマ社会における家畜の贈与・交換に関する人類学的研究」

（3）研究協力体制の強化

- ◆ ナイロビ FS の教育研究活動は、ナイロビ大学アフリカ研究所との密接な協力関係のもとに実施している。平成 16 年 5 月 25 日～6 月 7 日の期間、同研究所の所長アイザック・ニャモンゴ（Isaac Nyamongo）氏を日本に招へいし、京都大学とのあいだで結んできた部局間の協力協定を再検討し、あらたに京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科とのあいだに研究交流協定を締結して、今後の協力体制を確認した。
- ◆ ニャモンゴ氏は、6 月 5 日には第 122 回アフリカ地域研究会において、「Ecological Change and Malaria Risk in a Unstable Malaria Region (Gusii) Southwest Kenya（ケニア南西部のマラリアが多発する地域〔グシイ〕における生態学的な変化とマラリアのリスクについて）」と題する講演をおこない、活発な討論を交わした。また、名古屋で開かれた第 41 回日本アフリカ学会学術大会にも参加し、日本のアフリカニストとの交流を深めた。
- ◆ また、ナイロビ大学アフリカ研究所とのあいだでは、トヨタ財団による研究助成金「難民と地域住民の共存をめざして―ケニア共和国からの提言―」（代表者：京都大学・太田至）や、科研費による「東アフリカ遊牧圏における生活安全網と地域連環の統合的研究」（代表者：筑波大学・佐藤俊）に関する共同研究も実施している。

（4）成果と今後の展望

- ◆ ナイロビ FS ではホームページを公開し、ナイロビ FS の活動内容や ASAFAS の教員・大学院生たちが調査をおこなっているケニアとウガンダ各地の現知事状や学術情報など、当該地域に関するさまざまな情報を発信してきた(<http://areainfo.asafas.kyoto-u.ac.jp/nfs/nfstop.html>)。
- ◆ FS を活用して実施したフィールドワークの成果として、5 年間に 7 冊の編著書と約 50 編の論文を公表した。本プログラムから助成を受けて英文で出版した著作には、Nakamura, K. 2005. *Adornments of the Samburu in Northern Kenya: A Comprehensive List*. The Center for African Area Studies, Kyoto University, Kyoto. と、Sun, X., and N. Naito, (eds.) 2007. *Mobility, Flexibility and Possibility of Nomadic Pastoralism in Asia and Africa*, ASAFAS, Kyoto. の 2 冊がある。本プログラムの最終成果として京都で開催された国際シンポジウム、“Crossing Disciplinary Boundaries and Re-visioning Area Studies: Perspectives from Asia and Africa,” (November 9-13, 2006, Kyoto) では、ナイロビ FS のメンバーが企画して、“Mobility, Flexibility, and Potential of Nomadic Pastoralism in Eurasia and Africa,” (November 13, 2006, Kyoto) というワークショップを実施し、国内外から多くの参加者を得て討論をかわしている。
- ◆ このようにナイロビ FS は、現地調査の実施、大学院生の臨地教育、現地の教育研究機関をはじめとする各国の研究者との協力体制の強化に、おおきな役割を果たしてきた。今後、なんらかの資金を投入して、構築してきた FS の機能を維持・発展させてゆくことが必要である。

【年次報告】

平成 15 年度

(1) 研究活動および学生のフィールドワークの支援

◆ナイロビ・フィールド・ステーション（ナイロビ FS）は、ナイロビ市内で借用したフラットにオフィスをかまえて調査研究の拠点としており、地域的にはケニアとウガンダの両国をカバーしている。カウンターパートは、ナイロビ大学アフリカ研究所およびウガンダのマケレレ大学社会科学部である。

◆2003 年度には 2 人の教員と 3 人の大学院生が当プログラムの資金によって海外に派遣され、FS を活用しながら教育研究に従事した。これ以外にも、別資金によって渡航した 1 名の教員と 2 名の ASAFAS 大学院生がナイロビ FS を利用している。

◆教員の派遣と海外調査

太田至（ASAFAS 教員）は 7/26-9/15 の期間、トヨタ財団の委任経理金によってケニアとタンザニアに出張し、フィールド・ステーションの整備や大学院生（中村香子、孫曉剛）の臨地教育、ナイロビ大学との共同研究にたずさわると同時に、「東アフリカ牧畜社会の社会変容に関する研究」のためのフィールドワークを実施した。また、タンザニアで、川西陽一（ASAFAS 大学院生：平成 14 年度入学）の臨地教育にたずさわった。

田中二郎（ASAFAS 教員）は、10/18-11/18 の期間、海外出張した。まず、エチオピアのアジスアベバ大学で開かれた「フィールド・ステーション連携ワークショップ」に参加したあと、ケニアでは、内藤直樹（ASAFAS 大学院生：平成 10 年度入学）の臨地教育を実施した。

太田至は、10/18-11/6 の期間、エチオピアとケニアに出張し、アジスアベバ大学で開催された「フィールド・ステーション連携ワークショップ」に参加したあと、ケニアでは、内藤直樹（ASAFAS 大学院生：平成 10 年度入学）の臨地教育を実施した。

◆ナイロビ FS を利用した大学院生：氏名（入学年度）・渡航期間・調査経費・派遣国・研究テーマ

中村香子（平成 10 年度入学）・8/3-10/22・当プログラム・ケニア・「東アフリカの牧畜民サンプルの身体装飾と年齢体系の変容に関する人類学的研究」

孫曉剛（平成 13 年度 3 年次編入学）・8/20-10/3・科研費・ケニア・「東アフリカの牧畜社会における持続可能な牧畜モデルの構築に関する社会生態学的研究」

内藤直樹（平成 10 年度入学）・10/18-11/16・科研費・ケニア・「アフリカ牧畜民社会における生業変容と民族間関係の動態に関する人類学的研究」

坂井紀公子（平成 10 年度入学）・12/1-2/29・当プログラム・ケニア・「ケニアにおける国家とマーケット商人の関係に関する研究：マチャコス市の事例より」

白石壮一郎（平成 10 年度入学）・12/7-3/15・当プログラム・ウガンダ・「東アフリカ小農社会における農業の商業化にともなう生業構造と社会関係の再編に関する研究」

(2) フィールド・ステーションの整備

◆ナイロビ FS では、2003 年 6 月にナイロビでフラットを借用して、教育研究活動の基地とした。15 年度には、のべ 3 人の教員と 5 人の大学院生が利用した。

◆FS では、ASAFAS の大学院生と教員およびナイロビ大学の研究者が随時、共同セミナーを実施した。

◆太田至は、7/26-9/15、10/18-11/6 の出張期間を利用して、このフラットの整備をした。具体的には、コンピュータや電話機、ターミナルアダプタの設置、電話番号の取得とプロバイダへの加入、ISDN によるインターネットへの接続をおこない、インターネット環境を整備した。また、机・椅子・本棚・ホワイトボードの設置、停電時の電源確保、不在時の管理体制の確立、床のワックスがけなどの居住環境の整備等々もおこなった。

◆このステーションは、フィールドワークに必要な機材・物資を保管するためにも使っている。

◆現在、ナイロビ FS のホームページを作成中で、近日中には公開する予定。

(3) 共同研究

◆太田至は、ナイロビ大学アフリカ研究所の所長と、今後の共同研究の可能性、具体的には共同のプロジェクト

の実施について話しあい、また、2004 年度に日本アフリカ学会学術大会がひらかれる期間 (5/29-30) にあわせて、5/25-6/7 の期間に訪日していただくことにした。この機会に、日本のアフリカ研究者との交流を深めてもらうと同時に、ナイロビ大学アフリカ研究所と京都大学アフリカ地域研究資料センターのあいだで締結している MOU を再検討する予定である。

◆トヨタ財団による助成金によって「難民と地域住民の共存をめざして-ケニア共和国からの提言-」(2001 年 11 月-2003 年 10 月) という研究プロジェクトを、ナイロビ大学アフリカ研究所と共同ですすめた。

◆上記のプロジェクトにはナイロビ大学修士課程の学生も参加しましたが、太田至はこの学生が提出した修士論文を読み、フィールド・ステーションで討論をおこなうなど、実質的な指導もした。この学生は 2004 年 3 月 15 日に、修士論文をめぐる口頭諮問とディフェンスを無事に終えた。

平成 16 年度

(1) 概要

◆平成 16 年度には、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 (ASAFAS) の教員 1 人と大学院生 4 人が当プログラムの資金によって派遣され、ナイロビ FS を活用しながら教育研究に従事した。これ以外にも、別資金によって渡航した ASAFAS の教員 2 名がナイロビ FS の管理・運営にあたり、また、別資金で渡航した ASAFAS の大学院生 1 名がナイロビ FS を利用している。

◆ナイロビ FS は、京都大学の教員・大学院生以外にも、弘前大学、岡山大学、筑波大学などの教員と大学院生によって活用されている。

(2) フィールド・ステーションの整備と運用

◆ナイロビ FS を運営してゆくためには、若手研究者を常駐させることが必要だが、現在は資金的な余裕がない。そのため、FS を利用する教員や大学院生が、オフィス機器の維持・管理や光熱水料の支払いまで、さまざまな雑用をこなしつつ運用している。ナイロビでは電話が不通になる、停電する、断水する、車が故障する、ドアのロックが破損するなど、さまざまなアクシデントが発生し、それに対処するためには相当の労力が必要になる。

◆平成 17 年度には、当プログラムによって若手研究者を雇用して、ナイロビ FS の管理・運営、教育研究の補助、そしてナイロビ大学やマケレレ大学、アジスアベバ大学 (エチオピア)、ソコイネ農科大学 (タンザニア) との共同研究の推進などをおこなう予定である。

(3) 研究協力体制の維持

◆ナイロビ FS の教育研究活動は、ナイロビ大学アフリカ研究所との密接な協力関係のもとに実施している。平成 16 年 5 月 25 日～6 月 7 日の期間、同研究所の所長アイザック・ニャモンゴ (Isaac Nyamongo) 氏を日本に招へいし、京都大学とのあいだで結んできた部局間の協力協定を再検討し、あらたに京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科とのあいだに研究交流協定を締結して、今後の協力体制を確認した。

◆ニャモンゴ氏は、6 月 5 日には第 122 回アフリカ地域研究会において、「Ecological Change and Malaria Risk in a Unstable Malaria Region (Gusii) Southwest Kenya (ケニア南西部のマラリアが多発する地域 [グシイ] における生態学的な変化とマラリアのリスクについて)」と題する講演をおこない、活発な討論を交わした。また、名古屋で開かれた第 41 回日本アフリカ学会学術大会にも参加し、日本のアフリカニストとの交流を深めた。

◆太田は、平成 16 年 8 月 2 日にケニア野生生物公社ナイロビ本部において、研究開発部門の副部門長であるリチャード・バギネ (Richard Bagine) 氏と面談し、「ケニアにおける野生動物保護と地域住民生活の軋轢」に関する研究についての討論をおこなうとともに、今後の協力体制について協議した。

◆太田は、科研費による共同研究「東アフリカ遊牧圏における生活安全網と地域連環の統合的研究」(研究代表者: 佐藤俊 [筑波大学]) に分担者として参加しているが、この研究はナイロビ大学アフリカ研究所およびアジスアベバ大学エチオピア研究所との共同研究として実施している。

平成 17 年度

(1) 概要

◆平成 17 年度には、ASAFAS の教員 1 人と大学院生 2 人が当プログラムによって派遣され、ナイロビ FS を活用しながら教育研究に従事した。これ以外にも、科研費によって渡航した ASAFAS の教員 1 名がナイロビ FS の管理・運営にあたり、別資金で渡航した ASAFAS の大学院生 3 名がナイロビ FS を利用した。また、COE 研究員 1 名を雇用してナイロビに派遣し、FS の管理運営、大学院生のフィールドワークの支援、現地の教育研究機関との共同研究の実施、そして国際ワークショップへの参加などの活動をおこなった。

(2) フィールド・ステーションの整備と活用

◆ナイロビ FS のホームページを公開した。ナイロビ FS の活動内容や ASAFAS の教員・大学院生たちが調査をおこなっているケニアとウガンダ各地の情報などを紹介している。<http://areainfo.asafas.kyoto-u.ac.jp/nfs/nfstop.html>

◆ナイロビ FS では、2005 年 8 月 3 日にフィールド・ステーション・セミナーを実施して、庄司航（ASAFAS 大学院生：平成 16 年度入学）が、「北ケニアにおける金鉱床の形成と牧畜民トゥルカナの採掘活動」と題する発表をおこなった。

◆太田（ASAFAS 教員）は、2005 年 9 月 23 日にナイロビ FS でナイロビ日本人学校の中学 3 年生たちとの交流をおこなった。同校が実施している「総合的な学習の時間」において「私たちはどこから来て、どこへ行くのか」というテーマで自主的な学習にとりくんでいる生徒たちがナイロビ FS を訪問し、ケニアにおけるエスニック・グループの形成や民族間関係、そして文化の多様性について太田と議論した。

(3) 研究協力体制の維持

◆COE 研究員の孫暁剛は、タンザニアとエチオピアで開催した国際ワークショップに参加しましたが、この二つのワークショップはそれぞれ、ソコイネ農業大学地域開発センター（タンザニア）およびアジスアベバ大学社会科学部（エチオピア）とのあいだに ASAFAS が構築してきた密接な協力関係のもとで実施された。

◆梶（ASAFAS 教員）は、マケレレ大学言語研究所との協力体制を検討した。同研究所はウガンダにおける言語教育と研究の中心地であり、さまざまな民族語の研究・教育に従事しています。梶は、前所長の John Kalema 博士と会談し、今後の日本とウガンダの言語研究における協力体制について討議した。

平成 18 年度

(1) 概要：

◆ナイロビ FS では、平成 15 年 6 月からナイロビでフラットを借用して、現地調査と共同研究の拠点としています。地域的にはケニアとウガンダの両国をカバーし、ナイロビ大学アフリカ研究所（ケニア）とマケレレ大学社会科学部（ウガンダ）との協力体制のもとで運用しています。

◆平成 18 年度には、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科（ASAFAS）の教員 1 名が当プログラムによって派遣され、ナイロビ FS の管理・運営にあたりました。これ以外にも、科研費によって渡航した ASAFAS の教員 2 名と研究員 1 名が、ナイロビ FS を活用しながら教育研究に従事し、また、別資金で渡航した ASAFAS の大学院生 4 名がナイロビ FS を利用して研究に励みました。

◆ナイロビ FS は、京都大学の教員・大学院生以外にも、弘前大学、岡山大学、筑波大学、東京外国語大学、大阪大学などの教員と大学院生によって活用されています。

◆21 世紀 COE プログラムは本年度で終了しますが、ナイロビ FS は、ASAFAS の教育研究の推進のために活用され、おおきな成果をあげてきましたし、また、現地の教育研究期間との連携を深めるためにも重要な役割を果たしてきました。この活動を発展させてゆくためにはそれなりの資金が必要ですが、いろいろな方途を模索しつつ、FS の継続的な活用をめざしたいと思います。

(2) 教員による臨地教育と研究活動：

◆水野一晴（ASAFAS 教員）は、平成 18 年 7 月 25 日～8 月 6 日の期間、科研費によってケニアに出張し、ナイ

ロビ FS の整備をおこなうとともにケニア山における氷河と植生の調査を実施しました。

◆太田至 (ASAFAS 教員) は、平成 18 年 11 月 21 日～27 日の期間、当プログラムによってケニアに出張し、ナイロビ FS の整備、大学院生関根悠里 (平成 18 年度入学) と大門碧 (平成 18 年度入学) の臨地教育をおこなうと同時に、ナイロビ大学アフリカ研究所とのあいだで協力体制に関する打ち合わせをおこないました。

◆梶茂樹 (ASAFAS 教員) は、平成 19 年 1 月 4 日～22 日の期間、科研費によってウガンダに出張し、大門碧 (平成 18 年度入学) の臨地教育をおこないました。また、マケレレ大学言語研究所とのあいだで研究協力に関する討議をおこなうとともに、「ウガンダ西部のバンツー系諸語の記述比較研究」に関する現地調査を実施しました。

◆孫暁剛 (JSPS 外国人特別研究員/ASAFAS) は、平成 18 年 8 月 3 日～27 日の期間、科研費によってケニアに出張し、大学院生庄司航 (平成 16 年度入学) の研究支援をおこなうとともに、「東アフリカ遊牧社会における『近代化の経験』と生活の再構築」に関する現地調査を実施しました。

(3) 大学院生の研究活動：氏名 (入学年度)・渡航期間・調査経費・派遣国・研究テーマ：

◆庄司航 (平成 16 年度入学)・平成 18 年 4 月 1 日～9 月 6 日・私費・ケニア・「ケニア北西部のトゥルカナ社会における家畜の採食行動と植生に関する研究」

◆大門碧 (平成 18 年度入学)・平成 18 年 10 月 26 日～平成 19 年 1 月 21 日・「魅力ある大学院」イニシアティブ・プログラム・ウガンダ・「ウガンダ都市部における演劇活動に関する人類学的研究」

◆関根悠里 (平成 18 年度入学)・平成 18 年 11 月 20 日～平成 19 年 3 月 11 日・「魅力ある大学院」イニシアティブ・プログラム・ケニア・「ケニア東部のオルマ社会における家畜の贈与・交換に関する人類学的研究」

◆Mutua Charles Musyoki (平成 16 年度第 3 年次編入学) 平成 18 年 12 月 19 日～平成 19 年 1 月 10 日・私費・ケニア・「ケニアにおける野生動物の保護と住民生活のあいだの軋轢に関する研究」

(4) 研究協力体制の維持：

◆梶 (ASAFAS 教員) は、科学研究費補助金基盤研究 (C) 企画調査「アフリカにおける未開発言語の記述言語学的研究」によって、ウガンダ西部のバンツー系諸語を中心に記述言語学的研究状況を視察しました。ウガンダ西部には、南から Kiga 語、Nkore 語、Tooro 語、Nyoro 語と比較的大きな言語が話されていますが、Nyoro 語の北にはさらに Gungu 語、Tooro 語の西に Amba 語などの少数言語が話されており、とりわけ Gungu 語については、バンツー系の最北端の言語であり、ルオ系の言語と混じりあっていると現地の人は証言しています。Tooro 族と Nyoro 族は、ルオ系民族のインパクトを受けて王国を作ったと言われていますが、彼らの言語には、一部の人名以外、まったくルオ系諸語の痕跡が見られず、Gungu 語にはそれが残っている可能性があります。この点が解明されれば、かつてのルオ系民族とバンツー系諸族の係わりについて証拠を見出すことができるかもしれません。また、現地では、何人かの言語学の若手研究者と会いましたが、彼らの多くは、博士号未取得者であり、日本で博士号を取ることに強い希望が出されました。

◆太田 (ASAFAS 教員) は、科研費による共同研究「東アフリカ遊牧圏における生活安全網と地域連環の統合的研究」(研究代表者：佐藤俊 [筑波大学]) に分担者として参加していますが、この研究はナイロビ大学アフリカ研究所およびアジスアベバ大学エチオピア研究所との共同研究として実施しています。

【ザンビア】(FS HP : <http://areainfo.asafas.kyoto-u.ac.jp/zfs/>)

- ・代表者 : 荒木茂
- ・分担者 : 島田周平、水野一晴、高田明
- ・研究テーマ : 南部アフリカにおける社会経済変動と環境・地域住民の変容
- ・研究内容 : 南部アフリカは、大資本による経済開発と地域住民・環境の変容が、アフリカのなかでもっとも先鋭的に表われているという地域的な特徴をも



つ。地域住民にとって、それは周辺化（marginalization）と同時に包含（involvement）を意味し、政策的には自然保護、住民保護を目的とした住民参加型持続的開発を軸に展開している。アフリカで現在主潮となっている開発論の基礎には、このようなマイノリティである地元民の保護が底流にあるとの観点から、国家機構、周辺住民の生業変容、開発政策の構図を明らかにし、アフリカ発展論に寄与する。

- ・キーワード：南部アフリカ、社会経済変動、環境変動、住民参加型開発、環境保護政策
- ・カウンターパート：ザンビア大学社会経済研究所
- ・派遣者数

	平成 14 年度			平成 15 年度			平成 16 年度			平成 17 年度			平成 18 年度		
	教員	若手	学生	教員	若手	学生	教員	若手	学生	教員	若手	学生	教員	若手	学生
21COE	2			2		3	3		2	1		2	1		1
21COE 以外						3			3	2		4			7

（下段は 21COE プログラム以外の経費による派遣者数）

【活動内容】

（1）設立と経過

ザンビア FS は、21 世紀 COE プログラムの中の 1 つの FS として、南部アフリカ諸国（ザンビア、マラウィ、ナミビア、ボツワナ、レソト、ジンバブウェ、モザンビーク）における臨地研究の拠点として設立され、大学院生の臨地研究支援と研究指導、ネットワーク型の研究推進としての役割を果たしてきた。FS は「機関型」として位置付けられ、ザンビア大学経済社会研究所（Institute of Economic & Social Research、University of Zambia）を基地として、同研究所長代理ムレンガ博士との連携のもとに、調査許可の取得、臨地研究の円滑な推進をはかるほか、在ザンビア日本大使館民宅 1 室の貸与を受け、大学院生の宿泊と日本との緊密な連絡、インターネットを通じた情報収集などの便宜が図られてきた。一方、他の南部アフリカ諸国においては、従来型のフィールドを主体とした研究が進められたが、以下に述べるとおりこれまでの個別臨地研究の枠をこえた、ネットワーク型の研究を推進する雰囲気が醸成され、成果となってあらわれたことは本プロジェクトの 1 つの大きな収穫であった。

（2）成果

5 年間のプロジェクト期間中に派遣された教員は、のべ 5 名、博士予備論文修了後の大学院生 9 名、博士予備論文作成前の大学院生で、現地指導をうけたものは 16 名に及ぶ。その成果として結実した博士予備論文 10 編、投稿論文は 15 編で、教員による投稿論文・著書等は 37 編であった。現地において大学院生は派遣教員から指導を受け、また現地研究者をまじえたセミナーを通じて、自身の研究課題を調査国の研究状況と重ね合わせながら、研究を進めることができた。日本国内においては、「南部アフリカ研究会」が大学院生の発案で組織され、関係する大学院生、教員が中心となって 5 年間で合計 15 回のセミナーが開催された。その内容は年次報告に記したとおりである。また、平成 18 年 2 月 18 日には、東京においてワークショップ「土地から展望する南部アフリカ」が、平成 18 年 9 月 9 日には、京都シンポジウムの一環としてサテライト・ワークショップ「Globalization and Locality in Southern Africa（南部アフリカにおけるグローバル化とローカリティ）」が開催された。これらは、集会の立案、実施、成果の出版にわたって大学院生が中心におこなわれ、若手地域研究者の育成と、国内外の地域研究者との交流促進に大きな貢献を果たしたことが評価できる。また、年度末の 3 月には国内研究会「現代南部アフリカと地域研究：研究と実践の融合をもとめて」が予定されている。

（3）南部アフリカ地域研究としての成果

本 FS の研究テーマは、「南部アフリカにおける社会経済変動と環境・地域住民の変容」であった。このテーマは、個々のフィールドにおける臨地研究をより大きな枠組みである、国家、地域という中に位置づけることによって、臨地研究における問題意識の深化とその設定を明確にし、ミクロレベルの人々の生活、生態環境に関する研究とマクロレベルの政治・経済・開発研究とを架橋することをめざしたものであった。地域研究には、ミクロ

とマクロの視点が必要であり、その両者が地域の特殊性、共通性と深く関係しているからである。それを通じて南部アフリカという実態をアフリカ、世界の中に位置づける試みである。

南部アフリカ諸国では構造調整政策導入以降、南ア資本の流入が著しいという点が共通にみられ、大資本による経済開発が、環境と地域住民の生活に大きな影響を与えている。また、政治的独立以後も白人が居住し、経済的に大きな実権を握っている国が多い点で、他のアフリカ諸国と際立った差異を示している。本FSの活動によって支援された研究成果は多岐にわたるが、あえて総括をおこなうと、ローカルな人々がこのような「外圧」にさらされながらも、それらを自分たちのコンセプトに読みかえ、日常を切り開いていくかたくなな生活実践の諸相を明らかにしているといえるだろう。しかし、経済開発が優先される構造のなかではマイノリティにとどまり、ポピュリズム的な視点は後退しがちであるのも事実である。土地制度をはじめとする植民地時代の遺制を多く受け継ぎながらも、人々は柔軟な対応をする中で静かな変革の流れを見極め、外的環境の変化を内的発展の契機としてどのようにとらえ、新たな仕組みを創造していくのかを今後見極める必要がある。

(4) 反省と今後の展望

本FSはザンビアのルサカに設置されたが、活動範囲が南部アフリカ諸国にまたがっていたため、ザンビア以外の国における研究支援という形では不十分にならざるを得なかった。現地研究者とともに各国の研究成果をネットワーク化し、さらにそれらをフィールドにおける連携研究へと発展させるような、国をまたがった研究拠点を形成するという点では、時期早々、力量不足であったと言わざるを得ない。しかし、各国における研究活動を通じて、ザンビア大学、ボツワナ大学、ナミビア砂漠研究所などとの連携が深まり、今後も大学間協定などにもとづく研究協力推進の条件は整いつつあるので、21世紀COEプログラム後も、魅力ある大学院プログラム、グローバルCOEプログラム(仮)などの後継プログラムを通じて、南部アフリカにおけるネットワーク型地域研究拠点の拡充を図っていく必要がある。南部アフリカ地域研究は、開発論が政治的コンテキストの中で最も先鋭的に表れているという点でアフリカの中でもユニークな位置を占めている。これらの視点を他地域と関連させながら、より実践的な地域研究への道をさぐりたい。

【年次報告】

平成15年度

(1) 研究活動

ザンビアFSは、「南部アフリカにおける社会経済変動と環境・地域住民の変容」をテーマに、南部アフリカ諸国に共通する問題についてのネットワーク研究をめざして活動を行なっている。調査対象国は現在、ザンビア、ボツワナ、ナミビア、ジンバブウェ、マラウィ、南アフリカである。今年度は、教員と大学院生計4名が派遣され、以下の成果が得られた。

◆村尾るみこ(平成12年度入学)は、2003年10月17日から3月31日までの間、ザンビア西部州ザンベジ川東岸の村において、生態調査、農耕体系における調査をおこなった。その結果、ロジとアンゴラ移民であるブンダとの関係は村の生態環境と歴史によって様々であり、土地利用の面でも相互依存的な関係があることがわかった。今後、現金経済化の浸透に対して、異なる背景をもつ民族がどのような生活戦略をもって対応しようとしているのかを、生態環境との関係から明らかにしていく。

◆丸山淳子(平成11年度入学)は、2003年10月25日から2004年3月10日までの期間、ボツワナ共和国ハンツィ・ディストリクト、コエンシャケネ集落およびその周辺の集落にて、狩猟採集民サンの再定住による社会変容に関する現地調査をおこない、住民間の食物の交換ネットワークと、集落内の居住形態の編成を明らかにした。また、他の集落においても調査を開始し、1930年代以降のセントラル・カラハリにおけるサンの移住史についての資料を収集した。以上の結果をまとめて、再定住による急激な生態・社会環境の変化へのサンの対処のあり方と、そこに見られるサン社会の特質とその変容を考察する。

◆中山節子(ASAFAS研修員)は、2004年1月30日から3月31日にかけて、マラウィ共和国・マラウィ湖辺の5村において、漁民のライフヒストリ、漁具の履歴に関する聞き取りを行なった。その結果、これまで「伝統漁」と位置付けられてきた調査地での漁撈活動が、技術的にも社会的にも近代以降に南部アフリカ経済圏に包含され

る過程で大きく変容したものであることがわかった。100 年以上にわたる南部アフリカ諸都市への出稼ぎと経験が引き金となって、漁具や漁撈技術の革新、漁獲物の分配・流通をめぐる社会関係が変化してきた過程を、聞き取りと史料の検討から再構築する。

◆荒木茂（ASAFAS 教員）は、2004 年 10 月 18 日から 11 月 16 日にかけて、ザンビア東部州チャディザ県カリザ村とナミビア北部オムサティおよびオシャナ州の 4 村において、最近の農村変容に関する調査をおこなった。カリザ村では、構造調整政策導入以後トウモロコシの価格維持政策が廃止された結果、農民は牛糞を利用した屋敷畑の造成、綿花、タバコなどの商品作物への転換が顕著になっている。ナミビアでは、生態環境の異なる村において畑の面積、家族構成、人口を調査し、土地の人口扶養力を算出した。

（2）現地ステーション機能の整備

◆在ザンビア日本大使館勤務の日本人宅一室を借り受け、ザンビア FS に関わる学生による情報収集、連携研究のためのコンピュータ、インターネット環境の整備をおこなった。GIS を利用した参加型データベースの構築と、データ収集の作業を現在継続中。

◆ザンビア大学社会経済研究所を拠点にして、日本人研究者、アフリカ人研究者の南部アフリカ研究ネットワークを構築中である。ムレンガ同研究所長、チズマヨ理学部教授がカウンターパートとなり、南部アフリカ諸国のカウンターパート同士の連携を図る。

◆ムレンガ同研究所長は、平成 16 年 11 月から 17 年 3 月まで当研究科の客員助教授として招聘が予定されており、その間、集中的な研究会の開催によって、南部アフリカにおける地域研究の構図を明らかにする。

平成 16 年度

（1）概要

◆16 年度は ASAFAS 教員と大学院生、計 5 名が派遣されました。また 11 月から 3 月までの 5 ヶ月間、ザンビア大学経済社会研究所・所長代理のムレンガ博士が ASAFAS 客員研究員として滞在され、数回のセミナーおよび研究会がもたれた。

◆また、平成 17、18 年度に予定されている、国内および国外（ザンビア：ルサカ）のワークショップにむけて具体的な活動計画を作成した。

（2）研究活動および教員、学生の派遣

◆村尾るみこ（平成 12 年度入学）は、2004 年 4 月 1 日から 8 月 4 日までの期間、ザンビアにおいてアフリカ南部に広がるカラハリ砂層帯に暮らす人びとの生業に関する現地調査をおこなった。ザンビア西部セナング県リニエック村において、アンゴラ紛争を逃れて移住してきた人びと（以下、移住民）が、新たな自然環境・社会環境の中で、どのように生活を再編成してきたのかを、移住前後の政治・経済的背景の変化とそれに伴う耕地利用の変遷から明らかにした。マクロな政治・経済的背景の変化については、大学図書館や中央統計局などで、またミクロなものについては村での聞き取りにより情報を収集した。耕地利用の変遷は GPS で実測し、分配、相続、処分に関する情報とあわせて調査した。さらに、生業の中心となっているキャッサバ栽培についても調査した。

◆藤岡悠一郎（平成 14 年度入学）は、乾燥地域における樹木利用の変容と植生動態を研究テーマとして 2004 年 8 月から 2005 年 3 月までナミビアにおいて現地調査をおこなった。調査はナミビア北部に住む農牧民オヴァンボを対象とし、特に植生の変化が著しい都市近郊の村で実施した結果、以下の点が明らかになった。

ブッシュ・エンクローチメントによる植生変化と住民の利用による樹木の減少が問題となっている調査村では、人口密度の低い遠隔地に設けられたウシの放牧キャンプの周辺土地が、樹木資源および食用となる動植物資源を利用する上で重要な役割を担っている。

ウシの放牧キャンプを持たない大部分の世帯においても、それを持つ世帯からの贈与によって資源の利用機会を得ている。特に近所に住む世帯間の関係は「首の骨のようなもの」と表現されるほど重要視され、様々な自然資源が近所間で贈答されている。また、樹木の中で最も重要視されてきた果樹に関しても近年では伐採の対象となりつつある。

◆荒木茂（ASAFAS 教員）は、2004 年 11 月 11 日より 12 月 3 日にかけて、ザンビアおよびジンバブウェにおいて、フィールド・ステーションの整備（現地ステーション活動の項参照）、院生の臨地研究指導、および現地調査をおこなった。ザンビア北部州ムピカ県においては、タザラ回廊農業開発プロジェクト地域の入植状況に関する現地調査を、ルサカ市チャンババレーにおいては成澤徳子（平成 16 年度入学）、中央州シアボンガ県においては淡路和江（平成 16 年度入学）の臨地研究の指導をおこなった。

ジンバブウェにおいては、南部マシング州において、白人所有の商用地域と伝統的な共有地における土地利用の実態に関する調査をおこなった結果、もともと人口希薄地帯であったこの州では、北部高地にみられたような白人の土地収奪は顕著にはみられなかったこと、共有地ではショナの人々の人口増加により土地不足が顕在化しており、それが背景となって商用地域への黒人の侵入がおこっている現状が明らかとなった。

◆水野一晴（ASAFAS 教員）は、2004 年 11 月 17 日から 12 月 5 日まで、ASAFAS の大学院生、吉田美冬（平成 16 年度入学）の調査経過の把握のため、ナミビアに出張した。ナミビアのウインドフックでは、ナミビア砂漠研究所を訪れ、半乾燥地の環境変動に関する情報交換および研究連絡をおこなった。そしてカオコランドのプロスを訪れ、ゾウによる森林破壊の程度やその影響について観察し、またゾウをとりまく環境や人間活動について調査した。近年、プロスのゾウの個体数や村の人口が増えているため、その原因や影響について検討した。現地では藤岡悠一郎、吉田美冬とゼミをおこなって植生－動物－人間活動のかかわりについて議論し、また、吉田の博士予備論文に対する指導をおこなった。

◆高田明（ASAFAS 教員）は、2005 年 2 月 20 日から 3 月 14 日にかけて、ボツワナ共和国およびナミビア共和国において、研究の拠点形成および研究体制の確立のため、下記の活動をおこなった。ボツワナ共和国では、ボツワナ大学のサン/バサルワ調査・能力開発プログラムの関係者を訪問し、プログラムの活動内容について説明を受けるとともに今後の研究を通じた相互交流についての打ち合わせをおこなった。ナミビア共和国では、ナミビア大学、ハイデルベルグ大学、マンチェスター大学の研究者とナミビア北部における人類学的研究に関する情報交換を行うとともに、当地で研究をすすめている ASAFAS の大学院生、藤岡悠一郎の調査地を訪問し、今後の調査方針に関する討論をおこなった。

また、ナミビア大学においてサンの住民組織運動に関する資料収集、ナミビア北部（オニーバ）にあるナミビア福音ルーテル教会の資料館においてサンと宣教団との歴史的関係に関する資料収集、ナミビア北部のエコカ村においてサンの開発プロジェクトに関する調査をおこなった。

（3）現地ステーションの活動

◆現地ステーション機能の整備

在ザンビア日本大使館勤務の日本人宅に設置されたコンピュータは、日本とのメール連絡、情報収集ツールとして有効に機能している。また、GIS を利用した参加型データベースを構築しつつあり、南部アフリカ研究者が随時、データの集積をおこなっている。今年度にはザンビアの基本図、デジタル標高データ、ランドサット画像などのインストールをおこなった。

◆国内および国際ワークショップの準備

ザンビア FS では、平成 18 年度の夏にルサカにおいて本プログラムの主催による国際シンポジウムを開催すること計画している（その後、同年 1 月に日本で開催することに変更）。これまで臨地研究の実績が積み重ねられてきた南部アフリカの諸国（ザンビア、ナミビア、ボツワナ、マラウイ、ジンバブウェ）の成果を共有するとともに、諸国間の研究ネットワークを強化することが目的である。その前段階として、平成 17 年度末には国内ワークショップを東京でおこない、本プログラムの研究成果を広く公表するとともに、論点を明確にしてゆく計画である。このワークショップの共通テーマとしては「南部アフリカの『土地』を考える：自然・生活・制度の視点から」を予定しており、それぞれの発表テーマからの文理融合をめざす。こうしたワークショップの準備・開催は、大学院生を中心とする「南部アフリカ地域研究会」が担当する。

（4）南部アフリカ地域研究会の活動

◆南部アフリカ地域研究会は、本プログラムによるザンビア FS 開設を機に、院生による発案によってスタート

した。2003年5月における最初の会合においては、本プログラムによる派遣対象となる大学院生だけでなく、南部アフリカをフィールドとする大学院生や教官が参加して、「南部アフリカ」という枠組の中で、各自の研究を捉えなおしてみようという機運が生まれた。そして南部アフリカに関する情報を交換するとともに、議論を深める場をつくることが提案され、2003年9月には第1回の研究会が開催された。

平成 17 年度

(1) 概要

ザンビア・フィールド・ステーション（以下ザンビア FS）は、「南部アフリカにおける社会経済変動と環境・地域住民の変容」をテーマに、南部アフリカ諸国に共通する問題についてのネットワーク研究をめざして活動をおこなっている。調査対象国は現在、ザンビア、ボツワナ、ナミビア、ジンバブウェ、マラウィ、レソト、南アフリカです。今年度は ASAFAS 教員と大学院生計3名が派遣された。それに加えて、4名の大学院生が博士課程予備論文のための調査を行なうとともに、ASAFAS 教員による現地指導がおこなわれた。国内においては、南部アフリカ研究会の活動をベースに、ザンビア FS・日本アフリカ学会関東支部共催のワークショップ「『土地』から展望する南部アフリカ―自然と向き合う、変化を生き抜く―」が東京外国語大学本郷サテライトで開催され、多数の参加者を交えて有意義な討論がおこなわれた。これらの活動を集大成する形で、平成18年の21COEプログラム最終年度には、11月の国際シンポジウム（サテライトセッション）がおこなわれる予定である。

(2) 現地ステーションの活動

前年度まで在ザンビア日本大使館勤務の日本人宅を借用して、オフィスおよび連絡機能を保持してきたが、本年度には転勤されたため、現在コンピュータは JICA ザンビア事務所の調整員宅に移管されて通信・連絡業務をおこなっている。本年度には21COEプログラムによりザンビアに派遣された研究者がいなかったため情報の収集・集積はおこなえなかったが、最終年度にはザンビア大学経済社会研究所と連携して、活動記録、データベース（英語版）の集成をおこなう予定である。

(3) 南部アフリカ研究会の活動

第5回：5月12日

高田明「ナミビア北部の民族文化」

飯田雅史「ジンバブウェにおける都市とジェンダー：居住権の歴史的変遷について」

第6回：6月9日

藤岡悠一郎「ナミビア北部における Cattle Post の展開」

中山節子「湖に街ができるまで」

岡本雅博「ザンベジ川氾濫原におけるロジ社会の生業構造とその変化」

吉田美冬「ナミビア北西部の砂漠ゾウに関わる自然環境と人間活動について」

第7回：7月14日

丸山淳子「狩猟採集民サンの再定住計画」

吉川竜太「ザンビア東部における社会変容と農地利用の変化」

村尾るみこ「農からみる土地資源：ザンビアにおける作物栽培を中心に」

淡路和江「ザンビア南部半乾燥地域におけるソルガム栽培」

第8回 2006/7/21

長倉、菅野が研究計画を発表。

第9回 2月3日 ワークショップ「『土地』から展望する南部アフリカ」予行

淡路和江、村尾るみこ、丸山淳子

第10回 2月9日 ワークショップ「『土地』から展望する南部アフリカ」予行

岡本雅博、吉田美冬、中山節子

(4) ワークショップの開催

「土地」から展望する南部アフリカー自然と向き合う、変化を生き抜く

2006年2月18日に東京外国語大学本郷サテライトにおいて、表記のワークショップが開催された。このワークショップは、平成18年度に開催される国際ワークショップの準備段階として、これまで臨地研究の実績が積み重ねられてきた地域の成果をもとに、南部アフリカに共通したテーマの深化と論点の明確化を目的として開催された。開催にあたっては、21世紀COE事務局研究成果等推進委員会の財政的援助、および日本アフリカ学会関東支部の協力を得た。

話題提供者は、本研究科の大学院生6名と、東京大学大学院総合文化研究科所属の飯山みゆき氏、コメンテータには関東でアフリカ研究を推進されている方々をお願いした。ワークショップを東京で開催した目的は、我々が推進してきたミクロレベルのフィールド研究と東京の研究者が推進しているマクロレベルの経済・社会研究との交流・接点を見いだすことにあった。この点に関しては、コメンテータの方々を中心として生産的な議論が展開された。

平成18年度

(1) 概要：

◆これまでに引き続き、ザンビア・フィールド・ステーション（以下ザンビアFS）は、「南部アフリカにおける社会経済変動と環境・地域住民の変容」をテーマに、南部アフリカ諸国に共通する問題についてのネットワーク研究をめざして活動を行ってきた。本年度は、それぞれ1名のASAFAS教員と大学院生が派遣されたほか、3名の教員、7名の大学院生が南部アフリカの調査を行なったが、最終年度にあたっては、これまでの活動の集大成として11月にサテライトシンポジウムが開催されたことが大きな成果としてあげらる。また、3月には国内研究会が予定されている。これらの活動を通じて、21世紀COEプログラムが終了したのちも、活動拠点としての機能を発展・継承させていく所存である。

(2) 研究活動および教員、学生の派遣：

◆荒木茂（ASAFAS教員）は、2007年3月11日から3月23日にかけて、ザンビア大学経済社会研究所を訪問し、これまでのFS活動の総括と今後の継続を話合う予定。ザンビアFSでは、これまでコンピュータを設置し、情報の収集と集積を行ってきた。今後は、これらの情報を一般公開し、南部アフリカにおけるネットワーク拠点として、情報を発信していく。

◆吉田美冬（平成16年度入学）は、2006年8月5日から12月20日にかけて、ナミビア北西部、ホアルシブ川流域において、砂漠地域における季節河川の自然環境を利用するゾウと人々について調査を行なった。2006年は高い降水量の影響で、前回（2004年度）の調査時と比較して砂漠の植生環境が大きく変化しており、河畔林の植生について、2006年度に発芽した個体の数や分布、ゾウによる樹木の破壊の程度等について調べ、河畔林の天然更新について分析を行なった。また、前回の調査時には砂や岩石ばかりであった河畔林以外の場所にも草本が生育し、それによる野生動物や家畜動物の移動、分布パターンにも変化がみられた。住民の生活については、観光業との関わりを中心に調査を実施した。2006年には、河川をはさんだ村の対岸に白人経営のロッジがオープンした。このロッジは村のコミュニティとの合弁事業であり、ロッジ建設中の段階（2005年度～）から村の住民生活に大きな影響を与えていた。また、このロッジの建設場所がゾウの移動ルートに重なっていたため、ゾウの行動の変化についても検討を行なった。

◆成澤徳子（平成16年度入学）は、2005年12月から2006年9月にかけて、ザンビア共和国南部州モンゼ県東部のトンガ農村において、女性の生業活動に関する調査を行なった。その結果、女性は現在でも雨季に伝統的な社会関係に基づく協働的な農作業に従事する一方で、乾季に多様な現金稼得活動を活発に展開していることが明らかとなった。また、女性は地酒飲み場や儀礼の場など、伝統的な社会活動空間を生産物・加工品販売の場に組み替え、楽しみの場と経済空間を融合させることで、自分たちの「いちば」を創出していた。トンガの女性たちは、従来の社会関係を壊すのではなく、それを上手く活用することで、男性を含む当該社会に受容されやすい形での現金稼得を実現してきたと考えられる。

◆中山裕美（平成 18 年度入学）は、2006 年 10 月 12 日から 12 月 13 日にかけて、難民の能力強化を通じた自立支援の在り方を検討することを目的として、ザンビアの西部州にてフィールドワークを行なった。今回は、次年度に予定している本調査の予備調査として、調査地の決定と視察のほか、UNHCR やザンビア政府機関への訪問を行なった。今回の調査では主に、州都モングに設置されているトランジットセンターにおいてアンゴラへの帰還を控えたアンゴラ難民へのインタビュー及びアンケートを、シャンゴンボ県にあるナマウェシ・ナカンドの二村においては、キャンプから村への移住を選択したアンゴラ難民と受け入れ住民へのインタビューを行なった。異なる選択をした難民へのインタビューを通して新しい視点を見つけられたことが大きな収穫だった。また UNHCR モング事務所を尋ね難民政策に関する資料を入手したほか、政府機関からはザンビア政府主導で行われているザンビア・イニシアチブについての資料を入手した。

◆島田周平（ASAFAS 教員）は、2006 年 8 月 9 日から 8 月 29 日にかけて、ザンビアにおいて 外国出張（文部科学省科学研究費）「アフリカの農村貧困問題に関する社会経済史的研究」ならびに「「過剰な死」がもたらす社会的影響」に関する研究に関する現地調査を実施。この期間に、中村哲也と伊藤千尋（ともに平成 18 年度入学）の調査地の選定を兼ねた現地指導を行なった。また、11 月 25 日から 12 月 9 日にかけては、ザンビアにおいて外務省の「経済協力評価調査に関わる現地調査」で出張した機会に、上記二名の調査実施状況のヒヤリングならびに中山裕美（平成 18 年度入学）の調査地選定について検討。

◆水野一晴（ASAFAS 教員）は、2006 年 7 月 24 日から 9 月 14 日にかけて、ケニア山においてティンダル氷河の変動と植生の遷移について調査を行なった後、8 月 5 日にナミビアに入国。ナミビアでは、近年の環境変動と植生の遷移について調査。ナミブ砂漠では砂丘の移動量を測定し、また、2005 年 12 月より記録している気温と湿度のデータを記録計から取り出し、ナミブ砂漠の気温と湿度の年変動について分析を行なった。2006 年は例年になく降雨量が多かったため、ナミブ砂漠が草本に被われ、その植生調査のためにコドラートを設置。また、指導学生 2 名（手代木功基と山科知里、ともに平成 18 年度入学）のフィールドを探すため、おもにナミビアの西部・中部・北部を回り、調査地を選定し、調査の方針を検討した。2006 年 11 月 14 日から 12 月 17 日にかけては、ナミビアに滞在している指導学生 2 名の調査状況を把握するため、彼らの調査を訪れ、その研究指導を行なった。

◆丸山淳子（ASAFAS 教員）は、2006 年 12 月 1 日から 2007 年 1 月 19 日にかけて、南アフリカ共和国で難民問題に関する学生指導（村尾るみこ：平成 12 年度入学）、ウガンダ共和国で都市労働者に関する学生指導（大門碧：平成 18 年度入学）を行なった。またボツワナ共和国では、狩猟採集民サンが居住する再定住地において、主に居住形態の変遷およびサン間の雇用関係に関する調査を実施するほか、ボツワナ大学において調査研究の打ち合わせを行なった。

◆飯田雅史（平成 15 年度入学）は、2006 年 4 月 1 日から 8 月 7 日にかけて、前年度から引き続いてジンバブエ共和国の首都ハラレ市にて、女性を主体とした住民組織・NGO を対象とする調査を継続。中でも、1996 年に結成された国内 NGO であるジンバブエ寡婦と孤児の会（Zimbabwe Widows and Orphans Trust、以下 ZWOT）を対象として、特に彼女らの活動内容と HIV/AIDS との関係に注目した。同時に農村部におけるいくつかの HIV/AIDS 対策についてもマニカランドのパラマウントチーフであるチーフ・マコニを対象としてインタビューを行なった。

◆藤岡悠一郎（平成 14 年度入学）は、2006 年 4 月 1 日から 5 月 6 日まで、ナミビア共和国北部オシャナ州ウウクワングラ村において、農牧民オヴァンボの自然資源利用と近年におけるその変容に関する調査を行なった。なかでも、ナミビア北部で近年特徴的な現象である、キャトルポストとよばれる私設放牧地の設置に注目し、そこでの牧畜活動や資源利用活動に焦点をあて、調査村の 30 世帯に対する聞き取りや参与観察、キャトルポストの訪問などを中心に調査を実施。その結果、1980 年代以降、村の 8 世帯が村から数十 km 離れた地点にキャトルポストを設置し、新しい形態の牧畜活動を行っていることが明らかとなり、キャトルポストをもつ世帯は、都市部で職を持つ富裕世帯であり、職を通じて獲得した現金を牧畜に投資していた。すなわち、キャトルポストの増加は、就業機会の有無によってもたらされる村内の経済格差の拡大を示しているようにもみえ一方、キャトルポストを持つ世帯は、そこで得られる畜産物や厩肥・食用昆虫・建材などの自然資源を、キャトルポストを持たない世帯に贈与している実態も明らかになった。つまり、キャトルポストを設置し、そこに給与を投資するということは、富裕世帯が給料として得た現金を分配可能な自然資源の形に変える実践とみることができ、そこで得られた自然

資源を非富裕世帯に贈与するということは、経済格差を是正する試みととらえることもできると考えられた。

◆以上のほか現在、平成 18 年度入学の伊藤千尋（2006 年 8 月 9 日～2007 年 3 月 31 日）と、中村哲也（2006 年 8 月 9 日～2007 年 6 月 9 日）がザンビアで、手代木功基（2006 年 7 月 24 日～2007 年 3 月 17 日）と山科知里（2006 年 7 月 24 日～2007 年 2 月 24 日）がナミビアで調査を継続中。菅野直美（平成 17 年度入学）は、2007 年 1 月 6 日から 2007 年 9 月 1 日までの予定で、モザンビークにおいて HIV/AIDS 患者が取り結ぶ社会関係に関する現地調査を行なっている。

（3）南部アフリカ地域研究会の活動：

◆南部アフリカ地域研究会

第 11 回 2006 年 6 月 15 日

11 月のサテライト・ワークショップの準備：企画内容に関して、牧野久美子さん（日本貿易振興機構アジア経済研究所）を交えて議論

村尾るみこ「ザンビア西部州におけるアンゴラ難民の編入—自主的に村へ定住した人びとの社会的な営みから—」

第 12 回 2006 年 7 月 11 日

西本希呼「06 年度短期予備調査での目標・計画と展望(マダガスカル語方言の形態・統語)」

手代木功基「ナミビア半乾燥地域における、インゼルベルグの地生態学的特性と人々の生活の関わり」

伊藤千尋「農村における労働移動の社会・経済的影響—出稼ぎの今と農村の役割」

山科知里「半乾燥地における動植物と水の関わり」

中村哲也「ザンビア南部州グエンベ県近郊カリバ湖周辺におけるファーマーミングシステム」

第 13 回 2006 年 10 月 10 日

宋戸竜司（JICA 長期専門家）「ザンビア・イニシアティブ地域における農村開発プロジェクト」

第 14 回 2006 年 11 月 24 日

セセレ・B・ソコテラ氏（ザンビア・マウントマクル農業研究所：PAVIDIA 現地カウンタパート）「ザンビアにおける孤立地域参加型農村開発計画プロジェクト（PAVIDIA）」

（4）サテライト・ワークショップ：

◆21 世紀 COE プログラムが主催した国際京都シンポジウム(2006 年 11 月 9 日～13 日)に先立つ 11 月 9 日には、ザンビア FS の主催によりサテライト・ワークショップ「南部アフリカにおけるグローバリゼーションとローカルティ―地域社会の視点から」が開かれました。これは前年度に東京で開かれたワークショップを引き継ぐ形で、大学院生が中心となって、テーマの立案から招待者の選定、会議の運営が行なわれたものです。その準備には南部アフリカ研究会を中心にほぼ半年間が費やされました。プログラムの詳細についてはシンポジウムのウェブサイトを参照されたい。

◆当日は、海外からの 21 世紀 COE プログラム招待者を含む、約 30 名の参加者を集め、大学院生の臨地研究にもとづく発表を中心に、それを取りまく南部アフリカの政治・経済状況に関して活発な討論がなされました。

◆このワークショップでは、「南部アフリカにおけるグローバリゼーションとローカルティ―」というテーマのもとで、村落を中心としたミクロな視点からの生業や社会構造の変容を、南部アフリカあるいはグローバルスケールでの政治・経済・文化変容のなかに位置づけることが試みられました。その結果、国民国家の範疇をこえて展開する政治・経済領域の脱領域化・再領域化といった動きや国境を越えた幹線道路の敷設、そして同地域への中国資本の展開といったグローバルな動きのなかに、地域社会における人々の日常の生業・生活実践が深く影響を受けつつ行われている実態が明らかとなりました。これは、ここ十年ほどの社会・経済・文化変容の特徴として表現される「グローバル化」の一端であり、南部アフリカでかつてないほどの急速な変容が進行しているとみることができます。しかしながら、地域社会の視点からみると、市場経済への傾倒やグローバルスタンダードの無条件的な受け入れが行われているわけではなく、「伝統的」な価値観も強く残しつつ、自分達の生活世界を構築し、ローカルティ―を生産している一面が見出されたといえます。また、歴史的な見地に立つと、近年のグローバリゼ

ーションの特徴がこれまでの歴史的な経験の延長線上に位置づけられる場合も多いことが明らかとなりました。ミクロ・マクロの両面での変化に注目した分析と歴史的な視点からの検討を併せて行っていくことが、今後の南部アフリカにおける変容を見極めていくために必要である、というのが結論です。

(5) 国内研究会：

◆前年度の国内ワークショップで交流が始まった関東の南部アフリカ研究者と共同して、平成 18 年度末に研究会「現代南部アフリカと地域研究：研究と実践の融合をもとめて」（仮題）を計画しています。その目的として第 1 には、数多くの課題に直面している現在の南部アフリカと、わたしたち地域研究者がどのように関わったらよいかという問題を考えるきっかけをつくることと、第 2 には、南部アフリカ地域に関心を寄せる研究者・実践者のネットワークの形成を推進し、研究と実践の融合にむけた足がかりをつくることと考えています。

【タンザニア】（FS HP：<http://jambo.africa.kyoto-u.ac.jp/cgi-bin/tanzania/wiki.cgi>）

- ・代表者：伊谷樹一
- ・分担者：掛谷誠、池野旬
- ・研究テーマ：グローバリゼーション下における地域の社会、経済ならびに自然環境の変容とその連関
- ・研究内容：1980 年代なかばに構造調整政策を導入し経済自由化したタンザニアでは、1990 年代初頭に複数政党制が復活し、さらに地方分権化という行政改革もすすめられている。グローバリゼーションのもとで国家レベルの種々の改革を余儀なくされたタンザニアでは、地域の社会、経済が変容し、さらには自然環境にまで影響が及びつつある。これらの連関に焦点を当てながら、現地研究ならびに臨地教育を進める。
- ・キーワード：自然環境、社会構造、生業形態、経済自由化
- ・カウンターパート：ソコイネ農業大学地域開発センター、ダルエスサラーム大学
- ・派遣者数



	平成 14 年度			平成 15 年度			平成 16 年度			平成 17 年度			平成 18 年度		
	教員	若手	学生	教員	若手	学生	教員	若手	学生	教員	若手	学生	教員	若手	学生
21COE	1		3	2		4	1		3		1	1			1
21COE 以外										1			3		11

（下段は 21COE プログラム以外の経費による派遣者数）

【活動内容】

(1) FS の設置と整備

2003 年 4 月、タンザニア連合共和国のダルエスサラームに民間家屋を借り上げてタンザニア・フィールド・ステーション（TFS）を設置した。書斎、セミナー室、寝室、倉庫を備える当施設には、野外計測機材、撮影機材、野営装備といった、フィールドワークをサポートする機材のほか、通信機器（電話、衛星電話、携帯電話、インターネット）、コンピュータ関連機器が配備されていて、連絡網の拠点、資料の収集と保管、データや試料の整理と加工、研究発表会やその準備などに活用されてきた。また、TFS には守衛が常駐するとともに、民間の警備会社とも契約していて、大都市での生活に安全で静穏な研究環境を提供している。

(2) 研究活動

社会主義路線を歩んできたタンザニアでは、1986 年に世界銀行と IMF が主導する構造調整計画を受け入れて経済の自由化がすすめられていった。この政策転換は、経済のしくみを抜本的に再編しただけではなく、都市や

地域農村の社会、文化、生業形態や生態環境にまで多大な影響をおよぼしていった。グローバル化に翻弄された 1990 年代を経験するなかで、タンザニア国民は徐々に自由経済を学び、国家統制からの離脱に目覚めていった。当プログラムがはじまった 2002 年は、各地で自立への試行錯誤が繰り返されはじめる、新たな時代への展開期であったといってよい。こうした住民の主体的な取り組みは、在来性や内発性という課題と深く関連しながら、当該院生に共通した研究活動の基軸となっている。

(3) 学生のフィールドワーク支援

長期にわたるフィールドワークの途上で、収集したデータを整理・解析することは、調査計画を客観的に捉えなおし、研究の方向性を再確認するうえで意義がある。TFS は、研究施設や機材の提供を通してデータ整理を支援するとともに、公開セミナーや日常的な議論を通して多分野の研究者や実務者と情報が交換できる場を提供している。また、平成 17 年度には COE 研究員が赴任して、TFS の管理・運営ならびにフィールドワークの支援体制をさらに充実させた。これまでに TFS を利用した ASAFAS の教員、院生はそれぞれ 6 人、21 人であるが、ASAFAS 以外にも、同大学大学院農学研究科、理学研究科、地球環境学堂、東京工業大学、福井県立大学、東京外国語大学、北海道大学、名古屋大学、近畿大学、玉川大学などの教員や院生によって広く活用され、その利用件数は年間 300 人・日を超えている。

(4) セミナー、ワークショップの実施

TFS では、タンザニア在住者、他機関の研究者、ASAFAS の派遣学生を交えて、定例の公開セミナーを開催してきた。これまでに開かれた 6 回のセミナーでは、多分野の研究者や実務者から多角的な意見が出され、研究を学際的に深化させる機会となっている。また、平成 17 年 12 月には、"Concepts and Perceptions on African Way of Rural Development Based on Area Studies"と題された国際ワークショップを開催し、ASAFAS の院生、COE 研究員、ソコイネ農業大学の教員、タンザニア国立環境管理局の研究スタッフがフィールドワークの成果を発表した。

(5) 共同研究の推進

TFS の教育研究活動は、京都大学アフリカ資料センターと研究交流協定を締結しているソコイネ農業大学との協力関係のもと、21 世紀 COE、科学研究費補助金による研究チーム、ソコイネ農業大学地域開発センター(SCSRD)の各研究者が緊密な連携をとりながら実施されている。SCSRD の研究者は、多くの ASAFAS 院生のカウンターパートとして調査活動をサポートしており、合同調査や SCSR D の定期セミナーでの成果発表などを共同で実施している。

(6) 成果

研究成果は TFS のホームページ (<http://jambo.africa.kyoto-u.ac.jp/cgi-bin/tanzania/wiki.cgi>) に掲載されている。また、上述した国際シンポジウムでの研究報告は、2007 年 3 月に発刊される African Study Monographs の特集号に掲載される。

TFS を利用してきた院生のうち、これまでに 13 名が博士予備論文を提出し、3 名が博士号を取得している。

【年次報告】

平成 15 年度

(1) 研究活動

◆2003 年 4 月、タンザニア連合共和国の首都ダルエスサラームに民間家屋を借り上げてフィールド・ステーション (TSF) を設置した。

(2) フィールド・ステーションの活用

◆タンザニア・フィールド・ステーション (TSF) は、セミナー・ルームや宿泊施設を備えるとともに、通信拠点、データや試料の整理と加工、資料等の保管、プレゼンテーションの準備などに活用されている。

施設: セミナー・ルーム、書斎 (4)、リビング、ガレージ、倉庫、他

備品: 通信機器 (電話、衛星電話、携帯電話)、ラップトップ・コンピューター、プリンタ、液晶プロジェクター、
野外用計測機材一式、デジタルカメラ、テント、シュラフ、他

◆当ステーションには守衛が常駐するとともに、民間の警備会社と契約して安全対策を整えている。タンザニアで調査する場合、調査許可、滞在許可を取得するために最低でも2週間はダルエスサラームに滞在する必要がある、そのときの安全な宿泊施設としても有効に利用されている。

◆ステーションでは、タンザニア在住者、他機関の研究者、ASAFAS の派遣学生を交えて、公開セミナーを開催している。2003 年 11 月に開かれた第一回 TFS セミナーでは、ASAFAS の学生である瀬古紗矢香 (平成 13 年度入学) と川西陽一 (平成 14 年度入学) がフィールドワークの中間報告をおこない、2004 年 2 月の第二回セミナーでは、同じく ASAFAS の長谷川竜生 (平成 11 年度入学) が調査の成果を発表している。多分野の研究者やタンザニアの事情に詳しい方々から多角的な意見を得ることができ、研究を学際的に深化させる機会となっている。また、長期にわたるフィールドワークの途中あるいは最後に発表機会をもつことで、調査を客観的に捉えなおし、研究の方向性を再確認するのに役立っている。発表要旨等については、近々ホームページを立ち上げて公開する予定。

(3) 共同研究

◆ASAFAS とソコイネ農業大学・地域開発センター (SCSRD) は研究協定を締結しており、これまでも密接に交流してきた。これからも地域研究と農村開発を連携しながら共同研究をすすめていくことに合意している。また、ASAFAS の多くの学生は、SCSRD の研究者をカウンターパートとして調査活動をサポートしてもらっており、2003 年度には、S. Nindi、D. Mhando、近藤史が SCSR の定期セミナーで研究計画ならびに経過を報告している。

平成 16 年度

(1) 概要

◆タンザニア・フィールド・ステーション (以下、タンザニア FS) は、ダルエスサラーム郊外の住宅街にあり、ダルエスサラーム大学およびソコイネ農業大学との協力体制のもとで、調査研究の拠点、セミナー会場、資料整理と保管場所として活用している。

◆タンザニア FS は、ASAFAS の教員・大学院生以外にも、京都大学大学院農学研究科、同大学院理学研究科、同大学院地球環境学堂、東京工業大学、福井県立大学、東京外国語大学などの教員と大学院生によって広く活用され、その利用件数は、年間でのべ 300 人・日を超えている。

◆また、本年度はタンザニア FS において二度公開セミナーを開催し、ASAFAS の大学院生である小川さやか (平成 12 年度入学) と近藤史 (平成 11 年度入学) が調査結果をまとめて発表した。このセミナーの内容等については、近々ホームページを開設して報告する予定である。

(2) フィールド・ステーションの整備と運用

◆タンザニア FS では研究用機材が充実し、当 FS に期待する「フィールドワーク中のデータ整理と研究方針の再検討」を実施する体制が整った。しかし、安全対策や通信、光熱水道費、衛生管理費などは利用者が支払っており、とくに長期滞在者には過大な経済的負担がかかっているのが現状である。

◆タンザニア FS では、平成 17 年度に当プログラムによって COE 研究員を雇用して、FS の管理・運営、教育研究をさらに充実するとともに、他の FS とのネットワークを緊密にして、東アフリカ諸国における共同研究のタンザニア窓口として機能させる予定である。

(3) 研究協力体制の維持・推進

◆タンザニア FS の教育研究活動は、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科とのあいだに研究交流協定を締結しているソコイネ農業大学との協力関係のもとに実施している。21 世紀 COE、科研費「地域研究を基盤としたアフリカ型農村開発に関する総合的研究」(研究代表者: 掛谷誠)、ソコイネ農業大学地域開発センターが

緊密な連携をとりながら共同研究を実施している。

平成 17 年度

(1) 概要

◆タンザニア FS は、ASAFAS の教員・大学院生以外にも、京都大学大学院農学研究科、同大学院理学研究科、同大学院地球環境学堂、東京工業大学、福井県立大学、東京外国語大学、北海道大学、名古屋大学、近畿大学、玉川大学、などの教員と大学院生によって広く活用され、その利用件数は、年間のべ 300 人を超えている。

◆第 5 回公開セミナーが 8 月 20 日に開かれ、ASAFAS の池野旬助教授が「北部タンザニア、Mwanga 県の「住民参加型」水道施設拡充計画」というタイトルで発表した。

(2) フィールド・ステーションの整備と運用

◆タンザニア FS では、平成 17 年度に当プログラムによって COE 研究員を雇用して、FS の管理・運営、教育研究を充実させることができた。また、タンザニア FS のホームページを立ち上げた。

(3) 研究協力体制の維持・推進

◆タンザニア FS の教育研究活動は、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科とのあいだに研究交流協定を締結しているソコイネ農業大学との協力関係のもとに実施しています。21 世紀 COE、科研費「地域研究を基盤としたアフリカ型農村開発に関する総合的研究」（研究代表者：掛谷誠）、ソコイネ農業大学地域開発センターが緊密な連携をとりながら共同研究を実施している。

平成 18 年度

(1) 概要：

◆本年度は、当プログラムで派遣した教員、院生はいませんが、教員 3 名と院生 10 名が別の資金でタンザニアへ渡航して FS を利用しました。また、同大学他研究科ならびに他大学の教員と院生の利用件数は 350 人・日を超え、タンザニアにおける研究拠点として広く認知されてきています。

◆第 6 回公開セミナーが 6 月 17 日に開かれ、ASAFAS の院生・黒崎龍悟が「受け継がれる外来技術—ムビンガ県マテンゴ高地における植林技術の実際」というタイトルで発表しました。セミナーには、JICA タンザニア事務所の職員や専門家、青年海外協力隊員などが多数集まり、農村開発の実情について活発な議論が交わされました。

(2) フィールド・ステーションの整備と運用：

◆タンザニアの電力は、そのほとんどを水力発電に依存していますが、本年度は水不足による昼間の停電が常態化し、通信のためには夜間にインターネットカフェまで行かなければならず、通信拠点としての機能が低下していました。そこで、ISDN 接続の電話回線を新たに設置し、FS での通信機能を回復するとともに安全性を維持しました。

(3) 研究協力体制の維持・推進：

◆タンザニア FS の教育研究活動は、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科とのあいだに研究交流協定を締結しているソコイネ農業大学との協力関係のもと、同大学の地域開発センターと緊密な連携をとりながら共同研究を実施しています。また、平成 18 年 11 月 9～13 日に京都で開催された当プログラム主催の国際シンポジウム「総合的地域研究の新地平：アジア・アフリカからディシプリンを架橋する」には、ソコイネ農業大学の共同研究者である Stephen J. Nindi 博士をメイン・パネラーとして招待し、共同研究の最新の成果を発表してもらいました。

添付資料 2. シンポジウム、ワークショップ、セミナーの開催記録

シンポジウム・ワークショップ/Symposia & Workshop

	DATE	TITLE / SPEAKER	
21COE ワークショップ	2007/03/04	「現代南部アフリカと地域研究:研究と実践の融合を求めて」 ・「ナミビア国におけるトウジンビエ栽培体系下での氾濫水利用型粗放稲作の導入」 飯嶋盛雄（名古屋大学大学院生命農学研究科） ・「自然―人間関係からみる内発的発展の農民運動：ジンバブウェの事例から」 壽賀一仁（日本国際ボランティアセンター） ・「現代アフリカ農村社会と女性の経済的エンパワーメント：ザンビアの事例から」 成澤徳子（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科） ・「私有化とコモンス：ボツワナにおける土地の社会経済史」 坂田有弥（大阪大学人間科学研究科） ・「予／預言を生きる：ポスト・アパルトヘイト、21世紀を生き抜くグリクワの選択(仮)」 海野るみ（常磐大学人間科学部）	京都大学
21 COE Symposium	2007/02/09 -10	「地域研究と情報学：新たな地平を拓く」 〈基調講演〉 ・「データベース『世界と日本』を公開して（仮）」 田中明彦（東京大学東洋文化研究所） ・「空間情報学からのアプローチ（仮）」 柴崎亮介（東京大学空間情報科学研究センター） 〈セッション1〉 地域研究からみる情報 ・「国境問題と情報」 岩下明裕（北海道大学スラブ研究センター） ・「歴史資料からデジタル情報へ」 黒木英充（東京外国語大学 AA 研） ・「災害対応における地域研究者と情報」 山本博之（地域研究統合情報センター） ・「インターネット時代の中東地域研究」 小杉泰（アジア・アフリカ地域研究研究科） 〈セッション2〉 パネルディスカッション「情報学を導入した新たな地域研究の展開」 [パネラー] 桜井由躬雄（東京大学） 久保正敏（国立民族学博物館） 黒木英充（東京外国語大学 AA 研）* 柴山 守（東南アジア研究所） 河野泰之（東南アジア研究所） 阿部健一（地域研究統合情報センター）* 〈セッション3〉 事例：地域情報学の展開 基盤研究(S)「地域情報学の創出―東南アジア地域を中心に―」 プロジェクト ・「地域在住高齢者の健康実態に関するアジアの地域間比較」 松林公蔵（東南アジア研究所） ・「マレー・サラワク研究と GIS」 石川 登（東南アジア研究所） ・「東北タイ寺院のマッピング」 林 行夫（地域研究統合情報センター） ・「タンロンシーハノイの遺跡・碑文と GIS による歴史分析」 桜井由躬雄（東京大学大学院人文社会系研究科）・柴山 守（東南アジア研究所） ・「インド在地社会研究と GIS」 水島 司（東京大学大学院人文社会系研究科） 〈特別報告〉 「GIS の地域研究への応用」 浅見泰司（東大空間情報科学研究センター） 〈セッション4〉 人文知の構築と資源共有化ネットワーク 基盤研究(A)「アフロ・アジアの多元的情報資源の共有化を通じた地域研究の新たな展開」 ・「東アジア・ネットワーク解析」 森川裕二（早稲田大学 21COE プログラム） ・「拓本文字データベースの設計と実装」 安岡孝一（人文科学研究科） ・「衛星画像を活用した土地利用履歴の解析―ミャンマー・バゴ―山地におけるカレン焼畑の事例―」 鈴木玲治（アジア・アフリカ地域研究研究科） ・「中国学と情報学の学際的連携―史資料の共有化とデジタル・データベースの可能性」	京都大学百周年時計台記念館

		ー地域研究とデータベース」 貴志俊彦（島根県立大学） ・「人間文化研究機構の資源共有化」 原 正一郎（地域研究統合情報センター）	
International Symposium: “Kyoto Symposium”	2006/11/9-13	“Crossing Disciplinary Boundaries and Re-visioning Area Studies: Perspectives from Asia and Africa” 「総合的地域研究の新天地：アジア・アフリカからディシプリンを架橋する」 4 Sessions (1) Natural histories of landscapes / Social construction of the Environment、4 presentations (2) Development of Area Informatics, 4 presentations (3) The Construction of the Migrants' Social Spaces: Issues of Mobility, Locality, and Trans-border Networks, 4 presentations (4) The Future of Development and Democratization in Asia and Africa: Local Perspectives, 4 presentations 9 Satellite Workshops, 66 presentations Poster session, 34 presentations	Kyoto University (JAPAN) p.57 及びウェブサイト http://areainfo.asafas.kyoto-u.ac.jp/kyotosympo/index_j.html
21COE Network Division Workshop	2006/9/29	「ネットワーク型地域研究の成果と展望」 “Inter-networking in area studies: results and foresights” (1) 「アフリカ熱帯林における空間利用」 木村大治 (ASAFAS アフリカ専攻) (2) 「バングラデシュの国立公園における土地利用の変化」 東城文柄 (ASAFAS 東南アジア専攻) (3) 「デジタル写真と地図を用いた、フィールドワークの空間情報管理・発信ツール」 有川正俊、藤田秀之（東大空間情報科学研究センター） Video Session with Bangkok Liason Office (4) 「1900年代の地積図から見たバンコクの都市空間—バンランブー地区における土地及び建築利用状況を中心に」 岩城考信（法政大学大学院、チュラロンコーン大学社会調査研究所 客員研究員） (5) “Multi-Temporal Geo-Spatial Data Management for Area study”, Col. Surat Lertlum, Phd. (Chulachomklao Royal Military Academy, Thailand) Round Table 「遠隔教育とオンサイト・エデュケーションの融合をめざして」 重田真義 (ASAFAS アフリカ専攻)	Kyoto University (JAPAN)
International Symposium	2006/3/13	“Indigenous Communities: Voices towards Sustainability”	Institute for Environment and Development (LESTARI), Universiti Kebangsaan Malaysia (UKM)
Ethiopia FS International Joint Workshop No2	2006/02/04-05	“Positive Relationships between Culture and Development in East Africa” 「文化と開発のポジティブな関係：東アフリカ多民族共生社会の構築」 “African indigenous knowledge and the potential for development resources”, <i>Gebre Yntiso</i> • Creativity and indigenous techniques in Southwestern Ethiopia: The case of the women potters among the Ari, <i>Morie Kaneko</i> • Gender and positive cultural practices among the Sidama, Southwestern Ethiopia, <i>Dilu Teshome</i> • Female-centered social space in the 'patriarchal' pastoral society: Wives' activities in the space of coffee drinking among the Daasanetch, <i>Toru Sagawa</i> • Sustainable plant use in Gera, the forest area of Southwestern Ethiopia, <i>Yoshimasa Ito</i> Belete -Gera regional forest priority area, local wisdom on participatory forest management, <i>Mohammed Seid</i>	Ethiopia FS (ETHIOPIA)

		A potential for development among the Rendille pastoralists in Northern Kenya, <i>Sun Xiaogang</i> Improving conservation through better understanding of factors that enhance and maintain landrace diversity at farm level: The case of the bottle gourd in Kenya, <i>Yasuyuki Morimoto</i> The creative aspect of the code of communication shared by Ethiopian minorities, <i>Itsushi Kawase</i>	
Zambia FS Workshop	2006/02/18	“Future Southern Africa in view of land issues” 「『土地』から展望する南部アフリカー自然を生き抜く、変化と向き合おうー」 「ザンビア南部半乾燥地域におけるソルガム栽培」 淡路和江（京都大学） 「砂土に茎を植える技術ーザンビア西部におけるキャッサバ栽培と土地の利用ー」 村尾るみこ（京都大学） 「ロジ社会の成立基盤としてのザンベジ川氾濫原」 岡本雅博（京都大学） 「『砂漠ゾウ』と牧畜民との関係性の変容ー季節河川の利用をめぐるー」 吉田美冬（京都大学） 「湖に『まち』をつくるーマラウイ湖漁撈社会変容における帰還労働移動者受容ー」 中山節子（京都大学） 「ザンビア東部における社会変動と農地利用の変化ーチェワ農民による新しい畑の創出をめぐるー」 吉川竜太（京都大学） 「ボツワナの再定住地における狩猟採集民サンの居住地選択」 丸山淳子（京都大学／日本学術振興会特別研究員） 「南アフリカ共和国旧トランスカイ農村における土地利用の実態」 飯山みゆき（東京大学）	Tokyo University of Foreign Studies (JAPAN)
Eastern Africa International Workshop	2005/12/12-13	“Concepts and Perceptions on African Way of Rural Development Based on Area Studies” 「地域研究と地域開発の紐帯：東アフリカの地域間比較を通して」 "Dynamics of Coffee Production: Challenges of Livelihoods of the Matengo Farmers in Southern Tanzania" <i>D. G. Mhando</i> (Sokoine University of Agriculture, Tanzania) "Reconsidering Participation: Local Notion of Participation and Diversification of Group Activities in Southern Tanzania" <i>M. Araki</i> (ASAFAS, Japan) "The SUA Method and Local Government Nexus: A New Challenge to Sustainable Rural Development" <i>S. J. Nindi</i> (Sokoine University of Agriculture, Tanzania) "Resource Mapping and Management Using GIS & Remote Sensing Methods" <i>V. Makota</i> (National Environmental Management Council, Tanzania) "Eco-system and Management of Rice Cultivation in Kilombero Valley in Tanzania" <i>F. Kato</i> (ASAFAS, Japan) "Pastoralists' Challenge to Rural Development: A Case Study of the Rendille in Northern Kenya" <i>Sun Xiaogang</i> (ASAFAS, Japan)	Dar es Salaam (TANZANIA)
The 7th Kyoto University International Symposium, 2005	2005/11/23-24	“Coexistence with Nature in a ‘Glocalizing’ World -Field Science Perspectives-“ 「地球・地域・人間の共生ーフィールド・サイエンスの地平からー」 Session 1: Learning lessons from recent disasters in the Indian Ocean (1) “Dependency of tsunami behaviors and forces on topography of cross-shore section” TAKAYAMA Tomotsuka (Disaster Prevention Research Institute, Kyoto University) (2) "Towards holistic recovery: Lessons from past disasters in Japan" HAYASHI Haruo (Disaster Prevention Research Institute, Kyoto University) (3) “Tsunami hazard mitigation in Indonesia” Subandono Diposaptono (Ministry of Marine Affairs and Fisheries, Indonesia) (4) “The current serious problems of coastal disasters in Thailand” Thanawat Jarupongsakul (Faculty of Science, Chulalongkorn University) Session 2: Health, disease, aging and locality (1) “What is “successful ageing” in globally aging society in Asia?” MATSUBAYASHI Kozo	Bangkok (THAILAND)

		(CSEAS, Kyoto University) (2)“Food safety and enteric pathogens in the environment: An important and complicated issue in Asia” NISHIBUCHI Mitsuaki (CSEAS, Kyoto University) (3) “Health and human condition in the era of violence, epidemics, and environmental disasters” Komatra Chuengsatiansup (Ministry of Public Health, Thailand) Commentator: Varaporn Vuddhakul (Prince of Songkla University), Tana Nilchaikowit (Mahidol University) Round-table discussion:What we have learned between Kyoto and Thailand Moderator: TAMADA Yoshihumi (ASAFAS, Kyoto University) Discussants: Chavalin Svetanant (Chulalongkorn University) Nakharin Mekrairat (Thammasart University) Natthaphon Showchaiya (Mitsubishi Engineering Plastics) Somsak Panha (Chulalongkorn University) Special lecture I : An outline of Thai history Moderator: Attachak Sattayanurak (Chiang Mai University) Speaker: Nidhi Aeusrivongse Special session:21st Century Center of Excellence Program: Reports from Field Stations and Introduction of Poster Presentations Moderator: SUZUKI Reiji (ASAFAS, Kyoto University) ICHIKAWA Mitsuo (ASAFAS, Kyoto University) Houngphet Chanthavong (National University of Laos) Session 3:Restoration of human-nature coexistence systems in tropics (1) “Towards ecological and economic restoration of degraded rain forest lands: A Sri Lankan experience” Nimal Gunatilleke (University of Peradeniya) (2) “Present state of mangrove forests in Thailand and the effects of human activities” Pipat Patanaponpaiboon (Chulalongkorn University) (3) “Forest use and restoration in African savanna from farmer's view on agriculture, forest and land” ARAKI Shigeru (ASAFAS, Kyoto University) (4) “Perspectives on the future of tropical forests in Southeast Asia viewed from the past” YAMADA Isamu (CSEAS, Kyoto University) Commentator: KOBAYASHI Shigeo (ASAFAS, Kyoto University) Aung Than (National Academy, Myanmar) Session4: Exploring new paradigms for coexistence in a glocalizing world Moderator: KONO Yasuyuki (CSEAS, Kyoto University) (1) “What is happening on the border between humans and chimpanzees?:Wildlife conservation in West African rural landscapes” YAMAKOSHI Gen (ASAFAS, Kyoto University) (2) “Sea turtle, dugong, catfish and human beings: Review of SEASTAR2000” ARAI Nobuaki (Graduate School of Informatics, Kyoto University) (3) “Community participation and co-management strategy on coastal resource management in South Sulawesi, Indonesia” Andi Amri(Faculty of Marine Science and Fisheries, Hasanuddin University) (4) “Informal economy in a globalizing world: Perspectives of slum community in Bangkok” ENDO Tamaki (CSEAS, Kyoto University) (5) “‘Chinization’ of Southeast Asia: Changes of rural livelihoods in northern Laos” FUJITA Koichi (CSEAS, Kyoto University) Commentator: Chamvit Kaset Siri (Thammasat University) Supamard Panichsakpatana (Kasetsart University) Pasuk Phongpaichit (Chulalongkorn University) <i>Special lecture II: Co-existence in "a glocalizing world" with other culture</i> Moderator: Chalong Soontravanich (Chulalongkorn University) Speaker: ISHII Yoneo (Kyoto University)	
--	--	---	--

International Workshop (2nd)	2005/6/23	"Area Informatics: Applying Aerial Photos for Area Studies" (1) Application of Geoinformatics for Cultural Heritage Management, Dr.Surat Lertlum, CSEAS, Visiting Fellow & Assistant Professor, Mathematics and Computer (2) Science Department, Chulachomklao Royal Military Academy, Dr.Tharapong Srisuchat, Director of the 6th Regional office of Fine Arts (Sukhothai), Thailand	Kyoto University (JAPAN)
International Symposiumu (1st)	2005/3/24	"Area Informatics 2005: Potential of GIS/RS in Area Studies" 「地域研究における GIS/RS の可能性」 1-1 "Possibility of GIS Application to Ecosystem Management in Tropics" Dr. Toshinori Okuda (National Institute for Environmental Studies) Commentator: Dr. Kazuo Ando (CSEAS, KU) 1-2 "A Perspective of GIS for Long-term Historical Analysis: A Case from South Asia" Prof. Tsukasa Mizushima (The University of Tokyo) Commentator: Prof. Fumiko Oshikawa (JCAS) 1-3 "Development of a Spatial Database of Rural Communities and its Application to Area Studies" Mr. Yoshikatsu Nagata (Osaka City University) Commentator: Dr. Masayuki Yanagisawa (CSEAS, KU) Chair: Dr. Yasuyuki Kono (CSEAS) Dr. Venkatesh Raghavan (Osaka City University) Opening Address Prof. Koji Tanaka (Director, CSEAS) Prof. Takashi Matsuyama (Director, ACCMS, KU) Dr. Darasri Dowreang (Acting Executive Director, GISTDA) Keynote Speech Prof. Mamoru Shibayama (CSEAS, KU) 2-1 Possibility of GIS/RS Technology in Historical Studies and Mapping Dr. Caverlee Cary (UC, Berkeley) Commentator: Dr. Xianfeng Song (CSEAS, KU) 2-2 Geoinformatics Applications for Historical a	Academic Center for Computing & Media Studies, Kyoto University Asian Institute of Technology) IntERLab.
Cameroon FS Joint Seminar with MINEF/WWF No2	2005/2/16	"Conservation and Sustainable Utilization of the Rain Forests" 「カメルーン・フィールド・ステーションと WWF の共催ワークショップ」 (1) "Foraging Life in the African Tropical Rainforests" YASUOKA, Hirokazu (ASAFAS) (2) "Baka Pygmies and Collaborative Management of PAs: Case of Lobeke" Olivier Njounan (3) "Ethnobotany of the Baka Pygmies in South Eastern Cameroon: Utilization of Marantaceae plants" HATTORI Shiho (ASAFAS) (4) "Interactive Relationship between Human Activities and Forest Environments: A Case Study of Bakwele Farmers along the Dja River" SHIKATA Kagari	Yaounde (CAMEROON)
International Workshop	2005/2/9-10	"Local Knowledge and Its Potential Role for Sustainable Agro-Based Development in Lao PDR" Participants: 7 from ASAFAS 1 from Faculty of Letters, KU 1 from JIRCAS Approximately 30 scholars, graduate students, and villagers from the fields in Laos	サワナケート県農業・林業局会議場 (LAOS)
国内シンポジウム Kyoto Fieldwork Symposium	2004/10/30-31	「フィールドワークから紡ぎだすー発見と分析のプロセスー」 "Spinning from Fieldwork - Process of Discovery and Analysis" I : 森林資源への多様なアプローチ 「ダグラスファー老木における樹冠再生: ケーススタディーから応用まで」石井弘明 (神戸大学大学院自然科学研究科) 「フィールドワークから学術的成果まで: バカ・ピグミーの長期狩猟採集行にかんする研究から」安岡宏和 (ASAFAS 博士課程) 「森林・環境問題におけるフィールド調査の魅力と困難さ」三俣学 (兵庫県立大学経済	Kyoto University (JAPAN)

		学部専任講師) II：環境の思想と政策 「公共事業の政策形成プロセスにおけるパネルのあり方に関する一考察」趙公章（東京大学新領域創成科学研究科産学官連携研究員） 「ヒマラヤの環境問題と現代のガンディー主義：テーリー・ダム反対運動とスンドルラール・バフグナー」石坂晋哉（ASAFAS 博士課程） III：焼畑をどう描くのか？ 『休閑畑』からの収穫：カメルーン東南部の熱帯雨林帯における焼畑農耕システム」四方 方（ASAFS 博士課程） 「焼畑地域でのデータ収集と定量分析：ラオス中部での社会調査より」森元早苗（岡山商科大学法経学部専任講師） 特別セッション：「映像によるアプローチ」 村尾静二（総合研究大学院大学文化科学研究科博士課程） 講演1：「フィールドから民族誌テキストへ：分離エラーを超えて」佐藤郁哉（一橋大学商学部教授） IV：体制移行・開発プロジェクトのもとで生きる 「移行期モンゴル社会における遊牧民の社会組織：牧畜も商売も教育も」風戸真理（JSPS-ASAFAS） 「ポスト・ソビエト社会における『オデュッセイア的』調査：陶業を通じたイスラーム研究の経験から」菊田悠（東京大学大学院総合文化研究科博士課程） 『行い』をみること：再定住地で暮らす狩猟採集民サンの生活再編の過程」丸山淳子（ASAFAS 博士課程） 「大規模開発と住民の生存戦略：成田空港周辺地域における有機農業実践の事例から」相川陽一（一橋大学大学院社会学研究科博士課程） V：ケアの現場から 「コミュニティケアの老年人類学：フィンランド西南部二言語地域における高齢者福祉を通して」高橋絵里香（東京大学大学院総合文化研究科博士課程） 「グローバル状況下における民間の治療家の再帰的変容：南インド・ケーララ州の事例から」加瀬澤雅人（ASAFAS 博士課程） VI：都市で働く 『関係』をみる、ということ：トルコの定期市における売買関係の調査から」田村うらら（京都大学人間・環境学研究科博士課程） 『仲間のあいだで稼ぐ』：都市零細商人の商慣行の歴史的変遷」小川さやか（ASAFS 博士課程） 『寄り道』して学んだこと：ガーナ都市部におけるサロン就業者の質問票調査から」織田雪世（ASAFAS 博士課程） 講演2：「異なる経験世界をつなぐ過程としてのフィールドワーク」 松田素二（京都大学文学部教授）	
International Workshop	2004/3/23	"The Micrology of Indonesian Local Societies" 「インドネシア地方社会のミクロロジー」 I: The Micrology of Indonesian Local Societies Moderator: Ignas Kleden "Commodity and Labor on the Move: Borderlands of West Kalimantan as Economic Infrastructures of Sarawak, East Malaysia" (Noboru Ishikawa, CSEAS) "From Mega-project to Illegal Logging: Forest Resources and Decentralization in Central Kalimantan" (Ken'ichi Abe, JCAS, NME) "Musyawarah-mufakat or Representative Assembly System?: Governance Changes in Rural West Java in Democratizing Indonesia" Kosuke (Mizuno, CSEAS) "Where Have the "Entrepreneurs" Gone?: A Historical Comment on Adat in Central Flores"	Jakarta (INDONESIA)

		(Takashi Sugishima , ASAFAS) “From Paddy to Vanilla, from Elephant Tusk to Money: Influence of Development Assistance upon Traditional Economy among the Ende People of Flores, Eastern Indonesia” (Satoshi Nakagawa, Osaka University) “Local Autonomy in Process: A Case Study in Bali 2001-2003” (Haruya Kagami , Kanazawa Univ.) “Local Press in Bali in the Era of ‘Reformasi’: An Appraisal of New Directions of Research” (Kiyoshi Nakamura, Niigata) “The History on Deprivation of Religious Role of Dalang in Bali and Its Indication of Restoration in ‘Transition Period’ in Indonesia” (Hideharu Umeda, Okinawa Prefectural University of Art) “The Tradition of Sundanese Music in Indonesia at the Tum of the Century” (Shota Fukuoka, NME) II: Everyday Life and Policing in the Wallacean World Moderator: John Haba, LIP Patricio N. Abinales, CSEAS “Peripheral Politics in a Comer of the Wallacea Region: The U.S. Military in the Southern Philippines in Comparative Historical Perspective” (Patricio N. Abinales, CSEAS) “Dynamics of Cross-border Movements: Interactions between the Sama and Modern States in the West Celebes Sea” (Kazufumi Nagatsu, ASAFAS) “How Did the Inter-ethnic Relations in Ikan Bilis Fishery Change? A Local Socio- economy in an Era of Development in Malaysia” (Motoko Kawano, ASAFAS) “Current Situation of Overseas Chinese Network in Southeast Asia” (Takeshi Hamashita, CSEAS) “Language Questions of the Sama-Bajau in Wallacean World” (Jun Akamine, Nagoya City University) “Plants for Everyday Domestic Life in Wallacean World: A Note on Coix Species, Gramineae” (Ochiai Yukino, Kagoshima University) “The Role of Kemiri (Aleurites moluccana) in Agricultural Land-use Development in Wallace” (Koji Tanaka, CSEAS)	
International Workshop	2004/3/16-17	"Change of Rural Society and Local Agro- Ecological Knowledge in Myanmar" 「ミャンマーにおける農村社会の変容と在地の農業生態知識」 (1) "Historical development of local administration and community leadership" Myint Thein (2) "Local government institutions and their roles in rural development in research sites" Tin Win (3) "Changing traditional cropping systems in rural Rakhine State" Ando Kazuo (4) "Rural market and its potential to rural development" Saw Pyone Naing (5) "Fallow vegetation of short cycle shifting cultivation and its economic significance as the safety net" Momose Kuniyasu (6) "The use of the plant materials in Rakhine State" Win Myint (6) "Fishery management in Gwa Township, Rakhine State" Tin New and Pyone Aye (7) "Fishing industry of Thandwe, Taungote and Gwa Townships" Thida Khaing (8) "Fish resources and fishery systems in Rakhine State" Ohnishi Nobuhiro (9) "Toward Development: Perspective and Problems:"Case study on role and potential of periodical market toward rural development in Bangladesh and Myanmar" Usami Koichi and Saw Pyone Naing (10) "Comparative study of aged poor between nursing home in Yangon Myanmar and Osaka Japan" Matsubayashi Kozo (11) "Anthropogenic characteristic of Taungya cultivation in Chiphwi mountainous region" Seng Aung	SEAMEO-CHAT (MYANMAR)

International Workshop (Laos Field Station Workshop)	2004/1/25	"Forest Management and Conservation in Laos" 「ラオスにおける森林管理と保全」 (1) Hounphet CHANTHAVONG "Forest management and conservation in Laos" (2) Khamleck XAYDALA" Introduction on edible forest products in Lao PDR" (3) Anoulom VILAYPHONE "NTFPs gathering of Khum community after implementation of land allocation program: a case study from national biodiversity conservation area, northern Lao PDR" (4) Kosaka, Yasuyuki "Plant diversity in paddy fields in relation with human use and management in Savannakhet Province, Laos"	Kyoto University (JAPAN)
Cameroon FS/ MINEF/WWF Joint Seminar No1	2003/12/14	"Conservation and Sustainable Utilization of the Rain Forests" 「熱帯雨林の保護と持続的利用」 (1) Hattori, Shiho "Nature Conservation Project and Hunter-gatherers' Life in Cameroonian Rainforest" (2) Shikata Kagari, "Sustainable Plantain Production by Shifting Cultivation in the Secondary Forest of Southeastern Cameroon"	Yokadouma (CAMEROON)
International Workshop	2003/11/28 -29	"Forest Dynamics of Thailand: Impacts, Ecology, Management and Rehabilitation" 「タイの森林動態に関する異分野間交流のためのワークショップ: インパクト/生態/管理/修復」 KANZAKI, Mamoru Opening address (1) Pongsak SAHUNALU, Deforestation in the tropics:a case study in Thailand (2) Patma VITYAKON, From forest to agriculture: land-use change and sustainability of agroecosystems in Northeast Thailand (3) TABUCHI Ryuichi and KABAKI Nobuyuki, Some lessons from tree planting trial in the farmyard of Northeast Thailand. (3) Pipat PATANAPONPAIBOON and YAMADA Isamu, Rehabilitation of mangrove forests: lessons learned from successes and failures (4) HARA Masatoshi et al., The floristic composition of tropical montane forest in Doi Inthanon N. P. (5) Sakhan TEEJUNTUK and Pongsak SAHUNALU, The relations of plant community and microclimate along an altitude gradient in Doi Inthanon National Park, Northern Thailand (6) Kriangsak SRI-NGERNYUANG et al., Niche differentiation of Lauraceae species in structuring a tropical lowermontane forest in northern Thailand (7) KANZAKI Mamoru et al. ,Long-term monitoring of tropical dry evergreen forest: Population, community and carbon dynamics (8) KOBAYASHI Shigeo et al., How importance of wild banana population dynamics to the secondary (9) TOMITA Mizuki et al., Regeneration process of Melaleuca cajuputi after a severe fire: during a 5-yr period study in a degraded tropical peat swamp, Thailand (10) WATANABE Hiroyuki, Estimation of arboreal arthropod density in an evergreen forest in Northeast Thailand and problems remained for further study (11) KITAMURA Shumpei et al. ,Empty forests deprived of large animals in Thailand and their fates (12) SUZUKI Masakazu, Energy and water budget of a hill evergreen forest in northern Thailand (13) KURAJI Koichiro et al. Temporal and spatial distribution of rainfall in the vicinity of Doi Inthanon and Mae Chaem, Northern Thailand (14) ISHIDA Tomoyasu et. al. , Influences of deforestation on heat and carbon balance in tropical peat swamp forest, Narathiwat, Thailand (15) ITOH Akira et al., Field experiment on phenology of dry dipterocarp forest	Kyoto University (JAPAN)

		(16) KUWAHARA Takanori et al., Seasonal changes of carbon cycling in a seasonal rain forest, Huai Kha Khaeng, Thailand -some preliminary study- (17) KOMIYAMA Akira, Primary productivity of mangrove forests in Thailand (18) Maliwan TANASOMBAT et al., The growth and yield of paper mulberry in plantations and natural stands (19) TAKEDA Hiroshi, Decomposition processes in forest ecosystems of Thailand (20) SAKURAI Katsutoshi et al., Site quality index of FIO teak plantation in Northern Thailand (21) HAYASHI Yoshikazu et al., Soil organic matter dynamics under shifting cultivation in northern Thailand (22) TANAKA Sota, Effect of burning on soil fertility under shifting cultivation (23) NARIOKA Hajime, Development of Polder Project for saline arid land in northeastern Thailand (24) KONO Yasuyuki et al., Agro-environmental land evaluation in Northeast Thailand (25) Pomchai PREECHAPANYA, Karen knowledge about the sustainability of forested watershed and agroforestry ecosystems (26) HAYAMI Yoko, Whose consensus? -some difficulties in talking about Karen and forest- (26) KANAZAWA Hisami and NAWATA Eiji, The Changes in land-use of Karen in North Thailand - a case study in Sam Sop Bon Village – (27) UBUKATA Fumikazu, From plantations to small farms: eucalyptus production for pulp & paper (28) TAKEDA Shinya, Small-scale forest management for non-timber forest products in Thailand	
International Joint Workshop with Adiss Abeba University	2003/10/20 -30	"Environment, Livelihood and Local Praxis in Asia and Africa" 「環境と生業をめぐる地域住民のとりくみ」 (1) Bethelhem Tekola, The prostitutes after work: social life and socialization among a group of sex workers in Addis Ababa. (2) Daniel Hailu, Some implications of the interaction of formal education with an Ethiopian rural community: the case of Woyisso Qancaara Kebele, East Showa Zone of Oromia Region. (3) Demerew Dagne, Sources of conflict and indigenous conflict resolution mechanisms among the Annyuaa of Gambella (Southwestern Ethiopia). (4) Dinku Lemessa, Socio-economic dimensions of conflict-induced displacement: the case of displaced persons in Addis Ababa (5) Fekadu Adugna, Ethnic integration and conflict: the case of Borana Oromo and Somali Clans in Liben District, Guji Zone, Southern Ethiopia. (6) Wubshet Demewozu, Begging as a survival strategy: conferring with poor at the Orthodox religious ceremonial days in Addis Ababa. (7) Asante, Belle, Ge Mot: traditional basketry in the old walled city of Harar, Ethiopia. (8) Daniel Baheta, On the relationships between local livelihood and modern education in Eritoria. (9) Kaneko Morie, Learning process of pottery making in Ari, Southwestern Ethiopia. (10) Kawase Itsushi, The performance activities and the self-designation of Ethiopian minstrels: Azmari. (11) Mamo Hebo, Land dispute settlement in plural institutional settings: a case of Arsi Oromo. (12) Nishi Makoto, Making and unmaking of the nation state and ethnicity in Modern Ethiopia: a study on the history of Silte people. (13) Nishizaki Nobuko, How local people take different attitudes towards conservation policy?: a case of Mago National Park, Ethiopia. (14) Hattori Shiho, Nature conservation project and hunter-gatherers' life in Cameroon rain forest. (15) Hirai Masaaki, Utilization, creation and transformation of acacia albida farmed parkland in West-Central Senegal	Addis Ababa (ETHIOPIA)

		(16) Murao Rumiko, A study on the shifting cultivation system in Kalahari woodland, Western Zambia: with special reference to cassava management. (17) Naito Naoki, Sharing categories and experiences: the construction of social bonds through practice on the border between Cushitic and Nilotic speaking pastoralists in Northern Kenya. (18) Oda Yukiyo, Women chose to be hairdressers: a case study on a developing economic activity in urban Ghana. (19) Ogawa Sayaka, The trade of second hand clothes in the local-mega city Mwanza, Tanzania: with special reference to the commercial networks of mali kauli transaction. (20) Andi Amri, Community participation in rehabilitation, conservation and management of mangroves: lessons from coastal areas of South Sulawesi, Indonesia. (21) Fujii Miho, Livelihood change in Philippine coconut farming village: a case study in Laguna Province of Luzon. (22) Koizumi Miyako, Ethnobotany of Penan Benalui of East Kalimantan, Indonesia. (23) Lim Boon Hock, Salt making in Bangladesh: a study on spatial distribution of salt mills.	
研究フォーラム	2003/5/15	“Applicability of GIS to the Studies of Society and Environment” 「GIS 解析：社会・環境研究への応用」 (1) 「費用効果の大きいリモートセンシングデータを使った開発途上国における図化の信頼性の向上-エチオピア高原での森林資源の図化を例にして」 Neil Stuart・Moss Duncan（エディンバラ大学）・久田信一郎（JICA 専門家） (2) 「ベースマップ：すべての GIS 空間解析を支えるもの」 平野聡（筑波大学歴史・人類学系） (3) 「地域研究と画像解析・地理情報システム」 荒木茂（京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科） (4) 「1990 年代終盤の異常降雨下におけるレンディーレランドの植生環境」 立入郁（長崎大学工学部） (5) 「ニジェールにおける牧畜民フラニの移牧ルートに関する GIS 解析」 大山修一（東京都立大学理学部） (6) 「タンザニア・セレンゲッティ平原における先史遊動民の土地利用」 衣笠聡史（筑波大学歴史・人類学） (7) 「エチオピア南西部における焼畑民の土地利用と森林・サバンナの動態」 佐藤廉也（九州大学比較社会文化研究科） (8) 「1970 年代以降のナイロビの都市発展に関する RS/GIS 解析」 C. M. Ndegwa（筑波大学、生命環境研究科） (9) 「アララ海の干上がりと植生変化の GIS 解析」 守村敦郎（人間環境大学人間環境学部） (10) 「ミャンマー国バーゴ山地におけるタウンヤ焼畑のマッピング」 竹田晋也（京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科） (11) 「プーラッグ国立公園（フィリピン）の 1990 年代における森林被覆の変化の解析」 A. I. Turda（筑波大学、生命環境研究科） (12) 「農村景観の GIS・RS 解析」 D. Sprague（独立行政法人農業環境技術研究所） (13) 「富士山麓溶岩帯における針葉樹林の形成におよぼす土地利用変化の影響」 後藤巖寛（山梨県環境科学研究所） (14) 「養蚕の衰退と野生動物の村落への侵入」 小笠原輝（山梨県環境科学研究所）	Tsukuba University, (IBARAGI, JAPAN)

セミナー・研究会

人間生態問題群 Human-Ecological Issue

DATE	TITLE	SPEAKER	VENUE
2007/01/25	"Magnitude of genetic diversity and patterns of their distribution in some Ethiopian plant domesticates and their impact on the development and livelihood of rural community "	Prof. Endashaw Bekele(Addis Ababa University) (Visiting Prof., Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University)	Room 307 on the fourth floor of CSEAS Common Building
2007/01/22	"Agrarian Relations in Upland Sulawesi: The Case of Tana Toraja"	Dr. Dias Pradadimara (CSEAS visiting research fellow and Lecturer at the History Department, Universitas Hasanuddin, Makassar, Indonesia)	Room 207 on the 2nd Floor, East Building, CSEAS, Kyoto University
2006/11/28	「ミャンマー・インレー湖流域の土壌浸食及び土砂堆積」	古市剛久（オーストラリア国立大学 資源・環境研究センター 博士課程）	京都大学東南アジア研究所 東棟 2F 教室
2006/10/2	第1回山地研究会（旧東南アジア大陸山地部研究会）山地研究の課題と方法 ーヒマラヤとインドの低山地部の研究からー	月原敏弘（福井大学教育地域科学）	京都大学東南アジア研究所 東棟 2F 教室
2006/9/20	"Biodiversity in Indonesia, Crisis and Sustainability"	Prof. Dr. Endang Sukara(Deputy of Indonesian Institute of Science)	E207, 2nd Floor, CSEAS East Building
2006/7/11	Farming Systems Development in Bangladesh - with special reference to traditional agricultural tools	Prof. Muhammad SALIM , CSEAS visiting research fellow	E207, 2nd Floor, CSEAS East Building
2006/6/20	「地域における亀岡市文化史料館の活動と役割」	黒川孝宏（亀岡市文化資料館館長）	E207, 2nd Floor, CSEAS East Building
2005/11/17	「アフリカ農業における『害虫防除』と『作物保護』」	足達太郎（東京農業大学国際食料情報学部講師）	京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科
2005/11/11	Assessing Changes in an Agricultural System in terms of Sustainability in the Northwestern Mountains of Vietnam	Dr. Pham Tien Dung, CSEAS visiting research fellow from faculty of Agronomy, Center for Agroecological Research and Environmental Studies, Hanoi Agricultural University	E207, 2nd Floor, CSEAS East Building
2005/10/20	Holocene Climate of Namibia: A Review Based on Geoarchives	Dr. Klaus Heine, Professor at the Institute of Geography, University of Regensburg, Germany (Visiting Scholar of ASAFAS)	E207, 2nd Floor, CEASE East Building
2005/7/14	Tank Irrigation in South India- What is Next?	K.Palanisami, Director, Water Technology Centre, Tamilnadu Agricultural University, Coimbatore	C307 3rd floor of Common building at CSEAS
2005/7/12	Changes in Human Adaptive Strategies in Rural Northeast Thailand	Dr. Somluckrat Grandstaff , CSEAS Visiting Research Fellow Dr. Terry B. Grandstaff (CSEAS Visiting Researcher)	E207, 2nd Floor, CSEAS East Building
2005/6/10	The Evolution of Mankind: The Significance of the Fossil Hominid –Discoveries in the Cradle of Humanity World Heritage Site near Johannesburg, South Africa	Dr. Phillip V. Tobias, Professor Emeritus, School of Anatomical Sciences, University of the Witwatersrand, Johannesburg, South Africa	No. 120 room, Faculty of Science
2005/5/24	Community dynamics of a tropical seasonally dry forest with special reference to deciduous dipterocarp forest in Northeast Thailand	Dr. Pongsak Sahunalu , CSEAS Visiting Research Fellow and Professor, Faculty of Forestry, Kasetsart University	CSEAS East Building, 2nd Floor, E207
2005/5/9	Changes in Rural Livelihood and Agriculture during the Last 20 years in Northeast Thailand: 1) The Changing Conditions and Future of Rice Growing in Northeast Thailand"	1) Dr. Viriya Limpinuntana , CSEAS & Khon Kaen University 2) Dr. Miyagawa Shuichi (Gifu University)	Room C307, 3rd floor of CSEAS Common Building

	2) From the 1980s to 2000s at Don Daeng Village: Rice-base Farming System		
2005/4/25	Forestland classification for swiddening and NTFPs: The case of the Pwo Karen in Thung Yai Naresuan Wildlife Sanctuary, Thailand	Dr. Claudio Delang (Visiting Project Researcher, Center for Southeast Asian Studies)	C307 seminar room, common building, Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University
2005/4/13	Special Seminar Human resource development of the Department of Environment and Natural Resources Forest management in the Philippines Community based forest management	Adeluisa Garcia Siapno , Director, Department of Environment and Natural Resources Ricardo Liboon Calderon, Provincial Environment and Natural Resources Officer, Department of Environment and Natural Resources Genesis Jiongco Francisco, Supervising Forest Management Specialist, Department of Environment and Natural Resources	Lecture Room, Hakubi-kan
2005/3/29	「ヒマラヤ・チベットの文化地理:人間地生態史の観点から」	月原敏博 (福井大学)	E207, 2nd Floor, CSEAS East Building
2005/3/25	「ミャンマー・サガイン管区におけるウルシ樹液採取者の社会・経済的特徴について」	谷祐可子 (東北学院大学経済学部[環境経済論])	E207, 2nd Floor, CSEAS East Building
2005/3/4	Studies on Agroforestry 1) 「マレーシア、サバ州における熱帯林修復のためのアグロフォレストリー試験—国際農林水産業研究センターアグロフォレストリープロジェクトから」 2) 「アフリカ、マラウィでの森林再生・村落振興へのアグロフォレストリーの導入」 3) 「生態環境からみたタウンヤ式チーク造林の持続性—ミャンマー・バゴ—山地の事例—」 4) 「東・南アフリカ・サバンナ帯における森林資源の利用と再生」 5) 「熱帯林とともに住む住民のヒューマンセキュリティ」	1) 加茂皓一 (森林総合研究所四国支所) 2) 柴田俊英 (三祐コンサルタント) 3) 鈴木玲治 (京都大学 ASAFAS) 4) 荒木茂 (京都大学 ASAFAS) 5) 小林繁男 (京都大学 ASAFAS)	E207, 2nd Floor, CSEAS East Building
2004/9/27	Efficient Management of Natural Resources for Sustaining Agriculture in the Sloping Land of Northern Vietnam by participatory Watershed Research and Application	Dr. Nguyen Van Viet (Associate Professor, Vietnam Agricultural Science Institute and CSEAS Visiting Research Fellow)	Room 207, East Building of CSEAS
2004/7/2	Cropping-Pattern Approach to the Dry Land Agriculture in Kyaukpadaung Township, Dry Zone, Central Myanmar	Dr. Khin Lay Swe, Associate Professor, Yezin Agricultural University and CSEAS Visiting Research Fellow	Room 207, East Building of CSEAS
2004/6/8	「東南アジアにおける土地利用変化が降水・気候変動に与える影響—これまでの研究および将来のブレイクスルーへ向けて—」	鼎信次郎 (総合地球環境学研究所)	E207, 2nd Floor, CSEAS East Building
2004/6/5	1) Ecological Change and Malaria Risk in a Unstable Malaria Region (Gusii), Southwest Kenya 2) The Changing Face of Africa's Legislatures: Women and Quotas	1) Dr. Isaac K Nyamongo, Institute of African Studies, University of Nairobi 2) Dr. Aili Mari Tripp, University of Wisconsin-Madison	Ryukoku University
2004/4/20	Special Seminars of CSEAS visiting research fellows 1) A Case for Mangrove Forest Rehabilitation 2) Sustainable Tropical Forest Management: Myanmar Perspectives"	1) Dr. Pipat Patanaponpaiboon, CSEAS Visiting Research Fellow 2) Dr. Aung Than, CSEAS Visiting Research Fellow	E207, 2nd Floor, CSEAS East Building
2004/4/16	「共生の戦略—フィリピン・パラワン島南部における先住少数民族モルボグ族の沿岸域での自然利用とその	辻 貴志 (神戸学院大学大学院 人間文化科学研究科)	E207, 2nd Floor, CSEAS East Building

	意義」		
2004/3/30	「ゾロアスター教の歴史と環境認識」	青木健（東京外大A A研・学振員）	E207, 2nd Floor, CSEAS East Building
2004/3/5	「中国福建省の山地農村における土地利用と生業の変遷」	葉勝億（京都大学農学研究科）	E207, 2nd Floor, CSEAS East Building
2004/2/27	Risk assessment of vibrio pathogens in seafood in Thailand and Malaysia: an emerging food safety issue in Southeast Asia	NISHIBUCHI Mitsuaki , (CSEAS)	E207, 2nd Floor, CSEAS East Building
2004/2/26	「モザンビークにおける自立型農村開発の試み」	田中清文（財団法人国際開発センター（IDCJ）主任研究員）	Room 307, Common Building of CSEAS
2004/2/20	「タイ北部におけるミアン（噛み茶）林管理とその変容—チェンマイ県バンマオー村の事例—」	佐々木綾子（京都大学農学研究科）	E207, 2nd Floor, CSEAS East Building
2004/1/25	Laos Field Station Workshop "Forest Management and Conservation in Laos" 1) Forest management and conservation in Laos 2) Introduction on edible forest products in Lao PDR 3) NTFPs gathering of Khum community after implementation of land allocation program: a case study from national biodiversity conservation area, northern Lao PDR 4) Plant diversity in paddy fields in relation with human use and management in Savannakhet Province, Laos"	1) Hounghet CHANTHAVONG 2) Khamleck XAYDALA 3) Anoulom VILAYPHONE 4) Kosaka, Yasuyuki	Hakubi-kan Building, ASAFAS
2003/12/19	「ラオス・ルアンブラバン県の焼畑農業を中心とした土地利用変化モデルに関する研究」	和田由美子（東京大学空間情報科学研究センター）	E207, 2nd Floor, CSEAS East Building
2003/12/12	「ミャンマー農業の多様と現在」	松田正彦（京都大学東南アジア研究センター）	E207, 2nd Floor, CSEAS East Building
2003/12/4	Taungya cultivation (shifting cultivation) and landless households in rural Myanmar: The case of a village in Yezin, Central Myanmar	Ms. Cho Cho San, Visiting Research Fellow (CSEAS), Assistant Lecturer, Department of Agricultural Economics, Yezin Agricultural University, Myanmar	E207, 2nd Floor, CSEAS East Building
2003/10/29	Small-scale Agriculture in Marginal Areas: 「限界地域における小規模生業・自然資源管理の改善のための新たな手法—アジアモンスーン地域の経験」	Linxiu Zhang, Vice Director, Center for Chinese Agricultural Policy, Chinese Academy of Sciences	UN University 国連大学エリザベス・ローズ会議場
2003/10/27	Agricultural Evolution through Integrated Pest Management? A comparative perspective from Indonesia, Cambodia, and Vietnam	Dr. Yunita T. Winarto, CSEAS Visiting Fellow	E207, 2nd Floor, CSEAS East Building
2003/10/17	「パプアニューギニア高地におけるサツマイモ耕作の変容」	梅崎昌裕（東京医科歯科大学）	E207, 2nd Floor, CSEAS East Building
2003/7/10	Rights over the Forests	Hedar Laudjeng	Room 307, Common Building of CSEAS
2003/6/24	Forest Management in Sarawak Malaysia with Special Reference to Rehabilitation Efforts in Deforested Sites	Lee Hua Seng , Ph.D.,CSEAS Visiting Fellow	E207, 2nd Floor, CSEAS East Building
2003/5/29	A Comparison of Ethiopia Highland Societies with Those in the Andes and Himalayas	Professor. SEKINO Yoshiharu, Musashino Art University	Room 307, Common Building of CSEAS
2003/5/15	Forest management and Forest Products Exploitation by in the BufferZone of the Pu Mat National Park, Nghe An province, Vietnam	Dr. Dao Trong Hung, CSEAS Visiting Fellow	E207, 2nd Floor, CSEAS East Building
2003/3/28	「文化のインヴェンション」再考—バリ文化の表象	NAKANO Maiko (JSPS Fellow, Hitotsubashi Univ.)	E207, 2nd Floor, CSEAS

政治経済問題群 Politico-Economic Issues			
DATE	TITLE	SPEAKER	VENUE
2007/03/09	研究会「次世代の地域研究」 1) 「パール判事と東京裁判」 2) 「G・K・ゴーカーレーの地方自治論」	1) 中島岳志（北海道大学公共政策大学院） 2) 上田知亮（京都大学法学部） コメンテーター 山本博之（京都大学地域研究統合情報センター）	京都大学東南アジア研究所 共同棟3階講義室 (307)
2006/12/18	"Shiite Movements in Iraq and Current Political Situation"	Dr. Faleh A. Jabar	Faculty of Engineering Bldg. No.4, 4th floor, Lecture Room1 (AA401)
2006/12/15	"The 7th Seminar on Politics, Economics and History of Asia" Legalizing Shari'a (Islamic Law) and Its Impact on the 'Pancasila State' in Indonesia: the Case of Shari'a Regulations (Perda Shari'a)	Pierre Van der Eng (Australian National University)	Room 307 on the fourth floor of CSEAS Common Building
2006/11/18	研究会「比較の中の東南アジア研究」 1) 「在米ベトナム人とベトナム共産党の政策転換」 2) 「地方自治への市民参加の制度化は可能か? : ケソン市開発評議会の事例を中心に」	1) 古屋博子(神田外国語大学非常勤講師) 2) 西村謙一(大阪大学助教授)	京都大学工学部 4 号館 4 階
2006/11/15	"State, Market and Community" 1) Indonesian Various NGOs: How Effective? 2) Challenges for NGOs in a New Province: Experience from the Field	1) Roem Topatimasang 2) Arusdin Bone	Tonan-Tei on 2nd Floor of North Building, CSEAS
2006/10/25	環境適応と国家形成ータイ国史定説再考	石井米雄（人間文化研究機構長）	京都大学東南アジア研究所東棟1階会議室（107）
2006/10/19	ウガンダの地方分権化の新展開：2000年と2006年の比較から	斉藤文彦（龍谷大学国際文化学部教授、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科客員教授）	京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科東棟2階第1セミナー室
2006/10/17	"Legalizing Shari'a (Islamic Law) and Its Impact on the 'Pancasila State' in Indonesia: the Case of Shari'a Regulations (Perda Shari'a)"	Dr. Abubakar Eby Hara (CSEAS visiting research fellow and lecture, Faculty of Social Science and Political Science, University of Jember)	E207, 2nd floor of CSEAS East Building
2006/10/14	研究会「比較の中の東南アジア研究」 1) 「政府党 UMNO は、いかに野党 PAS トレンガヌを奪回したのか? 2004 年総選挙・UMNO・マレーシア『国民戦線』」 2) 「韓国研究の常識と政治学の常識の間：『韓国経済の政治分析』より」	1) 河野元子（京都大学 ASAFAS） 2) 大西裕（神戸大学大学院国際協力研究科・教授）	京都大学工学部 4 号館 4 階、大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・第1講義室
2006/9/27	"Indonesian Perspective of Foreign Policy: Under the Waves of Neo-Conservatism and Its Counters"	Dr. Dewi Fortuna Anwa, MA,APU (Deputy Chairman for Social Sciences and Humanities; LIPI (Indonesian Institute of Sciences))(ex-Chief Spokeswoman for the Habibie President)	C307 CSEAS, Kyoto University
2006/9/22	「タイでなぜクーデターが起きたのか?」	玉田芳史(京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科教授)	京都大学東南アジア研究所 東棟2階セミナー室
2006/9/1	"New Voices from Area Studies" 1) 'The Static of Modern Thai State: Mediators in the State-Society Relations' 2) 'Managing Decentralization: Local Elites' Reactions between Good Governance and Rent Seeking in West Java, Indonesia.	1) Viengrat Nethipo(Lecturer, Faculty of Political Science, Chulalongkom University) 2) Takeshi Ito(Lecturer, Tokyo University of Foreign Studies/ PhD Candidate, Department of Political Science, Yale University)	CSEAS East Building, 2nd Floor, E207

2006/7/28	「比較の中の東南アジア研究」 1) 「国王 vs 首相：court coup 進行下のタイ政局」 2) 「現代中国の都市化と市制化」	1) 玉田芳史（京都大学） 2) 三宅康之（愛知県立大学）	京都大学本部構内 工学部 4 号館 4 階第 1 講義室
2006/7/6	The Analytical Problem of the "Embeddedness" of Economic Activity in Culture: Perspectives for Global Economic History	Dr. Gareth Austin (London School of Economics)	E207, 2nd Floor, CSEAS East Building
2006/7/1	“New Perspectives on Chinese Business, Family, and Changing Regimes in Indonesia” 1) Visualizing ‘Ethnic Chinese’: Towards an agenda for Research 2) Paradise Lost: The Fates and Fortunes of the Oei Tiong Ham Concern, 1930s-1960s 3) Disentangling the Chinese: The Chinese in the Making of the New Order 1965-68 4) Co-evolution of Generational and Regime Changes in Ethnic Chinese Conglomerates: The Case of the Salim Group of Indonesia	1) Abidin Kusno, University of British Columbia 2) Peter Post, Netherlands Institute for War Documentation 3) Aizawa Nobuhiro, National Graduate Institute for Policy Studies 4) Marleen Dieleman, Leiden University School of Management	E207, 2nd Floor, CSEAS East Building
2006/6/15	「南アフリカの社会政策形成における市民社会組織の役割」	牧野久美子（日本貿易振興機構アジア経済研究所）	E207, 2nd Floor, CSEAS East Building
2006/6/9	Political Change in Malaysia and Singapore: A Personal Reflection	James Chin, Universiti Malaysia Sarawak institute of East Asian Studies, Director	E207, 2nd Floor, CSEAS East Building
2006/5/25	Fleeing from Caste Oppression: Emigration of South Indian Coolies to Southeast Asia, 1871-1982	Prof. Satyanarayana Adapa, CSEAS visiting research fellow and Professor, Department of History, Osmania University, India	E207, 2nd Floor, CSEAS East Building
2006/5/23	“Politics, Economics and History of Asia” 1) Wage Policy and Industrialization in Indonesia 2) Industrial Conflicts and Labor Managements in Indonesia	1) Prof. Prijono Tjiptoherijanto, University of Indonesia 2) Prof. Kosuke Mizuno (CSEAS)	E207, 2nd Floor, CSEAS East Building
2006/4/28	Asia and the Rise of the Early Modern World Economy	Professor Om Prakash, Delhi School of Economics	E207, 2nd Floor, CSEAS East Building
2006/4/22	Politics and Role of Mass Media in the Post-Authoritarian Indonesia	Endy M. Bayuni, Chief Editor of the Jakarta Post	Tonan-Tei on 2nd Floor of North Building, CSEAS
2006/3/28	Can Better Governance Be All? Malaysian Politics Since November 2003”	Khoo Boo Teik, Visiting Research Fellow	CSEAS East Building, 2nd Floor, E207
2006/2/6	Agro-based Industry in Myanmar: with special reference to sugar industry”	U San Thein, Deputy General Manager, Myanmar Sugarcane Enterprise, Ministry of Agriculture and Irrigation of Myanmar	Room 409, 4th floor of CSEAS Common Building
2006/1/18	「比較の中の東南アジア研究」 (1) 「華僑送金の再考—サンフランシスコとシンガポール：東西南北の広東系を例に—」 (2) 「インド・ムスリム商人とその広域ネットワーク」	久末亮一(東京大学) 大石高志（神戸市外国語大学）	E207, 2nd Floor, CSEAS East Building
2006/1/10	Third World View of the Genealogy of Democracy -Theorizing from the Indonesian, the American, and the Japanese Political Histories	Dr. Machtar Pabottingi, CSEAS visiting research fellow, Senior Researcher at Center for Political Studies, Indonesian Institute of Sciences	E207, 2nd floor of CSEAS East Building
2005/12/19	「中国農村金融の再建を求めて—農村金融の現状と改革の視点—」	Dr. Chen Jianbo, Development Research Center of the State Council in China & Visiting Researcher, The Asian Development Bank Institute	E207, 2nd floor of CSEAS East Building
2005/12/14	「ネパールの現在—武力紛争と民主化のゆくえ—」	Usha Titikshu, Nepali photojournalist	Room 307, Common Building of CSEAS

2005/11/3	「東南アジアにおける党、政治、国家」 1) 革命政党を建設せよ、官僚制を破壊せよー社会主義期ビルマにおける党、軍、国家関係（1962－1988） 2) 「インドネシア闘争民主党的組織的特性ースハルト後の民主化、分権化との関係性に焦点を当てて」 3) 「体制移行期のカンボジアにおける人民党の生き残り戦略」 4) 「ラオスの部門別管理制度における県党委員会および知事の権限に関する一考察ーヴィエンチャン県工業部における事業形成過程を事例にー」	1) 中西嘉宏（京都大学） 2) 櫻井雅俊（名古屋大学） 3) 山田裕史（上智大学） 4) 瀬戸裕之（名古屋大学）	E207, 2nd Floor, CSEAS East Building
2005/9/29	Can Pulse Improve Myanmar Rural Economy?-Changes of Income Distribution in a Green gram Producing Area in Lower Myanmar -	Ikuko Okamoto	C307, 3rd floor, Common bldg.
2005/9/23	「比較の中の東南アジア研究」 1) インドネシア政治研究：権威主義体制から民主化後の政治体制について 2) ラテンアメリカ政治研究の動向と今後の課題ーペルーという周縁的事例からー	1) 岡本正明(京都大学) 2) 村上勇介(国立民族学博物館)	E207, 2nd Floor, CSEAS East Building
2005/6/30	Strategies and Current Challenges of African Economic Development	Dr. Jean-Claude Maswana, Lecturer, Graduate School of Economics, Kyoto University	E207, 2nd Floor, CSEAS East Building
2005/4/19	Intellectual Capital in Malaysian Semiconductor Industry	Dr. Goh, Pek Chen, Multimedia University Malaysia	E207, 2nd Floor, CSEAS East Building
2005/3/31	「インドネシアにおけるイスラーム式（シャリーア）小規模金融：ジョクジャカルタ特別州におけるシャリーア村落金融組合バイトウル・マール・ワッ・タムウィル（Baitul maal wat Tamwil:BMT）の普及から」	北村恵子（名古屋大学大学院国際開発研究科博士後期課程）	Room 307, Common Building of CSEAS
2005/3/7	「モンゴルにおける農村経済とマイクロファイナンスの可能性」	岡本真理子（日本福祉大学）	E207, 2nd Floor, CSEAS East Building
2005/2/24	1) Japanese makers in Thailand face problems of industrial waste management: Factory Law revision and Measures from case studies 2) Politics of Resource Conflict;Water Conflict in Northern Thailand	1) So Sasaki (Graduate school of Eocmoic, Hokkaido Univeristy, PhD candidate) 2) Kensuke Yamaguchi, Tokyo University, MA	Bangkok Liaison Office, CSEAS, Kyoto University
2005/2/18	Democracy and Populism in Thailand in Global Perspective	Dr. Pasuk Phongpaichit, CSEAS Visiting Research Fellow	Room C307, 3rd floor of CSEAS
2005/2/8	A Cross-Regional Comparison between Chinese Minority in Indonesia and Chinese Minority in Japan : Host Countries Policy toward the Chinese, with a case study at Kobe	Dr. Thung Ju-Lan from LIPI, currently JSPS Fellow	Room 107, East Building of CSEAS
2005/1/20	The Politics of Ethnic Entitlement in the Gambela, Ethiopia	Dereje Feyissa, COE researcher at Osaka University	E207, 2nd Floor, CSEAS East Building
2005/1/8	1) 「水の都・バンコクにおける郊外住宅地開発ー1890年から1930年代におけるバーンラック地区とドゥシット地区を中心にー」 2) 「アジア太平洋の環境紛争：全体像および国連開発計画の方向性」	1) 岩城孝信（法政大学大学院工学研究科建設工学専攻博士課程／チュラロンコン大学社会調査研究所 客員研究員） 2) 礪波亜希（京都大学大学院経済学研究科博士後期課程／UNDP バンコク地域センター インターン）	Bangkok Liaison Office, CSEAS, Kyoto University
2004/11/17	1) Economic Growth and FTAs: The Key Challenges for East Asia and Singapore 2) FTAs in East Asia: Shaping the direction of regional integration and competiitveness	1) Dr. Shandre Thangaveru (National University of Singapore) 2) Dr. Mahani Zainal Abidin (University of Malaya)	Room 107, East Building of CSEAS

2004/11/12	1) Why some villages succeeded, and others did not ? - Comparative Analysis of One Tambon One Project(OTOP) in Thailand 2) The Formation and the Agenda of Circulation based Society in Thailand; Compound viewpoint of Regime-Actor Analysis and Material Flows	1) Izumi Takei , JSPS research fellow/Tokyo University 2) So Sasaki, Graduate school of Economic, Hokkaido University	Bangkok Liaison Office, CSEAS, Kyoto University
2004/11/8	Thailand's Cross Border Economy: A Case Study of Sa Kaeo and Chaing Rai	Dr. Srawooth Paitoonpong, Senior Research Specialist, Thailand Development Research Institute	E207, 2nd Floor, CSEAS East Building
2004/10/4	Agricultural Marketing Liberalization and the Rural Economy in Myanmar-A Case Study of a Green gram Producing Area in Lower Myanmar-	岡本郁子 (アジア経済研究所)	E207, 2nd Floor, CSEAS East Building
2004/7/15	「シエラレオネ紛争における民間人への残虐な暴力のアナトミー: 国家、社会、精神性」	Dr. Takehiko OCHIAI, Associate Professor, Faculty of Law, Ryukoku University	Room 307, Common Building of CSEAS
2004/7/6	Living in disguise? Minahasan community in Oarai, Ibaraki	Dr. Riwanto Tirtosudarmo Visiting Professor, Research Institute for Language and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies	E207, 2nd Floor, CSEAS East Building
2004/6/25	Big Four Telecoms, Thaksin Regime and Democracy in Thailand"	Dr. Ukrist Pathmanand, Associate Professor, Institute of Asian Studies, Chulalongkorn University, and CSEAS Visiting Research Fellow	E207, 2nd Floor, CSEAS East Building
2004/6/5	1) Ecological Change and Malaria Risk in a Unstable Malaria Region (Gusii) Southwest Kenya 2) The Changing Face of Africa's Legislatures: Women and Quotas	1) saac K Nyamongo, Institute of African Studies, University of Nairobi 2) Aili Mari Tripp, University of Wisconsin-Madison	Ryukoku University
2004/6/2	The Roots of Palestine Issue	Dr. Azam Tamim, Visiting Professor, Kyoto University	ASAFAS- Engineering Bldg. No.4, 4th floor, Lecture 415
2004/5/28	Aspects of Bangkok's Growth in the 19th and 20th Centuries	Dr. Porphant Ouyyanont, Associate Professor School of Economics, Sukhothai Thammathirat Open University, Thailand	E207, 2nd Floor, CSEAS East Building
2004/5/24	Translations of Antisemitism: Jews, the Chinese, and Violence in Colonial and Postcolonial Indonesia"	Dr. Jeffrey Hadler, Assistant Professor, Department of South and Southeast Asian Studies, University of California, Berkeley, U.S.A.	Room 307, Common Building of CSEAS
2004/4/2	International Forum on Statesman or Manager? Image and Reality of Leadership in SEA"		Chumbhor Pantip Conference Room, Chulalongkorn Univ
2004/3/26	The Analysis of Intra-Industry Trade Between Indonesia and Japan: A Case Study in Manufactured and Agricultural Products"	Mr. Zamroni Salim, Research Centre for Economics, Indonesian Institute of Sciences	E207, 2nd Floor, CSEAS East Building
2004/2/1	1) The World of Chaang: The Labor Market of Syokugyou Syuudan in Industrial Thailand 2) Motivations behind the Purchase of Personal Computer among Thai Students	1) Mr. Atsuro Morita (PhD candidate Tokyo University) 2) Mr. Jumpei Icinosawa (PhD candidate Tokyo University)	Bangkok Liaison Office, CSEAS, Kyoto University
2003/11/27	Cooperative's activity and farmer's life in the development process of the Red River Delta, Vietnam	YANAGIZAWA Masayuki	E207, 2nd Floor, CSEAS East Building
2003/11/21	Women in the labor market: the case of Japan and Thailand	Dr. Srawooth Paitoonpong, Visiting Research Fellow of CSEAS.	E207, 2nd Floor, CSEAS East Building
2003/11/4	Resistance to the Nepalese State: Why did it collapse so	Dr. David N. Gellner , University Lecturer in the	E207, 2nd Floor, CSEAS

	quickly?	Anthropology of South Asia, Oxford University	East Building
2003/10/31	Indonesian migrant workers in Japan	Ms. Haning Romdiati, Research Center for Population, Indonesian Institute of Science	E207, 2nd Floor, CSEAS East Building
2003/6/26	Reinventing the Local? Privatization and Resource Management in West Africa	Prof. Sara S. Berry, Johns Hopkins University	Room 307, Common Building of CSEAS
2003/5/23	"Workshop on Socio-economic and Political Transitions in Northeastern Thailand" 1) Gender Role in Local Politics in the Northeast of Thailand 2) Urbanization of Khon Kaen and its Impact on Culture 3) Management Capability of Tambon Administration Organizations in the Northeast of Thailand	1) Farung Meeudon 2) Apisak Fhaithakam 3) Peerasit Kamnuansilpa	E207, 2nd Floor, CSEAS East Building
2003/4/22	Indonesia's State Enterprises: From State Leadership to International Consensus	Dr. Yasmin Sungkar, CSEAS Visiting Fellow	E207, 2nd Floor, CSEAS East Building
2003/3/17	「村のリーダーたちと改良普及事業」 1) 生活改善活動で進めたリーダーの確保・育成について 2) 亀岡市の農家のリーダーたちと改良普及事業 3) バングラデシュの農村開発と農村リーダーたち	1) 西潟範子（日本農業新聞記者） 2) 松田武子（京都府亀岡市農業改良普及センター次長、生活および農業改良普及） 3) 安藤和雄（東南アジア研究所）	Room 307, Common Building of CSEAS
2003/3/11	スカルノのインドネシアとスハルトのインドネシア ("Sukarno's Indonesia and Suharto's Indonesia") 1) Gotong Royong (Community Self-Help) and Indonesia under the Soekarno Regime 2) Changes of the Government Institutions under the Suharto Regime	1) GUMIZAWA Hideo (Tokyo Univ. of Foreign Studies) 2) SATO Yuri (Institute of Developing Economies, JETRO)	E207, 2nd Floor, CSEAS East Building
2002/12/19	A Disorganized Peasantry and Failed Rural Development in Tanzania	Prof. Sam Maghimbi, University of Dar es Salaam, Dept. of Sociology and Anthropology	京都大学アフリカ地域研究資料センター
2002/11/15	「タイ産高級米ジャスミン・ライスとガーデン・ライスの輸出と品質問題」	宮田敏之（天理大学国際文化学部タイ学科）	E207, 2nd Floor, CSEAS East Building
2002/10/17	From Tractors to Oxen: Resettlement, Foreign Aid, and Change in Ethiopia	Gebre Yntiso, Asafas, Kyoto U. & COE-JSPS Research Fellow	Room 307, Common Building of CSEAS

社会文化問題群 Socio-Cultural Issue			
DATE	TITLE	SPEAKER	VENUE
2007/02/03	イスラーム地域研究センター研究会（ユニット4「広域タリーカ」） 1) 「預言者の医学—ザンジバルの事例から」 2) 「タリーカ組織論の射程—共同性と単独性、ミクロからネットワークまで」	1) 藤井千晶（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科） 2) 新井一寛（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）	京都大学本部キャンパス・共同総合研究棟4階AA447号室
2006/11/14	"Core University Program Special Seminar Project 8: "Changing 'Families'" -Is the Thai Family Patriarchal?" PART 1 1)"Family Law and Consolidation of Modern Thai Version of Patriarchy" PART 2 2) "Managing Differences in Family Practices of the Karen in Chiang Mai City of Northern Thailand" 3) "Changing Hmong Families (tentative)"	PART1 1) Dr. Chalidapom Songsamphan (Thammasat University) Comments:Junko Koizumi (Kyoto University) PART2 2) Dr. Kwanchewan Buadaeng (Chiang Mai University) 3) Dr. Prasit Leeprecha (Chiang Mai University) Comments:Yoko Hayami (Kyoto University)	Room 207 on the 2nd Floor, East Building, CSEAS, Kyoto University
2006/11/17	「東南アジアの社会と文化」研究会 サラバン仏教賛歌 —東北タイ農村における女性の宗教実践と社会変容—	加藤真理子（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）	京都大学東南アジア研究所 東棟 2F 教室
2006/10/20	「人類学メディアの新しい時代に向けて」(Toward the New Age of Anthropological Media:) 1) 映像の異なる解釈 (Various Impacts of a Film: Screening in Different Cultural Contexts) 2) 新作シナリオ (A Rough Sketch for my Upcoming Film Project) 3) KJ 法を使った参加型映像制作の試みについて (An Approach of Collaborative Filmmaking with the KJ-method) 4) 映像を通じた宗教体験研究の展望 (Visual Images of Sufi's Religious Experience in Altered State of Consciousness) 5) From the visual to the visible and back again- reflections on visual anthropology as an ethno-sensory practice	1) 南出 和余 Kazuyo Minamide (総合研究大学院大学文化科学研究科) 2) 川瀬 慈 Itsushi Kawase (京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科) 3) 小林 直明 Naoaki Kobayashi (龍谷大学非常勤講師) 4) 新井 一寛 Kazuhiro Arai (京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科) 5) Rupert Cox (Granada Centre for Visual Anthropology, Social Anthropology Department, Manchester University)	京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科(ASAFAS) 共同棟3階 307号室
2006/10/10	「くうざん節—中国貴州省に住む苗族にとって最も重要な祖先祭祀」	羅二虎（東南アジア研究所外国人研究員）	京都大学東南アジア研究所 東棟 2F E207
2006/9/28	"Interrogating "Texts" and "Traditions" of Resistance: New Arenas of Historical and Anthropological Research in Southern Ethiopia "	Dr. Tekalign Wolde-Mariam (Addis Ababa University)	Graduate School of Human and Environmental Studies
2006/9/15	「シンガポールの英語重視政策が華人社会に与えた影響について—子ども達の言語教育環境の視点から—」	高橋美由紀（兵庫教育大学）	京都大学東南アジア研究所 東棟2階セミナー室（207）
2006/7/28	The Iranian Passion Drama (Ta'ziyeh) and Iranian Political Culture	Dr. William O. Beeman, Brown University, Professor of Anthropology, and Theatre, Speech and Dance	Commons Building, CSEAS 3th floor s
2006/7/7	Elderly Care in the Ageing Societies: Women as Care-Givers and Care-Receiver: Case Studies in The Netherlands, Indonesia and Japan	Dr. Solita Sarwono, Visiting Professor, ASAFAS, Kyoto University/Public health educator and gender training specialist, NEDWORC Association, The Netherlands	Lecture Room 1 (AA 401), 4th Floor, Faculty of Engineering Bldg. No.4
2006/5/29	1) Gender Issues in Elderly Care in Malaysia and Japan 2) Forest, Spirits and Community: Searching for the "Spirit of	1) Dr. Ekawati Wahyuni 2) Dr. Nadarajah Manickam	CSEAS Commons Building, 3rd Floor, C307

Sustainability”			
2006/5/19	「ベトナムの少数民族政策－法整備と民族分類再確定をめぐって－」	伊藤正子（京都大学）	京都大学東南アジア研究所 東棟 207 号室
2006/5/18	Hunter-gatherer's Concepts on the Environment	Dr. Matthias Brenzinger, Visiting Professor, Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies	East Building, 2nd Floor, E207
2006/4/27	African Philosophy: an Introduction	Professor Bekele Gutema, Department of Philosophy, Addis Ababa University,	East Building, 2nd Floor, E207
2006/4/21	Traditional Culture in the Creation of Contemporary Myanmar	Professor U Sai Aung Tun, Vice Chairman, Myanmar Historical Commission	Commons Building, 4th floor seminar room
2006/3/31	1) 「農村開発における地域性－生活文化の基層」 2) 「チベット訪問（2006 年夏）－アテーシャの縁の地の農業景観－」 3) 「中世のベンガル社会におけるイスラーム－チャイタニヤの行伝を通して見たバウラ県のグラムデボタについて」	1) 安藤和雄（東南アジア研究所） 2) 外川昌彦（広島大学大学院） 3) 白田雅之（東海大学）	京都大学東南アジア研究所 東南亭（北棟 2 階）
2006/3/16	「グローバルな言説から外された戦い：南北スーダン境界地域の住民達の内戦経験」	岡崎彰（神奈川大学助教授）	East Building E207
2006/3/8	1) 「在地の技術の再生：ブラマブトラ流域地域における緑の革命以後の犁農耕の発展」 2) 「人とモノの媒介過程：生態心理学・メディアロジー・アクター・ネットワーク 論をめぐって」	1) 内山田康（筑波大学） 安藤和雄（京都大学東南アジア研究所） 2) 足立明（京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科）	工学部 4 号館 4 階第 2 講義室
2006/2/17	The Role of Development Monks and Social Change in Northeast Thailand	Pinit Laphthananon, CSEAS visiting research fellow from Social Research Institute, Chulalongkorn University, Thailand	Room 307, 3rd floor of CSEAS Common Building
2006/2/15	Cross-Border Marriages and Transnational Gender Mobility: Experiences of Village Women from Northeastern Thailand	Dr. Ratana T. Boonmathya, CSEAS visiting research fellow from Institute of Language and Culture for Rural Development, Mahidol University at Salaya, Thailand	E207, 2nd floor of CSEAS East Building
2006/2/10	「ココヤシ栽培の小農社会における土地をめぐる社会関係－フィリピン・ルソン島ラグナ州「高地」の事例」	藤井美穂（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）	京都大学東南アジア研究所 東棟 2F 教室
2005/12/16	1) 「人とモノをめぐる問題系－物質文化論を超えて」 2) 「部族の神が変わる時、同時に変わって行く意味形成と主体形成の仕掛け－インド・ケララの事例」	1) 足立明（ASAFAS） 2) 内山田康（筑波大学人文社会科学研究科）	京都大学工学部 4 号館 4 階北側 第 1 講義室（AA401 号）
2005/12/15	Tunisian Women between the Ideal and the Actual	Dr. Bouzid Omri (Kwansei Gakuin University)	E207, CSEAS Building
2005/12/12	Westernization and Asian Identity	Professor Irfan Habib, Aligarh Muslim University, India	ASAFAS Lecture Room No.4, Kyoto University
2005/12/3	「サハラ以南アフリカのスーフィズム・聖者信仰・タリーカ」 1) 「ムスリムの霊とカーフィルの霊：インド洋西地域におけるイスラームと精霊憑依」 2) 「ライエン教団の聖者をめぐる、父系氏族アスカンと母系氏族ヘートの機能－セネガルの漁民レプーの二重単系出自」	1) 花淵馨也（北海道医療大学） 2) 盛恵子（名古屋大学大学院）	京都大学東南アジア研究所、大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 共同棟 3 階教室
2005/11/25	「フィリピンにおける『家族のための移動』再考－く分け与えること－をめぐる社会関係を手がかりに－」	細田尚美（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）	京都大学東南アジア研究所 東棟 2F 教室
2005/11/7	Yao Refugees: From Highland Southeast Asia to California	Eric Crystal (University of California at Berkeley)	E207, 2nd Floor, CSEAS East Building
2005/10/7	The Search for 'Development Monks	Pinit Laphthananon, CSEAS & Social Research	E207, 2nd Floor, CSEAS

		Institute, Chulalongkorn University, Thailand	East Building
2005/10/4	Conservation of Cultural Heritage in Lao PDR: Issues and on-going projects	Thongsa Sayavongkhamdy, (CSEAS & Department of Museums and Archaeology Ministry of Information and Culture, Lao PDR	E207, 2nd Floor, CSEAS East Building
2005/9/16	「ポル・ポト時代以後のカンボジアにおける農村社会の“再編”：トンレサップ湖東岸地域における調査」	小林知（日本学術振興会特別研究員）	共同棟 3 階講義室（307）
2005/9/7	「バンギ・フィールド・ステーション研究会」 1)「マレーシアの政党政治への視角：70～80 年代 UMNO 党内政治を中心に」 2)「マレーシア社会におけるイスラーム主義運動と公共圏の形成」	1) 伊賀 司（神戸大学大学院国際協力研究科院生） 2) 塩崎悠輝（国際イスラーム大学マレーシア大学院）	Sudut Wacana, Institute of the Malay World and Civilization(ATMA), Universiti Kebangsaan Malaysia(UKM)
2005/5/27	「移住経験と『華』人の動態的理解にむけてータイ北部における雲南系漢人と雲南系回民の移住とネットワークの形成からー」	王柳蘭（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）	京都大学東南アジア研究所 東棟 2F 教室
2005/4/22	My Hometown Aceh, Before and After Tsunami	Ms. Syafwina, Lecturer, Syiah Kuala University, Banda Aceh, Indonesia)	CSEAS East Building, 2nd Floor, E207
2005/4/21	1) Past, Present and Future of the Languages of Tanzania (LOT) Project 2) Revisiting the sociolinguistic aspects of Lingala, on the basis of recent linguistic materials"	1) Prof. Daniel Mkude, University of Dar Es Salaam 2) Prof. Motingea Mangulu, Universite Pedagogique Nationale Kinshasa -Binza (RDC)	E207 CSEAS Building
2005/4/15	Understanding Field Research: A Reflection on the Study of Soundscape and the Anthropology of the Sense	Komatra Chuengsatiansup, Visiting Professor ASAFAS	ASAFAS Lecture Room Common Building.
2005/4/5	Human Vulnerability, Knowledge Industry and Alternative Systems of Knowledge: Reflections on Human Security in an Era of Violence, Epidemics, and Environmental Disasters"	Komatra Chuengsatiansup (Visiting Professor)	Lecture Room #1, 4F, Engg. Dept. Building #4.
2005/3/25	「テキスタイルに見る東南アジアの特殊性と普遍性」	吉本忍（国立民族学博物館）	京都大学東南アジア研究所 共同棟 3F
2005/3/14	バンギ・フィールド・ステーション・ワークショップ 1) 「フィールドワーク・図書館のフィールドワーク：開発政策下マレー漁村調査での発見と模索」 2) 「少数民族トゥムアンの生業変容に関する調査研究」	1) 河野元子（京都大学 ASAFAS 大学院生） 2) 内藤大輔（京都大学 ASAFAS 大学院生）	Sudut Wacana, Institute of the Malay World and Civilization(ATMA), Universiti Kebangsaan Malaysia(UKM)
005/3/3	「ネパールにおける社会運動への視角ー債務農業労働者解放運動の事例から」	藤倉達郎	京都大学工学部 4 号館 4 階 アジア・アフリカ地域研究研究科
2005/2/14	バンギ・フィールド・ステーション・ワークショップ 1) 「研究対象地域での個人的経験と資料との出会い：20 世紀初頭海峽植民地の華人社会の場合」 2) 「植民地期統計資料にみる経済史研究」	1) 篠崎香織（東京大学大学院総合文化研究科） 2) 杉本一郎（マラヤ大学アジア・ヨーロッパ研究所研究員）	Sudut Wacana, Institute of the Malay World and Civilization(ATMA), Universiti Kebangsaan Malaysia (UKM)
05/1/21	「妖術師と正義論」	中川敏（大阪大学）	京都大学東南アジア研究所 共同棟 3F
2005/1/20	バンギ・フィールド・ステーション・ワークショップ「それぞれのフィールドワーク：マレーシア研究の可能性を再考する」	座談会「それぞれのフィールドワーク：マレーシア調査研究の"今"を語る」	Institute of the Malay World and civilization, Universiti Kebangsaan Malaysia
2004/12/15	Mien Sports and Heritage, Thailand 2001	Leif Jonsson, CSEAS Visiting Scholar	Room 207, East Building of CSEAS
2004/12/10	The Sufi Dance in Turkey and Central Asia (Including Chinese Turkestan	Dr. Thierry Zarccone, Ecole des Hautes Etudes en Science Sociale, Paris	Lecture Room 1, SAFAS, 4th Bldg. Main Campus

2004/11/29	Karen and Hmong adaptation to economic changes in Northern Thailand	Dr. Claudio Delang, Visiting Project Researcher, CSEAS	Room 207, East Building of CSEAS
2004/11/25	「国家制度と『平等』の政治人類学—カメルーン・バムン王権社会の階層化と非階層化をめぐって」	和崎春日 (名古屋大学文学研究科教授)	共同棟 3 階共同講義室 (307 号室)
2004/11/19	「伝統医療の『復興』とローカルな実践—北タイ農村におけるタイ・マッサージの受容」	飯田淳子 (川崎医療短期大学)	東棟 2 階セミナー室 (E207)
2004/11/4	Women's Access to Land In Sundanese Community: Case of Upland Peasant Households In Kemang Village West Java, Indonesia	Ms. Siti Sugiah Machfud Mugniesyah, Center for Women's Study Bogor Agricultural University	Room 207, East Building of CSEAS
2004/10/21	「アフリカの伝統食に見る食の原点」 Perspective towards indigenous food in Africa	北畠直文 (京都大学大学院農学研究科) KITABATAKE Naofumi (Professor, Graduate School of Agriculture, Kyoto University)	Graduate School of Asian Seminar Room (#207) East Building
2004/10/19	Malay Traders in the Straits of Melaka 1780s to 1790s	Dr. Nordin Hussin, CSEAS Visiting Research Fellow	Room 207, East Building of CSEAS
2004/10/15	Forests, Bad Roads, and Democracy: Interpreting an Unsuccessful Protest	Dr. Leif Jonsson, CSEAS Visiting Research Fellow	Room 207, East Building of CSEAS
2004/9/27	Modernity, Public Spheres and Religious Resurgence	Prof. Mustapha Kamar Pasha, American University, Washington D.C.	Lecture Room, No. 4 Building, Main Campus
2004/9/17	「ベトナムの伝統的祭礼の復活に関する一考察 バックニン省トゥアンタイン県の一村落の事例から」	川上崇 (京都大学大学院)	京都大学東南アジア研究所共同棟 C307
2004/9/14	The Power of Language: Cursing Expressions in Ethiopian Languages	Baye Imam, Department of Linguistics, Addis Ababa University)	Common Building, No.307
2004/7/21	Islam and Secularism	Dr. Azam Tamimi , Visiting Professor, Kyoto University	京都大学工学部 4 号館 (AA415)
2004/6/11	Thongmakhsan, Northwestern Thailand, Through Time: Life and Livelihood 1977 - 2003	Dr. Nicola Tannenbaum, Professor of Anthropology in Lehigh University, USA.	Room 307, Common Building of CSEAS
2004/5/21	「天国への道—タイ東南部カトリック教徒の信仰・実践—」	原田真理子 (広島大学大学院)	京都大学東南アジア研究所 東棟 2 F 教室
2004/5/11	Fatherhood and the Construction of the Masculine Self among the Urban Gikuyu of Kenya	Nici Nelson, Anthropology Department, Goldsmiths' College, University of London	Center for African Area Studies, Kyoto University
2004/3/22	「中世ベンガル・フォークロアの宗教性—比較宗教学的考察」	榊 和良 (北海道武蔵女子短期大学)	東南アジア研究センター 東棟 2 F 教室
2004/3/18	「シャン仏教チョーティ派の歴史と現状 —シャン州における仏教実践についての事例研究—」	村上忠良 (宮崎公立大学)	東南アジア研究センター 東棟 2 F 教室
2004/3/13	1) From Formal Sector to Informal Sector? –Globalization and Life Course of Female Workers in Thailand 2) Small Arms: Crime and Violence in Post-war Thailand	1) Tamaki ENDO, Graduate School of Economics 2) Prof. Chalongsorntravanich, Department of History, Faculty of Arts, Chulalongkorn University	Bangkok Liaison Office, CSEAS
2004/3/4	「イスラームの過去と現在」 1) 「政教関係論とトルコのイスラーム政党」 2) 「タフスィール文献に見られるクルアーン啓示理論の展開」	1) 澤江史子 (京都大学 ASAFAS 日本学術振興会特別研究員) 2) 大川玲子 (京都大学 ASAFAS 日本学術振興会特別研究員)	文学部東館 3 階・法学部第 10 演習室
2004/3/3	Towards a Political Theology of Rice	Prof. Christopher A. Gregory, Visiting Professor at ASAFAS & School of Archaeology and Anthropology, Australian National University	E207, East Building of CSEAS
2004/2/18	The Oral Epics of the Women of the Dandakaranya Plateau: A Preliminary Mapping"	Prof. Christopher A. Gregory, Visiting Professor at ASAFAS & School of Archaeology and Anthropology, Australian National University	Room 212, Kyodai-Kaikan
2004/2/16	「国民国家と宗教の制度化」 1) 「越境するイスラーム—マラナオ社会における移動	1) 辰巳頼子 (上智大) 2) 永瀬康之 (名工大)	京都大学東南アジア研究センター 共同棟 3 F

	の諸相からー」 2) 「国家による制度化が少数派宗教にもたらしたものと何か？ーインドネシアにおけるヒンドゥーをめぐる国家と共同体の攻防ー」 3) 「＜タイ仏教の危機＞とは？ー制度と実践のなかの＜僧界＞と＜俗界＞ー」	3) 林 行夫（京大）	共同講義室
2004/2/6, 7	「特別研究会ーミャンマーにおける宗教と社会ー」 1) 「ミャンマーの「国造り」と仏教ー上座仏教「全宗派合同会議」のゆくえー」 2) 「上ビルマー村落における女性の出家行為の意味とその変化」 3) 「慈悲の政治ーアウンサンスーチーの思想と行動」 4) 「ミャンマーにおける回族（バンデー）の交易路と移住」	1) 奥平龍二（元東京外国語大学） 2) 飯國有佳子（総合研究大学院大学） 3) 伊野憲治（北九州大学） 4) 吉松久美子（元大東文化大学）	京都大学東南アジア研究センター 東棟2F セミナー室
2004/1/26	「日系アメリカ人キリスト教女性のアイデンティティ 交渉ー『主人の道具』を流用していかに自らの家を再建できるか？ー」	黒木雅子氏（京都学園大学）	京都大学東南アジア研究センター 東棟2F セミナー室
2004/1/22	Socio-Economic Importance of Jinka Town in Southern Omo Region, Ethiopia: 1957-1991	Dr. Abdussamad Ahmad, Department of History, Adiss Abeba University	京都大学アフリカ地域研究資料センター
2004/1/16	「タイ現代文学にみる〈女性の解放〉及び〈業からの解放〉ーセーニー・サオワボンの作品からー」	平松秀樹（大阪大学大学院）	東南アジア研究センター 東棟2F教室
2004/1/13	Living apart together: changing attitude toward marriage among women in Japan	Dr. Augustina Situmorang, Research Center for Population, Indonesian Institute of Science	E207, East Building of CSEAS
2003/12/13	「観光文化の人類学」 1) 「地域社会からみた観光ー祭りの『商品化』と地元住民の主体性ー」 2) 「ゆるやかな土着ーふるさと観光と地域づくり」 3) 「地域文化資源『開発』と観光ーオセアニアの事例から」	1) 安藤直子（お茶の水大学） 2) 川森博司（甲子園大学） 3) 橋本和也（京都文教大学）	京都大学 人間・環境学研究科 地下講堂
2003/12/10	「13-14 世紀北インドの宗教事情ーニザームッディーンを中心にー」	二宮文子（京都大学大学院文学研究科西南アジア史学）	東南アジア研究センター 東棟407教室
2003/11/21	「現代インドネシアにおける〈歴史の創造〉をめぐってーブトンの過去の語り方」	山口裕子（一橋大学大学院社会学研究科）	東南アジア研究センター 東棟2F教室
2003/9/26	「インドネシア・マカッサル海峡スプルモンデ諸島におけるムスリム女性の日常生活とメッカ巡礼」	浜元聡子（京都大学東南アジア研究センター非常勤研究員）	東南アジア研究センター 東棟2F教室
2003/9/19	Rethinking Chinese Networks and Identities	Chen Tien-shi(National Museum of Ethnology)	Room 307, 3rd Floor, Common Building
2003/7/17	Jose Rizal: Old Questions, New Answers	Prof. Lamberto R. Ocampo, CSEAS Visiting Fellow	Room E207, East Wing, CSEAS
2003/6/12	「インドネシア地方社会のミクロロジー」 1) 「地方分権化の中のスンダ芸能」 2) 「バリにおける村落行政／自治の現状」 3) 「内の財と外の財ーエンデにおける贈与・送金・援助」 4) 「現在を理解するための歴史研究ー中部フローレスの土地、慣習法、首長」	1) 福岡正太（国立民族学博物館博物館） 2) 鏡味治也（金沢大学文学部） 3) 中川 敏（大阪大学大人間科学研究科） 4) 杉島敬志（京都大学 ASAFS）	京都大学東南アジア研究センター 東棟2階
2003/5/16	Writing a Genealogy: Its Implication in Thai Dam Societies in Northwestern Vietnam	KASHINAGA Masao (National Museum of Ethnology)	Room 307, 3rd Floor, Common Building, CSEAS

2003/5/16	Special Seminar -Film Showing- "Current Trends in Indonesia Television and Cinema: Screening of Chasing America."		Room E207, 2nd Floor, East Wing, CSEAS
2003/6/17	Arabs in Nineteenth Century Java: Cultural Diversity, Race and the Colonial State	Dr.Sumit K. Mandal, CSEAS Visiting Fellow	Room C307, Common Building, CSEAS
2003/3/19	"Indianization in Insular Southeast Asia: Letters, Architectures, and Thoughts" 1) Indianization and the Development of Writing Letters in Insular Southeast Asia 2) Symbolism of the Ancient Javanese Hindu Temples: With Special Reference to their Asymmetric Composition 3) In Search for the Origin of the First Principle of Pancasila: Time and Space of Ketuhanan Yang Maha Esa (The Belief in One God Almighty)	1) AOYAMA Toru, Kagoshima Univ. 2) ONO Kunihiko, Waseda Univ. 3) ISHII Kazuko, Tokyo Univ. of Foreign Studies)	Room 207, 2nd Floor, CSEAS
2003/3/18	"Saint Worship, Sufism and Tariqa, and Interdisciplinary Research Meeting on the Sufism-Saint Worship Complex in Turkey and the Eastern Arab Lands" 1) Muslim Saint Worship Reconsidered: Some Pointers to Various Aspects of "Saint" Connections among the Berbers of South-western Morocco 2) Tasawwuf as seen from "Books of Ziyara" -Raising the Issues from the Periphery	1) SAITO Tsuyoshi, Tokyo Metropolitan University 2) OTOSHI Tetsuya, Kyushu University	East Hall, Faculty of Letters, Kyoto University
2003/2/18	「東南アジア大陸部におけるキリスト教」 1) 「東南アジア大陸部の山地民キリスト教徒にみる救 済モチーフと民族主義ータイ国のラフの事例からー」 2) 「民族間関係におけるキリスト教と少数者集団：ビ ルマ・タイ国境地帯のパプティスト派ラフ族の事例」	1) 片岡樹（九州大学大学院）（仮題） 2) 西本陽一（金沢大学）	京都大学東南アジア研 究センター 東棟2階 セミナー室
2003/1/17	Population Dynamics and Changing Ritual Language: A Case in a Chinese Temple in Cebu, the Philippines 「移動性と秘密 の言語ーセブ興旺寺の事例をめぐって」	MIYAHARA Gyo, Osaka Univ. of Foreign Studies	Room 307, Common Building, CSEAS

地域研究論問題群 Theoretical-Methodological Issue			
DATE	TITLE	SPEAKER	VENUE
2007/03/22	研究会「比較の中の東南アジア研究」 1) 「1950 年代の東アジア国際経済秩序とスターリング圏」 2) 「秋田茂著『イギリス帝国とアジア国際秩序』を読む」	1) 秋田 茂 (大阪大学) 2) 濱下武志 (龍谷大学)	京都大学東南アジア研究所 東棟 2F 教室
2007/01/19	「地域研究への方法論的模索 ―韓国研究を中心に―」	木村幹 (神戸大学)	京都大学東南アジア研究所 東棟 2F 教室
2006/12/08	「地域研究アーカイブ」研究会 「公文書解読とフィールド調査との間―タイ農村研究の経験から―」	北原淳 (龍谷大学経済学部教授)	京都大学東南アジア研究所 東棟 2F セミナー室
2006/11/2	"Special Seminar" 1) Researching Big Business in Malaysia: A Social Network Perspective 2) Disaster Preparedness and Natural Disaster Victim Services: Lesson learned from Japan and Indonesia 3) The Importance of Tradition: Trying to discover the other 4) New Indonesian Films: Revival or just another downturn 5) The Fiction of Science in Asian Science Fictions: a Reading of Japanese Science Fiction and Philippine Future Fiction	1) Chan Kim Ling (Universiti Kebangsaan Malaysia) 2) Heru Susetyo (University of Indonesia Esa Unggul) 3) Jyothi Kukathas (The Instant Cafe Theatre Company) 4) Krisnadi Yuliawan Saptadi (GATRA) 5) Alwin Aguirre (University of the Philippines)	
2006/10/20	ジャワ島地震ワークショップ (第 2 回) 「被災地への防災教育活動を通じた地域研究活動」 1) 趣旨説明・現地活動報告 (西ジャワ州津波災害・中部ジャワ地震災害) 2) 現地活動報告 (時間があれば実演も) 3) 「被災社会は防災教育支援をどう迎えたか」	1) 浜元聡子 (東南研) 2) KIDS (京都大学防災教育の会) 3) 山本博之 (京大地域研)	京都大学東南アジア研究所 東棟 2F E207
2006/3/8	Rethinking "locality" in the Thai social movements: a comparative study of the community forest movement and anti-FTA movement	Pinkaew Laungaramsri, Chiang Mai University	CSEAS East Building, 2nd Floor, E207
2006/2/25	Reconstruction Process of Thailand After the Sumatra 1) Earthquake and Tsunami Disaster: Focusing on the Moken 'Sea People' 2) Midterm report of the internship at GEF IW:LEARN -Determination of Pollution Loading from Land-Based Sources by Using Modeling and GIS-	1) Yuki Suzuki, Graduate Program in Area Studies, Graduate Division of Foreign Studies, Sophia University 2) Yukio Tanaka, Graduate School of Agricultural and Life Sciences, University of Tokyo	Bangkok Liaison Office, CSEAS, Kyoto University
2006/2/11	「比較の中の東南アジア研究」第 6 回 「研究と実践：タイで考えたこと」 コメント：河野泰之 (京都大学東南アジア研究所)	佐藤 仁 (東京大学大学院新領域創成科学研究科)	京都大学東南アジア研究所 東棟 2 階会議室 (E207)
2006/1/13	「自然科学者と〈地域研究〉一次世代へのメッセージ」	福井捷朗 (立命館アジア太平洋大学教授)	東南アジア研究所 共同棟 3F 教室
2005/12/17	「比較の中の東南アジア研究」第 5 回 1) 「戦間期、アジアにおける国際共産主義運動とイギリス帝国治安維持システム」 2) 「宮入貝 (オンコメラニア) の物語―日本住血吸虫病対策の歴史的含意」	1) 鬼丸武士 (京都大学東南アジア研究所) 2) 飯島渉 (青山学院大学文学部)	京都大学東南アジア研究所 東棟 2 階会議室 (E207)
2005/12/14	Problematising Asia: reflections on the re-emergence of the	Prof. Wang Hui, Tsinghua University, China	Second-floor meeting

	discourse of Asia		room of the North Building
2005/11/12	「比較の中の東南アジア研究」第4回 1) 「マレーシア・サバ州における民族概念の諸相」 2) 「マレーシアにおける開発政策運営と担い手」	1) 山本博之(国立民族学博物館地域研究企画交流センター) 2) 鳥居高(明治大学)	京都大学東南アジア研究所 東棟2階会議室(E207)
2005/10/22	「比較の中の東南アジア研究」第3回 「貧困問題・貧困分析の諸相：パキスタンでのフィールド観察と定量分析に基づく一報告」	黒崎卓(一橋大学経済研究所) コメント：藤倉達郎(京都大学 ASAFAS)	京都大学東南アジア研究所 東棟2階会議室(E207)
2005/9/26	Culture and Development in Africa: Building on positive cultural practices to promote development	Gebre Yntiso, Ph.D., Department of Sociology and Social Anthropology, Addis Ababa University	CAAS #307, common Building,
2005/7/23	「比較の中の東南アジア研究」第1回 1) 「2005年総選挙とタックシン政権」 2) 「アジアにおける地域主義と東南アジア」	1) 玉田芳史(京都大学) 2) 大庭三枝(東京理科大学)	京都大学本部構内4号館4階第1講義室
2005/7/12	Contribution of the Co-operative Sector in Socio-economic Development of Bangladesh	Md. Hedayetul Islam Chowdhury, Secretary, Rural Development & Cooperative Division, Ministry of Local Government and Rural Development & Cooperative	Room 207, CSEAS East Building
2005/4/19	Integration of diverse societies to achieve harmony in natural resource use: MAP, a symbol of collaboration in southwestern Amazonia	Dr. Elsa R.H. Mendoza (Institute of Environmental Research in Amazonia - IPAM, Belem, Para, Brazil, and Federal University of Acre - UFAC, Rio Branco, Acre, Brazil)	CSEAS East Building, 2nd Floor, E207
2005/3/28	「農村開発における地域性—生活・暮らしの基層—：チッタゴン丘陵の問題とアッサムへのベンガル・モスリム移民」 1) 「チッタゴン丘陵の政治と平和の現状」 2) 「アッサムへのモスリムベンガル移民」	1) 下澤嶽(NPO・ジュマネット代表) 2) 佐藤宏(東京外国語大学非常勤講師)	京都大学東南アジア研究所 東棟2階セミナー室
2005/3/15	「東南アジアにおける[山地 vs. 平野]の構造的な理解をめざして」	ディスカッサント：田中耕司、河野泰之、速水洋子、石川登(京都大学東南アジア研究所)、祖田亮次(北海道大学文学部)、横山智(熊本大学文学部)、高倉浩樹(東北大学東北アジア研究センター)、市川昌広(総合地球環境学研究所)	東南アジア研究所東棟2階セミナー室
2005/2/8	The Economics of Biodiversity Conservation: A Study of a Coffee Growing Region in the Western Ghats of India	Dr. K.N.Ninan (Associate Professor, Ecological Economics Unit, Institute for Social and Economic Change, Bangalore, India)	Room C409, 4rd floor of CSEAS Common building
2004/12/6	Rural and Agricultural development in Northern Zambia: Problems and Prospects	Dr. Chileshe L. Mulenga (ASAFAS, Kyoto University, University of Zambia)	CAAS, Seminar Room (#307)
2004/10/8	Environmental Ethics: The Islamic Perspective	Dr. Azizan (Professor, Malaya University)	Main Campus Bldg. No.4, (AA415)
2004/10/5	「歴史情報の空間化に関する問題点：18-20世紀の南インドを事例として」	水島司(東京大学大学院人文社会系研究科)	東南アジア研究所 東棟(E207)
2004/8/13	「地域研究におけるアクター・ネットワーク論的展開」	足立明(京都大学 ASAFAS) コメンテーター：田中耕司、平松幸三、安藤和雄	東南アジア研究所 共同棟4F セミナー室
2004/8/9	The Middle Way Trends in the Islamic World	Prof. Azyumardi Azra (Rector of National Islamic University)	CEAS 3rd floor, Lecture Room 307
2004/2/20	Alternative Theories of Southeast Asian Development	Prof. Yasukichi Yasuba Faculty of Economics Osaka Gakuin University	E207, East Building of CSEAS
2004/2/16	Appropriation of Cultural Symbols and Peasant Resistance-A Case Study from East Kalimantan, Indonesia	Dr. Mariko Urano, Faculty of Economics Hokusei Gakuin University	E207, East Building of CSEAS

2004/2/6	Community and Culture: The Cost of Ascribed Membership	Prof. Chua Beng Huat, Department of Sociology, Asia Research Institute, National University of Singapore	Room 307 (the 3th floor, Common building of CSEAS)
2004/1/27	"Organization of the CSEAS Special Collections"	Prof. Salvacion Manuel-Arlante, Visiting Research Fellow (CSEAS)	E207, East Building of CSEAS
2003/11/20	「生態・環境と地域研究」 1) 「荒廃した森林の修復は地球を救うか？ー地域住民のくらしと森林ー」 2) 「環境地域研究の試みー嘉手納基地の騒音問題を通して」	1) 小林繁男 (アジア・アフリカ地域研究研究科) 2) 平松幸三 (アジア・アフリカ地域研究研究科)	東南アジア研究センター 東館 2 階第一教室
2003/10/7	「東南アジアにおけるセーフティ・ネットの比較研究ー「古い」の問題を中心として」ーインドネシア調査にかんするワークショップ	松林公蔵 (東南アジア研究センター) Dr.Ekawati Wahyuni (ボゴール農業大学女性研究センター所長) 水野広祐 (東南アジア研究センター)	京都大学東南アジア研究センター 東棟 207
2003/3/23	「生態学の理論の人類学への適用と誤用」	百瀬邦泰	ASAFAS Hakubi-kan Seminar room.
2003/3/21	シンポジウム「地域をむすぶバナナ」 1) 「生きるためのバナナー村おこしを支える国際産直」 2) 「バナナから紙ーバナナ・グリーンゴールド・プロジェクトー」 3) 「沙漠とバナナが人類を救う！」 4) 「奄美のバナナ栽培」	1) 堀田正彦 (オルター・トレード・ジャパン) 2) 森島紘史 (名古屋市立大学) 3) 西上泰子 (立命館大学) 4) 福島成尚 (バナナ生産者)	芝蘭会館
2003/3/6	Seminar Report: "Memory of Development" 1) Problems with the Memory of Development 2) How Were Development and Revolution Recounted? -An Indonesian Example 3) Development Has No Memory	1) ADACHI Akira (ASAFAS) 2) KATO Tsuyoshi (ASAFAS) 3) UCHIYAMADA Yasushi (Tsukuba University)	Room 207, East Wing CSEAS
2003/2/7	「理的地域研究の必要性と可能性ー生態論理・農村開発・環境問題へのアプローチー」	古川久雄 (京都大学 ASAFAS) 海田能宏教授 (東南アジア研究センター)	東南アジア研究センター 東棟 2 階教室

添付資料 3. 学位取得者とその進路

アジア・アフリカ地域研究研究科学学位授与者一覧（平成19年4月末現在）

氏 名	入学年度	タイトル		就職先
平成15年3月24日授与				
つつい いさお 筒井 功	10	ベトナムにおける海藻類の生態・生産・利用ー沿岸域の生態的地域研究試論ー Ecology, Production and Utilization of Seaweed in Vietnam: Trial to the Area Studies of Coastal Zone	生態環境論	国際農林水産業研究センター(JIRCAS) 特別派遣研究員 (2007年3月までタイ在)
おう ばいはい 王 培英	12 編	中国太湖周辺における生態農業システムの解体過程と再構築の可能性 Disintegration Process in Ecological Agricultural System in Tai Lake Area and Possibility of Reconstruction	生態環境論	大阪外国語大学 (非常勤講師)
平成16年3月23日授与				
くろだ ようすけ 黒田 洋輔	13 編	Conservation Biological Studies on Asian Wild Rice (<i>Oryza rufipogon</i> and <i>O. nivara</i>) in the Vientiane Plain of Laos. ラオス中部ヴィエンチャン平野におけるアジア野生イネ (<i>Oryza rufipogon</i> および <i>O. nivara</i>) の保全生物学的研究	生態環境論	農業生物資源研究所 (特別研究員)
しまむら てつや 嶋村 鉄也	11	Plant species coexistence controlled by organic matter dynamics in the tropical peat swamp forest in Riau, East Sumatra, Indonesia インドネシア、東部スマトラ、リアウ州の泥炭湿地林における有機物動態が制御する植物種共存機構	生態環境論	京都大学 ASAFAS (特任助教)
すえちか こうた 末近 浩太	11	現代シリアにおけるイスラームと政治ーイスラーム改革思想とムスリム同胞団をめぐる考察ー Islam and Politics in Contemporary Syria : From Islamic Reformism to Muslim Brotherhood	連環地域論	日本学術振興会 (特別研究員)
なかじま たけし 中島 岳志	11	現代インドにおけるヒンドゥー・ナショナリズム運動 Hindu Nationalist Movement in Contemporary India	連環地域論	北海道大学 公共政策大学院 (准教授)
コンドカル・モアゼム KHONDAKER GOLAM MOAZZEM	11	Transformation of Economic Relations of the Poor and the Rich in Rural Bangladesh : Focusing on Credit Market in a Potato-Growing Village バングラデシュ農村における階層間経済関係の変容：馬鈴薯生産ー農村の金融市場に焦点を当てて	東南アジア 地域論	Bangladesh Institute of Bank Management, Dhaka (Lecturer)
ステフェン・ニンディ STEPHEN JUSTICE NINDI	13 編	Dynamics of land use systems and environmental management in the Matengo highlands, Tanzania タンザニア、マテンゴ高地における土地利用システムと環境管理の動態	地域生態論	Centre for Sustainable Rural Development, Sokoine University of Agriculture (Lecturer)
マモ・ヘボ・ワベ MAMO HEBO WABE	11	Land, Local Custom and State 'Laws': A Study of Land Tenure Systems and Land Disputes Settlements among Arsii Oromo, Southern Ethiopia 土地・人々の慣習・国家の「法」：南部エチオピア、アルシ・オロモにおける土地所有システムと土地争議の解決に関する研究	民族共生論	Department of Sociology, Addis Ababa University, (Associate Professor)
いちの しんいちろう 市野 進一郎	10	マダガスカル、ベレンティ保護区におけるワオキツネザルの社会生態学的研究 Socio-ecological Study of Ring-tailed Lemurs (<i>Lemur catta</i>) at Berenty Reserve, Madagascar	地域動態論	日本学術振興会 (特別研究員)

ぶんどう だいすけ 分藤 大翼	8	カメルーン南東部、バカ・ピグミーの精霊儀礼と音楽実践における社会的相互行為 Social Interaction in Spirit Ritual and Musical Practices among the Baka Pygmies in Southeastern Cameroon	地域動態論	京都大学 ASAFAS (研修員)
--------------------	---	--	-------	----------------------

平成 16 年 5 月 24 日授与（平成 15 年度提出）

リム・ブン・ホック LIM BOON HOCK	10	Rural-urban Industrial Shift: A Study on the Current State of Salt Production in Bangladesh 農村から都市への産業移動ーバングラデシュにおける製塩業の現状分析ー	東南アジア 地域論	
-------------------------------	----	--	--------------	--

平成 17 年 1 月 24 日授与

すずき れいじ 鈴木 玲治	13 編	Ecological Studies on the Sustainability of Taungya Teak Reforestation in the Bago Mountains, Myanmar ミャンマー・バゴー山地におけるタウンヤ式チーク造林の持続性に関する生態学的研究	生態環境論	京都大学 ASAFAS (助教)
------------------	------	--	-------	---------------------

平成 17 年 3 月 23 日授与

やまぐち きよこ 山口 潔子	12	Philippine Urban Architectural History: Transformation of the Poblacion Architecture from the Late Spanish Period to the American Period フィリピン都市建築史：スペイン期末葉からアメリカ期におけるポブラシオン建築の変容と展開	地域進化論	香港中文大 (講師)
よこた たかゆき 横田 貴之	12	現代エジプトにおける大衆のイスラーム運動ームスリム同胞団の思想と実践ー An Islamic Mass Movement in Contemporary Egypt: The Thought and Practice of the Muslim Brotherhood	連環地域論	日本国際問題研究所 (研究員)
おにまる たけし 鬼丸 武士	12 編	上海コミンテルン・ネットワークと政治警察ーヌーラン事件(1931)を中心としてー Policing the Comintern Network: Special Branch and the Noulens Case, 1931	東南アジア 地域論	政策研究大学院大学 (助教)
アンディ アムリ ANDIAMRI	12	Silvo-Fishery Systems and Sustainable Management of Coastal Resources in South Sulawesi, Indonesia インドネシア、南スラウェシ州における林業・漁業複合システムと沿岸部資源の持続的管理	東南アジア 地域論	ハサスディン大学 (水産学部講師)
ごとう けんた 後藤 健太	12	ベトナムのアパレル産業の構造分析：企業間関係からみた生産・流通組織 Structural Analysis of the Vietnamese Apparel Industry: the Organization of Production and Distribution from an Interfirm Relationship Perspective	東南アジア 地域論	国際労働機構 アジア・太平洋総局 (開発経済専門官)
おか みちたろう 岡 通太郎	13 編	経済成長下のインドにおける「白い革命」と農村貧困層ー酪農生産の制約要因としての農村要素市場構造を中心にー Study on the Rural Poor in India under the “White Revolution” and Economic Growth: With Special Reference to the Rural Factor Markets as Constraints	東南アジア 地域論	日本学術振興会 (特別研究員)
ダニエル バヘタ DANIEL BAHETA	12	The Dynamics of Formal Education during Wartime and Its Impact on the Rural People of Eritrea 戦時下エリトリアにおける公的教育の動態と地域の人々への影響	民族共生論	Canadian International Development Agency (CIDA) (Development Project Advisor)

ソン ショウガン 孫 暁 剛	13 編	Continuity and Dynamics of Pastoral Subsistence among the Rendille in Northern Kenya: With Special Reference to Livestock Management and Response to Socio-Economic Changes 北ケニアのレンディール社会における生業としての遊牧の持続と動態—家畜管理と社会的・経済的变化への対応—	地域動態論	日本学術振興会 (外国人特別研究員)
にしぎき のぶこ 西崎 伸子	11	エチオピアの野生動物保護におけるコミュニティ・コンサベーションの形成 Formation of Community Conservation for Wildlife Management in Ethiopia	民族共生論	福島大学 (准教授)

平成 17 年 5 月 23 日

ギェム フォン トウイエン NGHIEM, PHUONG TUYEN	14 編	Town-Village Interactions and the Roles of District Towns in the Development Process in Vietnam's Northern Mountain Region ベトナム北部山地の発展過程における都市・農村関係と郡都の役割	東南アジア 地域論	Center for Natural Resources and Environmental Studies, Vietnam National University (Researcher)
かねこ もりえ 金子 守恵	10	文脈化される土器づくりの過程 : エチオピア西南部オモ系農耕民アリの女性職人による地縁技術の習得・実践・創造 Contextualizing the Process of Pottery Making : Learning, Praxis, and Creativity of Community-based Technology by Woman Craft Workers among the Ari, Southwestern Ethiopia	民族共生論	日本学術振興会 (特別研究員)

平成 17 年 7 月 25 日

ながつ かずふみ 長津 一史		マレーシア・サバ州における海サマ人の国家経験とイスラーム化 The Sama Dilaut and the Nation-State: Historical Dynamics of Islamization in Sabah, Malaysia	論文博士(平成 10 年 3 月大学院人間・環境学研究科博士課程 研究指導認定退学)	東洋大学 (助教授)
デイビッド ムハント DAVID GONGWE MHANDO	14 編	Farmers' Coping Strategies with the Changes of Coffee Marketing System after Economic Liberalization: The Case of Mbinga District, Tanzania 経済自由化後のコーヒー流通制度の変容と農民の対応—タンザニア、ムビンガ県の事例—	生態経済論	SUA Centre for Sustainable Rural Development (Researcher)

平成 17 年 9 月 26 日

すずき しんじ 鈴木 伸二	12	マングローブ湿地の政治経済学 : 移行期ベトナムの移住、制度変化、資源利用 Political Economy of Mangrove Wetlands in Vietnam: Migration, Institutional Changes, Natural Resource Uses in A Period of Transition	生態環境論 (修業年限短縮)	龍谷大学 (講師)
------------------	----	---	-------------------	--------------

平成 18 年 3 月 23 日

やまぐち たかよし 山口 哲由	11	中国雲南省の山地環境におけるチベット人の農牧複合と移動牧畜に関する研究 Agro-pastoral Linkage and Mobile Pastoralism of Tibetan People in the Alpine Area of Yunnan Province, China	生態環境論	京都大学 ASAFAS (研修員)
こさか やすゆき 小坂 康之	12	Plant Diversity in Paddy Field Landscape in Savannakhet Province, Laos. ラオス・サワンナケート県の水田地帯における植物多様性	生態環境論	京都大学 CSEAS (非常勤研究員)

あいざわ のぶひろ 相沢 伸広	13	スハルト体制とチナ問題 Defining Masalah Cina in Suharto's Indonesia	地域進化論	政策研究大学院大学 (助教)
もりした あきこ 森下 明子	13	スハルト体制崩壊後のインドネシア地方政治：西・中部・東カリ マンタンの利権を握るのはどういった人たちか Local Politics in Post-Soeharto Indonesia: Who controls local resources in West, Central, and East Kalimantan?	東南アジア 地域論	京都大学 CSEAS (研修員)
スラボン インタボンク SOULAPHONE INTHAVONG	15 編	Development of Rice-Based Farming Systems in Savannakhet Province, Laos ラオス・サワンナケート県における稲作基幹農業体系の発展に関する 研究	東南アジア 地域論	ラオス政府農林省
ネイサン バデノック NATHAN AUGUSTUS BADENOCH	15 編	Social Networks in Natural Resource Governance in a Multi-ethnic Watershed of Northern Thailand タイ北部の多民族混住流域における自然資源ガバナンスと社会ネット ワーク	東南アジア 地域論	Unit for Social and Environmmetal Research, (Post-Doctoral Researcher)
ワフュ プラセティヤワン WAHYU PRASETYAWAN	13	Politics of Regional Autonomy and Business: Political Economy in Decentralizing Indonesia, 1998-2004 地方自治の政治とビジネス：インドネシア地方分権化の政治経済 分析 1998-2004 年	東南アジア 地域論	NGO: LSI インドネシア調査機関 (Senior Researcher)
ダストン ガブリエル ムスヤ DASTUN GABRIEL MSUYA	12 編	Farming Systems and Indigenous Technologies of Finger Millet (Elusine coracana) Production in Southwestern Tanzania タンザニア西南部におけるシコク ビエ生産の在来技術とファーミ ングシステムに関する研究	地域生態論	Faculty of Agriculture, Sokoine University of Agriculture, (Senior Lecturer)
おかもと いくこ 岡本 郁子		A Study on Economic Disparity in Rural Myanmar: Focusing on Pulse Production after Market Liberalization ミャンマー農村における経済格差の研究ー市場経済化後のマメ類 生産に焦点を当ててー	論文博士(平成 4 年 6 月スタンフォ ード大学大学院 修士課程修了)	日本貿易振興機構アジア 経済研究所・地域研究セン ター(研究員)
こなか しんや 湖中 真哉		牧畜社会における生業経済と市場経済の併存的複合化に関する研 究ーケニア中北部のサンプル社会を事例として A Study on the Juxtaposition of Subsistence and Market Economies in a Pastoral Society: The Case of the Samburu in Northcentral Kenya	論文博士(平成 6 年 9 月筑波大学 大学院歴史・人類 学研究科博士課 程単位取得退学)	静岡県立大学 国際関係学部(准教授)

平成 18 年 7 月 24 日

にし まこと 西 真如	15 編	対抗的な公共性を創出する住民組織の活動ーエチオピアのグラゲ 道路建設協会と葬儀講の事例からー Creating Counterpublics through the Activity of Community Based Organizations: The Cases of Gurage Road Construction Organization and Burial Associations in Ethiopia	民族共生論	京都大学 ASAFAS (特任助教)
かせざわ まさと 加瀬澤 雅人	11	現代インドの民族医療ーグローバル状況におけるアーユルヴェー ダの変容ー Ethnomedicine in Contemporary India: Transformation of Ayurveda under Globalization	連環地域論	国立民族学博物館 (外来研究員)

平成 19 年 3 月 23 日授与(予定)

ほそだ なおみ 細田 尚美	11	フィリピン・サマール島からの向都移動とその社会文化的側面に関する 考察 Socio-cultural Aspects of Migration from Samar Island, Phillipines.	地域進化論	地域研究統合情報 センター (非常勤研究員)
------------------	----	--	-------	------------------------------

あらい かずひろ 新井 一寛	13	エジプトにおけるタリーカの組織的革新性と宗教実践—ジャーズ ーリーヤ・シャーズィリーヤ教団の現代的展開— Organizational Innovation and Religious practice of Sufi Orders In Contemporary Egypt: With special Reference to Jazuliya Shadhiliya	連環地域論	大阪市立大学大学院 文学研究科都市文化 研究センター(研究員)
こばやし さとる 小林 知	10 転	ポル・ポト時代以後のカンボジアにおける地域社会の復興—トン レサーブ湖東岸地域の事例 Revitalizing Rural Community: Village Lives in the Eastern Tonle Sap Region of post-Pol Pot Cambodia	東南アジア 地域論	京都大学 CSEAS (助教)
なかにし よしひろ 中西 嘉宏	13	ネー・ウィン体制期ビルマにおける政軍関係 (1962-1988) Civil-Military Relations in Ne Win's Burma, 1962-1988	地域進化論	京都大学 CSEAS (非常勤研究員)
サバントーン タテワ SAPHANGTHO NG THATHEVA	13 編	Dynamics and Sustainability of Land Use Systems in Northern Laos ラオス北部における土地利用システムの動態と持続可能性	東南アジア 地域論	ラオス農林省
オトマズギン ニシム OTOMAZGIN MISSIM	14	Regionalizing Culture: The Political Economy of Japanese Culture in East and Southeast Asia, 1988-2005 地域化するポップ・カルチャー: 日本文化産業の東・東南アジア地域展開1988-2005	東南アジア 地域論	京都大学 CSEAS (研究員)
ウォンプリデー アチャコーン WONGPREEDEE ACHAKORN	14	Decentralization in Thailand, 1992-2006: Its Effects on Local Politics and Administration タイにおける地方分権 (1992 年～2006 年) —地方政治および地 方行政への影響	地域進化論	タイ王国内務省
シャロムポン シャムシャン CHALERMPOL CHAMCHAN	14 編	Thailand's Universal Coverage Implementation: Performances and Impacts on Public Health Service Symstem タイ社会保障における皆保険制度の実施—健康保険制度の実績と その影響—	東南アジア 地域論	
ムトゥア チャースル ムシヨキ MUTUA CHARLES MUSYOKI	16 編	Human-Wildlife Conflict in Kenya: Corp Raiding by Elephants and Other Wildlife in Mahiga 'B' Village of Nyeri District ケニアにおける野生動物保護と住民生活の軋轢—ニエリ県マヒガ B 村における象などの野生動物による農作物被害	地域動態論	Kenya Wildlife Service (Researcher)
すなの ゆきとし 砂野 幸稔		ポストコロニアル国家と言語—フランス語公用語国セネガルの言 語と社会 Postcolonial State and Language: Language and Society in Senegal, a Francophone State	論文博士(京都大学 文学研究科指導認定 退学)	熊本県立大学文学部 (教授)

添付資料 4. 教員・若手研究者・大学院生の業績

教員・COE 研究員

事業推進担当者（含：異動・退職者）

加藤 剛 (KATO, Tsuyoshi) / 2002-2004年度 拠点リーダー

【著書・論文】

- 加藤剛. 2004. 「現代インドネシアの文化政策と地域アイデンティティーアウ州のムラユ化の政治過程」 加藤剛編『変容する東南アジア社会—民族・宗教・文化の動態』 めこん, 371-455.
- 加藤剛編. 2004. 『変容する東南アジア社会—民族・宗教・文化の動態』 めこん.
- Kato, T. 2003. Images of Colonial Cities in Early Indonesian Literature. In James Siegel and Audrey Kahin, eds., *Southeast Asia Over Three Generations: Essays Presented to Benedict R. O'G. Anderson*, Southeast Asia Program, Cornell University, 91-123.
- 加藤剛. 2003. 「開発と革命の語られ方—インドネシアの事例より」 『民族学研究』 67(4): 424-449.
- 加藤剛. 2002. 「植民地期インドネシアにみる公衆衛生教科書の世界—抄訳『ブンジャガ・ディリ』」 足立明編『開発言説と公衆衛生—スリランカ、インド、インドネシアの事例研究』（科学研究費補助金研究成果報告書） pp.50-92.
- 加藤剛. 2002. 「ミナンカバウ・フロンティアの史的展開—ランタウ概念の変容をめぐって」 田中耕司編『フロンティア社会の地域間比較研究』（科学研究費補助金研究成果報告書） 241-262.
- 加藤剛編. 2002. 『東南アジア社会変容過程のダイナミクス：民族間関係・移動・文化再編』（平成11～13年度科学研究費補助金基盤研究(A)(2) 研究成果報告書 課題番号11691077）.
- 加藤剛. 2002. 「インドネシア政治のなかの〈地方〉と〈文化〉」 加藤剛編『東南アジア社会変容過程のダイナミクス—民族間関係・移動・文化再編』（科学研究費補助金研究成果報告書） pp.185-199.

市川光雄 (ICHIKAWA, Mitsuo) / 2005-2006 年度 拠点リーダー・2002-2004 年度 事務局長

【著書・論文】

- 市川光雄. (印刷中) 「植生からみる生態史:コンゴ、イトウリの森」『アフリカの力』 京都大学出版会.
- 市川光雄. (印刷中) 「ムブティ・ピグミー：森の民の生活とその変化」 福井勝義, 竹沢尚一郎編『ファースト・ピープルズ—世界先住民族の現在第5巻 サハラ以南アフリカ』 明石書店.
- Ichikawa, Mitsuo. (in press) Animal Food Avoidance among Central African Hunter-gatherers. In Dounias, D. and E. Motte, eds., *Animal Symbolism*, Paris: L'IRD (former ORSTOM).
- Ichikawa, Mitsuo. (in press) The History and Current Situation of Anthropological Studies on Africa in Japan. *The African Anthropologist* (Journal of the Pan African Anthropological Association) 12(2).
- Ichikawa, Mitsuo. (in press) Problems in the Study of Man-Nature Relationships in the Central African Forests: An Anthropological Perspective. *Tropical Forests: Mediating Ecological Knowledge and Local Communities*.
- Ichikawa, M. 2006. Problems in the Conservation of Rainforests in Cameroon. *African Study Monographs, Supplementary Issue* 33: 3-20.
- 市川光雄. 2005. 「カメルーンにおける学術調査事情—東部熱帯雨林地域に関する学術調査・保護活動を中心に」『フィールドワークの手法に関する調査研究』（科学研究費補助金成果報告書：海外学術調査）, 297-338.
- 市川光雄. 2005. 「アフリカ熱帯雨林の歴史生態学に向けて」『紅萌』 8: 9-12.
- 市川光雄. 2005. 「書評：池谷和信編 熱帯アジアの森の民：資源利用の環境人類学」『学燈』 102(4): 40-43.
- Ichikawa, M. 2005. Food Sharing and Ownership among the Central African Hunter-gatherers: An Evolutionary Perspective. In Widlok, T. and W. Tadasse eds., *Property and Equality*, Oxford: Berghahn, 151-164.
- Ichikawa, Mitsuo. 2004. Benefit of Foresight: From evolutionary studies to global environmental problems. Before Farming, article 7(on-line journal).
- 市川光雄. 2004. 「エルマン・サーヴィス『狩猟民』（蒲生正男訳）鹿島出版会」『文化人類学文献事典』 弘文堂, pp.88.
- 市川光雄. 2004. 「市川光雄『森の狩猟民』（人文書院）」『文化人類学文献事典』 弘文堂, pp.321.
- Ichikawa, M. 2004. The Japanese Tradition of Central African Hunter-gatherer Studies: with Comparative Observation on the French and American Traditions. In Alan Barnard ed., *Hunter-Gatherers in History, Archaeology and Anthropology*, Oxford: Berg Publishers, 103-114.
- 市川光雄. 2004. 「生活環境としてのアフリカ熱帯雨林に関する人類学的研究」『平成 12 年度 15 年度科学研究費補助金研究成果報告書』 1-165.
- 市川光雄. 2004. 「熱帯雨林のポリフォニー」『まほら』 39: 38-39.
- 市川光雄. 2003. 「環境問題に対する三つの生態学」池谷和信編『地球環境問題の人類学』 世界思想社, 44-64.
- Ichikawa, M. and D. Kimura, eds. 2003. Recent Advances in Central African Hunter-gatherer Studies, *African Study Monographs, Supplementary Issue* 28: 1-6.

- Terashima, H. and M. Ichikawa. 2003. Comparative Ethnobotany of the Mbuti and Efe Hunter-gatherers in the Ituri Forest of DRC, *African Study Monographs* 21(1/2): 1-168.
- 市川光雄. 2002. 「『地域』環境問題としての熱帯雨林破壊」『アジア・アフリカ地域研究』2: 292-305.
- Ichikawa, Mitsuo. 2002. Comment on 'The vines of complexity: Egalitarian structures and the institutionalization of inequality among the Enga,' by Polly Wiessner. *Current Anthropology* 43(2): 258-259.
- 市川光雄. 2002. 「座談会：地球環境問題をどうとらえるかー人類学の可能性（池谷和信，石弘之，市川光雄，小林茂）」『民博通信』98: 4-11.

【口頭発表】

- Ichikawa, Mitsuo. 2005. The History and Current Situation of Anthropological Studies on Africa in Japan. *Conference of the Pan African Anthropological Association*. (Yaounde, 8-12 August).
- Ichikawa, Mitsuo. 2003. Animal Food Avoidance among Central African Hunter-gatherers. *The International Colloquium on Animal Symbolism*, (LACITO, Paris, 12-14 November).
- Ichikawa, Mitsuo. 2002. Introductory remarks. *The IXth International Conference on Hunting and Gathering Societies(CHAGS9)* (Edinburgh, 9-12 September).

杉島敬志（SUGISHIMA, Takashi）／2005-2006 年度 事務局長

【著書・論文】

- 杉島敬志. (印刷中) 「中部フローレスにおける資源への関係行為」松井健編『論集 資源人類学ー自然の認知と加工』（仮題）弘文堂.
- Sugishima, Takashi. 2006. Where Have the "Entrepreneurs" Gone? A Historical Comment on Adat in Central Flores. *Asian and African Area Studies* 6(1): 120-150.
- 杉島敬志, 中村潔編. 2006. 『現代インドネシアの地方社会ーミクロロジーのアプローチ』NTT 出版.
- 杉島敬志. 2006. 「ミクロロジーのアプローチ」杉島敬志, 中村潔編『現代インドネシアの地方社会ーミクロロジーのアプローチ』NTT 出版, pp.3-19.
- 杉島敬志. 2006. 「中部フローレスにおけるアダットの現在」杉島敬志, 中村潔編『現代インドネシアの地方社会ーミクロロジーのアプローチ』NTT 出版, pp.235-264.
- Sugishima, Takashi, Mitsuo Ichikawa and Tsuyoshi Kato. 2006. Aiming for Center Of Excellence of Integrated Area Studies: Establishing Field Stations in Asia and Africa to Combine Research Activities and On-Site-Education. *Asian Research Trend* 1: 45-68.
- 杉島敬志. 2006. 「土地をめぐる複ゲーム状況ーインドネシア・中部フローレスにおける土地への関係行為」『研究彙報（資源人類学）』13: 3-12.
- 杉島敬志. 2004. 「作物所有権の拡散浸透」『資源の分配と共有に関する人類学的統合領域の構築ー象徴系と生態系の連関をととして（中間成果論集）』（特定領域『資源人類学』総括班）東京外語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, pp.184-188.
- 杉島敬志編. 2004. 『スハルト政権崩壊後のインドネシア地方社会に関する文化人類学的研究 平成 13～15 年度科学研究費補助金基盤研究(A)(1) 研究成果報告書 課題番号 13371009』.
- 杉島敬志. 2004. 「現在を理解するための歴史研究ー東インドネシア、中部フローレスの事例研究」『文化人類学』69(3): 386-411.
- 杉島敬志. 2004. 「杉島敬志『土地所有の政治史』1999」(p.105), 「杉島敬志『人類学的実践の再構築』2001」(p.106), 「スミス『セム族の宗教』1894」(p.119), 「ダグラス『象徴としての身体』1970」(p.127), 「トーマス Out of Time, 1989」(p.158), 「ファン・ヴァウデン Sociale Structuurtypen in de Groote Oost, 1935」(p.177), 「ウォータソン『生きている住まい』1990」(p.341), 「スヒルテ・ノルトホルト The Spell of Power, 1996」(p.474), 「スヒルテ・ノルトホルト The Political System of the Atoni of Timor, 1971」(p.474), 「トーマス、ニコラス Entangled Objects, 1991」(p.526-527), 「ファン・パール Dema, 1966」(p.574), 「フォックス&セイザー編 Origins, Ancestry and Alliance, 1996」(p.581), 「馬淵東一『馬淵東一著作集』1974-1988」(p.627-628), 「本質主義と構築主義」(p.843)小松和彦, 田中雅一, 谷泰, 原毅彦, 渡辺公三編『文化人類学文献事典』弘文堂.
- 杉島敬志. 2003. 「口承史のポリフォニーー東インドネシア、中部フローレスの事例研究」『文化人類学研究』4: 19-37.
- 杉島敬志. 2002. 「リオ語の『ドゥア』は『所有者』か？ー「因果的支配」の概念について」『アジア・アフリカ地域研究』2: 251-280.

【口頭発表】

- Sugishima, Takashi. 2006. The 'Practice View' of Ritual Rules. *The International Conference "The Ritual Articulation of Cultural Identity and Socio-political Order in Indonesia"*. Institut fuer Ethnologie, Westfaelische Wilhelms-Universitaet Muenster. (Das Hotel am Aasee, Muenster, Germany, 29 June- 1 July 2006)
- 杉島敬志. 2005. 「資源の過去負荷性ーインドネシア・中部フローレスにおける土地への関係行為」特定領域研究 資源の分配と共有に関する人類学的統合領域の構築総括班主催理論研究会（ホテルセンチュリー静岡 6 階, 2005 年 7 月 30 日）

-
- 杉島敬志. 2005. 「土地に堆積する過去インドネシア・中部フローレスの事例から」 日本文化人類学会第 39 回研究大会 (北海道大学, 2005 年 5 月 21 日)
 - 杉島敬志. 2005. 「百年の錯綜ーインドネシア・中部フローレスにおける土地への関係行為の史的重層性」 文部科学省科学研究費補助金 特定領域研究 資源の分配と共有に関する人類学的統合領域の構築「認知と加工班」第 6 回研究会 (広島大学東千田キャンパス 304 号室, 2005 年 2 月 19 日)
 - 杉島敬志. 2005. 「土地所有の近代」「インドネシアにおける「近代」の咀嚼」 (研究代表者: 鏡味治也) 2004 年度第 2 回研究会 (国立民族学博物館第 3 演習室, 2005 年 1 月 8 日)
 - 杉島敬志. 2004. 「インドネシア・中部フローレスにおける土地をめぐる二つの変化」 立命館大学大学院先端総合学術研究科「生活世界とりわけ土地との関係をめぐる伝統的法体系と外来法体系の葛藤ー共生の可能性と限界」2004 年度第 2 回研究会 (立命館大学衣笠キャンパス創思館 4F 共同研究会室 40, 2004 年 6 月 19 日)
 - Sugishima, Takashi. 2004. Historical Study for Understanding the Present: A Case Study in Central Flores, Eastern Indonesia. *The Meetings of Members and Directors, Human Relations Area Files*. (New Haven, Yale University, 29 Apr. 2004)
 - Sugishima, Takashi. 2004. 'Where Have the "Entrepreneurs" Gone?: A Historical Comment on Adat in Central Flores'. *21st Century COE Program International Workshop in Jakarta, The Micrology of Indonesian Local Societies, Auditorium Widya Graha*. (Indonesian Institute of Sciences, Jakarta, 23 Mar. 2004)
 - 杉島敬志. 2004. 「地域研究はディシプリンか? : 『地域学』と『場』の間」 地域研究コンソーシアム設立準備ワークショップ「地域研究を?する」 (学生会館, 2004 年 1 月 9 日)
 - 杉島敬志. 2003. 「中部フローレスにおける土地の多層的歴史」 国立民族学博物館地域研究企画交流センター連携研究「地域連関の構図」による研究会「インドネシア地方社会のミクロロジー」 (京都大学東南アジア研究センター東棟 2 階第 1 教室, 2003 年 6 月 21 日)
 - 杉島敬志. 2003. 「口承史のポリフォニー」 早稲田大学文化人類学第 4 回総会シンポジウム「〈声〉の複数性ーフィールドにおける〈ポリフォニー〉をどう扱うか」 (早稲田大学国際会議場第一会議室, 2003 年 1 月 11 日) .
 - 杉島敬志. 2002. 「現在を理解するための歴史研究ー領土拡張の語り」 2002 年度第 1 回日本民族学会・民族学研究懇談会 (近畿地区) (大阪大学大学院人間科学研究科東館 2F ユメンスホール, 2002 年 11 月 30 日)
 - 杉島敬志. 2002. 「東インドネシア中部フローレスにおける『主』と所有者」 文部科学省科学研究費補助金 特定領域研究 資源の分配と共有に関する人類学的統合領域の構築「認知と加工班」第 1 回研究会 (東京大学東洋文化研究所, 2002 年 11 月 16 日)
-

(以下アルファベット順)

阿部茂行 (ABE, Shigeyuki) 2002-2003

【著書・論文】

- ABE, Shigeyuki. 2003. "Is 'China Fear' Warranted? Perspectives from Japan's trade and investment relationships with China," *Asian Economic Papers* 2(2).
 - 阿部茂行, シャンドラ・M・タンガベル. 2002. 「シンガポール経済はまぼろしか?ー生産性分析の新しい試み」 『アジア・アフリカ地域研究』 2: 105-119.
 - ABE, Shigeyuki, Sumner La Croix, and Andrew Mason.. 2002. "Population and Globalization," *Journal of Southeast Asian Studies* 40(3): 235-239.
-

足立 明 (ADACHI, Akira)

【著書・論文】

- 足立明編. 2006. 『地域研究におけるアクター・ネットワーク論的な展開』 (平成 16 年度～17 年度科学研究補助金 基盤研究(C)研究成果報告書 課題番号: 16510186)
 - 足立明編著. 2005. 『参加型開発におけるプロセス・ドキュメンテーションの研究ースリランカとインドネシアの事例を通して』 (平成 14～16 年度科学研究費補助金研究成果報告書 課題番号: 14401014)
 - 足立明編著. 2003. 『スリランカにおける小規模金融政策の系譜』 (平成 13～15 年度科学研究補助金 基盤(C)(2)研究成果報告書 課題番号: 13610358) .
 - 足立明. 2003. 「開発の記憶」 『民族学研究』 68(4): 1-12.
 - 足立明編著. 2002. 『開発言説と公衆衛生: スリランカ、インド、インドネシアの事例研究』 (平成 11～13 年度科学研究補助金 基盤研究(2)(B)研究成果報告書 課題番号: 11691056)
-

安藤和雄 (ANDO, Kazuo)

【著書・論文】

- 安藤和雄. 2004. 「農村で農業技術が伝統的に見える意義—ラカイン州の作付体系と農具調査事例から—」『熱帯農業』48(別号 2): 17-18.
- Soulaphone, Inthavong, and Kazuo Ando,. 2004. Existing Local Knowledge and Cropping Practices in Farming Systems in Laos: A Case Study in Ban kadan of Champone Distirct, Savannakhet Province, *JJTA(Japanese Journal of Tropical Agriculture)* 48(Special Issue 2): 15-16.
- 安藤和雄, 宇佐見晃一, 河合明宣. 2004. 「バングラデシュの農村開発における在地化 アプローチの重要性」『熱帯農業』48 巻(別号 1): 95-96.
- Ando, Kazuo. 2004. Changing Traditional Cropping Systems in Rural Rakhine State-Meaning of “Traditional” in Rural Development Study, *Paper presented in Seminar on Change of Rural Society and Local Agro-ecological Knowledge in Myanmar* (March 15, 2004, Yangon. 16ps).
- Ando, Kazuo. 2004. The Importance of “The Localities” in Rural Development-Towards Participation and Sustainable Development, *Paper Presented in Final Seminar on Participatory Rural Development Project: Development Human Capacity under Link Model* (January 25-26, 2004, Dhaka. 10ps).
- Ando, Kazuo, and Norio Ishida,. 2004. Water Quality Problems Affecting “Livelihood in Bangladesh and Kazakhstan: A Natural Environment as a Local Area”, In Furukawa, H., M. Nishibuchi, Y. Kono, Y. Kaida, eds., *Kyoto Area Studies on Asia* 8 (Ecological Destruction, Health, and Development-Advancing Asian Paradigms): 319-333.
- 内田晴夫・安藤和雄. 2003. 「バングラデシュの『洪水』をめぐる農民の対応と国家政 策—動的水文環境に対する農村水文学的アプローチからの提言—」『アジア・アフリカ地域研究』3(11): 3-34.
- 河合明宣, 安藤和雄. 2003. 「ベンガル・デルタの村落形成についての覚書」海田能宏編『バングラデシュ農村開発実践研究—新しい協力関係を求めて—』 pp.114-131.
- 安藤和雄, 内田晴夫. 2003. 「マタボールたちと在地の農村開発」海田能宏編『バングラデシュ農村開発実践研究—新しい協力関係を求めて—』 pp.80-113.
- 安藤和雄. 2003. 「農村開発における持続的発展とは—バングラデシュでの在地化をめざした農村開発援助プロジェクトに参加して—」河合明宣・浜口恒夫編『持続的発展と国際協力』放送大学教育振興会.

荒木 茂 (ARAKI, Shigeru)

【著書・論文】

- Araki, S. 2005. Change in population and land use intensities in several villages of the four northern Regions of Namibia. *African Study Monographs, Supplementary Issue* 30: 77-88.
- Araki, S. 2005. Forest use and restoration in African savanna from farmer’s view on agriculture, forest and land. In Hiramatsu, K. ed., *Proceedings of the 7th Kyoto University International Symposium, 2005: Coexistence with Nature in a Glocalizing World ? Field Science Perspectives*, (Hotel Nai Lert Prtk, Bangkok, Thailand, November 23-24, 2005) 69-81.
- 荒木茂. 2005. 「土壌からみたアフリカ」水野一晴編『アフリカ自然学』古今書院, pp.35-46.
- 荒木茂. 2004. 「アフリカの土壌問題」『国際農林業協力』27(2): 2-5.
- Yamaguchi, J. and S. Araki. 2003. Biomass Production of Banana Plants in the Indigenous Farming System of the East African Highland: A Case Study on the Kamachumu Plateau in Northwest Tanzania. *Agriculture, Ecosystems and Environment* 102: 93-111.
- Araki, S. 2003. Ten Years Change in Population and Chitemene Shifting Cultivation around Mpika Area, Northern Zambia. In S. Araki, ed., *Agro-environmental Study on the Sustainability of Indigenous Agriculture in Central and Southern Africa*. (平成 11-13 年度科学研究費補助金 [基盤研究(A) (2)] 研究成果報告書) 119-134.
- 荒木茂. 2003. 「アフリカ農業の地域性と持続的発展のための課題」『21 世紀の国際共同研究戦略の構築』独立行政法人国際農林水産業研究センター, 29-34.
- 荒木茂. 2003. 「アフリカにおける生態地域データベース」*Proceedings of the 2003 Annual Conference of the Mie University GIS Society*. 第 3 回三重大学 GIS 研究会, 41-46.
- Msuya, D. and S. Araki. 2002. Finger millet growth and yield in relation to soil fertility in the slash and burn system of cultivation. *Tanzania Journal of Population Studies and Development* 9: 75-87.

【口頭発表】

- 荒木茂. 2006. 「南部アフリカ諸国における土地制度と共同体資源管理—I. GIS を用いた共有地の線引きと衛星画像による観察」日本アフリカ学会第 43 回学術大会 (大阪大学, 2006 年 5 月 27-28 日) .
- 梅川通久, 荒木茂. 2005. 「クリッカブル・マップを用いた地域研究画像データベースの集成」東京大学空間情報科学研究センター全国共同利用研究発表大会 (CSIS Days 2005) (東京大学山上会館, 2005 年 9 月 28 日) .
- 荒木茂. 2005. 「北部ザンビアにおける農業開発と在来農業—ザンビアにおける新しい農民像の模索」日本アフリカ学会第 42 回学術大会 (東京外国語大学, 2005 年 5 月 28-29 日) .
- 荒木茂. 2005. 「東・南部アフリカサバンナ帯における森林資源の利用と再生」日本アグロフォレストリー研究会第 3 回例会 (京都大学東南アジア研究所, 2005 年 3 月 4 日) .

- 荒木茂. 2004. 「アフリカ研究と GIS」東京大学空間情報科学研究センター第 7 回シンポジウム『空間情報科学と最新地図学』（東京大学, 2004 年 9 月 10 日）.
- 荒木茂. 2004. 「ナミビア北中部・オバンボランドにおける 10 年間の人工変化と土地利用の変遷」日本アフリカ学会第 41 回学術大会（中部大学, 2004 年 5 月 29-30 日）.
- 荒木茂. 2004. 「地域研究と画像解析・地理情報システム」筑波大学フォーラム『GIS 解析：社会・環境研究への応用』（筑波大学, 2004 年 5 月 15 日）.
- 荒木茂. 2003. 「アフリカにおける生態地域データベース」第 3 回三重大学 GIS 研究会（三重大学, 2003 年 8 月 1 日）.
- 荒木茂. 2003. 「衛星画像と人口センサスからみた 10 年間の焼畑活動の変化（ザンビア北部州）」日本アフリカ学会第 40 回学術大会（島根大学, 2003 年 5 月 31-6 月 1 日）.
- 荒木茂. 2003. 「アフリカ農業の地域性と持続的発展のための課題」国際戦略セミナー「農林水産業の持続的発展と国際共同研究の役割」（国際農林水産業研究センター, 2003 年 1 月 27, 28 日）.
- 荒木茂. 2002. 「生態地域データベースと地図検索システムの公開」COE 成果発表シンポジウム『地域研究における画像と地理情報の活用』（京都大学, 平成 14 年 12 月 5 日）.
- Araki, S. 2002. The role of banana in African farming systems. *International Symposium 'Rethinking Banana Domestication: Cultural Perspectives'* (Kyoto University, Sep. 21・22, 2002.)

藤田幸一（FUJITA, Koichi）

【著書・論文】

- Fujita, Koichi. and Ikuko Okamoto., 2006. Agricultural Policies and Development of Myanmar Agriculture: An Overview. *IDE (Institute of Developing Economies) Discussion Paper* 63: 43pp.
- 藤田幸一, 岡通太郎. 2006. 「1990 年代の農産物需給・貿易の新たな動向と政策要因」『平成 17 年度海外情報分析委託事業（自由貿易協定情報調査分析検討）事業実施報告書 I インド編』農林中金総合研究所, 84-101.
- 岡通太郎, 藤田幸一. 2006. 「インドの農業発展と投入財補助金問題」『平成 17 年度海外情報分析委託事業（自由貿易協定情報調査分析検討）事業実施報告書 I インド編』農林中金総合研究所, 58-83.
- 藤田幸一, 岡通太郎. 2006. 「インドの農林水産業の概況」『平成 17 年度海外情報分析委託事業（自由貿易協定情報調査分析検討）事業実施報告書 I インド編』農林中金総合研究所, 25-46.
- 藤田幸一. 2006. 「インドの農業・貿易政策の概要」『平成 17 年度アジア大洋州地域食料農業情報調査分析検討会報告書』国際農林業協力・交流協会, 89-109.
- 藤田幸一. 2005. 「アジア農業金融再考—農村調査の現場から」『調査と情報』217: 2-3.
- Fujita, Koichi. 2005. "Chinization" of Southeast Asia: Changes of Rural Livelihoods in Northern Laos. *Proceedings of the 7th Kyoto University International Symposium, 2005 Coexistence with Nature in a "Glocalizing" World -Field Science Perspectives-*, (Bangkok, November 23-24, 2005) pp.127-134.
- 藤田幸一. 2005. 「バングラデシュの貧困削減と農業・農村開発の課題」『農業と経済』71(11): 52-57.
- Fujita, Koichi and Shinsuke Tomita., 2005. The Potentials for Saving Mobilization from Rural Areas: Case Study of a Saving Group in Rural Vientiane Municipality. Committee of the Planning and Investment Lao People's Democratic Republic and Japan International Cooperation Agency eds. *Macroeconomic Policy Support for Socio-Economic Development in the Lao PDR Phase 2 Main Report* 2: 221-236.
- Fujita, Koichi and Shinsuke Tomita. 2005. Expansion of Maize Cultivation and Its Impact on Rural Finance in Northern Laos. In Committee of the Planning and Investment Lao People's Democratic Republic and Japan International Cooperation Agency eds. *Macroeconomic Policy Support for Socio-Economic Development in the Lao PDR Phase 2 Main Report* 2: 237-270.
- Fujita, Koichi and Shinsuke Tomita. 2005. Rural Finance under a Highly Commercialized Economy in the Bolaven Plateau: Case Study of Three Villages. In Committee of the Planning and Investment Lao People's Democratic Republic and Japan International Cooperation Agency eds. *Macroeconomic Policy Support for Socio-Economic Development in the Lao PDR Phase 2 Main Report* 2: 271-310.
- Fujita, Koichi and Shinsuke Tomita. 2005. Finance for Rural Development in Laos: Discussions. In Committee of the Planning and Investment Lao People's Democratic Republic and Japan International Cooperation Agency eds. *Macroeconomic Policy Support for Socio-Economic Development in the Lao PDR Phase 2 Main Report* 2: 311-317.
- 藤田幸一. 2005. 『バングラデシュ 農村開発のなかの階層変動—貧困削減のための基礎研究—』京都大学学術出版会, pp.1-287.
- 藤田幸一編著. 2005. 『ミャンマー移行経済の変容—市場と統制のはざまで—』アジア経済研究所, 341pp.
- Moazzem, K.G. and Koichi. Fujita., 2004. Marketing System of Potato and its Changes in Bangladesh. *The Developing Economies* 42(1): 63-94.
- Fujita, Koichi. 2004. Groundwater Market in Bengal: Emergence and Transformation. 『経済学雑誌』（大阪市立大学経済学会）105(1): 21-47.
- 栗田匡相, 岡本郁子, 黒崎卓, 藤田幸一. 2004. 「ミャンマーにおける米増産至上政策と農村経済—8 ヶ村家計調査データによる所得分析を中心に—」『アジア経済』45(8): 2-37.
- 藤田幸一. 2004. 「農村の貧困と開発の課題」絵所秀紀, 穂坂光彦, 野上裕生編『貧困と開発』日本評論社, pp.57-77.
- Fujita, Koichi. 2004. Rural Economy in Myanmar at the Crossroad: With Special Reference to Rice Policies. In Abe, S. and B.

Nidhiprabha ed., *State, Market, Society, and Economic Cooperation in Asia, JSPS-NRCT Core University Project Report*, Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University. pp.341-374.

- Fujita, Koichi, Ashok Kundu and W.M.H. Jaim. 2003. Groundwater Market and Agricultural Development in West Bengal: Perspectives from a Village Study. *Japanese Journal of Rural Economics* 5: 51-65.
- 藤田幸一. 2003. 「開発経済学とアジアの農村－バランプール研究に寄せて－」『経済史研究』7: 54-70.
- 藤田幸一. 2003. 「90年代ミャンマーの稲二期作化と農業政策・農村金融－イラワジ管区－農村調査事例を中心に－」『経済研究』54(4): 300-314.
- 藤田幸一. 2003. 「農村開発におけるマイクロ・クレジットと小規模インフラ整備」海田能宏編『バングラデシュ農村開発実践研究』コモンズ, pp.150-169.
- 藤田幸一. 2003. 「ミャンマー社会雑感」『東南アジア研究』40(4): 520-521.
- 藤田幸一. 2002. 「インド農業論－技術・政策・構造変化」絵所秀紀編『講座現代南アジア第2巻 経済自由化のゆくえ』東大出版会, pp.97-119.
- 藤田幸一. 2002. 「シカゴ学派経済学者のパラダイス」『世界の農林水産』762: 2-3.

【口頭発表】

- Fujita, Koichi. 2005. 'Chinization' of Southeast Asia: Changes of Rural Livelihoods in Northern Laos. *The 7th Kyoto University International Symposium*. (Bangkok, Thailand, 23-24 November 2005)
- 藤田幸一. 2005. 「ラオス焼畑地帯における商業的農業の展開－輸出向けハイブリッド・メイズ導入の実態とその意義をめぐって－」アジア政経学会東日本大会（明治大学, 2005年5月29日）
- Fujita, Koichi. 2004. Transformation of Groundwater Market in Bengal: Implications to Efficiency and Income Distribution. *The 18th European Conference on Modern South Asian Studies*. (Lund, Sweden, 6-9 July 2004)
- Fujita, Koichi. 2004. Rural Economy in Myanmar at the Crossroads: With Special Reference to Rice Policies. *International Workshop of Core University Project 'Perspectives of the Roles of State, Market, Society, and Economic Cooperation in Asia'* (Kyoto, 6-7 November 2003)
- 藤田幸一. 2003. 「南アジアにおける経済政策と社会正義－バングラデシュ、西ベンガル州、ケーララ州の対比を材料にして－」日本南アジア学会大会シンポジウム（京都大学, 2003年10月4-5日）
- Fujita, Koichi. 2002. Changes of Groundwater Markets in Bangladesh and West Bengal. *The 4th Conference of the Asian Society of Agricultural Economists* (Alor Setar, Malaysia, 20-22 August 2002)
- 藤田幸一. 2002. 「制度の経済学と途上国の農業・農村開発－政府・市場・農村コミュニティのはざまにて－」日本農業経済学会大会シンポジウム（茨城大学, 2002年3月30日）

林 行 夫 (HAYASHI, Yukio)

【著書・論文】

- 林行夫. 2005. 「第二節 タイ」文化庁編『海外の宗教事情に関する調査報告書』53-93.
- Hayashi, Yukio. 2005. New Japanese Scholarship in Cambodian Studies: Introduction. *Tonan Ajia Kenkyu* 『東南アジア研究』42(4): 387-393.
- 林行夫, 合田壽共編. 2005. 『講座世界の先住民族（ファースト・ピープルズの現在）第2巻－東南アジア』明石書店, 336p.
- 林行夫. 2004. 「活きる『周縁』、揺らぐ『中心』－タイ系民族の国境域での仏教実践の動態」加藤剛編『変容する東南アジア社会－民族・宗教・文化の動態』めこん, 143-200.
- 林行夫. 2004. 「隠蔽される身体と〈絆〉の所在－制度宗教の表象とタイ仏教危機論」池上良正編『講座 宗教第6巻: 絆』岩波書店, 215-243.
- 林行夫. 2004. 「カネの救い－タイ仏教徒の錬金術」『月刊みんぱく』28(6): 6-8.
- 林行夫. 2004. 「精霊信仰」岸本美緒編『歴史学事典 11: 宗教と学問』弘文堂, 416-417.
- Hayashi, Yukio. 2003. Reconfiguration of Village Guardian Spirit among the Thai-Lao in Northeast Thailand. In Tannenbaum, Nicola B. and Cornelia A. Kammerer, eds., *Founders' Cults in Southeast Asia: Ancestors, Polity, and Identity*. New Haven: Yale University Southeast Asia Studies, pp. 184-209.
- Hayashi, Yukio. 2003. *Practical Buddhism among the Thai-Lao: Religion in the Making of a Region*. Kyoto and Melbourne: Kyoto University Press and Trans Pacific Press. xvi + 450p.
- Hayashi, Yukio and Thongsa Sayavongkhamdy (eds.). 2003. *Cultural Diversity and Conservation in the making of Mainland Southeast Asia and Southwestern China: Regional Dynamics in the Past and Present*. Bangkok: Amarin [with Lao summary xxxvii+423 p].
- 綾部恒雄・林行夫共編. 2003. 『エリア・スタディーズタイを知るための60章』明石書店, 343p.
- 林行夫. 2003. 「東北タイとラオス」ラオス文化研究所編『ラオス概説』めこん, 521-548.
- 林行夫. 2002. 「『不純にして健全な・・・』－タイ仏教徒社会におけるカネと功德」小馬徹編『暮らしの文化人類学5－カネと人生』雄山閣, 152-178.

【口頭発表】

- 林行夫. 2006. 「東北タイ農村の〈都市仏教〉の展開にみる制度と実践」第75回東南アジア史学会研究大会（名古屋大学, 2006年6月11日）

平松幸三 (HIRAMATSU, Kozo)

【著書・論文】

- Hiramatsu, K. 2004. Soundscape: The concept and its significance in acoustics, *Paper in The 18th International Congress of Acoustics*.
- 松井利仁・松野朝之・安次嶺馨・宮北隆志・平松幸三・山本剛夫. 2003. 「低出生体重児および早産児の出生率と航空機騒音暴露の関連」『日本衛生学雑誌』58(3): 385-394.
- 松井利仁・平松幸三・長田泰公・山本剛夫. 2002. 「特殊空港周辺における航空機騒音暴露の評価尺度 (WECPNL) について」『騒音制御』26(3): 199-204.
- 松井利仁・平松幸三・長田泰公・山本剛夫. 2002. 「嘉手納飛行場周辺における航空機騒音暴露の記録と経年変化」『日本音響学会誌』58(1): 20-24.
- 平松幸三. 2002. 「サウンドスケープ—音のエコロジー」『エコソフィア』9: 5-8.
- Hiramatsu, K., T. Matsui, T. Miyakita, A. Ito, T. Tokuyama, Y. Osada and T. Yamamoto,. 2002. Population-based questionnaire survey on health effects of aircraft noise on residents living around U.S. airfields in the Ryukyus 2. An analysis of the 12 scale scores discriminant score and the factor score, *Journal of Sound and Vibration* 250(1): 139-144.
- Miyakita, T., T. Matsui, A. Ito, T. Tokuyama, K. Hiramatsu, Y. Osada, and T. Yamamoto,. 2002. Population-based questionnaire survey on health effects of aircraft noise on residents living around U.S. airfields in the Ryukyus 1. An analysis of the 12 scale scores, *Journal of Sound and Vibration* 250(1): 129-137.

池野 旬 (IKENO, Jun)

【著書・論文】

- Ikeno, Jun. 2007. The Declining Coffee Economy and Low Population Growth in Mwangi District, Tanzania. In Ikeno, J. ed., *African Coffee Economy at the Crossroads: The Cases from Tanzania, Ethiopia & Rwanda. African Study Monographs* Supplementary Issue No.35: 3-41.
- Rwezimula, F., B.J.Nkonoki, A.Lubida, & J. Ikeno et al. 2004. Perspectives and Approaches for Sustainable Rural Development in Africa. In Rutatora, D.F., A.J.P. Tarimo, A.Z. Mattee & E.J. Mtengeti eds., *Proceedings of the International Conference* (the Institute of Continuing Education (ICE), SUA, Morogoro, Tanzania, 18-20 February 2004).
- Ikeno, J., M. Takeishi, F. Rwezimula, A. Lubida, C. Shirima, & B.J. Nkonoki (compil.) 2004. Report of Baseline Survey in Uluguru Mountains: Kibogwa Village & Tanana Sub-village, Nyachilo Village. (SCSRD, Sokoine University of Agriculture (Tanzania)), unpublished.
- 池野旬. 2003. 「タンザニアの貧困削減政策をめぐる」『アジア・アフリカ地域研究』3: 224-236.

【口頭発表】

- Ikeno, Jun. 2006. From Coffee Economy to Urban-centered Economy in Mwangi District, Tanzania. *International Conference on Perspectives of Alternative Commodities Chain*. (Thailand, Kasetsart University, 26-28 Aug.2006)
- 池野旬. 2006. 「人口動態からみたタンザニア、ムワンギ県の社会経済変容」日本アフリカ学会第43回学術大会（大阪大学, 2006年5月）
- 池野旬. 2005. 「キリマンジャロ・コーヒー産地をめぐる地域経済圏」日本アフリカ学会第42回学術大会（東京外国大学, 2005年5月）
- 池野旬. 2004. 「北部タンザニア、Mwangi 県の『住民参加型』水道施設拡充計画」日本アフリカ学会第41回学術大会（中部大学, 2004年5月）

伊谷樹一 (ITANI, Juichi)

【著書・論文】

- 伊谷樹一. (印刷中) 「焼畑農耕民の自然認識」『アフリカの力』京都大学出版.
- Nsenga, J., C.Mahonge, E.Mtengeti, D.Rutatora, K.Tamura, J. Itani, Y. Kanda, and M. Araki,. 2004. The SUA Method: The Case Study from Mbinga. Perspectives and Approaches for Sustainable Rural Development in Africa. *Proceedings of the International Conference*, SCSRD/JICA, 333-357.
- 伊谷樹一. 2002. 「アフリカ・ミオンボ林帯とその周辺地域の在来農法」『アジア・アフリカ地域研究』2: 88-104.

【口頭発表】

- 伊谷樹一, 掛谷誠. 2006. 「『在来性のポテンシャル』再考—農村開発への一視点」日本アフリカ学会第43回学術大会(吹田市, 大阪大学, 2006年5月)
- Itani, Juichi. 2005. African Way of Rural Development based on Area Studies. *International Workshop 21st Century COE Program International Workshop in Tanzania*. (Tanzania, HTL New Africa, 13 Dec.2005)

木谷公哉 (KITANI, Kimiya)

【著書・論文】

- 木谷公哉 (タイ側技術担当) . 2005. 第 1 回地域情報学シンポジウム 「遠隔会議システムを利用した国際シンポジウム 2 拠点同時開催」 (Web Site, <http://gissv2.cseas.kyoto-u.ac.jp/kiban-s/index.php/workshop>) .
- 木谷公哉. 2004. 「ルート訪問記: 超ローコストで実現! タイ語文献データベース構築物語」 『UNIX USER』 2004(1): 105-110.
- 木谷公哉. 2003. 「バンギ・フィールド・ステーション (マレーシア) とバンコク連絡事務所を中心としたマレーシアおよびタイと日本間のネットワーク環境の調査と整備」 21 世紀 COE プログラム「世界を先導する総合的地域研究拠点の形成」 Web Site, http://areainfo.asafas.kyoto-u.ac.jp/japan/activities/fsta/15k_kitani/kitani.html
- 木谷公哉. 2003. 「ルート訪問記: どんなコンピュータでも対応できる万全の故障機器修復体制」 『UNIX USER』 2003(12): 87-94.

河野泰之 (KONO, Yasuyuki)

【著書・論文】

- Saxana, K. G., L. Luohui, Y. Kono, and S. Miyata, eds. 2006. *Small-scale Livelihoods and Natural Resources Management in Marginal Areas of Monsoon Asia*, DehraDun: Bishen Singh Mahendra Pal Singh, 177p.
- 佐藤孝宏, 河野泰之. 2006. 「ポスト『緑の革命』期における東南アジア大陸部のコメ生産の空間分布の変容」 『熱帯農業』 50(別巻 2): 41-42.
- 富田晋介, 河野泰之, 小手川隆志, 櫻井克年. 2006. 「東南アジア大陸山地部における土地利用の展開過程—ラオス北部 1 村落における水田開拓を事例として—」 『熱帯農業』 50(別巻 2): 45-46.
- 河野泰之編. 2006. 『東南アジア大陸部の統合型生業・環境データベース構築による生態資源管理の地域間比較』 (平成 15 年度-平成 17 年度科学研究費補助金 基盤研究(B)(2)研究成果報告書) 147p.
- 河野泰之. 2006. 「農と森に生きる人々の生態史」 (総合地球環境学研究所研究プロジェクト 4-2 2005 年度報告書 『アジア・熱帯モンスーン地域における地域生態史の総合的研究: 1945-2005』) pp.44-50.
- 富田晋介, 河野泰之, 小手川隆志, 櫻井克年. 2006. 「東南アジア大陸産地部における人口変動と水田開拓」 (総合地球環境学研究所研究プロジェクト 4-2 2005 年度報告書 『アジア・熱帯モンスーン地域における地域生態史の総合的研究: 1945-2005』) pp.51-58.
- 富田晋介, 河野泰之, 小手川隆志, 櫻井克年. 2006. 「東南アジア大陸山地部における人口変動と水田開拓—ラオス北部 ウドムサイ県の 1 村を事例として—」 『熱帯農業』 50(別巻 1): 47-48.
- 河野泰之. 2006. 「ラオス山地部の自然資源管理のための戦略と政策—解題—」 『のびゆく農業』 968: 2-6.
- 河野泰之. 2006. 「数字の魔法」 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科, 京都大学東南アジア研究所編『京大式フィールドワーク入門』 東京: NTT 出版, p.53.
- Shibayama, M. and Kono, Y. eds. 2005. Potential of GIS/RS on Area Studies, *Proceedings of First International Symposium on Area Informatics 2005*. Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University, 109p.
- 河野泰之, 縄田栄治. 2005. 「アグロエコロジカルアプローチ」 稲村達也編著『栽培システム学』 東京: 朝倉書店, pp.181-192.
- Song, X. F., Kono, Y. and Shibayama, M. 2005. Environmental Cambodia: An Open Source GIS Approach to Web Mapping. *International Journal of Geoinformatics* 1(1): 63-70.
- Shibayama, M., Kajiyama, A., Raghavan, V. and Kono, Y. 2005. Mapping Historical Maritime Exchanges between Vietnam, Thailand and Japan. *International Journal of Geoinformatics* 1(1): 139-146.
- Dao Minh Truong, Kono, Y. and Yanagisawa, M. 2005. Dynamics of Land Cover-Land Use in Villages of the Vietnam Northern Mountain Region: Impacts of Human Activities. *International Journal of Geoinformatics* 1(1): 165-170.
- Kuroda Y., Sato, Y., Bounphanousay, C., Kono, Y. and Tanaka, K. 2005. Gene Flow from Cultivated Rice (*Oryza sativa* L.) to Wild *Oryza* Species (*O. rufipogon* Griff. And *O. nivara* Sharma and Shastri) on the Vientiane Plain of Laos. *Euphytica* 142: 75-83.
- Miyagawa, S., Inamura, T., Okada, H., Yamada, K., Kono, Y., Singvilay, O. and Sipaseuth, N. 2005. Yield Improving Ability of Lowland Rice in the Northern Region of Lao P. D. R. *The Lao Journal of Agriculture and Forestry* 10(Special Issue): 24-38.
- 松浦美樹, 河野泰之. 2005. 「ラオス北部における生業活動の変容と人々の生活戦略—ウドムサイ県ナモー郡の低地水田村を事例として—」 『第 15 回日本熱帯生態学会年次大会講演要旨集』 p.43.
- 富田晋介, 河野泰之. 2005. 「ラオス北部山地における焼畑の立地と休閑地の植生回復」 『熱帯農業』 49 (別巻 2): 27-28.
- 河野泰之. 2005. 「森を使いまわす知恵—ラオス北部の山地に暮らす人々—」 『科学』 75(4): 462-465.
- 河野泰之. 2005. 「東南アジアの稲作と水—自然との信頼関係と人々の知恵—」 『アジア遊学』 75: 108-119.
- Saxana, K. G., Luohui L., Kono, Y. and Miyata, S. eds. 2004. *Small-scale Livelihoods and Natural Resources Management in Marginal Areas: Case Studies in Monsoon Asia*, The United Nations University, 248p. (CD-ROM version)
- Nawata, E., Nagata, Y., Kono, Y., Iwama, K., Yamamoto, T., Watanabe, K., Tomita, S., Sributta, A., Noichana, C. and Sakuratani, T. 2004. Mapping of Cassava Productivity Using GIS in Northeast Thailand 『熱帯農業』 48 (4): 211-219.
- Kono, Y. 2004. Application of TRMM Data to Potential Agricultural Productivity Estimation, *Proceedings of the 2nd TRMM International Science Conference* p.66.
- Song Xianfeng, 柴山守, 河野泰之, 田中耕司. 2004. 「Isite Z39.50/Dublin Core による東南アジア地域地形図画像データベ

- Song, X. F., Kono, Y. and Shibayama, M. 2004. An Open Source GIS Solution for Discovering Cambodia through Maps and Facts. *Proceedings of the FOSS/GRASS Users Conference* pp.1-10.
- Dao Minh Truong, Kono, Y. and Yanagisawa, M. 2004. Dynamics of Land Cover-Land Use in Different Communities of Vietnam Northern Mountain Region: An Implication of Human Impacts. *Proceedings of International Symposium on Geoinformatics for Spatial Infrastructure Development in Earth and Allied Sciences 2004* pp.389-394.
- Shibayama, M., Kajiyama, A., Raghavan, V. and Kono, Y. 2004. Mapping Historical Maritime Exchanges between Vietnam, Thailand and Japan. *Proceedings of International Symposium on Geoinformatics for Spatial Infrastructure Development in Earth and Allied Sciences 2004*. pp.467-472.
- Song, X. F., Kono, Y. and Shibayama, M. 2004. Using OGC WxS to Build Web Gazetteer: A Case Study of Cambodian Geographic Place Names Database. *Proceedings of the 25th Asian Conference on Remote Sensing* pp.1038-1043.
- Song, X. F. and Kono, Y. 2004. The Use of Terra ASTER Dataset for Soil Erosion Mapping in Chohe Watershed, Northern China. *Proceedings of the 25th Asian Conference on Remote Sensing* p.853.
- 河野泰之. 2004. 「熱帯での営農」長野敏英編 『熱帯生態学』東京: 朝倉書店. pp.149-164.
- Saphangthong, T., Y. Kono, X. F. Song, and S. Tomita,. 2004. Process of Land Use Changes in Northern Laos: A Village-level Study in the Nam Beng River Basin, 『熱帯農業』47(別号 2): 79-80.
- 黒田洋輔, 佐藤洋一郎, Chay Bounphanousay, 河野泰之, 田中耕司. 2004. 「ラオス中部ヴィエンチャン平野における野生イネ(*Oryza rufipogon*, *O. nivara*)および栽培イネ(*O. sativa*)の SSR 多型からみた集団遺伝構造」育種学会第 104 回講演会.
- Furukawa, H., M. Nishibuchi, Y. Kono, and Y. Kaida, eds. 2004. *Ecological Destruction, Health, and Development: Advancing Asian Paradigms*, Kyoto: Kyoto University Press and Melbourne: Trans Pacific Press.
- Yamada, K., M. Yanagisawa, Y. Kono, and E. Nawata,. 2004. Use of Natural Biological Resources and Their Roles in Household Food Security in Northwest Laos, *Southeast Asian Studies* 41(4): 426-443.
- Sakurai, K., H. Kawadu, Y. Kono, M. Yanagisawa, Le Van Tiem, Le Quoc Thanh, Nittaya Dangthaisong and Trinh Ngoc Chau. 2004. Impact of Agricultural Practices on Slope Land Soil Properties of the Mountaneous Region of Northern Vietnam: A Case Study in Bac Ha District, Lao Cai Province, *Southeast Asian Studies* 41(4): 503-518.
- Kono, Y. and A. T. Rambo,. 2004. Some Key Issues Relating on Sustainable Agro-resources Management in the Mountainous Region of Mainland Southeast Asia, *Southeast Asian Studies* 41(4): 550-565.
- 黒田洋輔, チャイ・ブンバスサイ, 佐藤洋一郎, 河野泰之, 田中耕司. 2003. 「アジア野生イネ (*Oryza rufipogon*) の集団ダイナミックスーラオス・ヴィエンチャン平野の水牛飼養からー」『熱帯農業』47(別号 1): 91-92.
- 富田晋介, 河野泰之, 縄田栄治, 永田好克, 岩間憲治, Roengsak Katawat, Somsak Sukchan. 2003. 「天水農業生産力推定における降水量の時間単位と T RMM データ利用の可能性の検討ータイ国東北部を対象としてー」『熱帯農業』47(別号 1): 55-56.
- 黒田洋輔, チャイ・ブンバスサイ, 佐藤洋一郎, 河野泰之, 田中耕司. 2003. 「種子・穂および葉形質からみた野生および栽培イネの hybrid-swarmーラオス中部ヴィエンチャン平野の事例」『第 13 回日本熱帯生態学会年次大会講演要旨集』p.29.
- 黒田洋輔, 佐藤洋一郎, Chay Bounphanousay, 河野泰之, 田中耕司. 2003. 「アジア野生イネ(*Oryza rufipogon*)自生地集団にみられたヘテロシスの現象 I. 繁殖戦略およびエッジ効果からの考察」『日本育種学会第 104 回講演会要旨集』5(別冊 2 号): p.240.
- Tomita S, E. Nawata, Y. Kono, T. Inamura, Y. Nagata, C. Noichana, and A. Sributta,. 2003. Impact of direct dry seeding on rainfed paddyvegetation in Northeast Thailand, *Weed Biology and Management* 3: 68-76.
- Tomita S, E. Nawata, Y. Kono, Y. Nagata, C. Noichana, A. Sributta, and T. Inamura,. 2003. Differences of weed vegetation in response to cultivating methods and water conditions in rainfed paddy fields in Northeast Thailand, *Weed Biology and Management* 3: 117-127.
- Inamura, Tatsuya, Shuichi Miyagawa, Olayvanh Singvilay, Nivong Sipaseauth and Yasuyuki Kono,. 2003. Competition between weeds and wet season transplanted paddy rice for nitrogen use, growth and yield in the central and northern regions of Laos, *Weed Biology and Management* 3: 213-221.
- Song, Xianfeng, Yasuyuki Kono, Koji Tanaka and Mamoru Shibayama. 2003. Integrating Geographic Collection Database Repositories with Z39.50-Compliant Gateway, *Asian Journal of Geoinformatics* 4(2): 31-36.
- Song, X. F., Y. Kono, K. Tanaka, and M. Shibayama,. 2003. Collaborating Geographic Collection Database Repositories with a Z39.50-Compliant Gateway, *Asian Journal of GeoInformatics*.
- Song, Xianfeng, Y. Kono, K. Tanaka and M. Shibayama,. 2003. *Collaborating Heterogeneous Database Repositories with a Z39.50-Compliant Gateway: A Case Study on Cataloguing Geographic Collections of Southeast Asian Studies*.
- Tomita, S., S. Miyagawa, Y. Kono, C. Noichana, T. Inamura, Y. Nagata, A. Sributta, and E. Nawata,. 2003. Rive yield losses by competition with weeds in rainfed paddy fields in north-east Thailand, *Weed Biology and Management* 3: 162-171.
- 宮川修一・稲村達也・Le Quoc Duanh・Le Van Tiem・Le Quoc Thanh・柳澤雅之・河野泰之. 2002. 「ベトナム北部山地の水稲作の地域性」『熱帯農業』46(別号 2): 7-8.
- 稲村達也・宮川修一・Olyvanh Singvilay・河野泰之. 2002. 「北ラオスにおける水稲の生産力に及ぼす雑草発生量の影響」『熱帯農業』46(別号 2): 29-30.
- Kono, Y., Yanagisawa, M. and Phong, D. T. 2002. Quan Ly Cong Dong Cac He Thong Thuy Loi O Chau Tho Song Hong, Viet Nam, In Phan Huy Le ed., *Cac Nha Viet Nam Hoc Nuoc Ngoai Viet Ve Viet Nam Tap 2*. Hanoi: Nha Xuat Ban The Gioi,

【口頭発表】

- 河野泰之. 2005. 「土地利用システムに見る『平地』と『山地』」地域研究コンソーシアム・シンポジウム「新しい地域研究の方法を求めて：地域の形成と変容のメカニズム」(北海道大学, 2005 年 7 月)
- Kono, Yasuyuki. 2005. Impact of the Chinese Economic Development on the Daily Life and Environment in Laos, *International Workshop on Mainland Southeast Asia in Transition: Resource and Eco-history* (Yunnan University, Jun. 2005)
- Kono, Yasuyuki. 2005. Lao Wisdom on Land and Forest Use: Rethinking Principles of Environmental Governance, *The first International Conference on Lao Studies* (Northern Illinois University, May 2005)
- Kono, Yasuyuki. 2004. Application of TRMM Data to Potential Agricultural Productivity Estimation: A Case Study in the Middle Basin of the Mekong River, *2nd TRMM International Science Conference* (Nara, Sep. 2004)
- 河野泰之. 2004. 「ベトナム統一後のメコンデルタの水利開発と農業発展」東南アジア史学会第 71 回研究大会 (東京, 2004 年 6 月)
- Kono, Yasuyuki. 2004. Modeling Agricultural Productivity in Northeast Thailand, *National Agricultural Festival* (Khon Kaen, Jan. 2004)
- Kono, Yasuyuki. 2003. Agro-Environmental Land Evaluation in Northeast Thailand, *Interdisciplinary Workshop on the Forest Dynamics of Thailand* (Kyoto, Nov. 2003)
- Yanagisawa, Masayuki and Kono, Yasuyuki. 2002. Development Process of Upland Farming in the Northern Mountain Regions of Vietnam, *National Workshop on Sustainable Upland Agricultural Research and Development* (Yen Bai, Nov. 2002)
- Kono, Yasuyuki. 2002. People, Environment and Land Use Systems in Mainland Southeast Asia, *Working with Farmers for the Cultivation of Biodiversity while Improving Livelihoods* (New York, Apr. 2002)

小 杉 泰 (KOSUGI, Yasushi)

【著書・論文】

- 小杉泰. 2006. 『現代イスラーム世界論』名古屋大学出版会.
- 小杉泰, 澤江史子. 2006. 「イスラームと公共性」稲垣久和, 金泰昌編『宗教から考える公共性 (公共哲学 16)』209-228.
- 小杉泰. 2005. 「民主化と安定に向けて—イラク戦争後の湾岸」日本国際問題研究所編『湾岸アラブと民主主義—イラク戦争後の眺望』1-17.
- 小杉泰. 2005. 「現代中東政治の眺望—20 世紀の遺産と 21 世紀のパラダイム」『中東研究』488: 30-38.
- 小杉泰共同監修. 2005. *Turath al-fikr al-siyasi al-Islami* [アラビア語『イスラーム政治思想の遺産』(アラビア語原典資料集)] 京都大学 21 世紀 COE プログラム「世界を先導する総合的地域研究拠点の形成」
- 小杉泰共同監修. 2005. *Mudawwana Sahafa Suriya* [アラビア語、『シリア定期刊行物カタログ』] 京都大学 21 世紀 COE プログラム「世界を先導する総合的地域研究拠点の形成」
- 小杉泰. 2004. 「現代イスラーム法における解釈の革新—イジュティハド再考」『比較法史研究—思想・制度・社会』12: 194-216.
- 小杉泰共同監修. 2004. *Mudawwana Sahafa Lubnan* [アラビア語『レバノン定期刊行物カタログ』] 京都大学 21 世紀 COE プログラム「世界を先導する総合的地域研究拠点の形成」.
- 小杉泰共同監修. 2003. *Mudawwana Sahafa al-Jazira al-Arabiya* [アラビア語『アラビア半島諸国定期刊行物カタログ』] 京都大学 21 世紀 COE プログラム「世界を先導する総合的地域研究拠点の形成」
- 小杉泰. 2003. 「宗教と政治—宗教復興とイスラーム政治の地平から」池上良正ほか編『岩波講座・宗教 1 宗教とはなにか』岩波書店, pp.241-272.
- 小杉泰監修. 2003. *CD-ROM Al-Manar 1898-1935* [アラビア語『マナール』誌・CD-ROM 復刻版] 京都大学 21 世紀 COE プログラム「世界を先導する総合的地域研究拠点の形成」.
- 小杉泰共編. 2003. 『「イラク戦争」検証と展望』岩波書店.
- 小杉泰共編. 2003. 『現代イスラーム思想と政治運動』(イスラーム地域研究叢書: 2) 東京大学出版会.
- 小杉泰共編. 2003. 『構想—アジア新世紀へ』(アジア新世紀: 8) 岩波書店.
- 小杉泰共編. 2003. 『パワー—アジアの凝集力』(アジア新世紀: 7) 岩波書店.
- 小杉泰共編. 2003. 『メディア—言論と表象の地政学』(アジア新世紀: 6) 岩波書店.
- 小杉泰共編. 2003. 『市場—トランスナショナル化する情報と経済』(アジア新世紀: 5) 岩波書店.
- 小杉泰共編. 2003. 『幸福—変容するライフスタイル』(アジア新世紀: 4) 岩波書店.
- 小杉泰共編. 2003. 『アイデンティティ—解体と再構成』(アジア新世紀: 3) 岩波書店.
- 小杉泰共編. 2003. 『歴史—アジアの作られかた・作りかた』(アジア新世紀: 2) 岩波書店.
- 小杉泰共編. 2002. 『空間—アジアへの問い』(アジア新世紀: 1) 岩波書店.
- 小杉泰. 2002. 「イスラームとは何か—啓典のテキストと解釈の革新」『思想』941: 6-29.
- 小杉泰. 2002. 「イスラーム人生相談所—暮らしの中の法学」大塚和夫編『現代アラブ・ムスリム世界：地中海とサハラのはざままで』世界思想社, 13-45.

【口頭発表】

- 小杉泰. 2006. 「イスラーム民主主義の現在—理念と実践および 21 世紀的課題群」部門研究会 1・2 合同研究会「一神

教世界にとっての民主主義の意味」(同志社大学一神教学際研究センター, 2006 年 1 月 21 日)

- 小杉泰. 2005. 「民主化と安定に向けてーイラク戦争後の湾岸」出版記念講演会「湾岸アラブと民主主義ーイラク戦争後の眺望」(日本国際問題研究所, 2005 年 12 月 2 日)
 - 小杉泰. 2005. 「文明の相互認知と政治・経済関係ー21 世紀の日本と中東」第 9 回公開講演会「中東と日本の間」(日本中東学会, 2005 年 11 月 5 日)
-

水野一晴 (MIZUNO, Kazuharu)

【著書・論文】

- 水野一晴. (印刷中) 「サハラ以南のアフリカー多様な自然・社会とその歴史的変遷に着目した地誌ー」矢ヶ崎典隆, 加賀美雅弘, 古田悦造編 『地理学基礎シリーズ第 3 巻: 地誌学概論』朝倉書店.
 - 水野一晴. (印刷中) 「中南部アフリカの自然特性」池谷和信, 武内進一, 佐藤廉也編 『アフリカ II: バントゥアフリカ, 西アフリカ沿岸部, 島嶼部』朝倉書店.
 - 水野一晴. (印刷中) 「南部アフリカの乾燥ー半乾燥地域における自然と環境」(小特集: 沙漠誌分科会第 7 回講演会要旨集) 『沙漠研究』.
 - 水野一晴. (印刷中) 「自然特性と大地域区分」池谷和信, 佐藤廉也, 武内進一編 『アフリカ I: 総説 イスラーム、エチオピア』朝倉書店.
 - 水野一晴. (印刷中) 「氷河とお花畑の動態」池谷和信, 佐藤廉也, 武内進一編 『アフリカ I: 総説 イスラーム、エチオピア』朝倉書店.
 - 水野一晴. 2006. 「『砂漠化とその対策ー乾燥地帯の環境問題ー』(赤木祥彦著) 書評」 『第四紀研究』 45(1): 53-54.
 - 水野一晴. 2005. 『ひとりぼっちの海外調査』文芸社.
 - Mizuno, K. 2005. Studies on the Environmental Change and Human Activities in Semi-Arid Area of Africa. *African Study Monographs, Supplementary Issue No.30*.
 - 水野一晴. 2005. 『アフリカ自然学』古今書院.
 - 水野一晴. 2005. 「温暖化によるケニア山・キリマンジャロの氷河の融解と植物分布の上昇」水野一晴編『アフリカ自然学』古今書院, 76-85.
 - 水野一晴. 2005. 「近年の洪水減少でクイセブ川流域の森林が枯れていく理由」水野一晴編『アフリカ自然学』古今書院, 115-129.
 - 水野一晴. 2005. 「カメルーン北部における住居と農耕景観にかかわる地質の影響」水野一晴編『アフリカ自然学』古今書院, 158-170.
 - 水野一晴, 山縣耕太郎. 2005. 「ナミブ砂漠・クイセブ川流域の森林が枯れていく理由」水野一晴編『アフリカ自然学』古今書院, 106-114.
 - Mizuno, K. 2005. Glacial fluctuation and vegetation succession on Tyndall Glacier, Mt. Kenya. *Mountain Research and Development* 25: 68-75.
 - Mizuno, K. 2005. Vegetation succession in relation to glacial fluctuation in the high mountains of Africa. *African Study Monographs, Supplementary Issue 30*: 195-212.
 - Mizuno, K. 2005. Environmental change in relation to tree death along the Kuiseb River in the Namib Desert. *African study Monographs, Supplementary Issue 30*: 27-41.
 - Mizuno, K. and K. Yamagata. 2005. Vegetation succession and plant use in relation to environmental changes along Kuiseb River in the Namib Desert, *African Study Monographs, Supplementary Issue 30*: 3-14.
 - Yamagata, K. and K. Mizuno. 2005. Landform development along the middle course of the Kuiseb River in the Namib Desert, Namibia. *African Study Monographs, Supplementary Issue 30*: 15-25.
 - 水野一晴編. 2005. 『アフリカの半乾燥地における環境変動と人間活動に関する研究』(平成 13 年度-16 年度科学研究費補助金 基盤研究(A)(1)研究成果報告書)
 - 水野一晴. 2004. 「地球温暖化とアフリカの氷河」『同朋』 638: 8-9.
 - 水野一晴. 2004. 「地球温暖化とアフリカ」『学会会報』 844: 23-29.
 - 水野一晴・山縣耕太郎. 2004. 「ナミブ砂漠、クイセブ川流域の環境変化と植生遷移・植物利用」『アジア・アフリカ地域研究』 3: 35-50.
 - 水野一晴. 2003. 「ケニア山における氷河の後退と植生の遷移ーとくに 1997 年から 2002 年においてー」『地学雑誌』 112(4): 608-619.
 - 水野一晴. 2003. 「キリマンジャロの氷河の縮小」『地学雑誌』 112(4): 620-622.
 - 水野一晴. 2003. 「自然環境分野」日本熱帯農業学会編 『熱帯農業事典』 養賢堂, 643.
 - 水野一晴. 2003. 「生態学系用語」浮田典良編 『最新地理学用語辞典』[改訂版] 大明堂, 288.
 - 水野一晴. 2003. 「アフリカの環境変動とそこに生きる植物や人々の暮らしについてーケニア山、キリマンジャロ、ナミブ砂漠を例にー」『人文地理』 55(6): 597-598.
 - 水野一晴. 2003. 「アフリカの環境変動とそこに生きる植物や人々の暮らしについてーケニア山、キリマンジャロ、ナミブ砂漠を例にー」『地理学ウィーク 2003 資料集』 23-29.
 - Mizuno, K. 2002. Upper Limit of Plant Distribution in Response to Lithology and Rubble Size of land Surface in Tropical High Mountains of Bolivia. *Geographical Reports of Tokyo Metropolitan University* 37: 67-74.
-

- 水野一晴. 2002. 「広大なお花畑の魅力」 清水長正編 『百名山の自然学—東日本編』 古今書院, 6.
- 水野一晴. 2002. 「お花畑の誕生」 清水長正編 『百名山の自然学—西日本編』 古今書院, 33- 90.
- 水野一晴. 2002. 「ナミブ砂漠の自然」 『地理月報』 470: 4-5.

【口頭発表】

- Mizuno, K. 2006. Glacial fluctuation and vegetation succession on Tyndall Glacier, Mt. Kenya. *International Geographical Union 2006 Brisbane Conference*. (Brisbane, Australia, July 3-7, 2006).
- Mizuno, K. 2006. Environmental change in relation to tree death along the Kuiseb River in the Namib Desert. *International Geographical Union 2006 Brisbane Conference*. (Brisbane, Australia, July 3-7, 2006).
- 水野一晴. 2006. 「ナミブ砂漠クイセブ川流域における森林の変遷と樹木枯死の原因」 第 43 回日本アフリカ学会学術大会（大阪, 大阪大, 2006 年 5 月）
- 水野一晴. 2006. 「ナミブ砂漠クイセブ川流域における森林の変遷と樹木枯死の原因」 日本地理学会春季学術大会（埼玉, 埼玉大, 2006 年 3 月）
- 水野一晴. 2005. 「ナミブ砂漠クセイブ川流域の自然環境の変化と住民生活」 第 42 回日本アフリカ学会学術大会（府中, 東京外大, 2005 年 5 月）
- 水野一晴. 2004. 「ナミブ砂漠クイセブ川流域における樹木枯死と環境変動」 第 41 回日本アフリカ学会学術大会（春日井, 中部大, 2004 年 5 月）
- 水野一晴. 2004. 「ナミブ砂漠クイセブ川流域における樹木枯死と環境変動」 日本地理学会春季学術大会（東京, 東京経済大, 2004 年 3 月）
- 水野一晴. 2003. 「アフリカにおける環境変動と植生の遷移—ケニア山、キリマンジャロ、ナミブ砂漠を例に」 第 40 回日本アフリカ学会学術大会（松江, 島根大, 2003 年 5 月）
- 水野一晴. 2003. 「アフリカにおける環境変動と植生の遷移—ケニア山、キリマンジャロ、ナミブ砂漠を例に」 日本地理学会春季学術大会（東京, 東京大, 2003 年 3 月）
- 水野一晴. 2003. 「アフリカにおける近年の環境変動と植生遷移—ケニア山、キリマンジャロ、ナミブ砂漠を例に」 第 50 回日本生態学会（つくば, つくば国際会議場, 2003 年 3 月）
- 水野一晴, 山縣耕太郎. 2002. 「アフリカの半乾燥地域における環境変動と人間活動に関する研究（その 1）—ナミブ砂漠における植物分布・遷移・植物利用とその環境」 第 39 回日本アフリカ学会学術大会（仙台, 東北大, 2002 年 5 月）
- 水野一晴, 山縣耕太郎. 2002. 「アフリカの半乾燥地域における環境変動と人間活動に関する研究（その 1）—ナミブ砂漠における植物分布・遷移・植物利用とその環境」 日本地理学会春季学術大会（東京, 日本大, 2002 年 3 月）
- 水野一晴, 山縣耕太郎. 2002. 「ナミブ砂漠における植物分布と環境」 第 49 回日本生態学会（仙台, 東北大, 2002 年 3 月）

水野広祐（MIZUNO, Kosuke）

【著書・論文】

- 水野広祐. 2004. 「インドネシアの労使紛争処理制度改革: 2004 年労使紛争処理に関する法律第 2 号を中心に」 石田正美編 『対インドネシア開発援助の現状と課題』 アジア経済研究所, 257-285.
- 水野広祐. 2004. 「労働者組織の台頭と労使関係制度の展開—インドネシアにおける安定的な労使関係の成立に関する事例研究—」 佐藤百合編 『研究双書 537 インドネシアの経済再編、構造・制度・アクター』 アジア経済研究所, 387-425.
- Mizuno, Kosuke, and Siti Sugiah Machfud,. 2003. Economic Crisis and Social Safety Net Programs at an Up-land Village in West Java, In Yoshihiro Hayashi, Syafrida Manuwoto and Slamet Hartono eds., *Sustainable Agriculture in Rural Indonesia*, Yogyakarta: Gadjah Mada University Press, pp. 283-293.
- Mizuno, Kosuke. 2003. Current Situation and Challenging of Cooperatives in Indonesia: Focusing on Agricultural Cooperatives, *The Study on the Present State and Development Tasks for Agricultural Cooperatives/Similar Organization in the ASEAS Region*, Tokyo: International Developing Center of Japan, pp. 7-22.
- 水野広祐. 2003. 「インドネシアにおける協同組合運動の現状と課題 —特に農業協同組合に注目して」 『ASEAN 地域における農業協同組合等への協力について』 東京: 国際開発センター, 5-17.
- Mizuno, Kosuke. et al. 2003. Musyawarah-Mufakat (Unanimous agreement after consultation and deliberation) or Representative System?: Governance Changes in Rural West Java in Democratizing Indonesia, *Proceedings of the 2nd Seminar on Toward Harmonization between Development and Environmental Conservation in Biological Production*. JSPS-DGHE Core University Program in Applied Biosciences. The University of Tokyo.
- Mizuno, Kosuke. et al. 2003. Economic Crisis and Social Safety Net Programs at an Up-land Village in West Java, in Sustainable Agriculture, In Hayashi, Yoshihiro, Syafrida Manuwoto, and Slamet Hartono, eds., *Rural Indonesia*, Yogyakarta: Gadjah Mada University Press.
- Mizuno, Kosuke., Siti Sugiah Machfud Mugniesyah, Ageng Herianto and Hiroshi Tsujii,. 2003. Agricultural Sustainability and Economic Activities in a Highland Village in West Java,-Duration of Land Use Cycles in the Highlands- *Sustainable Agricultural Development in Southeast Asia*, Jakarta: Research Center for Regional Resources, Indonesian Institute of Science, pp. 119-140.
- 水野広祐. 2003. 「インドネシアの新労働法—2003 年労働力に関する法律第 13 号と労使紛争処理法案」 『労働法律旬報』 1557: 38-47.
- スギアー・M・ムグニシャー, 水野広祐. 2003. 「農業開発とジェンダー — 家父長主義からジェンダーメインストーリー

ミングへ』『科学』 73(7): 797-798.

- 水野広祐, スギアー・ M ・ ムギニジャー. 2003. 「経済危機と農民—危機対応と政府のセーフティネットプログラム」『科学』 73(7): 769-777.
 - 水野広祐. 2003. 「インドネシアにおける労使紛争処理制度とその紛争事例—『合議の原則』 (ムシャワラー) のもとにおける労使紛争処理」『アジア経済』 44(5/6): 167-198.
-

西渕光昭 (NISHIBUCHI, Mitsuaki)

【著書・論文】

- Gomez Gil, B. E. Llausa-Magana, R. Romero, A. Espinoza, A. Garcia-Gasca, M. Nishibuchi, H. Cabanillas-Beltran, and M. Ishibashi. (in press). Outbreak of Gastroenteritis Caused by the pandemic *Vibrio parahaemolyticus* O3:K6 in Mexico. *FEMS Microbiol. Lett.*
 - Nishibuchi, M. 2006. Miscellaneous Human Pathogens. In F. L. Thompson, B. Austin, and J. Swings eds. *The Biology of Vibrios*. ASM Press, Wasington, D.C. pp. 367-381.
 - Nishibuchi, M. 2006. Molecular identification. In F. L. Thompson, B. Austin, and J. Swings eds. *The Biology of Vibrios*. ASM Press, Wasington, D.C. pp. 44-64.
 - Vuddhakul, V., S. Soboon, W. Sunghiran, S. Kaewpiboon, A. Chowdhury, M. Ishibashi, Y. Nakaguchi, and M. Nishibuchi. (in press). Distribution of virulent and pandemic strains of *Vibrio parahaemolyticus* in three molluscan shellfish species (*Meretrix meretrix*, *Perna viridis*, and *Anadara granosa*) and their association with foodborne disease in southern Thailand. *J. Food. Prot.*
 - Pavathi, A., H.S. Kumar, A. Bhanumathi, M. Ishibashi, M. Nishibuchi, I. Karunasagar, and I. Karunasagar. 2006. Molecular characterisation of thermostable direct haemolysin-related haemolysin (TRH)-positive *Vibrio parahaemolyticus* from oysters in Mangalore, India. *Environ. Microbiol* 8(6): 997-1004.
 - Koitabashi, T., V. Vuddhakul, S. Radu, T. Morigaki, N. Asai, Y. Nakaguchi, and M. Nishibuchi. 2006. Genetic characterization of *Escherichia coli* O157:H7/- strains carrying the *stx2* gene but not producing Shiga toxin 2. *Microbiol. Immunol* 50(2): 135-148.
 - Bilung, L. M., S. Radu, A. R. Bahaman, R. A. Rahim, S. Napis, M. W. C. V. Ling, G. B. Tanil, and M. Nishibuchi. 2005. Detection of *Vibrio parahaemolyticus* in cockle (*Anadara granosa*) by PCR. *FEMS Microbiol Lett* 252(1): 85-88.
 - Nakaguchi, Y., and M. Nishibuchi. 2005. The promoter region rather than its downstream inverted repeat sequence is responsible for low-level transcription of the thermostable direct hemolysin-related hemolysin (*trh*) gene of *Vibrio parahaemolyticus*. *J. Bacteriol* 187(5): 1849-1855.
 - Wong, H. C., C. H. Chen, Y. J. Chung, S. H. Liu, T. K. Wang, C. L. Lee, C. S. Chiou, M. Nishibuchi, and B. K. Lee. 2005. Characterization of new O3:K6 strains and phylogenetically related strains of *Vibrio parahaemolyticus* isolated in Taiwan and other countries. *J. Appl. Microbiol.* 98(3): 572-80.
 - Martinez-Urtaza J, L. Simental, D. Velasco, A. Depaola, M. Ishibashi, Y. Nakaguchi, M. Nishibuchi, D. Carrera-Flores, C. Rey-Alvarez, and A. Pousa. 2005. Pandemic *Vibrio parahaemolyticus* O3:K6, Europe. *Emerg. Infect. Dis.* 11(8): 13109-1320.
 - Tanil, G. B., S. Radu, M. Nishibuchi, R. A. Rahim, S. Napis, L. Maurice, and J. W. Gunsalam. 2005. Characterization of *Vibrio parahaemolyticus* isolates from coastal seawater in peninsular Malaysia. *Southeast Asian J. Trop. Med.* 36(4): 940-945.
 - Gopal, S., S. K. Otta, S. Kumar, I. Karunasagar, M. Nishibuchi and I. Karunasagar. 2005. The occurrence of *Vibrio* species in tropical shrimp culture environments; implications for food safety. *Int. J. Food Microbiol.* 102: 151-159.
 - Benjamin P. G., J. W. Gunsalam, S. Radu, S. Napis, F. A. Bakar, M. Beon, A. Benjamin, C. W. Dumba, S. Sengol, F. Mansur, R. Jeffrey, Y. Nakaguchi, and M. Nishibuchi. 2005. Factors associated with emergence and spread of cholera epidemics and its control in Sarawak, Malaysia between 1994 and 2003. *Southeast Asian Studies.* 43 (2): 109-140.
 - Nishibuchi, M., and A. DePaola. 2005. *Vibrio* species. In P. M. Fratamico, A. K. Bhunia, and J. L. Smith eds., *Food-borne Pathogens: Microbiology and Molecular Biology*. Caister Academic Press, Norfolk, UK. pp. 251-271.
 - Chen, C.H., T. Shimada, N. Elhadi, S. Radu, and M. Nishibuchi. 2004. Phenotypic and genotypic characteristics of *ctx+* strains of *Vibrio cholerae* isolated from seafood in Malaysia and the significance of the strains in epidemiology. *Appl. Environ. Microbiol.* 70(4): 1964-1972.
 - Elhadi, N., S. Radu, C. H. Chen, and M. Nishibuchi. 2004. Prevalence of potentially pathogenic *Vibrio* species in the seafood marketed in Malaysia. *J. Food Prot.* 67(7): 1469-1475.
 - Chowdhury, A., M. Ishibashi, V. D. Thiem, D. T. N. Tuyet, T. V. Tung, B. T. Chien, L. von Seidlein, D. G. Canh, J. Clemens, D. D. Trach, and M. Nishibuchi. 2004. Emergence and serovar transition of *Vibrio parahaemolyticus* pandemic strains isolated during a diarrhea outbreak in Vietnam between 1997 and 1999. *Microbiol. Immunol* 48(4): 319-327.
 - Nakaguchi, Y., T. Ishizuka, S. Ohnaka, T. Hayashi, K. Yasukawa, T. Ishiguro, and M. Nishibuchi. 2004. Rapid and specific detection of *tdh*, *trh1*, and *trh2* mRNA of *Vibrio parahaemolyticus* using transcription-reverse transcription concerted (TRC) reaction with an automated system. *J. Clin. Microbiol.* 42(9): 4284-4292.
 - Martinez-Urtaza J, A. Lozano-Leon, A. Depaola, M. Ishibashi, K. Shimada, M. Nishibuchi, and E. Liebana. 2004. Characterization of pathogenic *Vibrio parahaemolyticus* isolates from clinical sources in Spain and comparison with Asian and North American pandemic isolates. *J. Clin Microbiol.* 42(10): 4672-4678.
 - Islam, M. S., R. Tasmin, S. I. Khan, H. B. M. Bakht, Z. H. Mahmood, M. Z. Rahman, N. A. Bhuiyan, M. Nishibuchi, G. B. Nair, R. B. Sack, A. Huq, R. R. Colwell, and D. A. Sack. 2004. Pandemic strains of O3:K6 *Vibrio parahaemolyticus* in the aquatic
-

environment of Bangladesh. *Can. J. Microbiol.* 50(10): 827-834.

- Masuda, N., K. Yasukawa, Y. Isawa, R. Horie, J. Saito, T. Ishiguro, Y. Nakaguchi, M. Nishibuchi, and T. Hayashi. 2004. Rapid detection of tdh and trh mRNAs of *Vibrio parahaemolyticus* by the transcription-reverse transcription concerted (TRC) method. *J. Biosci. Bioeng.* 98(4): 236-243.
- Nakaguchi, Y., J. Okuda, T. Iida, and M. Nishibuchi. 2003. The urease gene cluster of *Vibrio parahaemolyticus* does not influence the expression of the thermostable direct hemolysin (TDH) gene or the TDH-related hemolysin gene. *Microbiol. Immunol.* 47(3): 233-239.
- Laohaprertthisan, V., A. Chowdhury, U. Kongmuang, S. Kalnauwakul, M. Ishibashi, C. Matsumoto, and M. Nishibuchi. 2003. Prevalence and serodiversity of the pandemic clone among the clinical strains of *Vibrio parahaemolyticus* isolated in southern Thailand. *Epidemiol. Infect.* 130: 1-12.
- Qadri, F., M. S. Alam, M. Nishibuchi, T. Rahman, N. H. Alam, J. Chisti, S. Kondo, J. Sugiyama, N. A. Bhuiyan, M. M. Mathan, D. A. Sack, and G. B. Nair. 2003. Adaptive and inflammatory immune responses in patients infected with strains of *Vibrio parahaemolyticus*. *J. Infect. Dis.* 187: 1085-1096.
- Dileep, V., H.S. Kumar, Y. Kumar, M. Nishibuchi, Indrani Karunasagar, Iddya Karunasagar. 2003. Application of polymerase chain reaction for detection of *Vibrio parahaemolyticus* associated with tropical seafoods and coastal environment. *Lett. Appl. Microbiol.* 36: 423-427.
- Hara-Kudo Y, K. Sugiyama, M. Nishibuchi, A. Chowdhury, J. Yatsuyanagi, Y. Ohtomo, A. Saito, H. Nagano, T. Nishina, H. Nakagawa, H. Konuma, M. Miyahara, and S. Kumagai. 2003. Prevalence of pandemic thermostable direct hemolysin-producing *Vibrio parahaemolyticus* O3:K6 in seafood and the coastal environment in Japan. *Appl. Environ. Microbiol.* 69: 3883-3891.
- Lesley, M., R. Son, A. Kasing, A. R. Raha, C. M. V. L. Wong, C. Y. Kqueen, and M. Nishibuchi. 2003. Isolation and molecular characterization of *Listeria monocytogenes* and *Listeria innocua* from poultry meat. 2003. *ASEAN Food Journal* 12: 89-102.
- Nishibuchi, M. 2003. Gene sequence analysis of seafood-borne *Vibrio* pathogens and its application. In M. Fingerman and R. Nagabhushanam ed., *Recent Advances in Marine Biotechnology Vol. 10 Molecular Genetics of Marine Organisms*. Science Publishers, Inc., Enfield, New Hampshire, and Plymouth, pp.33-85.
- Nishibuchi, M. 2003. *Vibrio parahaemolyticus*, In Bier, J., and M. D. Miliotis eds., *International Handbook of Foodborne Pathogens*. New York: Marcel Dekker Inc., pp. 237-252.
- Nishibuchi, M. 2004. Infection by a new clone of *Vibrio parahaemolyticus*: an infectious disease that emerged in Asia and spread to a world wide pandemic. In Furukawa, H., M. Nishibuchi, Y. Kono, and Y. Kaida eds., *Ecological Destruction, Health, and Development: Advancing Asian Paradigms*. Kyoto: Kyoto University Press / Trans Pacific Press, pp. 251-263.
- Bhuiyan, N. A., M. Ansaruzzaman, M. Kamaruzzaman, K. Alam, N. R. Chowdhury, M. Nishibuchi, S. M. Faruque, D. A. Sack, Y. Takeda, and G. B. Nair. 2002. Prevalence of the pandemic genotype of *Vibrio parahaemolyticus* in Dhaka, Bangladesh and significance of its distribution across different serotypes. *J. Clin. Microbiol.* 40: 284-286.
- Karasawa, T., H. Ito, T. Tsukamoto, S. Yamasaki, H. Kurazono, S. M. Faruque, G. B. Nair, M. Nishibuchi, and Y. Takeda. 2002. Cloning and characterization of genes encoding homologues of the B subunit of cholera toxin and the *Escherichia coli* heat-labile enterotoxin from clinical isolates of *Citrobacter freundii* and *E. coli*. *Infect. Immun.* 70: 7153-7155.
- Salleh, N. A., G. Rusul, Z. Hassan, A. Reezal, S. H. Isa, M. Nishibuchi, and S. Radu. 2003. Incidence of *Salmonella* spp. in raw vegetables in Selangor, Malaysia. *Food Control* 14: 475-479.
- Ishiguro, T., J. Saito, R. Horie, T. Hayashi, T. Ishizuka, S. Tsuchiya, K. Yasukawa, T. Kido, Y. Nakaguchi, M. Nishibuchi, and K. Ueda. 2002. Intercalation activating fluorescence DNA probe and its application to homogenous quantification of a target sequence by isothermal sequence amplification in a closed vessel. *Anal. Biochem.* 314: 77-86.
- Okuda, J., T. Nakai, P. S. Chang, T. Oh, T. Nishino, T. Koitabashi, and M. Nishibuchi. 2002. The toxR gene of *Vibrio anguillarum*: not a virulence regulator but a good tool for diagnosis. *Fisheries Science* 68 (Suppl.): 1109-1112.
- Tuyet, D. T., T. D. Thiem, L. von Seidle, A. Chowdhury, E. Park, D. G. Canh, B. T. Chien, T. V. Tung, A. Naficy, M. R. Rao, M. Ali, H. Lee, T. H. Sy, M. Nishibuchi, J. Clemens, D. D. Trach. 2002. Clinical, epidemiologic, and socioeconomic analysis of an outbreak of *Vibrio parahaemolyticus* in Khanh Hoa province, Vietnam. *J. Infect. Dis.* 186: 1615-1620.

【口頭発表】

- Nishioka, T., Mashimo-Matsumoto, C., Chowdhury, A., Kamruzzaman, M., Nakaguchi, Y., and Nishibuchi, M. 2005. Phylogeny and a characteristic of the pandemic strains of *Vibrio parahaemolyticus*. *38th Joint Conference on Cholerae and Other Bacterial Enteric Infections Panel*. (Boston, MA, USA. November 30 -December 2, 2005.)
- Koitabashi, T., and Nishibuchi, M. 2005. Isolation and characterization of Shiga toxin-producing *Escherichia coli* including serotype O157 from the meats marketed in Qingdao, China. *Intl. Conference Food Sci. Technol. VI*. (Guangzhou, China. November 7-9, 2005.)
- Matsuda, F., Ishimura, S., Taichi, H., and Nishibuchi, M. 2005. Food safety and enteric pathogens in the environment: an important and complicated issue in Asia. *7th Kyoto Univ. Intl. Symposium, 2005*. (Bangkok, Thailand. November 23-24, 2005.)
- Nishibuchi, M. 2005. Food safety and enteric pathogens in the environment: an important and complicated issue in Asia. *7th Kyoto Univ. Intl. Symposium, 2005*. (Bangkok, Thailand. November 23-24, 2005.)
- 角泰人, 西沢光昭, 中口義次, 西山利正, 石田高明. 2005. 「近畿熱帯医学会のこれまでの歩みと今後の展望」第46回日本熱帯医学会総会 (京都, 2005年10月14日-15日)

- 論西岡輔, 颯田葉子, 阿部健一, 中口義次, 西渕光昭. 2005. 「染色体別系統解析に基づく腸炎ビブリオ世界的流行株および関連菌株の系譜」第 39 回腸炎ビブリオシンポジウム (新潟市, 2005 年 10 月 6 日-7 日)
- Kamruzzaman, M., 真下 (松本) 千穂, Chowdhury, A., 中口義次, 西渕光昭. 2005. 「世界的大流行をおこしている腸炎ビブリオ菌株に特有の性質の解析」第 39 回腸炎ビブリオシンポジウム (新潟市, 2005 年 10 月 6 日-7 日)
- Bhoopong, P., Palittapongarnpim, P., Kamruzzaman, M., 石橋正憲, 中口義次, 西渕光昭, Varaporn Vuddhakul. 2005. 「タイ南部で同一下痢患者から分離された腸炎ビブリオ菌株の多様性」第 39 回腸炎ビブリオシンポジウム (新潟市, 2005 年 10 月 6 日-7 日)
- 西岡輔, 中口義次, 颯田葉子, 阿部健一, 西渕光昭. 2005. 「腸炎ビブリオ世界的大流行株の染色体別系統解析」第 58 回日本細菌学会関西支部総会 (神戸市, 2005 年 10 月 29 日)
- Kamruzzaman, M., Mashimo-Matsumoto, C., Chowdhury, A., and Nishibuchi, M. 2005. Analysis of the Phenotypes Encoded in the 23-kbp Nucleotide Sequence Unique to the Pandemic Strains of *Vibrio parahaemolyticus*. 第 58 回日本細菌学会関西支部総会 (神戸市, 2005 年 10 月 29 日)
- 西岡輔, 中口義次, 西渕光昭. 2005. 「複数の遺伝子座に着目した系統解析法による新型腸炎ビブリオ菌株および関連菌株の比較解析」第 78 回日本細菌学会総会 (東京都, 2005 年 4 月 4 日-6 日)
- Radu, S., L. L. Maurice, J. W. Gunsalam, T. Zainazor, G. T. Bulan, N. E. Hussein, M. Jaafar, C. Y. Kqueen, Marlina, F. Kasuga, I. Tsukamoto, and M. Nishibuchi. 2004. Study on *Vibrio parahaemolyticus* in Malaysian and Indonesian environments. *40th Anniversary United States-Japan Cooperative Medical Science Program*. (Kyoto, Japan. December 7-10, 2004.)
- Bhoopong, P., S. Kaephoboon, Y. Nakaguchi, M. Nishibuchi, M. Ishibashi, P. Palitapongarnpin, and V. Vuddhakul. 2004. Genotypic and serological diversities among *Vibrio parahaemolyticus* strains isolated from individual patients in southern Thailand. *40th Anniversary United States-Japan Cooperative Medical Science Program*. (Kyoto, Japan. December 7-10, 2004.)
- Nakaguchi, Y., J. Okuda, T. Iida, N. Masuda, J. Saitoh, T. Hayashi, K. Yasukawa, and M. Nishibuchi. 2004. Study on the transcriptional level of the thermostable direct hemolysin-related hemolysin gene (*trh*) of *Vibrio parahaemolyticus*. *40th Anniversary United States-Japan Cooperative Medical Science Program*. (Kyoto, Japan. December 7-10, 2004.)
- Jurin, W. G., Tuan, Z. T. C., Son Radu, Yuli, H., Patrick, G. B., Shel, H. Y., Nishibuchi, M., Kasuga, F. and Jamal, K. 2004. Phenotypic characterization of *Vibrio parahaemolyticus* isolated from black Tiger prawn (*Penaeus monodon*) in processing plant. *26th Symposium of the Malaysian Society for Microbiology*. (Langkawi Lagoon Resort, Malaysia. 25-28 November 2004.)
- Tuan, Z. T. C., Jurin, W. G., Son Radu, Jamal, K., Nishibuchi, M. and Kasuga, F. 2004. Identification of *Vibrio parahaemolyticus* by using PCR-based method and CHROMagar™ detection of virulence gene *tdh* and *trh* in cultured black Tiger prawn (*Penaeus monodon*) in Malacca, West Malaysia. *26th Symposium of the Malaysian Society for Microbiology*. (Langkawi Lagoon Resort, Malaysia 25-28 November 2004.)
- Lesley, M., Son Radu, Rani, A. R., Raha, A. R., Suhaimi, N., Michael, W. C. V. L., Yousef, A. H. and Nishibuchi, M. 2004. Detection of *Vibrio parahaemolyticus* in cockle (*Anadara granosa*) from Tanjong Karang, Kuala Selangor, Malaysia. *26th Symposium of the Malaysian Society for Microbiology*. (Langkawi Lagoon Resort, Malaysia. 25-28 November 2004.)
- Zulkifli, Y., Son Radu, Michael, W., Ooi, W. L., Nishibuchi, M. and Marlina. Genotypic and phenotypic characterization of *Vibrio parahaemolyticus* from cockles in Padang, Indonesia. *26th Symposium of the Malaysian Society for Microbiology*, (Langkawi Lagoon Resort, Malaysia. 25-28 November 2004.)
- Langkawi Lagoon Resort, Malaysia. Maslihana, J., Son Radu, Napis, S., Sahilah, A. M., Marlina, Cheah, Y. K. and Nishibuchi, M. 2004. Isolation and detection of *toxR* in *Vibrio parahaemolyticus* from *Corbicula molitana*. *26th Symposium of the Malaysian Society for Microbiology*. (Langkawi Lagoon Resort, Malaysia. 25-28 November 2004.)
- 西岡輔, 中口義次, 西渕光昭. 2004. 「複数の遺伝子座に着目した系統解析法による新型腸炎ビブリオ菌株および関連菌株の比較解析」第 38 回腸炎ビブリオシンポジウム (岡山市, 2004 年 11 月 18 日-19 日)
- 西岡輔, 中口義次, 西渕光昭. 2004. 「複数の遺伝子座に着目した系統解析法による新型腸炎ビブリオ菌株および関連菌株の比較解析」第 57 回日本細菌学会関西支部総会 (京都市, 2004 年 10 月 30 日)
- Nishibuchi, M. 2004. Results of molecular epidemiological analysis of seafood-borne pathogens suggest the flow of the pathogens along with the people and food across international borders in Asia. *Jpn. Soc. For the Promotion of Science Core Univ. Program Workshop*. (Kyoto, Japan. October 6-8, 2004.)
- Endang, P., Yuherman, Sofrida, P. K., Riyani, P. W., Rahmalia, F. A., Jasmi, J., Son Radu and Nishibuchi, M. 2004. Application of plasmid DNA and antimicrobial drug resistance of *Vibrio parahaemolyticus* isolated from environmental sea water from Malacca, Malaysia. *The 6th Asian Symposium on Academic Activities for Waste Management*. (Hotel Bumi Minang, Padang, West Sumatera, Indonesia. 11-14 September 2004.)
- 益田昇桂, 保川清, 林俊典, 中口義次, 西渕光昭. 2004. 「迅速簡易な TRC 法による腸管出血性大腸菌の志賀毒素群遺伝子 mRNA のリアルタイムモニタリング」第 51 回日本臨床検査医学会総会 (2004 年 9 月 3-5 日)
- 植山徹, 小川正之, 石橋正憲, 中口義次, 西渕光昭. 2004. 「腸炎ビブリオ感染症の国際的流行に関する遡及的解析」第 77 回日本細菌学会総会 (大阪市, 2004 年 4 月 1 日-3 日)
- チョードリアシュラフザーマン, 真下 (松本) 千穂, 西渕光昭. 2004. 「世界的大流行をおこしている腸炎ビブリオ新型クローンに特異的な DNA 塩基配列の解析」第 77 回日本細菌学会総会 (大阪市, 2004 年 4 月 1 日-3 日)
- 中口義次, 西渕光昭. 2004. 「腸炎ビブリオの患者・環境分離菌株中の *tdh*, *trh* 遺伝子転写産物の TRC 法による迅速かつ定量的検出」第 77 回日本細菌学会総会 (大阪市, 2004 年 4 月 1 日-3 日)
- 小坂橋努, 森垣忠啓, 西渕光昭. 2004. 「*stx2* 遺伝子陽性ながら *Stx2* 非産生に関与する変異領域をもつ大腸菌 O157 のア

ジアにおける分布」第77回日本細菌学会総会（大阪市, 2004年4月1日-3日）

- Nishibuchi, M. 2004. Pandemic spread of *Vibrio parahaemolyticus* infection and risk assessment of the molluscan shellfish harboring the pandemic strains. *4th Asian Food and Nutrition Safety Conference*. (Bali, Indonesia. March 2-5, 2004.)
- 益田昇桂, 保川清, 林俊典, 中口義次, 西渕光昭. 2004. 「迅速簡易な TRC 法による腸管出血性大腸菌の志賀毒素群遺伝子 mRNA のリアルタイムモニタリング」 (つくば市, 2004年1月24-25日)
- Nishibuchi, M. 2003. Studies on pandemic spread of *Vibrio parahaemolyticus* infections: What are known and where to go? *8th International Conference on Emerging Infectious Diseases in the Pacific Rim*. (Dhaka, Bangladesh. December 11-12, 2003.)
- Koitabashi, T., V. Vuddhakul, T. Morigaki, N. Asai, and M. Nishibuchi. 2003. stx2?positive but Stx2-negative *Escherichia coli* O157:H7/- strains isolated in Thailand and Japan. *10th Asian Conference on Diarrheal Diseases and Nutrition*. (Dhaka, Bangladesh. December 7-9, 2003.)
- Chowdhury, A., M. Ishibashi, V. D. Thiem, D. T. N. Tuyet, T. L. von Seidlein, D. G. Canh, J. D. Clemens, D. D. Trach, and M. Nishibuchi. 2003. Serotype transition of pandemic strains of *Vibrio parahaemolyticus* in Vietnam in 1997-1999. *10th Asian Conference on Diarrheal Diseases and Nutrition*. (Dhaka, Bangladesh. December 7-9, 2003.)
- Islam, M. S., R. Tasmin, S. I. Khan, H. B. M. Bakht, Z. M. Mahmud, M. Z. Rahman, N. A. Bhuiyan, M. Nishibuchi, G. B. Nair, R. B. Sack, A. Huq, R. R. Colwell, and D. A. Sack. 2003. Pandemic strains of O3:K6 *Vibrio parahaemolyticus* in the aquatic environment of Bangladesh: implications for disease transmission. *10th Asian Conference on Diarrheal Diseases and Nutrition*. (Dhaka, Bangladesh. December 7-9, 2003.)
- 植山徹, 小川正之, 石橋正憲, 中口義次, Savithri D. Puthucheary, 西渕光昭. 2003. 「腸炎ビブリオ感染症の国際的流行に関する研究：分離菌の遡及的解析」第56回日本細菌学会関西支部総会（奈良市, 2003年11月1日）
- Yamamoto, S., F. Kasuga, A. Yamamoto, J. Iwahori, V. Vuddhakul, W. Iaroenjitrakul, S. Kalnawakul, A. Chowdhury, M. Shigematsu, K. Osaka, H. Toyofuku, and M. Nishibuchi. 2003. Quantitative risk assessment of *Vibrio parahaemolyticus* in bloody clams in Southern Thailand. *United States-Japan Cooperative Program on Development and Utilization of Natural Resources, Joint Panel on Toxic Microorganisms*. (Tokyo, November 10-15, 2003.)
- 植山徹, 小川正之, 石橋正憲, 中口義次, Savithri D. Puthucheary, 西渕光昭. 2003. 「腸炎ビブリオ感染症の国際的流行に関する研究：分離菌の遡及的解析」第37回腸炎ビブリオシンポジウム（弘前市, 2003年11月6日-7日）
- 益田昇桂, 保川清, 伊澤祐一, 林俊典, 中口義次, 西渕光昭. 2003. 「迅速・簡易な TRC 法による腸炎ビブリオ菌耐熱性溶血毒 mRNA のリアルタイム検出」第37回腸炎ビブリオシンポジウム（弘前市, 2003年11月6日-7日）西渕光昭. 2003. 「アジアの病原性ビブリオ見聞録：魚介類汚染と感染症を考える」第37回腸炎ビブリオシンポジウム（弘前市, 2003年11月6日-7日）
- 益田昇桂, 保川清, 伊澤祐一, 林俊典, 中口義次, 西渕光昭. 2003. 「TRC 法による腸炎ビブリオ菌耐熱性溶血毒 mRNA のリアルタイム検出」（広島市, 2003年10月29-31日）
- Koitabashi, T., V. Vuddhakul, T. Morigaki, N. Asai, and M. Nishibuchi. 2003. Characterization of *Escherichia coli* O157:H7/- strains that carry the stx2 gene but do not produce Stx2. *38th Joint Conference on Cholerae and Other Bacterial Enteric Infections Panel*. (Bethesda, MD, USA. October 8-10, 2003.)
- 西渕光昭. 2003. 「腸炎ビブリオ感染症：アジアで重要な海産物由来のビブリオ感染症」第24回日本食品微生物学会学術総会（岡山市, 2003年10月2-3日）
- F. Kasuga, A. Yamamoto, J. Iwahori, V. Vuddhakul, W. Iaroenjitrakul, S. Kalnawakul, A. Chowdhury, M. Shigematsu, K. Osaka, H. Toyofuku, S. Yamamoto, and M. Nishibuchi. 2003. Quantitative risk assessment of *Vibrio parahaemolyticus* in bloody clams in Southern Thailand. *90th Ann. Meeting Int. Assoc. Food Prot.* (New Orleans, Louisiana, USA. August 10-13, 2003.)
- 小坂橋努, V. Vuddhakul, 浅井紀夫, 森垣忠啓, 西渕光昭. 2003. 「stx2 陽性でありながら志賀毒素を産生しない腸管出血性大腸菌 O157:H7」第7回腸管出血性大腸菌感染症シンポジウム（奈良市, 2003年6月27-28日）
- 中口義次, 西渕光昭. 2003. 「腸炎ビブリオ trh 遺伝子の転写・発現に影響を及ぼす領域の検討」第76回日本細菌学会総会（熊本市, 2003年4月1日-3日）
- 小坂橋努, 森垣忠啓, 西渕光昭. 2003. 「タイ南部で分離した大腸菌 O157:H7 (Thai-12 株) が志賀毒素を産生できない原因」第76回日本細菌学会総会（熊本市, 2003年4月1日-3日）
- Qadri, F., M. S. Alam, M. Nishibuchi, T. Rahman, N. H. Alam, J. Chisti, S. Kondo, J. Sugiyama, N. A. Bhuiyan, M. Mathan, D. A. Sack, and G. B. Nair. 2002. The adaptive and inflammatory immune responses in patients infected with strains of *Vibrio parahaemolyticus*. *37th Joint Conference on Cholerae and Other Bacterial Enteric Infections Panel*. (沖縄県宜野湾市, 2002年12月17日-12月19日)
- Vuddhakul, V., W. Iaroenjitrakul, S. Kalnawakul, S. Yamamoto, A. Chowdhury, and M. Nishibuchi. 2002. Prevalence of infection by the pandemic clone of *Vibrio parahaemolyticus* and its association with the environmental strains in southern Thailand. *37th Joint Conference on Cholerae and Other Bacterial Enteric Infections Panel*. (沖縄県宜野湾市, 2002年12月17日-12月19日)
- Sunghirum, W., S. Sobun, P. Bhoopong, M. Nishibuchi, and V. Vuddhakul. 2002. Prevalence of infection by *Vibrio cholerae* O1 Inaba in southern Thailand in the 2001-2002 period. *37th Joint Conference on Cholerae and Other Bacterial Enteric Infections Panel*. (沖縄県宜野湾市, 2002年12月17日-12月19日)
- Sunghirum, W., A. Yongchuyos, M. Nishibuchi, and V. Vuddhakul. 2002. Characterization of *V. cholerae* non-O1/non-O139 strains isolated from clinical and environmental specimens in southern Thailand. *37th Joint Conference on Cholerae and Other Bacterial Enteric Infections Panel*. (沖縄県宜野湾市, 2002年12月17日-12月19日)

- Radu, S., C. Y. Kqueen, L. Maurice, V. Vadivelu, G. B. Tanil, N. E. Hussein, Yuherman, C. H. Chen, and M. Nishibuchi. 2002. Detection of *Vibrio cholerae* and other *Vibrio* spp. from environmental sources in Malaysia. *37th Joint Conference on Cholerae and Other Bacterial Enteric Infections Panel*. (沖縄県宜野湾市 2002 年 12 月 17 日-12 月 19 日)
- Nakaguchi, Y., and M. Nishibuchi. 2002. Identification of the transcriptional start site and analysis of the promoter region of the *Vibrio parahaemolyticus* *trh* genes. *37th Joint Conference on Cholerae and Other Bacterial Enteric Infections Panel*. (沖縄県宜野湾市, 2002 年 12 月 17 日-12 月 19 日)
- Yamamoto, A., J. Iwahori, M. Shigematsu, K. Osaka, H. Toyofuku, F. Kasuga, and M. Nishibuchi. 2002. Quantitative modeling for risk assessment of *Vibrio parahaemolyticus* in southern Thailand. *37th Joint Conference on Cholerae and Other Bacterial Enteric Infections Panel*. (沖縄県宜野湾市, 2002 年 12 月 17 日-12 月 19 日)
- Koitabashi, T., V. Vuddhakul, N. Asai, T. Morigaki, and M. Nishibuchi. 2002. Analysis of the *Stx2*-non-producing *Escherichia coli* O157:H7 strains isolated in Thailand. *37th Joint Conference on Cholerae and Other Bacterial Enteric Infections Panel*. (沖縄県宜野湾市, 2002 年 12 月 17 日-12 月 19 日)
- 工藤由起子, 杉山寛治, 西渕光昭, Ashrafuzzaman Chowdhury, 大友良光, 八柳潤, 中川弘, 仁科徳啓, 斎藤章暢, 長野英俊, 宮原美知子, 小沼博隆, 熊谷進. 2002. 「国内産魚介類における TDH 産生性腸炎ビブリオ菌数の定量と分離株の解析」第 36 回腸炎ビブリオシンポジウム (京都市, 2002 年 12 月 5 日-12 月 6 日)
- 中口義次, 大仲悟, 林俊典, 西渕光昭. 2002. 「腸炎ビブリオの患者・環境分離株中の *tdh*, *trh* 遺伝子転写産物の迅速かつ定量的検出法 (TRC 法) の評価」第 36 回腸炎ビブリオシンポジウム (京都市, 2002 年 12 月 5 日-12 月 6 日)
- 小坂橋努, 森垣忠啓, 西渕光昭. 2002. 「志賀毒素非産生性大腸菌 O157:H7 における Q タンパク質の毒素遺伝子への影響」第 55 回日本細菌学会関西支部総会 (吹田市, 2002 年 11 月 9 日)
- 岩堀淳一郎, 山本昭夫, Varaporn Vuddhakul, Sineenart Kalnawakul, Ashrafuzzaman Chowdhury, 重松美加, 小坂健, 豊福肇, 春日文子, 山本茂貴, 西渕光昭. 2002. 「タイ南部における赤貝の摂食に伴う腸炎ビブリオ感染の定量的リスクアセスメント: 微生物学的リスクアセスメントにおける国際協力」2002 年度日本リスク研究学会第 15 回研究発表会 (京都, 2002 年 11 月 22-23 日)
- Nishibuchi, M. 2002. Molecular genetic study on thermostable direct hemolysin (TDH) and TDH-related hemolysin of *Vibrio parahaemolyticus*. *84th General Meeting of Korean Society for Microbiology*. (韓国, Cheongju, 2002 年 10 月 22 日-10 月 23 日)
- 西渕光昭. 2002. 「腸炎ビブリオ感染症の世界的大流行: 遺伝子を標的とした検査と解析」第 9 回日本遺伝子診療学会大会 (京都, 2002 年 10 月 18 日-20 日)

太田 至 (OHTA, Itaru)

【著書・論文】

- Ohta, I. (in press) Marriage and Bridewealth Negotiations among the Turkana in Northwestern Kenya. *African Study Monographs, Supplementary Issue 36*.
- Ohta, I. (in press) English-Turkana Texts of a Case of Bridewealth Negotiations in Northwestern Kenya. *African Study Monographs, Supplementary Issue 36*.
- Ohta, I. and Y. D. Gebre, eds. 2005. *Displacement Risks in Africa: Refugees, Resettlers and Their Host Population*. Kyoto: Kyoto University Press. 394pp.
- Gebre, Y. D., and I. Ohta. 2005. Introduction: Displacement in Africa - Conceptual and practical concerns. In Ohta, I. and Y. D. Gebre, eds., *Displacement Risks in Africa*, Kyoto: Kyoto University Press. pp.1-14.
- Ohta, Itaru. 2005. Multiple Socio-Economic Relationships Improvised between the Turkana and Refugees in Kakuma Area, Northwestern Kenya. In Ohta, I. and Y. D. Gebre, eds., *Displacement Risks in Africa*, Kyoto: Kyoto University Press, pp.315-337.
- 太田至, 庄司航. 2005. 「ケニアにおける学術調査事情—ナイロビ大学アフリカ研究所と日本学術振興会ナイロビ研究連絡センターの役割を中心に—」石井博編『海外学術調査・フィールドワークの手法に関する総合調査研究』(平成 13-16 年度科学研究費補助金研究成果報告書・東京外国語大学) 353-368.
- Ohta, Itaru. 2005. Coexisting with Cultural 'Others': Social Relationships between the Turkana and the refugees at Kakuma, Northwest Kenya. In Ikeya, K. and E. Fratkin, eds. "Pastoralists and Their Neighbors in Asia and Africa", *Senri Ethnological Studies* 69: 227-239.
- Tachiiri, K. and I. Ohta, 2004. Assessing impact of a large-sized refugee camp on the local vegetation condition using remote sensing: A case study of Kakuma, Kenya. *Proceedings of the 2004 IEEE International Geoscience and Remote Sensing Symposium, III*. (Geoscience and Remote Sensing Society, Anchorage, Sept. 20-24, 2004), 1547-1550.
- 太田至. 2004. 「家畜という資源: 等価性と外部性を考える端緒として」『資源の分配と共有に関する人類学的統合領域の構築—象徴系と生態系の連関をととして (中間成果論集)』(文部科学省科学研究費補助金・特定領域研究報告書『資源人類学』総括班) .324-328.
- 太田至. 2004. 「アフリカの『難民問題』を考える: 国際シンポジウムの報告」『JANES ニュースレター』12: 35-39.
- 太田至. 2004. 「伊谷純一郎『トゥルカナの自然誌』」『文化人類学文献事典』弘文堂, pp.319.
- 太田至. 2004. 「伊谷純一郎『大旱魃—トゥルカナ日記—』」『文化人類学文献事典』弘文堂, pp.320.
- 太田至. 2004. 「伊谷純一郎『森林彷徨』」『文化人類学文献事典』弘文堂, pp.320.
- 太田至. 2004. 「コリン・ターンプル『森の民』」『文化人類学文献事典』弘文堂, pp.511.
- 太田至. 2004. 「コリン・ターンプル『プリンジ・ヌガクー食うものをくれ—』」『文化人類学文献事典』弘文堂, pp.512.

- 太田至. 2004. 「コリン・ターンプル『アフリカ人間誌』」『文化人類学文献事典』弘文堂, pp.512.
- 太田至. 2004. 「コリン・ターンプル『豚と精霊ーライフ・サイクルの人類学ー』」『文化人類学文献事典』弘文堂, pp.513.
- 太田至. 2004. 「トゥルカナ社会における婚資の交渉」田中二郎・佐藤俊・菅原和孝・太田至編『遊動民（ノマッド）ーアフリカの原野に生きる』昭和堂, 363-392.
- 太田至. 2004. 「牧畜社会研究のおもしろさ」田中二郎・佐藤俊・菅原和孝・太田至編『遊動民（ノマッド）ーアフリカの原野に生きる』昭和堂, 271-288.
- 太田至. 2003. 「『難民問題』に対する総合的アプローチの可能性：国際シンポジウム『アフリカの「難民問題」を考える』」『アフリカ研究』63：37-41.
- Ohta, Itaru. 2002. How the Turkana Coped with the Emergence of a Refugee Camp in Kakuma, Northwestern Kenya. *Paper presented at a symposium, "Socio-Economic Interactions between Pastoralists and Other Groups. Inter-Congress of the International Union of Anthropological and Ethnological Sciences (IUAES) 2002.*(Tokyo, September 22-27, 2002).
- Ohta, Itaru. 2002. Multiple Socio-Economic Relationships Improvised between the Turkana and Refugees in Kakuma area, Northwestern Kenya. *Paper presented at a symposium, "Multidimensionality of Displacement Risks in Africa.* (Kyoto, 2-3 November 2002).
- 太田至. 2002. 「家畜の個性性と商品化：東アフリカの牧畜民は資本主義者か」『アジア・アフリカ地域研究』2: 306-317.

【口頭発表】

- Tachiiri, K. and I. Ohta, 2004. Assessing impact of a large-sized refugee camp on the local vegetation condition using remote sensing: A case study of Kakuma, Kenya. *IEEE International Geoscience and Remote Sensing Symposium.* (Geoscience and Remote Sensing Society, Anchorage, Sept. 20-24, 2004)
- Ohta, Itaru. 2002. Multiple Socio-Economic Relationships Improvised between the Turkana and Refugees in Kakuma area, Northwestern Kenya. *The symposium, "Multidimensionality of Displacement Risks in Africa.* (Kyoto, 2-3 November 2002).
- Ohta, Itaru. 2002. How the Turkana Coped with the Emergence of a Refugee Camp in Kakuma, Northwestern Kenya. *The symposium, "Socio-Economic Interactions between Pastoralists and Other Groups. Inter-Congress of the International Union of Anthropological and Ethnological Sciences (IUAES) 2002.* (Tokyo, September 22-27, 2002).

柴山 守 (SHIBAYAMA, Mamoru)

【著書・論文】

- 柴山守. 2004. 「地図・航空写真集成の保存・継承と地理情報システムー京都大学東南アジア研究所における地図画像データベース ARIS の事例ー」『月刊 IM』43(7): 10-13.
 - 柴山守. 2004. 「GIS で探る近世大坂と東南アジア海ルート交易史」『東洋学へのコンピュータ利用第 15 回セミナー』京都大学人文科学研究所附属漢字情報研究センター・京都大学学術情報メディアセンター, pp.57-70.
 - 原正一郎・柴山守・安永尚志. 2003. 「メタデータによるデータベースの機関間連携の実現ー人文科学データ共有のための標準化ー」『人文科学とコンピュータシンポジウム論文集』2003(21): pp.17-22.
 - 山田奨治・柴山守. 2003. 「n-gram と OCR による定型表現がある古文書の文字の推定」『情報処理学会研究報告 2003-CH-58』2003(12): pp.17-22.
 - 柴山守. 2003. 「証書類古文書標題認識と辞書構築」『東洋学へのコンピュータ利用第 14 回研究セミナー』京都大学人文科学研究所附属漢字情報研究センター・京都大学学術情報メディアセンター.
 - 安倍広多・中塚麻記子・柴山守. 2003. 「『くずし字解説辞典』文字画像からの筆順抽出の試み」『大阪市立大学学術情報総合センター紀要』4: 19-23.
 - Shibayama, Mamoru, Yoshikuni Yoshii, Makoto Goto, and Venkatesh Raghavan. 2003. 「Digital Archives using XML Description and Application to Historical Researches」『大阪市立大学学術情報総合センター紀要』4: 19-23.
 - 近藤博人・松本隆一・柴山守・山田奨治・荒木義. 2003. 「文字切出しを前提としない古文書標題認識」『情報処理学会研究報告 2003-CH-57』2003(5): 1-8.
 - Shibayama, Mamoru, Atsushi Kajiyama, Venkatesh Raghavan, and Ysuyuki Kono. 2004. Mapping Historical Maritime Exchanges Between Vietnam, Thailand, and Japan, *Proceedings of International Symposium on GeoInformatics for Spatial-Infrastructure Development in Earth and Allied Science*, Hanoi, Vietnam, pp.467-472.
 - Song, Xianfeng, Ysuyuki Kono, and Mamoru Shibayama. 2004. The Development of Web Mapping Application Using Open Source GIS Solution, *Proceedings of International Symposium on GeoInformatics for Spatial-Infrastructure Development in Earth and Allied Science*, Hanoi, Vietnam, pp.267-272.
 - Song, Xianfeng, Ysuyuki Kono, and Mamoru Shibayama. 2004. An Open Source GIS Solution for Discovering Cambodia through Maps and Facts, *Proceedings of the FOSS/GRASS Users Conference*, Bangkok, Thailand, pp.280-290.
 - Makoto Goto Hara and Mamoru Shibayama. 2003. Description of "Shoso-in Monjo" Restoration Process, *Proceedings of PNC Annual Conference and Joint Meetings 2003*, pp.1, 13-21.
 - Shoichiro Hara and Mamoru Shibayama. 2003. Inter-Institutional Database Unification Using Z39.50 and Dublin Core-Resource Sharing System for Humanity Researches, *Proceedings of PNC Annual Conference and Joint Meetings 2003*, pp.3, 43-51.
 - 柴山守. 2003. Digital Silk Roads: Sea Route in Southeast and East Asia, *Proceedings of PNC Annual Conference and Joint Meetings 2003*, pp.2, 23-31.
-

- 柴山守. 2003. Digital Archives using XML Description and Application to Historical Resources, *Proceedings of the Sixth REKIHAKU International Symposium*, pp.31-38.
- Song, Xianfeng, Yasuyuki Kono, Koji Tanaka, and Mamoru Shibayama,. 2003. Integrating Geographic Collection Database Repositories with Z39.50-Compliant Gateway, *Asian Journal of Geoinformatics*4(2): 31-36.
- 後藤真・柴山守. 2003. 「正倉院文書の情報化と復原」『正倉院文書研究』9: 130-149.

重田眞義 (SHIGETA, Masayoshi)

- 【著書・論文】
- 重田眞義. 2005. 「書評：末原達郎著 人間にとって農業とは何か」『アフリカ研究』66: 69-71.
- 重田眞義. 2005. 「生き物を殺して食べるということ」『ビオストーリー』3: 86-87.
- 重田眞義. 2005. 「『夢』と『うつ』の相互浸透」睡眠文化研究所・高田公理編『夢うつまぼろし』pp.206-208.
- 重田眞義. 2004. 「エチオピア女性のひとり旅：巡礼の非宗教的意義」『旅の文化研究所報告』13: 1-16.
- 重田眞義. 2004. 「嗜好品とともにすぎゆくエチオピア高地の一日」高田公理・栗田靖之・CDI 編『嗜好品の文化人類学』（講談社選書メチエ）pp.116-125.
- 重田眞義. 2004. 「書評：吉田集而，堀田満，印東道子編 イモとヒト？人類の生存を支えた根栽農耕」『学燈』春号 101(1)：36-39.
- 重田眞義. 2004. 「アフリカの生態・社会・文化を考究するアフリカ研究の拠点」『アフリカ研究』日本アフリカ学会創立 40 周年記念特別号: 24-25.
- 重田眞義. 2004. 「高村泰樹、重田眞義編著 アフリカ農業の諸問題」小松和彦，田中雅一，谷泰，原毅彦，渡辺公三編『文化人類学文献事典』弘文堂，pp.493.
- 重田眞義. 2004. 「エチオピア起源の作物“エンセーテ”の多様性を守る人々の営み」『遺伝』58(5): i+80-84.
- 重田眞義. 2003. 「雑穀のエスノボタニー：アフリカ起源の雑穀と多様性を創り出す農耕文化」山口裕文・河瀬真琴編『雑穀の自然史』pp.206-224.
- 重田眞義. 2003. 「根栽型作物からみたアフリカ農業の特質：バナナとエンセーテの民族植物学的比較」『アジア・アフリカ地域研究』2: 44-69.
- 重田眞義，鍛冶恵. 2003. 「日本のねむり衣の歴史」睡眠文化研究所・吉田集而編『ねむり衣の文化誌』冬青社，pp.35-57.
- 重田眞義，高橋直美. 2003. 「ねむり衣の国際比較—眠るときに何を身につけていますか？」睡眠文化研究所，吉田集而編『ねむり衣の文化誌』冬青社，pp.76-98.
- 重田眞義. 2003. 「見送る人に思いを残して」『まほら』37: 42-43.
- 重田眞義. 2003. 「エンセーテ」月刊みんぱく編集部編『世界民族博物誌』八坂書房，pp.99-101.
- 重田眞義. 2002. 「村の学校教育とアフリカ農業」『世界の農林水産』754: 2-3.
- 重田眞義. 2002. 「根栽型作物からみたアフリカ農業の特質：バナナとエンセーテの民族植物学的比較」『アジア・アフリカ地域研究』2: 44-69.
- 重田眞義. 2002. 「エチオピア高地の定期市：コーヒーの葉とエンセーテを交換する」『科学』72: 1248-1252.

【口頭発表】

- Shigeta, Masayoshi. Megumi. Kaji, & Yukio. Toyoda,. (Co-authored) 2005. How Japanese switch their sleep setting and attitude from waking to sleeping: Analysis of sleep habits in contemporary Japan. *The 11th International Conference of European Association for Japanese Studies* (University of Vienna, Austria, August31-September3, 2005).
- Shigeta, Masayoshi. 2005. Origins and dynamics of enset landrace diversities in Ethiopia: promising clues for indigenous conservation activities. *The IVth International Congress of Ethnobotany* (Yeditepe University, Istanbul-Turkey, August21-26, 2005).
- 重田眞義. 2005. 「アフリカ型生業システムの持続性：エチオピア高地における 18 年間の定期市観察から」日本アフリカ学会第 42 回学術大会（東京外国語大学、2005 年 5 月 28 日・29 日）。
- 重田眞義. 2005. 「報告 1：睡眠文化研究の視座（分科会：人間はどのようにして眠ってきたか？睡眠への文化人類学的接近）」日本文化人類学会第 39 回研究大会（北海道大学、2005 年 5 月 21 日・22 日）。
- 重田眞義，西真如，金子守恵，鈴木郁乃，ゲブレ・インティソ（共著）. 2005. 「エチオピアの教育制度改革と地域社会の対応：南オモにおける NPO 法人アジアとアフリカをつなぐ会（AAJE）の活動から」日本ナイル・エチオピア学会第 14 回学術大会（長野県千曲市ちくま創造館、2005 年 4 月 16 日・17 日）。
- 重田眞義. 2005. 「ヒト-植物関係論への序章：ドメスティケーション研究の展望と課題」国立民族学博物館共同研究会・ドメスティケーションの民族生物学（日本新薬植物園、2005 年 3 月 25 日）
- Shigeta, Masayshi. 2004. Three characteristics of African vegeculture: Comparison of Banana and Ensete. *The Ninth International Congress of Ethnobiology in collaboration with the 45th Annual Meeting of the Society for Economic Botany and the 8th International Congress of Ethnopharmacology*. (University of Kent, Canterbury, England, June 13-17, 2004).
- 重田眞義. 2004. 「アフリカにおける栽培植物の民俗的品種保存」、平成 15 年度木原生物学研究所セミナー「植物遺伝資源」（横浜市立大学木原生物学研究所）
- 重田眞義（パネリスト）. 2004. 「開発援助を通して考えた『人間の幸福』—何が先進国・何が開発途上国？—」第 79 回 J.I.フォーラム（東京・銀座ソニービル、2004 年 1 月 27 日）

- 重田眞義 (パネリスト) .2003. 「地球・嗜好品めぐり」嗜好品文化フォーラム (東京・丸ビルホール, 2003 年.3 月 15 日)
- Shigeta, Masayoshi. 2003. Indigenous resources for endogenous development: an appraisal of potentialities in Ethiopia's diversity. *The 15th International Conference of Ethiopian studies*. (Hamburg University, Germany, July20/21-July25, 2003).
- 重田眞義, ゲブレ・インティソ, インティソ・デコ, 金子守恵 (共著) .2003. 「村に学校ができるときー「教育」をめぐるゲブレ・インティソ親子のライフヒストリーを中心に」日本アフリカ学会第 40 回学術大会 (島根大学, 2003 年 5 月 31 日・6 月 1 日) .
- 重田眞義, 森下敬子, 金子守恵, ゲブレ・インティソ (共著) 2003. 「現代エチオピア女性のひとり旅: エチオピア正教会への巡礼の事例から」日本ナイル・エチオピア学会第 12 回学術大会 (土佐市民会館・伊野簡易保険センター, 2003 年 4 月 19 日・20 日) .
- 重田眞義, ゲブレ・インティソ (共著) 2002. 「学校に行きたい子供といかせたくない親: エチオピア西南部アリ地域における公的教育と生業の関係」日本アフリカ学会第 39 回学術大会 (東北大学, 2002 年 5 月 25 日・26 日)

島田周平 (SHIMADA, Shuhei)

【著書・論文】

- 島田周平. 2005. 「[過剰な死]が農村社会に与える影響」高梨和紘編 『アフリカとアジアー開発と貧困削減の展望ー』慶應義塾大学出版会, pp.89-114
- 島田周平. 2004. 「書評: 杉村和彦著 アフリカ農民の経済ー組織原理の地域比較」『文化人類学』69(3): 460-465.
- 島田周平. 2003. 「移住農民の生き方ーザンビアの村に住むジンバブウェ農民の戦略ー」『アフリカの力』京都大学.
- 島田周平. 2003. Impact of infectious disease on agricultural production in Zambia: dispersion of vulnerability through a mutual help system. 島田周平編『アフリカの農村貧困問題に関する社会経済史的研究』(平成 12 年度-14 年度科学研究費補助金研究成果報告書 228p) 197-213.
- 島田周平. 2003. 「アフリカの「日常的環境破壊」ー農民が直面している環境問題」『地理』48(10): 48-57.
- 島田周平. 2003. 『高校生の地理Aーくらし・世界・未来ー』高等学校地理歴史科用教科書 帝国書院 (主として第3部 宇宙船地球号にのってー地球的課題ー担当)
- Shimada, Shuhei. 2003. The impact of HIV/AIDS on agricultural production in Zambia. *The African Geographical Review* 22: 73-78.
- 島田周平. 2003. 「アフリカの村で考える環境問題」(フォーラム) 『人文地理』55(2): 89-91.
- 島田周平編著. 2003. 「アフリカの農村貧困問題に関する社会経済史的研究」『平成 12 年度 14 年度科学研究費補助金研究成果報告書』228p.
- 島田周平. 2002. 「サヘルの旱魃」『地理・地理資料』2002(8): 22-23.
- 島田周平. 2002. 「サヘルの農民の知恵と砂漠化」『地理・地理資料』2002(8): p.24
- 島田周平. 2002. 「森とサバンナーアフリカの農業ー」『NHK教育セミナー: 世界くらしの旅 2002 年度』日本放送出版協会.
- 島田周平. 2002. 「アフリカの村で考える環境問題」『地理学ー21 世紀の世界へー』(人文地理学会 公開セミナー) 49-55.
- 島田周平. 2002. 「ザンビアにおける移住農民の悩みと対応」小倉充夫編『南部アフリカにおける地域的再編成と人の移動』1999 年度-2001 年度科学研究費補助金研究成果報告書 (津田塾大学) 13-30.

【口頭発表】

- 島田周平. 2005. 「アフリカ農村社会の脆弱性について」総合地球環境学研究所セミナー (京都, 地球環境学研究所, 2005.2.14) .
- 島田周平. 2004. 「農村社会における「過剰な死」の影響について」アフリカ日本協議会 (AJF)食糧安全保障研究会第 5 回セミナー (東京, 東京外大サテライト校舎, 2004.11.13)
- 島田周平. 2004. 「アフリカの中のナイジェリア」総合政策研究所研究会 (東京, 自民党本部, 2004.6.14)
- 島田周平. 2004. 「アフリカ農民のポリティカル・エコロジー」日本大学生物資源科学部 大学院特別講義 (湘南, 日本大学, 2004.6.11)
- 島田周平. 2004. 「アフリカにおける人間の安全保障」日本学術振興会 人文・社会科学振興のための研究事業プロジェクト: 「人間の安全保障学」の構築プロジェクト (東京, 学士会館, 2004.1.10)
- 島田周平. 2003. 「アフリカ農民の脆弱性と環境問題」総合地球環境学研究所「貧困と環境資源管理」インキュベーションセミナー (京都, 総合地球環境研究所, 2003)
- 島田周平. 2002. 「アフリカの村で考える環境問題」人文地理学会公開セミナー: 21 世紀の人文地理学研究報告 (京都, キャンパスプラザ京都, 2002. 12.14)
- 島田周平. 2002. 「激動の時代の地理教科書ーアフリカから考えるー」大阪教育大学地理学会 地理教育部会 10 月例会 (大阪, 大阪教育大学, 2002.10.12)
- Shimada, Shuhei. 2002. Impact of high rate of death on agricultural production in Zambia: Dispersion of vulnerability through mutual help system. 2002 International Geographical Union (IGU) Commission on the Sustainability of Rural Systems, Durban Conference. (Durban, International Conference Centre, 2002.8.6)

白石 隆 (SHIRAISHI, Takashi) 2002-2004

【著書・論文】

- Shiraishi, Takashi. 2003. The Rise of Middle Classes in Southeast Asia , *paper submitted to the Workshop Japan and Asia* , organized by Takashi Shiraishi and Peter J. Katzenstein. Kyoto University, the Center for Southeast Asian Studies (10-11 Jan. 2003) .
- Shiraishi, Takashi. 2003. A Preliminary Study of Local Elites in Indonesia: Sociological Profiles of DPRD Members, *paper presented to International Symposium on Indonesia's Decentralization Policy: Problems and Policy Directions* , organized by Asian Public Policy Program, Graduate School of International Corporate Strategy, Public Policy Group, Graduate School of Economics, Hitotsubashi University, and Institute for Economic and Social Research, Faculty of Economics, University of Indonesia. Tokyo (31 Jan. -01 Feb. 2003).

竹田晋也 (TAKEDA, Shinya)

【著書・論文】

- Suphawat Laohachaiboon and Shinya Takeda,. (in print) Teak logging in a trans-boundary watershed: A historical case study of the Ing River basin in Northern Thailand. *The Journal of The Society* 95.
- Sasaki, A., S. Takeda, M. Kanzaki, S. Ohta S, and P. Preechapanya,. (in print) Population dynamics and land-use changes in a miang (chewing tea) village, Northern Thailand. *Tropics* 16.
- 鈴木玲治, 竹田晋也. 2007. 「衛星画像を活用した土地利用履歴の解析—ミャンマー・バゴー山地におけるカレン焼畑の事例—」『シンポジウム地域研究と情報学：新たな地平を拓く講演論文集』京都大学地域研究統合情報センター, 京都大学東南アジア研究所, 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科, pp87-96.
- 関良基, 竹田晋也, 原田一宏, 増田美佐, 横田康裕. 2006. 「第 16 章 海外地域研究」林業経済学会編『林業経済研究の論点—50 年の歩みから—』日本林業調査会, pp583-624.
- R. Kusumaningtyas, S. Kobayashi, and S. Takeda. 2006. Mixed species gardens of Java and the transmigration areas in Sumatra, Indonesia: a comparison. *Journal of Tropical Agriculture* 44(1-2):15-22.
- Takeda Shinya, Suzuki Reiji and Hla Maung Thein. 2006. Three-year Monitoring of Shifting Cultivation Fields in a Karen Area of the Bago Mountains, Myanmar. *Proceedings of Kyoto Symposium, Crossing Disciplinary Boundaries and Re-visioning Area Studies: Perspectives from Asian and Africa, ASAFAS & CSEAS, KyotoUniv.*, 49-54
- Kosaka Yasuyuki, Takeda Shinya, Saysana Sithirajvongsa and Khamleck Xaydala. 2006. The Role of Paddy Field Landscapes in Relation to Plant Species Diversity in Central Laos. *Proceedings of Kyoto Symposium, Crossing Disciplinary Boundaries and Re-visioning Area Studies: Perspectives from Asian and Africa, ASAFAS & CSEAS, KyotoUniv.*, 285-291
- Kosaka, Yasuyuki., Shinya. Takeda, Saysana. Sithirajvongsa, and Khamleck. Xaydala,. 2006. Land-use patterns and plant use in Lao villages, Savannakhet Province, Laos. *Tropics* 15(1): 51-63.
- Kosaka, Yasuyuki., Shinya. Takeda, Saysana. Sithirajvongsa, and Khamleck. Xaydala,. 2006. Plant Diversity in Paddy Fields in Relation to Agricultural Practices in Savannakhet Province, Laos. *Economic Botany* 60(1): 49-61.
- Kosaka, Y., S. Takeda, S. Priyar, S. Sithirajvongsa, and K. Xaydala,. 2006. Species composition, distribution and management of trees in rice paddy fields in central Laos, PDR. *Agroforestry Systems* 67: 1-17.
- 竹田晋也. 2005. 「アグロフォレストリー」石井龍一編『環境保全型農業事典』丸善, pp.23-26.
- 竹田晋也. 2005. 「アジアの栽培システム・林業」稲村達也編『栽培システム学』朝倉書店, pp.160-167.
- Sasaki, A., M. Kanzaki, S. Takeda, and P. Preechapanya,. 2005. Changes in Subsistence and Socio-economic Factors in Villages Producing Miang (Chewing Tea) in Northern Thailand, *Proceedings of the 7th Kyoto University International Symposium*. pp.197-206.
- ANOULOM, Vilayphone., Shinya. TAKEDA, and Shingo. KOBAYASHI,. 2005. Vegetation Recovery Process in Swidden Fallow and Harvest of NTFPs in a Khmu Village of Northern Lao PDR, *Proceedings of the 7th Kyoto University International Symposium*. pp.155-163.
- KOSAKA, Yasuyuki., Shinya. TAKEDA, Sithirajvongsa. SAYSANA, and Xaydala. KHAMLECK,. 2005. Natural Resource Use and Management in Paddy Fields in Savannakhet Province, Lao PDR, *Proceedings of the 7th Kyoto University International Symposium*. pp.211-218.
- Suzuki, R., S. Takeda, and S.K.Keh. 2004. The impact of forest fire on the long-term sustainability of taungya teak reforestation in Bago Yoma, Myanmar, *Tropics* 14(1): 87-102.
- 竹田晋也. 2004. 「ミャンマー北・東跨境地域における生物資源利用とその変容」平成 13-15 年度科学研究費補助金（基盤研究（B）（2））研究成果報告書, 298.
- 鈴木玲治, 竹田晋也, フラマウンテイン. 2003. 「ミャンマーのアグロフォレストリー —タウンヤの農作物間作期の土壌養分動態—」『熱帯農業』47（別号 2）: 83-84.
- 竹田晋也. 2003. 「ウェーバー線」「ウオルター気候ダイヤグラム」「麒麟血」「樹木野菜」「マレシア」「ウォレス線」「ウォレシア」日本熱帯農業学会編『熱帯農業事典』養賢堂. 42. 43. 133. 239. 531.
- 竹田晋也. 2003. 「東南アジア大陸部の森林文化」『森林の百科』朝倉書店, 563-566.
- 竹田晋也. 2003. 「非木材林産物生産による熱帯林の持続的利用と多様性保全」平成 12-14 年度科学研究費補助金（基盤

研究 (C) (2) 研究成果報告書, 148.

- Ota, T., H. Nguyen, S. Takeda, H. Watanabe. 2002. Expansion of farm forestry in Northern Vietnam: a case study from Yen Lap District, Phu Tho Province. *J. Forest Economics* 48(2): 17-24.
 - 小坂康之, 竹田晋也, Souksompong Prixar, Khamlek Xaydala. 2002. 「ラオス中部 Savannakhet 県における産米林の成立過程」『熱帯農業』46 (別号 2) : 3-4.
 - 林里英, 竹田晋也, 渡辺弘之. 2002. 「ラオスにおける染料植物利用とその多様性」『森林研究』74: 121-129.
-

田辺明生 (TANABE, Akio)

【著書・論文】

- Tanabe, Akio. (in press) "Towards Vernacular Democracy: Moral Society and Post-postcolonial Transformation in Rural Orissa, India" *American Ethnologist* 34(3).
- Tanabe, Akio. (in press) "King, Goddesses and Jagannath: Regional patriotism and sub-regional and local identities in early modern Orissa." In Georg Berkemer and Hermann Kulke eds., *Centres Out There? Facets of Subregional Identities in Orissa, India* (provisional title). New Delhi: Manohar.
- Tanabe, Akio. (in press) "Understanding Ethical Basis of Local Democracy: Towards Post-Postcolonial Transformation in Rural Orissa, India" In H. Ishii, D. Gellner and K. Nawa, eds., *Northern South Asia: Political and Social Transformations*. New Delhi: Manohar.
- Tanabe, Akio. 2006. Recast(e)ing Identity: Transformation of Inter-Caste Relationships in Post-Colonial Rural Orissa. *Modern Asian Studies* 40(3): 761-796.
- 田辺明生. 2006. 「デモクラシーと生モラル政治—中間集団の現代的可能性に関する一考察」『文化人類学』71(1): 94-118.
- Tanabe, Akio. 2006. Cultural Politics of Ethics in Everyday Practice: Caste, Local Society and Vernacular Democracy in Orissa, India. 博士学位請求論文(東京大学総合文化研究科提出) 300p.
- Tanabe, Akio. 2006. Democracy and Development in Agrarian India: An Anthropological Reflection on Rural Political Economy. In N. Nagasaki ed. *Democracy and Development in South Asia: East Asian Comparative Perspectives*. Ryukoku University, pp. 26-52.
- Kimura, Masaaki. and Akio. Tanabe, eds. 2006. *The State in India: Past and Present*. New Delhi: Oxford University Press. Introduced (pp.1-34) and contributed a chapter 'Early Modernity and Colonial Transformation: Rethinking the Role of the King in Eighteenth and Nineteenth Century Orissa' (pp. 202-228).
- Tanabe, Akio. 2005. The System of Entitlements in Eighteenth-Century Khurda, Orissa: Reconsideration of 'Caste' and 'Community' in Late Pre-Colonial India. *South Asia* 28(3): 345-385.
- Abinales, P. N., N. Ishikawa, and A. Tanabe, eds. 2005. *Dislocating Nation-States: Globalization in Asia and Africa*. Kyoto and Melbourne: Kyoto University Press and Trans Pacific Press. 289p. Introduced ('Introduction: Dislocating nation-states' pp.1-14) and concluded ('Conclusion: States under stress, society in flux' pp.271-283) (with P.N. Abinales and N. Ishikawa)
- 田辺明生. 2005. 「近代人種主義の二つの系譜とその交錯—地域連鎖の世界史から人種を考える」竹沢泰子編『人種概念の普遍性を問う—西洋的パラダイムを超えて』人文書院, pp.205-226.
- 田辺明生. 2004. 「儀礼のなかの歴史／歴史のなかの儀礼—人類学の視点から」名古屋大学文学部内歴史科学研究会編『歴史の理論と教育』18: 19-29.
- Hayami, Y., A. Tanabe, and Y. Tokita-Tanabe, eds. 2003. *Gender and Modernity: Perspectives from Asia and the Pacific*. Kyoto and Melbourne: Kyoto University Press and Trans Pacific Press, 309p. Introduced ('Introduction: Gender and modernity in Asia and the Pacific' with Y. Tokita-Tanabe, pp.1-16) and contributed a chapter 'Power, Culture and Masculinity in (Post-)Colonial Orissa, India' (pp.61-86).
- 田辺明生. 2003. 「インド世界周縁部における王権確立の過程—オリッサ・クルダ地方の事例から」角田文衛, 上田正昭監修, 初期王権研究委員会編『古代王権の誕生 II 東南アジア・南アジア・アメリカ大陸編』角川書店, 116-133.
- Tanabe, A. 2003. The Sacrificer State and Sacrificial Community: Kingship in Early Modern Khurda, Orissa Seen through a Local Ritual. In Berkemer, G. and Frenz, M. eds., *Sharing Sovereignty: The Little Kingdom in South Asia*. Berlin: Klaus Schwarz Verlag, pp. 115-135.
- Tanabe, Akio. 2002. Reconsidering Spirituality and Secularism in India. *Proceedings of International Conference on Rethinking Indian Culture: Challenge and Responses*. Cuttack.
- 田辺明生. 2002. 「ポストモダンの課題と南アジア」長崎暢子編『現代南アジア第一巻—地域研究への招待』東京大学出版会, pp. 277-305.
- Tanabe, A. 2002. Moral Society, Political Society and Civil Society in Post-colonial India: A View from Orissan Locality, *Journal of the Japanese Association for South Asian Studies* 14: 40-67.
- 田辺明生. 2002. 「差異と同一性のエロス—インドにおけるジェンダーの可能性」『アジア新世紀 3—アイデンティティー解体と再構成』岩波書店, pp. 259-280.

【口頭発表】

- Tanabe, Akio. 2006. "Bio-Moral Politics and Vernacular Democracy: On the Possibilities of Alternative Socio-Political Solidarities in Postcolonial India" *The Joint Conference comprising the annual conferences of Anthropology Southern Africa and The Pan*
-

- Tanabe, Akio. 2005. Democracy and development in agrarian India: An anthropological reflection on rural political economy. *Workshop on Democracy and Development in Comparative Asian Perspective An Indo-Japanese Dialogue* (Centre for the Study of Law and Governance, Jawaharlal Nehru University, New Delhi, 23-24 March 2005)
- Tanabe, Akio. 2004. Understanding ethical basis of local democracy: Towards post-postcolonial transformation in rural Orissa, India. *Workshop 'Social Dynamics in Northern South Asia'* (Tokyo University of Foreign Studies, Tokyo, 25-27 June 2004)
- Tanabe, Akio. 2004. Democracy and development in agrarian India: An anthropological reflection on rural political economy. *Workshop on South Asia and East Asia: Comparisons and Connections* (South Asia Initiative, Asia Center, Harvard University, Boston, 8-9 March 2004)
- Tanabe, Akio. 2003. King, Goddesses and Jagannath: Regional patriotism and sub-regional and local identities in early modern Orissa. *Annual Conference of the Orissa Research Project, 'Centres Out There? Facets of Subregional Identities'* (Salzau, Germany, 13-17 May 2003)
- Tanabe, Akio. 2002. The Sacrificer State and Sacrificial Community: Kingship in early modern Khurda, Orissa seen through a local ritual. *17th European Conference on Modern South Asian Studies* (Heidelberg, 9-14 September 2002)

田中耕司 (TANAKA, Koji)

【著書・論文】

- 田中耕司. 2006. 「国際河川メコン河の空間スケールと流域管理の階層性～ラオス・ベトナムでの調査から～」総合地球環境学研究所『分野横断による新たな流域管理システムの構築に向けて』（国際ワークショップ報告書）pp.45-53.
- 田中耕司. 2006. 「東南アジア農業の多様性と共通性」『農業』1447: 16-38.
- 田中耕司. 2006. 「書評：安室知著『水田漁撈の研究－稲作と漁撈の複合生業論』」『エコソフィア』17: 122-123.
- 田中耕司. 2006. 「農業の多面的機能：途上国から見ると」『農業』1479: 4-5.
- 田中耕司. 2005. 「地域の資源を誰が利用するのかー『周縁』からの視点」新崎盛暉他編『地域の自立シマの力（上）』コモンズ, pp.156-180.
- Kuroda, Yosuke., Yo-Ichiro Sato, Chay Bounphanousay, Yasuyuki Kono and Koji Tanaka. 2005. Gene Flow of Cultivated Rice (*Oryza sativa* L.) to Wild *Oryza* Species (*O. rufipogon* Griff. and *O. nivara* Sharma and Shastry) on the Vientiane Plain of Laos. *Euphytica* 142: 75-83.
- Tanaka, Koji, Satoshi Yokoyama and Kham Phalakhone. 2005. Land Allocation Program and Stabilization of Swidden Agriculture in the Northern Mountain Region of Laos. *Macroeconomic Policy Support for Socio-Economic Development in the Lao PDR, Phase 2, Main Report, Volume 2*, CPC Lao PDR and JICA. pp.318-335.
- 田中耕司. 2005. 「働きすぎの時代と『農』的な労働」『農業』1473: 4-5.
- 赤坂憲雄, 佐藤洋一郎, 田中耕司, 野本寛一他. 2005. 「伝統文化活性化シンポジウム：再検討、稲作農耕文化」『伝統文化』14: 3-31.
- 田中耕司. 2005. 「東南アジアへの農業技術移転」『聖教新聞』文化欄（2005年6月1日）
- 田中耕司. 2004. 「チョウジの香り、それともたばこの匂いーインドネシアのクレテックたばこ」『まほら』41: 14-15.
- 佐藤洋一郎, 佐古和枝, 千田稔, 田中耕司, 中村慎一. 2004. 「第17回浜田青陵賞シンポ『海上の道』は見えてきたか」『朝日新聞』（2004年10月13日）
- 田中耕司. 2004. 「シャン州ムセ、ナムカンにおける夏作稲の展開－中国国境地域における農業技術と資源管理の変容」『ミャンマー北・東部跨境地域における生物資源利用とその変容』（平成13-15年度科学研究費補助金基盤研究(B)研究成果報告書）pp.43-62.
- 田中耕司. 2004. 「ウォーラセア海域世界の農民と土地利用戦略－『作物で緑化』を巡って」『ウォーラセア海域における生活世界と境界管理の動態的研究』（平成13-15年度科学研究費補助金基盤研究(A)研究成果報告書）pp.271-283.
- Tanaka, Koji. 2004. Inflow of Agricultural Technologies and Outflow of Natural Resources: Observing the Border Region of Northern Shan State, Myanmar. *Proceedings of the JSPS and NRCT Core University Program Workshop on Flows and Movements in East Asia*, CSEAS, Kyoto University, 285-298.
- 田中耕司, 岡本正明. 2004. 「温暖化抑制のための地域社会のエンパワーメント」『地球環境研究総合推進費平成15年度研究成果 中間成果報告集 VI（戦略的研究開発領域）』環境省地球環境局調査室, pp.429-436.
- 黒田洋輔, チャイ・ブンパスサイ, 佐藤洋一郎, 河野泰之, 田中耕司. 2003. 「アジア野生イネ (*Oryza rufipogon*) の集団ダイナミックスーラオス・ヴィエンチャン平野の水牛飼養から」『熱帯農業』47(別号 1): 91-92.
- Song, Xian Feng., Yasuyuki Kono, Koji Tanaka, and Mamoru Shibayama., 2003. Integrating Geographic Collection Database Repositories with a Z39.50-Compliant Gateway. *Asian Journal of Geoinformatics* 4(2): 31-36.
- 田中耕司. 2003. 「工学的適応」日本熱帯農業学会編『熱帯農業事典』養賢堂, pp.159-160.
- 田中耕司. 2003. 「農学的適応」日本熱帯農業学会編『熱帯農業事典』養賢堂, pp.423-424.
- 田中耕司. 2003. 「根栽農耕と稲作－『個体』の農法の視点から」堀田満他編『イモとヒト』平凡社, pp.229-246.
- Tanaka, Koji. 2002. Agriculture and Rural Development in the Northern Mountain Region: An Alternative Model for Environmentally-Friendly Agricultural Systems. CPC Lao PDR and JICA. *Macroeconomic Policy Support for Socio-Economic Development in the Lao PDR, Sector Report 2*: 42-54.
- 田中耕司. 2002. 「秋道智彌・岸上伸啓 共編著『紛争の海』」『京都新聞』読書欄（2002年4月28日）

- 田中耕司. 2002. 「新刊エッセイ 稲と稲作のなかに探る『縄文要素』と『弥生要素』－稲を通して見た日本文化論の試み－（佐藤洋一郎著『稲の日本史』に対する書評）」『本の旅人』8: 34-35.
- 田中耕司. 2002. 「熱帯における作物生産」日本作物学会編『作物学事典』朝倉書店, pp.246-255.
- 田中耕司. 2002. 「東南アジアの稲作から見たマダガスカル」『SERASERA』（マダガスカル研究懇談会報）7: 2-5.
- 田中耕司. 2002. 「生態学的アジア地図」青木保他編『アジア新世紀1 空間アジアへの問い』岩波書店, pp.57-75.
- Tanak, Koji. 2002. *Kemiri (Aleurites moluccana) and Forest Resource Management in Eastern Indonesia: An Eco-Historical Perspective, Asian and African Area Studies* 2: 5-23.

【口頭発表】

- 田中耕司. 2005. 「東南アジアの自然・社会環境と農業の変容」大阪市立高等学校教育研究会・大阪府立高等学校社会科研究会（東南アジア研究所, 2005年12月13日）
- 田中耕司. 2005. 「東南アジア農業の現状－その特殊性と共通性」大日本農会・農林水産奨励会秋期農事講演会（石垣記念ホール, 2005年10月31日）
- 田中耕司. 2005. 「アブラギリ属植物と土地利用変化」民族自然誌研究会第41回例会「マイナーな植物の民族自然誌」（京大会館, 2005年10月29日）
- 田中耕司. 2005. 「地域研究と熱帯農業研究－最近の東南アジアの農業事情から」（鹿児島大学農学部, 2005年8月4日）
- 田中耕司. 2005. 「『山地』と『平地』のあいだ：『灰色地帯』の利用と管理」地域研究コンソーシアム・シンポジウム「新しい地域研究の方法を求めて」（北海道大学学術交流会館, 2005年7月9日）
- Tanaka, Koji. 2005. *Environmental Studies in Japan and the Expertise of Kyoto University: Environmental Studies on Southeast Asia. ASEM Meeting on Education Hub for Environmental Studies.* (REgens Collegi, Universiteit Leiden, May 12, 2005)
- Tanaka, Koji. 2005. *Man and Nature in Sulawesi: Issues of Natural Resource Management. Orientation for FASID Fieldwork Program.* (Waseda Hoshien, July 2, 2005)
- Tanaka, Koji, Satoshi. Yokoyama, and Khame Pahlakhone. 2005. *Land-Allocation Program and Stabilization of Swidden Agriculture in the Northern Mountain Region of Laos. Join Committee Meeting, CPC-JICA.* (Vientiane, March 28, 2005)
- 田中耕司. 2005. 「ミャンマー、シャン州北部における夏作稲の展開－中国国境地域における農業技術と生物資源管理の変容」関西農業史研究会第266回例会（同志社大学, 2005年1月29日）
- Tanaka, Koji. 2005. *Man and Nature in Sulawesi: Issues of Natural Resource Management. Orientation for FASID Fieldwork Program* (National Olympic Memorial Youth Center, January 8, 2005)
- 田中耕司. 2004. 「日本の稲作農耕文化とアジア」伝統文化活性化シンポジウム「再検討 稲作農耕文化」（ヤクルトホール, 2004年11月6日）
- Tanaka, Koji. 2004. *Inflow of Agricultural Technologies and Outflow of Natural Resources: Observation in a Border Region of Northern Shan State. JSPS-NRCT Core University Program Workshop.* (Shiran Kaikan, October 8, 2004)
- 田中耕司. 2004. 「グローバル時代の生物資源管理：『地域』の視点から」全国研究所センター長会議第3部会公開講演会（学会会館, 2004年11月11日）
- 田中耕司. 2004. 「『マレー型稲作』から古代の日本稲作を見る」浜田青陵賞記念シンポジウム（岸和田市立文化会館, 2004年10月2日）
- 田中耕司. 2004. 「経済発展とともに変化するアジアの農業－東南アジアにおける稲作技術と水田利用の動向」奈良県肥料商業組合研究会（奈良県農業技術センター, 2004年9月17日）
- 田中耕司. 2004. 「アジア稲作の過去・現在・未来－アジアの中の日本」（アジア生産性機構公開セミナー「おコメ、私たちの命－稲作を中心としたアジアの文化・社会」国連大学, 2004年9月15日）
- Tanaka, Koji. 2004. *Diversity of Asian Rice Farming: Ecology, History and Culture. APO Seminar: Rice is Life.* (United Nations University, September 8, 2004)
- 田中耕司. 2004. 「アジアの稲作と日本への伝播」第8回縄文文化講座（蓼科市青少年自然の森, 2004年8月22日）
- Tanaka, Koji. 2004. *Expert Consultation on Biodiversity, Land Degradation and Livelihood. UNU-PLEC Workshop.* (Chiangmai University, July 15, 2004)
- Tanaka, Koji. 2004. *Land-Allocation Program and Stabilization of Shifting Cultivation in the Northern Mountain Region of Laos. Joint Committee Meeting, CPC-JICA.* (Vientiane, March 30, 2004)
- Tanaka, Koji. 2003. *Spatial Scale of the Mekong River and Stratification of River-Basin Management: From Case Studies in Laos and Vietnam. RIHN International Workshop, Seeking an Effective Watershed Management System through Interdisciplinary Approach: Considering Multiple Spatial Scales and Stakeholders.* (Shiran Kaikan, December 1, 2003)
- Tanaka, Koji. 2003. *Agricultural Development and Area Studies: An Experience from Southeast Asia. JIRCAS 10th Anniversary International Symposium "Prospects for Food Security and Agricultural Sustainability in Developing Regions"* (United Nations University, November 18, 2003)
- 田中耕司. 2003. 「環境利用史からみた市場経済化のもとでの生業変化」2003年度東南アジアセミナー（東南アジア研究センター, 2003年9月1日）
- 田中耕司. 2003. 「グローバリゼーションと地域の論理－環境問題を地域からみる」（岡山大学環境理工学部, 2003年7月16日）
- 田中耕司. 2003. 「東・東南アジア農業の持続的発展のための課題」JIRCAS 国際戦略セミナー「農林水産業の持続的発展と国際共同研究の役割」（JIRCAS, 2003年1月28日）

-
- 田中耕司. 2002. 「稲とともに生きる」京都大学市民講座（京都大学, 2002 年 10 月 19 日）
-

東 長 靖 (TONAGA, Yasushi)

【著書・論文】

- 東長靖. 2006. 「『特集1ーイスラーム復興の時代のスーフィズム・タリーカ』への序」『日本中東学会年報』21/2: 4-6.
 - Tonaga, Yasushi. 2006. "Preface" to Special Issue 1: Sufism and Tariqa Movements in the Era of Islamic Resurgence. *Annals of the Japan Association for Middle East Studies* 21/2: 1-3.
 - Tonaga, Yasushi. 2006. Sufism in the Past and Present: Based on the Three-axis Framework of Sufism. *Annals of the Japan Association for Middle East Studies* 21/2: 7-21.
 - 東長靖. 2005. 「神秘主義文献の継承と教団の系譜」『創文』創文社, 11-14.
 - 東長靖. 2005. 「タサウフ研究の最前線ー思想研究の立場から」赤堀雅幸, 東長靖, 堀川徹編『イスラーム地域研究叢書 第7巻 イスラームの神秘主義と聖者信仰』東京大学出版会, 95-114.
 - 赤堀雅幸, 東長靖, 堀川徹編. 2005. 『イスラームの神秘主義と聖者信仰』東京大学出版会.
 - Tonaga, Yasushi. 2005. Sufism in Time and Beyond. Twenty-second annual symposium of The Muhyiddin ibn 'Arabi Society "Time and Non-time". (Worcester College, Oxford, U.K, 14-15 May 2005) pp.1-19.
 - Tonaga, Yasushi. 2004. Sufi Saints and Non-sufi Saints in Early Islamic History. *The Journal of Sophia Asian Studies* 22: 1-13.
 - Tonaga, Yasushi. 2004. Perspectives and Scope of Sufi Studies: How to Define or Not to Define Sufism. *The 13th KAMES & The 5th AFMA International Symposium* (韓国プサン外国語大学, 2004 年 10 月 15-17 日) におけるフルペーパー, pp. 1-8.
 - Tonaga, Yasushi. 2004. The School of Ibn Arabi in Mashriq and Turkey: With Special Reference to Abd al-Karim al-Jili. *Proceeding of III Uluslar arasi Melana Kongresi/3rd International Mevlana Congress*, Konya: Selcuk Universitesi Matbaasi, 2004, pp. 315-330.
 - 東長靖. 2004. 「プナルの離婚劇とトルコのタリーカト」『地域研究スペクトラム』10: 26-28.
 - Tonaga, Yasushi. 2004. Sufism in the Past and Present: Based on the Tripolar Framework of Sufism. Full Paper read at JAMES International Workshop Changing Knowledge and Authority in Islam , 25-26 March, 2004 at the Sanjo Conference Hall, The University of Tokyo, pp. 1-11.
 - 東長靖. 2004. 「宗教の中の歴史と歴史の中の宗教」島藺進編『宗教史の可能性』岩波書店, 31-56.
 - 東長靖. 2004. 「スーフィズムの歴史と現在」片倉もとこ・梅村坦・清水芳見編『イスラーム世界』岩波書店, 177-197.(本文) & 289-290.(注)
 - Tonaga, Yasushi. 2004. "Politheistic" Islam: Islam Observed from the Viewpoint of Sufi, Saint and Tariqa, *Acta Asiatica* 86: 1-21.
 - Tonaga, Yasushi. 2003. The School of Ibn Arabi in Mashriq and Turkey: With Special Reference to Abd al-Karim al-Jili. Full Paper read at the 3rd International Mevlana Congress (5-6 May 2003, Konya, Turkey), pp. 1-17.
 - 東長靖. 2003. 「中東地域研究とイスラーム学ー京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科ー. 『アジ研ワールド・トレンド』90: 8-9.
 - 東長靖. 2002. 「アラビア文字による他言語表記とアラビア文字文化圏」『上智アジア学』20: 25-44.
 - 東長靖. 2002. 「スーフィズムの分析枠組」『アジア・アフリカ地域研究』2: 173-192.
-

研究協力者（含：異動・退職者）

アビナレス パトリシオ (ABINALES, Patricio Nurez)

【著書・論文】

- ABINALES, Patricio Nunez., Donna J. Amoroso (forthcoming) *State and Social Forces in the Philippines*. Maryland: Rowman and Littlefield.
 - ABINALES, Patricio Nunez. 2004. *Love, Sex and the Filipino Communist*, Manila: Arvil Publishing Inc.
 - ABINALES, Patricio Nunez. 2003. Progressive-Machine Conflicts in Early Twentieth Century American Politics and Colonial State-building in the Philippines, In Anne Foster and Julian Go, eds., *The American Colonial State in Global Perspective*. Duke University Press.
-

荒木美奈子 (ARAKI, Minako) 2002-2004

【著書・論文】

- Mattee, A.Z., Araki, M., Rutatora, D.F., Kakeya, M., Kobayashi, S. and U.Tanaka, 2004. Introduction of the SUA Method: Concept and Approach to Sustainable Rural Development, in *Perspectives and Approaches for Sustainable Rural Development in Africa: Proceedings of the International Conference*, SCSRD/JICA, 311-332.
 - Nsenga, J., Mahonge, C., Mtengeti, E., Rutatora, D., Tamura, K., Itani, J., Kanda, Y., and M. Araki, 2004. The SUA Method: The Case Study from Mbinga in *Perspectives and Approaches for Sustainable Rural Development in Africa: Proceedings of the International Conference*, SCSRD/JICA, 333-357.
 - 荒木美奈子. 2002. 「タンザニア・キリマンジャロ州におけるジェンダーと労働ー灌漑稲作プロジェクトを事例として」
-

藤倉達郎 (FUJIKURA, Tatsuro)

【著書・論文】

- Fujikura, Tatsuro. 2007. The Bonded Agricultural Laborers' Freedom Movement in Western Nepal. In Ishii, Hiroshi., David Gellner, and Katsuo Nawa, eds. *Political and Social Transformations in North India and Nepal*. Delhi: Manohar (Forthcoming in 2007)
- Fujikura, Tatsuro. 2004. Vasectomies and Other Experiments with Modernity: A Reflection on the Discourses and Practices of Family Planning in Nepal. *Journal of the Japanese Association for South Asian Studies* 16: 40-71.
- Fujikura, Tatsuro. 2004. *Discourses of Awareness: Development, Social Movements, and the Practices of Freedom in Nepal*. PhD dissertation. Department of Anthropology, University of Chicago.
- Fujikura, Tatsuro. 2004. Kamaiya Mobilization as a Politics of Patience (in Nepali). In Gautam, Bhaskar, Jagannath Adhikari, and Purna Basnet eds. *Nepaalmaa Gariibiko Bahas (Debates on Poverty in Nepal)*, Kathmandu: Martin Chautari, pp.184-196.
- Fujikura, Tatsuro. 2003. The Role of Collective Imagination in the Maoist Conflict in Nepal. *Himalaya: The Journal of the Association for Nepal and Himalayan Studies* XXIII(1): 21-30.

濱下武士 (HAMASHITA, Takeshi) 2002-2005

【著書・論文】

- 濱下武志. 2003. 「交差するインド系ネットワークと華人系ネットワーク—本国送金の比較検討」 秋田茂・水島司編 『現代南アジア6：世界システムとネットワーク』 東京大学出版会.

ハウ・キャロライン (HAU, Caroline)

【著書・論文】

- HAU, Caroline Sy. 2004. *On the Subject of the Nation: Filipino Writing from 1981 to 2003*. Ateneo de Manila University Press.

速水洋子 (HAYAMI, Yoko)

【著書・論文】

- 速水洋子. 2006. 「表象・介入・実践—人類学者と現地とのかかわり：序に代えて(特集企画・序文)」『文化人類学』70(4):1-10.
- Hayami, Yoko. 2006. Towards Multi-Laterality in Southeast Asian Studies: Perspectives from Japan. In Cynthia Chou and Vincent Houben eds. *Southeast Asian Studies: Debates and New Directions*. Institute of Southeast Asian Studies: Singapore. pp.65-86.
- Hayami, Yoko. 2006. "Traversing Invisible Borders: Narratives of Women between Hills and City. In Roxana Waterson eds. *In Southeast Asian Lives: Personal Narratives and Historical Experience* (Ohio RIS Southeast Asia Series) .
- 速水洋子. 2004. 「タイ・ビルマ国境域の〈カレン〉から見る民族と宗教の動態」加藤剛編『変容する東南アジア社会 民族・宗教・文化の動態』めこん, pp201-244
- Hayami, Yoko. 2004. *Between Hills and Plains: Power and Practice in Socio-Religious Dynamics among Karen*, Kyoto and Melbourne: Kyoto University Press and Trans Pacific Press.
- Hayami, Yoko., Akio. Tanabe, and Yumiko. Tokita-Tanabe., eds. 2003. *Gender and Modernity in Asia and the Pacific*, Kyoto University Press & Trans-Pacific Press. 300p.
- Hayami, Yoko. 2003. Meat-Consumption, Feasting and Commensality among Karen in the Context of Socio-Religious Changes in the Upland-Lowland Continuum, In Hayashi, Yukio and Thongsa Sayavongkhamdy eds., *Cultural Diversity and Conservation in the Making of Mainland Southeast Asia and Southwestern China: Regional Dynamics in the Past and Present*. Center for Southeast Asian Studies. pp. 294-321.
- Hayami, Yoko. 2003. The Decline of Founder's Cults and Changing Configurations of Power: Village, Forest and State among Karen, In Tannenbaum, Nicola and C.A.Kammerer eds., *Founder's Cults*. Northern Illinois University, Center for Southeast Asian Studies.
- Hayami, Yoko. 2003. Morality, sexuality and mobility; changing moral discourse and self, In De Lang, Claudio O. ed., *Living at the Edge of Thai Society: The Karen in the highlands of northern Thailand*. London and New York: Routledge Curzon, pp. 112-129.

【口頭発表】

- Hyami, Yoko. 2005. Who are they/we the Karen?? negotiating ethnic imagery between self and other. *International Thai Studies Conference*(Northern Illinois University, U.S., April5th 2005)

石川 登 (ISHIKAWA, Noboru)

【著書・論文】

-
- Ishikawa, Noburu. (under contract) *Between Frontiers: Nation and Identity in a Southeast Asian Borderland*, Copenhagen/Singapore/Seattle: NIAS Press/Singapore University Press/University of Washington Press.
 - 石川登. 2006. 「マイクロ・トランスナショナリズム：ボルネオ島西部国境の村落社会誌」 杉島敬志, 中村潔編『現代インドネシアの地方社会：ミクロロジーのアプローチ』東京：NTT出版.
 - Ishikawa, Noboru., P. N. Abinales and A. Tanabe. 2005. *Dislocating Nation-States: Globalization in Asia and Africa*, Kyoto University Press.
 - Ishikawa, Noboru. 2005. Genesis of the Colonial Geo-body in Western Borneo: Inscribing Boundary at the Imperial Margin, *Proceedings of the Japan Society for the promotion of Science and National Research Council of Thailand, Core University Program Workshop "Flows and Movements in East Asia"* (Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University, October 6-8, 2004).
 - Ishikawa, Noboru. and C. S. Hau eds. 2005. *Flows and Movements in East Asia* (Proceedings of the Japan Society for the promotion of Science and national Research Council of Thailand, Core University Program Workshop, Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University, October 6-8, 2004).
 - Ishikawa, Noboru. and M. Ishikawa. 2005. Commodifying Bornean Forest: Transformation of the Kemena Basin Society in Sarawak, Malaysia, *Paper presented at 22nd Annual Conference "Producing People and 'Nature' as commodities in Southeast Asia*, (Center for Southeast Asian Studies, University of California, Berkeley, February 4-5, 2005)
 - Ishikawa, Noboru. 2005. 「歴史のなかのグローバリゼーション：ボルネオ北部の植民地期と現在にみる労働のかたち」『帝国における植民地と本国：境界における統治テクノロジーの形成をめぐる歴史人類学的研究』（平成 14-16 年度科学研究費補助金 基盤研究(C)(1) 研究成果報告書 研究代表者 永渕康之）.
 - Ishikawa, Noboru., P. N. Abinales and A. Tanabe. 2005. Remembering National Independence at the Margin of the State: A Case from Sarawak, East Malaysia, *Dislocating Nation-States: Globalization in Asia and Africa*, Kyoto University Press.
 - 石川登. 2004. 「国家が所有を宣言するとき—東南アジア島嶼部における領有」 三浦徹, 岸本美緒, 関本照夫編『比較史のアジア—所有・契約・市場・公正』東京大学出版会.
 - Ishikawa, Noboru. 2004. Transformation of Riverine Commons: Socio-Ecological History of the Kemena Basin Society, Northern Sarawak, 『サラワク先住諸民族における自然環境認識の比較研究』（平成 12 年度-平成 15 年度科学研究費補助金 基盤研究(A)(1) 研究成果報告書 研究代表者 内堀基光）.
 - Ishikawa, Noboru. 2004. Commodity and Labor on the Move: Borderlands of West Kalimantan as Economic Infrastructures of Sarawak, East Malaysia, *a paper presented at Micrology of Indonesian Local Societies, organized by Indonesian Institute of Sciences (LIPI), Bogor Agricultural University (IPB), National Coordination Agency for Surveys and Mapping (BAKOSURTANAL), ASAFAS and CSEAS, Kyoto University, Indonesian Institute of Sciences (LIPI), Jakarta, March 23, 2004.*
 - 石川登. 2004. 「国家の浸透圧について：国境線上のマイクロ・エスノグラフィ」『スハルト政権崩壊後のインドネシア地方社会に関する文化人類学的研究』（平成 12 年度-平成 15 年度科学研究費補助金 基盤研究(A)(1) 研究成果報告書 研究代表者 杉島敬志）.
 - 石川登. 2004. フロンティアと権力：東南アジア島嶼部ボルネオ島の事例 『トランスナショナリティ研究 境界の生産性』（大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文学」文学研究科・人間科学研究科・言語文化研究科 2003 年度報告書）
 - 石川登. 2004. 「ポスト・コロニアル ボーダーランド：ボルネオ国境線上の国家と社会」『ボルネオ及びその周辺部における移民・出稼ぎに関する文化人類学的研究』（平成 13 年度-平成 16 年度科学研究費補助金 基盤研究(A)(1) 研究成果報告書 研究代表者 宮崎恒二）.
 - 石川登. 2004. 「歴史のなかのグローバリゼーション：ボルネオ北部の植民地期と現代にみる労働のかたち」『文化人類学』69(3): 412-436
 - 石川登. 2004. 「歴史のなかの民族境界：ボルネオ島西部国境社会における村落と国家」加藤剛編『変容する東南アジア社会：民族・宗教・文化の動態』東京：めこん
 - Ishikawa, Noboru. 2004. Transformation of Riverine Commons: Socio-Ecological History of the Kemena Basin Society, Northern Sarawak, *Comparative Study on the Local Perception of Natural Environment and landscapes among Peoples of Sarawak*, Report of the Research Conducted in Sarawak with a grant-in-Aid for Scientific Research, Japan Society for the Promotion of Science (2000-2003), Headed by Motomitsu Uchibori, Tokyo University of Foreign Studies, March 2004.
 - Ishikawa, Noboru. 2003. Remembering National Independence at the Margin of the State: A Case from Sarawak, East Malaysia, *Japanese Review of Cultural Anthropology*4: 31-44.
 - 石川登. 2003. 「東南アジア島嶼部のフロンティア空間—ボルネオ島西部インドネシア/マレーシア国境地帯からの視点」『トランスナショナリティ研究—場を越える流れ』（大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文学」文学研究科・人間科学研究科・言語文化研究科 2002 年度報告書）.
 - 石川登. 2002. 「北ボルネオ会社植民地における労働管理—戦間期における国際協調主義と帝国主義ネットワーク」『帝国の文化人類学的研究』（科学研究費補助金 基盤研究(B)(2) 研究成果報告書研究代表者 永渕康之）.
 - 石川登. 2002. 「共同体の定位—ボルネオ島西部国境社会における『村落』『国家』『民族』」『東南アジア社会変容過程のダイナミズム—民族間関係・移動・文化再編』（科学研究費補助金 基盤研究(A)(2) 研究成果報告書 研究代表者 加藤剛）.
 - 石川登. 2002. 「国家の歴史と村びとの記憶—サラワク独立をめぐって」黒田悦子編『個人と民族の運動』山川出版社.
-

伊藤正子 (ITO, Masako)

【著書・論文】

- 伊藤正子. 2003. 『エスニシティ＜創生＞と国民国家ベトナム—中越国境地域タイ族・ヌン族の近代』三元社、xli+329頁（第2回東南アジア史学会賞受賞、2004年12月12日）
- 伊藤正子. 2003. 「儂智高の語り方—中越国境少数民族の『英雄』と国家」『東洋文化研究所紀要』142: 79-108.
- 伊藤正子. 2003. 「タイ族・ヌン族の国内移住の構造—ベトナム東北山間部少数民族のネットワーク」『東南アジア研究』40(4): 484-501.

岩田明久 (IWATA, Akihisa)

【著書・論文】

- 岩田明久. 2006. 「亀岡の淡水魚—魚類相の特徴とその成り立ち—」亀岡植物誌研究会編『亀岡の自然』(2): 12-19.
- 岩田明久. 2006. 「平成17年度アユモドキ保全対策調査事業結果報告書(配布版)」亀岡人と自然のネットワーク, pp.1-25.
- 岩田明久, 特定非営利活動法人亀岡人と自然のネットワーク, 有限責任中間法人水生生物保全研究会. 2006. 「亀岡のアユモドキの産卵場所とそれを創出するラバーダム稼働状況の関係に関する研究」(平成17年度(財)河川環境管理財団河川整備基金助成事業報告書) 1-39.
- 亀岡・人と自然研究会, 岩田明久, 小林光, 上田稔留, 川村敦, 新村安雄. 2005. 「亀岡産アユモドキの生活史とハビタット利用に関する研究—水田水域生態系のシンボルフィッシュ—」(『プロ・ナトゥーラ・ファン』第14期助成成果報告書(自然保護助成基金/日本自然保護協会)) pp.39-50.
- Winterbottom, R., A. Iwata, and T. Kozawa. 2005. *Vanderhorstia nannai*, a new species of burrow-associated goby from Palau and the Philippines (Pisces: Gobiidae). *Aqua Journal of Ichthyology and Aquatic Biology* 9(3): 109-114.
- Yamazaki, Y., N. Fukutomi, N. Oda, K. Shibukawa, Y. Niimura, and A. Iwata. 2005. Occurrence of larval Pacific lamprey *Entosphenus tridentatus* from Japan, detected by random amplified polymorphic DNA (RADP) analysis. *Ichthyological Research* 52(3): 297-301.
- 岩田明久, 細谷誠一. 2005. 「ハゼ類の多様性からみた四万十川河口域」『海洋と生物』156: 39-46.
- 岩田明久. 2004. 「水田生態系の生物多様性」『農文研通信』40:3.
- 亀岡・人と自然研究会, 岩田明久, 小林光, 上田稔留, 川村敦, 新村安雄. 2004. 「亀岡産アユモドキの生活史とハビタット利用に関する研究—水田水域生態系のシンボルフィッシュ—」(2003年度(第14期)PRONATURA FUND 研究助成報告書) 1-25.
- Iwata, A. 2004. Aquatic eco-resources management and its changes in Laos, In Furukawa, H., M. Nishibuchi, Y. Kono and Y. Kaida, eds., *Ecological Destruction, Health, and Development*. Kyoto: Kyoto Univ. Press. pp. 561-574.
- 岩田明久, 大西信弘, 木口由香. 2003. 「南部ラオスの平野部における魚類の生息場所利用と住民の漁労活動」『アジア・アフリカ地域研究』3: 51-86.
- 岩田明久. 2003. 「ミスジハゼ」「クロトサカハゼ」「ヒメトサカハゼ」「コンジキハゼ」「アゴヒゲハゼ」「カエルハゼ」「ヨロイボウズハゼ」「ハヤセボウズハゼ」「トサカハゼ」「エソハゼ」「シマエソハゼ」「キバラヨシノボリ」「アオバラヨシノボリ」「ルリボウズハゼ」「ヤエヤマノコギリハゼ」「ジャノメハゼ」「ミナミアシシロハゼ」「シロウオ」「琉球列島のミミズハゼ」環境省自然環境局野生生物課編『改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物—レッドデータブック—4 汽水・淡水魚類』自然環境研究センター. 62-63, 64-65, 66-67, 70-71, 72-73, 78-79, 82-83, 84-85, 124-125, 126-127, 128-129, 130-131, 132-133, 142-143, 166-167, 168-169, 174-175, 186-187, 207-208.
- Yamazaki, Y., N. Fukutomi, K. Takeda and A. Iwata. 2003. Embryonic development of the Pacific lamprey, *Entosphenus tridentatus*, *Zoological Science* 20: 1095-1098.
- 岩田明久. 2002. 「ラオス農民の在来知識—サバナケット県のナマズ漁—」『熱帯農業』46(別号1): 83-84.
- Sakai, H., A. Iwata, and H. K. Byeon. 2002. Genetic relationships between Japanese and Korean *Odontobutis obscura* (Pisces, Odontobutidae), *Biogeography* 4: 39-44.
- 岩田明久. 2002. 「ヤツメウナギ目概説: ユウフツヤツメ, スナヤツメ, シベリアヤツメ, カワヤツメ スズキ目(ハゼ亜目) 概説: チチブモドキ, テンジクカワアナゴ, オカメハゼ, カワアナゴ, ドンコ, ミスジハゼ, トサカハゼ, シマヨシノボリ, クロヨシノボリ, ルリヨシノボリ, オオヨシノボリ, キバラヨシノボリ, アオバラヨシノボリ, アヤヨシノボリ, チチブ, ヌマチチブ, ナガノゴリ, シモフリマハゼ, アカオビシマハゼ, ビリンゴ, シンジコハゼ, ジュズカケハゼ」環境省自然保護局生物多様性センター『自然環境保全基礎調査. 生物多様性調査動物分布調査報告書(淡水魚)』366-367, 368, 368-369, 369, 468-470, 471, 471-472, 472, 473, 475, 476, 476-477, 477, 477-478, 478, 479, 479, 480.
- 岩田明久. 2002. 「亀岡の淡水魚達—それらの分布が語るもの—」亀岡市文化資料館編『第18回特別展 みんなでしらべた亀岡の生きものたち』27-31.

【口頭発表】

- 岩田明久. 2006. 「農村地域の生物(魚類)」平成18年度農村環境技術研修(生態系保全コース)(東京, 国立オリンピック記念青少年総合センター, 2006年6月27日)
- 岩田明久. 2006. 「魚類の生存条件について水田農業の持つ意味(アユモドキを事例として)」第53回日本生態学会大会公募シンポジウム(新潟市, 朱鷺メッセ, 2006年3月28日)

- 岩田明久. 2006. 「身近な魚達の保全ー水辺のネットワークから心のネットワークへ」 日本国際湿地連合河川生態系連続講演会（東京, 東京海洋大学, 2006 年 1 月 10 日）
- 岩田明久. 2005. 「農業生態系における魚類の多様性をより高めるために」 平成 17 年度農業土木学会講演会（岐阜, 岐阜大学, 2005 年 8 月 25 日）
- Shibukawa, K. and A. Iwata., 2005. Review of the shrimp-associated gobies of the genus *Flabelligobius* (Perciformes, Gobiidae, Gobiinae) from Japan, with comments on limit of the genus. *7th Indo-Pacific Fish Conference* (Taipei, 17May2005)
- 岩田明久. 2005. 「水田生態系における魚類の生活史とハビタット利用ー亀岡における事例ー」 平成 16 年度第 1 回農村環境技術地方研修（豊岡市, 豊岡市民プラザ, 2005 年 2 月 16 日）
- 岩田明久. 2004. 「熱帯河川中流域における淡水魚の生活史とハビタット利用」 2004 年度日本魚類学会年会シンポジウム「熱帯・亜熱帯での魚類生育場」（那覇, 琉球大学, 2004 年 9 月 27 日）
- 岩田明久. 2003. 「ラオスの水田と魚たち」 第 32 回民族自然史研究会定例会「水田に育つ魚たち」（京都, 京大会館, 2003 年 7 月 5 日）
- 岩田明久. 2003. 「ラオス農民の在来知識ーサバナケット県のナマズ漁ー」 平成 14 年度日本熱帯農業学会（東京, 東京農業大学, 2002 年 3 月 29 日）

梶 茂 樹 (KAJI, Shigeki)

【著書・論文】

- 梶茂樹. 2006. 「ハヤ語、アンコーレ語およびトーロ語の声調の比較、特にトーロ語の声調消失に関連して」『言語研究』129: 161-180.
- 梶茂樹. 2005. 「アフリカの多言語使用ー特に東アフリカの Swahili 語圏の国語問題を中心にー」 梶茂樹, 石井溥編『アジア・アフリカにおける多言語状況と生活文化の動態』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, pp.3-16.
- 梶茂樹. 2005. 「フィールドワークで作る辞書」 影山太郎編『レキシコンフォーラム No.1』 ひつじ書房, pp.1-10.
- Kaji, Shigeki. eds. 2005. *Cross-Linguistic Studies of Tonal Phenomena: Historical Development, Tone-Syntax Interface, and Descriptive Studies*. 東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所.
- 梶茂樹, 石井溥共編. 2005. 「アジア・アフリカにおける多言語状況と生活文化の動態」（平成 13-16 年度科学研究費補助金基盤研究(A)報告書） 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- Kaji, Shigeki. 2004. *A Runyankore Vocabulary*. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- Kaji, S. 2004. *Asian & African Lexicon No.44: A Runyankore Vocabulary*. Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies.
- Kaji, S. ed. 2003. *Cross-linguistic Studies of Tonal Phenomena: Historical Development, Phonetics of Tone and Descriptive Studies*. Proceedings of the symposium (Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies, December 17 to 19, 2002)
- 梶茂樹編著. 2003. 『地方語と共通語における借用語の動態関係ーアフリカとインドネシアの場合ー』 環太平洋の「消滅に瀕した言語」にかんする緊急調査研究事務局.
- 梶茂樹. 2003. 「ハヤ語、アンコーレ語およびテンボ語における借用語」 梶茂樹編『地方語と共通語における借用語の動態関係ーアフリカとインドネシアの場合ー』 環太平洋の「消滅に瀕した言語」にかんする緊急調査研究事務局, 11-40.
- 梶茂樹. 2003. 「無文字社会のことばと智恵ーアフリカにおける文化の伝承」 大角翠編著『少数言語をめぐる 10 の旅ーフィールドワークの最前線からー』 三省堂, 13-35.
- 梶茂樹. 2002. 「アフリカにおける危機言語問題ーはたしてクラウド説は当てはまるかー」 Conference Handbook on Endangered Languages, 環太平洋の「消滅に瀕した言語」にかんする緊急調査研究事務局, pp.105-113.
- 梶茂樹. 2002. 「スワヒリ語はなぜザイルにまで広まったのかーその構造から探るー」 宮本正興, 松田素二編『現代アフリカの社会変動ーことばと文化の動態観察』人文書院, pp.134-149.
- 梶茂樹. 2002. 「未知の言語の文法を探り出す手がかり」『月刊言語』31(4): 38-43.
- 梶茂樹. 2002. 「現代都市とポピュラー・ミュージック」 嶋田義仁, 松田素二, 和崎春日編『アフリカの都市的世界』世界思想社, pp.217-238.

【口頭発表】

- 梶茂樹. 2206. 「共時的言語を通時的に見るーウガンダ西部のバンツー諸語の声調の比較研究からー」 京都大学言語学懇話会第 70 回例会（京大会館, 2006 年 4 月 8 日）

掛 谷 誠 (KAKEYA, Makoto)

【著書・論文】

- Kakeya, Makoto., Y. Sugiyama and S. Oyama. (in press) The *Citemene* System, Social Leveling Mechanism, and Agrarian Changes in the Bemba Villages of Northern Zambia :An Overview of “Fixed-Point” Research. *African Study Monographs* 27(1).
- Mattee A. Z., M. Araki, D. F. Rutatora, M. Kakeya, S. Kobayashi and U. Tanaka. 2004. Introduction of the 'SUA Method': Concept and Approach to Sustainable Rural Development. In Rutatora D. F., A. J. P. Tarimo, A. Z. Mattee and E.J. Mtengeti eds. *Perspectives and Approaches for Sustainable Rural Development in Africa*. Sokoine University of Agriculture and JICA.

-
- 掛谷誠編著. 2002. 『アフリカ農耕民の世界』 京都大学学術出版会.

【口頭発表】

- 伊谷樹一, 掛谷誠. 2006. 「『在来性のポテンシャル』再考—農村開発への一視点」第43回日本アフリカ学会学術大会 (吹田市 大阪大学, 2006年5月)

木村大治 (KIMURA, Daiji)

【著書・論文】

- 木村大治. (印刷中) 「生態人類学・体力・探検的態度」『アフリカ研究』.
- 木村大治. (印刷中) 「バカ・ピグミーは日常会話で何を語っているか」重田眞義編 『アフリカの力』 京都大学学術出版会.
- 木村大治. 2006. 「日本語における語用論的括弧使用の歴史と現状」『社会言語科学会第18回研究大会発表論文集』 pp.90-93.
- Kimura, D. 2006. "Diversity of human verbal interaction: Two cases from tropical Africa." *Cradle of Language Conference Abstracts*. pp.69-70.
- 木村大治. 2006. 「平等性と対等性をめぐる素描」『人間文化 (神戸学院大学人文学会)』 .21: 40-43.
- 木村大治. 2006. 「フィールドにおける会話データの収録と分析」田中ゆかり, 伝康晴編 『講座 社会言語科学 6「方法」』 ひつじ書房. pp.128-144.
- 木村大治. 2006. 「生態人類学と『体力』」『アフリカ研究』 68: 80-83.
- 木村大治. 2004. 「身体的人类学」小松和彦, 田中雅一, 谷泰, 原毅彦, 渡辺公三編 『文化人類学文献事典』 弘文堂 pp.103-104.
- 木村大治. 2004. 「投擲的発話: コンゴ民主共和国・ボンガンドの発話形態における『アドレス性』の問題」社会言語科学会第14回研究大会発表論文集 pp.154-157.
- 伝康晴, 坊農真弓, 榎本美香, 細馬宏通, 木村大治, 串田秀也, 森本郁代, 高梨克也. 2004. 「社会的相互行為におけるアドレス性とは何か」『社会言語科学会第14回研究大会発表論文集』 pp.241-250.
- 木村大治. 2003. 『共在感覚—アフリカの二つの社会における言語的相互行為から』 京都大学学術出版会, 326p.
- 木村大治. 2003. 「道具性の起源」西田正規, 北村光二, 山極寿一編著 『人間性の起源と進化』 昭和堂, pp.293-320.
- Kimura, D. 2003. Bakas' mode of co-presence. *African Study Monographs, Supplementary Issue* 28: 25-35.
- 木村大治. 2002. 「ウーラマ紀行」加納隆至, 黒田末寿, 橋本千絵編著 『アフリカを歩く—フィールドノートの余白に』 以文社, pp.152-170.
- 木村大治. 2002. 「神は細部に宿り給うか?—地域研究における『細部』と『具体』—」『アジア・アフリカ地域研究』 2: 243-250.
- 木村大治. 2002. 「『拡散する声』の文化—コンゴ民主共和国とカメルーンのフィールドから」松田素二, 宮本正興編 『現代アフリカの社会変動—ことばと文化の動態観察』 人文書院, pp.408-427.

小林繁男 (KOBAYASHI, Shigeo)

【著書・論文】

- Kobayashi, Shigeo. 2005. Perspective on the rehabilitation technology development of degraded forests and response option for global environmental conservation. *International Symposium on Ecological Conservation and Sustainable Development of Forest Resources in Northeast Asia*. Yanji. China. p.75.
- Ueda, Emi., Shigeo. Kobayashi, and Chanchai. Yawudhi., 2005. Differences of understanding on the forest among Japanese, Thai and Indonesian. *Proceedings of the International Workshop on the Landscape Level Rehabilitation of Degraded Tropical Forests*, Tsukuba, Japan, pp.181-190.
- Kobayashi, Shigeo. and Emi. Ueda., 2005. Response option on the rehabilitation of degraded tropical forests using the compartment model. *Proceedings of the International Workshop on the Landscape Level Rehabilitation of Degraded Tropical Forests*, Tsukuba, Japan, pp.191-204.
- Kobayashi, Shigeo. 2004. Landscape rehabilitation of degraded tropical forest ecosystems- Case study of CIFOR/Japan project in Indonesia and Peru. *Forest Ecology and Management* 201: 13-22.
- Kobayashi, Shigeo. 2004. Toward the synthesis of rehabilitation technology and the response option for global environmental conservation. *Proceedings of the International Workshop on the Landscape Level Rehabilitation of Degraded Tropical Forests*, Tsukuba, Japan, pp.1-10.
- Ueda, Emi., Shigeo. Kobayashi, and Chanchai. Yawudhi., 2004. How dose people consider and expect the rehabilitated forest for the global environment conservation? *Proceedings of the International Workshop on the Landscape Level Rehabilitation of Degraded Tropical Forests*, Tsukuba, Japan, pp.175-192.
- Kobayashi, S., and E. Ueda., 2003. Conservation of tropical peat swamp forest. *Farming Japan* 37(2): 16-21.
- Kobayashi, Shigeo. and Emi. Ueda., 2003. Research on the landscape level rehabilitation of degraded tropical forest. *Proceedings of the International Workshop on the Landscape Level Rehabilitation of Degraded Tropical Forests*. pp.1-23.

-
- Kobayashi, S. and E. Ueda., 2003. Research on the landscape rehabilitation of degraded tropical forest. *Proceeding of International Symposium "Global Environment and Forest Management"*. (KYOUSEI, Nara Woman's University). pp.77-89.
 - Kobayashi, S. 2003. Silviculture management of natural Dipterocarp forests: The rehabilitation of logged-over forests. In Frim, Apafri et al. *Proceedings of the Seventh Round-Table Conference on Dipterocarps*. (KL, Malaysia) pp.95-116.

【口頭発表】

- Kobayashi S., A. Vilayhone, S. Takeda, S. Ito, and G. Yamakoshi., 2006. 「Human security of Nam Ha Villagers related with fuel woods and water utilization in Las」 第16回日本熱帯生態学会年次大会（府中，東京農工大学，2006年6月）
- 小林繁男. 2006. 「荒廃した熱帯林の修復は地球を救うか？—森林とともに暮らす人々の人間安全保障—」 地球環境大学：「2006」（大阪市立自然史博物館，2006年7月）
- 小林繁男, C. Yarwudhi, L. Puangchit, and B. Thaiutsa, .2006. 「タイのチーク人工林における間伐とぼう芽更新」 第117回日本森林学会大会（東京農業大学 2006年4月）
- 小林繁男, 山越言, 伊藤美穂. 2005. 「熱帯林とともに住む人住民のヒューマンセキュリティーに関する研究—ギニアの村落周辺に木を植える人々—」 地域研究企画交流センター, 長崎大学熱帯医学研究所主催 第2回連携研究シンポジウム「熱帯医学と地域研究—知の実践と構築〈森・開発・疾病〉」（長崎大学医学部ポンペ会館, 2005年2月4日-5日）
- 小林繁男, 山越言, 伊藤美穂. 2005. 「熱帯林とともに住む人住民のヒューマンセキュリティーに関する研究—ギニアの村落周辺に木を植える人々とアグロフォレストリー—」 第5回アグロフォレストリー研究会（京都，芝蘭会館, 2005年10月）
- 小林繁男, 山越言, 伊藤美穂. 2005. 「熱帯林とともに住む人住民のヒューマンセキュリティーに関する研究—西アフリカ・ギニアの村落周辺林と人々—」 第15回日本熱帯生態学会年次大会（京都，京都大学, 2005年6月）
- 小林繁男, 田中永晴, 石塚森吉, 宇津木玄, 宮坂聡. 2004. 「ハイパーマッパーによるミズナラ林のストラティフィケーションの解析—林床バイオマスの推定—」 第116回日本森林学会大会（札幌，北海道大学, 2005年4月）
- 小林繁男, Patricio. MacDonagah., 2004. 「アルゼンティン・ヤボティ林における伐採強度の違いが二次遷移に及ぼす影響」 第14回日本熱帯生態学会年次大会（松山，愛媛大学, 2004年6月）
- 小林繁男, 植田愛美. 2003. 「荒廃熱帯季節林の二次遷移に果たす野生バナナの役割」 第13回日本熱帯生態学会年次大会（鹿児島，鹿児島大学, 2003年6月）

小山直樹（KOYAMA, Naoki）2002-2003

【著書・論文】

- 小山直樹. （印刷中）「マダガスカル島の哺乳類の特異性と自然保護」重田眞義編『アフリカの力』京大出版会，京都.
- Koyama, N., M. Nakamichi, S. Ichino and Y. Takahata. 2002. Population and social dynamics changes in ring-tailed lemur troops at Berenty, Madagascar between 1989-1999. *Primates*, 43(4): 291-314.

丸山淳子（MARUYAMA, Junko）

【著書・論文】

- 丸山淳子. 2004. 「命をさがす人びと—再定住地の内と外の暮らし」田中二郎, 佐藤俊, 菅原和孝, 太田至編『遊動民—アフリカの原野に生きる』昭和堂, pp.249-267.
- Maruyama, Junko. 2003. The Impacts of Resettlement on Livelihood and Social Relationships among the Central Kalahari San. *African Study Monographs* 24(4): 223-245.

松林公蔵（MATSUBAYASHI, Kozo）

【著書・論文】

- 樋口輝彦, 新井平伊, 松林公蔵, 宇高不可思. 2006. 「高齢者のうつ—診断と治療の留意点」『Depression Frontier』4: 42-50.
- 奥宮清人, 松林公蔵. 2006. 「健康増進と QOL の評価」大内尉義, 井藤英樹, 三木哲郎, 鳥羽研二編『包括的アプローチとリハビリテーション』Medical View 社, pp.14-19.
- 奥宮清人, 松林公蔵. 2006. 「1. 虚弱者? 要介護者の定義と分類、2. 生活機能面（ADL, IADL, AADL）での区分」鳥羽研二編『介護予防ガイドライン』厚生科学研究所, pp. 24-28.
- 奥宮清人, 松林公蔵. 2006. 「2 機能低下の過程モデル—どのような経過で機能低下が起きるのか、1 地域モデル（高知県香北町）CGA による分析」鳥羽研二編『介護予防ガイドライン』厚生科学研究所, pp. 42-45.
- 奥宮清人, 松林公蔵. 2006. 「3 機能低下の危険因子. 2 高知県香北町における虚弱悪化の危険因子」鳥羽研二編『介護予防ガイドライン』厚生科学研究所, pp. 70-74.
- 松林公蔵. 2006. 「4 危険因子のスクリーニング (3) CGA の組み合わせによる方法」鳥羽研二編『介護予防ガイドライン』厚生科学研究所, pp. 104-108.
- 奥宮清人, 松林公蔵. 2006. 「5 介護予防のシステムづくり. 1 高知県香北町の方法と成果」鳥羽研二編『介護予防ガイドライン』厚生科学研究所, pp. 168-174.
- 松林公蔵. 2006. 「5 介護予防のシステムづくり. (2) アジアの地域在住高齢者の実態」鳥羽研二編『介護予防ガイドライン』厚生科学研究所, pp.189-197.

-
- 和田泰三, 奥宮清人, 松林公蔵. 2006. 「6 介護予防の具体的テクニックと効果判定 (3) うつ予防」 鳥羽研二編『介護予防ガイドライン』厚生科学研究所, pp.215-218.
 - Matsubayashi K, K. Okumiya, T. Wada, M. Ishine,. 2006. Older adult's view of "successful aging"- Comparison between Japanese and American elderly. *J Am Geriatr Soc* 54:184-186.
 - Akamizu T, T. Murayama, S. Teramukai, K. Miura, I. Bando, T. Irako, H. Iwakura, H. Ariyasu, H. Hosoda, H. Tada, A. Matsuyama, S. Kojima, T. Wada, Y. Wakatsuki, K. Matsubayashi, T. Kawakita, A. Shimizu, M. Fukushima, M. Yokode, K. Kangawa,. 2006. Plasma ghrelin levels in healthy elderly volunteers: the levels of acylated ghrelin in elderly females correlate positively with serum IGI-I levels and bowel movement frequency and negatively with systolic blood pressure. *Journal of Endocrinology* 188: 333-344.
 - Matheus RC, R. Ithane, M. Ishine, T. Sakagami, JS. Roriz, C Jr. Ademar,. 2006. Partezani-Rodrigues R, De Souza AC, Kita T, Matsubayashi K: Age, social stratum, and obesity in Latin America: Similarities in the inequalities for older people. *J Am Geriatr Soc* 54: 559-560.
 - Arai H, H. Takechi, T. Wada, M. Ishine, Y. Wakatsuki, H. Horiuchi, T. Murayama, M. Yokode, M. Tanaka, T. Kita, K. Matsubayashi, N. Kume. 2006. Usefulness of measuring serum markers in addition to comprehensive geriatric assessment for cognitive impairment and depressive mood in the elderly. *Geriatrics and Gerontology International* 6: 7-14.
 - Ishine M, T. Sakagami, R. Sakamoto, T. Wada, K. Khampitak, M. Fushida, T. Kawakita, K. Okumiya, T. Kita, K. Matsubayashi,. 2006. Comprehensive geriatric assessment for community-dwelling elderly in Asia compared with those in Japan: VII. Khon Kaen in Thailand. *Geriatrics and Gerontology International* 6: 40-48.
 - Sumi E, H. Takechi, T. Wada, M. Ishine, Y. Wakatsuki, T. Murayama, M. Yokode, M. Tanaka, T. Kita, K. Matsubayashi, H. Arai. 2006. Comprehensive geriatric assessment for the detection of functional disabilities and depressive symptoms associated with sensory impairments as well as for the screening of cognitive impairment. *Geriatrics and Gerontology International* 6: 94-100.
 - 西淵光昭, 松林公蔵, 山極寿一, 山田勇, 横山俊夫. 2005. 「座談会：アジアにおける食の安全」『科学』75(1): 78-88.
 - 奥宮清人, 和田泰三, 石根昌幸, 藤沢道子, 西永正典, 土居義典, 小澤利男, 松林公蔵. 2005. 「本邦地域高齢者の生活機能」『日老医誌』42 : 164-166.
 - 松林公蔵. 2005. 「アジアの地域高齢者の実態」『日老医誌』42 : 167-169.
 - 西永正典, 高田淳, 奥宮清人, 松林公蔵, 小澤利男, 土居義典. 2005. 「栄養と生活機能」『日老医誌』42 : 174-176.
 - 松林公蔵. 2005. 「高齢者総合的機能評価の地域特性？—その普遍性と多様性」『Geriatric Med』43: 597-602.
 - 鳥羽研二, 大河内二郎, 高橋泰, 松林公蔵, 西永正典, 山田思鶴, 高橋龍太郎, 西島令子, 小林義雄, 町田綾子, 秋下雅弘, 佐々木英忠. 2005. 「転倒リスク予測のための『転倒スコア』の開発と妥当性の検証」『日老医誌』42 : 346-352.
 - 松林公蔵. 2005. 「うつ」大内尉義, 井藤英樹, 三木哲郎, 鳥羽研二編『老年症候群の診かた』Medical View 社, pp.21-25.
 - 松林公蔵. 2005. 「虚弱の定義と評価」大内尉義, 井藤英樹, 三木哲郎, 鳥羽研二編『老年症候群の診かた』Medical View 社, pp. 7-13.
 - Ishine, M., T. Wada, K. Okumiya, T. Sakagami, P.T. Dung, T.D. Vihn, T. Kawakita, M. Fushida, K. Okumiya, T. Kita, K. Matsubayashi,. 2005. Comprehensive Geriatric Assessment for Community-Dwelling Elderly in Asia compared with those in Japan: III. Phuto in Vietnam. *Geriatrics and gerontology International* 5: 115-121.
 - Sakagami, T., K. Okumiya, T. Wada, M. Ishine, T. Hayashi, T. Wada, M. Ishine, K. Okumiya, T. Kita, K. Matsubayashi,. 2005. Comprehensive geriatric Assessment For Community-Dwelling Elderly in Asia ompared with those in Japan: II Korea, *Geriatrics and gerontology International* 5: 107-114.
 - Matsubayashi, K., T. Sakagami, K. Okumiya, T. Wada, M. Ishine, T. Wada, M. Ishine, K. Okumiya, T. Kita, Y. Mizuno,. 2005. Comprehensive geriatric Assessment for Community-Dwelling Elderly in Asia compared with those in Japan: I Singapore, *Geriatrics and gerontology International* 5: 99-106.
 - Takahashi, T., K. Ishida, D. Hirose, Y. Nagano, K. Okumiya, M. Nishinaga, K. Matsubayashi, Y. Doi, T. Tani, H. Yamamoto, H. 2005. Trunk deformity is associated with a reduction in outdoor activities of daily living and life satisfaction in community-dwelling older people. *Osteoporosis Int* 16: 273-279.
 - Akamatsu, K., A. Saito, T. Wada, M. Ishine, M.R. Cruz, K. Okumiya, K. Matsubayashi K. 2005. Analysis of comprehensive geriatric assessment of elderly residents in a social welfare home for the aged compared with those in a residential care home in an urban area in Japan. *Geriatrics and gerontology International* 5:53-58.
 - Ishine, M., T. Wada, K. Akamatsu, M.R. Crux, T. Sakagami, T. Kita, K. Matsubayashi, K. Okumiya,. 2005. No positive correlation between anemia and disability in older people in Japan. *J Am Geriatr Soc* 53: 734-735.
 - Morioka, M., M. Tanaka, K. Matsubayashi, T. Kita. 2005. Acceptamce of memory impairment and satisfaction with life in patients with mild to moderate Alzheimer's disease. *Geriatrics and gerontology International* 5: 122-126.
 - Kumiya, K., T. Wada, T. Sakagami, K. Mizuno, T.A. Rambo, K. Matsubayashi. 2005. Close association between geriatric functional ability and economic status in developing and developed countries. *J Am Geriatri Soc* 53: 1448-1449.
 - Wada, T., C. Wada, M. Ishine, K. Okumiya, T. Kawakita, M. Fushida, T. Kita, K. Mizuno, K. Matsubayashi,. 2005. Comprehensive Geriatric Assessment for Community- Dwelling Elderly Asia compared with those in Japan: V West Java in Indonesia. *Geriatrics and gerontology International* 5: 168-175.
 - Okumiya, K., M. Ishine, T. Wada, M. Cruz, I. Cruz, N. Ishine, S. Sakagami, T. Kita, E. Kaneda, K. Moji, T. Pongvongsa, S. Nakamura, T. Akimichi, B. Bouphe, T. Kawakita, M. Fushida, K. Matsubayashi,. 2005. Comprehensive Geriatric Assessment for Community-Dwelling Elderly in Asia compared with those in Japan: IV. SavannaKhet in Lao PDR. *Geriatrics and gerontology*
-

- T. Wada, C. Wada, M. Ishine, K. Okumiya, T. Kawakita, M. Fushida, T. Kita, K. Mizuno, K. Matsubayashi, 2005. Comprehensive Geriatric Assessment for Community-Dwelling Elderly Asia compared with those in Japan: VI Maubin in Myanmar. *Geriatrics and gerontology International* 5: 276-285.
- Ishine, M., T. Wada, K. Okumiya, T. Sakagami, P.D. Dung, T.D. Vienh, T. Kawakita, M. Fushida, K. Okumiya, T. Kita, K. Matsubayashi, 2005. Comprehensive Geriatric Assessment for Community-Dwelling in Asia compared with those in Japan: VI. Maubin in Myanmar. *Geriatrics and Gerontology International* 5: 276-285.
- Yamanaka, G., K. Otsuka K, Hotta H, Murakami S, Kubo Y, Matsuoka O, Takasugi E, Yamanaka T, M. Shinagawa, S. Nunoda, Y. Nishimura, K. Shibata, H. Saitoh, M. Nishinaga, M. Ishine, T. Wada, K. Okumiya, K. Matsubayashi, S. Yano, S. Ishizuka, K. Ichihara, G. Cornelissen, F. Halberg, 2005. Depressive mood is independently related to stroke and cardiovascular events in a community. *Biomedicine & Pharmacology* 59: S31-S39.
- Matsuoka, O., K. Otsuka, S. Murakami, H. Hotta, G. Yamanaka, Y. Kubo, T. Yamanaka, M. Shinagawa, M. Ishine, T. Wada, K. Okumiya, K. Matsubayashi, S. Yano, K. Ichihara, G. Cornelissen, F. Halberg, 2005. Arterial stiffness independently predicts cardiovascular events in an elderly community: Longitudinal Investigation for the Longevity and Aging in Hokkaido County (LILAC) study. *Biomedicine & Pharmacology* 59: S40-S44.
- Hotta, H., K. Otsuka, S. Murakami, G. Yamanaka, Y. Kubo, O. Matsuoka, M. Yamanaka, M. Shinagawa, S. Nunoda, Y. Nishimura, K. Shibata, H. Saitoh, M. Nishinaga, M. Ishine, T. Wada, K. Okumiya, K. Matsubayashi, S. Yano, K. Ichihara, G. Cornelissen, F. Halberg, 2005. Fractal analysis of heart rate variability and mortality in elderly community-dwelling people: Longitudinal Investigation for the Longevity and Aging in Hokkaido County (LILAC) study. *Biomedicine & Pharmacology* 59: S45-S48.
- Murakami, S., K. Otsuka, H. Hotta, G. Yamanaka, Y. Kubo, O. Matsuoka, T. Yamanaka, M. Sinagawa, S. Nunoda, Y. Nishimura, K. Shibata, E. Takasugi, M. Nishinaga, M. Ishine, T. Wada, K. Okumiya, K. Matsubayashi, S. Yano, K. Ichihara, G. Cornelissen, F. Halberg, 2005. Common carotid intima-media thickness is predictive of all cause and cardiovascular mortality in elderly community-dwelling people: Longitudinal Investigation for the Longevity and Aging in Hokkaido County (LILAC) study. *Biomedicine & Pharmacology* 59: S49-S53.
- Otsuka, K., T. Norboo, Y. Otsuka, H. Higuchi, M. Hayajiri, C. Narushima, Y. Sato, T. Tsugoshi, T. Wada, M. Ishine, K. Okumiya, K. Matsubayashi, S. Yano, T. Chogyal, D. Angchuk, G. Cornelissen, F. Halberg, 2005. Chronoecological health watch of arterial stiffnrs and neuro-cardio-pulmonary function in elderly community at high- altitude (3542m), compared with Japanese town. *Biomedicine & Pharmacology* 59: S58-S67.
- Nishinaga, M., J. Takata, K. Okumiya, K. Matsubayashi, T. Ozawa, Y. Doi. 2005. High morning home blood pressure is associated with a loss of functional independence in the community-dwelling elderly aged 75 years or older. *Hypertens Res* 28:657-663.
- Wada, T., M. Ishine, T. Sakagami, T. Kita, K. Okumiy, K. Mizuno, A.T. Rambo, K. Matsubayashi, 2005. Depression, activities of daily living, and quality of life of community-dwelling elderly in three Asian countries: Indonesia, Vietnam, and Japan. *Arch Gerontol Geriatr* 41:271-280.
- Okumiya, K., Y. Morita, M. Nishinaga, Y. Osaki, Y. Doi, M. Ishine, T. Wada, T. Ozawa, K. Matsubayashi, 2005. Effects of group work programs on community-dwelling elderly people with age-associated cognitive decline and /or mild depressive moods: A Kahoku Longitudibnal Aging Study. *Geriatrics and Gerontology International* 5: 267-275.
- 松林公蔵. 2004. 「病気とは何か?—フィールドで考えた3つのパラダイム」『エコソフィア』14: 2-9.
- 松林公蔵. 2004. 「長寿科学研究の最前線?健康長寿の延長を求めて」『理学療法京都』33: 13-18.
- 松林公蔵, 森望. 2004. 「対談: 寿命とは—遺伝的要因と非遺伝的要因」『科学』74(12): 1390-1397.
- 松林公蔵. 2004. 「20世紀におこった寿命革命と高齢社会」『科学』74(12): 1443-1447.
- 松林公蔵. 2004. 「痴呆スクリーニング法の目的」『日本醫事新報』4191: 95.
- 松林公蔵. 2004. 「アジアの視点からみた長寿科学—フィールド医学の現場から—」『日老医誌』41: 381-383.
- 寺本信嗣, 松林公蔵, 林登志雄, 三浦久幸, 遠藤英俊. 2004. 「高齢者の多臓器不全をめぐる」『Geriatr Med』42(4): 507-520.
- 森岡瑞穂, 田中誠, 松林公蔵, 北徹. 2004. 「アルツハイマー病患者の病態受容?主観的なもの忘れ行為の受け取り方と生活満足度に関する検討?」『日老医誌』41: 534-541.
- 松林公蔵. 2004. 「アジアからみた老年医学」日本老年医学会編『老年医学 Up Data 2004-2005』Medial View, pp. 73-79.
- Matsubayashi, K. and K. Okumiya, 2004. Ageing, Diseases and Ecology. In Furukawa Hisao, Mitsuki Nishibuchi, Yasuyuki Kono, Yoshinori Kaida. eds. *Ecological destruction, health, and development*. Kyoto Univeresity Press, pp351-365.
- Wada, T., M. Ishine, T. Sakagami, K. Okumiya, M. Fujisawa, S. Murakami, K. Otsuka, S. Yano, T. Kita, K. Matsubayashi, 2004. Depression in Japanese community-dwelling elderly-prevalence and association with ADL and QOL. *Arch Gerontol Geriatr* 39: 13-23.
- Tsuji, Y., H. Kanamori, G. Muralkami, M. Yokode, T. Mezaki, K. Doh-ura, K. Taniguchi, K. Matsubayashi, H. Fukuyama, T. Kita, M. Tanaka, 2004. Haidenhaim variant of Creutzfeldt-Jacob Disease: diffusion-weighted MRI and PET characteristics. *J Neuroimaging* 14: 63-66.
- 和田泰三, 松林公蔵. 2003. 「虚弱の評価と予防」『Medicina』40: 1653-1655.
- 松林公蔵. 2003. 「なぜ人は高地に暮らすか—人類進化と文明における医学的側面」梅棹忠夫, 山本紀夫編『山の世界』pp. 179-186.
- 村上省吾, 久保豊, 西村芳子, 山中嵩, 品川亮, 松林公蔵, 大塚邦明, 大川真一郎. 2003. 「地域在住高齢者における

Postural BP change と認知機能、ADL 機能」『自律神経』40: 455-460.

- 松林公蔵. 2003. 「医学における普遍性と多様性—フィールド医学の現場から—」『エコソフィア』12: 90-95.
 - 松林公蔵. 2003. 「高齢者の総合機能評価 (CGA)」『EBM ジャーナル』4: 34-37.
 - 松林公蔵. 2003. 「高齢者の機能評価と QOL」『日老医誌』40: 19-21.
 - 和田泰三, 松林公蔵. 2003. 「虚弱の評価と予防」『Medicina』40: 1653-1655.
 - 松林公蔵. 2003. 「フィールドサイエンスと医学」『登山医学』21: 23-26.
 - 松林公蔵. 2003. 「アジアの高齢化とそれにかかわる諸問題」日本老年医学会編『老年医学 Up to date 2003-2004』Medical View 社, 115-125.
 - 松林公蔵. 2003. 「地域在住高齢者に対する CGA の効果」鳥羽研二編『高齢者総合的機能評価ガイドライン』厚生科学研究所, 32-40.
 - 松林公蔵. 2003. 「健康度の評価」鳥羽研二編『高齢者総合的機能評価ガイドライン』厚生科学研究所, 123-135.
 - 松林公蔵. 2003. 「高齢者の総合機能評価 (CGA)」荻原俊男編『老年医学』朝倉書店, 35-41.
 - 松林公蔵. 2003. 「日本の老年者の生活と健康」日本老年医学会編『老年者の歩みと展望—養生訓から現代医療の最先端まで—』38-41.
 - 松林公蔵. 2003. 「老年医学的取り組み」齊藤昇・高橋龍太郎編『高齢者の疾病と栄養改善へのストラテジー』第一出版, 38-41.
 - Wada, T., K. Matsubayashi, M. Ishine, M. Fujisawa, and T. Kita., 2003. Depression screening of elderly community-dwelling Japanese. *J Am Geriatr Soc* 2003 51(9): 1328-9.
 - 松林公蔵. 2002. 「なぜ人は高地で暮らすようになったのか？」『科学』72 : 1237-1240.
-

百瀬邦泰 (MOMOSE, Kuniyasu) 2002-2003

【著書・論文】

- 百瀬邦泰. 2004. Plant Reproductive Interval and Population Density in Aseasonal Tropics. *Ecological Research* 19(2): 245-253.
- 百瀬邦泰. 2003. 『熱帯雨林を観る』講談社選書メチエ276, 216p.
- Momose, K. and T. Shimamura (分担部分共著). 2004. Malay riverbank community: environment, network and transformation. In Furukawa, H., M. Nishibuchi, Y. Kono, and Y. Kaida eds. *Kyoto Area Studies on Asia Vol. 8: Ecological Destruction, Health, and Development -Advancing Asian Paradigms-*, Kyoto University Press, pp. 534-537.
- 百瀬邦泰. 2003. 「雲南の棚田地帯を涵養する雲霧帯の土地利用の変遷と竜山の消長」『アジア・アフリカ地域研究』3: 87-102.
- 王培英, 百瀬邦泰. 2003. 「太湖沿岸伝統型環境利用と沿岸農村社会的持続発展」『経済地理』2003(4): 524-528.
- Nakagawa, M., T. Itioka, K. Momose, T. Yumoto, F. Komai, K. Morimoto, B.H. Jordal, M. Kato, H. Kaling, A.A. Hamid, T. Inoue and T. Nakashizuka. 2003. Resource use of insect seed predators during general flowering and seeding events in a Bornean dipterocarp rainforest. *Bulletin of Entomological Research* 93: 455-466.
- Momose, K. and T. Shimamura. 2003. Vegetation zoning of Sumatran peat swamp forests. *Proceedings of the International Symposium on Land Management and Biodiversity in Southeast Asia*. Hokkaido University, JAPAN and Research Center for Biology, The Indonesian Institute of Sciences, Indonesia, pp. 61-68.
- MOMOSE, Kuniyasu. 2002. Ecological Factors of the Recently Expanding Style of Shifting Cultivation in Southeast Asian Subtropical Areas: Why Could Fallow Periods Be Shortened? *Southeast Asian Studies* 40(2): 190-199.
- Momose, K. 2002. Environments and people of Sumatran peat swamp forests II: distribution of villages and interactions between people and forests. *Southeast Asian Studies* 40(1): 87-108.
- Momose K, Shimamura T. 2002. Environment and people of Sumatran peat swamp forest. I: Distribution and typology of vegetation. *Southeast Asia Studis* 40(1): 74-85.
- Momose, K. 2002. Trends in Ecological Studies of West Malaysian Rainforests. *Kyoto Review of Southeast Asia* (Internet Journal: <http://kyotoreview.cseas.kyoto-u.ac.jp/issue/issue1/index.html>).

【口頭発表】

- 嶋村鉄也, 百瀬邦泰. 2003. Elevation dynamics and species coexistence caused by heterogeneity of cycles of matter in tropical peat swamp forests. 日本生態学会50回大会公募式シンポジウム (つくば国際会議場, 2003年3月19日 - 23日)
 - 百瀬邦泰, 嶋村鉄也. 2003. 「熱帯泥炭湿地林の植生帯分布の成因」日本熱帯生態学会13回大会 (鹿児島大学, 2003年6月13日 - 15日)
 - 嶋村鉄也, 百瀬邦泰. 2003. 「熱帯泥炭湿地林におけるエレベーションダイナミクス」日本熱帯生態学会13回大会 (鹿児島大学, 2003年6月13日 - 15日)
 - Momose, K. 2003. Malay riverbank community: environment, network and transformation. (Palangka Raya, Indonesia, 1st-2nd DEC, 2003)
 - 百瀬邦泰. 2002. 「熱帯雨林に住む人々にとっての植物」日本植物学会66回大会公開シンポジウム (京都大学, 2002年9月)
 - 嶋村鉄也, 百瀬邦泰. 2002. 「熱帯泥炭湿地林における林床・林冠の動態と種共存機構」日本熱帯生態学会12回大会 (金沢大学, 2002年6月14日 - 16日)
-

- 百瀬邦泰, 嶋村鉄也. 2002. 「泥炭湿地林の樹種の根の垂直的すみわけ」 日本熱帯生態学会12回大会 (金沢大学, 2002年6月14日 - 16日)
- 市岡孝朗, 百瀬邦泰ほか9名. 2002. 「一斉開花に対するオオミツバチ個体群の反応」 日本生態学会49回大会 (東北大学, 2002年3月26日 - 30日)
- 嶋村鉄也, 百瀬邦泰. 2002. 「熱帯泥炭湿地林における実生の更新」 日本生態学会49回大会 (東北大学, 2002年3月26日 - 30日)
- 百瀬邦泰. 2002. 「熱帯多雨林において、繁殖に関する形質の差異が同所的近縁種の共存に貢献しているのはなぜか?」 日本生態学会49回大会企画シンポジウム (東北大学, 2002年3月26~30日)
- Momose, K. and T. Shimamura. 2002. Vegetation zoning of Sumatran peat swamp forests”(1.7). *Tropical peat symposium 2002, Conjoint international symposium of JSPS and LIPI*, (Hotel Discovery, Bali, Indonesia, Sep. 2002)

長津一史 (NAGATSU, Kazufumi) 2002-2005

【著書・論文】

- 長津一史. 2005. 『マレーシア・サバ州における海サマ人の国家経験とイスラーム化』 (京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士学位 (地域研究) 請求論文) pp.397.
- 長津一史. 2005. 「マレーシア島嶼部 (サバ州)」 文化庁編『海外の宗教事情に関する調査報告書』文化庁. pp. 187- 210.
- 長津一史. (印刷中) 「越境移動の構図—西セレベス海におけるサマ人と国家」 関根政美・山本信人編『叢書現代東アジアと日本: 4 海域アジア』慶應義塾大学出版会.
- 長津一史. 2004. 「〈正しい〉宗教の政治学—マレーシア国境海域におけるイスラームと国家」 加藤剛編『変容する東南アジア社会—民族・宗教・文化の動態』めこん, pp.245-293.
- 長津一史. 2004. 「『正しい』宗教をめぐるポリティクス—マレーシア・サバ州、海サマ人社会における公的イスラームの経験」『文化人類学』69(1): 45-69.
- Nagatsu, Kazufumi. 2003. Islamization of the Sama Dilaut in Sabah, Malaysia, *IIAS News Letters* 31: 17.
- 長津一史. 2002. 「周辺イスラームにおける知の枠組み—マレーシア・サバ州、海サマ人の事例(1950-70年代)」『上智アジア学』20: 273-196.
- 長津一史. 2002. 「国境を利用して生きる人々」『アジアセンターニュース』20: 20-21.

岡本正明 (OKAMOTO, Masaaki)

【著書・論文】

- 岡本正明. (印刷中) 「『インドネシア化された海』、そしてその脱構築の可能性について」『東アジア『海』の信頼醸成』藤原書店.
- Okamoto, Masaaki. and Abdur Rozaki, eds. (Forthcoming) *Kelompok Kekerasan dan Bos Lokal di Indonesia Era Reformasi*, Yogyakarta: IRE Press.
- Okamoto, Masaaki. (Forthcoming) Broker Keamanan di Jakarta: Yang Profesional dan Yang Berbasis Massa. In Okamoto, Masaaki dan Abdur Rozaki eds., *Kelompok Kekerasan dan Bos Lokal di Indonesia Era Reformasi*, Yogyakarta: IRE Press.
- 岡本正明. 2006. 「現地通信：やくざ、暴力、呪力」『東南アジア研究』44(1): 97-99.
- 岡本正明. 2006. 「分権化に伴う暴力集団の政治的台頭—バンテン州におけるその歴史的背景と社会的特徴」 杉島敬志, 中村潔編『現代インドネシアの地方社会：ミクロロジーのアプローチ』NTT 出版, pp.43-66.
- Okamoto, Masaaki. 2005. Bagaimana Menemukan Kembali Banten dan/atau "Ke-Banten-an"? In Iwan Kusuma Hamdan, MA, Gundung Ismanto, MM and Abdul Malik, Msi eds. *Apa dan Siapa Orang Banten: Pandangan Hidup, Kosmologi, dan Budaya*. Serang: Biro Humas Setda Provinsi Banten. pp.161-174.
- 岡本正明. 2005. 「再集権化するインドネシア—内務省による権限奪回とユドヨノ新政権の展望」『インドネシアの将来展望と日本の援助政策』pp. 43-56.
- 岡本正明. 2005. 「荒れなかった 2004 年総選挙—インドネシアにおける『政治と暴力』の歴史をふまえて」 松井和久, 川村晃一編著『2004 年インドネシア総選挙と新政権の始動—メガワティからユドヨノへ』明石書店, pp.200-226.
- 岡本正明. 2005. 「分権・分離モデルから弱い集権・融合モデルへ—新地方分権制度と内務省の勝利」 松井和久, 川村晃一編著『2004 年インドネシア総選挙と新政権の始動—メガワティからユドヨノへ』明石書店, pp.343-362.
- 岡本正明. 2005. 「5 年おくれの『改革』—2004 年インドネシア・南スラウェシ州におけるゴルカル党の凋落」『アジア研究』51(2): 62-82.
- 岡本正明. 2005. 「インドネシアにおける地方政治の活性化と州『総督』の誕生—バンテン地方の政治：1998-2003」『東南アジア研究』34(1): 3-25.
- 岡本正明. 2005. 「2005 年地方首長直接選挙—インドネシアの地方政治・行政はどう変わるのか?」『アジア研ワールド・トレンド 12 月号』123. 38-40.
- 岡本正明. 2004. 「書評：玉田芳史『タイにおける民主化の虚像と実像』」『アジア・アフリカ地域研究』4: 136-140.
- Okamoto, Masaaki. 2004. Local Politics in Decentralized Indonesia: the Governor General of Banten Province. *IIAS Newsletter* 34: 23.
- 岡本正明. 2004. 「地方分権化後インドネシアの中央地方関係—自治体への権を締め始めた中央政府の諸政策について」

『インドネシアの将来展望と日本の援助政策』 pp.55-71.

- 岡本正明. 2003. 「東南アジアセミナー『フィールドとの関わり、フィールドへの貢献』」『京都大学東南アジア研究所ニュース “Newsletter”』 51: 5.
- 岡本正明. 2003. 「インドネシアの地方分権一分権の流れと問題の類型化」村松岐夫, 白石隆編 『日本の政治経済とアジア諸国 (上巻) 政治秩序篇』 pp.97-128.
- 岡本正明. 2002. 「警察権は誰の手に？」『インドネシア・ニュースレター』 40: 10-13.

【口頭発表】

- 岡本正明. 2006. 「インドネシア・ジャカルタの警備請負業：私物化される暴力のゆくえ」東アジア市民社会研究会（大阪市立大学創造都市研究科・梅田駅前教室, 2006年7月15日）
- 岡本正明. 2006. 「分権化後の地方政治の権力闘争—暴力、メディア、政策」朝日新聞ジャカルタ支部勉強会（ジャカルタ, ニッコー・ホテル, 2006年2月17日）
- 岡本正明. 2005. 「起業家的行政」(Entrepreneurial Governance) 概念導入のポリティクス—インドネシア・ゴロンタロ地方の政治：1998-2004—『インドネシアにおける「近代」の咀嚼』研究会（国立民族博物館, 2005年10月1日）
- 岡本正明. 2005. 「インドネシア政治研究：権威主義体制から民主化後の政治体制について」『比較のなかの東南アジア』研究会（京都大学東南アジア研究所, 2005年9月23日）
- 岡本正明. 2005. Voluntary Retreat of the State and After: Emerging New Pattern(s) of Local Politics in the Decentralized Indonesia: 1998-2004. 4th International Symposium of the Journal Antropologi Indonesia: Indonesia in the Changing Global Context: Building Cooperation and Partnership?. (University of Indonesia, Depok, Indonesia, 13th Jul. 2005)
- 岡本正明. 2005. 「インドネシアにおける民主化・分権化に伴う国家・社会変容、1998-2004：地方政治の視点から」アジア政経学会西日本大会 分科会2 「地方分権化インドネシアにおける地方政治の変容」（同志社大学, 2005年6月11日）
- 岡本正明. 2005. Local Politics in Decentralized Indonesia: The Governor General of Banten Province. 京都大学東南アジア研究所コロキウム（京都大学, 2005年1月27日）
- 岡本正明. 2004. 「インドネシアの選挙政治：直接選挙制導入に伴う政党政治の変容」アジア政経学会全国大会 分科会1 「東アジアにおける選挙政治」（東北大学, 2004年10月31日）
- 岡本正明. 2004. 「ガバナンス：地方政治と地方分権」（財）国際金融情報センター主催インドネシア研究会：インドネシアの将来展望と日本の援助政策（財務省, 2004年8月24日）
- 岡本正明. 2004. 「2004年総選挙と新政権の行方—インドネシアは生まれ変わるのか」ジェトロ・アジア経済研究所, ジャカルタ・ジャバングラブ SME 連合会共催研究会（ジャカルタ, ヒルトン・ホテル, 2004年8月12日）
- 岡本正明. 2003. 「インドネシアにおける地方分権について：中央地方関係、地方行政、地方政治」（財）国際金融情報センター主催インドネシア研究会：インドネシアの将来展望と日本の援助政策（財務省, 2003年10月21日）
- 岡本正明. 2003. 「Beberapa Prinsip Good Governance dan Penerapannya di Tingkat Desa: Berbagai Contoh Kasus yang Berkembang di Pulau Sulawesi」（良き統治の諸原則とその村レベルでの適用について：スラウェシ島における幾つかの事例）」ブルクンバ県・DFID 共催「良き統治の諸原則とその村レベルでの適用」（ブルクンバ県政府講堂, 2003年1月9日）

宋 現 鋒 (SONG, Xianfeng) 2002

【著書・論文】

- Song, X., Y. Kono, and M. Shibayama., 2004. An Open Source GIS Solution for Discovering Cambodia through Maps and Facts, *Proceedings of the FOSS/GRASS Users Conference*, Bangkok, Thailand, 12-14 September 2004.
- Song, X., M. Shibayama, Y. Kono, and K. Tanaka., 2004. The Construction of Geographic Collection Database Using Isite Z39.50/Dublin Core, *Japanese Geoinformatics* 15(2): 120-121. (in Japanese)
- Saphangthong, T., Y. Kono, X. Song, and S. Tomita., 2004. The Process of Land Use Changes in the Northern Laos: A Village-level Study in the Nam Beng River Basin, *Japanese Tropical Agriculture* 47(2): 79-80.
- Song, X., Y. Kono, K. Tanaka, and M. Shibayama., 2003. Integrating Geographic Information for Area Study under A Cyberspace: Experiences and Perspectives of Southeast Asian Studies, *Nara Symposium for Digital Silk Roads*, Nara, Japan, pp.306-317.
- Song, Xianfeng, Yasuyuki Kono, Koji Tanaka and Mamoru Shibayama., 2003. Integrating Geographic Collection Database Repositories With A Z39.50-Compliant Gateway, *Asian Journal of Geoinformatics*, 4(2): 31-36.

【口頭発表】

- Song, X. and Y. Kono., 2003. Serving Southeast Asia Topographic Atlas on the Web - An Open Source Free Software Approach, *The Pacific Neighborhood Consortium (PNC) Annual Conference and ECAI Joint Meetings*, Bangkok, Thailand, 6-9 November 2003.
 - Song, X., Y. Kono, and M. Shibayama., 2004. The Development Of Web Mapping Application Using Open Source GIS Solution, *International Symposium on Geoinformatics for Spatial Infrastructure Development in Earth and Allied Sciences 2004*. Hanoi, Vietnam, 16-18 September 2004.
 - Song, X. and Y. Kono., 2004. An Open Source GIS Solution to Web Mapping, *JSPS Asian Science Seminar 2004 - Advanced*
-

- Song, X. and Y. Kono,. 2002. Cataloguing agro-ecology geographic collections in Center for Southeast Asian Studies, COE Symposium - Utilization of Images and Geographical Information to Area Studies, Kyoto, Japan, 5 December 2002.
-

鈴木玲治 (SUZUKI, Reiji)

【著書・論文】

- Suzuki, Reiji. 2005. "Toward sustainable taungya teak reforestation in Myanmar", *The Asia-Pacific Agroforestry Newsletter* 27: 10-11, FAO.
 - Suzuki, Reiji, S. Takeda, and Saw Kelvin Keh. 2004. The impact of forest fire on the long-term sustainability of taungya teak reforestation in Bago Yoma, Myanmar, *Tropics* 14: 87-102.
 - 鈴木玲治. 2004. 「アグロフォレストリーによる熱帯造林の長期的持続性評価ーミャンマー連邦バゴー山地の事例ー」『食生活科学・文化及び地球環境科学に関する研究助成 研究紀要 (アサヒビール学術振興財団)』17: 173-182.
 - 鈴木玲治・竹田晋也・フラマウンテイン. 2003. 「ミャンマーのアグロフォレストリーータウンヤの農作物間作期の土壌養分動態ー」『熱帯農業』47 (別号 2) : 83-84.
 - 竹田晋也・鈴木玲治・サンルイン・フラマウンテイン. 2003. 「ミャンマー・バゴー山地におけるカレン焼畑のマッピング」『熱帯農業』47 (別号 2) : 81-82.
-

高田 明 (TAKADA, Akira)

【著書・論文】

- 高田明. (印刷中) 「言葉の向こう側：セントラル・カラハリ・サンにおけるナビゲーション実践の分析から」河合香吏編『生きる場の人類学：土地と自然をめぐる認識・実践・表象過程』京都：京都大学学術出版会.
- Takada, A. 2006. Explaining pathways in the Central Kalahari. In R. K. Hitchcock, K. Ikeya, M. Bieseke, and R. B. Lee eds., *Senri Ethnological Studies, "Updating the San: Image and reality of an African people in the 21st century"*. 70: 101-127.
- 高田明. 2006. 「グイ／ガナの養育者-乳児間相互行為：「サオ・カム」実践に関する覚え書き」菅野盾樹(編)『身体と動きの人間学』大阪：大阪大学大学院人間科学研究科基礎人間科学講座基礎人間学・現代記号学研究分野, pp.95-104.
- 高田明. 2006. 「キリンの足跡」『エコソフィア』17: 46-47.
- Takada, A. 2005. Mother-infant interactions among the !Xun: Analysis of gymnastic and breast-feeding behaviors. In Hewlett B. S. & M. E. Lamb eds., *Culture, Ecology and Psychology of Hunter-Gatherer Children*. New Brunswick, NJ: Transaction Publishers.
- Takada, A. 2005. Early vocal communication and social institution: Appellation and infant verse addressing among the Central Kalahari San. *Crossroads of Language, Interaction, and Culture* 6: 80-108.
- Takada, A. 2005. The importance of gesture and grammar in displaying directional markers: Evidence from the San of the Central Kalahari. In Sugawara, K. ed., *Construction and distribution of body resources: Correlations between ecological, symbolic and medical systems..*Tokyo, Japan: The head office of the project on "Distribution and sharing of resources in symbolic and ecological systems: Integrative model-building in anthropology" pp.31-55.
- 高田明. 2005. 「ナミビア北部におけるサンとオバンボの関係史」『アフリカレポート』40: 11-16.
- 高田明. 2005. 「ブッシュマンは自然を覚えて旅をする」水野一晴編『アフリカ自然学』東京：古今書院, pp.183-194.
- Takada, A. .2005. Comment on "Parent-Offspring weaning conflicts among the Bofi farmers and foragers of Central Africa" by Hillary N. Fouts, Barry S. Hewlett, and Michael E. Lamb. *Current Anthropology* 46(1): 44-45.
- 高田明. 2005. 「砂漠のトポグラフィ：セントラル・カラハリ・ブッシュマンのナビゲーション実践」『アジア・アフリカ言語文化研究所 通信』112: 59-60.
- 野中健一, 高田明. 2004. 「砂漠の道標：セントラル・カラハリ・ブッシュマンのナビゲーション技術」野中健一編『野生のナビゲーション：民族誌から空間認知の科学へ』東京：古今書院, 23-54.
- 高田明. 2004. 「移動生活と子育て：グイとガナにおけるジumnasティック場面の特徴」田中二郎, 佐藤俊, 菅原和孝, 太田至 (編)『遊動民：アフリカの原野に生きる』京都：昭和堂, pp.228-248.
- 高田明. 2003. 「子どもの発達と文化：心理学と人類学」片岡基明, 吉田直子編『子どもの発達心理学を学ぶ人のために』世界思想社, 208-231.
- 高田明. 2003. 「南部アフリカのサンにおける社会的相互行為の発達に関する研究」『京都大学大学院人間・環境学研究科博士論文』(未公開)

【口頭発表】

- Takada, A. 2007. Practices of early cultural learning: Responsibility in caregiver-infant interaction. *the CLIC Symposium on*
-

- Takada, A. 2006. Embodied space: Actions within navigation practice in the Kalahari environment. *the symposium "Crossing Disciplinary Boundaries and Re-visioning Area Studies: Perspectives from Asia and Africa" for The symposium for the 21st century COE program*, (Kyoto, Japan, 9th-13th November 2006).
 - 高田明. 2006. 「コメンテーター：ヒューマンインターアクションに関するワークショップ」 (埼玉大学教養学部, 2006年10月20日)
 - 高田明. 2006. 「ブッシュマンの環境認識とカラハリ砂漠の自然環境」日本アフリカ学会第43回学術大会 (大阪大学, 2006年5月27-28日) p.28
 - 高田明. 2006. 「養育行動の文化的構造再考」 日本発達心理学会第17回大会：大会準備委員会企画シンポジウム「子育てという文化」 (九州大学, 2006年3月20-22日) p.113.
 - Takada, A. 2006. Beyond the speech: Navigation practices of the Central Kalahari San. *Paper presented at the seminar, "Multimodal interaction and landscape"*. (Max Plank Institute, Nijmegen, 16th January 2006)
 - Takada, A. 2006. Naming practices among the Central Kalahari San (G|ui and G||ana): An anthropological approach on early vocal communication. *Paper presented at the 2nd International Symposium on Khoisan Languages and Linguistics, "Genesis and Development: In memory of Pastor Eliphaz Eiseb"*. (Riezler, Germany, January 8-12)
 - 高田明. 2005. 「セントラル・カラハリ・サンの養育者-乳児間相互行為における『アセスメント』」第5回ヒューマンサンエンス研究会 (大阪大学人間科学部, 2005年11月8日)
 - Takada, A. 2005. Activating ecological knowledge: Navigation practices in the Kalahari Desert. *Paper presented at the 27th Annual meeting of the Cognitive Science Society*. (Stresa, Italy, July 21-23. Abstracts) p.2558.
 - Takada, A. 2005. Interplay between gesture and deictic: An analysis of indexical expressions among the San of the Central Kalahari. *Paper presented at the 9th International Pragmatics Conference*. (Riva del Garda, Italy, July 10-15). Abstracts, pp.352-353.
 - 高田明. 2005. 「狩猟採集民の社会における移動生活と養育行動：異文化にみる子どもの発達」第21回日本霊長類学会・一般公開シンポジウム (倉敷市芸文館・別館, 2005年7月1-3日) (霊長類研究, 21 Supplement, vii)
 - 高田明. 2005. 「ナミビア北部におけるサンとオバンボの関係史」沙漠誌分科会第6回講演会「ポストコロニアル・アフリカ：その動態と課題」 (国立民族学博物館, 2005年3月19日)
 - Takada, A. 2004. Infant directed speech among the !Xun of North-Central Namibia. *Paper presented at the 103rd Annual meeting of American Anthropological Association*. (Atlanta, GA, December 15-19). Abstracts, p.440.
 - 高田明. 2004. 「評者：書評セッション『実践エスノメソドロジー入門』 (有斐閣)」2004年度エスノメソドロジー・会話分析研究会大会 (関西セミナーハウス, 2004年12月11-12日)
 - 高田明. 2004. 「社会的インタラクションの発達：ブッシュマンにおける民族誌的研究」発達コロキウム2004：文化の中の発達 (九州大学, 2004年11月6-7日)
 - 高田明. 2004. 「初期音声コミュニケーションと社会的制度：セントラル・カラハリ・サンにおける乳児への呼びかけと『詩』」第13回こころとからだ研究会 (滋賀県立大学人間文化学部, 2004年10月22日)
 - Takada, A. 2004. The importance of gesture and grammar in displaying directional markers: Evidence from the San of the Central Kalahari. *Paper presented at International Workshop: The Construction and the Distribution of Body Resources*. (Kyoto, Japan, 27th-29th September 2004).
 - 高田明. 2004. 「砂漠のトポグラフィ：セントラル・カラハリ・ブッシュマンのナビゲーション実践」プロジェクト研究会：土地・自然資源をめぐる認識・実践・表象過程 (東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2004年7月3日)
 - Takada, A. 2004. Early vocal communication and social institution: Appellation and verse addressing infant among the San of the Central Kalahari. *Paper presented at the 10th Annual Conference on Language, Interaction, and Culture*. (Los Angeles, CA, 13th-15th May 2004)
 - Takada, A. 2003. Early vocal communication among the Central Kalahari San. *Paper presented at the special lecture*. (Washington State University, 17th September 2003).
 - Takada, A. 2003. Preliminary analysis of early vocal communication among the San of Southern Africa. *Paper presented at the workshop: Social interaction and cultural learning*. (Communications Research Laboratory, Kyoto, Japan, 18th July 2003)
 - Takada, A. 2003. Desert Topography: Navigation Skill among the San of the Central Kalahari. *Paper presented at the 102nd Annual meeting of American Anthropological Association*. (Chicago, IL, November 19-23). Abstracts, p.443.
- Takada, A. 2002. Mother-infant interactions among the !Xun: Analysis of gymnastic and breast-feeding behaviors. *Paper presented at the Ninth international conference on hunting and gathering societies*. (Edinburgh, Scotland, 9th-13th September 2002)
-

玉田芳史 (TMADA, Yoshifumi)

【著書・論文】

- 玉田芳史. 2006. 「タイにおける外国人の政治的権利」河原祐馬, 植村和秀編著 『外国人参政権問題の国際比較』ナカニシヤ出版, pp.190-220.
- 玉田芳史. 2006. 「幻のタイ 2006 年 4 月総選挙：民主主義を揺るがす狂躁」『アジア研ワールド・トレンド』130: 28-31.
- 玉田芳史・木村 幹 (共編著). 2006. 『民主化とナショナリズムの現地点』ミネルヴァ書房 360p.
- 玉田芳史. 2005. 「タクシン政権の安定：発足 3 年目にあたって」『アジア・アフリカ地域研究』4(2): 167-194.
- 玉田芳史. 2005. 「タイにおける外国人の政治的権利：争点の変遷とその背景」『外国人参政権問題の国際比較研究』(平成 15・16 年度科学研究費補助金基盤研究(B)研究成果報告書 研究代表者・河原祐馬) pp.21-50.
- 玉田芳史. 2005. 「タイ政治の安定：2005 年 2 月総選挙を手がかりとして」『東・東南アジア諸国の民主化と安定』(平成 15・16 年度科学研究費補助金基盤研究(B)研究成果報告書 研究代表者・玉田芳史) pp.79-125.
- 玉田芳史. 2005. 『東・東南アジア諸国の民主化と安定』(平成 15・16 年度科学研究費補助金基盤研究(B)研究成果報告書) p.150.
- 玉田芳史. 2005. 「タイの総選挙－与党はなぜ圧勝したのか－」『アジア研ワールド・トレンド』116: 28-31.
- 玉田芳史. 2005. 「迫る総選挙、タクシン政権の今後と日本への影響 (講演記録) 後編」『JTECS 日・タイ パートナシップ』82-83: 3, 4, 8.
- 玉田芳史. 2004. 「タイ社会と法?1997 年憲法を手がかりとして」『東アジア社会の法と近代化』(平成 16 年科学研究費補助金基盤研究(A)(2)成果報告書 研究代表者・棚瀬孝雄) pp.191-215.
- Tamada, Yoshifumi. 2004. “Khamniyom”(図書推薦の言葉) Nithi Iosiwong and Atthacak Sattayanurak, Kioto tai changuam doi suthep (Bangkok: Matichon), pp.(10)-(15).
- 玉田芳史. 2004. 「迫る総選挙、タクシン政権の今後と日本への影響 (講演記録) 前編」『JTECS 日・タイ パートナシップ』81: 1-7.
- 玉田芳史. 2003. 「民主化の過程」(pp.41-45), 「タイ政治の特色」(pp.48-52), 「軍部と政治」(pp.57-59) 綾部恒雄, 林行夫編著『タイを知るための 60 章』明石書店.
- 玉田芳史. 2003. 「タイの民主化過程」(pp.126-127), 「1992 年 5 月事件」(pp.128), 「1997 年憲法」(pp.129), 「地方分権」(pp.130), 「軍隊の政治力と人事異動」(pp.131) 『タイ国別援助研究会報告書』独立行政法人国際協力機構国際協力総合研修所.
- 玉田芳史. 2003. 『民主化の虚像と実像：現代タイ政治変動のメカニズム』京都大学学術出版会, 364p.
- 玉田芳史. 2003. 「タイの経済危機とナショナリズム」『ナショナリズムの「プライド」と「アイデンティティ」』(平成 13 年度-平成 14 年度科学研究費補助金基盤研究(C)(1)成果報告書) pp.62-83.
- 玉田芳史. 2003. 「タイの漸進的民主化」『東・東南アジア地域諸国の民主化過程に関する比較史的研究』(平成 13 年度-平成 14 年度科学研究費補助金基盤研究(C)(1)成果報告書 研究代表者・玉田芳史) pp.125-150.
- 玉田芳史. 2003. 「タイ政治の変容」『アジア遊学』57: 23-33.
- 玉田芳史. 2003. 『東・東南アジア地域諸国の民主化過程に関する比較史的研究』(平成 13 年度・平成 14 年度科学研究費補助金基盤研究(C)(1)成果報告書) p.150.
- 玉田芳史. 2003. 「タクシン政権下の政治動向」『タイ国別援助研究会報告書』独立行政法人国際協力機構国際協力総合研修所 pp.45-48.
- 玉田芳史. 2003. 「タイの民主化と安定」村松岐夫・白石隆編『日文研叢書 30 I : 日本の政治経済とアジア諸国 (上巻: 政治秩序篇)』21-37.
- 玉田芳史. 2002. 「タイ軍の人事異動と政治力低下」『アジア・アフリカ地域研究』2: 120-172.

【口頭発表】

- 玉田芳史. 2005. 「民主化以降のタイ政治：怪物タクシン」日本政治学会 2005 年度研究大会 (明治大学, 2005 年 10 月 1 日)
- 玉田芳史. 2005. 「タイの政党政治：民主化との関連で」第 8 回日本比較政治学会研究大会 (名古屋大学, 2005 年 6 月 26 日)
- 玉田芳史. 2004. Democratization and the May 1992 Incident in Thailand. 第 5 回タイ政治学会全国大会 (バンコク・バイテック会議場, 2004 年 12 月) (報告要旨集: pp.13-41~13-82)
- 玉田芳史. 2003. Yipun wiphak kansuksa prawatisat kanmuang 特別セミナー (チューラーロンコーン大学文学部歴史学科, 2003 年 8 月 6 日)
- 玉田芳史. 2003. 「タクシン時代のタイ政治：政権と体制の安定をめぐる」第 5 回日本タイ学会研究大会 (2003 年 7 月 13 日)
- 玉田芳史. 2002. 「タイ政治の腐敗と民主化」日本政治学会 2002 年度研究大会 (愛媛大学, 2002 年 10 月 6 日)

田中二郎 (TANAKA, Jiro) 2002-2003

【著書・論文】

- 田中二郎, 佐藤俊, 菅原和孝, 太田至共編. 2004. 『遊動民 (ノマッド) - アフリカに生きる』昭和堂, 711pp.

-
- 田中二郎. 2004. 「原野の知恵を求めて：ブッシュマンとの37年」『遊動民（ノマッド）－アフリカに生きる』昭和堂.
-

梅川通久 (UMEKAWA, Michihisa)

【著書・論文】

- Umekawa, M. 2006. Self-Gravitational MHD Simulations of Magnetized Gas layers. In W. Sutantyo, P. W. Premadi, P. Mahasena, T. Hidayat, and S. Mineshige eds. *Proceedings of the 9th Asian-Pacific Regional IAU Meeting*, ITB Press (国際会議:バリ、インドネシア) pp.176-177.
- 荒木茂, 梅川通久. 2005. 「地域研究画像データベース」 <http://areainfo.asafas.kyoto-u.ac.jp/pdb/>
- 梅川通久, 内藤智恵子. 2004. 「アクセス統計へのコメント」 「世界を先導する総合的地域研究拠点の形成」 ウェブサイト記事 http://areainfo.asafas.kyoto-u.ac.jp/japan/areainfo/21coeaccess/access_umekawa1.html
- 梅川通久. 2003. 「21 世紀 COE 研究員活動報告」 『21 世紀 COE プログラム「世界を先導する総合的地域研究拠点の形成」 Web Site, <http://areainfo.asafas.kyoto-u.ac.jp/japan/activities/fsta/umekawa/umekawa.html>
- 梅川通久. 2003. 「マレーシア・フィールド・ステーションにおけるネットワーク環境の調査と整備」 21 世紀 COE プログラム「世界を先導する総合的地域研究拠点の形成」 Web Site, http://areainfo.asafas.kyoto-u.ac.jp/japan/activities/fsta/15k_umekawa/umekawa.html
- 梅川通久. 2003. 「分子雲圧縮層の分裂過程に関する 3 次元数値 MHD 実験」『国立天文台天文学データ解析計算センター年報』 14.
- Umekawa, M. 2002. Mass Spectrum of Magnetized Self-Gravitational Molecular Clumps Created by Fragmentation of a Pressure Bounded Gas Layer. The Proceedings of the *IAU 8th Asian-Pacific Regional Meeting*, II: 227-228.

【口頭発表】

- 梅川通久, 荒木茂. 2005. 「クリッカブル・マップによる地域研究画像データベースの集成」 東京大学空間情報科学研究センター第 8 回年次シンポジウム(東京大学山上会館, 2005 年 9 月)

王 柳 蘭 (Wang Liulang)

【著書・論文】

- 王柳蘭. 2006. 「北タイにおけるイスラーム環境の生成過程—雲南系ムスリムの事例から—」平成 15～17 年度科学研究補助金（基盤研究（B））研究成果報告書（研究代表者 林行夫）『東南アジア大陸部・西南中国の宗教と社会変容—制度・境域・実践』, pp.801-845.
- 王柳蘭. 2006. 「『難民』から『華』人への道—戦乱と越境に生きる北タイ雲南人の民族誌」（博士学位申請論文）京都大学大学院人間・環境学研究科.
- 王柳蘭. 2005. 「書評『友情と私利—香港一日系スーパーの人類学的研究』王向華著 風響社」『文化人類学』70(2): 281-285.
- 王柳蘭. 2004. 「国境を越える『雲南人』—北タイにおける移動と定着にみられる集団の生成過程—」『アジア・アフリカ言語文化研究』 67: 211-262.
- Wang Liulan, Weerachai Nanakorn and Katsuyoshi Fukui. 2003. Food and Medicinal Plants Used for Childbirth among Yunnanese Chinese in Northern Thailand. *Journal of Ethnobiology* 23(2) fall/winter issue: 209-226.
- 王柳蘭. 2003. 「タイの華人社会—変容する華人像」綾部恒雄・林行夫編『タイを知るための 60 章』明石書店, 130-135.

【口頭発表】

- 王柳蘭. 2006. 「『難民』から『華』人への道—戦乱と越境に生きる北タイ雲南人の民族誌」 2006 年度文化人類学会近畿地区第 1 回研究懇談会、博士論文報告会（神戸大学, 2006 年 7 月 1 日）
 - Wang, Liulan. 2005. 'Migratory History and Network Building of the Yunnanese Muslim on the Thai-Myanmar Border'. *Seasrep 10th Anniversary Conference*. (Chiang Mai Thailand, 9 December, 2005)
 - Wang, Liulan. 2005. The Process of Marginalization and the Representation of Identity among the Yunnanese Muslims in Northern Thailand. *The Ninth International Conference on Thai Studies*. (DeKalb Illinois, 5 April, 2005)
 - 王柳蘭. 2005. 「移住と定着からみた集団の生成過程—北タイ国境の雲南人の事例から」 第 39 回日本文化人類学会研究大会（北海道大学, 2005 年 5 月 22 日）
 - 王柳蘭. 2005. 「錯綜する移住史—北タイへの定着過程における雲南系漢人と雲南系回民の事例から」 第 7 回日本タイ学会（独立行政法人 日本学生支援機構 大分, 2005 年 7 月 9 日）
 - 王柳蘭. 2004. 「出産をめぐる医食文化と薬草療法—北タイにすむ雲南省華人の事例から」 日本薬学会第 124 年会ミニシンポジウム「天然薬物のフィールドワークを考える」（ハイアット・リージェンシー・オオサカ, 2004 年 3 月 30 日）
 - 王柳蘭. 2003. 「北タイ雲南系漢人の移動と定着過程からみた集団の生成」 北陸人類学研究会第 90 回例会：「東南アジア大陸部社会の現在」（金沢大学, 2003 年 12 月 13 日）
-

山田 勇 (YAMADA, Isamu) 2002-2005

【著書・論文】

- 山田勇. 2005. 「東南アジアの低湿地」『地理月報』488.
- 山田勇. 2005. 「京都発地球生態資源への旅(25): 東インドネシアの生態資源(4)」『科学』75(12): 1432-1437.
- 山田勇. 2005. 「京都発地球生態資源への旅(24): 東インドネシアの生態資源(3)」『科学』75(11): 1321-1326.
- 山田勇. 2005. 「京都発地球生態資源への旅(23): 東インドネシアの生態資源(2)」『科学』75(10): 1206-1213.
- 山田勇. 2005. 「京都発地球生態資源への旅(22): 東インドネシアの生態資源(1)」『科学』75(9): 1095-1101.
- 山田勇. 2005. 「京都発地球生態資源への旅(21): ヒマラヤをみて成都へ」『科学』75(8): 983-987.
- 山田勇. 2005. 「京都発地球生態資源への旅(20): かわりゆくチベット」『科学』75(7): 879-885.
- 山田勇. 2005. 「京都発地球生態資源への旅(19): ヤルツェンボと沿江巨柏」『科学』75(6): 755-759.
- 山田勇. 2005. 「京都発地球生態資源への旅(18): 昌都の北から南へー玉曲上流と然鳥湖の祭ー」『科学』75(5): 609-613.
- 山田勇. 2005. 「京都発地球生態資源への旅(17): 雲杉帯で野宿」『科学』75(4): 510-514.
- 山田勇. 2005. 「京都発地球生態資源への旅(16): 巴青から丁青へ」『科学』75(3): 392-396.
- 山田勇. 2005. 「森林資源」『歴史学事典』, 弘文堂.
- 山田勇. 2005. 「京都発地球生態資源への旅(15): 美しき谷」『科学』75(2): 227-233.
- 山田勇. 2005. 「京都発地球生態資源への旅(14): ラサから那曲へ」『科学』75(1): 120-125.
- 山田勇. 2004. 「京都発地球生態資源への旅(13): 三国志の世界」『科学』74(12): 1450-1454.
- 山田勇. 2004. 「京都発地球生態資源への旅(12): 再びチベットへ (出発前後)」『科学』74(11): 1341-1345.
- 山田勇. 2004. 「京都発地球生態資源への旅(11): 沖縄への旅」『科学』74(10): 1172-1177.
- 山田勇. 2004. 「京都発地球生態資源への旅(10): 新緑の木曽路」『科学』74(9): 1124-1129.
- 山田勇. 2004. 「京都発地球生態資源への旅(9): 京都の春」『科学』74(8): 1008-1011.
- 山田勇. 2004. 「京都発地球生態資源への旅(8): バリエコツアーリンク」『科学』74(7): 899-905.
- 山田勇. 2004. 「京都発地球生態資源への旅(7): バリ島への想い (続)」『科学』74(6): 776-782.
- 山田勇. 2004. 「山の森世界」梅棹忠夫編『山の世界』岩波書店, pp125-134.
- 山田勇. 2004. 「京都発地球生態資源への旅(5)ーバリ島への想い」『科学』74(5): 657-661.
- 山田勇. 2004. 「京都発地球生態資源への旅(4)ーフィールドワークと病気」『科学』74(4): 557-564.
- 山田勇. 2004. 「沈香の茶入」『集める! 私のコレクション自慢』岩波書店, 95-112.
- 山田勇. 2004. 「京都発地球生態資源への旅(3)ーイラン点描」『科学』74(3): 366-373.
- 山田勇. 2004. 「京都発地球生態資源への旅(2)ーイランという国 (続)」『科学』74(2): 235-239.
- 山田勇. 2004. 「京都発地球生態資源への旅(1)ーイランという国」『科学』74(1): 125-130.
- 山田勇. 2003. 「京都発地球生態資源への旅ーチベットと今西錦司」『科学』73(12): 1355-1361.
- 山田勇. 2003. 「世界の森をあるく(6)ー世界の森への道」『エコソフィア』12: 72-79.
- 山田勇. 2003. 「世界の森をあるく(5)ー日本の森から」『エコソフィア』11: 46-53.
- 山田勇. 2003. 「変貌するアジアの現実にはいかに対処するか: 巻頭言」『フォレストコンサル』94: 1-3.
- Yamada, Isamu. 2003. Peat Swamp Forests in Borneo and Sumatra-Original state, development and disaster during the past 50 years with a proposal for future eco-resource management, *Proceedings of the International Symposium on, Land Management and Biodiversity in Southeast Asia, Hokkaido University & Research Center for Biology, The Indonesian Institute of Sciences*, pp. 7-13.
- 山田勇. 2003. 「土地利用変化、森林減少」『生態学事典』共立出版.
- 山田勇. 2002. 「屋久島を想う」『世界遺産屋久島』講談社, 129-132.
- Yamada, Isamu. 2002. Sustainable Utilization of the Upper Montane Sago Species (*Eugeissona utilis* and *Arenga undulatifolia*) in the Central Mountain Range of East Kalimantan, Indonesia, In Kainuma, K., M. Okazaki, Y. Toyoda, J. E. Cecil, eds., *New Frontiers of Sago Palm Studies*, pp. 237-244.
- Yamada, Isamu. 2002. Disaster and Rehabilitation, *Kyoto Review*.
- 山田勇. 2002. 「山の森世界」『科学』72(12): 1221-1225.
- 山田勇. 2002. 「エコソリズムと生態資源」『科学』72(7): 690-695.
- 山田勇. 2002. 「楽園への旅: 巻頭言」『科学』72(7).
- 山田勇. 2002. 「世界の森をあるく(4)ーアマゾンの森」『エコソフィア』10: 54-61.
- 山田勇. 2002. 「世界の森をあるく(3)ー東南アジア大陸部のモンスーン林」『エコソフィア』9: 60-67.

山越 言 (YAMAKOSHI, Gen)

【著書・論文】

- Yamakoshi, G. 2006. An indigenous concept of landscape management for chimpanzee conservation at Bossou, Guinea. In J. Maruyama, L. Wang, T. Fujikura, M. Ito, eds. *Proceedings of Kyoto Symposium 2006, "Crossing Disciplinary Boundaries and Re-visioning Area Studies: Perspectives from Asia and Africa"*. pp. 3-10.
- 山越言. 2006. 「野生チンパンジーとの共存を支える在来知に基づいた保全モデルーギニア・ボッソウ村における住民運動の事例からー」『環境社会学研究』12: 120-135.
- 山越言. 2006. 「生きもの博物誌: ヒトとチンパンジーの差は数パーセント」『月刊みんぱく』30(4): 20-21.

- Yamakoshi, G. 2005. What is happening on the border between humans and chimpanzees?: Wildlife conservation in West African rural landscapes. In Hiramatsu, K. ed., *Proceedings of the 7th Kyoto University International Symposium, 2005. "Coexistence with Nature in a 'Glocalizing' World: Field Science perspectives"*. pp. 91-97.
- 山越言. 2005. 「コメント：本田裕子著 地域住民による野生生物保護へのかかわりー「共生」とどうつきあうか？豊岡市コウノトリの野生復帰計画を事例に」『エコソフィア』16: 97.
- 山越言. 2005. 「大型類人猿の知性と技術行動の進化」『分子精神医学』5(4): 418-423.
- 山越言. 2005. 「アフリカの気候変動と植生変化から見た類人猿とヒトの進化」水野一晴編著『アフリカ自然学』古今書院.
- 山越言. 2005. 「ギニアの精霊の森に暮らすチンパンジー」水野一晴編著『アフリカ自然学』古今書院.
- 松沢哲郎, タチアナ・ハムル, カテリーナ・クープス, ドラ・ビロ, 林美里, クローディア・ソウザ, 水野友有, 加藤朗野, 山越言, 大橋岳, 杉山幸丸, マカン・クールマ. 2004. 「ボッソウ・ニンバの野生チンパンジー：2003年の流行病による大量死と『緑の回廊』計画」『霊長類研究』20(1): 45-55.
- 山越言. 2004. 「声なき侵入者」『アジア・アフリカ地域研究情報マガジン』15.
- Yamakoshi, G. 2004. Evolution of complex feeding techniques in primates: Is this the origin of great-ape intelligence?. In A. E. Russon & D. Begun eds., *The Evolution of Thought: Evolutionary Origins of Great Ape Intelligence*. Cambridge University Press.
- Yamakoshi, G. 2004. Food Seasonality and Socioecology in Pan: Are West African Chimpanzees Another Bonobo?, *African Study Monographs* 25: 45-60.
- Yamakoshi, G. and M. Myowa-Yamakoshi. 2004. New observations of ant-dipping techniques in wild chimpanzees at Bossou, Guinea, *Primates* 45: 25-32.
- 山越言. 2003. 「道具の使用」巖佐庸, 松本忠夫, 菊沢喜八郎, 日本生態学会編『生態学事典』共立出版, pp.418-419.
- Biro, D., N. Inoue-Nakamura, R. Tonooka, G. Yamakoshi, C. Sousa, and T. Matsuzawa. 2003. Cultural innovation and transmission of tool use in wild chimpanzees: Evidence from field experiments. *Animal Cognition* 6: 213-227. (Citation Index 未調査)
- 山越言. 2003. 「ギニアの森の成り立ちー景観に埋め込まれた生態史を読むー」『アジア・アフリカ地域研究』3: 237-248.
- 山越言. 2002. 「21世紀のフィールドワークとは？」『科学』72(1): 16-18.
- Yamakoshi, G. 2002. The village in Guinea where chimpanzees live alongside humans. *The Toyota Foundation Occasional Report* 32: 1-4.
- 山越言. 2002. 「書評『アフリカで象と暮らす』中村千秋著, 文春文庫」『エコソフィア』10: 123.

【口頭発表】

- Yamakoshi, G. 2006. Les Chimpanzes de Bossou et leur habitat: Histoires d'avant 1976. *International Symposium "Bossou 30 Ans"* (Conakry, Republic of Guinea, 27-29 November 2006)
- Yamakoshi, G. 2006. History and ecology of peri-village forests in Bossou, Guinea. *Satellite Workshop 4, "Constructing Rural Landscapes: Illustrating the Ecological Histories of Africa and Asia"*, Kyoto Symposium 2006, "Crossing Disciplinary Boundaries and Re-visioning Area Studies: Perspectives from Asia and Africa"(Kyoto, Japan, 10 November 2006)
- Yamakoshi, G. 2006. An indigenous concept of landscape management for chimpanzee conservation at Bossou, Guinea. *Kyoto Symposium 2006, "Crossing Disciplinary Boundaries and Re-visioning Area Studies: Perspectives from Asia and Africa"*(Kyoto, Japan, 9-13 November 2006)
- 山越言. 2006. 「ギニア共和国ボッソウ村における精霊の森の生態史」第43回日本アフリカ学会学術大会（吹田, 大阪大学, 2006年5月27-28日）
- 山越言. 2006. 「聖なるものを手なずけること：ギニア・ボッソウにおけるチンパンジー研究の現状と将来」第35回ホミニゼーション研究会（犬山, 犬山国際観光センター・フロイデ, 2006年3月17-18日）
- Yamakoshi, G. 2005. What is happening on the border between humans and chimpanzees?: Wildlife conservation in West African rural landscapes. *The 7th Kyoto University International Symposium, 2005. "Coexistence with Nature in a 'Glocalizing' World: Field Science perspectives"*(Bangkok, Thailand, November 23-24, 2005).
- 山越言. 2005. 「映像・リズム・トークによるアート アンド エイブス（中島貞夫企画・構成）：チンパンジー」第8回 SAGA シンポジウム：舞台公演『アート アンド エイブスー大型類人猿から芸術を考えるー』（河南町, 大阪芸術大学, 2005年11月18-20日）
- Yamakoshi, G. 2005. Social learning of feeding techniques in primate evolution. *IX International Mammalogical Congress, Symposium "Delphinid and primate social ecology: A comparative overview"*. (Sapporo, Japan, August 1, 2005)
- Yamakoshi, G. 2005. Evolution of complex feeding techniques among primates: Tools for invading new niche?. *Kyoto Conference "Delphinid and Primate Social Ecology: Comparative Discussion"* (Kyoto, Japan, July 29 - 30, 2005)
- 山越言. 2005. 「ボッソウ・ニンバ地域のチンパンジー」第21回日本霊長類学会大会 GRASP-Japan 公開シンポジウム『GRASP-Japan:日本人による大型類人猿の研究と保全活動』（倉敷市芸文館別館, 2005年7月3日）
- 山越言. 2005. 「ボッソウのチンパンジー集団における個体群動態から見た持続可能性の危機：研究活動と保全の危ういバランス」第21回日本霊長類学会大会 自由集会『海外フィールドの運営と維持(2)：問題点の解決法』（倉敷市芸文館別館, 2005年7月1日）
- 山越言. 2005. 「ヒトの進化における採食ニッチの変遷ー栽培に続く長い道のりー」共同研究会『ドメスティケーションの民族生物学的研究』（京都大学時計台記念館, 2005年6月25日）

- 山越言. 2005. 社会的知性仮説は大型類人猿ーヒト的な知性の進化を説明できるか」日本発達心理学会第 16 回大会公開シンポジウム（神戸国際会議場, 2005 年 3 月 28 日）
- 山越言. 2005. 「サルはなぜ栽培をしないのか：霊長類における『ニッチ構築』を考える」民族自然誌研究会第 38 回研究例会（京大会館, 2005 年 1 月 29 日）
- 山越言. 2004. 「ヒトの親戚たちの睡眠環境をめぐる謎：なぜ大型類人猿だけが『ベッド』を作るのか」平成 16 年度第 2 回睡眠文化研究会（京都大学, 2004 年 9 月 26 日）
- 山越言. 2004. 「社会生態学理論におけるマイノリティとしての類人猿」第 20 回日本霊長類学会大会 自由集会『霊長類における社会構造の進化再訪』（犬山, 京都大学霊長類研究所, 2004 年 7 月 2 日）
- 山越言. 2004. 「人とチンパンジーを分かちつなげる道具：使用と製作、そして祖霊崇拝と進化論」日本文化人類学会第 38 回研究大会 日本文化人類学会・日本人類学会連合シンポジウム『社会の中で道具を作る／使うー進化と文化の接面での討議ー』（府中, 東京外国語大学, 2004 年 6 月 5 日）
- 山越言. 2004. 『西アフリカ・ギニアの「精霊の森」：その保全生物学的役割について』平成 16 年度社叢学会研究発表会（名古屋, 熱田神宮, 2004 年 5 月 30 日）
- Yamakoshi, G. 2004. Chimpanzee conservation in West African rural landscapes: A case study in Bossou, Guinea. *The first HOPE International Workshop "Evolutionary Neighbors: From Genes to Mind"* (Kyoto, Japan, March 6-7, 2004)
- Yamakoshi, G. 2004. Ant-dipping behavior for carpenter ants (*Camponotus brutus*) by Bossou chimpanzees. *An International Symposium "African Great Apes: Evolution, Diversity and Conservation"* (Kyoto, Japan, March 3-5, 2004) (Poster).
- 山越言. 2003. 『ボッソウ・チンパンジーにおけるアリ釣り行動の新しい観察：「マイノリティ・リポートを探せ」』第 19 回日本霊長類学会大会（仙台, 宮城教育大学, 2003 年 6 月 27-29 日）
- Yamakoshi, G. 2003. Primate feeding techniques and the evolution of hominin dietary adaptations. *International Symposium. "Human Origins and Environmental Backgrounds"* (Kyoto, Japan, March 20-22, 2003).
- Yamakoshi, G.. 2002. Ecology of chimpanzees' tool use: Implications for hominid and hominoid evolution. *The COE International Symposium, "Evolution of the Apes and the Origin of Human Beings"* (Inuyama, Japan, November 14-17, 2002).
- 山越言. 2002. 「西アフリカ農村における在来価値観に基づいた野生生物保全：「精霊の森」をめぐる文化と自然の共存」トヨタ財団研究助成若手研究者の集い『ひとの営みと環境』（京都私学会館, 京都, 2002 年 1 月 24-25 日）
- Yamakoshi, G., S. Hirata, G. Ohashi, and T. Matsuzawa, 2002. Current conservation status of Bossou chimpanzees?: Local tradition, habitat isolation and a corridorbuilding project (Green Passage Plan). *Inuyama COE International Symposium, "Research on Long-Lived Animals: The Past, Present and Future of Longitudinal Studies"*. (Inuyama, Japan, January 15-18, 2002) (Poster)

柳澤雅之（YANAGISAWA, Masayuki）

【著書・論文】

- 柳澤雅之（代表執筆者）. 2006. 「京大式フィールドワーク入門」京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科，東南アジア研究所編，NTT 出版。
 - Dao Minh Truong; Y. Kono, and M. Yanagisawa., 2005. Dynamics of land cover-land use in villages of the Vietnam Northern mountain region: Impacts of human activities. *International journal of Geoinformatics* 1(1): 165-170.
 - 柳澤雅之. 2004. 「ベトナム紅河デルタにおける農業生産システムの変化と合作社の役割」『年報村落社会研究：東アジア農村の兼業化ーその持続性への展望』40: 247-268.
 - 柳澤雅之. 2004. 「山と平野、水と土ー二大デルタの自然と農業ー」今井昭夫, 岩井美佐紀編著『現代ベトナムを知るための 60 章』東京：明石書店, pp.74-80.
 - 佐々木有道, 柳澤雅之, 縄田栄治. 2004. 「ベトナム北西部山岳部における近年の農業変容ーSon La 省 Moc Chau 県の事例ー」『熱帯農業』48 (別号 1): 99-100.
 - 柳澤雅之. 2004. 「紅河デルタ村落における農業生産システムの変容に関する研究（平成 16 年度日本熱帯農業学会賞奨励賞受賞記念講演要旨）」『熱帯農業』48 (別号 1): 125-128.
 - Yamada K., M. Yanagisawa., Y. Kono, and E. Nawata., 2004. Use of Natural Biological Resources and Their Roles in Household Food Security in Northwest Laos, *Southeast Asian Studies* 41(4): 426-443.
 - Sakurai K., H. Kawazu, Y. Kono, M. Yanagisawa, Le Van Tiem, Le Quoc Doanh, N. Dangthaisong, and Trinh Ngoc Chau., 2004. Impact of Agricultural Practices on Slope Land Soil Properties of the Mountainous Region of Northern Vietnam: A Case Study in Bac Ha District, Lao Cai Province, *Southeast Asian Studies* 41(4): 503-518.
 - Yanagisawa, M. 2004. Development process of cash crops in the Northern mountains region of Vietnam: A case study in Moc chau district of Son la province, Vietnam, In Furukawa, H., M. Nishibuchi, Y. Kono, and Y. Kaida., eds., *Ecological destruction, health, and development: Advancing Asian paradigm*, Japan: Kyoto University Press, pp. 467-479.
 - Yanagisawa, M. 2003. Agricultural intensification and diversification in the Northern mountains region of Vietnam. In Hayashi, Y.; and Thongsa, S.eds. *Cultural diversify and conservation in the making of mainland Southeast Asia an Southwestern China regional dynamics in the past and present*, pp.379-393. Bangkok: Amarin Printing and Publishing Public Company Ltd.
 - DiGregorio, M., A. T. Rambo, and M. Yanagisawa., 2003. Clean, green, and beautiful: Environment and development under the renovation economy, In Hy Van Luong.ed. *Postwar Vietnam: Dynamics of a transforming society*, Maryland: Rowman & Littlefield
-

Publishers, INC. pp.171-200.

- Yanagisawa, M. 2003. “Thay đổi vai trò nhưng không thay đổi chức năng của hợp tác xã trong các hoạt động kinh tế-xã hội ở đồng bằng sông Hồng, Việt nam: Những thay đổi trong cấu trúc kinh tế - xã hội ở hợp tác xã Cốc Thành, 1981-1998 (Changing roles and unchanging function of cooperatives in economic activities in the Red River Delta, Vietnam: Changes in socio-economic structure in Coc Thanh cooperative, 1981-1998)” *Paper presented at the workshop on Vietnamese village studies.*
 - 柳澤雅之. 2003. 「地域研究と村落調査」池端雪浦ほか編『東南アジア史別巻－東南アジア史研究案内－』東京: 岩波書店, pp.111-116.
 - Michael DiGregorio, A. Terry Rambo, and Masayuki Yanagisawa,. 2003. Clean, green, and beautiful: Environment and development under the renovation economy, In Hy Van Luong, ed., *Postwar Vietnam: Dynamics of a transforming society*, USA: Rowman & Littlefield Publishers, pp. 171-200.
 - Kono, Y.; Yanagisawa, M.; and Dang The Phong. 2002. Quản lý cộng đồng các hệ thống thủy lợi ở châu thổ sông Hồng, Việt Nam”, In *Các nhà Việt Nam học nước ngoài viết về Việt Nam tập 2*, edited by Phan Huy Lê. pp.323-334. Hanoi: Nhà xuất bản thế giới.
 - Yanagisawa, M. 2002. Activities of a cooperative in support of agricultural production in the Red River Delta: A cooperative as a bridging organization” *Paper presented at the International Workshop on Vietnamese Peasants’ Activity: An interaction between culture and nature.*
-

COE 研究員

荒木美奈子 (ARAKI, Minako) 2005

【著書・論文】

- 荒木美奈子. 印刷中. 「『開発』の現場でのインターアクションー実践と研究の狭間での一考察」 重田眞義編『アフリカの力』 京都大学学術出版会
- ARAKI, Minako. 2007 “Local Notions of Participation and Diversification of Group Activities in Southern Tanzania.” In Itani, J. & Araki, M. eds., *Rural Development Reconsidered: People's Responses to Globalization in Tanzania. African Study Monographs*, Supplementary Issue No.36:59-70.
- ARAKI, Minako. 2005 "Reconsidering Participation: Local Notion of Participation and Diversification of Group Activities in Southern Tanzania" *21COE International Workshop* (Dar es Salaam, Tanzania) 12/13

金子守恵 (KANEKO, Morie) 2005

【著書・論文】

- 金子守恵. 2005. 「地縁技術としての土器づくりーエチオピア西南部アリ地域における土器の野焼き」 『アフリカ研究』 67: 1-18.
- 金子守恵. 2005. 「文脈化される土器づくりの過程：エチオピア西南部オモ系農耕民アリの女性職人による地縁技術の習得・実践・創造」 京都大学大学院博士課程アジア・アフリカ地域研究研究科学学位P 246p.

【口頭発表】

- 金子守恵. 2005. 「こうやって、こうやって、つくるのよ：農耕民アリの女性職人による土器づくりの習得過程」 第21回日本霊長類学会学術大会公開シンポジウム（倉敷市芸文館, 2005年7月1日-3日）
- 金子守恵. 2005. 「地縁技術としての土器づくり：エチオピア西南部アリの女性職人による土器の野焼き」 第42回日本アフリカ学会学術大会（東京外国語大学, 2005年5月28日-29日）
- 金子守恵. 2005. 「身体技法にみるテクノ・ライフヒストリー：エチオピア西南部アリ女性職人の土器づくり」 第39回日本文化人類学会研究大会（北海道大学, 2005年5月21日-22日）

増原善之 (MASUHARA, Yoshiyuki) 2003-2006

【著書・論文】

- 増原善之. (印刷中) 「『伝える人』になるためにーラオス地方文書（じかたもんじょ）探索の旅からー」 『東南アジア研究』 44(3).
- Masuhara, Yoshiyuki. 2004. Rabop Khruayat kap Kan Thaihot Sinlapa Watthanatham: Karani Kan Aphisek Somrot rawang Caojing Yotkamthip heng Lan Na kap Phracao Phothisalarat heng Lan Chang （タイ語）(親族制度と芸術文化の伝播：ラーンナー王国ヨートカムティップ王女とラーンサーン王国ポーティサーラート国王との成婚の場合). In Wongsak na Chiang Mai ed., *Khattiyani Sri Lan Na*(ラーンナーの女帝たち). Bangkok, Thanghuasin, pp.75-88.
- 増原善之. 2003. 「文化」 ラオス文化研究所編『ラオス概説』 めこん, pp.241-272.
- Masuhara, Yoshiyuki. 2003. Prawattisat Setthakit khong Ratchaanacak Lao Lan Chang Samai Kritsattawat thi 14-17 （タイ語）(14ー17 世紀ラオス・ラーンサーン 王国経済史). Bangkok, Matichon, XVI+239p.
- Masuhara, Yoshiyuki. 2003. Foreign Trade of the Lan Xang Kingdom (Laos) during the Fourteenth through Seventeenth Centuries. In Hayashi, Yukio and Thongsa Sayavongkhamdy eds., *Cultural Diversity and Conservation in the Making of Mainland Southeast Asia and Southwestern China: Regional Dynamics in the Past and Present*. Bangkok, Amarin, pp54-77.

【口頭発表】

- Masuhara Yoshiyuki. 2006. History of the Migration of Ethnic Groups in Champhone District, Savannakhet Province. Workshop on Local Knowledge in the Past, Present and Future. (Savannakhet, 21 December 2006)
- 増原善之. 2006. 「ラオス史への誘いー地方史研究の可能性を探るー」 上智大学外国語学研究科地域研究専攻 2006 年度トヨタ財団寄附講座「アジアにおけるくらしといのちー民間学のまなざしからー」（東京, 上智大学, 2006 年 7 月 24-28 日）.
- Masuhara, Yoshiyuki. 2005. Natural Resources and Economic Activities during the Lan Xang Period. Workshop on Local Knowledge and Its Potential Role for Sustainable Agro-Based Development in Lao PDR. (Savannakhet, 9-10 February 2005)

西 真 如 (NISHI, Makoto) 2005

【口頭発表】

- 西真如. 2005. 「住民組織の活動と公共空間：エチオピアのグラゲ道路建設協会」第39回日本文化人類学会研究大会（北海道大学, 2005年5月21日-22日）
- 重田眞義, 西真如, 金子守恵, 鈴木郁乃, ゲブレ・インティソ. 2005. 「エチオピアの教育制度改革と地域社会の対応：南オモにおけるNPO法人アジアとアフリカをつなぐ会の活動から」第14回日本ナイル・エチオピア学会学術大会（千曲市, 2005年4月16日-17日）

大西信弘 (Ohnishi, Nobuhiro) 2002-2005

【著書・論文】

- Ohnishi, N. 2004. Fish resources and fishery systems in Rakhine State. International Workshop of “*Change of Rural Society and Local Agro-ecological Knowledge in Myanmar*” Yangon, Myanmar.
- 大西信弘. 2004. 「なわばり型ハレムをもつコウライトラギスの性転換」幸田正典, 中嶋康裕編『魚類の社会行動3』海游社.
- 大西信弘訳. 2003. 「第11章分解者とデトリタス食者」堀道夫監訳『生態学—個体・個体群・群集の科学』京都大学出版会.
- 岩田明久, 大西信弘, 木口由香. 2003. 「南部ラオスの平野部における魚類の生息場所利用と住民の漁労活動」『アジア・アフリカ地域研究』3: 51-86.

孫 曉 剛 (SUN, Xiaogang) 2005

【著書・論文】

- 平野聡, 孫曉剛, 佐藤俊. 2004. 「シャトル・レーダー・トポグラフィ・ミッション (SRTM) アフリカデータ：北ケニア半乾燥地域の諸研究への応用」『アフリカ研究』65: 37-44.
- 孫曉剛. 2004. 「Continuity and Dynamics of Pastoral Subsistence among the Rendille in Northern Kenya: With Special Reference to Livestock Management and Response to Socio-Economic Changes」『京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士論文』.
- 孫曉剛. 2004. 「「搾乳される」ラクダと「食べられる」ウシ—遊牧民レンディエーレの生業多角化への試み」『遊動民—アフリカの原野に生きる』昭和堂, 630-649.
- 孫曉剛. 2003. 「衛生画像から見る遊牧民レンディエーレの居住形態と遊牧パターン」“Proceedings of the 2003 Annual Conference of the Mie University GIS Society”.
- 孫曉剛. 2002. 「北ケニアのレンディエーレ社会における遊牧の持続と新たな社会変化への対応」『アフリカ研究』61: 39-60.

生方史数 (UBUKATA, Fumikazu) 2002

【著書・論文】

- 生方史数. (印刷中) 「コモンズにおける集合行為の2つの解釈とその相互補完性」『国際開発研究』16(1).
- 生方史数. (印刷中) 「プランテーションと農家林業の狭間で：タイにおけるパルプ産業のジレンマ」『アジア研究』53(2).
- Ubukata, F. 2006. Diversified Process of Collective Action: the Cases of Communal Forest Management in Northeast Thailand, the final report submitted to The National Research Council of Thailand. The research project on ‘The Process of Collective Action in Community Forestry: the Dynamic Relationship between Community and Natural Resources in Thailand’. Dec. 2006.
- Ubukata, F. 2006. “Rule Formation Process in Communal Forest Management: the Cases in Yasothon Province, Northeast Thailand”. A Paper presented at the 11th Biennial Conference, International Association for the Study of Common Property, Bali Indonesia, Jun. 19-23, 2006. http://www.iascp.org/bali/papers/ubukata_fumikazu.pdf
- Ubukata, F. 2004. “From Plantations to Small Farms: Eucalyptus Production for Pulp & Paper Industry in Thailand”. Record of the Workshop Abstracts and Viewgraphs, Interdisciplinary Workshop on Forest Dynamics of Thailand: Impacts, Ecology, Management, and Rehabilitation. Nov. 28-29, 2003, Kyoto University.
- 生方史数. 2004. 「プランテーションか農家林業か？ タイにおけるユーカリ生産のジレンマ」『第15回国際開発学会全国大会報告論文集』 278-281.
- Shimamoto, M., Ubukata, F., and Y. Seki. 2004. “Forest Sustainability and the Free Trade of Forest Products: Cases from Southeast Asia”. Ecological Economics 50(1-2): 23-34.

O	安達真平. 2005. 「中国雲南省哀牢山地の棚田地域における農業技術と水の利用」 第97回日本熱帯農業学会（千葉大学, 2005年3月29・30日）
O	安達真平. 2003. 「雲南省哀牢山地の棚田地域にみる農業と生活」 第9回全国棚田サミット分科会（恵那文化センター, 2003年9月5・6日）
P	安達真平. 2006. 「雲南省『県誌』を使った人口データベースの作成」 総合地球環境学研究所 2005年度報告書「アジア・熱帯モンスーン地域における地域生態史の総合的研究：1945-2005」 pp. 475-484.
P	ADACHI S. 2005. Agricultural Technologies and Environmental Exploitation in a Rice Terrace Area of Ailao Mountains, Yunnan, China. <i>The Proceedings of The 7th Kyoto University International Symposium: Coexistence with Nature in a "Glocalizing" World - Field Science Perspectives in Bangkok</i> (November 23-25, 2005), pp. 219-228.
O	相沢伸広. 2005. 「スハルト体制下、内務省の対華人政策」 第111回SEAF東南アジア談話会（広島大学, 2005年）
O	相沢伸広. 2005. 「スハルト体制の対華人政策－内務省編」 東南アジア史学会関東例会（東京大学, 2005年）
O	Aizawa, Nobuhiro. 2005. The Author of the Chinese policy in Indonesia. <i>International Conference for Asian Studies 4</i> , (Shanghai, China, August 2005)
O	相沢伸広. 2004. 「インドネシア華人問題の変遷」 第72回東南アジア史学会研究大会（京都大学, 2004年12月11日-12日）
P	Aizawa, Nobuhiro. 2002. How to Look at Asian Politics: From Development Dictatorship to Civil Society. <i>Kyoto Review of Southeast Asia</i> 1.
O	Amri, A. 2003. Community Participation in Rehabilitation, Conservation and Management of Mangroves: Lessons from Coastal Areas of South Sulawesi, Indonesia. <i>International Workshop of 21st Century COE Program</i> (Addis Ababa University, 21-23 OCT 2003)
O	Amri, A. and K. Tanaka., 2002. A Comparative Study to Seek for Sustainable Implementation of Silvo-fishery Systems in Coastal Areas in Indonesia. <i>Annual Meeting of Japan Society of Tropical Ecology</i> (Kagoshima University, 13-15 Jun. 2002)
O	Amri, A. and K. Tanaka. 2002. Mangrove Plantation and Land Property Rights: A Lesson from Coastal Areas of South Sulawesi, Indonesia. <i>Annual Meeting of Japan Society of Tropical Ecology</i> (Kanazawa University, 14-16 Jun. 2002)
O	新井一寛. 2006. 「スーフィー教団研究における映像資料・作品の可能性」 「宗教と社会」 学会スピリチュアリティ研究プロジェクト研究会（慶応義塾大学, 2006年8月20日）
V	Arai, Kazuhiro. 2006. The expression of emotion in Modernized Sufi Orders in Contemporary Egypt [Director: Kazuhiro Arai, 2006, 15min] <i>Visual Anthropology Symposium "Japanische Blicke auf Asien und Afrika (Asia Africa through Japanese eyes)"</i> by Asia-Africa-Institute, (Hamburg University, Hamburg, 24JUN 2006)
O	新井一寛. 2006. 「現代エジプトにおけるタリーカ（スーフィー教団）の展開」 第40回日本文化人類学会研究大会（東京大学駒場キャンパス, 2006年6月3日-4日）
O	新井一寛. 2006. 「タリーカ（スーフィー教団）のせんりつ（旋律・戦慄）」 第2回日本ポピュラー音楽学会関西地区例会（関西大学, 2006年4月15日）
O	新井一寛. 2005. 「現代エジプトにおけるタリーカ・シャイフの継承－シャイフの意義・役割、教団組織形態、宗教実践などの形態論的考察を通じて」 スーフィズム・聖者信仰・タリーカをめぐる研究会(科学研究費補助金基盤研究 (B)) 「人類学・歴史学・思想研究の共同によるスーフィズム・聖者信仰複合の構造研究」（長野, 2005年9月21日）
O	新井一寛. 2005. タリーカ（スーフィー教団）のマウリドにおける「祝祭」・「非祝祭」複合－現代エジプトにおけるジャーズリーヤ・シャーズィリーヤ教団の事例を通じて－ 第13回「宗教と社会」学会学術大会（國學院大學渋谷キャンパス, 2005年6月12日）
O	Arai, Kazuhiro. 2005. Innovation in Organization and Expression of Religious Emotion in a Sufi Order – with Special Reference to the Jazuliya Shadhiliya in Contemporary Egypt, Religion: Conflict and Peace. <i>The 19th World Congress of the Inter National Association for the History of the Religion</i> (Tokyo, 25MAR 2005)
O	新井一寛. 2004. 「タリーカにおける組織形態とシャイフの存在様式の関係についての考察－現代エジプトにおけるティジャーニーヤ教団の事例を中心として－」 第20回日本中東学会大会（明治大学, 2004年5月9日）
O	新井一寛. 2003. 「現代エジプトにおけるタリーカ（スーフィー教団）の形態－ジャーズリーヤ・シャーズィリーヤ教団の事例から－」 第19回日本中東学会年次大会（立命館アジア太平洋大学, 2003年5月10日・11日）
P	新井一寛. (印刷中) 「タリーカ（スーフィー教団）の形態論的考察－現代エジプトにおけるティジャーニーヤ教団の事例を通じて－」 『イスラム世界』 60.
P	新井一寛. (印刷中) 「イスラーム世界の情動を撮る－エジプト、スーフィー教団の現在－」 北村皆雄, 新井一寛, 川瀬慈編『見る 撮る 魅せるアジア・アフリカ－映像人類学の新天地－』 新宿書房.
P	新井一寛. (印刷中) 「エジプトの韓流－『冬ソナプーム』とイスラーム、ジェンダー、ロマンティックラブ」 石田佐恵子・木村幹他編『ポスト韓流のメディア社会学』、ミネルヴァ書房.
P	新井一寛. 2006. 「動的宗教としてのイスラーム－エジプトにおけるスーフィー教団の現在－」 『季刊民族学』 夏号: 92-105.
P	新井一寛. 2006. 「マウリド（生誕祭）におけるタリーカ（スーフィー教団）の祝祭性と非祝祭性－現代エジプト

	におけるジャーズーリーヤ・シャーズィリーヤ教団の活動状況から」『宗教と社会』12: 37-63.
P	新井一寛. 2004. 「タリーカにおける組織的革新性と宗教的感情の発露ー現代エジプトにおけるジャーズーリーヤ・シャーズィリーヤ教団の事例を通じてー」『日本中東学会年報』20(1): 91-120.
O	Chamchan, Chalernpol. 2005. A Macroeconomic view of cost containment: simulation experiments for Thailand <i>COE/JEPA Joint International Conference, Japan Economic Policy Association (JEPA)</i> , (Kobe University, Japan, 17th -18th December 2005)
O	Chamchan, Chalernpol. 2005. Analysis of benefit incidence: Thailand's health system with the universal coverage (UC). <i>Singapore Economic Review Conference 2005, SERC 2005</i> (Singapore, 05AUG 2005)
P	Chamchan, Chalernpol and Kosuke, Mizuno. (in press) Assessments on People's Views toward Thailand's Universal Coverage (UC): A Field Survey in Thangkwang Sub-district, Khonkaen. <i>Southeast Asian Studies</i> .
P	Chamchan, Chalernpol and Guy, Carrin. 2006. A Macroeconomic View of Cost Containment: Simulation Experiments for Thailand. <i>Thammasat Economic Journal</i> 24: 73-102.
P	Chamchan, Chalernpol. 2006 Analysis of Benefit Incidence: Thailand's Health System with Universal Coverage (UC). <i>SUDOSTASIEN Aktuell</i> (Journal of Current Southeast Asian Affairs) 25: 3-28.
O	圓入智仁. 2003. 「タイにおけるボーイスカウト運動の成立と展開ーラーマ6世王期（1910-1925年）」日本民族学会近畿地区研究懇談会修士論文発表会（京大会館, 2003年3月15日）
P	圓入智仁. 2002. 「戦前における海洋少年団の理念ー退役海軍軍人・原道太の言説に注目してー」『日本社会教育学会紀要』38: 47-56.
O	藤井千晶. 2006. 「ザンジバルにおけるタリーカと宗教儀礼」第43回日本アフリカ学会学術研究大会（大阪大学, 2006年5月27・28日）
O	藤井美穂. 2006. 「ココヤシ栽培の小農社会における『土地持ち』に関する一考察 フィリピン・ラグナ州『高地』の事例研究」第11回フィリピン研究会（ポスター発表）（中京大学, 2006年7月9日）
O	藤井美穂. 2006. 「ココヤシ栽培の小農社会における『土地持ち』に関する一考察ーフィリピン・ルソン島ラグナ州「高地」の事例ー」第40回日本文化人類学会研究大会（東京大学駒場キャンパス, 2006年6月3日-4日）
O	藤井美穂. 2006. 「ココヤシ栽培の小農社会における土地をめぐる社会関係ーフィリピン・ルソン島ラグナ州『高地』の事例ー」第26回「東南アジアの社会と文化」研究会（京都大学, 2006年2月25日）
O	藤井美穂. 2005. 「フィリピン・ココヤシ栽培地域における土地をめぐる社会関係ーラグナの事例からー」第10回フィリピン研究会（神奈川大学, 2005年7月2日）
O	Fujii, Miho. 2003. Livelihood change in Philippine coconut farming village: a case study in Laguna Province of Luzon. <i>International Workshop of 21st Century COE Program</i> (Addis Ababa University, 21-23 OCT 2003)
P	藤井美穂. 2003. 「フィリピン・ココヤシ栽培農村における生業の変遷ールソン島ラグナ州S村の事例ー」『アジア・アフリカ言語文化研究』65: 259-285.
P	Fujii, Miho. 2003. Livelihood change in Philippine coconut farming village: a case study in Laguna Province of Luzon In Shigeta, M. & Y. D. Gebre, eds. Environment, Livelihood and Local Praxis in Asia and Africa, <i>African Study Monographs, Supplementary Issues</i> 29: 115-124.
P	後藤健太. 2003. 「繊維・縫製産業ー流通未発達」の検証」大野健一, 川端望編著『ベトナムの工業化戦略ーグローバル化時代の途上国産業支援』日本評論社 pp.125-172.
O	HOSODA, Naomi. 2006. Bringing Home 'Luck': Socio-cultural Dimensions of Migration from Samar Island, Philippines <i>Kyoto Symposium 2006 "Crossing Disciplinary Boundaries and Re-visioning Area Studies"</i> (Kyoto University, 12NOV, 2006)
O	細田尚美. 2006. 「『分け与えること』をめぐる移民と母村の関係ーフィリピン・サマル島の事例からー」第40回日本文化人類学会研究大会（東京大学駒場キャンパス, 2006年6月3日-4日）
O	細田尚美. 2005. 「フィリピンにおける『家族のための移動』再考ー〈分け与えること〉をめぐる社会関係を手がかりに」東南アジアの社会と文化研究会（京都大学, 2005年11月25日）
O	細田尚美. 2005. 「幸運探しとしての移動ーフィリピン・サマル島農村部の事例から」フィリピン研究会全国フォーラム（神奈川大学, 2005年7月3日）
O	細田尚美. 2005. 「フィリピン・サマル島民のマニラ移住過程ー一人の移動と都鄙関係の推移を中心に」第39回日本文化人類学会研究大会（北海道大学, 2005年5月21日-22日）
O	Hosoda, Naomi. 2003. Can Cities Become New Frontiers for Migrants?: A View from a Samar Village, <i>Philippines Round Table Discussion on Third World Studies</i> (University of the Philippines at Diliman, 12 DEC. 2003)
P	Hosoda, Naomi. 2006. "Bringing Home 'Luck': Socio-cultural Dimensions of Migration from Samar Island, Philippines" In J. Maruyama et al. eds., <i>Proceedings of Kyouto Symposium 2006 "Crossing Disciplinary Boundaries and Re-visioning Area Studies: Perspectives from Asia and Africa"</i> 63-71.
p	細田尚美. 2006. 「『幸運探し』としての移動ーフィリピン・サマル島農村部の事例から」『第10回フィリピン研究会全国フォーラム収録集』53-56.
P	細田尚美. 2002. 「フィリピンにおける向都移動と開拓移動の比較ーサマル島農村部の事例から」『三田学会雑誌』95(2): 51-74.
O	石坂晋哉. 2006. 「現代インドのガンディー主義と環境運動ーテラー・ダム反対運動を事例として」環境社会学

	会第33回セミナー（新潟・阿賀野川，2006年6月23日）
O	石坂晋哉. 2005. 「北インド・ウッタラカンドの新しい社会運動－テーリー・ダム反対運動の変容とガンディー主義－」第18回日本南アジア学会全国大会（龍谷大学，2005年10月1日・2日）
O	石坂晋哉. 2004. 「ヒマラヤの環境問題と現代のガンディー主義－テーリー・ダム反対運動とスンドルラール・バフグナ」21COE京都ワークショップ『フィールドワークから紡ぎだす－発見と分析のプロセス』（京都大学，2004年10月30日-31日）
O	石坂晋哉. 2004. 「現代インドの森林問題とガンディー主義－スンドルラール・バフグナの環境思想について－」第17回環境史研究会（大阪市立大学文化交流センター，2004年7月5日）
P	石坂晋哉. (印刷中)「現代インドの環境運動とガンディー主義－テーリー・ダム反対運動を事例として」『アジア文化研究』33.
P	石坂晋哉 (印刷中)「現代インドのガンディー主義的環境思想－スンドルラール・バフグナのサルヴォーダヤ環境思想」『アジア・アフリカ地域研究』6(2).
P	Ishizaka, Shinya. (Submitted) The Anti Tehri Dam Movement as as New Social Movement and Gandhism 『南アジア研究』18.
O	加賀道. 2005. 「マレーシア・サラワク州バラム川中流域ブディアン村マーケットにおけるブナン人とカヤン人の林産物取引からみる森林利用」第15回日本熱帯生態学会年次大会（京都大学，2005年6月11日-12日）
O	加賀道. 2004. 「サラワク東部イバン族による植生改変と植物利用」熱帯生態学会（愛媛）
O	加瀬澤雅人. 2004. 「グローバル状況下における民間の治療家の再帰的変容－南インド・ケーララ州の事例から－」21世紀COEプログラム「世界を先導する総合的地域研究拠点の形成」京都ワークショップ「フィールドワークから紡ぎだす－発見と分析のプロセス」（京都大学，2004年10月31日）
O	加瀬澤雅人. 2003. 「アーユルヴェーダの現在－グローバル状況における『伝統』医療のナショナル化」第16回南アジア学会（京都大学，2003年10月5日）
O	加瀬澤雅人. 2003. 「インド ケーララにおけるアーユルヴェーダの現在－消費化される伝統医療」第13回環境史研究会（大阪市立大学文化交流センター，2003年7月2日）
P	加瀬澤雅人. 2005. 「アーユルヴェーダは誰のものか－『伝統』医療・知的財産権・国家」『文化人類学』70(2): 157-176.
P	Kasezawa, Masato. 2004. Ayurveda in the Age of Globalization: “Traditional” Medicine, Intellectual Property and State. <i>Journal of the Japanese Association for South Asian Studies</i> 『南アジア研究』16: 85-110.
O	Kataoka, M., A. Iwata., D. M. Prawiradilaga. 2005. Relationship between bird community and villager's activities in a mountainous area around Gunung Halimun-Salak National Park, West Java, Indonesia. <i>The Society for Conservation Biology Asia Section-1st Regional Conference</i> (Yak and Yeti Hotel, Katmandu, Nepal, 17-20NOV 2005)
O	片岡美和・岩田明久・D. M. Prawiradilaga. 2005. 「インドネシア，西ジャワの山間農村における住民の鳥類利用」第15回日本熱帯生態学会年次大会（京都大学時計台百年記念館ホール，2005年6月11・12日）
O	片岡美和・岩田明久・D. M. Prawiradilaga. 2005. 「インドネシア，西ジャワにおける住民の生業活動と鳥類群集との関係」第52回日本生態学会学術大会（大阪，大阪国際会議場，2005年3月28日）
P	Kataoka, M., A. Iwata., D. M. Prawiradilaga. 2006. Relationship between the bird community and human activities in a mountainous area adjacent to Gunung Halimun-Salak National Park, West Java, Indonesia In McNeely, J. A., T. M. McCarthy, A. Smith, L. Olsvig-Whittaker, and E. D. Wikramanayake eds. <i>Conservation biology in Asia. Kathmandu: Society for Conservation Biology Asia Section and Resources Himalaya Foundation</i> .pp.173-182.
P	Kataoka, M. 2004. Pertanian & Petani versus keanekaragaman jenis burung: Efek kegiatan pertanian terhadap jenis burung di dalam dan sekitar kawasan TNGH <i>Buletin Halimun</i> (Gunung Halimun-Salak National Park, Department of Forestry, Indonesia) 8: 7-10.
O	加藤優子. 2003. 「カジャン・ホスピタル産科の50年－マレーシアにおける出産の病院化の過程－」日本民族学会近畿地区研究懇談会修士論文発表会（京大会館，2003年3月15日）
P	Kato, Yuko. (投稿中) Institutionalization of Child Delivery Practices in Malaysia: A Fifty-year History of the Maternity Ward of Kajang Hospital. <i>Journal of Southeast Asian Studies</i> .
P	加藤優子. 2005. 「カジャン・ホスピタル産科の50年－マレーシアにおける出産の病院化の過程－」『アジア・アフリカ地域研究』4(2): 195-228.
O	加藤眞理子. 2003. 「出家をめぐる功德の行方－東北タイ農村における仏教実践と社会関係」第37回日本民族学会研究大会（京都文教大学，2003年5月24日）
O	Kato, Mariko. 2002. Phonkrathop khong kan'an nangsui dai tho kanpraphrut patibat thang sasana khong phuying nai muban phak isan khong prathet thai: Suksakarani chamsin khong phuying nai chuang khaophansa (東北タイ農村における女性の宗教実践に対する識字の影響) 第1回タイ人類学学会 (Sun Manutsayawhitthaya Sirinthon [タイ・バンコク・シリントーン人類学センター] 27 Mar. 2002)
P	Kato, Mariko. 2003. Phonkrathop khong kan'an nangsui dai tho kanpraphrut patibat thang sasana khong phuying nai muban phak isan khong prathet thai: Suksakarani chamsin khong phuying nai chuang khaophansa. Chamroenlak Thanawongnoi (edit) <i>Su kap Manutsayawitthaya</i> (『コミュニケーションと人類学』). Krungthep: Sun Manutsayawhitthaya Sirinthon. pp.9-46.
P	加藤眞理子. 2003. 「ソンクラーンとローイ・クラトン」(pp.191-193)「マーカブチャーとウィサーカブチャー」

	(pp.193-195)「カオ・パンサーとオーク・パンサー」(pp.195-196)「トート・カティンとトート・パーパー」(pp.196-198)「コーンケン大学」(pp.233-234) 綾部恒雄, 林行夫編『タイを知るための60章』明石書店.
O	河野元子. 2006. 「政府党UMNOは、いかに野党PASトレングスを奪回したのか? : 2004年総選挙・UMNO・マレーシア『国民戦線』」 比較の中の東南アジア研究会 (京都大学, 2006年10月14日)
O	河野元子. 2005. 「村のフィールドワーク・図書館のフィールドワーク: 開発政策下マレー漁村調査での発見と模索」 バンギ・フィールド・ステーション連続ワークショップ (Sudut Wacana, Institute of the Malay World and Civilization(ATMA), Universiti Kebangsaan Malaysia <UKM>, 2005年3月7日)
O	Kawano, Motoko. 2004. How did Inter-ethnic Relations in Ikan Bilis Fishery Change?: A Local Socio-economy in a Era of Development in Malaysia. 21st Century COE Program International Workshop in Jakarta: The Micrology of Indonesia Local Societies & Everyday Life and Policing in the Wallacean World (Jakarta, Indonesian Institute of Sciences <LIPI>, 23 Mar. 2004).
O	Kawano, Motoko. 2003. Inter-ethnic Relations in Ikan bilis Fishery. <i>Asian Public Intellectual (API) 2nd Workshop Asian Public Intellectual (API) 2nd Workshop</i> (Bali, Indonesia, 8-12DEC 2003)
P	Kawano, Motoko. 2005. Inter-ethnic Relations in Ikan bilis Fishery: Experiences of Seberang Takir Peoples in Terengganu, Peninsula Malaysia Economic Prospects, Cultural Encounters and Political Decisions: Scenes in a Moving Asia (East and Southeast), The Work of the 2002/2003 API Fellows. Tokyo: Nippon Foundation Asian Public Intellectuals Program pp.50-66.
O	Kiso, Keiko. 2006. Transitions in Migrant Labor in Rural Northeast Thailand: with focus on women since the 1970s (Poster session). Kyoto Symposium 2006 (京都大学, 2006年11月9~13日)
O	木曾恵子. 2006. 「東北タイ・ラオ農村における移動労働の変遷: タイ社会のジェンダーに関する人類学的研究に向けて」 第116回東北人類学談話会 (宮城学院女子大学, 2006年7月15日)
O	木曾恵子. 2006. 「東北タイ・ラオ人稲作農村における移動労働の変遷: 女性の移動をめぐる条件を中心に」 日本タイ学会第8回研究大会 (つくば国際会議場, 2006年7月8日)
O	木曾恵子. 2002. 「タイ社会における『移動』の経験: 東北タイからの出稼ぎ労働者とジェンダーをめぐる諸問題」 日本民族学会関西地区修士PO会 (大阪大学, 2002年3月)
P	Kiso, Keiko. (投稿中) Khwam plianpraeng nai kan ophayop khong raengngan satri nai mu ban Isan: Kan niyam ton eng phan prasopkan khong raengngan rap chang (賃金労働の経験を通じた自己の再定義: 東北タイ農村における移動労働の変遷と女性たち) <i>Stance</i> (Women's Studies Center, Chiang Mai University) 1.
P	Kiso, Keiko. 2006. Transitions in Migrant Labor in Rural Northeast Thailand: with focus on women since the 1970s. <i>The Proceedings of Kyot Symposium: Crossing Disciplinary Boundaries and Re-visioning Area Studies: Perspectives from Asia and Africa</i> (November 9-13, 2006) pp. 275-283.
O	小林知. 2004. 「現代カンボジア農村における社会経済的差異化に関する一考察」 第38回日本文化人類学会研究大会 (東京外国語大学, 2004年6月5日-6日)
O	小林知. 2004. 「ポスト・ポルポト期カンボジア農村における仏教実践の変容: 伝統の対象化と実践の再構築」 第303回東南アジア史学会関西地区例会 (大阪市立大学文化交流センター, 2004年1月17日)
O	小林知. 2003. 「現代カンボジア農村における仏教信仰の復興に関する一考察ーカンボジア仏教在来派の二つの実践」 第37回日本民族学会研究大会 (京都文教大学, 2003年5月24日)
P	Kobayashi, Satoru. 2005. An Ethnographic Study on the Reconstruction of Buddhist Practice in Two Cambodian Temples: With the special reference to Buddhist Samay and Boran. <i>Journal of Southeast Asian Studies</i> 42(4): 489-518.
P	小林知. 2004. 「カンボジア・トンレサップ湖東岸地域農村における生業活動と生計の現状: コンポントム州コンポンスヴァーイ郡サンコー区の事例」 天川直子編『カンボジア新時代 都市・農村の変貌』アジア経済研究所研究双書.
O	Koizumi, Miyako. 2006. Variation in ethnobotanical knowledge among the Penan Benalui of East Kalimantan: Clues to transmission and learning of "traditional" knowledge The 10th International Congress of Ethnobiology (Chiang Rai, 5-9 Nov. 2006) <本発表について、International Society of Ethnobiology の第1回Student Paper Prize を受賞>
O	小泉都. 2006. 「ナチュラリストな生活者: ボルネオのプナンの植物知識」 第70回日本植物学会年次大会 (熊本大学, 2006年9月14-16日)
O	小泉都. 2006. 「定住化した狩猟採集民プナン・ブナルイの食事」 第16回日本熱帯生態学会年次大会 (東京農工大学, 2006年6月17・18日)
O	小泉都. 2006. 「狩猟採集民プナンの植物知識にみられる近代化の影響: 性差、世代差、個人差の分析から」 第40回日本文化人類学会研究大会 (東京大学駒場キャンパス, 2006年6月3日-4日)
O	小泉都. 2006. 「ボルネオのプナン・ブナルイの植物知識と実際の食事」 第11回生態人類学会年次大会 (武雄温泉ハイツ, 2006年3月21・22日)
O	小泉都. 2006. 「カヤン・ムンタラン国立公園 (インドネシア・東カリマンタン) における民族植物学インベントリー研究」 第5回日本植物分類学会年次大会 (琉球大学, 2006年3月18-20日)
O	小泉都. 2005. 「インドネシア・東カリマンタンのプナン・ブナルイの民族植物学: 野生植物の分類と学習過程」 第69回日本植物学会年次大会 (富山大学, 2005年9月20-23日)

O	小泉都. 2005. 「インドネシア・東カリマンタンのプナン・プナルイの民族植物学：植物知識の学習、個人差」第15回日本熱帯生態学会年次大会（京都大学, 2005年6月11・12日）
O	小泉都. 2004. 「ボルネオ内陸部・プナンの民族植物学」第35回民族自然誌研究会例会（京大会館, 2004年4月24日）
O	小泉都. 2004. 「ボルネオの狩猟採集民プナンの植物利用」第14回日本熱帯生態学会年次大会（愛媛大学, 2004年6月12・13日）
O	Koizumi, Miyako. 2003. Ethnobotany of Penan Benalui of East Kalimantan, Indonesia. International Workshop of 21st Century COE Program (Addis Ababa University, 21-23 OCT 2003)
O	小泉都. 2003. 「ボルネオの狩猟採集民族プナンの植物の民俗分類」第13回日本熱帯生態学会年次大会（鹿児島大学, 2003年6月13日-15日）
P	Koizumi, M. and K. Momose. (2007予定) Use, classification, and nomenclature of wild plants by the Penan Benalui: Do hunter-gatherers have less knowledge of wild organisms than subsistence farmers?. <i>Current Anthropology</i> .
P	Dounias, E., A. Selzner, M. Koizumi, and P. Levang. (2007予定) From sago to rice, from forest to town: The consequences of sedentarization of the nutritional ecology of Punan former hunter-gatherers of Borneo <i>Food and Nutrition Bulletin</i> , special issue.
P	Koizumi, M. 2006 Ethnobotany of the Penan Benalui <i>Kayan Mentarang National Park: In the heart of Borneo. World Wide Fund for Nature</i> 66-67.
P	小泉都. 2006. 「食べ物：ボルネオのプナンの植物利用 3」『植物の自然誌プラント』106: 53-58.
P	小泉都. 2006. 「軽建築：ボルネオのプナンの植物利用 2」『植物の自然誌プラント』105: 53-56.
P	小泉都. 2006. 「吹き矢：ボルネオのプナンの植物利用 1」『植物の自然誌プラント』104: 55-58.
P	Koizumi, M. and H. Nagamasu. 2005. A new record of the monotypic Harmandia (Olacaceae) from East Kalimantan, Indonesia <i>Acta Phytotaxonomica et Geobotanica</i> 56(3): 257-259.
P	Koizumi, Miyako. (n.d.) Ethnobotany of Penan Benalui of East Kalimantan, Indonesia: Difference of ethnobotanical knowledge between billagers of Long Belaka In Shigeta, M and Y. Gebre, eds <i>African Study Monographs Supplementary Issue</i> 29.
P	小泉都. 2005. 「プナンのサゴとり」『日本植物分類学会ニュースレター』1.
P	小泉都. 2004. 「プナンとの植物採集」『アジア・アフリカ地域研究』4(1): 144-148.
P	小泉都. 2004. 「オモ川の曲がったカヌー」『地域研究スペクトラム』10: 33-34.
P	小泉都. 2002. 「書評：Mark J. Plotkin "Medicine Quest"」『地域研究スペクトラム』8: 85-87.
O	小島敬裕. 2004. 「ミャンマーの仏教制度と地域における宗教実践」東南アジア史学会関西地区例会（大阪市立大学文化交流センター, 2004年11月20日）
P	小島敬裕. 2005. 「ミャンマー連邦サンガ組織基本規則」『東南アジア歴史と文化』34: 103-127.
O	小坂康之, 竹田晋也, Sithirajvongsa, S., Xaydala, K. 2004. 「多様な植物の生育地としての水田ーラオス中部 Savannakhet 県の事例から」第14回日本熱帯生態学会年次大会（愛媛大学, 2004年6月12・13日）
O	Kosaka, Y. 2005. Plant diversity in paddy fields in relation to human use and management. Workshop on Local Knowledge and Its Potential Role for Sustainable Agro-Based Development in Lao PDR (Department of Agriculture and Forestry, Savannakhet Province, Lao PDR, 9-10Feb, 2005)
O	小坂康之, 竹田晋也, S. Prixar, S. Sithirajvongsa, K. Xaydala,. 2005. 「ラオス中部 Savannakhet 県における水田内樹木の分布と管理」第116回日本森林学会大会（北海道大学, 2005年3月28・29日）
O	小坂康之. 2004. 「水田に浮かび上がる森ー南ラオスの産米林の植生」第35回民族自然誌研究会例会（京大会館, 2004年4月24日）
O	Kosaka, Y. 2005. The roles of trees in paddy fields in Savannakhet Province, Lao PDR JASTE 15 International Symposium: Eco-human Interactions in Tropical Forests (Kyoto University, 13-14JUN, 2005)
O	Kosaka, Y., S. Takeda, and S. Sithirajvongsa. 2004. Plant diversity in paddy fields in relation to human use and management in Savannakhet Province, Laos Laos Field Station Workshop (National University of Laos, 16 Mar. 2004)
O	Kosaka, Y., S. Takeda, and S. Sithirajvongsa. 2004. Plant diversity in paddy fields in relation to human use and management in Savannakhet Province. Laos Laos Field Station Workshop (Kyoto University, 25 Jan. 2004).
O	小坂康之. 2002. 「ラオス中部 Savannakhet 県における産米林の成立過程」日本熱帯農業学会第92回講演会（近畿大学, 2002年9月28・29日）
P	Kosaka, Y., Takeda, S., Sithirajvongsa, S., and Xaydala, K. 2006. Land-use patterns and plant use in Lao villages, Savannakhet Province, Lao PDR. <i>Tropics</i> 15(1): 51-63.
P	Kosaka, Y., Takeda, S., Prixar, S., Sithirajvongsa, S., and Xaydala, K. 2006. Species composition, distribution, and management of trees in rice paddy fields in central Lao, PDR. <i>Agroforestry Systems</i> 67: 1-17.
P	Kosaka, Y., Takeda, S., Sithirajvongsa, S., and Xaydala, K. 2006. Plant diversity in paddy fields in relation to agricultural practices in Savannakhet Province, Lao PDR. <i>Economic Botany</i> 60(1): 49-61.
P	Kosaka, Y., Takeda, S., Sithirajvongsa, S., and Xaydala, K. 2005. Natural resource use and management in paddy fields, in Savannakhet Province, Lao PDR <i>The Proceedings of The 7th Kyoto University International Symposium: Coexistence with Nature in a "Glocalizing" World - Field Science Perspectives in Bangkok</i> (November 23-25, 2005) pp. 211-217.

O	Kuroda Y, Sato YI, Bounphanousay C, Kono Y, Tanaka K. 2004. Introgressive hybridization from cultivated rice (<i>Oryza sativa</i>) to wild rice (<i>O. rufipogon</i> and <i>O. nivara</i>) in the Vientiane Plain of Laos. World Rice Research Conference, (EPOCHAL, Tsukuba, Japan, 5-7 November 2004)
O	Kuroda Y, Sato YI, Bounphanousay C, Kono Y, Tanaka K. 2004. Genetic differentiation in the three AA genome species of the genus <i>Oryza</i> (<i>O. rufipogon</i> , <i>O. nivara</i> and <i>O. sativa</i>) as assessed by SSR polymorphisms. World Rice Research Conference, (EPOCHAL, Tsukuba, Japan, 5-7 November 2004)
O	黒田洋輔・佐藤洋一郎・チャイ・ブンパヌサイ・河野泰之・田中耕司. 2004. 「ラオス中部ヴィエンチャン平野における栽培イネ(<i>O. sativa</i>) から野生イネ(<i>Oryza rufipogon</i> , および <i>O. nivara</i>) への自然交雑の実態」第106回日本育種学会講演会 (三重大大学, 2004年9月21日-22日.)
O	黒田洋輔, 佐藤洋一郎, チャイ・ブンパヌサイ, 河野泰之, 田中耕司. 2004. 「ラオス中部ヴィエンチャン平野における野生イネ(<i>Oryza rufipogon</i> , <i>O. nivara</i>)および栽培イネ(<i>O. sativa</i>)のSSR多型からみた集団遺伝構造」第105回日本育種学会講演会 (東京大学, 2004年3月30-31日)
O	黒田洋輔, 佐藤洋一郎, チャイ・ブンパヌサイ, 河野泰之, 田中耕司. 2003. 「アジア野生イネの自生地集団に見られたヘテロシスの現象 I. 繁殖戦略およびエッジ効果からの考察」第104回日本育種学会講演会 (神戸大学, 2003年9月19日-20日)
O	佐藤洋一郎, 黒田洋輔. 2003. 「東南アジアにおける種子稔性の低い <i>O. rufipogon</i> の分布」第104回日本育種学会講演会 (神戸大学, 2003年9月19日-20日)
O	武藤千秋, 黒田洋輔, H. Uairong, 佐藤洋一郎. 2003. 「ラオスにおける野生イネ集団間における遺伝的交流について」第104回日本育種学会講演会 (神戸大学, 2003年9月19日-20日)
O	Kuroda, Y., H. Uairong, and Y. I. Sato. 2003. Differential Heterosis in a Natural Population of Asian Wild Rice (<i>Oryza rufipogon</i>) due to Reproductive System and Edge Effect. International Genetic Resources Workshop on the Genus <i>Oryza</i> (AFFRC-Tsukuba Office, Tsukuba, 24, Sep. 2003)
O	Sato, Y. I., I. Nakamura, and Y. Kuroda. 2003. Semi-sterile Perennial Wild Rice (<i>Oryza rufipogon</i>) as the Progenitor of Japonica Cultivar International Genetic Resources Workshop on the Genus <i>Oryza</i> (AFFRC-Tsukuba Office, Tsukuba, 24, Sep. 2003)
O	黒田洋輔, チャイ・ブンパヌサイ, 佐藤洋一郎, 河野泰之, 田中耕司. 2003. 「種子・穂および葉の形質からみた野生イネおよび栽培イネのhybrid-swarmーラオス中部ヴィエンチャン平野の事例ー」第13回日本熱帯生態学会年次大会 (鹿児島大学, 2003年6月13日-15日)
O	武藤千秋, 黒田洋輔, H. Uairong, 佐藤洋一郎. 2003. 「ラオスの野生イネ自生地保全区と周辺に分布する集団間における遺伝的交流」第13回日本熱帯生態学会年次大会 (鹿児島大学, 2003年6月13日-15日)
O	秋本正博, 渡邊明, 黒田洋輔, 一谷勝之, P. Inthapanya. 2003. 「ラオスにおける野生イネ(<i>Oryza rufipogon</i>)の遺伝資源破壊について」第103回日本育種学会講演会 (千葉大学, 2003年4月2日-3日)
O	黒田洋輔, チャイ・ブンパヌサイ, 佐藤洋一郎, 河野泰之, 田中耕司. 2003. 「アジア野生イネ (<i>Oryza rufipogon</i>) の集団ダイナミクスーラオス・ヴィエンチャン平野の水牛飼養から」日本熱帯農業学会第93回講演会 (日本大学, 2003年3月27日-28日)
O	Kuroda, Y., H. Uairong, and Y. I. Sato. 2002. Microsatellites Reveal Heterosis in Asian Wild Rice (<i>Oryza rufipogon</i>). International Conference on Wild Rice. (Park Village Resort hotel, Kathmandu, Nepal, 21-27, Oct. 2002)
O	Akimoto, M., A. Aatanabe, and Y. Kuroda. 2002. Inthapanya P. Genetic Erosion of Wild Rice, <i>Oryza rufipogon</i> : A Case Study in Lao PDR. <i>International Conference on Wild Rice</i> (Park Village Resort hotel, Kathmandu, Nepal, 21-27, Oct. 2002)
O	渡邊明, 黒田洋輔, P. Inthapanya, 秋本正博, 本江昭夫. 2002. 「東南アジアにおける野生イネ (<i>Oryza rufipogon</i>) の遺伝的汚染について」第101回日本育種学会講演会 (玉川大学, 2002年4月1日-2日)
P	Kuroda Y, Y.I. Sato, C. Bounphanousay, K. Kongphanh, Y. Kono, K. Tanaka K, Y.I. Sato., (Submitted) Effect of raising water buffalo (<i>Bubalus bubalis</i>) on demography and fine scale of spatial- and temporal-genetic structures in natural populations of perennial and annual wild rice species (<i>Oryza rufipogon</i> and <i>O. nivara</i>). <i>Biological Conservation</i> .
P	Kuroda Y, Y.I. Sato, C. Bounphanousay, K. Kongphanh, Y. Kono, K. Tanaka K, Sato Y.I. (in press) Genetic differentiation in the three AA genome species of genus <i>Oryza</i> (<i>O. rufipogon</i> , <i>O. nivara</i> and <i>O. sativa</i>) as assessed by SSR analysis. <i>Molecular Ecology</i> .
P	Kuroda Y, Appa Rao S, Bounphanousay C, Kongphanh K, Tanaka K, Sato Y.I. (in press) Diversity of wild and weedy rices in the Lao PDR. <i>Rice in Laos</i> .
P	Kuroda Y, Y.I. Sato, C. Bounphanousay, K. Kongphanh, Y. Kono, K. Tanaka K, Sato Y.I. 2005. Introgressive hybridization from cultivated rice (<i>Oryza sativa</i>) to the two wild rice species (<i>O. rufipogon</i> and <i>O. nivara</i>) in the Vientiane Plain of Laos. <i>Euphytica</i> 142: 75-83.
P	Kuroda, Y., H. Uairong, and Y. I. Sato. 2003. Population Genetic Structure of Wild Rice (<i>Oryza rufipogon</i>) in Mainland Southeast Asia as Revealed by Microsatellite Polymorphisms. <i>Tropics</i> 12: 159-170.
P	Kuroda, Y., H. Uairong, and Y. I. Sato 2003. Differential Heterosis in a Natural Population of Asian Wild Rice (<i>Oryza rufipogon</i>) due to Reproductive System and Edge Effect. <i>Genetic Resources and Crop Evolution</i> 52: 151-160.
O	真崎恵子. 2005. 「儀礼の一部としての役割を担うガムラン音楽：インドネシア・バリ島ブレレン県ブン克蘭村の事例より」第39回日本文化人類学会研究大会 (北海道大学, 2005年5月21日-22日)

O	真崎恵子. 2004. 「インドネシア・バリ島におけるガムラン音楽の持続的発展：ブレレン県ブン克蘭村の事例を中心に」第55回日本音楽学会全国大会（名古屋芸術大学, 2004年11月7日）
O	真崎恵子. 2003. 「バリ・ガムラン楽団の活動状況：奉仕とビジネスのはざまで」第89回民族藝術学会研究例会（大阪市立大学, 2003年6月14日）
P	真崎恵子. 2005. 『書評：鏡味治也著「バリ島の小さな村で」』『文化人類学』69(4): 604-606.
O	宮本万里. 2004. 「国民文化としての環境主義ーグローバル化のなかのブータン・ネーション形成」第38回日本文化人類学会研究大会（東京外国語大学, 2004年6月5日-6日）
O	宮本万里. 2002. 「ブータンにおけるネーション形成ー文化・環境政策からみた自画像のポリティクス」第15回日本南アジア学会全国大会（東京外国語大学, 2002年10月5日）
P	宮本万里. 2004. 「ブータンにおける労働徴集制度とその歴史的変遷」前平泰志編『ネパールにおけるマージナル・グループの教育様式の政治人類学的研究（科学研究費基盤研究(B)研究成果報告書）』
P	宮本万里. 2004. 「現代ブータンにおける森林政策の変遷と環境保全体制の成立」『アジア・アフリカ地域研究』4(1): 86-110.
O	Mizutani, Yasuhiro. 2005. The police and local strongmen in Thailand; 1960s-1970s. JSPS-NRCT Core University Program Workshop 2005, "Toward a New Model of East Asian Society: Entrepreneurship and the Family." (Kyoto University, 14-15 Oct. 2005)
O	水谷康弘. 2004. 「タイ近代警察の蹉跌」第72回東南アジア史学会研究大会（京都大学, 2004年12月11日-12日）
P	水谷康弘. 2005. 「タイ近代国家の蹉跌ー人民党政権による警察改革の試みをめぐってー」『東南アジア研究』43(2).
P	Mizutani, Yasuhiro. 2004. The Development of the Modern Police Institution in Thailand from the 1930s to the 1950s. In Ricardo G. Abad ed <i>The Asian Face of Globalization: Reconstructing Identities, Institutions and Resources: The Work of the 2001/2002 API Fellows</i> . Tokyo: Partner Institutions of the Asian Public Intellectuals Program 2001/2002 pp.107-114
O	Morishita, Akiko. 2005. The Local Political Elite in Kalimantan after the Fall of Soeharto. 4th International Symposium of the Journal Antropologi Indonesia "Indonesia in The Changing Global Context: Building Cooperation and Partnership?" (Universitas Indonesia, 12-15 Jul. 2005)
O	森下明子. 2005. 「スハルト体制崩壊後の地方自治体首長と地方議会議員：カリマンタンを事例に」2005年度アジア政経学会西日本大会（同志社大学, 2005年6月11日）
P	森下明子. 2003. 「スハルト体制崩壊後のインドネシア政治エリートー1999年総選挙による国会議員とはどのような人たちかー」『東南アジア研究』41(3): 361-385.
O	村上咲. 2006. "Call for doctors!: Uneven medical provision and Indonesian decolonization in the 1950s" International Conference "Decolonization, urban change and comparison, 1930-1960" (KITLV, Leiden, 28Apr. 2006)
O	村上咲. 2004. 「オランダ領東インドにおける保健制度ー確立の背景とその後の展開ー」第72回東南アジア史学会研究大会（京都大学, 2004年12月11日-12日）
P	Murakami, Saki. 2004. Analisis Tentang Permulaan Tatanan Hukum Kesehatan Inter-National/Inter-Empire di Asia Tenggara dan Asia Timur pada Awal Abad XX. <i>Lembaran Sejarah</i> 7(1): 5-17.
O	Naito, Daisuke. 2004. Orang Asli and Forest Certification in Malaysia. Orang Asli: Social and Community Well Being. Orang Asli: Social and Community Well Being. (Bilik Mesyuarat Bersama LESTARI/PPS/IKMAS, Universiti Kebangsaan Malaysia, February 2004)
O	内藤大輔. 2005. 「先住少数民族トゥムアンの生業変容に関する調査研究」バンギ・フィールド・ステーション連続ワークショップ (Sudut Wacana, Institute of the Malay World and Civilization(ATMA), Universiti Kebangsaan Malaysia <UKM>, 2005年3月7日)
O	内藤大輔. 2005. 「マレーシア半島部スグリ・スンビラン州における先住少数民族トゥムアンの生業変容」日本マレーシア研究会関西例会「生業経済からみるマレーシアの〈辺境〉」（京都大学教育学部3階320号教室、2005年3月25日）
O	内藤大輔, 阿部健一, 奥田敏統, Hood Salleh. 2005. 「マレーシアにおける森林認証制度と地域住民」第15回日本熱帯生態学会年次大会（京都大学, 2005年6月11・12日）
O	Naito, D., Abe, K., Okuda, T., Hood Salleh. 2005. The changes of subsistence activities among Temuan communities in Negeri Sembilan, Peninsular Malaysia - focus on hunting and gathering-. JASTE 15 International Symposium: Eco-human Interactions in Tropical Forests (Kyoto University, 13-14JUN, 2005)
O	Naito, Daisuke. 2005. The Ecological Knowledge of the Orang Asli and its Application to Future Environmental Sustainability: A Case Study of Temuan in Jelebu, Negeri Sembilan International Conference on The Indigenous People 2005 - The Indigenous Population: Survival of Modern Living-. (Legend Hotel, Kuala Lumpur, Malaysia, 4-5 July 2005)
O	Naito, D., Abe, K. 2005. Changing Forest Use in Indigenous Community in relation to Rural Development Conference on Forestry and Forest Products Research 2005 - Investment for Sustainable Heritage and Wealth-. (Pan-Pacific Hotel, Kuala Lumpur, Malaysia. 22 November 2005)
O	Naito, Daisuke. 2005. Development of Forest Certification Schemes in Malaysia. The 7th Kyoto University International Symposium: Coexistence with Nature in a "Glocalizing" World - Field Science Perspectives (Nai Lert Park Hotel, 23-25NOV 2005)

O	Naito, Daisuke. 2006. The Rural Development and Transition of Indigenous Community in Negeri Sembilan, Peninsular Malaysia International Symposium: Indigenous Communities: Voices towards Sustainability (Institute for Environment and Development (LESTARI), Universiti Kebangsaan Malaysia, 13 March 2006)
P	Naito, Daisuke. 2005. Development of Forest Certification Schemes in Malaysia <i>The Proceedings of The 7th Kyoto University International Symposium: Coexistence with Nature in a "Glocalizing" World - Field Science Perspectives in Bangkok</i> (November 23-25, 2005) pp 207-210.
O	中西嘉宏. 2005. 「ビルマ式社会主義イデオロギーの形成」 第74回東南アジア史学会研究大会（上智大学, 2005年12月10・11日）
O	中西嘉宏. 2005. 「革命政당을建設せよ、官僚制を破壊せよ?社会主義期ビルマにおける党、軍、国家関係（1962-1988）」 「市場・国家・共同体」研究会（京都大学東南アジア研究所, 2005年11月3日）
O	中西嘉宏. 2005. 「ネー・ウィン体制のイデオロギーについて」 ビルマ研究会（東京大学東洋文化研究所, 2005年5月14・15日）
O	中西嘉宏. 2003. 「ネー・ウィンとビルマ社会主義計画党」 ビルマ研究会（大阪外国語大学, 2003年4月5・6日）
P	Nakanishi, Yoshihiro. 2004. 「Mary Callahan, Making Enemies; War and State Building in Burma」 『東南アジア研究』 42(2): 231-234.
P	中西嘉宏. 2003. 「未完の党=国家-ネー・ウィンとビルマ社会主義計画党」 『東南アジア研究』 41(3): 330-360.
O	西廣直子. 2004. 「インドネシアの高齢化と高齢者の問題-ミナンカバウの事例-」 日本民族学会近畿地区研究懇談会修士論文発表会（国立民族学博物館, 2004年3月13日）
P	Otmazgin, K. Nissim. 2003. Japanese Media Industries in East and Southeast Asia. <i>The Asian Political and International Association (APISA) First Congress</i> (Singapore, 03 Dec. 2003)
P	Otmazgin, K. Nissim. 2003. Japanese Government Support for Cultural Export. <i>Kyoto Review of Southeast Asia</i> 4.
O	小笠原梨江. 2006. 「カンボジア稲作村におけるトムノップ灌漑をめぐる協同」 第125回東南アジアの自然と農業研究会定例研究会（京都大学東南アジア研究所, 2006年4月21日）
O	小笠原梨江. 2005. 「カンボジア稲作村における協同関係-トムノップ灌漑をめぐる事例研究」 日本文化人類学会近畿地区研究懇談会修士論文発表会（京都文京大学, 2005年3月12日）
O	小野寺佑紀, 小林繁男, 竹田晋也. 2005. 「Tree Diversity of Patchy Forests and Classification on Human Utilization in Yasothon Province, Northeast Thailand」 第52回日本生態学会学術大会（大阪国際会議場, 2005年3月27日-30日）
P	尾崎敬子. 2005. 「開発途上国における保健医療問題」 高梨和紘編『開発経済学-貧困削減から持続的発展へ』 pp167-194.
P	佐藤奈穂. 2005. 「女性世帯主世帯の世帯構成と就業選択-カンボジア シェムリアップ州 タートック村を事例として-」 『アジア経済』 46(5).
P	佐藤奈穂. 2004. 「農村における女性世帯に対する親族と共同体の役割-カンボジア シェムリアップ州 タートック村を事例として-」 『龍谷大学経済学論集（民際学特集）』 46(5)
O	島上宗子. 2005. 「日本とインドネシアの山村の知恵を結ぶ: コモンズの保全をめざして」 2005年龍谷大学国際社会文化研究所シンポジウム『国境を越えた村おこし: 日本と東南アジアをつなぐ実践』（龍谷大学瀬田学舎, 2005年12月8日）
O	島上宗子. 2005. 「"いりあい・よりあい・まなびあい"と地元学: 研究=実践の可能性に向けて」 第268回関西農業史研究会（同志社大学光塩館, 2005年4月9日）
O	島上宗子. 2004. 「地方分権化と村落自治: タナ・トラジャ県における『慣習復興』の背景と問題点」 第71回東南アジア史学会研究大会シンポジウムII「地方分権化という課題を考える: インドネシアの事例から」（東京大学, 2004年6月13日）
O	島上宗子. 2004. 「NGOとJBICはどのように連携できるのか?: 提案型案件形成調査〈インドネシア: 貧困削減につながる効果的かつ持続可能なマイクロファイナンス〉の経験から」 NGO-JBIC円借款連携セミナー（国際協力銀行, 2004年5月17日）
O	島上宗子. 2004. 「貧困削減につながるマイクロファイナンス・システム: 住民組織の育成と協同組合の活用等」 第2回マイクロファイナンス支援に関するNGO・ODA合同ワークショップ（国際協力銀行, 2004年3月12日）
O	島上宗子. 2003. 「ポスト・スハルト期の行政村改革『画一化』から『多様化』へ」 第294回東南アジア史学会関西例会（大阪市立大学文化交流センター, 2003年3月15日）
P	島上宗子. 2005. 「スラウェシの地域再生運動」 『グラフィケーション』 140: 27-29.
P	島上宗子. 2005. 「未来をひらく入会・寄り合いの原理: アジアと日本・若者が農家に学ぶ『自然と人間の民主主義』」 『増刊現代農業: 田園・里山ハローワーク』 11: 210-221.
P	島上宗子. 2003. 「地方分権化と村落自治: タナ・トラジャ県における慣習復興の動きを中心として」 松井和久編『インドネシアの地方分権化-分権化をめぐる中央・地方のダイナミズムとリアリティー』アジア経済研究所 pp.159-225.
P	Shimagami, Motoko. 2002. Krisis Pedesaan dan Perkembangan dari Dalam: Pengalaman Pembangkitan Desa di Jepang In <i>Majalah Sulawesi Bersatu. workshop by Japan International Cooperation Agency (JICA)</i> . (Makassar, 2002) pp.43-48.
O	鈴木玲治, 竹田晋也, フラマウンティン. 2003. 「ミャンマーのアグロフォレストリー-タウンヤの農作物間作期

	の土壌養分動態」第94回日本熱帯農業学会（佐賀大学, 2003年9月25・26日）
O	鈴木玲治, 竹田晋也. 2003. 「ミャンマーのタウンヤ式チーク造林の長期持続性—土壌有機物の長期的動態に与える野火の影響に着目して」第13回日本熱帯生態学会年次大会（鹿児島大学, 2003年6月13日-15日）
P	鈴木玲治. 2004. 「アグロフォレストリーによる熱帯造林の長期的持続性評価—ミャンマー連邦バゴー山地の事例—」『食生活科学・文化及び地球環境科学に関する研究助成 研究紀要』17: 173-182.
P	鈴木玲治, 竹田晋也, フラマウンテイン. 2003. 「ミャンマーのアグロフォレストリー—タウンヤの農作物間作期の土壌養分動態—」『熱帯農業』47(別号2): 83-84.
O	高橋聖和, 豊原秀和. 2004. 「パプアニューギニア・東セビック州における在来農業」第96回日本熱帯農業学会講演会（岡山大学, 2004年10月15日-16日）
P	高橋聖和, 豊原秀和. 2005. 「パプアニューギニア・東セビック州における在来農業にみられる地域性」『熱帯農業』49(4): 270-279.
O	Takahashi, Miyuki. 2006. ESL, EFL, and Literacy Education for Young Learners in Japan and Singapore 4th Asia TEFL (Teachers of English as a Foreign Language) International Conference（西南学院大学, 2006年8月18日）
O	高橋美由紀. 2006. 「シンガポールの英語重視政策の影響と華語—幼児教育の視点から—」第27回異文化間教育学会研究大会（関西大学高槻キャンパス, 2006年6月4日）
O	高橋美由紀. 2005. 「シンガポール華人児童の家庭における言語教育とアイデンティティの変容」第26回異文化間教育学会研究大会（明治学院大学白金キャンパス, 2005年5月28日）
O	高橋美由紀. 2004. 「シンガポール華人の子ども達の言語教育—異文化理解とコミュニケーション能力」第25回異文化間教育学会全国大会（同志社大学, 2004年5月）
O	高橋美由紀. 2004. 「シンガポールの言語政策とバイリンガル教育—華人の子ども達の英語と民族語を中心に」第22回外国語教育メディア学会中部支部研究会（名古屋学院大学, 2004年4月）
O	高橋美由紀. 2003. 「シンガポールの幼・小学校英語教育—華人社会における英語・華語教育の取り組みを中心に」第24回異文化間教育学会全国大会（信州大学, 2003年6月）
O	高橋美由紀. 2002. 「シンガポール華人の子どもたちの言語教育」第23回異文化間教育学会全国大会（駿河台大学, 2002年6月）
P	高橋美由紀. 2006. 「シンガポールのバイリンガル教育とカリキュラム—幼稚園における英語と華語—」『兵庫教育大学研究紀要』29: 71-84.
P	高橋美由紀. 2005. 「シンガポール華人社会における未就学児童のバイリンガル教育」『兵庫教育大学研究紀要』26: 169-177.
P	高橋美由紀. 2003. 「シンガポール華人の子ども達の言語教育と言語習得」『中部学院大学・中部学院大学短期大学部研究紀要』4: 55-65.
P	高橋美由紀. 2002. 「シンガポール華人における言語と小学校入学前の言語教育」『中部学院大学・中部学院大学短期大学部研究紀要』3: 23-33.
P	Saphangthong T., Y. Kono, X. F. Song, and S. Tomita., 2004. Process of Land Use Changes in Northern Laos: A Village-level Study in the Nam Beng River Basin 『熱帯農業』47(別号2): 79-80.
O	TOBINA, Hirimi. 2006. "Life and Resistance for Palestinians in East Jerusalem: Case Studies of Merchants and NGOs." Kyoto Symposium: Crossing Disciplinary Boundaries and Re-Visioning Area Studies: Perspectives from Asia and Africa in Kyoto (November 9-13, 2006)
O	TOBINA, Hirimi. 2005. "Social Transformation and the Politics of the Child in Palestine during the Intifada Period." The 7th Kyoto University International Symposium: Coexistence with Nature in a "Glocalizing" World - Field Science Perspectives in Bangkok (November 23-25, 2005)
O	飛奈裕美. 2005. 「エルサレム旧市街における『パレスチナの』性格の維持—商店とNGOの活動を中心に」第22回日本中東学会年次大会（東京外国語大学, 2005年5月13日-14日）
O	飛奈裕美. 2005. 「インティファダ期パレスチナの社会変容と『子ども』のポリティクス」第21回日本中東学会年次大会（国立民族学博物館, 2005年5月15日）
P	TOBINA, Hirimi. 2006. "Life and Resistance for Palestinians in East Jerusalem: Case Studies of Merchants and NGOs." <i>Proceedings of Kyoto Symposium: Crossing Disciplinary Boundaries and Re-Visioning Area Studies: Perspectives from Asia and Africa in Kyoto</i> (November 9-13, 2006) pp.453-463.
P	TOBINA, Hirimi. 2005. "Social Transformation and the Politics of the Child in Palestine during the Intifada Period." <i>The Proceedings of The 7th Kyoto University International Symposium: Coexistence with Nature in a "Glocalizing" World - Field Science Perspectives in Bangkok</i> (November 23-25, 2005) pp.257-266.
O	網島洋之. 2004. 「南インド・コヤ族地域における耕地利用と作付体系の現状」第95回日本熱帯農業学会講演会（筑波大学, 2004年3月27・28日）
P	Nghiem Phuong Tuyen. 2003. How Do Upland Communities Integrate into Markets? Trade Activities in Four Northern Communes of Vietnam The 3rd International Conference on Asian Studies (ICAS 3) (Singapore, AUG 2003)
O	内田晴子. 2003. National Political Elite and the University of the Philippines 2003 Annual National Conference, Philippine Political Science Association (The Royal Mandaya Hotel, Davao City, 23-25 Oct. 2003)

P	内田晴子. 2003. 「民主化後のフィリピンにおける司法審査制度」 作本直行, 今泉慎也編『アジアの民主化過程と法: フィリピン・タイ・インドネシアの比較』アジア経済研究所 pp.167-201.
O	Watanabe, Akiko. 2006. Marrying in a Foreign Land: A Case Study of Muslim Community in Manila 21世紀COEプログラム「世界を先導する総合的地域研究拠点の形成」 京都シンポジウム 「『総合的地域研究の新地平: アジア・アフリカからディシプリンを架橋する』 (京都大学 京都, 2006年11月9日~13日)
O	Watanabe, Akiko. 2006. Marrying in a New Land: A Case Study of Muslim Community in Manila. Philippine Political Science Association (PPSA) (Grand Astoria Hotel, Zamboanga, Philippines, 27-28OCT.2006)
O	Watanabe, Akiko. 2005. Rallies, Media, and Identities: A Case Study on Moro Identities through a Land Dispute on Muslim Community in Metro Manila. Philippine Political Science Association (PPSA) (Metro Centre Hotel, Bohol, Philippines, 22OCT 2005)
O	渡邊暁子. 2004. 「マニラにおけるムスリム・コミュニティの展開—1970年代以降を中心として—」 第72回東南アジア史学会研究大会 (京都大学, 2004年12月11日-12日)
O	Watanabe, Akiko. 2004. The Changing Ethnoscape of Muslim Filipinos: A Case Study of Muslim Settler Communities in Metro Manila. The 7th International Conference of Philippine Studies (International Institute for Asian Studies <IIAS>, Jun.2004)
O	Watanabe, Akiko. 2003. The Evolution and Transformation of Muslim Settler Communities in Metro Manila. The 3rd National Philippine Studies Conference in Manila. (PSSC Building, Quezon City, Philippines, 5-6DEC.2003)
O	渡邊暁子. 2003. 「マニラ首都圏におけるムスリム・コミュニティの形成と展開」 第8回東京フィリピン研究会全国フォーラム (静岡県立大学 静岡市, 2003年6月29日・30日)
P	渡邊暁子. (投稿中) 「マニラ首都圏におけるムスリム・コミュニティの形成と展開—コミュニティの類型化を通じて」『東南アジア研究』
P	Watanabe, Akiko. (2007予定) The Evolution and Expansion of Muslim Communities in Metro Manila. <i>Kasarinlan</i> 24(2).
P	Watanabe, Akiko. (2007予定). Threading their Ways through Ethnicity, State and Islam: Snapshots of Everyday Lives in a Muslim Community in Metro Manila. In Arnold M. Azurin; Sylvano D. Mahiwo eds. <i>Junctions between Filipinos & Japanese: Transborder Insights & Reminiscences</i> . Kultura'twika, Quezon City.
O	Wongpreedee, Achakorn. 2005. Provincial Administrative Organization Election and Their Effect on The Power Structure in a Province : Case Studies in Buriram and Pathum Thani. The 7th Kyoto University International Symposium: Coexistence with Nature in a "Glocalizing" World - Field Science Perspectives (Nai Lert Park Hotel, 23-25NOV, 2005)
P	Wongpreedee, Achakorn. (n.a.) Decentralization and its Impact on Provincial Political Power in Thailand. <i>Asian and African Area Studies</i> 6(2)
P	Wongpreedee, Achakorn. 2005. A decade of Thai local government (1994-2004) <i>King Prajadhipok's Institute Journal</i> 13(2): 43-60.
P	Wongpreedee, Achakorn. 2005. Provincial Administrative Organization Election and Their Effect on The Power Structure in a Province : Case Studies in Buriram and Pathum Thani. <i>The Proceedings of The 7th Kyoto University International Symposium: Coexistence with Nature in a "Glocalizing" World - Field Science Perspectives in Bangkok (November 23-25, 2005)</i> pp. 267-276.
O	Yamaguchi, Kiyoko. 2004. Cebu- 'Independently Global Island' in the Philippines. The 4th EUROSEAS Conference (University of Paris Pantheon-Sorbonne Paris, France. 1-4SEP 2004)
O	Yamaguchi, Kiyoko. 2004. Rethinking Poblaciones in Cebu: Appraisal of Historial Town Planning as a Urban Heritage. The 7th International Conference on Philippine Studies: The Philippines-Changing Landscapes, Humanscapes, and Mindscapes in a Globalizing World (International Institute for Asian Studies, The Netherlands. 16-19JUN 2004)
O	Yamaguchi, Kiyoko., Shuji. Funo, Kiwamu. Yanagisawa,. 2004. Historical Poblaciones and Preservation Movement in Cebu, Philippines. The 5th International Symposium on Architectural Interchanges in Asia: Global Environment and Diversity of Asian Architecture (くにびきメッセ・島根県立産業交流会館. 2004年6月1-4日)
O	Yamaguchi, Kiyoko. 2004. New Space in American Period Philippines: Negotiating with changes and Expressing in Forms. Traffic in Southeast Asia- Cornell University Southeast Asia Program Graduate Student Symposium (Cornell University, USA, 2-3APR 2004)
O	Yamaguchi, Kiyoko. 2003. Poblaciones de Cebu: Historical Town Planning and Urban Heritage. Cebuano Studies Center Special Lecture (University of San Carlos Talamban Campus, Philippines, 1 Oct. 2003)
P	山口潔子. 2003. 「クリスマスのフィリピンで宗教を考える」 『アジア・アフリカ地域研究』 3: 271-276.
P	山口潔子. 2003. 「セブの木造邸宅」 「イバタン族の石の家」 「世界遺産バハイ・ナ・バト」 布野修司編 『世界住居誌』 昭和堂.
P	山口潔子, 布野修司, 安藤正雄, 脇田祥尚. 2003. 「ヴィガン(イロコス、フィリピン) における住宅の空間構成と街区分割」 『日本建築学会計画系P集』 572: 1-7.
P	山口哲由. 2003. 「チベット東部地域におけるヤク・ウシ雑種の生産と利用—雲南省西北部・中甸県の事例をととして」 『エコソフィア』 11: 85-100.
O	山本麻起子. 2004. 「メコン川流域開発と日本の関与」 農業土木学会研究大会 (那覇, 2004年7月)

O	山本麻起子. 2003. Japanese Participation in Mekong Development-Changing Paradigms of the Past 50years 「メコン流域開発計画への地域研究のアプローチ」 (バンコク, 2003年3月)
O	横田貴之. 2005. 「現代エジプトにおけるムスリム同胞団の諸活動と改革イニシアティブ」 第21回日本中東学会年次大会 (国立民族学博物館, 2005年5月15日)
O	横田貴之. 2003. 「現代エジプトにおけるイスラーム政党－ワサト党をめぐる一考察」 第19回日本中東学会年次大会 (立命館アジア太平洋大学, 2003年5月10日・11日)
O	横田貴之. 2002. 「組織発展期におけるエジプトのムスリム同胞団－資源動員論の視点から」 第18回日本中東学会年次大会 (東京大学, 2002年5月11・12日)
P	横田貴之. 2005. 「2004年エジプト大統領選挙－初めての複数候補制選挙の試み」 『中東研究』 490: 68-83.
P	横田貴之. 2005. 「エジプトにおける民主化運動－ムスリム同胞団とキファーヤ運動を中心に」 『中東研究』 489: 37-52.
P	横田貴之. 2003. 「ハサン・バンナーのジハード論と大衆のイスラーム運動」 『オリエント』 46 (1): 83-102.
P	小杉泰, 横田貴之. 2003. 「行動の思想、思想の実践」 小松久男他編『現代イスラーム思想と政治運動』東京大学出版会.
O	吉田香世子. 2006. 「北ラオス・ルー族農村における“ブン・パウエート”」 第40回日本文化人類学会研究大会 (東京大学駒場キャンパス, 2006年6月3日-4日)
O	吉田香世子. 2005. 「祝福、鎮魂、そして再生－ラオス・ルー族農村における“ブン・パウエート”」 ラオス研究会主催『ラオス研究会』 (ラオス・日本人材開発センター, 2005年12月17日)
O	吉田香世子. 2005. 「khwamhu thongthin: ngan soiluakan lae ngan nai sonnabot」 ラオス・フィールドステーション主催『日本人研究者によるラオス研究成果O会』 (ラオス・日本人材開発センター, 2005年12月14日)
P	吉田香世子. 2005. 「『カム：森の生活－ラオスの先住民』 スックサワン・シーマナ著 綾部恒夫監 修林行夫, 合田濤編『世界の先住民族－ファーストピープルズの現在 第2巻』 明石書店 pp.175-198.

大学院生（アフリカ地域研究専攻）

O	秋山裕之. 2006. 「グイ・ブッシュマンにおける近親婚の禁忌－再定住村における青年の恋愛より－」 第43回日本アフリカ学会学術大会 (大阪大学, 2006年5月27日-28日)
O	秋山裕之. 2005. 「子どもを庇護する社会的装置－セントラル・サンの事例を中心に」 第42回日本アフリカ学会学術大会 (東京外国語大学, 2005年5月28日-29日)
P	秋山裕之. 2004. 「定住地における子どもの民族誌」 田中二郎・佐藤俊・菅原和孝・太田至編『遊動民（ノマッド）』昭和堂 pp.206-227
P	秋山裕之. 2003. 「グイ・ブッシュマンの子どもとの対人関係と近代化による影響に関する人類学的研究－ボツワナ共和国カデ地区及びニューカデ地区の事例－」 京都大学博士課程人間・環境学研究科博士論文 174p.
O	BAHETA, Daniel. 2003. "The Effect of Formal and Basic Education on Rural Livelihood in a Settler Village in Eritrea, Case study of Gadien" 15th International Conference of Ethiopian Studies (Hamburg University, 20-25JUL 2003)
O	BAHETA, Daniel. 2002. "The Effect of Formal Education on Livelihood of Rural People in Eritrea" 第40回日本アフリカ学会学術大会 (島根大学, 2002年5月31日-6月1日)
P	BAHETA, Daniel. 2005. <i>The Dynamics of Formal Education during Wartime and Its Impact on the Rural People of Eritrea</i> 京都大学大学院博士課程アジア・アフリカ地域研究研究科博士論文 123p.
O	ASANTE, B. & TARSITANI, S. 2006. Indigenous custodianship of musical legacies: Towards shared world heritage in Harar, Ethiopia. 22nd European Seminar in Ethnomusicology (Jokkmokk, Sweden, 06-10 SEP 2006)
O	ASANTE, Belle. 2005. The quandary of sustaining plant-based basketry when novel trends favor synthetic fiber usage: stylistic vicissitudes of Harari baskets in Ethiopia. 4th International Congress of Ethnobotany (Yeditepe Univ., Istanbul, Turkey, 21-26 AUG 2005)
O	ASANTE, Belle. 2005. Stylistic vicissitudes of Harari baskets in Ethiopia: Recent departures from a plant-based tradition (poster) 4th International Congress of Ethnobotany (Yeditepe Univ., Istanbul, Turkey, 21-26 AUG 2005)
O	ASANTE, Belle. 2004. Changes in basketry traditions in Harar, Ethiopia 第41回日本アフリカ学会学術大会 (中部大学, 2004年5月29日-30日)
O	ASANTE, Belle. 2003. Women's craft guilds and the traditional basketry (Ge Mot) of Harari, Ethiopia. 21COE International Workshop (Addis Ababa University, 21-23 OCT 2003)
O	ASANTE, Belle. 2003. Ge Mot: Changes in the traditional basketry of Harari, Ethiopia 第12回日本ナイル・エチオピア学会学術大会 (土佐市, 2003年4月19日-20日)
P	ASANTE, Belle (in press) Ge Mot: traditional basketry in the old walled city of Harar, Ethiopia, <i>African Study Monographs, Supplementary Issue</i> 29: 61-72
P	ASANTE, Belle. 2006. Reviving sustainable plant-based crafts when recent trends favor synthetic fiber usage: Stylistic vicissitudes of Harari baskets in Ethiopia, <i>Proceedings of the 4th International Congress of Ethnobotany</i> pp.289-295

P	ASANTE, Belle. 2006. An Introduction to basketry in Africa; Africa (Ethiopia) <i>Proceedings of the 4th International Congress of Ethnobotany</i> pp.649-652, 653-654
P	ASANTE, Belle. 2006. Harar: Introduction <i>Encyclopaedia Aethiopica</i> 2: 1012-1013
V	分藤大翼. 2005. 「Wo a bele ーもりのなかー」上映歴: 1)衛星放送 スカイパーフェクトTV (216チャンネル, 2005年1月29日、2月5日) 2)彩都IMI大学院スクール アートドキュメンタリー講座修了上映会「NOMAD」(2005年2月26日) 3)京都人類学研究会 (2005年12月23日) 4)日本アフリカ学会第42回学術大会 (東京外国語大学, 2005年5月28日-29日) 5)第28回国際ドキュメンタリー映画祭 Cinéma du Réel、Détour部門 (パリ, ジョルジュ・ポンピドゥ国立美術文化センター, 2006年3月10日-19日) 6)上映会「映像でみる世界の文化 -映像人類学上映会-」(東京大学, 2006年6月3日-4日) 7)第3回モスクワ国際映像人類学映画祭 (モスクワ, M.V. Lomonosov Moscow State University, 2006年10月8日-13日) 8)21COE International Symposium (京都大学, 2006年11月10日) 9)上映会「アフリカの森と都市」(なかのZERO: 東京都, 2006年11月14日)
V	分藤大翼. 2005. 「動物になるーピグミーの自然観ー」「ドリームプロジェクト2005コンテスト」(横浜、2005年8月) 審査員特別賞
V	分藤大翼. 2005. 「ピグミーの森」第1回LOHAS Meeting シンポジウム: 「アフリカの空と太陽と森に学ぶ」(2005年6月24日)
O	分藤大翼. 2007. 「セルフ・ドキュメンタリーと映像人類学」日本マス・コミュニケーション学会 (大阪市立大学, 2007年3月16日)
O	分藤大翼. 2006. 「映像人類学の可能性ー現状と課題ー」第40回日本文化人類学会研究大会 (東京大学駒場キャンパス, 2006年6月3日-4日)
O	分藤大翼. 2006. 「映像によるアフリカ文化表象の可能性」第43回日本アフリカ学会学術大会 (大阪大学, 2006年5月27日-28日)
O	分藤大翼. 2004. 「ポスト狩猟採集社会の文化変容ーバカ社会における仮面文化の受容についてー」第38回日本文化人類学会学術大会 (東京外国語大学, 2004年6月5日-6日)
O	分藤大翼. 2002. 「狩猟採集民バカの歌と踊りへの関与の特徴について」第39回日本アフリカ学会学術大会 (東北大学, 2002年5月25日-26日)
O	BUNDO, Daisuke. 2002. "Baka's Mode of Participation in Singing and Dancing Performances" International Conference on Hunting and Gathering Societies (9th) (Heriot-Watt University, Edinburgh 09-13 SEP 2002)
P	分藤大翼. 2007(予定) 「ポスト狩猟採集社会の文化変容ー仮面儀礼の受容と転用ー」『アジア・アフリカ地域研究』6(2).
P	分藤大翼. 2007 (予定) 「映像と人類学の新しい関係: 映像人類学の現在」『文化人類学分野講演記録集』神戸学院大学地域研究センター.
P	分藤大翼. 2007. 「アフリカの光を受けとめるためにー映画監督シリル・マッソ氏の紹介をつうじて」『アフリカNOW』75: 16-21.
P	分藤大翼. 2006. 「世界の映像人類学事情」北村皆雄、新井一寛、川瀬慈編 『見る 撮る 魅せるアジア・アフリカー映像人類学の新天地ー』新宿書房 pp.232-238.
P	分藤大翼. 2006. 「『他者』としての私を撮るーカメルーン、森の民とともにー」北村皆雄、新井一寛、川瀬慈編 『見る 撮る 魅せるアジア・アフリカー映像人類学の新天地ー』新宿書房 pp.106-123.
P	分藤大翼. 2006. 新刊紹介「無心の壁ーアフリカ人の個人的援助要請とのしのぎあい; その意味を探ろう」『文化人類学』71(1):151-152.
P	分藤大翼. 2005. 「ピグミーの森の音楽」『ソトコト』12月号: 44-49.
P	分藤大翼. 2005. 「木霊する森ーピグミーと精霊ー」『神奈川大学評論』51: 69-78
P	分藤大翼. 2004. 「カメルーン南東部、バカ・ピグミーの精霊儀礼と音楽実践における社会的相互行為」京都大学大学院博士課程アジア・アフリカ地域研究研究科博士論文 128p.
O	ENDO, Satoko. 2004. "A study on the clothes of Burkina Faso women" (Poster Session) International Costume Congress (Cheju, Korea, 18-19AUG 2004)
P	遠藤聡子. 2006. 「ブルキナファソにおける女性の装いに関する研究ー衣服の所有と利用を中心にー」『国際服飾学会誌』29: 70-81
O	FUJIOKA, Yuichiro. 2006. "Differences in Fruit Tree Use Among Ovambo Households in north-central Namibia" (poster) 21COE International Symposium (京都大学, 2006年11月9日-13日)
O	FUJIOKA, Yuichiro. 2006. "Two Perspectives on Globalization: The National Beef Industries and Local Livestock Farming in Namibia" 21COE International Symposium (京都大学, 2006年11月9日-13日)
O	藤岡悠一郎. 2006. 「ナミビア北部における農牧社会の変容と『ヤシ植生』の変化」日本地理学会2006年度秋季学術大会 (静岡大学, 2006年9月23日-24日)
O	FUJIOKA, Yuichiro. 2006. "Recent Strategies of the Ovambo agro-pastoralists to Obtain Natural Resources in the Ared Area of north-central Namibia" International Geographical Union Conference (Brisbane, Australia 3-7JUL 2006)

O	藤岡悠一郎. 2006. 「ナミビア北部、「キャトルポスト」の増加にみるオヴァンボ農牧民の牧畜活動の変容」第43回日本アフリカ学会学術大会（大阪大学, 2006年5月27日-28日）
O	藤岡悠一郎. 2005. 「都市近郊に住む農牧民オヴァンボの昆虫食における近年の変化」第42回日本アフリカ学会学術大会（東京外国語大学, 2005年5月28日-29日）
O	藤岡悠一郎. 2004. 「ナミビア北部における農牧民オヴァンボの樹木利用と植生の相互変化」2004年度春季日本地理学会学術大会（東京経済大学, 2004年3月27日-28日）
O	藤岡悠一郎. 2003. 「ナミビア北部オバンボランドにおける植生分布とその環境および人の利用」第40回日本アフリカ学会学術大会（島根大学, 2003年5月31日-6月1日）
O	藤岡悠一郎, 岡秀一. 2002. 「八幡平・諸峠岳西斜面に位置する湿原の植生分布の特徴とその規定要因」2002年度春季東北地理学会学術大会（仙台市戦災復興記念館, 2002年5月）
P	FUJIOKA, Yuichiro. (印刷中) Live in Discordance between Local and Global Standard: The National Beef Industry and Local Livestock Farming in Namibia. <i>ASAFAS Special Paper</i>
P	藤岡悠一郎 (印刷中) 「ナミビア北部における食肉産業の展開とオヴァンボ農牧民の牧畜活動の変容：キャトルポストの設置に注目して」『アジア・アフリカ地域研究』6(2)
P	藤岡悠一郎. 2006. ナミビア北部に暮らすオヴァンボ農牧民の昆虫食にみられる近年の変容『エコソフィア』18: 95-109
P	藤岡悠一郎. 2006. 「(フィールドワーク便り)オヴァンボの昆虫食と幻のおかず」『アジア・アフリカ地域研究』5(2): 262-266
P	藤岡悠一郎. 2005. 「ナミビア北部における『ヤシ植生』の形成とオヴァンボの樹木利用の変容」水野一晴編『アフリカ自然学』古今書院 pp.216-225
P	藤岡悠一郎. 2005. 「ナミビア北部における植生変化と農牧民オヴァンボの建材利用の変遷」『アフリカ研究』66: 47-62
P	FUJIOKA, Yuichiro. 2005. "Vegetation Change and Use of Palms as a Building Material by Ovambo Agro-Pastoralists in North-Central Namibia" <i>African Study Monographs</i> , Supplementary Issue 30: 89-105
O	長谷川竜生. 2003. 「農牧複合型社会における富者の現代的役割」第40回日本アフリカ学会学術大会（島根大学, 2003年5月31日-6月1日）
P	長谷川竜生. 2002. 「(フィールドワーク便り)チパンデが教育するものータンザニア・ゴゴ社会の割礼式ー」『アジア・アフリカ地域研究』2: 361-366.
O	HATTORI, Shiho. 2006. "Traditional Knowledge of Medicinal Plants of the Baka Hunter-Gatherers in Cameroonian Rainforest" 10th International Congress of Ethnobiology (Chiang Rai, Thailand, 05-09NOV 2006)
O	服部志帆. 2006. 「狩猟採集民バカの植物知識の多様性ー性差・世代差・個人差の分析からー」第40回日本文化人類学会研究大会（東京大学駒場キャンパス, 2006年6月3日-4日）
O	服部志帆. 2006. 「植物知識の習得ーカメルーン東南部、狩猟採集民バカの民族植物学」第43回日本アフリカ学会学術大会（大阪大学, 2006年5月27日-28日）
O	服部志帆. 2006. 「バカ・ピグミーの民族植物学ー大人世代における植物知識の個人差とその要因ー」第11回生態人類学会研究大会（武雄温泉ハイツ, 2006年3月21・22日）
O	服部志帆. 2005. 「カメルーン共和国東南部、バカ・ピグミーの民族植物学：クズウコン科植物の有用性についての再評価」第15回日本熱帯生態学会年次大会（京都大学, 2005年6月11日-12日）
O	服部志帆. 2005. 「カメルーン東南部、狩猟採集民バカ・ピグミーの民族植物学ー植物をめぐる知識の性差・個人差についての一考察ー」第39回日本文化人類学会研究大会（北海道大学, 2005年5月21日-22日）
O	HATTORI, Shiho. 2005. "Ethnobotany of the Baka Pygmies in South Eastern Cameroon: Utilisation of Marantaceae Plants" WWF/GTZ/MINEF/Kyoto Univ. Joint Seminar (Yaounde, 16 FEB 2005)
O	服部志帆. 2003. 「自然保護計画が狩猟採集民に与える影響ーカメルーン東部州熱帯雨林におけるバカ・ピグミーの例ー」第8回生態人類学会研究大会（いこいの村あしがら山 神奈川, 2003年3月23日-24日）
O	HATTORI, Shiho. 2003. "Nature Conservation Project and Hunter-gatherers' Life in Cameroonian Rain Forest" 21COE International Workshop (Addis Ababa University, 21-23 OCT 2003)
O	HATTORI, Shiho. 2003. "Nature Conservation Project and Hunter-gatherers' Life in Cameroonian Rain Forest" WWF/GTZ/MINEF/Kyoto Univ. Joint Seminar (Yokadouma, 10DEC 2003)
P	HATTORI, Shiho. (in press) Nature Conservation Project and Hunter-gatherers' Life in Cameroonian Rain Forest. <i>African Study Monographs, Supplementary Issue</i> 29: 41-51
P	HATTORI, Shiho. 2006. Diversity and Variability of Plant Knowledge among Adult Baka Hunter-Gatherers in Cameroonian Rainforests. <i>Proceeding of Kyoto Symposium, 2006, 21COE</i> pp.229-235
P	HATTORI, Shiho. 2006. "Utilization of Marantaceae Plants by the Baka Hunter-Gatherers in Southeastern Cameroon" <i>African Study Monographs, Supplementary Issue</i> 33: 29-48
P	服部志帆. 2004. 「自然保護計画と狩猟採集民の生活：カメルーン東部州熱帯林カメルーン東部州熱帯林におけるバカ・ピグミーの例から」『エコソフィア』13: 113-127
O	HIRAI, Masaak. 2003. "Utilization, Creation and Transformation of <i>Acacia albida</i> Farmed Parkland in West-Central Senegal"

	21COE International Workshop (Addis Ababa University, 21-23 OCT 2003)
O	平井將公. 2003. 「木を「しつけ」する人びと: セネガル・セレール社会における <i>Acacia albida</i> 植生の維持機構」第13回日本熱帯生態学会学術大会 (鹿児島大学, 2003年6月13日-15日)
O	平井將公. 2003. 「 <i>Acacia albida</i> の「しつけ」はなぜなくなりつつあるのか?—セネガル・セレール社会における植生の維持機構の変化—」第40回日本アフリカ学会学術大会 (島根大学, 2003年5月31日-6月1日)
O	平井將公. 2003. 「セネガル中西部における <i>Acacia albida</i> 植生の利用・形成・変容」第8回生態人類学会研究大会 (いこいの村あしがら山 神奈川, 2003年3月23日-24日)
P	HIRAI, Masaaki. 2005. A Vegetation-Maintaining System as a Livelihood Strategy among the Sereer, West-Central Senegal. <i>African Study Monographs</i> , Supplementary Issue 30: 183-193
P	平井將公. 2005. 「セネガル中西部における「アルビダ植生」の維持機構」水野一晴編『アフリカ自然学』古今書院 pp.204-215
O	市野進一郎. 2006. 「ワオキツネザルによるカメレオンの捕食」第22回日本霊長類学会学術大会 (大阪大学, 2006年7月15日-17日)
O	市野進一郎, 相馬貴代, 小山直樹. 2006. 「マダガスカル、ベレンティ保護区におけるワオキツネザルの脱毛症」第43回日本アフリカ学会学術大会 (大阪大学, 2006年5月27日-28日)
O	市野進一郎, 相馬貴代. 2005. 「ベレンティ保護区におけるワオキツネザルの脱毛症とその個体群への影響」第52回日本生態学会学術大会 (大阪国際会議場, 2005年3月27日-30日)
O	市野進一郎, 川本芳, 宮本直美, 小山直樹, 平井啓久. 2005. 「マイクロサテライトDNAマーカーを用いたワオキツネザルの父子判定」第21回日本霊長類学会学術大会 (倉敷市芸文館・別館, 2005年7月1日-3日)
O	ICHINO, S. & KOYAMA, N. 2004. "Social changes and group size in a wild population of ring-tailed lemurs (<i>Lemur catta</i>) at Berenty, Madagascar" 20th Congress of the International Primatology Society (Lingotto Conference Center, Torino, Italy, 22-28AUG 2004)
O	市野進一郎. 2004. 「ベレンティ保護区におけるワオキツネザルのメスの優劣関係」第20回日本霊長類学会学術大会 (犬山市国際観光センター, 2004年7月2日-4日)
O	市野進一郎. 2004. 「マダガスカル、ベレンティ保護区におけるワオキツネザルの食性—タマリンドの重要性—」第41回日本アフリカ学会学術大会 (中部大学, 2004年5月29日-30日)
O	市野進一郎. 2002. 「マダガスカル、ベレンティ保護区で観察されたワオキツネザル(<i>Lemur catta</i>)の群れ分裂」第39回日本アフリカ学会学術大会 (東北大学, 2002年5月25日-26日)
O	市野進一郎. 2002. 「ワオキツネザルの社会変動」第18回日本霊長類学会学術大会 (東京大学, 2002年7月19日-21日)
P	市野進一郎 (印刷中) 「マダガスカル、ベレンティ保護区におけるキツネザル類の保全状況とその課題」『アジア・アフリカ地域研究』6(2)
P	TAKAHATA, Y., KOYAMA, N., ICHINO, S., MIYAMOTO, N., & NAKAMICHI, M. 2006. Influence of group size on reproductive success of female ring-tailed lemurs: distinguishing between IGFC and PFC hypotheses. <i>Primates</i> 47(4): 383-387
P	ICHINO, Shinichiro. 2006. Troop fission among wild ring-tailed lemurs (<i>Lemur catta</i>) in Berenty, Madagascar. <i>American Journal of Primatology</i> 68(1): 97-102
P	ICHINO, Shinichiro. 2005. Attacks on a wild infant ring-tailed lemur (<i>Lemur catta</i>) by immigrant males at Berenty Reserve, Madagascar: interpreting infanticide by males. <i>American Journal of Primatology</i> 67(2): 267-272
P	KOYAMA, N., ICHINO, S., NAKAMICHI, M., & TAKAHATA, Y. 2005. Long-term changes in dominance ranks among ring-tailed lemurs at Berenty Reserve, Madagascar. <i>Primates</i> 46(4): 225-234
P	ICHINO, S. & KOYAMA, N. 2006. Social changes in a wild population of ringtailed lemurs (<i>Lemur catta</i>) at Berenty, Madagascar. L..Jolly, R.W.Sussman, N. Koyama & H. Rasamimanana eds., <i>Ringtailed lemur biology</i> , Springer pp.234-244
P	KOYAMA, N., SOMA, T., ICHINO, S. & TAKAHATA, Y. 2006. Home ranges of ringtailed lemur troops and the density of large trees at Berenty Reserve, Madagascar. L..Jolly, R.W.Sussman, N. Koyama & H. Rasamimanana eds., <i>Ringtailed lemur biology</i> , Springer .pp.86-101
P	CRAWFORD, G., ANDRIAFANEVA, L., BLUMENFELD-JONES, K., CALABA, G., CLARKE, L., GRAY, L., ICHINO, S., JOLLY, A., KOYAMA, N., MERTL-MILLHOLLEN, A., OSTPAK, S., PRIDE, E., RASAMIMANANA, H., SIMMEN, B., SOMA, T., TARNAUD, L., TEW, A. & WILLIAM, G. 2006. Bald lemur syndrome and the miracle tree: alopecia associated with <i>Leucaena leucocephala</i> at Berenty Reserve, Madagascar. L. Jolly, R.W.Sussman, N. Koyama & H. Rasamimanana eds., <i>Ringtailed lemur biology</i> , Springer pp.332-342.
P	TAKAHATA, Y., KOYAMA, N., ICHINO, S. & MIYAMOTO, N. 2005. Inter- and within-troop competition of female ringtailed lemurs; a preliminary report. <i>African Study Monographs</i> 26: 1-14.
P	小山直樹, 相馬貴代, 市野進一郎, 高畑由起夫. 2005. 「マダガスカル、ベレンティ保護区におけるワオキツネザルの行動域と大木の密度」『アフリカ研究』66: 1-12
P	市野進一郎. 2004. 「マダガスカル、ベレンティ保護区におけるワオキツネザルの社会生態学的研究」京都大学大学院博士課程アジア・アフリカ地域研究研究科博士論文 157p.
P	SUSSMAN, RW., ANDRIANASOLONDRAIBE, O., SOMA, T. & ICHINO, S. 2003. Social behavior and aggression among

	ringtailed lemurs. <i>Folia Primatologica</i> 74(3): 168-172
P	KOYAMA, N., NAKAMICHI, M., <u>ICHINO, S.</u> & TAKAHATA, Y. 2002. Population and social dynamics changes in ring-tailed lemur troops at Berenty, Madagascar between 1989-1999. <i>Primates</i> 43(4): 291-314
O	IIDA, Masahi. 2005. Embodied Femininity : A case study of widows organization in Harare, Zimbabwe. <i>Anthropology Southern Africa</i> 2005 (University of Kwazulu, South Africa, 24SEP 2005)
O	飯田雅史. 2005. 「体現化される女性性：ジンバブウェ都市部における寡婦組織の事例から」 第78回慶應義塾大学アフリカセミナー（慶應義塾大学, 2005年7月16日）
O	飯田雅史. 2005. 「都市世界の生活戦略：ハラレにおける女性組織のキリスト教的価値観について」 第42回日本アフリカ学会学術大会（東京外国語大学, 2005年5月28日-29日）
O	IIDA, Masahi. 2006. Expansion of the Global HIV/AIDS Epidemic in Zimbabwe. <i>21COE International Symposium</i> （京都大学, 2006年11月9日-13日）
P	IIDA, Masahi. 2006. Expansion of the Global HIV/AIDS Epidemic in Zimbabwe. <i>Proceeding of Kyoto Symposium, 2006</i> , 21COE p.501
P	飯田雅史. 2005. 「下訳者あとがき」 吉國恒雄著『アフリカ人都市経験の史的考察』インパクト出版会 pp.250-251
O	稲井啓之. 2006. 「カメルーン熱帯雨林域における漁撈活動」 第43回日本アフリカ学会学術大会（大阪大学, 2006年5月27日-28日）
O	稲井啓之. 2004. 「狩猟採集民バカ・ピグミーの日常活動：とくに森のキャンプにおけるタイム・アロケーションについて」 第69回日本民族衛生学会学術大会（東京大学, 2004年11月11日-12日）
O	石本雄大. 2006. 「西アフリカ、サヘル地域における農牧民の消費行動にみる生存戦略ーブルキナファソ北東部I村の事例からー」 2006年度日本国際地域開発学会秋季大会（明星大学, 2006年11月25日）
O	石本雄大. 2005. 「サヘル地域の旱害・虫害下における農牧民の食料獲得活動の変化」 第16回日本沙漠学会学術大会（鳥取大学, 2005年5月20日-21日）
O	石本雄大. 2004. 「サヘル地域における生計維持機構ーブルキナファソ北東部イシャガルニ村の事例からー」 第9回生態人類学会研究大会（大津市, 2004年3月20日-21日）
P	石本雄大（印刷中）「サヘル地域の旱害・虫害下における農牧民の対処ーブルキナファソ北部I村における食料獲得活動ー」 『日本砂丘学会誌』 53(2).
O	ITO, Yoshimasa. 2005. "Wild Plant Utilization in the Highland Forest Area of Southwestern Ethiopia: Relationships between People and the Bosona Forest in Gera Wereda" (poster). <i>7th Kyoto University International Smposium</i> (Bangkok, Thailand, 23-24 NOV 2005)
O	伊藤義将. 2006. 「エチオピア南西部高地森林域における野生植物利用：ジンマ群ゲラ行政区に住む人々と『ゲラの森』との関係」 第15回日本ナイル・エチオピア学会学術大会（南山大学, 2006年4月15日-16日）
O	ITO, Yoshimasa. 2006. "Sustainable plant use in Gera, the forest area of Southwestern Ethiopia. <i>21COE International Workshop</i> (Addis Ababa University, 04-05FEB 2006)
P	樺沢麻美. 2006. 「チンパンジー・サンクチュアリの現状：『行き場のないチンパンジー』をどうすべきか」 『エコソフィア』 17: 88-103
O	亀井伸孝. 2003. 「アフリカろう教育の父フォスター」 第6回日本聾史学会宮城大会（宮城県仙台市, 2003年10月）
O	KAMEI, Nobutaka. 2003. The Deaf in Central Africa: Anthropological attempts in Cameroon and Gabon. <i>The presentation sponsored by the Office of International Programs and Sevrices and Sociology Department</i> (Gallaudet University, Washington, DC. USA, 17 SEPT2003)
O	KAMEI, Nobutaka. 2003. Toward an ecological theory of play: A case of forager children in Cameroon. <i>Workshop "Social interaction and cultural learning"</i> （京都府精華町, 通信総合研究所（CRL）, 2003年7月18日）
O	亀井伸孝. 2003. 「アフリカの手話分布：ろう者の言語人類学的研究に向けて」 第40回日本アフリカ学会学術大会（島根大学, 2003年5月31日-6月1日）
O	KAMEI, Nobutaka. 2002. How the Baka children of Cameroon play. <i>Annual Meeting of the American Anthropological Association (101st). Session 0-043 "Culture and Ecology of Forager Children"</i> (Hyatt Regency New Orleans, USA, NOV2002)
O	KAMEI, Nobutaka. 2002. How the Baka children of Cameroon play. <i>International Conference on Hunting and Gathering Societies (9th)</i> (Heriot-Watt University, Edinburgh 09-13 SEP 2002)
O	KAMEI, Nobutaka. 2002. How the Baka children of Cameroon play 'Culture and Ecology of Forager Children,' <i>pre-conference workshop of the 9th International Conference on Hunting and Gathering Societies</i> (Edinburgh Conference Centre, Heriot-Watt University, Edinburgh).09/07-08
P	亀井伸孝. 2004. 「アフリカの手話言語」 『アフリカ研究』 64: 43-64
P	亀井伸孝（印刷中）「アフリカのろう者 (6) アフリカろう教育の父フォスター」 『手話コミュニケーション研究』 52
P	亀井伸孝（印刷中）「カメルーンのろう者コミュニティ」 森壮也・小林昌之編『発展途上国のろう者コミュニティ』 明石書店
P	KAMEI, Nobutaka. (in press) "Play among Baka children in Cameroon" In Barry S. Hewlett and Michael E. Lamb eds.

	<i>Hunter-Gatherer Childhood</i>
P	亀井伸孝. 2004. 「アフリカのろう者 (5) ろう者たちのアメリカ観」 『手話コミュニケーション研究』 51: 55-62
P	亀井伸孝. 2003. 「アフリカろう教育の父フォスター」 『アフリカレポート』 36: 36-39
P	亀井伸孝. 2003. 「アフリカのろう者 (4) 外来手話をめぐる論争」 『手話コミュニケーション研究』 50: 44-53
P	亀井伸孝. 2003. 「アフリカのろう者 (3) アフリカにもたらされた外来手話」 『手話コミュニケーション研究』 49: 58-65
P	亀井伸孝. 2003. 「アフリカ諸国のろう者によるろう教育事業」 『アジア研ワールド・トレンド』 (アジア経済研究所) 96: 35-38
P	亀井伸孝. 2003. 「アフリカのろう者 (2) アフリカで話されている手話」 『手話コミュニケーション研究』 47: 50-55
P	亀井伸孝. 2002. 「アフリカのろう者 (1) アフリカの国々とうろう者」 『手話コミュニケーション研究』 46: 26-32
O	神田靖範. 2006. 「半乾燥地における水田稲作の浸透プロセスと民族の共生ーボジ県ウソツェ村の事例ー」 第43回日本アフリカ学会学術大会 (大阪大学, 2006年5月27日-28日)
O	KANEKO, Morie. 2006. Creating the new styles for clients: Usage and classification of pots among the Ari, Southwestern Ethiopia.(poster) 21COE International Symposium (京都大学, 2006年11月9日-13日)
O	金子守恵 (ゲスト出演). 2006. 「資源人類学・第2回 (担当講師: 内堀基光): 自給自足的な地域におけるものづくりと商品の流通」 放送大学講義 (平成19年から平成22年まで放映予定) (放送大学学園, 2006年7月26日)
O	KANEKO, Morie. 2006. Techno-lifehistory of Pottery Makers in Southwestern Ethiopia: Understanding the change of technique in their orbit of life World Archaeological Conference (Osaka Museum of History, 12-15JAN 2006)
O	KANEKO, Morie. 2006. Some rationales of open-firing techniques by women pottery makers among the Ari, Southwestern Ethiopia(Poster presentation) World Archaeological Conference (Osaka Museum of History, 12-15JAN 2006)
O	金子守恵. 2005. 「こうやって、こうやって、つくるのよ: 農耕民アリの女性職人による土器づくりの習得過程」 第21回日本霊長類学会学術大会公開シンポジウム (倉敷市芸文館, 2005年7月1日-3日)
O	金子守恵. 2005. 「地縁技術としての土器づくり: エチオピア西南部アリの女性職人による土器の野焼き」 第42回日本アフリカ学会学術大会 (東京外国語大学, 2005年5月28日-29日)
O	金子守恵. 2005. 「身体技法にみるテクノ・ライフヒストリー: エチオピア西南部アリ女性職人の土器づくり」 第39回日本文化人類学会研究大会 (北海道大学, 2005年5月21日-22日)
O	重田眞義、西真如、金子守恵、鈴木郁乃、ゲブレ・インティソ. 2005. 「エチオピアの教育制度改革と地域社会の対応: 南オモにおけるNPO法人アジアとアフリカをつなぐ会の活動から」 第14回日本ナイル・エチオピア学会学術大会 (千曲市, 2005年4月16日-17日)
O	金子守恵. 2005. 「土器づくりの過程における身体技法: エチオピア西南部オモ系農耕民アリの女性職人を事例にして」 第10回生態人類学会研究大会 (仙台市, 2005年3月18日-19日)
O	金子守恵. 2004. 「文脈化されるものづくりの過程ーエチオピア西南部オモ系農耕民アリの土器づくり」 第38回日本文化人類学会学術大会 (東京外国語大学, 2004年6月5日-6日)
O	KANEKO, Morie. 2003. Forming techniques and Creativities: Pottery making in Ari, Southwestern Ethiopia. 15th International Conference of Ethiopian Studies (Hamburg University, 20-25JUL 2003)
O	重田眞義、金子守恵、ゲブレ・インティソ、インティソ・デコ. 2003. 「村に学校ができるときー「教育」をめぐるゲブレ・インティソ親子のライフヒストリー」 第40回日本アフリカ学会学術大会 (島根大学, 2003年5月31日-6月1日)
O	金子守恵. 2002. 「土器成形技術の特質と創造ーエチオピア西南部オモ系農耕民アリの土器づくり」 第39回日本アフリカ学会学術大会 (東北大学, 2002年5月25日-26日)
O	金子守恵. 2002. 「職人が保持する土器成形技術の特質とその習得過程ーエチオピア西南部オモ系農耕民アリの土器づくり (3)」 第11回日本ナイル・エチオピア学会学術大会 (岩手県牛の博物館, 2002年4月20日-21日)
P	重田眞義、金子守恵. (掲載予定) 「(仮) エチオピアの食文化」 岡倉登志編『エチオピアを知る』明石書店
P	金子守恵. (掲載予定) 「土器をつくる女性職人ーマナー: エチオピア西南部農耕民アリ」 岡倉登志編『エチオピアを知る』明石書店
P	金子守恵. (掲載予定) 「エチオピア西南部における土器職人のテクノ・ライフヒストリー: 人生の軌跡に技術の変化を跡づける試み」 後藤明編『(仮) 世界考古学中間会議成果論文集』同成社
P	金子守恵. (掲載予定) 「手指をつかって土器をつくる: エチオピア西南部アリ女性職人の身体技法」 菅原和孝編『資源人類学シリーズ8・身体資源』弘文堂
P	金子守恵. (印刷中) 「生業としての土器づくり: エチオピア西南部の土器づくりの地域間比較にむけて」 『アジア・アフリカ地域研究』 6(2)
P	金子守恵. (印刷中) 「土器をつかい、つくり、うる人びと: エチオピア西南部に暮らす農耕民アリ」 アフリカ理解プロジェクト編『アフリカン・アート&クラフト』 pp.28-29
P	KANEKO, Morie. (in press) Variations in Pottery Making by Ari Woman Artisans in Southwestern Ethiopia: Analysis of the Finger Movement Patterns of Potters in Forming Pots. Nilo-Ethiopian Studies 11
P	KANEKO, Morie. (in press) Learning Process of Pottery Making in Ari people, Southwestern Ethiopia. African Study

	<i>Monographs, Supplementary Issue 29: 73-81</i>
P	金子守恵. 2006. Creating the new styles for clients: Usage and classification of pots among the Ari, Southwestern Ethiopia. <i>Proceeding of Kyoto Symposium, 2006, 21COE</i> pp.237-243
P	金子守恵. 2006. 「土器を微細につかいわけ、つくりわけの人々：エチオピア西南部の土器づくりのフィールドから」佐藤耕造編『アフリカ・モード』pp.186-191
P	金子守恵. 2005. 「地縁技術としての土器づくりーエチオピア西南部アリ地域における土器の野焼き」『アフリカ研究』67: 1-18
P	金子守恵. 2005. 「文脈化される土器づくりの過程：エチオピア西南部オモ系農耕民アリの女性職人による地縁技術の習得・実践・創造」京都大学大学院博士課程アジア・アフリカ地域研究研究科博士論文 246p.
P	金子守恵. 2002. 「一人前の土器職人への道ーエチオピア西南部アリ地域における土器作りのフィールド調査から」『アジア・アフリカ地域研究』2: 357-361.
V	KAWASE, Itsushi. 2006. Oral Pornography (14分 カラーDV) 上映歴： 1) Visual Anthropology Symposium: Asia Africa through Japanese Eyes (Hamburg University, 24JUN 2006)
V	KAWASE, Itsushi. 2005. <i>Kids got a song to sing</i> (53min. DV.color) 上映歴： 1)Asia-Africa Institute (Hamburg University, 16JAN 2006) 2)Department of Linguistics (University of Cologne, 17JAN 2006)
V	川瀬慈. 2005. 『僕らの時代は』(53分 カラーDV) 上映歴： 1)第13回現代中東イスラム世界・フィールド研究会(2005年9月)、2)映像民俗学の会(新宿, 2005年11月)、3)京都人類学研究会12月季節例会(2005年12月)
V	KAWASE, Itsushi (Dir. & Edt.), Jemmal Mohammed. 2005. <i>Lalibäločč-Living in the Endless Blessing</i> - (25min.DV.Color) 上映歴： 1)Department of Languages and Cultures of Africa (University of Leiden, NOV 2005) 2)The Society for Ethnomusicology, 50th Annual Conference (Atlanta, Georgia, NOV 2005) 3)Department of Music (Harvard University, NOV 2005)
V	監督・編集・録音：川瀬慈、撮影：川瀬慈・Jemmal Mohammed. 2005. 『ラリベロッチー終わらなき祝福を生きるー』(24分 カラーDV) 上映歴：1)日本ナイル・エチオピア学会第14回学術大会(千曲市,2005年4月) 2)日本アフリカ学会第42回学術大会(東京外国語大学, 2005年5月) 3)平成17年度日本エチオピア協会総会(東京, 2005年6月) 4)インディーズフィルムフェス2005(松本市, 2005年10月)
O	川瀬慈. 2006. 「エチオピアの音楽職能集団アズマリとラリベラの隠語に関する社会言語学的研究」第15回日本ナイル・エチオピア学会学術大会(南山大学, 2006年4月15日-16日)
O	KAWASE, Itsushi. 2006. The creative aspect of the code of communication shared by Ethiopian minorities <i>21COE International Workshop</i> (Addis Ababa University, 04-05FEB 2006)
O	KAWASE, Itsushi. 2005. Sociolinguistic aspect of Azmari and Lalibäločč: the argot as a self-imposed group marker. <i>International Conference on Endangered Language of Ethiopia</i> (Addis Ababa University)
O	KAWASE, Itsushi. 2003. Musical performance and self-designation of Ethiopian minstrels: Azmari. <i>21COE International Workshop</i> (Addis Ababa University, 21-23 OCT 2003)
O	KAWASE, Itsushi. 2003. Some aspects of Azmari performance in several social occasions in North Gondar. <i>15th International Conference of Ethiopian Studies</i> (Hamburg University, 20-25JUL 2003)
P	川瀬慈. 2006. 「唄声が紡ぐつながりを撮るーエチオピアの吟遊詩人集団ラリベロッチー」北村皆雄, 新井一寛, 川瀬慈編『見る 撮る 魅せるアジア・アフリカー映像人類学の新天地ー』新宿書房
P	KAWASE, Itsushi. (in press) Musical performance and self-designation of Ethiopian minstrels: Azmari. <i>African Study Monographs, Supplementary Issue 29: 137-142</i>
O	KAZATO, Mari. 2006. The Local Value and Right to Winter Camps under the Land Privatization Policy in Postsocialist Mongolia <i>11th Biennial Conference of International Association for the Study of Common Property</i> (Bali Indonesia, 19-23JUN 2006)
O	KAZATO, Mari. 2006. Management and evaluation of livestock under socialist collectivization in Mongolia. <i>21COE International Symposium</i> (京都大学,2006年11月9日-13日)
O	KAZATO, Mari. 2006. When domestic animals leave the commodity world: Value and individuality of animals in postsocialist Mongolia (poster). <i>21COE International Symposium</i> (京都大学,2006年11月9日-13日)
O	風戸真理. 2006. 「ポスト社会主義モンゴルにおける土地私有化政策と牧民の実践」日本文化人類学会第40回研究大会(東京大学駒場キャンパス, 2006年6月3-4日)
O	風戸真理. 2006. 「現代モンゴル牧畜地域における銀と鍛冶師：潜在的商品としての銀と銀製品」資源人類学「小生産物の流通と消費」班、2006年第4回研究会(アジア・アフリカ言語文化研究所, 2006年12月2日)
O	風戸真理. 2006. 「現代モンゴル国遊牧民における銀の利用」2006年第2回モンゴル研究会(東京外国語大学, 2006年12月4日)
O	風戸真理. 2006. 「『殖える財』と『死なない財』：モンゴル国遊牧民の家畜と銀」第43回現代人類学研究会(東京大学駒場キャンパス, 2006年12月9日)
O	KAZATO, Mari. 2005. What is the O'voljoo for Mongolian herders?: The right to land in pastoral regions in postsocialist Mongolia (poster) <i>7th Kyoto University International Smposium</i> (Bangkok, Thailand, 23-24 NOV 2005)

O	風戸真理. 2004. 「移行期モンゴル社会における遊牧民の社会組織：牧畜も商売も教育も」 21COE京都ワークショップ『フィールドワークから紡ぎだす—発見と分析のプロセス』（京都大学, 2004年10月30日-31日）
O	風戸真理. 2003. 「モンゴル国における自然および社会環境の多様性」 ポスト社会主義圏人類学ワークショップ（キャンパスプラザ京都, 2003年5月23日）
O	風戸真理. 2002. 「集団化期モンゴルにおける家畜に対する管理と価値付け：モンゴル国ドンドゴビ県デレン郡の事例より」 第36回日本民族学会研究大会（金沢大学文学部, 2002年6月1日-2日）
P	風戸真理. 2006. 「モンゴル国牧畜地域における政治経済変化と遊動的牧畜—社会主義から市場経済への移行のなかで—」 京都大学人間・環境学研究科博士論文, 208p.
P	風戸真理. 2006. 「商品世界からこぼれ出る家畜—社会主義期および市場経済化期のモンゴル国における家畜の個性と意味—」 『人文學報』 93: 25-55
P	風戸真理. 2006. 「モンゴル研究への苦難の道のり」 京大探検者の会編『京大探検部—1956年から2006年まで—』 東京：新樹社, pp.451-461
P	風戸真理. 2006. 「バナナと木綿：ラオス北部タイ・ルーの染織と物質文化」 21世紀COEプログラム地域間比較フィールド・スタディー・ツアー「東南アジア大陸部の農業生態の特徴とその発展の可能性」 報告書, pp.451-462
P	KAZATO, Mari. 2006. When domestic animals leave the commodity world: Value and individuality of animals in postsocialist Mongolia. <i>Proceeding of Kyoto Symposium, 2006, 21COE</i> pp.257-264.
P	風戸真理. 2006. 「遊牧民の離合集散と世話のやける家畜たち：モンゴル国アルハンガイ県におけるヒツジ・ヤギの日帰り放牧をめぐる労働の組織化と群れ管理」 『アジア・アフリカ地域研究』 6(1): 1-43
P	KAZATO, Mari. (in press) The state policy and herders' right to winter camps (O'voljoo) in postsocialist Mongolia. <i>Vestnik BGU</i> .
P	KAZATO, Mari. 2005. How Mongolian pastoralists manage their herds of sheep and goats: herd formation and control for the day-trip herding in Arkhangai province", Mongolian state. <i>Mongolian Journal of Anthropology, Archaeology and Ethnology</i> 1(1): 113-120.
P	風戸真理. 2003. 「市場経済へ移行する社会における地方に暮らす人々の適応実践—モンゴル国ドルノト県バヤンドン郡の牧畜制度と教育制度の事例より—」 『モンゴル研究』 21: 47-67
P	風戸真理. 2002. 「モンゴル国の地方に暮らす人々の遊牧と定住をめぐる移動と世帯間協力：ドンドゴビ県デレン郡の一家族の生活史を中心に」 『リトルワールド研究報告』 18: 49-77
Pic	風戸真理. 2004. 「草海の午後」（写真）第89回二科展写真部（学生部門）
Pic	風戸真理. 2004. 「バダムとニャンボー」（写真）第28回視点展
O	近藤史. 2006. 「タンザニア南部高地における造林焼畑の展開」 第43回日本アフリカ学会学術大会（大阪大学, 2006年5月27日-28日）
O	KONDO, Fumi. 2005. Indigenous Valley Bottom Cultivation and its Innovation among the Bena in Tanzania (Poster). <i>7th Kyoto University International Smposium</i> (Bangkok, Thailand, 23-24 NOV 2005)
O	大山修一, 近藤史, 山本紀夫. 2005. 「アンデスにおけるラクダ科動物ビクーニャと野生型ジャガイモの生態—ドメスティケーション研究にむけて」 第15回日本熱帯生態学会年次大会（京都大学, 2005年6月11日-12日）
O	近藤史. 2005. 「化学肥料を買う・木を植えて林を焼く、キファニャ村における在来農業の変化」 21COEタンザニア・フィールド・ステーション第4回セミナー（タンザニア、ダルエスサラーム, 2006年3月19日）
O	KONDO, Fumi. 2004. Innovation in the Indigenous Valley-Bottom Cultivation in Southern Highlands, Tanzania. <i>SCSRD Seminar</i> , (Sokoine University, Tanzania, 14JAN 2004)
O	近藤史. 2002. 「タンザニア南部高地における谷地耕作の農法改変—化学肥料の利用—」 第39回日本アフリカ学会学術大会（東北大学, 2002年5月25日-26日）
P	近藤史. (印刷中) 「タンザニア南部高地における造林焼畑の展開」 『アジア・アフリカ地域研究』 6(2)
P	大山修一, 近藤史, 淡路和江, 川西陽一. (印刷中) 「西アフリカ・サヘル地域の乾燥地農耕と砂漠化に対する農耕民の認識」 『農耕の技術と文化』 27.
P	大山修一, 近藤史. 2005. 「サヘルの乾燥地農耕における家庭ゴミの投入とシロアリの分解活動」 『地球環境』 10(1): 49-57.
P	近藤史. 2003. 「タンザニア南部高地における在来谷地耕作の展開」 『アジア・アフリカ地域研究』 3: 103-139
O	Mamo HEBO Wabe. 2005. Problems and Prospects of Education in Oromia Regional State of Ethiopia: A Case of Highland Arsii Oromo Areas. 第42回日本アフリカ学会学術大会（東京外国語大学, 2005年5月28日-29日）
P	Mamo HEBO Wabe. (in press) Land Rights in Disputes: A Diachronic Overview of Land Disputes among the Arsii Oromo Peasants of Kokossa District, Southern Ethiopia. <i>African Study Monographs</i> , Supplementary Issue 29: 125-135.
P	Mamo HEBO Wabe. 2006. <i>Land, Local Custom and State Polices: Land Tenure, Land Disputes, and Disputes Settlement among the Arsii Oromo of Southern Ethiopia</i> , Shokado. 186p.
P	Mamo HEBO Wabe. 2004. <i>Land Local Custom & State 'Laws': A Study of Land Tenure Systems and Land Disputes Settlements, Ethiopia</i> 京都大学大学院博士課程アジア・アフリカ地域研究研究科博士論文 213p.

O	MARUO, Satoshi. 2003. Intensive Banana Farming by the Smallholders in Tanzania, East Africa. <i>International Workshop on 'Multiply Useful Plants: Cultural Meaning and Economic Importance</i> (Kasetsart University, Bangkok, 18-19OCT, 2003)
O	丸尾聡. 2002. 「主食用バナナの域内取引をめぐる農村社会の展開ータンザニア北西部・ハヤの事例」 第39回日本アフリカ学会学術大会（東北大学, 2002年5月25日-26日）
P	小松かおり, 北西功一, 丸尾聡, 埴狼星. 2006. 「バナナ栽培文化のアジア・アフリカ地域間比較： 品種多様性をめぐって」 『アジア・アフリカ地域研究』 6(1): 77-119.
P	MARUO, Satoshi. 2005. Intensive Banana Farming by the Smallholders in Tanzania, East Africa. In T. Matsui & S. Aungusmalin eds. <i>Multiply Useful Plants: Uses and Usefulness</i> pp.62-74.
P	丸尾聡. 2002. 「バナナとともに生きる人びと」 掛谷誠編『講座生態人類学第3巻 アフリカ農耕民の世界ーその在来性と変容ー』 京都大学学術出版会 pp. 51-90.
P	MARUO, Satoshi. 2002. Differentiation of Subsistence Farming Patterns among the Haya Banana Growers in Northwestern Tanzania. <i>African Study Monographs</i> , 23(4): 147-175
P	丸尾聡. 2002. 「アフリカ大湖地方におけるバナナ農耕とその集約性ータンザニア北西部・ハヤの事例ー」 『農耕の技術と文化』 25: 108-134
O	丸山淳子. 2006. 「開発政策と先住民運動のはざまで：再定住地に暮らすセントラル・カラハリ・サンの生活から」 国立民族学博物館共同研究会『「先住民」とはだれか？ー先住民民族イデオロギーの潜勢的／顕在的形態とその社会歴史的背景に関する研究』（東京外国語大学, 2006年1月14日）
O	丸山淳子. 2006. 「ボツワナの再定住地における狩猟採集民サンの居住地選択」 21COEザンビア・フィールドステーション／南部アフリカ研究会/日本アフリカ学会関東支部共催『ワークショップ “土地”から展望する南部アフリカ』（東京外国語大学, 2006年2月18日）
O	丸山淳子. 2005. 「南部アフリカ狩猟採集民サンの再定住にともなう社会関係の再編ー「ヘッドマン」の選出過程に注目してー」 第42回日本アフリカ学会学術大会（東京外国語大学, 2005年5月28日-29日）
O	丸山淳子. 2004. 「『人類学者』と『ブッシュマン』」 21COE（関西学院大学）ワークショップ（第3回）「人類の幸福に資する社会調査」「多文化と幸せ」（関西学院大学, 2004年12月6日）
O	丸山淳子. 2004. 「『行い』をみること：再定住地で暮らす狩猟採集民サンの生活再編の過程」 21COE京都ワークショップ『フィールドワークから紡ぎだすー発見と分析のプロセス』（京都大学, 2004年10月30日-31日）
O	MARUYAMA, Junko. 2002. Resettlement, Livelihood and Social Relationships among the Gui and Gana in Central Kalahari. <i>9th International Conference on Hunting and Gathering Societies</i> (Heriot-Watt University, Edinburgh, 09-13SEP 2002)
O	丸山淳子. 2002. 「再定住後のグイ/ガナ・サンの社会関係ー居住様式と食物分配の分析からー」 第39回日本アフリカ学会学術大会（東北大学, 2002年5月25日-26日）
O	丸山淳子. 2002. 「ボツワナの計画移住村におけるサンの生業と居住様式の再編成」 第7回生態人類学会研究大会（御殿場市, 2002年3月24日）
P	丸山淳子. 2006. 「美しく住む：ボツワナの再定住地における狩猟採集民サンの居住地選択」 『アフリカレポート』 43: 40-45
P	丸山淳子. 2004. 「命をさがす人びとー再定住地の内と外の暮らし」 田中二郎, 佐藤俊, 菅原和孝, 太田至編『遊動民（ノマッド）』 昭和堂 pp.249-267
P	MARUYAMA, Junko. 2003. The Impacts of Resettlement on Livelihood and Social relationships among the Central Kalahari San. <i>African Study Monographs</i> 24(4): 223-245
P	MARUYAMA, Junko. 2002. The Human Impact. <i>Cultural Survival Quarterly</i> 26(1): 27-28
P	MHANDO, David Gongwe. 2005. <i>Farmer's Coping Strategies with the Changes of Coffee Marketing System after Economic Liberalisation: The Case of Mbinga District, Tanzania</i> 京都大学大学院博士課程アジア・アフリカ地域研究研究科博士論文 178p.
O	村尾るみこ. 「2006. 砂土に茎を植える技術ーザンビア西部におけるキャッサバ栽培と土地の利用ー」 21COEザンビア・フィールドステーション/南部アフリカ研究会/日本アフリカ学会関東支部共催『ワークショップ “土地”から展望する南部アフリカ』（東京外国語大学, 2006年2月18日）
O	村尾るみこ. 2005. 「ザンビア西部におけるキャッサバ栽培の展開」 第42回日本アフリカ学会学術大会（東京外国語大学, 2005年5月28日-29日）
O	MURAO, Rumiko. 2003. A study on the shifting cultivation system in Kalahari woodland, Western Zambia with special reference to cassava management. <i>21COE International Workshop</i> (Addis Ababa University, 21-23 OCT 2003)
O	村尾るみこ. 2003. 「ザンビア西部におけるアンゴラ移民のカラハリ・ウッドランドへの適応ーキャッサバ栽培の事例よりー」 第40回日本アフリカ学会学術大会（島根大学, 2003年5月31日-6月1日）
O	村尾るみこ. 2003. 「ザンビア西部, カラハリ・ウッドランドにおける焼畑農耕体系に関する研究ーキャッサバ栽培の管理を中心にー」 日本熱帯農業学会第93回講演会（日本大学, 2003年3月27日-28日）
P	村尾るみこ. 2006. 「ザンビア西部, カラハリ・ウッドランドにおけるキャッサバ栽培ー砂土に生きる移住民の対応からー」 『アフリカ研究』 69: 31-43.
P	村尾るみこ. 2006. 「砂土に茎を植える人びと」 『アフリカレポート』 43: 19-23.

P	MURAO, Rumiko. (in press) A study on the shifting cultivation system in Kalahari woodland, western Zambia. <i>African Study Monographs</i> , Supplementary Issue 29: 95-105
O	MUTUA, Charles M.. 2006. Crop raiding by wildlife in Mahiga 'B' village of Nyeri District in Kenya. 第43回日本アフリカ学会学術大会（大阪大学, 2006年5月27日-28日）
O	NAGAKURA, Miyo. 2006. Land Utilization in Relation to Natural Environments in a Mountainous Area of Lesotho. <i>International Geographical Union Conference</i> . (Brisbane, Australia 3-7 JUL 2006)
O	長倉美予. 2006. 「レソト山岳地帯における土地利用と自然環境の関係」 第43回日本アフリカ学会学術大会（大阪大学, 2006年5月27日-28日）
O	NAITO, Naoki. 2006. Migration and Acquisition of New Clan Identities among the Ariaal of Northern Kenya (poster) <i>21COE International Symposium</i> （京都大学, 2006年11月9日-13日）
O	内藤直樹. 2004. 「北ケニアの牧畜民アリアルにおける複合的な民族アイデンティティ形成」 第41回日本アフリカ学会学術大会（中部大学, 2004年5月29日-30日）
O	内藤直樹. 2004. 「『ともにあること』と『同じであること』：北ケニアの牧畜民アリアルにおける複合的な民族アイデンティティ形成の事例から」 第9回生態人類学会研究大会（大津市, 2004年3月20日-21日）
O	内藤直樹. 2003. 「沖縄県久高島におけるサンゴ礁海域の利用と認識の戦後史—個人の『小規模なこころみ』がささえる絶え間ない生業変容」 第31回民族自然誌研究会例会（京都, 2003年4月26日）
O	NAITO, Naoki. 2003. Sharing Categories and Experiences: The Construction of Social Bonds through Practice on the Border between Cushitic and Nilotic Speaking Pastoralists in Northern Kenya. <i>21COE International Workshop</i> (Addis Ababa University, 21-23 OCT 2003)
O	内藤直樹. 2002. 「サンプルとレンディーレのクラン体系における分節間関係—北ケニア牧畜民地域社会におけるエスニシティとライフ・ポリティックスの動態的理解にむけて」 第39回日本アフリカ学会学術大会（東北大学, 2002年5月25日-26日）
P	NAITO, Naoki. (in press) Sharing Experiences and Reconstructing Social Categories: A Case Study of Complex Ethnic Identity among the Ariaal Pastoralists in Northern Kenya. <i>African Study Monographs</i> , Supplementary Issue 29: 143-155
P	内藤直樹. 2004. 「ライフ・ヒストリーの語りから見た牧畜民アリアルにとっての家畜の価値」 『ビオストーリー』 (生き物文化誌学会) 4: 106-123
P	内藤直樹. 2004. 「『行為先行的な規範』と『同一経験の共有』との間の相互反照的な関係：北ケニア牧畜民アリアルにおける結婚開始儀礼の事例から」 『アフリカレポート』 39: 26-32
P	内藤直樹. 2004. 「牧畜民アリアルにおける複合的なアイデンティティ形成—『同一経験の共有』に基づく帰属意識形成の事例から」 田中二郎, 佐藤俊, 菅原和孝, 太田至編『遊動民（ノマッド）』 昭和堂 pp.567-592.
P	内藤直樹. 2003. 「個人のこころみがささえる生業変容—沖縄県久高島における生業活動の変容の事例から」 篠原徹編『現代民俗誌の地平1 越境』 朝倉書店 pp.191-220.
O	NAKAMURA, Kyoko. 2006. Social changes in the moranhood of the Samburu age system: individual circumcision and irregular marriage (poster). <i>21COE International Symposium</i> （京都大学, 2006年11月9日-13日）
O	中村香子. 2006. 「サンプルの年齢体系の変容：割礼と結婚の『個人化』という傾向の分析から」 東アフリカ牧畜社会の比較研究会（佐賀県藤津郡太良町, 2006年3月19日-20日）
O	中村香子. 2004. 「無心する側の論理」 第41回日本アフリカ学会学術大会（中部大学, 2004年5月29日-30日）
O	中村香子. 2003. 「牧畜民サンプルの『戦士』の旅—観光地への出稼ぎと社会変容に関する人類学的研究—」 第9回旅の文化研究フォーラム（東京, 2003年4月5日）
O	中村香子. 2002. 「『インセスト的』な性関係に関する人類学的研究：東アフリカの牧畜民サンプル社会におけるセクシュアリティの分析から」 第42回日本＝性研究会議（東京, 2002年6月15日）
O	中村香子. 2002. 「サンプル社会におけるモラン（戦士）の『クラブ』：モランと未婚／既婚女性との性関係から社会変容をみる」 第39回日本アフリカ学会学術大会（東北大学, 2002年5月25日-26日）
P	中村香子. (印刷中) 「牧畜民サンプルの「フェイク」と「オリジナル」：「観光の文脈」の誕生」 『アジア・アフリカ地域研究』 6(2).
P	NAKAMURA, Kyoko. 2006. Social changes in the moranhood of the Samburu age system: Individual circumcision and irregular marriage. <i>Proceeding of Kyoto Symposium, 2006</i> , 21COE pp. 361-373
P	NAKAMURA, Kyoko. 2005. <i>Adornments of the Samburu in Northern Kenya: A Comprehensive List</i> . Center for African Area Studies, Kyoto University 160p.
P	中村香子. 2004. 「戦士の『情報技術』」 『まほら』 (旅の文化研究所) 41: 42-43
P	中村香子. 2004. 「『産まない性』—サンプルの未婚の青年層によるビーズの授受を介した恋人関係」 田中二郎, 佐藤俊, 菅原和孝, 太田至編『遊動民（ノマッド）』 昭和堂 pp.412-438.
P	中村香子. 2003. 「牧畜民サンプルの『戦士』の旅—観光地への出稼ぎと装身具をめぐる新しい経験—」 『旅の文化研究所研究報告』 12: 109-131.
P	中村香子. 2002. 「ケニア・サンプル社会における年齢体系にうめこまれた『インセスト的』な性関係」 『日本＝性研究会議会報』（日本性教育協会）14(1): 43-56

P	中村香子. 2002. 「おカネはミルク、おカネは水ー牧畜民サンプルのレトリックー」 小馬徹編 『くらしの文化人類学5・カネと人生』 雄山閣 pp.24-46.
P	中村香子. 2002. 「ビーズの恋人ーケニア・サンプル社会における未婚の男女の性関係と社会変容ー」 『アフリカレポート』 35: 15-20.
O	NAKAYAMA, Setsuko. 2006. Fishing with "outsiders": Villager-migrant relations on northern Lake Malawi. (poster) <i>21COE International Symposium</i> (京都大学, 2006年11月9日-13日)
O	NAKAYAMA, Setsuko. 2006. Whose lake? Whose creative energy? Relations between the attribution of success and failure in fishery in the construction of value in rural Malawi. <i>21COE International Symposium</i> (京都大学, 2006年11月9日-13日)
O	NAKAYAMA, Setsuko. 2006. Economy as place-making: the urban/rural dichotomy in Lake Malawi fishery. <i>Workshop on Contemporary Perspectives on African Moral Economy</i> (福井県立大学, 2006年10月7日-9日)
O	中山節子. 2006. 「湖に『まち／むら』をつくる：マラウイ湖漁撈社会変容における帰還労働移動者受容」 第43回日本アフリカ学会学術大会 (大阪大学, 2006年5月27日-28日)
O	中山節子. 2006. 「湖に『まち』をつくる：マラウイ湖漁撈社会変容における帰還労働移動者受容」 21COEザンビア・フィールドステーション/南部アフリカ研究会/日本アフリカ学会関東支部共催『ワークショップ “土地”から展望する南部アフリカ』 (東京外国語大学, 2006年2月18日)
O	NAKAYAMA, Setsuko. 2004. 'To know is to own': Property, knowledge and power among the Lakeside Tonga fishermen of Nkhata Bay, Malawi. <i>Seminar at Chancellor College, (University of Malawi 11APR 2004)</i>
P	中山節子. (印刷中) 学会展望「第3回アフリカ・モラル・エコノミー国際シンポジウム：モラル・エコノミーの地域間比較ーアフリカと東南アジアー」 『アジア経済』 48(3)
P	NAKAYAMA, Setsuko. 2006. Fishing with "outsiders": Villager-migrant relations on northern Lake Malawi. <i>Proceeding of Kyoto Symposium, 2006, 21COE</i> pp.385-395
P	中山節子. 2006. 「『よそ者』と営む村の漁ーマラウイ湖における漁撈変容ー」 『アフリカレポート』 43: 28-32
P	嘉田由紀子, 中山節子, ローレンス・マレカノ. 2002. 「ムブナはおいしくない？ーアフリカ・マラウイ湖の魚食文化と環境問題」 宮本正興・松田素二編『現代アフリカの社会変動』 人文書院 pp.260-283.
O	NINDI, Stephen Justice. 2006. Partnerships in Promoting Endogenous Development and a Moral Economy: Lessons from the Matengo Society, Tanzania. <i>21COE International Symposium</i> (京都大学, 2006年11月9日-13日)
P	NINDI, Stephen Justice. 2006. Partnerships in Promoting Endogenous Development and a Moral Economy: Lessons from the Matengo Society, Tanzania. <i>Proceeding of Kyoto Symposium, 2006, 21COE</i> pp.117-131.
P	NINDI, Stephen Justice. 2004. <i>Dynamics of Land Use Systems and Environmental Management in the Matengo Highlands, Tanzania</i> . 京都大学大学院博士課程アジア・アフリカ地域研究研究科博士論文 158p.
O	西真如. 2006. 「住民組織の活動と他者のニーズ：エチオピアの葬儀講活動の事例から」 第43回日本アフリカ学会学術大会 (大阪大学, 2006年5月27日-28日)
O	西真如. 2006. 「死者のニーズと葬儀講の共通善」 第15回日本ナイル・エチオピア学会学術大会 (南山大学, 2006年4月15日-16日)
O	西真如. 2005. 「住民組織の活動と公共空間：エチオピアのグラゲ道路建設協会」 第39回日本文化人類学会研究大会 (北海道大学, 2005年5月21日-22日)
O	重田眞義, 西真如, 金子守恵, 鈴木郁乃, ゲブレ・インティソ. 2005. 「エチオピアの教育制度改革と地域社会の対応：南オモにおけるNPO法人アジアとアフリカをつなぐ会の活動から」 第14回日本ナイル・エチオピア学会学術大会 (千曲市, 2005年4月16日-17日)
O	西真如. 2004. 「グラゲ道路建設協会：住民組織の活動と公共圏形成」 第13回日本ナイル・エチオピア学会学術大会 (大津市, 2004年4月18日)
O	NISHI, Makoto. 2003. Making and Unmaking of the Nation State and Ethnicity in Modern Ethiopia: A History of the Silte People. <i>21COE International Workshop</i> (Addis Ababa University, 21-23 OCT 2003)
O	西真如. 2003. 「国民国家の解体とエスニシティ：近代エチオピア社会とスルテの人びとの歴史」 第40回日本アフリカ学会学術大会 (島根大学, 2003年5月31日-6月1日)
O	NISHI, Makoto. 2003. How Local People Take Different Attitudes toward Conservation Policy: A case of Mago National Park, Ethiopia. <i>21COE International Workshop</i> (Addis Ababa University, 21-23 OCT 2003)
O	NISHI, Makoto. 2003. The Role of Community in Wildlife Conservation: Natural Resource Use and Management by Ari people neighboring to Mago National Park. <i>15th International Conference of Ethiopian Studies</i> (Hamburg University, 20-25JUL 2003)
P	NISHI, Makoto. (in press) Making and Unmaking of the Nation-State and Ethnicity in Modern Ethiopia: A Case Study on the history of Silte people. <i>African Study Monographs</i> , Supplementary Issue 29: 157-168.
P	西真如. 2006. 「対抗的な公共性を創出する住民組織の活動：エチオピアのグラゲ道路建設協会と葬儀講の事例から」 京都大学大学院博士課程アジア・アフリカ地域研究研究科博士論文 183p.
P	西真如. 2003. 「国民国家の解体とエスニシティ：近代エチオピア社会とスルテの人びとの歴史」 『アフリカ研究』 63: 1-15.
O	西崎伸子. 2005. 「野生動物保護に対する地域住民の意識変容：エチオピア西南部における「鳥獣害」をめぐる」

	第42回日本アフリカ学会学術大会（東京外国語大学, 2005年5月28日-29日）
O	西崎伸子. 2004. 「フィールドワーク」して学ぶ：ボランティアとしてのかかわり、調査者としてのかかわり」第13回日本ナイル・エチオピア学会学術大会公開シンポジウム（京都大学, 2004年4月17日）
O	西崎伸子. 2003. 「アフリカの野生動物保護における合意形成：エチオピアの事例」第28回環境社会学セミナー（京都精華大学, 2003年12月14日）
O	西崎伸子. 2002. 「自然保護区を囲い込む地域住民：エチオピアのセンケレ自然保護区周辺におけるアルシ・オロモによる土地・資源利用」第39回日本アフリカ学会学術大会（東北大学, 2002年5月25日-26日）
O	西崎伸子. 2002. 「エチオピアの野生動物保護：政策と現場の乖離」第11回日本ナイル・エチオピア学会学術大会（岩手県牛の博物館, 2002年4月20日-21日）
O	西崎伸子. 2002. 「野生動物被害の実態と対処：エチオピア、マゴ国立公園に隣接するクレ村の事例」第7回生態人類学会研究大会（御殿場市, 2002年3月24日）
P	NISHIZAKI, Nobuko. (in press) Differing Local Attitudes Toward Conservation Policy: A Case Study of Mago National Park, Ethiopia. <i>African Study Monographs, Supplementary Issue 29</i> : 31-40
P	西崎伸子. 2005. 「住民主体の資源管理の形成とその持続のための条件を探る－エチオピア、マゴ国立公園の事例から」『環境社会学研究』10: 89-102
P	西崎伸子. 2005. 「エチオピアの野生動物保護におけるコミュニティ・コンサベーションの形成」京都大学大学院博士課程アジア・アフリカ地域研究研究科博士論文 114p.
P	NISHIZAKI, Nobuko. 2004. Resisting Imposed Wildlife Conservation: Arssi Oromo and the Senkelle Swayne's Hartebeest Sanctuary, Ethiopia. <i>African Study Monographs</i> , 25(2): 61-77.
O	織田雪世. 2005. 「ガーナにおける髪型のバリエーションとそれが意味するもの：女性の装いと『女性らしさ』の幅について」第42回日本アフリカ学会学術大会（東京外国語大学, 2005年5月28日-29日）
O	織田雪世. 2004. 「『寄り道』してわかったこと－ガーナ都市部におけるサロン就業者の質問票調査から」21COE 京都ワークショップ『フィールドワークから紡ぎだす－発見と分析のプロセス』（京都大学, 2004年10月30日-31日）
O	ODA, Yukiyo. 2003. Women working at hairdressing: A case study of a rapidly increasing business among women in urban Ghana. <i>21COE International Workshop</i> (Addis Ababa University, 21-23 OCT 2003)
P	ODA, Yukiyo. (in press) Women working at hairdressing – A case study of a rapidly increasing business among women in urban Ghana. <i>African Study Monographs, Supplementary Issue 29</i> : 83-94
P	織田雪世. 2004. 「美容師業を選んだ女性たち－ガーナ都市部で新展開する女性の職業－」『アフリカレポート』39: 48-53.
O	OGAWA, Sayaka. 2006. Artfulness at Manipulating Social Familiarity: the Change in Business Practice among Petty Trader in Urban Tanzania. <i>21COE International Symposium</i> （京都大学, 2006年11月9日-13日）
O	OGAWA, Sayaka. 2006. Between Equality and Self-help: Political Change and Economic Strategies of Small-Scale Traders, Machinga in Urban Tanzania. <i>Workshop on Contemporary Perspectives on African Moral Economy</i> （福井県立大学, 2006年10月7日-9日）
O	小川さやか. 2005. 「タンザニア都市零細商人の商慣行の歴史的変遷－都市経済活動における社会的連帯の形成と発展－」第42回日本アフリカ学会学術大会（東京外国語大学, 2005年5月28日-29日）
O	小川さやか. 2004. 「『仲間のあいだで稼ぐ』－都市零細商人の商慣行の歴史的変遷」21COE 京都ワークショップ『フィールドワークから紡ぎだす－発見と分析のプロセス』（京都大学, 2004年10月30日-31日）
O	OGAWA, Sayaka. 2003. The trade of second hand clothes in the local-mega city of Mwanza, Tanzania: With special reference to social networks of mali kauli transaction. <i>21COE International Workshop</i> (Addis Ababa University, 21-23 OCT 2003)
O	小川さやか. 2003. 「タンザニア地方拠点都市ムワンザにおける古着流通：マリ・カウリ取引をめぐる商業ネットワークを中心に」第40回日本アフリカ学会学術大会（島根大学, 2003年5月31日-6月1日）
P	小川さやか. （印刷中）「タンザニアにおける古着の輸入規制とアジア製衣料品の流入急増による流通変革」吉田栄一編『押し寄せるアジアの波（仮題）』アジア経済研究所
P	小川さやか. （印刷中）「タンザニア都市古着商人の商慣行の変容にみられる平等性と自立性」『アジア・アフリカ地域研究』6(2).
P	OGAWA, Sayaka. (in press) The Trade of Second-Hand Clothes in The Local-Mega City Mwanza Tanzania: With Special Reference to the Social Network of Mali Kauli Transaction. <i>African Study Monographs, Supplementary Issue 29</i> : 205-215.
P	柳澤雅之, 小川さやか. 2006. 「第四章 フィールドでインタビューする」京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・東南アジア研究所編『京大式フィールドワーク入門』（NTT出版）pp.57-74.
P	OGAWA, Sayaka. 2006. Earning among Friends: Business Practices and Creed Among Petty Traders in Tanzania. <i>Africa's Moral and Affective Economy, African Studies Quarterly Special Issue</i> (University of Florida, online journal)
P	小川さやか. 2004. 「都市零細商人の経済活動における連帯と生活信条－タンザニア、地方拠点都市ムワンザ市における古着の信用取引を事例に－」『アフリカ研究』64: 65-84.
O	岡本雅博. 2006. 「ロジ社会の成立基盤としてのザンベジ川氾濫原」21COE ザンビア・フィールドステーション/南部アフリカ研究会/日本アフリカ学会関東支部共催『ワークショップ “土地” から展望する南部アフリカ』（東京外国語大学, 2006年2月18日）

O	OKAMOTO, Masahiro. 2006. The Impact of Angolan Immigrants on Lozi Society in Western Zambia. 21COE International Symposium (京都大学, 2006年11月9日-13日)
O	岡本雅博. 2004. 「ザンベジ川氾濫原のひと暮らしーフィールドワークを考える」 第45回農耕文化研究振興会研究例会 (京大会館, 2004年6月18日)
O	岡本雅博. 2003. 「ザンベジ川氾濫原におけるロジ社会の編成」 第40回日本アフリカ学会学術大会 (島根大学, 2003年5月31日-6月1日)
O	岡本雅博. 2002. 「ザンベジ川氾濫原におけるロジの生業構造」 第90回白山人類学研究会定例会 (東洋大学, 2002年4月13日)
P	岡本雅博. 2003. 「氾濫原のロジと疎開林帯のブンダー西部ザンビアにおける民族集団間の相互交流」 『アフリカレポート』 37: 28-32.
P	岡本雅博. 2002. 「ザンベジ川氾濫原におけるロジ社会の生業構造」 『アジア・アフリカ地域研究』 2: 193-242
O	SAGAWA, Toru. 2006. Female-centered social space in the 'patriarchal' pastoral society: Wives' activities in the space of coffee drinking among the Daasanetch. <i>International Workshop: Positive Relationships between Culture and Development in East Africa</i> . (Addis Ababa University, 4-5 FEB 2006)
O	佐川徹. 2003. 「帝政時代の長老制ーエチオピア西南部ダサネッチの事例ー」 第40回日本アフリカ学会学術大会 (島根大学, 2003年5月31日-6月1日)
O	佐川徹. 2003. 「西南部エチオピアのダサネッチにおけるコーヒー利用とその歴史的背景」 第12回日本ナイル・エチオピア学会学術大会 (土佐市, 2003年4月19日-20日)
P	SAGAWA, Toru. 2006. "Wives' Domestic and Political Activities at Home: The Space of Coffee Drinking among the Daasanetch of Southwestern Ethiopia. <i>African Study Monographs</i> 27(2): 63-86
P	佐川徹. 2006. 「(フィールドワーク便り) ロニャガトロロの木陰」 『アジア・アフリカ地域研究』 5(2): 257-262
P	佐川徹. 2004. 「穀がもたらす豊かなくらしーエチオピア西南部のダサネッチ社会におけるコーヒー利用」 田中二郎, 佐藤俊, 菅原和孝, 太田至編『遊動民 (ノマッド)』 昭和堂 pp.393-411.
O	坂井紀公子. 2002. 「マチャコス市の公設マーケットにおける業務規定の形成過程ージャガイモ流通業を事例にー」 第39回日本アフリカ学会学術大会 (東北大学, 2002年5月25日-26日)
P	坂井紀公子. 2004. 「(フィールドワーク便り) トマトの違いーケニアのマチャコス公設マーケットで野菜小売商から学んだことー」 『アジア・アフリカ地域研究』 4(1): 155-160.
O	佐藤宏樹. 2006. 「マダガスカル北西部乾燥林生態系におけるチャイロキツネザル (<i>Eulemur fulvus fulvus</i>)の生態的機能」 第22回日本霊長類学会学術大会 (大阪大学, 2006年7月15日-17日)
O	佐藤靖明. 2007. 「主食のつくる庭畑ーウガンダ中部におけるバナナと生活のかかわりからー」 第46回民族自然誌研究会 (京大会館, 2007年1月27日)
O	SATO, Yasuaki. 2006. Homegardens and landrace: the process of maintaing banana diversity in Buganda, central Uganda. 21COE International Symposium (京都大学, 2006年11月9日-13日)
O	SATO, Y. and SHIGETA, M. 2006. Ethnobotanical comparison of of banana and enset use in Africa (Poster). 21COE International Symposium (京都大学, 2006年11月9日-13日)
O	SHIGETA, M. & SATO, Y. 2006. Ethnobotanical comparison of banana and enset agricultural practices in Africa (Poster). 21COE International Symposium (京都大学, 2006年11月9日-13日)
O	佐藤靖明. 2006. 「東アフリカ高地系バナナの品種多様性をめぐる人びとの認識と行為ーウガンダ中部ブガンダ地域の事例ー」 国立民族学博物館主催共同研究会「ドメスティケーションの民族生物学的研究」 (国立民族学博物館, 2006年7月15日-16日)
O	佐藤靖明. 2006. 「バナナの品種多様性を支える民俗知識とはーウガンダ中部ブガンダ地域の事例よりー」 第40回日本文化人類学会研究大会 (東京大学, 6月3日-4日)
O	SATO, Yasuaki. 2004. Interaction between Cultural Selection and Banana Diversity: A Case Study of Ganda Banana Gardens in Uganda. 第9回国際民族生物学会 (University of Kent, 15 JUN2004)
O	佐藤靖明. 2004. 「ウガンダ中部ブガンダ地域におけるバナナの栽培・利用・分類」 第9回生態人類学会研究大会 (大津市, 2004年3月20日-21日)
P	SATO, Y. and M. SHIGETA,. 2006. Ethnobotanical comparison of of banana and enset use in Africa (Poster) <i>Proceeding of Kyoto Symposium, 2006, 21COE</i> pp.405-411.
P	SHIGETA, M. and Y. SATO,. 2006. Ethnobotanical comparison of banana and enset agricultural practices in Africa (Poster) <i>Proceeding of Kyoto Symposium, 2006, 21COE</i> pp.413-420.
P	佐藤靖明. 2006. 「樹皮布づくりとバナナ農耕の接点ーウガンダ中部ブガンダ地域より」 『日本熱帯生態学会ニューズレター』 64: 8-13.
P	佐藤靖明. 2004. 「人とバナナが織りなす生活世界ーウガンダ中部ブガンダ地域におけるバナナの栽培と利用ー」 『ビオストーリー』 (生き物文化誌学会) 2: 106-121
O	SHIKATA, Kagari. 2006. Historical Land Use and Vegetation Changes in the Tropical Rain Forest of Southeastern Cameroon (poster) 21COE International Symposium (京都大学, 2006年11月9日-13日)
O	SHIKATA, Kagari. 2006. History in the Forest: Relationships between Human Activities and Forest Environments in the

	Tropical Rain forest of Southeastern Cameroon. <i>21COE International Symposium</i> (京都大学, 2006年11月9日-13日)
O	四方籌. 2006. 「伐らない焼畑ーカメルーン東南部の熱帯雨林におけるカカオ栽培」 第43回日本アフリカ学会学術大会 (大阪大学, 2006年5月27日-28日)
O	四方籌. 2005. 「カメルーン東南部熱帯雨林における焼畑農耕民の居住・生業活動と植生変化ー歴史生態学の試み」 第15回日本熱帯生態学会年次大会 (京都大学, 2005年6月11日-12日)
O	四方籌. 2005. 「森に刻まれた歴史ーカメルーン東南部熱帯雨林Dja川流域における焼畑農耕民の生活と森林植生」 第42回日本アフリカ学会学術大会 (東京外国語大学, 2005年5月28日-29日)
O	SHIKATA, Kagari. 2005. Interactive Relationship between Human Activities and Forest Environments: A case study of Bakwele farmers along Dja River. <i>WWF/GTZ/MINEF/Kyoto Univ. Joint Seminar</i> (Yaounde, 16 FEB 2005)
O	四方籌. 2004. 「『休閒焼畑』からの収穫: カメルーン東南部の熱帯雨林帯における焼畑農耕システム」 21COE京都ワークショップ『フィールドワークから紡ぎだすー発見と分析のプロセス』 (京都大学, 2004年10月30日-31日)
O	SHIKATA, Kagari. 2003. Sustainable Plantain Production by Shifting Cultivation in the Secondary Forest of Southeastern Cameroon. <i>WWF/GTZ/MINEF/Kyoto Univ. Joint Seminar</i> (Yokadouma, 10DEC 2003)
O	四方籌. 2003. 「カメルーン東南部熱帯雨林の焼畑農業におけるプランテイン・バナナ栽培」 日本熱帯農業学会第93回講演会 (日本大学, 2003年3月27日-28日)
P	四方籌. (印刷中) 「伐らない焼畑ーカメルーン東南部の熱帯雨林帯におけるカカオ栽培の受容にみられる変化と持続」 『アジア・アフリカ地域研究』 6(2).
P	四方籌. 2006. Historical Land Use and Vegetation Changes in the Tropical Rain Forest of Southeastern Cameroon. <i>Proceeding of Kyoto Symposium, 2006, 21COE</i> pp.421-431.
P	四方籌. 2006. 「森は何を語るのか?ーカメルーン東南部の熱帯雨林に暮らす焼畑農耕民の生活と森林植生との関わりー」 『日本熱帯生態学会ニューズレター』 62: 1-7.
P	四方籌. 2004. 「二次林におけるプランテインの持続的生産: カメルーン東南部の熱帯雨林帯における焼畑農耕システム」 『アジア・アフリカ地域研究』 4(1): 4-35.
P	SHIKATA, K., MATSUSHITA, Y., NAWATA, E. and SAKURATANI, T. 2003 Effect of Intercropping with Maize on the Growth and Light Environment of Cowpea. <i>Japanese Journal of Tropical Agriculture</i> , 47(1): 17-26.
O	SHIRAIISHI, Soichiro. 2006. Discourse, Social Relationships, and Value related to Land Tenure: A Case Study of a Claim for Land Rights" (poster). <i>21COE International Symposium</i> (京都大学, 2006年11月9日-13日)
O	SHIRAIISHI, Soichiro. 2005. From Beer to Money: Changing process of labour exchange among the Sabiny. <i>Workshop on Contemporary Perspectives on African Moral Economy</i> (University of Dar es Salaam, Tanzania, AUG2005)
O	SHIRAIISHI, Soichiro. 2005. Comment: From the view point of African peasant studies. <i>21COE International Workshop</i> (Lao PDR, JUN2005)
O	白石壮一郎. 2005. 「土地への権利の移転はどのように構成されるか? : 土地相続に関する家族会議の事例から」 第42回日本アフリカ学会学術大会 (東京外国語大学, 2005年5月28日-29日)
O	白石壮一郎. 2003. 「ウガンダ東部、山地農耕民サビニにおける共同労働の形態とその変遷」 第8回生態人類学会研究大会 (いこいの村あしがら山 神奈川, 2003年3月23日-24日)
P	SHIRAIISHI, Soichiro. (in press) Commercialization and Social-ties: Labour Organization and its Transition among the Sabiny in Eastern Uganda. <i>Tanzanian Journal of Population Studies and Development</i> , (The Demographic Training Unit, University of Dar es Salaam)
P	白石壮一郎, 柳澤雅之, 山口哲由, 嶋村鉄也, 小川さやか. 2006. 「『問い』を立てるーフィールドでの気づきからPの『問い』へ」 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・東南アジア研究所編『京大式フィールドワーク入門』 (NTT出版) pp.13-30.
P	白石壮一郎. 2004. 「パートタイムの牧夫たち: ウガンダ東部、山地農耕民サビニの放牧キャンプから」 田中二郎, 佐藤俊, 菅原和孝, 太田至編『遊動民 (ノマッド) 』 昭和堂 pp.687-709.
O	ZHOU, Mi. 2004. The Sino-Tanzanian Relations and the Making of Tanzania's Socialist Ujamaa Policy. 第41回日本アフリカ学会学術大会 (中部大学, 2004年5月29日-30日)
O	相馬貴代. 2006. 「ワオキツネザルの泊まり木選択を決定する要因は何か?」 第22回日本霊長類学会学術大会 (大阪大学, 2006年7月15日-17日)
O	市野進一郎, 相馬貴代. 2005. 「ベレンティ保護区におけるワオキツネザルの脱毛症とその個体群への影響」 第52回日本生態学会学術大会 (大阪国際会議場, 2005年3月27日-30日)
O	SOMA, Takayo. 2004. Feeding Ecology in Ringtailed Lemur (<i>Lemur catta</i>) at Berenty Reserve, Madagascar. <i>20th Congress of the International Primatology Society</i> (Lingotto Conference Center, Torino, Italy, 22-28AUG 2004)
O	KOYAMA, N., SOMA, T., & ICHINO, S. 2004. Home range of ring-tailed lemur troops and the density of large trees at Berenty Reserve, Madagascar. <i>20th Congress of the International Primatology Society</i> (Lingotto Conference Center, Torino, Italy, 22-28AUG 2004)
O	CRAWFORD, G., ANDRIAFANEVA, L., BLUMENFELD-JONES, K., CALABA, G., CLARKE, L., GRAY, L., ICHINO, S., JOLLY, A., KOYAMA, N., MERTL-MILLHOLLEN, A., OSTPAK, S., PRIDE, E., RASAMIMANANA, H., SIMMEN, B., SOMA, T., TARNAUD, L., TEW, A., & WILLIAMS, G. 2004. Leucaena leucocephala: a probable cause of alopecia in

	ring-tailed lemurs (<i>Lemur catta</i>) 20th Congress of the International Primatology Society (Lingotto Conference Center, Torino, Italy, 22-28AUG 2004)
O	相馬貴代. 2002. 「マダガスカル、ベレンティ保護区におけるチャイロキツネザルによるワオキツネザルのアカンボウの捕食」 第18回日本霊長類学会学術大会 (東京大学, 2002年7月19日-21日)
P	<u>SOMA, T.</u> & KOYAMA, N. (in press) Tradition and Novelty: Lemur catta feeding: strategy on introduced tree species at Berenty Reserve. In A. Jolly, N. Koyama and R.W. Sussman eds., <i>Ringtailed lemur biology</i> , Springer.
P	SIMMEN, B., SAUTHER, M., <u>SOMA, T.</u> , RASAMIMANANA, H., SUSSMAN, RW., JOLLY, A., TARNAUD, L. & Hladick, A. (in press) Plant species fed on by Lemur catta in the gallery forest in the southern domain of Madagascar, In A. Jolly, N. Koyama and R.W. Sussman eds., <i>Ringtailed lemur biology</i> , Springer.
P	KOYAMA, N., <u>SOMA, T.</u> , ICHINO, S., & TAKAHATA, Y. (in press) Home range of ring-tailed lemur troops and the density of large trees at Berenty Reserve, Madagascar. In A. Jolly, N. Koyama and R.W. Sussman eds., <i>Ringtailed lemur biology</i> , Springer.
P	CRAWFORD, G., ANDRIAFANEVA, L., BLUMENFELD-JONES, K., CALABA, G., CLARKE, L., GRAY, L., ICHINO, S., JOLLY, A., KOYAMA, N., MERTL-MILLHOLLEN, A., OSTPAK, S., PRIDE, E., RASAMIMANANA, H., SIMMEN, B., <u>SOMA, T.</u> , TARNAUD, L., TEW, A., & WILLIAMS, G. (in press) Leucaena leucocephala: a probable cause of alopecia in ring-tailed lemurs (<i>Lemur catta</i>). In A. Jolly, N. Koyama & R.W. Sussman eds., <i>Ringtailed lemur biology</i> , Springer.
P	小山直樹, 相馬貴代, 市野進一郎, 高畑由起夫. 2005. 「マダガスカル、ベレンティ保護区におけるワオキツネザルの行動域と大木の密度」 『アフリカ研究』 66: 1-12
P	SUSSMAN, RW., ANDRIANASOLONDRAIBE, O., <u>SOMA, T.</u> and ICHINO, S. 2003. Social behavior and aggression among ringtailed lemurs. <i>Folia Primatologica</i> , 74(3): 168-172
O	SUN, Xiaogang. 2005. Pastoralists' Challenge to Rural Development: a Case Study of the Rendille in Northern Kenya. <i>21COE International Workshop</i> (Dar es Salaam, Tanzania, 12-13 DEC 2005)
O	平野聡, 孫曉剛, 佐藤俊. 2005. 「部族語地名データベース構築のための新しい試み」 第42回日本アフリカ学会学術大会 (東京外国語大学, 2005年5月28日-29日)
O	孫曉剛. 2003. 「乳依存と生業維持機構—生態人類学的論考」 第33回民族自然誌研究会例会 (京都, 2003年10月25日)
O	孫曉剛. 2003. 「衛星画像から見る遊牧民レンディーレの居住形態と遊牧パターン」 第3回三重大学GIS研究会学術大会 (津)
O	孫曉剛. 2003. 「『ラクダ遊牧民』 レンディーレ社会におけるウシ飼養の展開」 第40回日本アフリカ学会学術大会 (島根大学, 2003年5月31日-6月1日)
O	孫曉剛. 2002. 「水を求める遊牧から井戸掘りブームへ—遊牧民レンディーレの自発的な井戸掘りと利用」 第39回日本アフリカ学会学術大会 (東北大学, 2002年5月25日-26日)
P	SUN, Xiaogang. 2005. Dynamics of Continuity and Changes of Pastoral Subsistence among the Rendille in Northern Kenya: With Special Reference to Livestock Management and Response to Socio-Economic Changes. <i>African Study Monographs, Supplementary Issue</i> 31: 94p.
P	SUN, Xiaogang. 2005. <i>Continuity and Dynamics of Pastoral Subsistence among the Rendille in Northern Kenya: With Special Reference to Livestock Management and Response to Socio-Economic Changes</i> 京都大学大学院博士課程アジア・アフリカ地域研究研究科博士論文 146p.
P	平野聡, 孫曉剛, 佐藤俊. 2004. 「シャトル・レーダー・トポグラフィー・ミッション (SRTM) アフリカデータ: 北ケニア半乾燥地域の諸研究への応用」 『アフリカ研究』 65: 37-44.
P	孫曉剛. 2004. 「『搾乳される』ラクダと『食べられる』ウシ—遊牧民レンディーレの生業多角化への試み」 田中二郎, 佐藤俊, 菅原和孝, 太田至編『遊動民 (ノマッド)』 昭和堂 pp.630-649.
P	孫曉剛. 2002. 「北ケニアのレンディーレ社会における遊牧の持続と新たな社会変化への対応」 『アフリカ研究』 61: 39-60.
P	孫曉剛. 2002. 「ケニア北部・遊牧民レンディーレの井戸掘りブーム」 『アフリカレポート』 35: 9-14.
O	重田眞義, 西真如, 金子守恵, 鈴木郁乃, ゲブレ・インティソ. 2005. 「エチオピアの教育制度改革と地域社会の対応: 南オモにおけるNPO法人アジアとアフリカをつなぐ会の活動から」 第14回日本ナイル・エチオピア学会学術大会 (千曲市, 2005年4月16日-17日)
O	鈴木郁乃. 2004. 「農村における学校教育と生業活動の関係: エチオピア西南部アリの事例から」 第13回日本ナイル・エチオピア学会学術大会 (大津市, 2004年4月18日)
O	TAKAHASHI, Ryuta. 2006. Action and Reflection on Rural Development: Construction of Local Value in the Lower Senegal River (Poster). <i>21COE International Symposium</i> . (京都大学, 2006年11月9日-13日)
O	TAKAHASHI, Ryuta. 2006. The Role of "Local Value" for Autonomic Rural Development in the Lower Senegal River. <i>21COE International Symposium</i> (京都大学, 2006年11月9日-13日)
O	TAKAHASHI, Ryuta. 2006. Reciprocity and Equality on Rural Development: Activities of Peasant Organization in the Lower Senegal River Valley. <i>Workshop on Contemporary Perspectives on African Moral Economy</i> (福井県立大学, 2006年10月7日-9日)

O	高橋隆太. 2006. 「セネガル河下流域における農民組合の活動と農村社会」 第43回日本アフリカ学会学術大会 (大阪大学, 2006年5月27日-28日)
O	臼井拓. 2005. 「セネガル共和国サーラム川河口諸島地域におけるセレール漁民の環境利用」 日本島嶼学会2005年次大会 (対馬市, 2005年9月23日-25日)
P	OGIHARA, N., USUI, H., HIRASAKI, E., HAMADA, Y. & NAKATSUKASA, M. 2005. Kinematic analysis of bipedal locomotion of a Japanese macaque that lost its forearms due to congenital malformation. <i>Primates</i> 46(1): 11-19
O	安田章人. 2005. 「カメルーン共和国ベヌエ国立公園における野生動物をめぐる地域住民と狩猟区の関係」 第42回日本アフリカ学会学術大会 (東京外国語大学, 2005年5月28日-29日)
O	YASUOKA, Hirokazu. 2005. The Bushmeat Hunting Boom in a Village of the Baka Hunter-Gatherers in Southeast Cameroon (Poster) 7th Kyoto University International Symposium (Bangkok, Thailand, 23-24 NOV 2005)
O	YASUOKA, Hirokazu. 2005. On the possibility of hunting and gathering life in the African tropical rainforests: From the viewpoint of human-wild resource interaction. <i>International Symposium for 15th Anniversary of Japan Society of Tropical Ecology</i> (Kyoto)
O	安岡宏和. 2005. 「野生ヤムの分布にたいする人間活動の影響ーコンゴ盆地西部における野生ヤム利用の事例から」 第42回日本アフリカ学会学術大会 (東京外国語大学, 2005年5月28日-29日)
O	YASUOKA, Hirokazu. 2005. Foraging life in the African Tropical Rainforests. WWF/GTZ/MINEF/Kyoto Univ. Joint Seminar (Yaounde, 16 FEB 2005)
O	安岡宏和. 2004. 「フィールドワークから学術的成果まで: バカ・ピグミーの長期狩猟採集行にかんする研究から」 21COE京都ワークショップ『フィールドワークから紡ぎだすー発見と分析のプロセス』 (京都大学, 2004年10月30日-31日)
O	安岡宏和. 2004. 「カメルーン熱帯雨林における狩猟」 (ポスター) 第51回日本生態学会学術大会 (釧路)
O	安岡宏和. 2004. 「カメルーン熱帯雨林における林産物交易とバカ・ピグミーの生活」 第41回日本アフリカ学会学術大会 (中部大学, 2004年5月29日-30日)
O	安岡宏和. 2004. 「カメルーン熱帯雨林におけるバカ・ピグミーの長期狩猟採集行」 第9回生態人類学会研究大会 (大津市, 2004年3月20日-21日)
P	安岡宏和. (印刷中) 「アフリカ熱帯雨林における狩猟採集生活の生態基盤の再検討ー野生ヤムの利用可能性と分布様式から」 『アジア・アフリカ地域研究』 6(2).
P	安岡宏和. 2006. 「狩猟採集民と農耕民の食物資源の認知と運用ーカメルーン熱帯雨林の事例から」 『研究彙報』 16: 26-36.
P	YASUOKA, Hirokazu. 2006. Long-term Foraging Expedition (molongo) among the Baka Hunter-Gatherers in the Northwestern Congo Basin: With Special Reference to the 'Wild Yam Question'. <i>Human Ecology: An interdisciplinary Journal</i> 34(2): 275-296.
P	YASUOKA, Hirokazu. 2006. The Sustainability of Duiker (Cephalophus spp.) Hunting for the Baka Hunter-Gatherers in Southeastern Cameroon. <i>African Study Monographs, Supplementary Issue</i> 33: 95-120.
P	安岡宏和. 2005. 「白神山麓のリンゴ栽培地域における猿害の発生と山村環境の変化: 生態史の視点から」 『エコソフィア』 15: 87-103.
P	安岡宏和. 2004. 「アフリカ熱帯雨林における狩猟採集生活ーバカ・ピグミーの長期狩猟採集行 (モロンゴ) の事例から」 『アジア・アフリカ地域研究』 4(1): 36-85.
O	YATSUKA, Haruna. 2005. The utilization of the vegetation for the livelihood by the Sandawe people in the semi-arid area in Tanzania (Poster). 7th Kyoto University International Symposium (Bangkok, Thailand, 23-24 NOV 2005)
O	八塚春名. 2006. 「タンザニアの半乾燥地域におけるサンダウェの環境利用ー特に農耕への利用に注目して」 第43回日本アフリカ学会学術大会 (大阪大学, 2006年5月27日-28日)
O	吉田美冬. 2006. 「『砂漠ゾウ』と牧畜民との関係性の変容ー季節河川の利用をめぐるー」 21COEザンビア・フィールドステーション/南部アフリカ研究会/日本アフリカ学会関東支部共催『ワークショップ “土地” から展望する南部アフリカ』 (東京外国語大学, 2006年2月18日)
O	吉田美冬. 2006. 「ナミビア北西部乾燥地域における自然環境をめぐるゾウと人の関係」 2007年度春季日本地理学会学術大会 (埼玉大学, 2006年3月)
O	YOSHIDA, Mifuyu. 2006. Elephant-Human relationship in natural environment change of arid area, Northwest Namibia. <i>International Geographical Union Conference</i> (Brisbane, Australia 3-7 JUL 2006)
O	吉田美冬. 2005. 「ナミビア・カオコランドの砂漠ゾウに関わる自然環境と人間活動について」 第42回日本アフリカ学会学術大会 (東京外国語大学, 2005年5月28日-29日)
P	吉田美冬. 2006. 「ナミビア北西部の乾燥地における季節河川の環境をめぐるゾウと人の関係」 『アフリカレポート』 43:24-27.

添付資料 5. 外部評価報告書

【国内委員】

秋道智彌（総合地球環境学研究所教授）

内堀基光（放送大学教授）

児玉谷史朗（一橋大学大学院社会科学研究科教授）

和崎春日（名古屋大学大学院文学研究科教授）

【海外委員】

Dr. Taufik Abudullah, Fomer Director of LIPI, Indonesia

Dr. Cécile Barraud, Directeur de Recherche, CNRS, France

Professor Endashwaw Bekele, Professor, Faculty of Science, University of Addis Ababa

Professor James Fairhead, Professor, Department of Anthropology, University of Sussex

Professor Richard B. Lee, University Professor (Emeritus), University of Toronto

21 世紀 COE プログラム 外部評価書

評価委員

日付：平成 18 年 11 月 12 日

氏名：秋道智彌

所属：総合地球環境学研究所

評価内容

（1）プログラムの趣旨

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科と京都大学東南アジア研究所を拠点とする 21 世紀 COE プログラム「世界を先導する総合的地域研究拠点の形成－フィールド・ステーションを活用した臨地教育・研究体制の確立」（平成 14－18 年度）を、以下の点で評価することができる。

① 実証的野外調査：京都大学の学問的な伝統である野外調査にもとづく実証的研究に立脚したものであることがプログラムのテーマとして提起されている。京都大学における東南アジア地域とアフリカ地域における長年の野外調査の実施と学的な蓄積を勘案すれば、おなじく地域研究の COE プログラムを推進する機関として採択された愛知大学、早稲田大学、上智大学、東京外大などと比較しても優位な意義をもつ点であるといつてよい。

② 地域研究：地域研究の推進が 21 世紀における世界の認識と人間社会のありかたを考える上で極めて重要な契機になることは明らかである。これまで国立民族学博物館（民博）における地域研究企画交流センターが中心となって地域研究のありようと方法、未来について試行を重ねてきた。法人化後、民博が人間文化研究機構（以下、機構）の 1 機関となってからは、新たに京都大学に地域研究統合情報センターが設置され、機構が地域研究を推進するためにイスラーム研究と中国研究を策定しつつある。このような現状を踏まえれば、京都大学においてアジア・アフリカ地域を中心とする地域研究を推進するプログラムは地域研究の発展にとり大きな意義をもつものとして位置づけることができる。

③ 総合性：京都大学は地域研究の前史からしても生態と環境に重点をおいてきた。この自己認識に立脚して、「生態・社会・文化」に関する文理融合型の研究を中心的に実施することを提唱している。この枠組みが総合的な地域研究とどのようにつながるのかについて注目したが、プログラムでは「地球・地域・人間の共生」と「地球社会の調和ある共存」という大きな収斂性のあるテーマが設定されている。現代世界では、貧困、戦争、疾病、資源をめぐる紛争、災害など、具体的かつ緊急の問題群が地域ごとにある。共生と共存が大きな目標であるとしても、「生態・社会・文化」の柱からどのような内容の統合的な研究が成果としてでてくるかがこの内容だけからはやや見えにくい。

④ 臨地教育と臨地研究：現場における教育の実践と学生への研究サポートは本 COE プログラムのなかでも格段の意義をもつ。通常、科学研究費などの外部資金の活用による若

手研究者の育成が実施されてきたが、規模や持続性には限界があった。この点で本COEプログラムが挑戦する方法の結果いかに評価の対象となる。

(2) プログラムによる活動内容

プログラムの内容を的確にあらわすものとして、「臨地教育・研究の融合」、「地域研究統合情報センター」、統一研究テーマ「地球・地域・人間の共生」の3点が提起されている。

このうち、臨地教育・研究をアジア・アフリカ各地のフィールド・ステーションにおいて実施する活動はかならずしもキャンパスにおけるように恒常的かつ大勢の学生を対象としておこなえる性格のものではない。しかし、小規模かつ持続的な教育活動は新しい教育のあり方につながるものとして期待することができる。適正な規模の臨地教育・研究の経験が10年あまりの実績をもたないとしても、その基礎にたてばプログラム終了時には15年にも及ぶことになるわけであり、着実な活動の推進が重要な意味をもつことだろう。顔の見える教育・研究という点では着実かつ大胆な実践的提案といえよう。

地域研究統合情報センターは本COEプログラムの結節点となる機関として設置され、地域研究における多元的な情報の蓄積、加工、発信することを大きな機能としている。このセンターが研究面だけでなく社会的な発信を目指すものであるとも位置づけられているが、本COEプログラムのなかでどのような成果が発信されるのかを期待したい。

統合的な地域研究を推進するにあたり、組織、人員配置、資金などは無限に利用できるわけではない。この認識のうえにたち、「地球・地域・人間の共生」を統一テーマとして設定しているが地球と共生の意味がやや不明瞭である。生態、環境の側面に配慮してきた従来の研究を止揚するための概念的な整合性が求められる。

(3) 事業の教育・研究面における成果

平成18年11月9-13日に実施された通称「Kyoto Symposium」は本COEプログラムの総決算とでもいえる性格のものであるが、それだけで評価するのではなく総括的に成果の位置づけをしてみたい。

① フィールド・ステーション

フィールド・ステーションが、アフリカ地域（エチオピア、カメルーン、ケニア、ザンビア、タンザニア）、東南アジア地域（ミャンマー、ラオス、フィリピン、インドネシア2ヶ所、ベトナム、マレーシア）、西アジア（エジプト）などで整備され、若手研究者の臨地教育と研究にきわめて重要な役割を果たし、本プログラム推進の中核的な役割を担った。とくにラオス、ミャンマー、アフリカ各国など、教育と研究の飛躍的な発展に寄与した。4年間に派遣した学生146名、教員・若手研究者82名の数字はフィールド・ステーション重視のプログラムの性格を反映している。ぎゃくに現地のステーションがそれほど必要とはされなかった場合の条件や整備が困難であった場合などについても今後のありかたを踏まえて全体のなかで整理しておくべきと考える。

現地においても共同研究会やセミナーが実施された。学生の滞在期間もフィールド・ステーションの整備状況で長期化することのできるメリットを生かしたようだ。

また、ステーションと日本とのインターネット環境の整備などが効率よくなされ、研究と教育の現地化、リアルタイムでの日本とのコミュニケーションを可能にしたことは当然とはいえ臨地教育・研究を成功に導いた。

② Kyoto Symposium

平成 18 年 11 月 9-13 日に開催されたシンポジウムでは、4 本の主パネル、8 本のサテライト・ワークショップ、34 本のポスターセッションが実施され、全体プログラムの周到的な準備と当然とはいえ学術的な責任と義務として多くの学生が参加した点は高く評価できる。院生や若手研究者が座長を務め、シンポジウムの運営に参加したことも教育的な配慮があった。

メインのパネルでは、統合的な地域研究をブレイクダウンしたテーマ群（景観論、情報論、越境論、民主化論）が、サテライト・ワークショップでは価値の創造、地域におけるグローバル化、天然資源管理、景観と生態史、映像による地域研究、移民のネットワークとコミュニケーション論、牧畜民論、バナナと生活など、多様なテーマ群が取り上げられた。

評者として心強くおもったのは、生態・文化・社会を軸に地域を研究するさいに、歴史や時間的な変化を重要な切り口として研究発表をする若手研究者が多かった点である。生態史の研究プロジェクトを地球研で進める評者として大きく評価したい点はここにあった。

地域の扱いについてみると、アジア、アフリカと比較横断的な構成と地域をやや広く扱う構成のものが、個別のテーマとの関係性はよく理解できるが、それらが全体としてどのような見取り図のなかにあるのかを見えやすくする工夫が必要ではないか。統一テーマである地球・地域・人間の共生に関する問題をメッセージとして強力に打ち出す総括をすべきともおもった。

この点で、移動、移民、越境など、地域を超えた広がりの中で人間の問題を捉えるべきテーマがいくつもあった。また、資源管理の問題がマカッサル海峡の地域研究として取り上げられているが、「生態・環境に強い」京都大学らしさは、他の地域でも同様なテーマとして設定することができたはずで、実際にポスターセッションなどを複合的に組みあわせれば、地域と資源管理の問題にたいする理解がより深まった。映像による地域論は斬新である。

全体として学生の研究面での成果と発表技術は大きく前進したことは間違いなく、シンポジウムは成功といえるであろう。

③ 研究情報の発信

地域研究統合情報センターを核とする情報化と統合化は着実に進行した。データベースの構築も従来の蓄積を生かしたといえるが、どの程度、情報が活用されたかは今後の評価にゆだねられることになるだろう。学生による臨地教育・研究の成果がフィールドワーク

報告としてネット上で公開されたこと、月刊メールマガジンによる研究情報の敏速な配信など、電子媒体を通じた研究情報の発信に成功している。GIS、リモートセンシングの応用などは随所にみられた。

④ 博士号と研究会・ワークショップ

平成 18 年 11 月の国際シンポジウム以外に、数多くの国内外におけるワークショップ、研究会が開催されている。頻繁な研究発表は学生にたいする負担になるが、実質的には教育的な効果を増進することに寄与した。これにより博士号取得者の数が飛躍的に増加してきたとおもわれる。ただし、従来からのCOEでも同様な増加傾向が指摘されており、他の機関における比較研究も必要であろう。

(4) 今後の展開の可能性

- ① 本COEは本年度をもって終了するが、大きな成果をあげることは間違いない。しかし、今後、資金的な制約から同じようなレベルでの教育・研究の成果を継続的にあげることは不安といわざるをえない。他大学の地域研究において愛知大学、上智大学、早稲田大学、東京外大などがどのような成果を出しつつあるか調査をする必要がある。
- ② 統合情報センターが集約しつつある情報化、統合化を進めるなかで、これまでの成果をさらに重層化することは社会発信とともに重要な作業となるだろう。
- ③ シンポジウムやワークショップの成果はすでにプロシーディングスとして公表されているが、専門誌への投稿、単行本の発刊など、とくに若手研究者が就職の機会を獲得するための業績づくりなど、時間を要する学術的な成果発信に向けての戦略が必要になる。
- ④ 京都大学学内の地域研究に向けた新しい連携とともに、大学共同利用機関や他大学との連携作業を通じた高度な地域研究に向けての新しい枠組づくりを模索する必要がある。
- ⑤ 地球研では地球環境問題の研究を進めているが、地域研究としての環境問題の解明が重要な枠組になるものと認識している。京都大学が今回のプログラムで若手研究者を投入して臨地教育・研究を実施したことはおおいに刺激を受けた。地球研の研究のありかたを考える上でも、今後、相互の連携と交流を実現できる可能性を配慮していただければ強く希望する。

21世紀COEプログラム外部評価書

2006年11月12日

内堀基光

放送大学・教授

(1) プログラムの趣旨

21世紀COEプログラム『世界を先導する総合的地域研究拠点の形成——フィールド・ステーションを活用した臨地教育・研究体制の確立』（以下、本プログラム）の実行目標は、文理融合的な総合的地域研究の推進のために、(1)フィールド・ステーションを現地に設立することによって、専門領域を異にする研究者・大学院生が問題意識を共有し、協働型の研究能力を鍛錬する、(2)地域研究統合情報化センターを設置し、世界への発信、交流の拠点とすることによって、研究・教育の継続深化を保証し、あわせて社会還元を可能とする、の2点である。

この実行目標の設定は、現代世界の諸地域における問題群が自然と社会が絡み合った複合的な問題群であること、したがって文理融合的な総合研究が必要とされること、との認識に基づいており、これら問題群の解決への視点を「地球・地域・人間の共生」という標語によって代表させている。

したがって以下では、如上の基本認識と実行目標のそれぞれ、および両者の連関に関して評価することとする。

【基本認識】地域における問題群が自然と社会の絡み合いとしてあるという認識は、東南アジア研究センター（現研究所）設置当初からのものであり、京都大学のこれまでの地域研究のあり方からして、本プログラムがそれを基点として推進されることは、むしろ当然のことである。東南アジア研究センターにおける過去の重点領域研究および特別推進研究という大型研究プロジェクトを正統に後継するものとして、本プログラムがこの認識を継承していることを明示していることは、堅実で賢明な選択であったと評価できる。研究機関としての大学の継続した個性をこれほどまでに鮮明に打ち出せる基本認識の共有は、うらやましいほどに他に類を見ない。

文理融合的な総合研究による地域における問題群への接近は、単に社会・人文系の研究者と自然科学系の複数の研究者が共通のテーマにそって協働するというだけでは、融合として十分な達成は期待できない。文理融合が「お題目」の域を脱するために必要とされるのは、こうした協働の場から総合的な視野を切り開いていく文理融合的な志向と能力を備えた研究者そのものである。少数のこうした総合型の研究者が地域研究において効果的な触媒の役目をはたすことによってのみ、協働の場での融合が達成されるのだと考える。京都大学の地域研究においては、主として生態の研究領域出身者に触媒的な研究者が生まれてきたと判断している。この点においても、本プログラムの基本認識は正当な基盤に立っていると評価できる。

【実行目標】基本認識に立って実行目標とされる項目のうち、フィールド・ステーションの設立に関しては、臨地調査（フィールドワーク）の必要性から導かれる帰結である。臨

地調査のための実践的な方法論は、原理的に机上（座学）では語りつくせないものである以上、調査地に近い拠点は大学院生に対する教育の上から必要とされることは十分に首肯される。また、熟練した研究者にとっても、こうした拠点における院生・若手研究者との協働は、大いに新たな刺激となるはずである。

ただし、基本認識との関連で言えば、総合的地域研究における臨地調査の意義づけ、必要性の論拠にやや弱いところがあることが惜しまれる。この論拠の弱さは、おそらくは、臨地研究の必要性を当然のものとしていることに由来するのだろう。唯一これについての防御的な意義づけとして、中間評価への対処に関する項目記事のなかで、「わが国は植民地時代以来の二次資料の蓄積に乏しく、それゆれに若手研究者は〔フィールドワークによって得られる〕一次資料によってこそ効果的な成果をあげることができる」（評者によって文言改変）との判断が述べられているにとどまっている。あたかも二次資料の蓄積があれば、臨地調査の意義は薄れるといわんばかりの立論をとるべきではない。臨地的な調査が、現地の人びととの密接性、生活の具体性を探る上で有用であることは誰しも否定しえないが、ここではさらに積極的に、臨地的な「知」が人文・社会科学全体の新たな展開に寄与する役割の可能性について、はっきりと定立する必要があったと思われる。

実行目標のうち地域研究統合情報化センターに関しては、その必要性は疑うべくもない。この組織を設置することによって、京都大学内での諸々の部局・組織、および諸ディシプリンを地域を軸として連関させていくことは、これまでの蓄積をより効率的に活用しうるものとする。それとともに、データ処理に関するあらたな手法の開発に取り組んでいくためにも、こうした組織は不可欠である。

(2) プログラムによる活動内容

フィールド・ステーション設置の活動はおおむね順調に推移したと評価できる。とりわけフィールド・ステーション設置の過程、および現地でのワークショップ等の開催において、現地出身の研究者との交流が大幅に促進されている様子が具体的に見てとれる。いくつかのフィールド・ステーションは、専門とする若手研究者が少数に過ぎ、そのためステーションの名のみ、というところもあるが、臨地研究を取り巻く本来的な状況の流動性を勘案すれば、これはやむを得ないところであろう。

実行目標として構想されていた地域研究統合情報化センターは、国立民族学博物館地域研究企画交流センターの人員を核に、これに東南アジア研究所、ASAFAの人員数名を加えることにより「地域研究統合情報センター」として実現した。このセンターの具体的活動内容に関しては、なおも未知数のところが多いが、全国共同利用研化まで射程に入れて活動を開始したと了解されるところであり、本プログラムの活動という枠内で見ると、予期された内容を上回るペースで推移している。

(3) 事業の教育・研究面における成果

院生の教育面で言えば、臨地調査にもとづいて取得された課程博士号の数は、まず申し分ないものである。質的にも、地域研究に関係する大型研究プロジェクトを推進中の評者

として、本プログラムの推進組織であるASAFAの院生、PDの諸氏に研究発表を求めることがしばしばであり、これらの機会をとおして知り得たところ、評者の属する関東地方の学界における若手研究者と比して、格段に手堅いミクロなレベルでのデータ収集のあり方、また数理的な処理の活用などに関して、高い評価を与えたいと思う。そのすべてが本プログラム、とくにフィールド・ステーション設立による成果であるとは言えないが、すくなくとも本プログラムへの参加をとおして、大学院生、若手の研究者が大きな進歩を遂げたことは確かであると判断する。

2006年11月に開催された国際シンポジウムは8つのワークショップ、ポスターセッションを含めて5日間にわたり、発表総件数も100になんなんとする大規模なものであった。これへの発表・参加はもちろん、ワークショップ、シンポジウムの組織自体が大学院生を中心として行なわれたものであることは、研究交流組織の作り方という実務的でありながら、学問のなかで大きな意味を占める仕事に関しても、若手研究者が育ちつつあることを証していると思う。

(4) 今後の展開の可能性

文理融合という意味での総合的地域研究は、アジア・アフリカ地域研究研究科、東南アジア研究所、地域研究統合情報センターという3つの確立された拠点を擁する京都大学を中心としてこれから展開していくであろうことは間違いない。これだけのリソースをもつ機関は日本国内はもちろん、世界的にも存在しない。この特性を強く世界に向けて発信し続けることがぜひとも必要である。この発信については、先端的な通信技術の活用による活動と、フィールド・ステーション型の現地拠点を維持し、できれば拡大していくという地を這うかたちでの活動を、互いに補完しあう2つの駆動力として進めていくことになる。

本プログラムの現時点での活動が、大きく東南アジアとアフリカに分れており、この両地域を連関させることに理論的な困難がともなうことは確かである。これを単なる並立にとどまらず、地域の独自性の生成論理を探り、新たな地域研究のかたちを生み出すための資源として生かしていただきたいと考える。現代の人類が直面する環境問題、生態系の保全・維持、新たな人類文明の生成の可能性追求など、人類の生存にかかわる大きな枠組みのなかで東南アジアとアフリカを中心とする地域研究が重要な役割を果たしうることを示して欲しい。これを高い志をもって進める人材が、本プログラムの活動と爾後の展開によって、必ずや生まれてくると信じる。

評価委員

日付：2006年11月3日

氏名：児玉谷史朗

所属：一橋大学大学院社会学研究科

評価内容

（1）プログラムの趣旨

外部評価資料には、本プログラムの実施内容をよく表すキーワードとして、(1)臨地教育・研究の融合、(2)地域研究統合情報センター、(3)統一研究テーマ「地球・地域・人間の共生」が挙げられているので、本評価もこれに沿って記述したい。

(1)臨地教育・教育の融合

臨地教育・研究の融合という目的を達成するために、本プログラムのタイトルの副題の表現を借りれば、「フィールド・ステーションを活用した臨地教育・研究体制の確立」を行う、というように理解した。

地域研究は、人類学等の学問と並んで、現地での研究、フィールドワークが調査研究の根幹をなす学問である。ところが、これを研究者の養成、大学院教育の観点から見た場合、学生のフィールドワークをどのように促進するのかという問題が生じる。日本では、文献・資料に基づく研究や、実験に基づく研究に比べて、フィールドワークに基づく研究に対する支援は遅れており、この問題は深刻である。本 COE における「フィールド・ステーションを活用した臨地教育・研究」という試みは、この点から見て高く評価できる。そして新しい形の「フィールドワーク教育の開発」につなげようとする意欲も評価したい。

ただ、目的のコンセプトである「臨地教育・研究の融合」についてはいささか不明確な点もあるように感じた。外部評価資料には「フィールド・ステーション等において教員と学生が、ある期間、生活をともに、臨地研究に従事することによって、『現場』での教育と研究を融合させ、」とある。このことが大学院生の教育上果たす意義は高く評価したい。しかし教員と学生が現場でともに生活し、臨地研究に従事すれば、自動的に教育・研究の融合が実現されると思えない。そしてこの融合とは誰にとっての融合なのであろうか。教員にとっても現場で教育と研究を同時に実施するということが融合だとすれば、いささか安易な感じを受ける。教員が研究をするだけでなく、大学院生の教育も行うことで、教育も研究も成果の面でいっその飛躍が見られるというのが、本来の融合ではないだろうか。つまり教育と研究が相互に刺激しあうということである。これは理論的かもしれないが、「融合」の中身とそれが達成される仕組みを今少し具体的に説明してほしかった。京都大学は、今西錦司氏らによる霊長類の研究を初め、フィールド調査では長年の歴史をもっているだけに、あえて高い期待に基づいた注文をした次第である。

(2) 地域研究統合情報センター

COE プログラムの趣旨が「研究教育拠点」の形成であることに鑑み、本 COE がアジア・アフリカ地域に関する情報ネットワークの拠点たる地域研究統合情報センターの充実化をその要素の一つとしていることは適切と言えよう。地域研究統合情報センターは、アジア・アフリカ地域に関する情報を蓄積、加工、発信し、研究者・機関とのネットワークの国際的な結節点として機能することを目指す、という。情報の蓄積・発信拠点をもち、ネットワークの結節点となることは、研究教育拠点の形成上、大きな意味を持っているので、この点は高く評価したい。さらに、センターをフィールド・ステーションにおける臨地教育・研究への支援、補完の役目も果たせるということで、二つのキー・コンセプトが有機的に連携しており、よく考えられたアイデアだと思う。よく見られる陥穽として、情報の収集・蓄積が自己目的化してしまい、フィールドでの研究や教育から遊離してしまうという弊害が起きることがあるが、コンセプトの面では、これを避けようとする意図が見られる。

(3) 統一研究テーマ「地球・地域・人間の共生」

この統一研究テーマの設定にあたっては、文理融合を目指した総合的地域研究、生態・環境研究の伝統の重視、京都大学の基本理念「地球社会の調和ある共存」という3点に配慮したとのことである、これは本プログラムの重点、アジア・アフリカ地域研究科の重点、京都大学の基本理念という3つのレベルで、整合性を持たせたもので、目配りのきいた、特徴が明確な統一研究テーマになっている。さらに中身として、人間生態問題群、政治経済問題群、社会文化問題群、地域研究論問題群の4つの問題群を設定したのも適切といえよう。

(2) プログラムによる活動内容

(1) 臨地教育・研究の融合

これまでにアジア・アフリカ地域に14のフィールド・ステーションが設置あるいは整備された。4年間に延べ、146人の大学院生が派遣され、彼らに対してオンサイト・エデュケーションを行うために70名の教員、12名の若手研究者が派遣されたという。アジア・アフリカ地域研究科の院生定員を考慮すると、これだけの数の院生をフィールドに派遣した実績は誇ってよいであろう。また4年間で14のフィールド・ステーションに146人の大学院生を派遣したということは、年平均で一つのフィールド・ステーションに2.6人を派遣したことになる。フィールド・ステーションが置かれている状況は、国によって異なるであろうが、いろいろな意味で（治安、保守・管理、通信体制の確保等）フィールド・ステーションを維持するのは大変だろうと思う。臨地教育・研究を補助する若手研究者の派遣を含め、大学院生の臨地教育を維持するコスト（経費だけでなく、労力、時間等も含めた広い意味での）はかなりのものと推測される。大学院教育故の手厚い少人数教育が行われているという意味で評価できるが、他方でそのような恩恵を受けられない他大学の大学院生等に比べて、恵まれていると感じた。ただ、

外部評価資料によれば、「本プログラムに関する大学院生や教員だけでなく、当該地域においてフィールドワークを実施している学内外の研究者や学生による利用も盛んにおこなわれて」いるとのことなので、広く日本の地域研究に便益を与えていることは評価したい。

(2)地域研究統合情報センター

2003 年 4 月にウェブサイトが開設され、フィールドワークの成果報告、ワークショップ・シンポジウム関連の記事、フォトギャラリー、ストーリーミング画像などが掲載されている。できるだけ電子的な媒体による情報発信を重視するという方針からしてこのウェブサイトが果たす役割は大きい。ほとんど毎日更新され、研究成果のリアルタイムな発信が行われてきたことは評価できる。同じ記事をできるだけ英語でも公開することでバイリンガルな状況を 8 割は達成していることも評価したい。地域研究者間の情報交換・交流を促進するメールマガジンも発行されている。地図情報のデジタル化、アフリカでの植物利用に関する参加型データベースの構築、空間情報に基づく画像データベースといった研究資料の情報化の試みもすばらしいものである。

(3)統一研究テーマ「地球・地域・人間の共生」

設定された 4 つの問題群に沿って、シンポジウム、ワークショップ、セミナーが開催されてきた。4 年弱の期間に 230 回のセミナー、14 のワークショップ・シンポジウムが開催されたという。セミナー・研究会の開催が、大学院生を企画・準備・実施に参加させる形で行われていることは、大学院生の主体的参加による実地教育になるという点で高く評価できる。またワークショップ・シンポジウムの多くがフィールド・ステーションの機能を活用して現地でおこなわれている点も、国際的な研究交流・成果の発信という点で評価したい。

(3) 事業の教育・研究面における成果

すでに述べたように、フィールドに多数の大学院生が派遣され、フィールド・ステーションを活用して臨地教育が実施され、セミナー・研究会も大学院生が主体的に企画・実施に参加するなど、教育面における投入、配慮は充実しているといえる。問題は、投入に比してそれに見合う効果（成果）が産出されたかということである。

本プログラムが置いている「地域研究の分野で世界の先端に立つには、自ら収集した一次資料や現場体験にもとづく研究が有効」という前提には評価者も賛成であり、そのような研究を支援するための仕組みを本プログラムが確立・充実してきたことの意義は評価したい。

ウェブサイトを通じて公開・発信されてきたフィールドワークの成果報告、種々のデータベース、ワークショップ・シンポジウムでの発表も成果として高く評価したい。

2003 年度から博士学位申請論文の提出者が急増し、博士号取得者が増え続けているという。今回の評価では、個々の博士論文やフィールドワークの成果報告、ワークショップでの発表等

の成果を全て読んで検討したわけではないので、これらの成果の中身、研究水準について評価することは差し控えたい。ただ、これらの成果の数などの外形的な評価による限りは充実した教育・研究上の成果が出ていると評価できよう。たまたま評価者が参加する機会があった、2006年2月に行われた「土地から展望する南部アフリカ」のワークショップでは、フィールドワーク報告を核とする大学院生の研究発表は質の高い、充実した内容であり、成果として高く評価できるものと感じた。

（４）今後の展開の可能性

すでに述べたように、本プログラムはアジア・アフリカの現地における臨地教育に大きな効果をもたらしており、アジア・アフリカ研究の発展、研究後継者の養成という観点から、本プログラムで構築された研究・教育体制が何らかの形で維持・継続されることが望ましいと考える。ただ、フィールドへの大学院生の派遣、フィールド・ステーションの維持・管理には、かなりの資金や労力・時間が投入されており、教育にあたる教員の負担もかなりあるのではないかと推測する。本プログラムで構築された研究・教育体制の、今後の維持・継続を前提とした上で、効率や効果を検証し、その結果次第では、フィールド・ステーションの数の見直しや、より効率的・効果的な運営なども検討されてよいのではないか。

21世紀COEプログラム外部評価書

11月中旬までに、下記宛にe-mailまたはfaxにてお送りください。

e-mail: 21office@asafas.kyoto-u.ac.jp

fax: 81-75-753-7395

評価委員(Reviewer)

日付(Date of the Review):

氏名(Name): 和崎 春日

所属(Affiliation): 名古屋大学 文学研究科

評価内容 (Reviews)

(1) プログラムの趣旨(Aims of the Program)

非ヨーロッパ地域とくにアジア・アフリカに特化した研究のこれほどまでの集中・集積は、日本の研究機関のなかで、他の研究機関にはない確かな独創性をもって異彩を放っている。

実際の業績を見ると、言語、音楽、芸能、生態、農業、環境、資源利用、霊長類、採集・狩猟、漁労、牧畜、保健、市場経済、難民、政治、法律、開発、国際関係、ジェンダー、など、多様な研究領域が認められ、人間生態問題群、政治経済問題群、社会文化問題群、地域研究論問題群、という4つの問題群をカバーして、「地球・地域・人間の共生」というプログラムの骨格となる理念・趣旨が、各分野・各カテゴリーの具体性のなかで実現されていることが読み取れる。この大きな理念を常に具体的実践に照らし返して、研究を、しかも共同研究と個人研究を有機的に結びつける形で、推進していく力は、京都大学がもち、他大学が実践しようとしてもなかなか実現していない学問伝統を最大限生かした総合的学問推進力になっているといえる。(1) プログラムの趣旨 (2) プログラムの活動内容の両面においての成果だと高く評価できる。

(2) プログラムによる活動内容 (Research and Educational Activities)

京都大学のフィールド・ステーションは、インドネシア・ボゴール、インドネシア・マカッサル、インド、スリランカ、ネパール、ベトナム、フィリピン、ラオス、マレーシア、ミャンマー、エジプト、トルコ、エチオピア、カメルーン、ケニア、タンザニア、ザンビア、ナミビアとアジア・アフリカを広範に覆い尽くしている。その意味で、「世界を先導する」拠点形成という主張にかなりの程度の説得力が認められる。しかも、アジア・アフリカのどの地域ステーションにも、要をなす「教員による研究調査」が認められつつ、絶対活動数は大学院生の活動が活発である。これは、若手育成という意図が十分に機能していることを示している。このとき、教員と若手研究者・院生とのコミュニケーションや育成の実態が読み取れ、さらに日本と当地の大学院生がともにフィールド・ステーションを積極的に活用し研究・調査に励んでいる活動内容が読みとれ、高く評価できる。

ナイロビ・フィールドステーションは、弘前大学、名古屋大学、筑波大学、岡山大学、京都文教大学など他大学の教員・大学院生にも活用され、海外・異文化地域に

あつてのステーションとして、人的交流、情報取得・交換、研究のクロスオーバー、宿泊、安全確保、異種混淆、世代交流、教員と大学院生の交流、学問のサロンの攪拌・醸成など、まさに拠点・結節点としての諸機能を、広範に果たしている。ここに臨地教育・研究体制の確立をめざす拠点形成の実現のひとつの形が明確に読みとれる。

(3) 事業の教育・研究面における成果 (Output of the Research and Education)
ラオス、ミャンマー、インドネシア、エジプト、タンザニア、エチオピア、カメルーン、ザンビア、ケニア、などに146人にのぼる大学院生の派遣実績は、特筆すべき成果である。オンサイト・エデュケーションのために70名の教員、12名の若手研究者の派遣も、確かな成果といえる。

学位取得者をどれほど輩出するか、というのが教育実績の一つの大きな目安となるだろう。これに照らすと、ベトナム、ミャンマー、ラオス、タイ、ネパール、チベット、インド、バングラデシュ、フィリピン、マレーシア、インドネシア、中国、上海、雲南、イスラーム地域と、アジア各国を覆う形で14カ国、26人の博士学位を出している。アフリカ研究では、ケニア、タンザニア、エリトリア、エジプト、エチオピア、マダガスカル、カメルーン、とこれも東西北アフリカをおおうように、7カ国、12人のアフリカ研究による博士を輩出している。平成15年から18年にかけての、合計38名もの博士輩出による、この次代研究者育成の教育機能は確かで大きい。

(4) 今後の展開の可能性 (Prospects of the Program)
日本の統合拠点と現地拠点を結ぼうとする方向性が確かであり、たとえば現地語書籍や現地地図資料類の単なる収集にとどまらず、それを現地大学院生や現地研究者が活用できるように、広く地元還元を図ろうとする姿が認められる。この学問の南北統合は、持てる者と持たざる者の差異を「平等化」しようとする大きな理念の実現に向かう努力であり、理念的に説得力をもちそのフィージビリティにおいても確かな展開が期待できる。その際の努力として、委任経理金、トヨタ財団等、他財団助成金など外部資金を獲得し、このプログラムに融合させていこうとしていることも、積極的に成果を統合していくことに繋がっている。つまり、理念化努力から運営努力までがなされ、「総合的地域研究拠点形成」という研究の中心性が単なる中心にとどまらず、拠点性をおびてここに「多様な」エネルギーを凝集させている。その抽象度の高いレベルから具体的レベルまでの手順が確かである。それは、異なる研究の領域、異なる地域、異なる理論、異なる方法論、異なる調査実施手順、質的・量的の異なる調査方法、文系・理系の違い、異なる自然・社会・人文系の諸科学、生態・歴史・社会など、さまざまな相異なるパースペクティブ、を融合していくことに成功している、といえるだろう。その目標設定と理念達成のための方法論化、さらにそれを実現していく方法と技能が確かであり、今後の展開に信頼が置ける。
情報化を随伴した総合的地域研究拠点の形成ということでは、タイとベトナムにおいて、同時進行で日本・タイ、日本・ベトナムのシンポジウムを行い、通信ライン・インターネットを活用した、電信画像による2カ国間での国際コロキウムを実施していることは、成功の一形態と考えていいだろう。さらに、東南アジア地形情報データ

ベース化、ウェアアーカイブ、地域研究画像データベース配信、タイ語三印法典プロジェクト（世界的に未曾有なデータベース化）、ストリーミング画像配信、映像資料デジタル化、メールマガジン配信、アラビア語定期刊行物データベース化、など現在開発中技術や近未来技術が積極的に活用されそれによるさまざまな学的試行と実践が行なわれ、電子的な情報の蓄積、加工、発信が着実になされつつある。これによって多元的資料の統合化が促進されている。これまでの近未来技術をここまで咀嚼してきたこの分野の実現の確かさを基礎に、さらなる臨地教育・臨地研究の発展が期待できる。

**EXTERNAL REVIEW ON
THE CENTER OF EXCELLENCE OF INTEGRATED AREA STUDIES**

Reviewer

Date : October 27, 2006

Name: TAUFIK ABDULLAH

Affiliation: Member, Social Science Commission, Indonesian Academy of Sciences/
Former Head/Chairman, Indonesian Institute of Sciences.

Aims of the Program:

Rather than repeating the aims of the program as stated in External Review Materials let me just state my opinions.

- a. Sutan Takdir Alisyahbana, the late Indonesian philosopher once lamented the trend towards specialization in science and in other branches of the system of knowledge. This trend had practically made the scientists to loose the ability to properly perceive the highly integrated structure of reality. In facing the continuing trends of modernization—globalization, it should be noted, was then still not in the vocabulary of the intellectual discourse—he reasoned the nation needed to cultivate the re-emergence of what he called the “Renaissance man”, the universal man, who could understand and master the highly interconnected reality. He was certainly right in his observation on the continuing trend toward specialization in the scientific world, but his dream of “creating” the universal men was misleading. Specialization in the world learning and science has been and would continue to be one of the most important indicators in the advancement of science and technology.
“No man is an island” as a saying goes; therefore what the nation, and indeed the world, need is the establishment of research center(s) that would be able to re-integrate the highly specialized scientific questions and findings into an integrated system of knowledge.
- b. The need of having such research center(s) become much greater when we realize the importance of ecological changes in human lives and the rapid trend of globalization in many aspects of life. Nature that was once considered something to be exploited and conquered had now been realized to be something to be tamed and befriended. Therefore one can only highly compliment the embracement of the basic concept of “harmonious co-existence of the global community” of the guiding moral principle of a university and the adoption of as the principle of “human-nature co-existence in a glocalizing world” as the common research theme. Both concepts show the awareness on the challenge that has been facing by the world.
- c. Time had indeed passed when the leaders of the world could talk about the need of having “a peaceful co-existence”. In the multi-polar world it is the

“harmonious co-existence of the global community” that should be taken as the ideal goal of any academic and scholarly endeavor. The research theme really touches the center of the problem—by making certain locality as the central academic scrutiny, it is its global significance the ultimate concern. Locality is not taken out of its global context.

- d. In short the aims of the program are not only timely but also and more importantly may offer significant contributions to both the advancement of the world of learning and to the real solutions to the present predicament of the world.

2. Research and Educational Activities.

- a) The research principle of the program clearly indicates that it has several double-aims to settle. The most obvious double- aims are certainly the intention of developing research and education and at the same time tries to bridge the gaps of the two academic endeavors. Research is part of the educational process and education is carried out by participating in the research activities.
- b) By promoting “transdisciplinary and integrated approaches to area studies” the program at the same time has also to academic disciplines. Otherwise how would transdisciplinary research be properly undertaken if it is not supported by the collaboration of several strong academic disciplines?
- c) By taking central research topics such as “ human-ecological”, “socio-political”, “politico-economic”, and “ theoretical –methodological” problems, the program also aims at bridging the gulf that has separated the “basic” and “ applied” research on the one hand, and that of the “area” and “thematic” studies on the other. Not less important is the attempt to bridge gaps between natural sciences and social sciences and cultural studies. The CSEAS of Kyoto has a reputation as one of the very few research institutes that has from its inception really tried to undertake such a massive academic challenge. Its acknowledged reputation is a proof how well it has succeeded in this noble endeavor.
- d) In order to achieve these highly challenging aims the program has established 14 field stations in Asia and Africa. What is really significance in the establishment of the field stations is the way the program tried to find the balance between the need or the problem of the country concerned and the academic interest and expertise of the involved scholars. Some field stations take the questions of the relations between nature and society as their main concerns, some others concentrates on the dynamic between society and the economy, others put more interest in the problems of the local societies, while others on the relationship between society and economic changes, etc. Since the main research themes of the field stations are based on the understanding of the pressing problems of the local situation one can only say that the decisions are not only creative but also challenging.
- e) “Integration and digitization of area study materials” which would enable people in the fields to know what their colleagues have been doing and the development of their thinking on the subject matter or on theory and methodology and other related network systems are not only innovative but also highly challenging. These mechanisms can certainly encourage the people in the fields to conduct dialog between their own findings and thinking with that of other colleagues continuously. The website opens up the possibility of the other interested parties

to have a look at the dynamic creativities of the field stations. Since around 80 % of website contents are now bilingual one can also expect international participation of the program.

3. Output of the Research and Education

- a) “ Over the past four years “, the report of the program states , it had dispatched 146 graduate students, 70 faculty members and 12 COE staff researchers to various countries in Asia and Africa. “ In addition, many faculty members doing research doing research by Grant-in-Aid and other grants carried out on-site education as well research activities to an extent corresponding to the purpose of intended by the grant”. By any standard these initial quantitative achievement has shown that the program is a success story.
- b) By the end of July 2006 the program has produced 39 PhDs—17 of them have found employment with various international and national academic institutions and the 29 new PhDs work as post-doctoral fellows of the JSPS. Again, many programs can produce so many PhDs in such a short time?
- c) The various seminars, workshops, symposia, and conferences that have been held by the program not only show the grate number of scholars interested in the new academic approach but also and more significantly the varieties of research questions, problems, and findings. These various types of academic meetings that were held in several venues both inside and outside Japan have unfailingly shown the awareness that would certainly open up vista in the world of learning and show various types of solution to the pressing local needs.

4. Prospects of the Program

a. The program was not simply based on academic idealism that aimed at solving the divergent types of dualism – such basic and applied research, education and research, etc—and other noble ideas that might help mankind in facing the unprecedented natural and global challenges. The program was conceived after the initiators having had by many years of academic experiences. It was carefully drafted by taking into consideration existing academic power and sources of funding. The first four years period of the program has shown that it has actually accomplished both **quantitatively and qualitatively more than one might have initially expected.**

b. Although the report of the program does not clearly indicate the number of female and male graduate students who have completed their doctorates nor it gives any clues to their “conventional” academic disciplines , such as usually granted by the university, the sheer number of their participations (out of several hundreds applicants) has shown that **the program has succeeded in laying a foundation on which further development can be expected.** Research experiences speak louder in the further pursuit of academic endeavor.

c. The varieties of research themes, such as reflected in the programs of the various academic meetings and conferences, held under the auspices of the program, have shown that the program has a bright future.

c. In conclusion: the program has only one direction to go—*that is to move forward.* Hopefully in the future the program may financially and academically be able to

invite a suitable number of local scholars – the Asian and African young scholars—to participate in the by then more mature program.

Evaluation
21st Century COE Program
ASAFAS, CSEAS
Kyoto University

November 3rd 2006

Dr. Cécile Barraud

Centre National de la Recherche Scientifique, Centre Asie du sud-est, LASEMA , Paris

Points of review :

1. Aims of the program

The originality and interest of the program consist in its double objective which is both scientific research and education.

It is indeed a scientific priority to follow the comparative approach which is central in the COE program: on the one hand combining natural sciences and social sciences perspectives and methods, on the other developing on two main areas which will be at the core of the world in the 21st century, Africa and Asia.

The comparative approach allows for distancing from one's own research object, feeding and enhancing it by the taking into account of differences. Reflecting on differences widens the scope of research. The COE program proposes such an opening.

On the educational level, the COE program is original in that it is not so common in the scientific world to insist both on the practice of long term fieldwork and on the sharing of field experience between generations. This is time and money consuming and either academic institutions do not want to fund these experiences or experienced scientists hesitate before moving from their armchair. The COE field-stations program reminds of Hellenistic Academies and is certainly the best kind of teaching that COE students can obtain. Although the investment might appear heavy financially and in time consumption, training being better, the results are achieved more quickly, which is economically satisfying.

Finally, the collecting and global circulation of information at the Area-Info Section of the Program, which is one of the COE program's aims, prove to be an important contribution to the development of knowledge on a world basis, one of the ultimate goals of any academic proposal.

In these regards, the aims of the COE program respond to the demands of a complex and agitated contemporary world, while taking its place among the missions of Kyoto University.

2. Research and Educational activities

About the common research theme: if ecology and environment are becoming the main issues of the 21st Century, it has been already experienced that fundamental research on these issues without a deep understanding of the social and human local context leads to useless conclusions or worst, disastrous effects on local societies. The title of the theme points to the awareness of these problems by its promoters, through the association of natural sciences and human sciences in research to apprehend regional questions and problems.

CB

Among the four themes, the fourth: theoretical-methodological, is of the utmost importance. Scientific progress, whatever the domain, rests on the patient building of solid bases, through the comparison of different theories and methods. This is expressed by the promoters of the program when they say that "a new paradigm [is still to be found] which may allow the coexistence of these divergent forces currently working at cross-purposes in a globalizing world".

The common theme "Human-Nature Coexistence in a Globalizing World" has the advantage to be readily understandable beyond Academic institutions. As far as educational activities are meant to extend beyond the academic sphere, it is likely that such a formulation can promote a wide participation in the program. It is indeed one of the characteristics of the program to consider that academic education through field-research should not be limited to Japanese graduate students but should profit as well to local scholars and institutions, being involved in the program. The transdisciplinary approach to "the understanding of local ecosystems, of techniques, of culture and society" is likely to attract many local researchers, academic or non academic and thus fulfill its educational aim.

Finally, the emphasis of field-work as the basic technical methodology and research in the local language in the training of students, whatever the discipline concerned, shows clearly the deep COE Program's involvement in each area concerned.

Learning the language is time-consuming, but only through the good knowledge of the language can a scientist avoid the cultural misunderstandings that have brought so many development policies to a failure. Professor Sugishima's talk about the meaning of the word 'identity' on the website of the Program is a good example as a kind of reflections that are necessary to have results in whatever program involving so different cultures such as African or Asian ones.

3. Output of the Research and Education

The results so far achieved in such a short period of time is quite impressive: in terms of the number of field stations established, of students having undertaken fieldwork, of faculty members and COE researchers implicated in field research, of seminars and workshops held, of joint local seminars and activities, of international symposia, of fieldwork reports, and of publications.

Impressive also is the amount of data integrated in the Area-Info Section (to be integrated with the newly established Center for Integrated Area Studies), and the technical development of this data base itself and of the necessary programs. The processing of multidimensional materials requires specific competences which results can be judged by the quality of the website. In addition, the fact that the results are widely circulating in English language gives an exceptional value to this amount of information, becoming available for a large scientific or non scientific public.

In 4 years, the results of the program are quite satisfactory and remarkable. Notably, the establishments of exchange agreements and the implications of local researchers are very positive points. Indeed, too often, and mainly because lack of funds from the academic institutions that send researchers to the field, the establishment of cooperation with local universities and local researchers is a very long process enterprise, and in this respect the COE Program is quite successful. The local implementations as shown by the amount of joint seminars and activities are a reality.

cd

4. Prospects of the Program

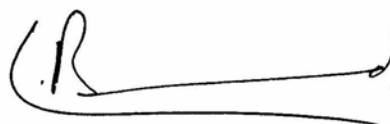
With respect to the past accomplishments of the COE Program, to the huge investment in money and human resources, to the methodology (Africa/Asia comparison and fieldwork approaches), the Program is likely to enhance innovative research in the long run. The active participation and ability of students, not only in fieldwork but in the organization of international events (see the coming November 2006 Symposium) is a good prospect for the development of the program in terms of the relay passed to younger generations.

Among other prospects, as far as the involvement of local academic institutions is part of the program, the later has to last long enough in order for them to take the relay and undertake their own programs. Training and joint research with local researchers is thus another of the utmost priorities and the effort has to be carried on.

The active engagement and the current output of the Area-Info Section, the wide interest that it raises as shown by the visits to the website, testify of the importance of pursuing the effort of constructing a global network. It is important not only for the circulation of information but for its initiative character: it will favour the cooperation with foreign scholars working on the areas or on the various themes of the Program.

If a wish can be expressed, it is precisely the progressive opening of this program to a wider cooperation with researchers from all over the world. The formal implication of some non-Japanese researchers could widen and enrich the scope of the enterprise, in view of the fact that field-approaches and scientific background and cultures differ from one country to another, and that the exchange of points of views or scientific perspectives always reveals challenging. Which means not only a cooperation between Japanese and local people and institutions in the field, but also with some foreigners having different scientific and cultural experiences, both on the level of field-research and on the level of scientific perspectives. Complementary perspectives mutually enrich the contents of the research and the ways to reflect upon it.

November 2006

A handwritten signature in dark ink, consisting of a stylized 'C' followed by a long horizontal line and a small vertical stroke at the end.

EXTERNAL REVIEW REPORT of the 21st CENTURY COE of INTEGRATED AREA STUDIES PROGRAM

1. Materials referred for the external review report

The review Materials I have been provided have the following contents: Outline of the program, background of the program, results of mid-term evaluation, overview of the past activities and achievements. This is followed with Appendixes of field station and their activities, databases and other digitized information sources, seminars, workshops and symposia held during the program period, degrees granted during the program period, publications and other forms of output of research. I am also provided with proceedings of Kyoto Symposium "Crossing Disciplinary boundaries and Re-visioning Area Studies: Prospecting from Asia and Africa that was held in Kyoto University Clock Tower Centennial Hall from November 9-13, 2006. For details of the program I had also visited the appropriate Web Sites.

2. Key words, objectives and activities of the Program

The key words of the Program include integration of research and onsite education, Center for integrated Area Studies and Common Research Theme: "*Human-Nature Co-existence in a Globalizing world; an information network for Area Studies.*"

The *objectives* of the program is to build postgraduate level education in Area Studies by integrating research activities and on site education based on previous experience of ASAFAS and CSEAS and is based on noble spirit and guiding moral principles of the Kyoto and basic philosophy adopted in recent years by the University "HARMONIOUS COEXISTENCE of the GLOBAL COMMUNITY" as well as the University's academic standing tradition as "POSITIVISM ON FOOT"

There are four problem areas that are derived from the Common Research Theme and these are: *human ecology, politico economic, and socio cultural, theoretical –methodological* (Trans disciplinary approach and methodology). Under each of these areas of research are included several relevant research sub-themes and topics.

On-site educational field research are based on field station which are situated in Cameroon, Ethiopia, Indonesia, Kenya, Laos, Malaysia, Myanmar, Philippines, Tanzania, Vietnam, Zambia, South and West Asia and each have project leaders and co-workers that undertake the thematic research work.

3. Organization and Management of the Project

The program organization consists of executive committee under which the two major divisions (Asia and Africa) of Field Station, the three sections of Area information divisions (Network, Public relation and Library) and the two sections of administrative division (Research promotion section, and Secretariat) operate. The Research Promotion section considers 4 major issues namely Human ecology, political and socio economy, cultural, and Area Studies Issues, each with responsible staff assigned to lead.

4. The expected out come of the Program

These include integration of research activities on site education with the field station as a base, development of trans-disciplinary approach to Area Studies. Establishment of Area Studies Information Center and global network for the promotion of integrated area studies that can be used even after the project is over.

5. Realized outcome of the program

Fifteen on-site education and research on various subject themes were performed on the established 14 field stations; the Center of Excellence of integrated Area Studies contextualized its program with Kyoto University's academic heritage and guiding moral principles; Participation of 24 researchers, with 26 cooperating members; digitization and integration of collected research materials and their reports of a field work; 18 work shop and symposia were held; 230 seminars were presented; many pictures and networking in Area Studies were actualized with a Creation of a Web Site. A total of 13,400 books, 1500 microfiches, 800 reels of

microfilm, 800 CD- ROMs dealing with Asian and African studies were purchased; One hundred and forty six students were dispatched with 70 Faculty members and 12 COE researchers who provided on site education to those students; Eight 21st COE researchers were hired from young researchers who have completed their doctorate or equivalent in terms of research capability. Thirty nine students have received doctorate as of the end of July 2006; four hundred and ninety six publications by Faculty participating members; three hundred and forty seven publications by Faculty program cooperating members were made; two hundred and thirty six publications by students were produced.

6. Plans envisaged to the future after the 21st Century COE Program FY 2006

This include *ensuring making use of the outcome of the program*, maintaining some of the field stations through the extension of the current programs or *establishing new field stations*, *continue training* independent -minded young people with broad perspectives and well founded field experiences in their respected field of specializations, consolidating the Area Studies Information Center, *conception of a new large scale program* with due emphasis on the integration of research activities and on-site education based on research tradition and experience of ASAFAS and CSEAS, *improve research and educational environment including the construction of new building to bring all members under one roof.*

7. Mechanisms of implementation of the program followed include:

- a. Establishment of Preparatory office in FY 2003,
- b .Launching of on campus facility in FY 2004,
- c. Purchase of Servers and other equipments and documents,
- d. Hiring of specialists for integration and digitization of research materials in FY 2002,
- e. Establishment of Field Station for research and onsite education and many Faculty members doing research funded by Grant -in-Aid for scientific research and other grants carrying out on site education as well as their research activities.

8. The review terms of references

These include giving points of view on aims of the program; research and educational activities of the program; out put of the research and educational activities and prospects of the program.

9. Methodology followed for the Assessment of the Program

This was based on the review of the document provided and on various Web sites referred.

10. Problems encountered

Annual Budget cutbacks and other costs

11. Assessment of the Program and Executive Summary

Disparity of North-South relations, environmental problems and ethnic conflict and regionalism are more salient in developing areas and are local expressions of collision between tradition and modernization, regionalism and globalization urgently need a new paradigm that allows the coexistence of these forces in a glocalizing world.

The area studies focus on *Africa and Asia* which are being modified out of their environment and are at their historical turning point not only with *environmental changes and degradation of biodiversity* but also in the *erosion of indigenous knowledge, social values and other cultural assets of humanity*. It has been well reflected by this area study that timely study on the two areas is required both as a concern to the region and a moral responsibility for the shape of the world order in the 21st century and it goes well with the current guiding principles of Kyoto University with due consideration of the citizen and Scholars and this is well reflected in COE program for 21st century seeking to raise to the highest world level the standard of research and *higher education fostering creative young people capable of becoming future world leaders in their respective academic fields*. The project started in FY-2002 was subjected to a mid-term evaluation that was made in FY-2004. The points that were raised during this (FY

2004) evaluation were points on the kind of research that can be promoted through the development of field station, clarity on the trans-disciplinary integration and the explicit intersections between the study regions (Africa and Asia). These points were convincingly explained by the respondent as can be referred from external review of September 2006 (see page20-22). *The responses made indicate that clarity and deep understanding of the program was well founded and formulated from the start.*

The following are specific outputs of the program:

- a) The establishment of new field stations to continue with research and on-site education in correspondence with changing times and needs that will be eventually handed over to local institution and sustain the effort since it is of focal importance to each country's effort for development. As noted from the report many of the field stations are operating their Web sites based on the data and information compiled. Through the established on-sites education and researches that have been promoted, several relevant materials collected and compiled, cooperation with several education and research institutions in respective countries are strengthened like through joint research and workshops that were organized
- b) The independent minded field experienced young people are the correct focus since it is such people that are needed for the understanding of both the local and global community of the 21st century. The fact that graduate students took active part in the planning, preparation and implementation gives tremendous experience to the students and this by itself sustains their life contribution to many aspects of human related problems.
- c) The fact that out of 39 students who have received doctorate so far (as of the end of July 2006), 17 of them have already found employment with International Institutions, International Aid organizations as well as in teaching and research where 29 part time and research positions complement, reflect the strategic distribution of the trained manpower which will have a constructive impact on globalization with well founded experience and research of various country based local conditions. It is noted that this is an indicator for the quality of training that embraces the Kyoto University core guiding principles. The fact that thesis topics considered important local issues/problems to understand linking them to broader global and national policy within the framework of the study site mean that they have served and will serve as important quality indicators. The results of various research activities will generate an increasing demand both in research and training activities not only in Kyoto but also in other higher learning Institutions in Japan and collaborating countries.
- d) The data so far generated and research materials collected in various forms continue to serve as good source of information for many programs and are not restricted to only the present program. As it is stated in the external review materials produced in September 2006, a well founded integrated system to promote frontline on-site research and education was launched for the first time in Japan and "Training practical area study through on site education and research" is to be adopted in FY 2006.
- e) Bilingual digitization and integration of research materials further expands the immense utilization of the Web Sites. The data base and other digitized information sources that include the set up groupware (an application that enables members of a net work to share information through site) to support information exchange is being used for exchange of administrative information and sharing of image files among students and faculty members in research project. This will strengthen group and international collaboration on research activities. Further to this the collection of files on human ecology (5600 files) with agro forestry files (1600 files) and watershed files (1200 files) that are stored in CSEAS map storage room will add to other dimensions of research reference and collaborations. The South East Asian topographic map which is used free of charge by researchers affiliated with universities or doing academic research together with the African flora data base that covers the wide traditional use of plants in Africa which is freely accessed on line contributes to wider plant use and bio prospecting for medicinal and other industrial applications. The area studies image database which is reported to be under construction will also be useful and will facilitate its reference with digitized photos. The Thai-language database "Kotami Tra Sam Duang (The Three Seals Law)" that has been made accessed as was rightly reported contributes to the range of studies including historical

linguistic studies, relationship between political power and Buddhism and diffusion of Hinduism thus partly contributing to the histories of the Orient and South East Asia. All the data bases built so far and an attempt to build them further (e.g data base of Arabic periodicals) is of significance and the constructed data bases can be digested, to emulate order, and adapt in order to configure the wide ranging ramifications of its application and implications in research directions with in the context of glocalization and globalization and can be browsed as a knowledge market not only at the established center but elsewhere too for its contribution.

f) The workshop conducted so far cover a wider area in environment and livelihood and cover areas like forest dynamics; conservation and sustainable utilization; rural society, development, land use and agro ecological knowledge as well as other local knowledge and geo informatics. This wealth of data contributes to globalization with a focus on glocalization.

g) The male and female participants in the post-graduate training are of equity.

h) The program execution, teaching and research activities are in line with the objectives of the project and thus followed the moral principles of the Executing University.

i) The project itself has produced numerous academic benefits which together with existing need to understand globalization and its impact on localization will enhance its sustainability and understanding.

j) The program has avoided the usual negative aspect of donor/recipient attitudes among researchers and has promoted the value of informal indigenous knowledge (IK) which could expand the importance of studying local problems in the currently felt globalization.

12. Global Impact of the Program output

Peoples indigenous knowledge system reflected in traditional innovations, practices, life styles and social values, promote and advance maintenance of biodiversity and other natural resources in many ways. The program has generated many cases that helped to illustrate the favorable roles of indigenous practices and knowledge systems to the well being of ecological habitats, organisms of the field study sites for global and regional order and peace. The Projects on conservation and sustainable use of tropical forest; creation of multi dimensional symbiotic society; Social change and the transformation of subsistence economy in arid regions; development resources and local societies with a research on community transformation and resource management under the global economy are of particular reference here. As traditional farming systems in the study sites are characterized by diverse species and varieties of crops, and domestic animals with high proportions of indigenous species and varieties, the study made a trans boundary subject approach that is competently tackled. It is noted that indigenous perceptions on biodiversity are evident in social values, beliefs and practices that make reference to the importance of biodiversity including reference to some biological units like forests. Tangible cases showing the contribution of the indigenous system to maintenance of biodiversity have been assembled in order to draw lessons for future applications. Harmonious coalition between the hitherto distant formal and informal system in understanding, e.g. African agricultural system (as witnessed in the established results of some of the Faculty members) is an important ingredients for the next revolution in agriculture. This is so and many authorities in the field also underline that the next agricultural revolution is anticipated to develop out of the integration between the formal and the informal systems of plant breeding and crop improvement. The store of indigenous knowledge that exists among the people on crops and other plants and biological entities has to be incorporated into the pool of human knowledge in an equitable process. The information generated together bring to light the traditional mode of conserving biological diversity in the studied field sites past with the interest of underpinning its possible future roles in advancing the biodiversity drive. The commitment of the study groups to learn the local language had helped them to extract indigenous knowledge which is not only expressed and manifested in the local practices, innovation and the psycho-cultural attributes of the people but also stored in people's memories and transmitted through action and oral communication. The study conducted thus can also be used as a response to the burning issues of environment, biodiversity and food security. For example the studies conducted show that traditional crop fields in each field study sites are typically poly cultural. Each farmer cultivates

different species and varieties on small farm plot. Materials of a given crop are usually composite farmer's varieties (land races) of heterogeneous populations where one observes how the agricultural system is strongly backed by the traditional seed selection, exchange and information network, linking the entire community in an invisible conservation-seed exchange supra-organization. Farmers continually maintain crop diversity as a strategy to minimize risk, stabilize and improve yield and maximum return.

The various reports of the study conducted in various field studies also showed the determinant of the biotic change and variation in agro biodiversity as: ecological (soil, altitude water etc.), personal (preferences, interest, knowledge etc), socio cultural and economic (household needs, gender, market social groups, wealth status, etc) and political factors (land use system, marketing policies, conservation policies, agricultural support systems etc).

A rich knowledge base is shown to exist with the farming community or germ-plasm storability, food quality and storage methods, for example, women selection of special variety for medicine, nutrition etc. Such a rich indigenous knowledge of farmers and the community helps to reduce the risk of loss of food supply and the loss of genetic diversity due to storage, pest infestation and other reasons. The modern sector has much to learn from the indigenous practice and knowledge system. Various studies reported that traditional farmers' production and conservation are traditionally linked with individual and collective responsibilities thus fostering conservation value of the on-farm strategy with dynamic processes the biotic/abiotic interactions. *Here one witnesses that consideration of the long-standing precedence of informal crop genetic resources management by local farmers must integrate into the international conservation process through joint venture in on-farm land race conservation for enhancement schemes of agro biodiversity (again the importance of local condition for a global action is also noted here).*

Adversities of the environments are reflections of the rich indigenous knowledge that went on being adapted to fit to the changing conditions of the dry land situation. Collectively, these practices make livelihood possible through the environment is full of uncertainties. Flexibly responding to uncertain events, coupled with mobility allows the optimal use of heterogeneous environments is at the center of indigenous strategies of use and management of arid and semi-arid zones. Life and living goes on in the face of environmental incertitude particularly in the traditional dry lands. So the contribution of the study on social changes and transformation of subsistence economy in East Africa arid regions as well as Myanmar society and its transformation studies is of significance.

Creation of multi-dimensional symbiotic society in areas of diverse nature culture and ethnic groups based on their livelihood and the structure of these livelihoods with the experience of very different political system is of particular attention with reference to conflict resolution and management. The horn of Africa for example is a region mainly characterized by absolute dependence on stability of the natural renewable resource base, the vagaries of the climate and the high growth rates of human and animal population. Prolonged negative social and physical environment changes have had far reaching social impacts leading to social conflict and at times such conflict become a base to regional and beyond conflict and threat. Here I would like to underline that considering technology as being broadly divided into modern or scientific knowledge, and traditional technology based on empirical knowledge is appropriate as their structural connection with society, the two types of technology are fundamentally, radically different. This distinction is important because a tremendous sector of all humanity and a great majority of the population of the third world countries use traditional technology to solve most of the problems of the subsistence economy in which they live.

Exploring how environmental problems, food insecurity and displacement can be met through the understanding of the indigenous structure of peoples livelihood by first focusing on a specific country with already founded data base and experience towards contributing for the building of a multidimensional symbiotic society is directly linked with GUIDING MORAL PRINCIPLES

and basic philosophy of HARMONIOUS COEXISTENCE of the GLOBAL COMMUNITY. The notion that the development of the rural community of the third world countries can be solved by simply expanding the modern sector has produced grave disruptive effects in the social fabrics of the traditional sector, with out any improvement and created not only an illusion of being modernized but also a massive immigration of peasants to the cities, cities that follow the "cultural, habit and values" of the developed countries with out having the required capital and foundation of modern sector but only with adopted patterns of consumption of the middle and upper class in developed countries. In fact the difference between the urban sector and rural traditional sector parallels that of what is usually conceived as developed and developing countries. The understanding that is required to explore such a dualistic society with a particular focus on rural community of different groups that are very diverse, in order to create a multidimensional symbiotic society is a noble contribution to peace and sustainable development in this region of political delicacy.

For in-situ conservation of biodiversity the modern system has very little knowledge base. The rich knowledge base in this case is found with traditional system of farmers and other stakeholders. Since the grill of biodiversity is in-situ conservation, the traditional system is the strongest side. The biodiversity issue is, therefore, inseparable from indigenous knowledge systems.

Land degradation, drought, famine, overall deterioration of environmental vigor and integrity coupled with pressures from the formal sector aggravated the state of biodiversity erosion as was shown from the program study on resource management and policy conflict in Philippines as well as social and natural environment under globalization studies in Tanzania. Consequently, in-situ conservation of the present time cannot rely solely on the traditional system. Scientist, research institutes, universities and gene-banks should play a supporting role to facilitate a modern in-situ conservation strategy in the context of the existing relict of on-farm system as was suggested for example for barley by Bekele in 1983. Within the framework of conservation, interventions are necessary to improve the quality of the material cultivated in terms of yield, nutritional content, disease resistance and other attributes paying attention to farmer criteria. In this way, the traditional and the modern system support each other in embracing on-farm conservation strategies. A set of guiding principles that effects this would include grass roots involvement, promotion and enhancement of the traditional small scale farming which is based on environmental heterogeneity, an inter-marriage between traditional knowledge and formal science and integration of farmers' practices and character recognition skills with formal breeding.

Linking the formal and informal knowledge system is the challenge that is facing contemporary scientists and development workers. The principle of the balance of nature had been associated with the dynamic nature of undisturbed landscapes. Patch dynamics maintains the balance of nature and as some authorities assert and this is significant in cultivated landscapes where the patches are created by the cropping systems. In patchy environments heterogeneity and multiple scale processes are said to produce a state of meta-stability. This concept I believe gives option for maximizing productivity in resource management, nature conservation and environmental protection and may be applicable to the utilization of ecological resources and societal transformation in the Mekong Delta (Vietnam), Laos and other areas.

As has been shown in the results of the studies made local reality is various and can not be overlooked. The importance of customary law in conflict resolution and management assists the norm of the international keep mission thus understanding the local philosophy becomes a mandatory. This is the reason I believe why practice of Islamic code and Islamic revivalism is being studied.

This is further linked with fair understanding of indigenous economic system in order to integrate to global? One or the various options. Is it possible at all to integrate the two systems?

Globalization cannot ignore the primary production/subsistence economy since if it ignores it only brings about fractured globalization. Such a fractured globalization does not consider the local community and make people to converge; it only promotes world asymmetry and unhealthy divergence. If globalization as it stands now continues to be centered on global elite and consider local conditions just tangentially it seriously lacks viability. With out any overemphasis the program output is of voluminous value to be utilized also by the UN system.

The principal motive for taking up a university career is essentially the possibility of conducting research that would result intellectual and professional development. The fact that the faculty members also used the study site has promoted research and during the period the lessons that have been learnt by the faculty members must have been of higher order may be to the extent of questioning some of the existing models being applied for local development. They have been working in an environment dominated by tension with different moral and political values concerning what is true on the ideal plane and in the statistical norm and different interpretation of the forces of guiding human action. The work of the many research groups pursuing under local conditions and engaging themselves in understanding the local condition and problem solving can generate a breakthrough. Such a break through can be met by not only production of knowledge but also by reformulation of knowledge that exists thus promoting the knowledge economy.

The principal contribution of a university to society can be measured by the quality of the knowledge a university generates and inculcates in its graduates. The result of the present program contributes to society faith of researchers to enable them to pursue new goals in light of the complex ecological, social and cultural issues facing humanity.

The knowledge of research results that are being generated will also help the African curriculum set up for African people at least. If this is done and the education provided is built on cultural foundation, wisdom and traditional knowledge as well as on every day's experiences, it promotes education for self-reliance at least at a local level. Here again the globalization should take into account glocalization that ultimately leads to sustainable development that will be based on knowledge and skills possessed and utilized by individuals, enterprises and nations.

The cross boundary area research reflected in the program output reflects a wide spectrum of international activities that are well suited to providing a sufficiently dynamic studying and teaching environment with a pronounced international dimensions and global perspectives.

Human beings are not free floating and are influenced by existing research agenda so it is to be seen that the present program does not face bias of unrealistic world order and research funding. During my service as associate vice president for research and graduate program of my university, I have encountered several modalities of funding and propagandized of research agendas with a denial of academic space as well as an imitation of inappropriate theories that are often uncritically borrowed, taught and applied in research thus producing biased knowledge that mask the reality and neutralize the correct input of effort. I realize that when the present program was funded there was no conscious and intentional gate keeping and denial of academic space as well as incidental consequences of practice and procedure. I am of strong opinion that the program with strong conviction to the core philosophy and guiding principle of the university as well as the moral responsibility of the university to the global understanding by focusing on local problems to understand, solve and extrapolate will continue.

13. Major findings and suggestions

13.1. I concur the quality and relevance of the work as evidenced by the large number of publications, databases and Ph. D graduates.

13.2 The reviewer gives high credit to the program for having played an active role in holding various workshops and symposia in various partner countries. This has led the program implementation with crafted effective partnership with various stakeholders and proved to be a

successful example of field based multi institutional partnership for greater effectiveness and efficiency. This should be reviewed periodically for further effectiveness. I also suggest that the program should document its impact on the understanding of the complexity on food security, poverty reduction and natural resource management and how the local conditions of these issues are taken up to understand the direction of the global trends.

13.3. It is a high time that the various achievements (outputs) made adequately relate with impact(outcomes) perhaps this is one of the areas to be looked into the future projection. In the future it is worth considering such a vast research output of each sub themes with emphasis on potential impact.

13.4. A careful technical review and synthesis of publications made so far and the thesis produced by establishing a publication review committee should be looked forward into the future.

13.5. It is recommended that the program management strengthen its capacity to monitor and assess the impact of its activities.

13.6. It is recommended that priority order set for future by consolidating the effort made so far and further expanding a research field site depending on regional importance of the global threat and problems.

13.7. The program for the future develops a new strategic agenda on social and institutional constraints to technology adoption and gains a better understanding of existing knowledge system of rural community.

13.8. In the report it is of interest to put the mission, strategy and priorities of Kyoto University or refer to it in addition to what rightly stated as a guiding philosophy of the university.

13.9. The Program has devoted its work to research into the pressing global problems in a local condition with reference to problems of human survival, development, co-existence between peoples having different cultures, languages and social system, economic and social change and development, environment and the proper use of resource. Thus its contribution to the United Nations and its agencies effort is of significance. I, therefore, strongly recommend that results obtained and knowledge gained be disseminated to such organizations and agencies in order to increase dynamic interactions in the world-wide community of learning and research. This can also be realized that the partnership being created between Japanese and their counterpart in Asia and Africa, through the program being reviewed here can alleviate the intellectual isolation of persons in the developing countries which might otherwise become a reason for their moving to developed countries or become the Victims of not only brain drain but also brain wastage.

13.10. In all the study field sites (of this Program), where there is only little capital for investing in conservation biodiversity projects and where the benefit is to accrue over a long period of time, empirical justification of the values of biodiversity resources and the possible costs of its conservation are important for planning and costing the budget needed (by each national government and their international and bilateral allies) with sound economic background. This can be done by assessing the observed and potential value of resources, i.e. economic analysis of biodiversity resources by considering the different value dimensions in terms of actual and potential value of these resources. Here based on the farmer perception, valuation and interaction with the forest resources in relation to what characteristics of the household and the farm make them convert the resources into alternative resources are of interest to be studied since they can assist the design of economic incentives and institutional arrangements required to promote conservation of the natural resources by individual farmers or communities.

External Review Report of the 21st Century COE Program

Please send the Review Report either by e-mail or fax to:

e-mail: 21office@asafas.kyoto-u.ac.jp

fax: 81-75-753-7395

Reviewer

Date: 7 November 2006

Name: Professor James Fairhead

Affiliation: Chair, and Head of Department of Anthropology, University of Sussex,
UK

Points of Review:

1. Aims of the Program

This programme has been developed in the context of increased international research attention to 'Area Studies'-based, interdisciplinary research. Several new programmes have been launched internationally, with similar broad aims.

¹

It has never been more pressing than now to have grounded field research in these regions so that the academic and policy communities can keep abreast of rapidly developing social, political and environmental conditions. Yet finding ways to introduce graduate students to fieldwork is getting extremely difficult. Apart from the usual challenges linked to cost, cultural differences and economic inequalities, fieldwork is increasingly problematic given (a) post-colonial critiques of social scientists and (b) often precarious political conditions. It seems to me that the objectives of this programme, in establishing field stations in Asia and Africa to combine research with on-site education were extremely timely. It enabled sustained collaborative engagements with national universities and local communities in the regions. This tactic has also been helpful in facilitating the hosting of major workshops and symposia in the regions of study. It has also helped bypass the close and problematic relationships that can emerge between research and contemporary global power structures (when research is locked into 'development' agendas, rather than being independent). Such collaborations have thus addressed the problems raised by post-colonial critics of representation by outside researchers, whilst at the same time providing the continuity required to facilitate safe, effective and grounded fieldwork for a generation of Japanese scholars.

2. Research and Educational Activities

It is not easy to establish enduring collaborative links of the sort that have been

¹ . MacMillan Centre for International and Area Studies at Yale
(<http://www.yale.edu/macmillan/overview.htm>)

developed within this programme. Clearly some of the field stations have been more active than others, and clearly some have been more focused than others on the core theme of 'Human-nature coexistence in a globalizing world'. However this is to be expected, and indeed, is healthy. In my view, by choosing to establish a dozen or so field stations the programme was able to address the obvious risk that one or two might face difficulties on the ground. Moreover, by choosing a theme which could be interpreted in a wide variety of ways, it left the door open for students who sought to conduct research that they were fascinated by, within the programme (in aspects of material or musical culture for example (basketry, clothing and custodianship of musical legacies, or on performance) as well as those focused more classically on environment and development issues.

The programme has hosted a large number of workshops in the regions where it works (Malaysia, Ethiopia, Tanzania, Thailand, Cameroon, Laos, Indonesia), along with globally significant symposia such as that focused on 'Crossing disciplinary boundaries'

Clearly this network of field stations has contributed enormously to building Kyoto University's role as an international leader in Interdisciplinary Area Studies. Not only has it created critical mass of graduate students and faculty in this field, but it has also facilitated much of the necessary infrastructure to support this, including the establishment of a modern documentation node. This is clear from the reports and from the quality of the papers to be presented at the forthcoming symposium. That the focus of this is on cross disciplinary creativity responds addresses head a perceived need for this.

3. Output of the Research and Education

The faculty and the students have produced a very large number of outputs. These include some publications in internationally leading Area studies journals such as would be considered in the UK (*Modern Asian Studies*, *South Asia*, *Journal of Southeast Asian Studies*, *African Studies Quarterly*) and top journals of the particular disciplines (*Agroforestry systems*, *Economic botany*, *Forest Ecology and Management*, *Biogeography*, *Agriculture, ecosystems and environment*, *American Journal of Primatology*, *Cultural Survival Quarterly* etc.). The Japanese produced *African Studies Monographs* which showcases much of Japanese research in English has been used well too. The bilingual website is very impressive. It seems to me, however, that it would be possible for faculty and graduate students to submit more of their work to leading international journals. The quality of the work done is unquestionable, and the global impact of the programme would be enhanced by a more global publication

strategy.

It is the educational output which is the most impressive. The 146 graduate students dispatched and the 39 doctorates (so far) in assorted interdisciplinary and area studies fields are truly impressive. That each is conducted within grounded fieldwork means that the programme has set the scene for a much harder hitting Japanese input into this field. Again, I would like to see these doctoral students given post doctoral opportunities to develop their theses into international peer reviewed outputs in English (journal articles and books), potentially focusing on the key journals published from within the regions (in English and French) as well as the (from our end) more prestigious US, UK & European based journals). In this way, research at Kyoto would consolidate its growing international reputation in this field. It is very good to see that eight researchers have been hired. It would be good to see what others who came to the programme are now doing. In the UK, we have found that graduates coming out of programmes such as this are much sought after by national and international organizations.

Prospects of the Program

Programmes such as this are a national treasure. It takes many years to establish fruitful research collaborations of this genre and to build up a critical mass of mutually interested scholarship. This is a field which will become increasingly important in a globalised world (against predictions of 'The end of history' and 'The end of regions'). To consolidate and build on the 14 field stations (allowing for some turnover) would permit Japanese international scholarship to flourish. There are perhaps other opportunities that these field stations might offer. Might non-Japanese graduates (e.g. from other countries where there are stations) also use these stations.

I wish the programme a prosperous future and would recommend refunding unreservedly.

RICHARD B. LEE
DEPARTMENT OF ANTHROPOLOGY
UNIVERSITY OF TORONTO
TORONTO, CANADA
M5S 3G3

Phone: 416-978-4008

e-mail: richardb.lee@utoronto.ca

Fax: 416-978-3217

8 November 2006

EXTERNAL REVIEW REPORT OF THE 21ST CENTURY COE PROGRAM

FOR THE

Graduate School of Asian and African Area Studies
[ASAFAS] Kyoto University

AND

Center for Southeast Asian Studies
[CSEAS] Kyoto University

SUBMITTED BY

Richard B. Lee Ph.D. F.R.S.C.,
University Professor Emeritus
Department of Anthropology and the Center for International Health
University of Toronto
Toronto Canada

INTRODUCTORY REMARKS

I am honoured to be able to offer the Japanese Ministry of Education, Culture, Sports, Sciences and Technology [MEXT], this evaluation of two Institutes at Kyoto University, with special responsibility for Asian, Southeast Asian, and African Area Studies. These Institutes have gained an international reputation for outstanding scholarship combined with focused research on issues of relevance for economic and social development. And they have produced an impressive output of research findings, comparable with the best institutions of higher learning in North America, Europe and Australia.

1. AIMS OF THE PROGRAM

In the 1990s, with Japan as a nation playing an increasingly prominent role on the international stage, Kyoto University identified a clear need for scaling-up in research expertise and professional development for Japanese scholars in Asia, Southeast Asia and Africa. This initiative at Kyoto unfolding through the 1990s, paralleled similar developments in higher education Area Studies in other G-8 nations and in peer institutions in Western Europe and Scandinavia.

When the AFAFAS and CSEAS were launched in 1998, a key goal was to develop a cadre of Japanese and foreign researchers with extensive first-hand experience in the countries of the developing world. I would like to highlight one key variable that gives to Kyoto University research a distinct identity. From my knowledge of Kyoto University, gained when I was a visiting scholar in 2001 and from observing the research output over 25 years, I came to appreciate that Kyoto's distinct approach was to combine training of their advanced students in the natural and the social sciences. At institutions elsewhere –the U.S. and U.K for example- these two branches of scholarship tend to be much more distinct and at times even antagonistic, often to the detriment of both.

This distinctively active dialogue between the natural and the social sciences, I take to be the underlying rationale for the term “integrated” in the concept behind The Center for Integrated Area Studies, where the political, the social, the technical and the ecological can all be accommodated in a comprehensive approach to area research.

2. RESEARCH AND EDUCATIONAL ACTIVITIES

In order to develop a cadre of highly skilled Japanese researchers with first-hand knowledge of the areas under study, AFASAS and CSEAS put their emphasis on fieldwork. The result was that no fewer than fourteen field stations were set up and operated during the five-year period 2002 to 2006. Each unit was headed by a senior scholar and attracted a mix of faculty members, young researchers and graduate students.

In Africa, the region I am most familiar with, field stations were set up in Cameroon, Ethiopia, Kenya, Tanzania, and Zambia. To take the Cameroon field site as an example, based at the Yaounde, each year between three and nine researchers were based there. Under the overall direction of Prof. Mitsuo Ichikawa researchers undertook in-depth, multidisciplinary studies in the tropical forest region of the southeast Cameroon, with a comparative eye to forest regions elsewhere. Research focused on ecological relations, sustainable agriculture, hunter-gatherers, local exchange systems and inter-ethnic power relations.

Ethiopia has been another major field site for ASAFAS, with up to 29 fieldworkers present in a single year under the direction of Prof. Masayoshi Shigeta. Here the emphasis has been on socio-ecological history, local development, and helping the country build a sustainable future.

The Kenya field station, to take a third example, under the direction of Prof. Itaru Ohta, based in Nairobi, has focused on the region's pastoral peoples: such as the Maasai, Samburu, and Turkana. The changing means of livelihood and complex ways that these semi-nomadic peoples are being incorporated into the national political and economic structures of Kenya, Tanzania and Uganda has been the subject of research by between four and eight researchers per year.

In addition to the five African sites, field stations were set up as well in South Asia, based in India and Bangladesh, and West Asia based in Cairo and Ankara. A theme running through both sites is the transformations of Islam and the role of religious conflict in shaping the region's future.

The southeast Asian branch of the research effort has been even more extensive. With seven field stations located in Bogor and Makassar (Indonesia), Laos, Malaysia, Myanmar, Manila, and Vietnam. In this even more extensive placement of field stations it is possible to discern the approach that has become a distinctive Kyoto University trademark, the combining of sound research on the politics and economics of emerging societies with a careful analysis and data collection on the ecological bases of these societies.

In all of the fourteen field stations and their programs, a consistent pattern can be discerned, one which is summarized in the book "Kyoto University-Style Fieldwork":

1. A partnership is set up with an institution of higher learning in the host country.
2. Scholars from Japan are sent out, including junior and senior faculty and graduate students.
3. Students from the host countries are brought to Japan for advanced training.
4. Visiting scholars from the host country are invited to Japan for mutual exchanges of ideas.
5. As the students and faculty return from field stations, workshops are convened in Japan with visiting scholars from the host country.
6. Experts on the area from third countries (U.S. U.K., Europe etc) also are invited to participate in the workshops.
7. Workshops are also convened in the host countries themselves, involving the same categories of experts; Japanese, host country, and third countries.
8. Research results are widely published, primarily in English and in Japanese.
9. Increasingly, research results are being posted and made widely available on the internet and the WorldWideWeb. The extent of the documentation available on-line is truly impressive.

3. OUTPUT OF THE RESEARCH AND EDUCATION

The research output of these two Institutes and their fourteen field stations has been extremely impressive. Thirty-nine Ph.D. dissertations have been produced during the five-year run of the COE program (2002-2006). Fully a third (13) of these Ph.D. graduates are non-Japanese, drawn from the host countries. One gains the impression that

a large number of additional Ph.D. candidates are “in the pipeline” and will be defending their dissertations in the near future.

Equally impressive is the publication output by faculty and advanced students involved in the Institutes. Two categories of members are distinguished: Participating Members and Cooperating Members. There are 24 of the first and 26 of the second listed. Together they are responsible for a total of approximately 1,300 publications, an average of 26 publications per researcher over a five year period!

It is worth noting that each author’s publications are divided into those directly resulting from the COE programs and those devoted to other research projects and appearing in other formats.

Still the overall output quantitatively is extremely impressive. But what about the quality of the work? To the extent that I am able to judge from the perusing the titles in English, and the places they are published I would say that the quality of the work is high. I am a regular reader of the African Study Monographs in which the major results of the CSEAS Institute’s African research regularly appear in English. Although the monograph series antedates the start of the COE project (2002), the work that I have read from the period of the COE, is extremely well-written, informative, and clearly on a par with the highest international standards in African research. I would compare the work with material appearing in such journals as African Studies (South Africa), the Canadian Journal of African Studies (Montreal), Cahiers Africains (Paris), and Africa, published by the International African Institute, U.K. Added to this long list of publications in Area Studies is the work of the Institutes’ students. The oral presentations and published articles of the graduate students during the five year period alone runs to over fifty pages.

4. PROSPECTS OF THE PROGRAM

Given this substantial record of scientific achievement manifested in the form of publications, scholarly meetings and workshops, and on-line resources, what are the future prospects of the ASAFAS and CSEAS programs of integrated field work and capacity building?

First let me say the programs under evaluation have delivered extremely good value for the operating grants that the Japanese Ministry of Education [MEXT] has invested. Therefore I would see it as a high priority that support for these programs be extended for another five year period.

The regions under study are entering an extremely important period in their histories. In the case of Africa the next decade will determine whether the continent can transcend its current crises in the areas of health and the environment. The contribution of institutes like CSEAS can make an enormous difference at a critical juncture. As a recommendation I would like to see the COE in the next five year period devote more attention to the impact of the HIV/AIDS epidemic on African agriculture, food security

and economic development. In the 21st century, every educational and scientific research endeavor undertaken in sub-Saharan Africa should have an AIDS prevention component built into it.

The West Asian and the South Asian programs in ASAFAS each cover a vast and complex and populous region. It would certainly be appropriate if support is renewed to build research expertise in these areas. The existing programs can provide a good foundation for scaling up

Overall, the issues facing the countries of Southeast Asia are of a different nature to those of Africa. However the spread of HIV/AIDS is a growing threat in this region as well, with Thailand already experiencing one of the most serious impacts outside of Africa. If the program's funding could be sustained for another period Japanese scholars could further develop their knowledge of and close ties to a region that has always been part of Japan's strategic sphere. In the interests of enhancing the development prospects of the region, a program like the COE's could bring more young scholars from southeast Asia to train in Japan's excellent university system. And within that system I would rank the Kyoto University Centre of Excellence as among the very best in the field of Southeast Asian Area Studies.

In conclusion the COE program has produced a major scaling up of Japanese research achievement in key regions of the world. It is important to sustain the good work; the planners should direct more attention to problems of health and food security in the African context, and across a broad spectrum of social, political and ecological concerns in the context of Southeast Asia.

Thankyou for giving me the opportunity to review these programs. I want to give my congratulations to all parties involved in the COE for impressive and innovative projects. The best compliment that I can pay to the Programs under review is this: there are valuable lessons from Kyoto University's experience with overseas development research that I plan to apply to my own University of Toronto's plans for partnerships with Universities in Africa and elsewhere.

Sincerely,

Richard B. Lee

Richard B. Lee Ph.D., F.R.S.C.
University Professor Emeritus